昭和十三年八月十日印刷
昭和十三年八月十五日發行

複製不許

國譯一切經 諸宗部十一

【改正定價金壹圓廿五錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十一番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區濱松町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區濱松町二丁目三番地

發行所 株式會社 大東出版社
東京市芝區芝公園七號地十一番
電話芝三九四四番
振替東京一九四七二番

昭和十三年八月五日印刷
昭和十三年八月十日發行

國譯一切經 瑜伽部 十二

【改正定價金壹圓廿五錢】

不許複製

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所 東京市芝區芝公園地七號地十番
株式會社 大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

製本所　兩角製本所

索　　引

(頁數は通頁は表す)

—— 瑜伽部十二索引終 ——

に六障を離るゝが故に清淨と名づく。[三九]偈に曰く、

第一義を成就し、　一切地を出離し、
他に於て尊極を得、　諸の衆生を解脱す。　（一八）
無盡等の功德を、　現在皆な具足す、
世を見衆を亦た見、　人天等を見ず。　（一九）

釋して曰く、此の二偈は如來の佛相の勝功德を禮す。此の中略して[四〇]佛相に六種あるを說く。一に體、二に因、三に果、四に業、五に相應、六に差別なり。此の六種の表に由りて、是れ佛なるを知るが故に佛相と說く。第一義を成就すとは、此は是れ體相なり。眞如は最も清淨第一義成就なるに由るが故なり。一切地を出離すとは、此は是れ因相なり、一切の菩薩地を出離するに由るが故なり。他に於て尊極を得とは、此は是れ果相なり。一切衆生の中に於て第一を得るに由るが故なり。諸の衆生を解脱すとは、此は是れ業相なり。能く一切衆生をして解脱を得せしむるに由るが故なり。無盡等の功德を現世に皆な具足すとは、此は是れ相應相なり。世を見衆を亦た見て人天等を見ずとは、此は是れ差別相なり。世を見るとは、謂く種種の世界を皆な見る、此は是れ化身なり。衆を亦た見るとは、謂く佛の大弟子衆を亦た見る、此は是れ受用身なり。見ずとは、謂く人天等を一切時に見ず、此は是れ自性身なり。此れ即ち三身の差別なり。敬佛品究竟。

大乘莊嚴經論 終

敬佛品第二十四

【三九】此の二偈は如來の佛相の勝功德を禮讚す。

【四〇】佛相の六種とは
(一)體(Svabhāva)。
(二)因(Hetu)。
(三)果(Phala)。
(四)業(Karma)。
(五)相應(Yoga)。
(六)差別(Vṛttyartha)。

一切の二乘に於て、　最上なるを我れ頂禮したてまつる。（一五）

釋して曰く、此の偈は如來の不共の勝功德を禮す。如來に十八不共法あり。一に身無失、二に口無失、三に念無失、四に無異想、五に無不定心、六に無不知已捨、七に欲無滅、八に精進無滅、九に念無滅、十に慧無滅、十一に解脫無滅、十二に解脫知見無滅、十三に智知過去無著無礙、十四に智知未來無著無礙、十五に智知現在無著無礙、十六に身業隨智慧行、十七に口業隨智慧行、十八に意業隨智慧行なり。此の中、行に由るとは、初節六不共を攝す。得に由るとは、第二節六不共を攝す。智に由ることは、第三節三不共を攝す。業に由るとは、第四節三不共を攝す。一切の聲聞緣覺は、餘の一切の衆生に於て上と爲す。如來は此の四事の不共に由るが故に、彼に於て復た上なり。故に最上と名づく。[三〇]偈に曰く、

三身は大菩提なり、　一切種を得るが故に、

衆生の諸處を疑ふを、　能除[者]を我れ頂禮したてまつる。（一六）

釋して曰く、此の偈は如來の種智の勝功德を禮す。[三一]三身とは、一に自性身、二に受用身、三に化身なり。此れは種智の自性を說く。問ふ、此の智は一切の境に於て一切の種を知るや復た云何。答ふ、一切衆生は一切處に於て疑を生ず、此の智能く斷ず。此の種智の業と說く。[三二]偈に曰く、

無著及び無過、　無穢亦た無息、

無動無戲論、　清淨を我れ頂禮したてまつる。（一七）

釋して曰く、此の偈は如來の度滿の勝功德を禮す。[三三]無著とは、諸の資財に於て染せらるる無きが故なり。[三四]無過とは、身等の業に於て永く無垢なるが故なり。[三五]無穢とは、世法の諸苦に心を濁さざるが故なり。[三六]無息とは、少有所得に卽住せざるが故なり。[三七]無動とは、心恒に寂靜にして散亂せざるが故なり。[三八]無戲論とは、一切法の中、所有(あらゆる)分別を皆な行ぜざるが故なり。如來は此の六圓滿し、具さ

【三〇】此の偈は如來の種智の勝功德を禮讃す。

【三一】如來の三身
(一)自性身(Svabhāvika)。
(二)受用身(Sāmbhogika)。
(三)化身(Nairmāṇika)。

【三二】此の偈は如來の度滿の勝功德を禮讃す。

【三三】無著(Niravagraha)。

【三四】無過(Nirdoṣa)。

【三五】無穢(Niṣkāluṣya)。

【三六】無息(Anavasthita)。

【三七】無動(Āniñjya)。

【三八】無戲論(Niṣprapañca)。

此の二種の功德、勝れたるに由るが故に、能く一切の徒衆を攝す、此れ即ち是れ業なり。[二六]偈に曰く、

一切處に行住す、　一切智に非ざること無し、
一切の習を斷ずるに由る、　實義を我れ頂禮したてまつる。（一一）

釋して曰く、此の偈は如來の斷習の勝功德を禮す。如來は一切處一切時に於て行住等の事、一切智威儀に非ざること無し。具さに一切の煩惱習を斷ずるに由るが故なり。若し一切智無き者は煩惱盡くと雖も而も習盡きず、行住の時に於て、或は奔車逸馬に逢へば、即ち損害せらる。一切智威儀に非ざるに由るが故なり。如來は此の事無し、實に一切智あるに由るが故なり。[二七]偈に曰く、

衆生を利益するの事、　隨時に時を過たず、
所作恒に謬無し、　不忘[者]を我れ頂禮したてまつる。（一二）

釋して曰く、此の偈は如來の不忘の勝功德を禮す。如來は衆生を利益する事を作す時、恒に其の時を得、其の時を過たず。此は是れ不忘法の業なり。如來の所作は一切時皆な實にして虛からず。此は是れ不忘法の自性なり。[二八]偈に曰く、

晝夜六時に、　一切衆生界を觀ず、
大悲具足の故に。　利意[者]を我れ頂禮したてまつる。（一三）

釋して曰く、此の偈は如來大悲の勝功德を禮す。如來は大悲を以ての故に、晝夜六時に衆生の誰か退き、誰か進むを觀察したまひ、未だ善根を起さざる者は其をして起るを得せしめ、已に善根を起せる者は其をして增進せしむ。日六時と雖も而も實に一切時恒に法輪を轉ず。[これ]大悲具足に由るが故なり。此れ即ち大悲の業なり。一切衆生に於て、常に利益の意を起す、此は是れ大悲の自性なり。[二九]偈に曰く、

行に由り及び得に由り、　智に由り及び業に由り、

【二六】此の偈は如來の斷習の勝功德を禮讃す。

【二七】此の偈は如來の不忘の勝功德を禮讃す。

【二八】此の偈は如來大悲の勝功德を禮讃す。

【二九】此の偈は如來不共の勝功德を禮讃す。

て衆生を誑惑す、言はく世間の諸定は唯だ此れ清淨、餘は清淨に非ずと。四に出離に依りて衆生を誑惑す、言はく小乘道の果は唯だ此れ出離、大乘あるに非ずと。佛は魔の四事を破せんが爲めに、已れの十力を顯はしたまふ。一に是非の智力を以て魔の第一事を破す、善方便に由りて天に生ずるを得可し、惡方便に非ざるが故なり。二に自業の智力を以て魔の第二事を破す、自業に由りて天に生ず、自在天等の力に依るに非ざるが故なり。三には禪定の智力を以て魔の第三事を破す。具さに禪定解脫三昧三摩跋提を知るに由るが故なり。四に後七の智力を以て魔の第四事を破す、下根等は上根等の安置を離れしむるに由るが故なり。[二四]偈に曰く、

智に於て亦た斷に於て、　離に於て亦た障に於て、
能く自他の利を說く、　摧邪[者]を我れ頂禮したてまつる。（一〇）

釋して曰く、此の偈は如來の無畏の勝功德を禮す。智に於てとは、是れ一切智の無畏を說く。斷に於てとは、是れ漏盡の無畏を說く。離に於てとは、是れ盡苦道の無畏を說く。障に於てとは、是れ障道の無畏を說く。此の中、智及び斷は是れ自利の功德を說き、離及び障は是れ利他の功德を說く。若し諸の外道難じて言はん、瞿曇は一切智を具するに非ず、一切漏を盡すに非ず、說道は苦を盡す能はず、說障は道を防ぐる能はずと。如來は此の四難に於て而も能く摧伏するが故に無畏と名づく。[二五]偈に曰く、

衆に在りて極めて治罰す、　自ら所護無きが故なり。
二染を離れて正住す、　攝衆[者]を我れ頂禮したてまつる。（一一）

釋して曰く、衆に在りて極治罰す、自ら所護無きが故にとは、此れ如來の不護の勝功德を禮す。若し自ら所護あらば、衆に在つて極めて治罰を說く能はざるが故なり。二染を離れて正住すとは、此れ如來の念處の勝功德を禮す。二染を離るとは、喜憂無きが故なり。正住とは、不忘念の故なり。

---

vādana)。
(四)出離誑惑 (Niryāṇavipra=avādana)。

【二四】此の偈は如來の無畏の勝功德を禮讚す。

【二五】此の偈は如來の不護の勝功德を禮讚す。

故なり。能聞とは、是れ天耳通、能く彼彼音を聞くが故なり。知行とは、是れ他心通、能く彼の人の心行差別を知るが故なり。知來とは、是れ宿住通、能く彼の人前世の此の因より來るを知るが故なり。知去とは、是れ生死通、能く彼の人、今世は此の因より去ることを知るが故なり。彼をして出離を得せしむとは、是れ漏盡通、能く如實に彼の爲めに説法するが故なり。[一九]偈に曰く、

衆生若し見あり、　定は是れ丈夫なりと知らば、
深く淨信心を起す、　方便を我れ頂禮したてまつる。（七）

釋して曰く、此の偈は如來の相好の勝功德を禮す。一切衆生若し見ありとは、即ち如來は是れ大丈夫なりと知り、及び如來に於て淨信業を起す、相好を以て方便と爲すに由るが故なり。[二〇]偈に曰く、

取捨住と變化と、　定智と自在を得ると、
此の如き四清淨なる、　世尊を我れ頂禮したてまつる。（八）

釋して曰く、此の偈は如來の清淨の勝功德を禮す、[二一]清淨の四種は、一に身清淨、二に緣清淨、三に心清淨、四に智清淨なり。取捨住とは、身清淨を顯はす。能く自身の壽中に於て、若しくは取し、若しくは捨し、若しくは住す。自在を得るが故なり。變化とは、緣清淨を顯はす、能く諸境に於て、轉變起化自在を得るが故なり。定とは、心清淨を顯はす、能く諸定に於て、出入自在を得るが故なり。智とは、智清淨を顯はす、能く諸境を知り無礙自在を得るが故なり。[二二]偈に曰く、

方便と及び歸依と、　清淨と出離と、
此に於て四誑を破す、　降魔[者]を我れ頂禮したてまつる。（九）

釋して曰く、此の偈は如來の力の勝功德を禮す。[二三]魔は四事に依り衆生を破壞す。何者か四事なる。一には方便に依り衆生を誑惑す、言はく五塵を受用し、善道に生ずるを得て惡道に墮せずと。二には歸依に依りて衆生を誑惑す。言はく自在天等は是歸依處、餘處は則ち非ずと。三には清淨に依り

【一九】此の偈は如來の相好の勝功德を禮讃す。

【二〇】此の偈は如來の清淨の勝功德を禮讃す。

【二一】清淨の四種とは
（一）身清淨（Āśrayapariśuddhi）。
（二）緣清淨（Ālambanapariśuddhi）。
（三）心清淨（Cittapariśuddhi）。
（四）智清淨（Prajñāpariśuddhi）。

【二二】此の偈は如來の力の勝功德を禮讃す。

【二三】魔の四事とは
（一）方便誑惑（Upāyavipravādana）。
（二）歸依誑惑（Śaraṇavipravādana）。
（三）清淨誑惑（Śuddhivipra-

を起さざらしめ而も能く他をして對治を起さしめず。如來の無諍は則ち爾らず。但だ彼をして起らざらしめ、亦た能く彼をして對治を起さしむ。是の故に勝と爲す。染汚の諸衆生を悲しむ者を我れ頂禮したてまつるとは、如來の無諍三昧は、一切の染汚衆生に於て偏へに憐愍を起す。是の故に彼に於て、名づけて悲者と爲す。[一一]偈に曰く、

　無功用と無著と、　　無礙と恒に寂靜と、
　能く一切の疑を釋く　　勝智[者]を我れ頂禮したてまつる　　（四）

釋して曰く、此の偈は如來の願智の勝功德を禮す。[一二]如來の願智は五事の勝に由る。一には起に於て無功用、二には境に於て不著、三には中に於て無礙、四には恒時に寂靜、五には能く衆疑を釋す。此の五義に由る、是の故に勝と爲す。餘人の願智は、一には無功用に非ず、作意起るが故なり。二には無著に非ず、假定力の故なり。三に無礙に非ず、少分智の故なり。四に恒靜に非ず、常定に非ざるが故なり。五に不釋疑、無知あるが故なり。[一三]偈に曰く、

　所依及び能依、　　言に於て及び智に於て、
　說者無礙慧[を以て]　　善說するを我れ頂禮したてまつる。　　（五）

釋して曰く、此の偈は如來の無礙の勝功德を禮す。所說に二種あり。一に[一四]所依、謂ゆる法なり。二に[一五]能依、謂ゆる義なり。諸具に二種あり。一に[一六]方言、二に[一七]巧智なり。如來は此の所說及び說具に於て、慧常に無礙なり、是の故に勝と爲す。說者は卽ち無礙の業を顯はす。開示するに方あるが故に善說と名づく。[一八]偈に曰く、

　能去及び能聞、　　行を知り來と去とを知り、
　彼をして出離を得せしむ、　　教授を我れ頂禮したてまつる。　　（六）

釋して曰く、此の偈は如來の神通の勝功德を禮す。能去とは、是れ如意通、能く彼彼處に往くが

【一一】此の偈は如來の願智の勝功德を禮讃す。

【一二】如來の願智の五事とは、(一)無功用(Anābhoga)。(二)無著(Nirāsaṁga)。(三)無礙(Avyāghāta)。(四)恒時寂靜(Sadā Samāhita)。(五)能釋一切疑 (Sarpraśnānāṁ visarjaka)。

【一三】此の偈は如來の無礙の勝功德を禮讃す。

【一四】所依(Āśraya)。

【一五】能依(āśrita)。

【一六】方言(Deśyate vācā)。

【一七】巧智(Jñāna)。

【一八】此の偈は如來の六神通の勝功德を禮讃す。

敬佛品第二十四

釋して曰く、已に菩薩の行住を說けり。次に禮佛の功德を說かん。[一]偈に曰く、

合心と及び離心と、　不離［心］と利益心と［を以て］
諸の衆生を憐愍し、　救世［者］を我れ頂禮したてまつる。（一）

釋して曰く、此の偈は如來の無量の勝功德を禮す。[二]合心とは、是れ慈心、樂を與ふるに由るが故なり。[三]離心とは、是れ悲心、苦を拔くに由るが故なり。[四]不離心とは、是れ喜心、恒に悅ぶに由るが故なり。[五]利益心とは、是れ捨心、無染に由るが故なり。[六]偈に曰く、

一切の障を解脫し、　一切の世間に勝ち、
一切處に遍滿す、　心脫［者］を我れ頂禮したてまつる。（二）

釋して曰く、此の偈は如來の三處の勝功德を禮す。一切の障を解脫すとは、[七]解脫勝を顯はす。一切の惑障一切の智障、解脫することを得るに由るが故なり。一切の世間に勝すとは、[八]制入勝を顯はす。心自在なるに由り、其の所緣に隨つて、隨意に轉ずるが故なり。一切處に遍滿すとは、[九]遍入勝を顯はす、一切の境の中の智遍滿するに由るが故なり。此の三義に由り、心三處に於て解脫を得るが故に、心解脫を說く。[一〇]偈に曰く、

能く彼の惑起を遮し、　亦た能く彼の惑を害し、
染汚の諸衆生を、　悲しむ者を我れ頂禮したてまつる。（三）

釋して曰く、此の偈は如來の無諍の勝功德を禮す。能く彼の惑起を遮すとは、一切衆生は應に煩惱を起すべし。如來は凡ゆる所作の業を能く起らさらしむ。亦た能く彼の惑を害すとは、彼の惑若し已に起らば如來亦た能く對治方便を起さしむ。若し餘人無諍なれば但だ能く他緣をして自ら煩惱

【一】此の偈は如來の無量の勝功德を禮讚す。
【二】合心（Saṁyoga）＝慈（Maitrī）。
【三】離心（Vigama）＝悲（Karuṇā）。
【四】不離心（Aviyoga）＝喜（Muditā）。
【五】利益心（Saukhyāhitā）＝捨（Upekṣā）。
【六】此の偈は如來の三處の勝功德を禮讚す。
【七】解脫勝（Vimokṣa-viśeṣa）。
【八】制入勝（Abhibhvāyatana-viśeṣa）。
【九】遍入勝（Kṛtsnāyatana-viśeṣa）。
【一〇】此の偈は如來の無諍の勝功德を禮讚す。

し、數數功德を得、是を數數の義と名づく。地は十數を以て量と爲す、諸の菩薩は一一の地の中に於て、爾所の障礙を斷ずと知り、爾所の功德を得と知り、此の不虛なるを知る、是を實數の義と名づく。上地は是れ無畏處、諸の菩薩の畏は、自地の中に於て、自他の利功德を退失せんことを畏れ、上地を進求す、是を無畏の義と名づく。此の三義に由るが故に名づけて地と爲す。

已に菩薩の十地名を說けり。次に菩薩の四種の得地差別を說かん。[三七]偈に曰く、

信に由り及び行に由り、　達に由り亦た成に由る。
應に知るべし諸の菩薩の　地を得るに四種ありと。　（二六）

釋して曰く、[三八]四種の得地とは、一に信得に由る。二に行得に由る。三に通達得に由る。四に成就得に由る。信に由るとは、信を以て諸地を得るが故なり。信地の中に說くが如し。行に由るとは、正行を以て諸地を得るが故なり。諸の菩薩は、大乘の法に於て十種の正行あり。一に書寫、二に供養、三に流轉、四に聽受、五に轉讀、六に敎他、七に習誦、八に解脫、九に思擇、十に修習なり。此の十正行は、能く無量の功德聚を生ず。此の行は地を得るが故に行得と名づく。通達とは、第一義諦に通達し、乃至第七地を通達得と名づく。成就とは、八地より佛地に至るを成就得と名づく。

已に菩薩の四種の得地差別を說けり。次に菩薩の四種の修行差別を說かん。[三九]偈に曰、

諸度諸覺分、　諸通及び諸攝、
大の爲めに亦た小の爲めに、　俱入と亦た俱成と。　（二七）

釋して曰く、總じて一切の[四〇]菩薩行を說くに四種に過ぎず。一に波羅蜜行、二に菩提分行、三に神通行、四に攝生行なり。波羅蜜行を說くは、大乘を求むる衆生の爲めに。菩提分行を說くは、小乘を求むる衆生の爲めに。神通行を說くは、二種の衆生をして佛法に入るを得せしめんが爲めに。攝生行を說くは、二種の衆生をして佛法を成熟せしめんが爲めなり。行住品究竟。

【三七】此の偈は菩薩の四種の得地差別を說示す。

【三八】菩薩の四種の得地とは(一)信得(Adhimukti-lābha)。(二)行得(Carita-lābha)。(三)通達得(Paramārtha-lābha)。(四)成就得(Nispatti-lābha)。

【三九】此の偈は菩薩の四種の修行差別を說示す。

【四〇】菩薩の四種の修行とは(一)波羅蜜行(Pāramitācaryā)。(二)菩提分行(Bodhipakṣacaryā)。(三)神通行(Abhijñācaryā)。(四)攝生行(Satvaparipākacaryā)。

づく。二法に住せず觀の恒に現ずるを現前と名づくとは、菩薩は六地の中に於て般若の力に依り、能く生死涅槃の二法に住せず、此の如く觀慧恒に現在前するが故に[三一]現前地と名づく。雜道は一道に隣りし遠く去るを遠行と名づくとは、菩薩は七地の中に於て一乘道に近きが故に遠去と名づく。問ふ。誰か是れ遠去なる。答ふ、功用方便究竟して此の遠を能く去る。此の遠去に由るが故に[三二]遠行地と名づく。相想無相想動無きを不動地とすとは、菩薩は八地の中に於て、有相想及び無相有功用想の二想倶に動ずる能はず、此の動無きに由るが故に、故に[三三]不動地と名づく。四辯智力巧に善を說くを善慧と稱すとは、菩薩は九地の中に於て、四無礙慧を最も殊勝と爲す。一刹那の頃に於て、三千世界の所有人天異類異音異義異問[あるも]、此の地の菩薩は能く一音を以て衆問に答へ、遍ねく衆疑を斷ず、此の善說に由るが故に[三四]善慧地と名づく。二門雲の遍ねきが如く法を雨らすを法雲と名づくとは、菩薩は十地の中に於て、三昧門及び陀羅尼門に由りて、一切聞薰習因を攝し、阿黎耶識の中に遍滿す、譬へば浮雲の虛空に遍滿するが如く、能く此の聞薰習の雲を以て、一一の刹那に於て、一一の相に於て、一一の好に於て、一一の毛孔に於て、無量無邊の法雨を雨らし、一切の化す可き衆生に充足す、能く雲雨の如き法なるに由るが故に[三五]法雲地と名づく。

問ふ、名を釋別し已れり。云何が住と名づけ、云何が地と名づくるや。[三六]偈に曰く、

諸の善根を集めんが爲めに、　樂住するが故に住と說く。
數數數無畏、　復た地を以て名と爲す。（二五）

釋して曰く、諸の善根を集めんが爲めに樂住するが故に住と名づくとは、諸の菩薩は種種の善根を成就せんが爲めに、一切時に於て一切地に樂住す。是の故に諸地を說いて名づけて住と爲す。數數數無畏、復た地を以て名と爲すとは、步彌耶を名づけて地と爲す。步とは數數の義、彌とは實數の義、耶とは無畏の義なり。諸の菩薩は上地に進まんと欲して、一一の地の中に於て數數障礙を斷

【三一】現前地(Abhimukti-bhūmi)。
【三二】遠行地 (Dūrangamā-bhūmi)。
【三三】不動地(Acalā-bhūmi)。
【三四】善慧地 (Sādhumātī-bhūmi)。
【三五】法雲地 (Dharmameghā-bhūmi)。
【三六】此の偈は住と名づけ地と名づくる理由を說明す。

惑障智障の薪を、　能く燒く是れ焰慧なり。　(二一)
難退に二種あり、　能退の故に難勝。
二法に住せず、觀の　恒に現ずるを現前と名づく。　(二二)
難道は一道に隣す、　遠く去るを遠行と名づく。
相想無相想の、　動無きを不動地とす。　(二三)
四辯智力巧みに、　善を說くを善慧と稱す。
二門雲遍ねきが如く、　法を雨らすを法雲と名づく。　(二四)

釋して曰く、眞を見利物を見て、此處に歡喜を得とは、菩薩は初地の中に於て、一に眞如を見る、二に利物を見る。謂く自利を見るなり。謂く利他を見るなり。昔曾未だ見ず今時初めて見る、菩提を去ること近きが故なり。一々の刹那に能く自衆生を成熟するが故なり。此の二見に由りて勝歡喜を起すが故に、[二六]歡喜地と名づく。犯を出で異心を出づ、是を[二七]離垢地と名づくとは、菩薩は二地の中に於て、二種の垢を出づ。一に犯戒垢を出で、二に異乘心を起す垢を出づ。二垢を出づるに由るが故に離垢地と名づく。十地經に說くが如し。我等一切種智を應に淨うすべきが故に勤めて精進す。法を求め法力を持し明を作すが故に明と名づくとは、菩薩は三地の中に於て、三昧自在力を得。無量の佛法に於て、能く求め能く持し、大法明を得て他の爲めに明を作す、能く法を以て自ら明にし他を明にするに由るが故に[二八]明地と名づく。惑障智障の薪を能く燒く是れ焰慧なりとは、菩薩は四地の中に於て、菩提分の慧を以て焰の自性と爲し、惑智の二障を以て薪の自性と爲す。此の地の菩薩は能く慧焰を起し、二障の薪を燒くが故に[二九]焰慧地と名づく。難退に二種あり、能退の故に難勝とは、菩薩は五地の中に於て二種の難あり。一に勤めて衆生を化すに心に難惱無し。二に衆生化に從はざるも心に惱難無し。此の地の菩薩は能く二難を退し、難に於て勝を得るが故に[三〇]難勝地と名

【二六】歡喜地 (Muditā-bhūmi)。
【二七】離垢地 (Vimalā-bhūmi)。
【二八】明地 (Prabhākarī-bhūmi)。
【二九】焰慧地(Arciṣmatī-bhūmi)。
【三〇】難勝地 (Durjayā-bhūmi)。

事友、佛の示したまふ所の善知識に依りて大乘を聞くが故なり。十二に供養、三寶を供養するが故なり。十三に迴向、善巧方便の故なり。十四に生勝、此は願波羅蜜の相を顯はす。八難處を離れ、諸佛菩薩を離れざるが故なり。十五に修善、此は力波羅蜜の相を顯はす。無間に諸善根を修するが故なり。十六に戲通、此は智波羅蜜の相を顯はす。諸の大神通の功德に遊戲するが故なり。菩薩若し此の相を得ば、則ち一切衆中の上首と爲す。是を佛子の十六相と名づく。

已に菩薩地の中の十度の相を說けり。次に菩薩の度度の五功德を說かん。[二四]偈に曰く、

地地昇進の時、　　度度に五德あり、
二及び二及び一は、　　應に知るべし止・觀・俱なりと。　（一九）

釋して曰く、地地昇進の時度度に五德ありとは、菩薩は一一の地に於て一一の度を修し、一一の度に於て皆な五種の功德を具す。何をか五と爲す。一に滅習、二に得猗、三に圓明、四に相起、五に廣因なり。滅習とは、一一の刹那に依中の習氣聚を滅除するが故なり。得猗とは、種種の相を離れ法樂を得るが故なり。圓明とは、遍ねく一切種を知り分段を作さゞるが故なり。相起とは、入大地に由り、無分別相生ずるが故なり。廣因とは、一切種の法身を滿ぜんが爲め淨せんが爲め、福聚智聚の攝を增長せしむるが故なり。二及び二及び一應に知るべし止・觀・俱なりとは、此の中應に知るべし、初めの二功德は是れ奢摩他分、次の二功德は是れ毘鉢舍那分、第五の功德は是れ俱分なりと。

已に菩薩の度度の五功德を說けり。次に菩薩の十地の名を釋せん。[二五]偈に曰く、

眞を見利物を見て、　　此處に歡喜を得。
犯を出で異心を出づ、　　是を離垢地と名づく。　（二〇）
法を求め法力を持し、　　明を作すが故に明と名づく。

【二四】此の偈は菩薩の五功德を讚美す。

【二五】此の五偈は菩薩の十地の名を釋す。

四に無待、五に通達、六に平等、七に離偏、八に離著、九に知方便、十に聖衆生なり。明信とは、自地に於て明を得、諸法の中に於て無知を除くが故なり。[又]他地に於て信を得、後の諸地に於て願樂を生ずるが故なり。無劣とは、深妙の法を聞きて驚怖せざるが故なり。無怯とは、難行の行を行じ極勇猛なるが故なり。無待とは、自地に行を起し教を待たざるが故なり。通達とは、他地の方便能く起るが故なり。平等とは、普ねく衆生に於て、自心を同ずるが故なり。離偏とは、耳に毀譽を聞いて高下無きが故なり。離著とは、輪王等の位を得て、愛染無きが故なり。知方便とは、諸法の不可得なることを知り、佛方便と爲すが故なり。聖衆生とは、諸佛徒衆恒に生に在るが故なり。此等の十相を地地皆な具すること應に知るべし。

已に菩薩の入地の十種の相を說けり。次に菩薩地の中の十度の相を說かん。[三]偈に曰く、

有欲と無六障と、　其の次に無亂慧と、
不漂と亦た不迴と、　事友と及び供養と、　（一七）
迴向と將た生勝と、　修善と戲通と、
功德藏是の如し、　佛子の十六相なり。　（一八）

釋して曰く、諸の菩薩は諸地の中に於て、十度を得るに十六相あり。何者か十六なる。一には有欲樂、諸度を行ずるが故なり。二には無慳、施障を離るゝが故なり。三に無違、戒障を離るゝが故なり。四に無恚、忍障を離るゝが故なり。五に無懈、進障を離るゝが故なり。六に慈悲、定障を離るゝが故なり。慈悲は能く樂を與へ苦を拔く。是れ瞋惱對治にして定を得るに由るが故なり。七に無惡慧、慧障を離るゝが故なり。惡慧に三あり。謂く自性分別、隨憶分別、顯示分別、此を能く斷ずるが故なり。八に無亂慧、異乘心を離るゝが故なり。九に不漂、人天の勝樂の爲めに、其の心を醉せざるが故なり。十に不迴、不成就苦及び離行苦の爲めに、其の心を退せざるが故なり。十一に

(三)無怯(Adīnatvam)。
(四)無待(Aparapratyayatvam)。
(五)通達(Prativedha)。
(六)平等(Samacittatā)。
(七)離遍(Aneya)。
(八)離著(Anunaya)。
(九)知方便(Upāyajñānam)。
(十)聖衆生(Maṇḍalajanma)。

【三】此の偈は菩薩の十度を得るに十六の特性あることを說示す。

ることを知る、此の障を解脫するに由るが故なり。

已に菩薩の隨地修無流五陰を說けり。次に菩薩の隨地成就未成就を說かん。[二〇] 偈に曰く、

未成就成就、　成復た未成成、
地の如く建立を知るは　分別無分別なり。　（一三）

釋して曰く、未成就成就とは、彼の信行地は是れ未成就、自餘の諸地は是れ成就と名づく。成復た未成成とは、前の成就地の中に於て復た未成就成就あり。七地已還を未成就と名づく、有功用の故なり。八地已上是れを成就と名づく、無功用の故なり。問ふ、前に說ける歡喜地は亦た是れ成就なりとは此の義云何。答ふ、地の如く建立を知るは分別無分別なり、此れ地建立の中に於て唯だ分別なるを知り、此の分別に於て亦た無分別なるに由る、所執能執倶に無體なるが故なり。此の義を約するが故に說いて成就と名づく。偈に曰く、

應に知るべし諸地の中、　修習及び成就、
此の二は不思議なりと。　諸佛の境界なるが故なり。　（一四）

釋して曰く、菩薩は諸地の中に於て各修習及び成就あり。應に知るべし地地皆な不可思議なりと。諸の菩薩の內自證覺は、是れ諸佛の所知にして、餘人の境界に非ざるに由るが故なり。

已に菩薩の隨地成就未成就を說けり。次に菩薩の入地の十種の相を說かん。[二一] 偈に曰く、

明信と及び無劣と、　無怯と亦た無待と、
通達と及び平等と、　離偏と亦た離著と、　（一五）
及以び知方便と、　亦た在聖衆生と、
此の如き十種の相は、　地地皆な圓滿す。　（一六）

釋して曰く、[二二] 入地の菩薩の地地皆な十相あり。何をか十と爲す。一に明信、二に無劣、三に無怯、

【二〇】此の偈は菩薩の隨地成就未成就を說示す。

【二一】此の二偈は菩薩の入地の十種の特性を說示す。

【二二】入地の菩薩の十相とは
(一)明信(Adhimukti)。
(二)無劣(Alinatvam)。

已に菩薩の地に依りて名を立つることを說けり。次に菩薩の隨地修學及び學果を說かん。[一八]偈に曰く、

隨次に前六に依り、　見性し三學を修す、
隨次に後四に依り、　得果に四種あり。（一一）

釋して曰く、隨次に前六に依り見性し三學を修すとは、菩薩は初地に於て、眞如に通達し、第二地に增上戒を學し、第三地に增上心を學し、第四第五第六地に增上慧を學す。慧に二境あり。一に法實、謂く苦等の四諦なり。二に緣起、謂く逆順に十二因緣を觀ず。此の二境も亦た第二第三地中に在り、是の故に彼地亦た增上慧を建立す。然れども第四地中の菩提分慧增上、第五地中の諦觀慧增上、第六地の中の緣起觀慧增上の故に、此の三地は慧學を建立し增上す。隨次に後四に依り果を得るに四種ありとは、第七地に依りて無相有功用住を得るを第一果と爲し、第八地に依りて無相無功用住を得るを第二果と爲し、第九地に依りて衆生を成熟することを得るを第三果と爲し、第十地に依りて二門の成熟を得るを第四果と爲す。

已に隨地修學及び學果を說けり。次に菩薩の隨地修習無流五陰を說かん。[一九]偈に曰く、

見性淨の三身、　亦た前六地に在り、
餘地の淨は餘の二、　五障を遠離するが故なり。（一二）

釋して曰く、初地の見性は前解の如し。第二地の中の戒身淸淨、第三地の中の定身淸淨、第四第五第六地の中の慧身淸淨、後四地及び佛地の解脫身・解脫知見身の淸淨は、五障を離るゝに由るが故なり。五障とは、第七の中の執相無知を以て障と爲し、第八地の中の功用無知を以て障と爲し、第九地の中の不能化生無知を以て障と爲し、第十地の中の未淨二門の無知を以て障と爲し、佛地の中の礙障無知を以て障と爲す。謂く此の無知能く聲聞緣覺の境界智を礙す。諸佛は一切境の無礙な

[一八] 此の偈は菩薩の修學と學果とを說示す。

[一九] 此の偈は菩薩の隨地修習と無流の五陰とを說示す。

第九住相を顯はす、四辯自在にして、能く一切衆生を成熟するが故なり。淨二門とは、第十住相を顯はす、三昧門・陀羅尼門、極淸淨の故なり。淨菩提とは、第十一住相を顯はす、一切の智障斷じ究竟するが故なり。

已に菩薩の十一住相を說けり。次に菩薩の地に依りて名を立つることを說かん。[一六]偈に曰く、

初の三は三行淨なり、　次の三は三慢を斷じ、
後の三は覺と捨と化となり。　第十は四名あり。　（一〇）

釋して曰く、[一七]十地の中に於て十の菩薩名を建立す。初めの三は三行淨なりとは、初地を見淨と名づく。菩薩は人法の二見を對治する智を得るが故なり。第二地を戒淨と名づく。菩薩は微細の犯垢も、永く無體なるが故なり。第三地を定淨と名づく。菩薩は諸禪三昧、不退を得るが故なり。次の三は三慢を斷ずとは、第四地を斷法門異慢と名づく。菩薩は諸の經法に於て、差別の慢を起すことを破するが故なり。第五地を斷相續異慢と名づく。菩薩は十平等心に入り、一切の相續に於て、平等を得るが故なり。第六地を斷染淨異慢と名づく。菩薩は如性本淨なるも客塵の故に染せられ、能く緣起の法に住す、如は黑白差別の見を起さゞるが故なり。後の三は覺と捨と化となりとは、第七地を得覺と名づく。菩薩は無相力に住し、能く念念の中に三十七覺分を修するが故なり。第八地を行捨と名づく。菩薩は無功用無相に住するが故なり。亦た淨土と名づく。菩薩の方便行と不退地の菩薩とを合するが故なり。第九地を化衆生と名づく。菩薩は能く一切衆生を成熟するが故なり。第十は四名ありとは、一に大神通と名づく。菩薩は大神通を得るが故なり。二に滿法身と名づく。菩薩は無量の三昧門・陀羅尼門を具するが故なり。三に能現身と名づく。菩薩は兜率天等に住し相身を示すが故なり。四に受職と名づく。菩薩は諸佛の所に於て受職を得るが故なり。

【一六】此の偈は十地の中に於いて、十の菩薩名を說示す。
【一七】菩薩の十名とは
（一）見淨（Viśuddhadṛṣṭi）。
（二）戒淨（Suviśuddhaśila）。
（三）定淨（Samāhita）。
（四）斷法門異慢（Dharmavibhūtamana）。
（五）斷相續異慢（Santānabhede nirmāṇaḥ）。
（六）斷染淨異慢（Saṁkleśavyavadānabheda nirmāṇaḥ）。
（七）得覺（Labdhabuddhi）。
（八）行捨（Upekṣaka）。
（九）化衆生（Satvaparipākakuśala）。
（一〇）四名——(1)大神通（Mahārddhika）。(2)滿法身（Saṁpūrṇa-dharmakāya）。(3)能現身（Nidarśana）。(4)受職（Abhiṣeka）。

此の四種の力に依りて、　　菩薩は而も受生す。　（七）

釋して曰く、[一三]四種の受生とは、一には業力生、二には願力生、三には定力生、四には通力生なり。業力生とは、謂く信行地の菩薩は、業力自在にして、所欲の處に隨つて、而も受生するが故なり。願力生とは、謂く入大地の菩薩は願力自在にして、他を成熟せんが爲めに、畜生等の生を受くるが故なり。定力生とは、謂く定を得たる菩薩は、定力自在にして上界を捨て、下に受生するが故なり。通力生とは、謂く神通を得たる菩薩は、通力自在にして、能く兜率天等に於て、諸相を示現して、而も受生するが故なり。

已に菩薩の四種の受生を說けり。次に菩薩の十一住相を說かん。[一四]偈に曰く、

空を證し業果を證し、　　禪に住し覺分に住す、
諦を觀じ緣起を觀ず。　　無相無功用。　（八）
化力淨二門、[illegible]　　及以び菩提淨、
此の諸の所說を以て、　　地の相を立つること應に知るべし。　（九）

釋して曰く、[一五]十一住とは、卽ち十一地なり。住とは、地を名づくるが故なり。證空とは、初住相を顯はす。多く人法二無我に住するが故なり。證業果とは、第二住相を顯はす、業及び果の不壞なることを證せば能く戒を護るが故なり。住禪とは、第三住相を顯はす、能く欲界に生じ、而も禪を退かざるが故なり。住覺分とは、第四住相を顯はす、能く生死に入りて、而も覺分を捨てざるが故なり。觀諦とは、第五住相を顯はす、明教を以て惱を化す、唯だ惱心は我無を以ての故なり。緣起を觀ずとは、第六住相を顯はす、能く染心を起さず而も緣起に依りて受生するが故なり。無相とは、第七住相を顯はす、行は功用と雖も、而も上は一道に參じ多く無相に住するが故なり。無功用とは、第八住相を顯はす、佛土を淨くすと雖も、而も起作無く、多く無功用に住するが故なり。化力とは、

【一三】　菩薩の四種の受生とは
(一)業力生(Karmādhipati)。
(二)願力生(Praṇidhānādhipati)。
(三)定力生(Samādhy-adhipati)。
(四)通力生(Vibhutvādhipati)。

【一四】　此の二偈は菩薩の十一住相を說示す。

【一五】　菩薩の十一住地とは、
(一)證空(Śūnyatābhisamaya)。
(二)證業果(Karmaṇām-avipraṇāśa-vyavasthāna)。
(三)住禪(Dhyānair-vihṛtya)。
(四)住覺分(Bodhipakṣa-bahula-vihārira)。
(五)觀諦(Baturāryasatya-bahula-vihāritayā)。
(六)觀緣起(Pratītyasamutpāda-bahula-vihāritayā)。
(七)無相(Animitta)。
(八)無功用(Anābhoga)。
(九)化力(Pratisaṁvid-vaśitayā)。
(一〇)淨二門(Samādhimukhānāṁ dhāraṇimukhānāṁ ca viśuddhātā)。
(一一)淨菩提(Bodhiviśuddhatā)。

謂く入大地なり。[七]偈に曰く、

　應に知るべし出家分は、　無量の功德を具し、
　在家分に比せんと欲するに、　最勝にして彼れ無等なり。　（四）

釋して曰く、二分を挍量するに出家分勝る。無量の功德を具足するに由るが故なり。

已に菩薩の在家出家分を說けり。次に菩薩の五種の極大心を說かん。[八]偈に曰く、

　愛果と及び善根と、　涅槃と、未淨・淨・極淨を
　得せしめんと欲するとは、　謂く諸地の中に在り。　（五）

釋して曰く、[九]五の極大心とは、一に樂極大心、二に利極大心、三に未淨極大心、四に已淨極大心、五に極淨極大心なり。愛果とは、謂く樂極大心、諸の衆生をして後世の愛果を得せしむるが故なり。善根とは、謂く利極大心、諸の衆生をして現に諸善を行じ、及び涅槃を得せしむるが故なり。未淨とは、謂く未淨極大心、卽ち信行地の菩薩なり。淨とは謂く、已淨極大心、卽ち初地より七地に至る菩薩なり。極淨とは、謂く極淨極大心、卽ち後三地の菩薩なり。

已に菩薩の五種の極大心を說けり。次に菩薩の四種の攝衆生を說かん。[一〇]偈に曰く、

　欲樂と及び平等と、　增上と徒衆との、
　四心は諸地に於て、　一切衆生を攝受す。　（六）

釋して曰く、[一一]四種の攝衆生とは、一に欲樂心攝、菩提心を以て攝するに由るが故なり、二に平等心攝、初地に入りて自他平等心を得て攝するに由るが故なり。三に增上心攝、主位に居し、自在力を以て攝するに由るが故なり。四に徒衆心攝、自の弟子を攝成するに由るが故なり。

已に菩薩の四種の攝衆生を說けり。次に菩薩の四種の受生を說かん。[一二]偈に曰く、

　業力と及び願力と、　定力と亦た通力との、

【七】 此の偈は在家の菩薩と出家の菩薩との優劣を說示す。

【八】 此の偈は菩薩の五種の極大心を說示す。

【九】 菩薩の五種の極大心とは
（一）樂極大心 (Sukhādhyāśaya)。
（二）利極大心 (Hitādhyāśaya)。
（三）未淨極大心 (Aśuddhādhyāśaya)。
（四）已淨極大心 (Viśuddhādhyāśaya)。
（五）極淨極大心 (Suviśuddhādhyāśaya)。

【一〇】 此の偈は菩薩の四種の攝衆生を說示す。

【一一】 菩薩の四種の攝衆生とは
（一）欲樂心攝 (Praṇidhānaparigraha)。
（二）平等心攝 (Samacittaparigraha)。
（三）增上心攝 (Ādhipatyaparigraha)。
（四）徒衆心攝 (Gaṇaparikarṣaparigraha)。

【一二】 此の偈は菩薩の四種の受生を說示す。

卷の第十三

行住品第二十三[一]

釋して曰く、已に菩薩の功德を說けり。次に菩薩の五種の相を說かん。[二]偈に曰く、

內心憐愍あると、　愛語と及び勇健と、
開手と幷に釋義と、　此の五は菩薩の相なり。（一）

釋して曰く、[三]菩薩に五種の相あり。一には憐愍、二には愛語、三には勇健、四には開手、五には釋義なり。憐愍とは、菩提心を以て衆生を攝利するが故なり。愛語とは、佛語に於て正信を得せしむるが故なり。勇健とは、難行苦行して退屈せざるが故なり。開手とは、財を以て攝するが故なり。釋義とは、法を以て攝するが故なり。此の五種の相は應に知るべし、初めの一は是れ心、後の四は是れ行なることを。

已に菩薩の五種の相を說けり。次に菩薩の在家出家分を說かん。[四]偈に曰く、

菩薩は一切時、　恒に輪王の位に居し、
衆生の作[業]を利益す、　在家の分此の如し。（二）

釋して曰く、菩薩は在家して恒に輪王の化を作す。化は十善を行じ、十惡を離る。此は是れ利益なり。[五]偈に曰く、

受得と及び法得と、　及び示現を成するとの、
三種の出家の分は、　一切地に在り。（三）

釋して曰く、[六]菩薩の出家は三分あり、一には受得分、謂く他に從つて受護す。二には法得分、謂く無流護を得。三には示現分、謂く變化して受を作す。受得分は謂く信行地、法得分及び示現分は

【一】行住(Caryāpratiṣṭhā)。

【二】此の偈は菩薩の五種の特性を說示す。

【三】菩薩の五種の特性とは
(一)憐愍(Anukampā)。
(二)愛語(Priyākhyāna)。
(三)勇健(Dhīratā)。
(四)開手(Muktahastatā)。
(五)釋義(Saṁdhi-nirmokṣa)。

【四】此の偈は在家の菩薩の特色を說示す。

【五】此の偈は出家の菩薩の特色を說示す。

【六】出家の菩薩の三分とは
(一)受得分(Samādānalabdhā)。
(二)法得分 (Dharmatālabdhā)。
(三)示現分(Nidarśikā)。

及以び深疑を斷ずるとの、　五覺を菩薩と名づく。（六三）

釋して曰く、復た五覺に由りて名づけて菩薩と爲す。一に[一六七]成就覺、謂く佛果を成ず。二に[一六八]處所覺、謂く兜率天宮に住す。三に[一六九]胎藏覺、謂く母胎に入る。四に[一七〇]隨次現覺、謂く出胎受欲出家修行成道なり。五に[一七一]斷深疑覺、謂く諸の衆生の爲めに大法輪を轉ず。[一七二]偈に曰く、

得と不得と住と、　自に於けると亦た他に於けると、
有說と無說と、　有慢と及び慢斷と、（六四）
未熟と亦た已熟と、　此の如き十一種は、
一切皆な能く覺す、　是の故に菩薩と名づく。（六五）

釋して曰く、復た十一種の覺に由るが故に菩薩と名づく。得不得及び住とは、其の次第の如く、過去未來現在の覺なり。自に於けると亦た他に於けるとは、謂く內覺外覺なり。有說と無說ととは、謂く麁覺細覺なり。有慢及び慢斷とは、謂く劣覺勝覺なり。未熟と亦た已熟とは、謂く遠覺近覺なり。未熟者の覺は彼れ久遠に方に覺し、已熟者の覺は彼れ近きに於て卽ち覺す。功德品究竟

【一六七】成就覺（Niṣpannabodha）。
【一六八】處所覺（Padabodha）。
【一六九】胎藏覺（Garbhānubodha）。
【一七〇】隨次現覺（Kramadarśanabodha）。
【一七一】斷深義覺（Saṁśayānibodha）。
【一七二】以下二偈は十一種の覺をあげて名づけて菩薩となすことを說示す。

及以び方便覺との、　五覺を菩薩と名づく。(六〇)

釋して曰く、五覺あるに由るが故に菩薩と名づく。一には[一五〇]實義覺、人法無我を覺するが故なり。二には[一五一]大義覺、自他の義を覺するが故なり。三には[一五二]一切覺、一切種の義を覺するが故なり。四には[一五三]恒覺、現涅槃と雖も覺無盡の故なり。五には[一五四]方便覺、覺は物機に隨つて方便を作すが故なり。[一五五]偈に曰く、

隨我と及び小見と、　及以び諸識身と、
亦た虛分別に於る、　四覺を菩薩と名づく。(六一)

釋して曰く、復た四覺に由りて名づけて菩薩と爲す。一に[一五六]隨我覺、覺心に由るが故なり。心は阿梨耶識を謂ふ。二に[一五七]小見覺、覺意に由るが故なり。意は我見等の四惑と相應して阿梨耶識を緣ずる者を謂ふ。三に[一五八]識身覺、覺識に由るが故なり。識は六識身を謂ふ。四に[一五九]虛分別覺、覺不眞分別に由るが故なり。不眞分別とは、卽ち前心意識なり。一切の菩薩は唯だ覺す、此は是れ不眞分別の故なり。[一六〇]偈に曰く、

無境と及び眞義と、　永無と亦た圓滿と、
亦た說不可得との、　五覺を菩薩と名づく。(六二)

釋して曰く、復た五覺に由りて名づけて菩薩と爲す。一に[一六一]無境覺、依他性を覺するが故なり。二に[一六二]眞義覺、眞實性を覺するが故なり。三に[一六三]永無覺、分別性を覺するが故なり。四に[一六四]圓滿覺、一切の境一切の種を覺するが故なり。五に[一六五]不可得覺、三輪淸淨を覺するが故なり。三輪とは、一に應覺、謂く菩薩境なり。二に依覺、謂く菩薩身なり。三に覺性、謂く菩薩智なり。此の三は不可得なるが故に不可得覺と名づく。[一六六]偈に曰く、

成就と及び處所と、　胎藏と隨次現と、

【一五〇】實義覺(Sutatvabodha)。
【一五一】大義覺(Sumahārthabodha)。
【一五二】一切覺(Sarvāvabodha)。
【一五三】恒覺(Nityabodha)。
【一五四】方便覺(Upāyabodha)。
【一五五】此の偈は四覺をあげて菩薩と名づくることを說示す。
【一五六】隨我覺(Ātmānubodha)。
【一五七】小見覺(Tanudṛṣṭibodha)。
【一五八】識身覺(Vicitravijñaptivibodha)。
【一五九】虛分別覺(Vikalpabodha)。
【一六〇】此の偈は五覺をあげて菩薩と名づくることを說示す。
【一六一】無境覺(Anarthabodha)。
【一六二】眞義覺(Pramārthabodha)。
【一六三】永無覺(Sarvāvabodha)。
【一六四】圓滿覺(Sakalārthabodha)。
【一六五】不可得覺(Āśrayabodha)。
【一六六】此の偈も更に五覺をあげて名づけて菩薩となすことを說示す。

釋して曰く、此の偈は攝生門を以て菩薩の相を說く。一に今世攝、謂く布施を以て現在の衆生を攝す。二に後世攝、謂く持戒を以て未來の衆生を攝す。勝生處を得て方に能く攝するが故なり。三に捨攝、謂く忍辱を以て有惱亂の衆生を攝す。四に起勤攝、謂く精進を以て懈怠の衆生を攝す。五に得通攝、謂く禪定を以て他方の衆生を攝す。彼に往いて化するが故なり。六に等說攝、謂く智慧を以て下中上の衆生を攝す。等心を說と爲して增減無きが故なり。七に大果攝、謂く大願若しくは佛果を得るを以て諸の衆生を攝し、餘あること無きが故なり。此の諸偈の義は異門を以て六度及び大願を說く、是れ菩薩の相應知なり。

已に菩薩の諸相の差別を說けり。次に菩薩の諸名の差別を說かん。[一三三]偈に曰く、

應に知るべし諸の菩薩は、　亦は[一三四]摩訶薩と名づけ、
亦は[一三五]有慧者と名づけ、　亦は[一三六]上成就と名づけ、（五六）
亦は[一三七]降伏子と名づけ、　亦は[一三八]降伏持と名づけ、
亦は[一三九]能降伏と名づけ、　亦は[一四〇]降伏牙と名づけ、（五七）
亦は名づけて[一四一]勇猛と爲し、　亦は名づけて[一四二]上聖と爲し、
亦は名づけて[一四三]導師と爲し、　亦は[一四四]大名稱と名づけ、（五八）
亦は名づけて[一四五]有悲と爲し、　亦は[一四六]大福德と名づけ、
亦は[一四七]自在行と名づけ、　亦は[一四八]正說者と名づく。（五九）

釋して曰く、此の十六名は皆な義に依りて立つ。一切の菩薩は總べて此の名あり。若し人此の名あるを聞かば、應に知るべし卽ち是れ菩薩なることを。

已に菩薩の諸名の差別を說けり。次に菩薩の諸義の差別を說かん。[一四九]偈に曰く、

實覺と大義覺と、　一切覺と恒覺と、

【一三三】以下の四偈は十六名を以て菩薩の名となすことを說示す。
【一三四】摩訶薩(Mahāsattva)。
【一三五】有慧者(Dhimat)。
【一三六】上成就(Uttamadyuti)。
【一三七】降伏子(Jinaputra)。
【一三八】降伏持(Jinādhāra)。
【一三九】能降伏(Vijetātha)。
【一四〇】降伏牙(Jināṅkura)。
【一四一】勇猛(Vikrānta)。
【一四二】上聖(Paramāśarya)。
【一四三】導師(Sārthavāha)。
【一四四】大名稱(Mahāyaśa)。
【一四五】有悲(Kṛpālu)。
【一四六】大福德(Mahāpuṇya)。
【一四七】自在行(Īśvara)。
【一四八】正說者(Dhārmika)。
【一四九】此の偈は五覺をあげて菩薩の諸義の差別を說示す。

一向に大菩提を樂ふが故なり。問ふ、云何が法と名づくるや。答ふ、一切諸波羅蜜の法皆な隨轉するに由るが故なり。[三〇] 偈に曰く、

財と利と護と善と樂と　法と乘と此の七に於て、
七種不放逸なり。　是の故に菩薩と名づく。(五三)

釋して曰く、此の偈は不放逸門を以て菩薩の相を說く。一に財不放逸、此は布施なり。施さず慳まざるの施は則ち堅固に由るが故なり。二に制不放逸、此は持戒なり。佛說の如く、應に作すべきは作し、應に作すべからざるは作さゞるに由るが故なり。三に護不放逸、此は忍辱なり。自他心を護り兩害無きに由るが故なり。四に善不放逸、此は精進なり。常に正勤を起し、六度を行ずるに由るが故なり。五に樂不放逸、此は修定なり。諸の禪の樂受に味著せざるに由るが故なり。六に法不放逸、如實の眞法を此れ能く知るが故なり。七に乘不放逸、此は大願なり。魔王來りて其の菩提心を壞するも亦た不退なるに由るが故なり。[三一] 偈に曰く、

不遂と及び小罪と、　不忍と退と亦た亂と、
小見と及び異乘との、　七羞を菩薩と名づく。(五四)

釋して曰く、此の偈は有羞門を以て菩薩の相を說く。一には不遂羞、慳貪を羞づるが故なり。二には小罪羞、微細の罪をも羞ぢて怖畏を見るが故なり。三には不忍羞、不忍を羞づるが故なり。四には退羞、懈怠を羞づるが故なり。五には亂羞、退定を羞づるが故なり。六には小見羞、餘の小執を羞ぢ、法無我に通達するが故なり。七に異乘羞、小乘心を起し大菩提を捨つるを羞づるが故なり。[三二] 偈に曰く、

今世と後世と捨と、　起勤と亦た得通と、
等說と及び大果との、　七攝を菩薩と名づく。(五五)

【三〇】此の偈は不放逸門に於いて七事を行ずるを菩薩の特性となすことを說示す。

【三一】此の偈は有羞門に於いて七事を行ずるを菩薩の特性となすことを說示す。

【三二】此の偈は攝生門に於いて七事を行ずるを菩薩の特性となすことを說示す。

人を愍み、能く施を行ずるが故なり。慚を起すとは、是れ戒の不退なり。此世他世及び法を観ずる人は諸非を造らざるが故なり。苦に耐ふるとは、是れ忍の不退なり。風雨寒熱等及び他違損事一切皆な忍ぶが故なり。捨樂とは、是れ進の不退なり。能く正勤を行ずる人は、自樂に著せざるが故なり。持念とは、是れ定の不退なり。善能く攝心の人は念力に由るが故なり。善定とは、是れ慧の不退なり。無分別智を具足するが故なり。不捨とは、是れ願の不退なり。大乘を捨てざるが故なり。

[一二八] 偈に曰く、

除苦と不作苦と、　容苦と不畏苦と、
脫苦と不思苦と、　欲苦とを菩薩と名づく。　（五一）

釋して曰く、此の偈は離苦門を以て菩薩の相を説く。除苦とは、是れ施なり。他に物を施す時、他の貧窮を除くが故なり。不作苦とは、是れ戒なり。戒自居の時他を苦惱することを作さざるが故なり。容苦とは、是れ忍なり。自他を利するの時、諸苦を能く受くるが故なり。不畏苦とは、是れ進なり。難行を行ずる時、恒に不退を得るが故なり。脫苦とは、是れ定なり。欲界を離欲する時、苦惱を解脫するが故なり。不思苦とは、是れ慧なり。三輪清淨なる時、分別を起さざるが故なり。欲苦とは、是れ願なり。衆生を化せんが爲めに生死に住するを樂ふが故なり。[一二九] 偈に曰く、

樂法と及び性法と、　呵法と亦た勤法と、
自在法と明法と、　向法とを菩薩と名づく。　（五二）

釋して曰く、此の偈は攝法門を以て菩薩の相を説く。樂法とは、是れ施なり。施等の法を愛するが故なり。性法とは、是れ戒なり。自性を護持するが故なり。訶法とは、是れ忍なり。瞋法を護嫌するが故なり。勤法とは、是れ進なり。大乘法を勤行するが故なり。自在法とは、是れ定なり。諸禪自在の故なり。明法とは、是れ慧なり。無上般若を具足するが故なり。向法とは、是れ願なり。

【一二八】此の偈は離苦門に於いて七事を行ずるを菩薩の特性となすことを説示す。

【一二九】此の偈は攝法門に於いて七事を行ずるを菩薩の特性となすことを説示す。

不放逸と多聞と、　彼を利するとを菩薩と名づく。　(四八)

釋して曰く、此の偈は[一二五]利他門を以て菩薩の相を說く。隨攝とは、是れ施なり。恒に四攝を以て衆生を攝するが故なり。無惱とは、是れ戒なり。自ら信じ他に於て惱實の見を起さゞるが故なり。耐損とは、是れ忍なり。他來りて違逆するも加報の意を懷かざるが故なり。勇力とは、是れ進なり。苦に在りて衆生を度するに退屈心あること無きが故なり。不放逸とは、是れ定なり。禪味に著せず、來つて下處の生に就くが故なり。多聞とは、是れ智なり。能く一切衆生の疑を斷ずるが故なり。是の如く利他を勤行す。是れ菩薩の相なり。[一二六]偈に曰く、

厭財と及び捨欲と、　忘怨と亦た勤善と、
巧相と無惡見と、　內住とを菩薩と名づく。　(四九)

釋して曰く、此の偈は住功德門を以て菩薩の相を說く。厭財とは、施の功德に住す。慳財の過は惡道に墮し、來つて貧窮するを知るが故なり。捨欲とは、戒の功德に住す。若し五欲に著せば、出家して戒を受持する能はざるが故なり。忘怨とは忍の功德に住す。他來つて已れを損するも懷せず報ぜざるが故なり。懷報は、似畫石の如く、不懷報は、似畫水の如し。一は惡道に墮し、一は善趣に生ず。勤善とは、進の功德に住す。自他二利を爲し恒に六波羅蜜を行ずるが故なり。巧相とは、定の功德に住す。善能く止擧捨の三相を分別するが故なり。無惡見とは、智の功德に住す。一切諸相不可得なるが故なり。內住とは、願の功德に住す。內は謂く大乘論は住して不動なるが故なり。

[一二七]偈に曰く、

悲を具すると亦た慚を起すと、　苦に耐ふると及び樂を捨つると、
持念と并に善定と、　不捨とを菩薩と名づく。　(五〇)

釋して曰く、此の偈は不退門を以て菩薩の相を說く。悲を具すとは、是れ施の不退なり。他の苦

【一二四】此の偈は利他門に於いて七事を行ずるを菩薩の特性となすことを說示す。

【一二五】利他門に於ける菩薩の七特性とは
(一)隨攝(Anugrahechu)。
(二)無惱(Anupaghāta)。
(三)耐損(Paropaghāta)。
(四)勇力(Dhira)。
(五)不放逸(Apramatta)。
(六)多聞(Bahuśruta)。
(七)利彼(Parārthayukta)。

【一二六】此の偈は住功德門に於いて七事を行ずるを菩薩の特性となすことを說示す。

【一二七】此の偈は不退門に於いて七事を行ずるを菩薩の特色となすことを說示す。

是の如き八種の事は、　總じて諸の大乘を攝す。　（四五）

釋して曰く、此は[二九]八事を以て一切の大乘を總攝す。八事とは、一に種性、性品に說くが如し。二に信法、信品に說くが如し。三に發心、發心品に說くが如し。四に行行、度攝品に說くが如し。五に入道、教授品に說くが如し。六に成就衆生、謂く初七地なり。七に淨佛國土、謂く第八不退地なり。八に菩提勝、謂く佛地なり。菩提に三種あり。謂く聲聞菩提、緣覺菩提、佛菩提なり。佛菩提は大なるが故に勝と爲す。此の佛地に於て大菩提及び大涅槃を示現するが故なり。

已に八法の大乘を攝するを說けり。次に菩薩の五の人差別を說かん。[三〇]偈に曰く、

信行と及び淨行と、　相行と無相行と、
及以び無作行との、　差別は諸地に依る。　（四六）

釋して曰く、[三一]菩薩に五の人差別あり。一に信行人、謂く地前一阿僧祇劫なり。二に淨心行人、謂く入初地なり。三に相行人、謂く二地より六地に至る。四に無相行人、謂く第七地。五に無作行人、謂く後三地なり。

已に菩薩の五の人差別を說けり。次に菩薩の諸相の差別を說かん。[三二]偈に曰く、

不著と及び清淨と、　降瞋と勤德と、
不動と并に見實と、　有欲とを菩薩と名づく。　（四七）

釋して曰く、此の偈は[三三]自利門を以て菩薩の相を說く。不著とは、是れ能く施を行ず、諸欲に著せざるが故なり。淸淨とは、是れ能く戒を持するなり。降瞋とは、是れ能く忍辱す。勤德とは、是れ能く精進す。不動とは、是れ能く定を習す。見實とは、是れ能く智を修す。有欲とは、是れ能く願樂大菩提を起すが故なり。此の七事を行ずるを說いて菩薩の相と名づく。[三四]偈に曰く、

隨攝と及び無惱と、　耐損と并に勇力と、

【二九】大乘總攝の八事とは
（一）種性（Gotra）。
（二）信法（Dharmādhimukti）。
（三）發心（Cittasyotpādanā）。
（四）行行（Pratipatti）。
（五）入道（Nyāyāvakrānti）。
（六）成熟衆生（Satvānāṁ paripāka）。
（七）淨佛國土（Kṣetrasya viśodhana）。
（八）菩提勝（Bodhiḥ śreṣṭhā）。

【三〇】此の偈は菩薩の五の人差別を說示す。

【三一】菩薩の五種の人差別とは
（一）信行人（Ādhimokṣika）。
（二）淨心行人（Śuddhādhyaśayika）。
（三）相行人（Nimittacāri）。
（四）無相行人（Animittacāri）。
（五）無作行人（Anabhisaṁskāracāri）。

【三二】此の偈は自利門に於いて七事を行ずるを菩薩の特性となすことを說示す。

【三三】自利門に於ける菩薩の七特性とは
（一）不著（Asakta）。
（二）淸淨（Viśuddha）。
（三）降瞋（Krodhābhibhūmaya）。
（四）勤德（Guṇatatpara）。
（五）不動（Acala）。
（六）見實（Dṛṣṭibodhi）。
（七）有欲（Spṛhāva）。

量、十二部經を攝するに由る、是れ衆生を化する方便なるが故なり。

已に菩薩の五種の無量を說けり。次に菩薩の說法に八果あることを說かん。[一一五] 偈に曰く、

發心と及び得忍と、　淨眼と盡漏と、
法住と學と亦た斷と、　受用とを八果と爲す。　（四三）

釋して曰く、菩薩若し勸めて說法せば能く八果を得。一には諸の法を聽く者或は菩提心を起す。二には或は無生忍を得。三には或は諸法に於て遠塵離苦し、法眼淨を得。此を下乘所攝と謂ふ。四には或は諸の漏盡を得。五には正法を久住せしむ、此の正說に由り、展轉受持を得るが故なり。六には未だ義を學ばざる者に義を學ぶを得せしむ。七には未だ疑を斷ぜざる者に疑を斷ずるを得せしむ。八には已に疑を斷ぜし者に正法無障、大喜味を受用することを得せしむ。

已に菩薩の說法に八果あることを說けり。次に大乘の七大義を說かん。[一一六] 偈に曰く、

緣と行と智と勤と巧と、　果と事と皆な具足す。
此の七大義に依りて、　大乘を建立す。　（四四）

釋して曰く、若し七種の大義を具せば說いて大乘と爲す。一には[一一七] 緣大、無量の修多羅等の廣大なる法を緣と爲すに由るが故なり。二には行大、自利利他の行、皆な具足するに由るが故なり。三には智大、人法二無我に一時に通達するに由るが故なり。四には勤大、三大阿僧祇劫無間に修するに由るが故なり。五には巧大、生死を捨てずして而も不染なるに由るが故なり。六には果大、力畏るゝ所無く、不共法を至得するに由るが故なり。七には事大、數々大菩提大涅槃を示現するに由るが故なり。

已に大乘の七大義を說けり。次に八法の大乘を攝することを說かん。[一一八] 偈に曰く、

性と信と心と行と入と、　成と淨と菩提勝と、

【一一五】此の偈は菩薩の說法の八果を說示す。

【一一六】此の偈は大乘の七大義を說示す。

【一一七】大乘の七大義とは
（一）緣大（Ālambanamahatva）。
（二）行大（Pratipattimahatva）。
（三）智大（Jñānamahatva）。
（四）勤大（Vīryārambhamahatva）。
（五）巧大（Upāyakauśalyamahatva）。
（六）果大（Samudāgamamahatva）。
（七）事大（Buddhakarmamahatva）。

【一一八】此の偈は八事を擧げて大乘を總說す。

不見と見とは應に知るべし、　　無義有義の境なりと。
[22]轉依及び解脫は　　自在を得るを以ての故なり。　(四〇)

釋して曰く、無義境界は謂ゆる諸相、此れ即ち不見なり。有義境界は謂ゆる眞如、此れ即ち見なり。是の如きを說いて轉依と名づく。所執の境界の體無きを見、及び眞如の體あるを見る。是の如きを說いて解脫と名づく。何以故、自在を得るを以ての故なり。自在とは、謂く自意に隨つて轉じ、自然に諸の境界を行ぜざるなり。經に說くが如く、若し有相なれば則ち縛せられ、若し縛せらるれば則ち解脫無し。一切の境界を行ぜざる即ち是れ解脫なり。

問ふ、云何が如實に淨土方便を知るや。[23] 偈に曰く、

衆生は同一種、　　地境は皆な普見なり、
此れ即ち淨土の障、　　應に知るべし亦た應に捨つべきことを。(四一)

釋して曰く、衆生は同一種地境は皆な普見なりとは、器世界は是れ大境界にして一切衆生は同じく一種類と見る。皆な此は是れ大地と言ふが故なり。此れ即ち淨土の障とは、此の見を作すに由り、即ち淨土方便を與へ、而も障礙を爲す。應に知るべし亦た應に捨すべしとは、菩薩は此の想の障礙と爲るを知り已つて、即ち應に勤めて此の想を捨つべし、是を對治と名づく。

已に菩薩の四種の如實知を說けり。次に菩薩の五種の無量を說かん。[23] 偈に曰く、

應化と及び應淨と、　　應得と亦た應成と、
應說と此の五事は、　　菩薩の五無量なり。　(四二)

釋して曰く、[24] 五事の無量とは、一に應化の事無量、一切衆生界を攝するに由るが故なり。二に應淨の事無量、一切の器世界を攝するに由るが故なり。三に應得の事無量、一切の法界を攝するに由るが故なり、四に應成の事無量、一切の化す可き衆生を攝するに由るが故なり。五に應說の事無

【二二】轉依(Āśrayaparāvṛtti)。

【二三】此の偈は菩薩は云何にして淨土方便を知るやを說示す。

【二三】此の偈は菩薩の五事の無量を說示す。

【二四】菩薩の五事の無量とは
(一)應化(Paripācayaṁ)。
(二)應淨(Viśodhyaṁ)。
(三)應得(Prāpyaṁ)。
(四)應成(Paripācanayogyaṁ)。
(五)應說(Saṁyagdeśana)。

亦た薫聚の因を知らば、　依他性即ち盡く。　(三七)

釋して曰く、若し具さに三性を知らば、即ち依他性を盡す、若し智眞如を縁ずとは、是れ眞實性を知るなり。彼の二執を遠離すとは、是れ分別性を知るなり。亦た薫聚の因を知るとは、是れ依他性を知るなり。依他性即ち盡くとは、三性を知らば薫習聚盡くるに由る。薫習聚とは、謂く阿黎耶識なり。

問ふ、此の盡に何の功德かある。[一〇七] 偈に曰く、

彼の眞如を縁ずる智は　無異の相を觀察し
有非有現見して、　想作自在に成ず。　(三八)

釋して曰く、無異の相を觀察すとは、別相及び如の差別の見無きが故なり。此れ二乘と菩薩との差別を說く。二乘は相と及び無相と差別して而も見る、是の如く見已つて悉く相を捨て、無相界に於て作意縁を起し、無相三昧に入る。菩薩は則ち爾らず、眞如外に於て別に諸相あるを見ず、無相界に於ても亦た無相を見る。菩薩智は種種の相を修すること無きに由るが故なり。有非有現見すとは、有は眞如界に名づけ、非有は相境界に名づく、皆な現見するが故なり。想作自在に成るとは、謂く神通等の事を成ぜんと欲するは、一切皆な憶想分別に由りて成ず、此は是れ如實知の利益なり。

問ふ、凡夫及び菩薩の二見は云何が顯示するや。[一〇八] 偈に曰はく、

實を覆うて不實を見る。　應に知るべし是れ[一〇九] 凡夫なりと。
實を見て不實を覆ふ、　是の如きを菩薩と名づく。　(三九)

釋して曰く、凡夫の無功用は眞如を見ず不眞實の相を見る。菩薩の無功用は眞如を見て不眞實を見ず。

問ふ、已に差別を知れり。云何が轉依及び解脫を得るや。[一一〇] 偈に曰く、

【一〇七】此の偈は薫習聚の盡きたる狀態の功德を說示す。

【一〇八】此の偈は凡夫と菩薩との知見の相違を說示す。

【一〇九】凡夫の原語 Bāla が、兒童、少年、又は發達の不十分なるもの無智なるもの等を意味するは、これ明かに人間發達の第一期即ち第一階段を示せるものである。

【一一〇】此の偈は菩薩は如何にして轉依及び解脫を得るかを說示す。

住持と及び受用と、　　種子とを合して三因とす、
依止及び心法、　　亦た種は彼の縛を爲す。　（三五）

釋して曰く、三因とは、一には[101]住持因、二には[102]受用因、三には[103]種子因なり。住持因とは、謂く器世界なり。受用因とは、謂く五欲の境界なり。種子因とは、謂く阿黎耶識なり。此の識は是れ内外の諸法の種子因なるに由るが故なり。此の三因は繩の如く卽ち是れ能く縛す。問ふ、此の縛は何等の物をか縛す。答ふ、依止及び心法亦た種は彼の縛を爲す。所縛に亦た三種あり。一には依止、二には心法、三には[104]阿黎耶識なり。問ふ、依止は是れ何等なりや。答ふ、是れ眼等の六根なり。問ふ、阿黎耶識は是れ何等なりや。答ふ、是れ三界内外の諸法の種子なり。此の中但だ阿黎耶識の縛す可きあり、人我の縛す可き無し、此を如實知の繫縛と名づく。[105]偈に曰く、

安相は心前に在ると、　　及以び自然住と、
一切倶に觀察し、　　大菩提を至得す。　（三六）

釋して曰く、安相は心前に在りとは、安相は謂く聞思修慧方便なり。人所緣起分別の故に安相と名づく。及以び自然住とは、彼の相は謂く自性現前なり、分別に非ざるが故に自然住と名づく。一切倶に觀察すとは、彼の二所緣は所緣の體に非ず、分別無きが故なり。此の方便を以て諸相對治と爲す。彼の二應に次第に觀察すべし、謂く先づ安相を觀じ、後に自然住の相を觀ず。此の二皆な緣體に非ず、彼れ四倒を起し卽ち隨滅を得。大菩提を至得すとは、若し修行の人但だ人相を觀察せば、唯だ聲聞緣覺の菩提を得、若し一切法の相を觀察せば、卽ち無上菩提を得。是の如く其の所縛に隨つて解脫を得。此を如實知解脫と名づく。

問ふ、此の解脫は何の所知に由り、何の所盡に由るや。[106]偈に曰く、

若し智眞如を緣ずれば、　　彼の二執を遠離す。

【一〇一】住持因(Pratis'hānimittam)。
【一〇二】受用因(Bhojananimittam)。
【一〇三】種子因(Bijanimittam)。
【一〇四】阿黎耶識(Ālaya-vijñāna)。
【一〇五】此の偈は如實知の繫縛を說示す。
【一〇六】此の偈は如實知解脫の功用を說示す。

是の如く說法を作す。行上とは、其の說法の如く、是の如く行行を作す。聚上とは、其の行行の如く、是の如く聚滿を得。果上とは、其の聚滿の如く無上菩提を得るなり。復た次に、若し聲聞乘は他より法を聞き、內自ら思惟し、分別智を以て果を得。若し緣覺乘は他より聞かず、內自ら思惟し、亦た分別智を以て果を得。若し菩薩乘は他より聞かず、無分別智を以て果を得。此の三種を乘假建立と名づく。

已に四種の假建立を說けり。次に菩薩の四種の知を求むることを說かん。[九六]偈に曰く、

名物互に客たり、　二性俱に是れ假、
二別得可からず、　是を四求の義と名づく。　(三三)

釋して曰く、諸の[九七]菩薩は四種[を以て]諸法を求む。一には名求、二には物求、三には自性求、四には差別求なり。名求とは、名を推し、物に於ては是れ客なり。此を名求と謂ふ。物求とは、物を推し、名に於ては是れ客なり。此を物求と謂ふ。自性求とは、名の自性及び物の自性を推し、俱に是れ假なるを知る。此を自性求と謂ふ。差別求とは、名の差別及び物の差別を推し、俱に空なるを知るが故に悉く不可得なり。此を差別求と謂ふ。

四求を說き已れり。次に四の如實知を分別せん。[九八]偈に曰く、

眞智に四種あり、　名等は不可得なり、
二利を大業と爲す、　成は諸地の中に在り。　(三四)

釋して曰く、諸の菩薩は諸法に於て四種の[九九]如實知あり。一には緣名如實知、二には緣物如實知、三には緣自性如實知、四には緣差別如實知なり。如實知とは、一切の名等皆な不可得なるを知るに由るが故なり。二利を大業と爲す成は諸地の中に在りとは、諸の菩薩は諸地の中に於て、自利利他の大事を起す。此を如實知の業と名づく。[一〇〇]偈に曰く、

【九六】此の偈は菩薩の四種の求知を說示す。

【九七】菩薩の四求とは (一)名求(Nāmaparyeṣaṇā)。(二)物求(Vastuparyeṣaṇā)。(三)自性求(Svabhāva-prajñapti-paryeṣaṇā)。(四)差別求(Viśeṣaprajñapti-paryeṣaṇā)。

【九八】此の偈は菩薩には四種の如實知あることを說示す。

【九九】如實知(Yathābhūtaparijñānaṁ)。

【一〇〇】此の偈は菩薩の如實知の業を說示す。

如は是れ眞實性、謂く空相如、唯識如、清淨如、正行如の故なり。分別依他の二性攝は卽ち是れ世諦、眞實性攝は卽ち是れ眞諦なり。

道理假建立の四種とは、[九二]偈に曰く、

正思と正見と果と、　　擇法の現等量と、
亦た不思議を說くと、　　道理に四種あり。　　(三一)

釋して曰く、[九三]道理假建立に四種あり。一に相待道理、二に因果道理、三に成就道理、四に法然道理なり。相待道理とは、所謂正思なり。正思を待つに由りて出世の正見方に始めて起ることを得。正思惟を離れて更に別の方便無きが故なり。因果道理とは、所謂正見及び果なり。成就道理とは、所謂現等の量を以て諸法を簡擇す。法然道理とは、所謂不可思議處なり。此の法已に成ずるが故に如なり。問ふ、何が故に正思能く正見を起すや。此れ已に成就すれば應に更に思すべからざ［るが故なり］。何が故に正見能く煩惱を斷じ、及び滅を得るや。此れ已に成就すれば更に思す可からざ［るが故なり］。諸の是の如きの義、悉く是れ法然道理なり。此の如き四種を道理假建立と名づく。

乘假建立の三種とは、[九四]偈に曰く、

心と說と行と聚と果との、　　五に各下中上［あり］、
此の三品の異に依りて、　　建立に三乘有り。　　(三二)

釋して曰く、五義三品に依りて三乘を建立す。五義とは、一に心、二に說、三に行、四に聚、五に果なり。三品とは、謂く下中上なり。若しは聲聞は五事倶に下なり。心下とは、自らの解脫を求む。說下とは、自利の法を說く。行下とは、自利の行を行ず。聚下とは、福智狹小にして但だ三生等のみなり。果下とは、聲聞果を得。若しは緣覺乘の五事は倶に中なり。若しは菩薩乘の五事は倶に上なり。心上とは、謂く四種の恩心なり、[九五]金剛般若經に說くが如し。說上とは、其の恩心の如く、

【九二】此の偈は菩薩の四假建立中、四種の道理假建立を說示す。

【九三】四種の道理建立とは(一)相待道理(Apekṣāyukti)。(二)因果道理(Kāryakāraṇa-yukti)。(三)成就道理(Upapattisādhanayukti)。(四)法然道理(Dharmatāyukti)。

【九四】此の偈は菩薩の四假建立中三種の乘假建立を說示す。

【九五】金剛般若經(Vajracchedikā-prajñāpāramitā-sūtra)。大正藏經に般を波に作るは明かに般の誤なり。

釋して曰く、[八五]四種の假建立とは、一に法假建立、二に諦假建立、三に道理假建立、四に乘假建立なり。問ふ、各幾種ありや。答ふ、法假建立に五種の差別あり、諦假建立に七種の差別あり、道理假建立に四種の差別あり、乘假建立に三種の差別あり。

法假建立の五種とは、[八六]偈に曰く、

所謂五明處なり、　皆な是れ大乘の種、
[八七]修多[八八]祇夜等の、　類に差別あるが故なり。　（一九）

釋して曰く、法假建立の五種は即ち是れ五明論なり。此の五は皆な是れ大乘修多羅祇夜等の種類差別なり。五明處は覺分品に說くが如し。

諦假建立の七種とは、[八九]偈に曰く、

輪轉と及び空相と、　唯識と依止と、
邪行と亦た清淨と、　正行との如の七種なり。　（二〇）

釋して曰く、七種の差別は即ち是れ[九〇]七如なり。一には輪轉如、二には空相如、三には唯識如、四には依止如、五には邪行如、六には清淨如、七には正行如なり。輪轉如とは、謂く生死なり。即ち是れ三界の心心法なり。此は分別より起り、此の分別は復た因緣より起る。自在等の因より生ずるに非ず、亦た無因生に非ず、分別の境界空なるに由るが故なり。一切時但だ分別依他の二性輪轉あり。空相如とは、謂く法無我なり、一切諸法は同一空如を以て相と爲すが故なり。唯識如とは、謂く無分別智なり。依止如とは、謂く苦諦なり。此に二種あり、一に[九一]器世間、二に衆生世間なり。邪行如とは、謂く集諦なり。此は即ち是れ愛なり。清淨如とは、謂く滅諦なり。此に二種あり、一に煩惱障淨、二に智清淨なり。正行如とは、謂く道諦なり。此の如き七種の如を諦假建立と名づく。此の中應に知るべし、三種の如は是れ分別依他の二性、謂く輪轉如、依止如、邪行如なり。四種の

【八五】四種の假建立とは
（一）法假建立(Dharmaprajñapti-vyavasthāna)。
（二）諦假建立(Satyaprajñapti-vyavasthāna)。
（三）道理假建立(Yuktiprajñapti-vyavasthāna)。
（四）乘假建立(Yānaprajñapti-vyavasthāna)。

【八六】此の偈は前偈を承けて法假建立の五種を明す。

【八七】修多(Sūtra)。

【八八】祇夜(Geya)。

【八九】此の偈は菩薩の四假建立中、諦假建立の七如を說示す。

【九〇】諦假建立の七如とは、
（一）輪轉如(Pravṛttitathatā)。
（二）空相如(Lakṣaṇatathatā)。
（三）唯識如(Prajñaptitathatā)。
（四）依止如(Aśrityatathatā)。
（五）邪行如(Mityāpratipattitathatā)。
（六）清淨如(Saṁniveśatathatā)。
（七）正行如(Samyakpratipattitathatā)。

【九一】器世間(Bhājana-loka)とは一切の生物の棲息する國土のこと。

不味と不分別との、　六行必ず常に起る。　（二一六）

釋して曰く、諸の菩薩は六度を成就せんが爲めの故に、必ず應に常に六事を作すべし。一には厭塵、謂く五欲の過失を知る。譬へば糞穢の少なりと雖も亦た臭なるが如く、布施の果報は多なりと雖も亦た苦なり。不著に由るが故に能く三施を行ず、此の事常に修すれば則ち檀度圓滿す。二には自省、謂く晝夜六時に常に自ら所作の三業を省察し、過を知れば則ち改む。此の事常に修すれば則ち戒度圓滿す。三には耐苦、若し他の來りて諸の不饒益の事を作すあり、及び自ら法を求むるに諸の寒熱等の苦を忍ぶ。此の事常に修すれば、則ち忍度圓滿す。四には修善、善は謂く六波羅蜜なり。諸地の中に於て此の事常に修すれば、則ち進度圓滿す。五には不味、謂く禪中の勝樂を味はず、恒に欲界に來つて受生す。此の事常に修すれば、則ち禪度圓滿す。六には不分別、謂く三輪異相に於て分別を起さず、此の事常に修すれば、則ち智度圓滿す。

已に菩薩の六種の必ず常に作すことを說けり。次に菩薩の六度の勝類を說かん。[八三]偈に曰く、

法施と及び聖戒と、　無生起と大乘と、
定悲と如實智との、　六行此れを勝と爲す。　（二一七）

釋して曰く、施に多種あるも、法施を以て最上と爲す。戒に多種あるも、聖人所愛の無流戒を以て最上と爲す。忍に多種あるも、心地の無生忍を以て最上と爲す。精進に多種あるも、大乘を起し衆生を度脫するを以て最上と爲す。定に多種あるも、出世第四禪の大悲と合する者を以て最上と爲す。智に多種あるも、如實通達諸法智を以て最上と爲す。

已に菩薩の六度の勝類を說けり。次に四種の假建立を說かん。[八四]偈に曰く、

立法と及び立諦と、　立理と亦た立乘とに、
五、七、四、三の種あり、　假差別を建立す。　（二一八）

【八三】此の偈は菩薩の六行をあげて六度の勝類を說示す。

【八四】此の偈は菩薩の四種の假建立を說示す。

忍に由りて諸苦常に不退なるが故なり。四には修習決定、進に由りて恒時に善を修し間息無きに因るが故なり。五には定業決定、禪に由りて衆生の業を成就し、永く退せざるが故なり。六には無功用決定、智に由りて無生忍無分別智の自然に住するを得るが故なり。

已に菩薩の六種の決定を說けり。次に菩薩の六種の必ず應に作すべきことを說かん。[八一]偈に曰く、

供養と及び學戒と、　修悲と亦た勤善と、
諠を離るゝと深く法を樂しむとの、　六事は必ず應に作すべし。（一五）

釋して曰く、諸の菩薩は六度を成就せんが爲の故に、諸地の中に於て決定して應に六事を作すべし。一には必ず應に供養すべし。此れ檀度を成就せんが爲めなり。若し長時に供養せざれば、則ち檀度圓滿することを得ず。供養の義は供養品に說けるが如し。二には必ず應に戒を學ぶべし。此れ戒度を成就せんが爲めなり。若し長時に戒を學ばざれば、則ち戒度圓滿することを得ず。三には必ず應に悲を修すべし。此れ忍度を成就せんが爲めなり。若し長時に諸の不饒益の事を忍ばずんば、則ち忍度圓滿することを得ず。四には必ず應に善を勤むべし。此れ進度を成就せんが爲めなり。若し心放逸にして諸善を修せざれば、則ち進度圓滿することを得ず。五には必ず應に諠を離るべし。此れ禪度を成就せんが爲めなり。若し聚落にありて多く心を諍擾せば、則ち禪度圓滿することを得ず。六には必ず應に法を樂しむべし。此れ智度を成就せんが爲めなり。若し遍ねく諸佛を歷、法を聽き厭くこと無く、海の流を納れて時として盈溢すること無きが如くならざれば則ち智度圓滿することを得ず。

已に菩薩の六種の必ず應に作すべきことを說けり。次に菩薩の六種の必ず常に作すことを說かん。[八二]偈に曰く、

厭塵と及び自省と、　耐苦と善法を修すると、

【八一】此の偈は菩薩の六度を成就せんがために六種の必應作を說く。

【八二】此の偈は菩薩の六度を成就せんがために六種の必常作を說く。

なり。時の差別の授記に二種あり。一には[七六]有數時授記、二には[七七]無數時授記なり。復た次に、更に二種の授記あり。一に轉授記、二に大授記なり。轉授記とは、謂はく彼の菩薩は後に是の如來の是の如き時節に於て當に授記を授くべしと記す。

問ふ、云何が大授記なる。[七八]偈に曰く、

八地は無生を得、　慢を斷じ功用を斷ず。
諸佛及び佛子は、　一體同如なるが故なり。　(二一二)

釋して曰く、大授記とは、謂く第八地の中に在りて無生忍を得る時、自ら我れ當に佛慢を作すべしと言ふを斷ずるに由るが故なり。及び一切分別の相の功用を斷ずるが故なり。一切の諸佛菩薩と同一體なるを得るが故なり。問ふ、云何が同一體なる。答ふ、諸佛菩薩と自己身と差別あるを見ず、何以故、同一如なるが故なり。[七九]偈に曰く、

刹土と及び名號と、　時節と劫名と、
眷屬と幷に法住と、　記に復た六種あり。　(二一三)

釋して曰く、復た此の六種の授記あり。一には是の如き刹土に於てす。二には是の如き名號あり。三には是の如きの時節を經。四には是の如きの劫名あり。五には是の如きの眷屬を得。六には是の如きの時節正法世に住す。

已に諸佛の授記を說けり。次に菩薩の六種の決定を說かん。[八〇]偈に曰く、

財成と及び生勝と、　不退と修習と、
定業と無功用との、　六事決定して成す。　(二一四)

釋して曰く、菩薩は六度增上に由り六種の決定を得。一には財成決定、施に由りて常に大財成立するを得るが故なり。二には生勝決定、戒に由りて常に隨意受生を得るが故なり。三には不退決定、

【七六】有數時授記(Parimitā-kāla-vyākaraṇa)。
【七七】無數時授記(Aparimita-kāla-vyākaraṇa)。
【七八】此の偈は諸佛の菩薩に對する四授記中、最後の大授記を說示す。
【七九】此の偈は菩薩の六種の授記を說示す。
【八〇】此の偈は菩薩の六種の決定を說示す。

假許と及び詐相と、　　誑喜と亦た僞勤と、
身靜と口善說と、　　是の似を翻すれば卽ち眞なり。　（一九）

釋して曰く、假許とは、是れ似布施なり。謂はく求者に語つて言はん。所有恣取のまゝなりと。而して彼來らば卽ち悋なり。詐相とは、是れ似持戒なり。謂はく諸惡を覆藏して而も善威儀を詐る。誑喜とは、是れ似忍辱なり。謂はく甘言虛[六七]悅して、害を規し時を待つ。僞勤とは、是れ似精進なり。謂はく虛しく我れ佛果を求むと說き、而も實には心は世報を希ふ。身靜とは、是れ似禪定なり。謂はく身口端默にして惡覺心口を擾す。善說とは、是れ似般若なり。謂く他の爲めに巧說して身は自ら行ぜず。此の六は是れ不眞行なり。此の不眞行を翻せば卽ち眞行と爲す。

已に菩薩の眞似功德を說けり。次に菩薩の衆生の爲めに六蔽を除くを說かん。[六八]偈に曰く、

彼の六度の行を與へ、　　彼の六蔽の障を除く、
菩薩の衆生を化すや、　　地地皆な是の如し。　（二〇）

釋して曰く、[六九]衆生に六蔽あり、能く彼の六波羅蜜を障ゆ、所謂慳貪・破戒・瞋恚・懈怠・亂心・愚癡なり。菩薩は其の次第の如く其の所須を給し、布施を行ぜしめ、乃至般若を行ぜしめ、彼の衆生をして六障を除くを得せしむ。卽ち是れ與施力至與智なり。

已に菩薩の衆生の六蔽を除くを說けり。次に諸佛の菩薩に記を授けたまふことを說かん。[七〇]偈に曰く、

[七一]授記に二種あり、　　[七二]人別及び[七三]時別なり。
[七四]轉記及び[七五]大記を、　　此れ復た二種と爲す。　（二一）

釋して曰く、授記に二種あり。一には人の差別、二には時の差別なり。人の差別の授記に四種あり。一には未發心授記、謂ゆる性位なり。二には已發心授記、三には現前授記、四には不現前授記

【六七】異本には說に作る。
【六八】此の偈は菩薩の衆生の六蔽を除くを說示す。
【六九】衆生の六蔽の原語は(一)Mātsarya(慳貪)。(二)Dauḥśīlya(破戒)。(三)Krodha(瞋恚)。(四)Kausīdya(懈怠)。(五)Vikṣepa(亂心)。(六)Dauṣprajñya(愚癡)。
【七〇】此の偈は菩薩に對する諸佛の授記を說示す。
【七一】授記(Vyākaraṇa)。
【七二】人別(Pudgalabheda)。
【七三】時別(Kālabheda)。
【七四】轉起(Anyad-udāhṛta)。
【七五】大記(Mahāvyākaraṇa)。

せんことを希望す。五に[六〇]無上菩提を希望す。是を五種の希望と名づく。

已に菩薩の五種の希望を説けり。次に菩薩の四種の不空果を説かん。[六一]偈に曰く、

[六二]斷怖と發心と、　除疑と亦た起行と、
四事〔を以て〕衆生を化し、　必定不空果なり。　（一六）

釋して曰く、諸の菩薩の四業は衆生を利益して必ず果空からず。一には深法を説かんが爲めに必ず不怖を得。二には菩提心を發して必ず佛果を得せしむ。三には之が爲めに疑を斷じ必ず重ねて起る無し。四には六度を説かんが爲めに必ず能く修習す。是を四業の不空果と名づく。

已に菩薩の四種の不空果を説けり。次に菩薩の六種の正行を説かん。[六三]偈に曰く、

求を離れ後有を離れ、　遍に諸の功德を起す、
禪を修し無色を捨つ、　智方便行と合す。　（一七）

釋して曰く、離求とは、布施の正行なり。報を望まざるが故なり。後有を離るとは、戒忍の正行なり。後有を求めざるが故なり。遍に諸の功德を起すとは、精進の正行なり。禪を修し無色を捨すとは、禪定の正行なり。智方便行と合すとは、般若の正行なり。三輪清淨を般若と爲し、菩提に迴向するを方便と爲す。[六四]寶積經に説くが如く、施すに報を求めずと。是の如く廣く説く。

已に菩薩の六種の正行を説けり。次に菩薩の六度の進退分を説かん。[六五]偈に曰く、

著財と毀禁と、　慢下と將た墮善と、
瞰味と亦た分別と、　是の退を翻せば進と爲す。　（一八）

釋して曰く、六度の所對治は是れ退分の因なり。彼の所對治を翻せば即ち是れ能對治なり。應に知るべし即ち是れ進分の因なりと。

已に菩薩の六度の進退分を説けり。次に菩薩の六度の眞似功德を説かん[六六]偈に曰く、

【六〇】無上菩提(Anuttarāṁcas-samyaksaṁbodhiṁ)。
【六一】此の偈は菩薩の四業は衆生を利益して其の果空しからざることを説示す。
【六二】菩薩の四業とは
(一)斷怖(Trāsahāni)。
(二)發心(Samutpāda)。
(三)除疑(Saṁśayacchedana)。
(四)起行(Pratipattyavavāda)。
【六三】此の偈は菩薩の六種の正行を説示す。
【六四】寶積經(Ratnakūṭa)。
【六五】此の偈は菩薩の六度の進退分を説示す。
【六六】此の偈は菩薩の六度の眞似功德を説示す。

語を知る。五には心に希望無し。菩薩の五業も亦た爾なること應に知るべし。

問ふ、云何が似和上の饒益なる。[五二]偈に曰く、

　滿ぜしむること及び脫せしむること、　障を斷ずると世樂を與ふると、

　及び出世利を與ふるとの、　五業は[五三]和上の如し。　（一三）

釋して曰く、譬へば和上の弟子に於て、五種の饒益の業を作すが如し。一には度して出家せしむ。二には其の受戒を與ふ。三には諸過を禁斷す。四には攝持するに財を以てす。五には敎授するに法を以てす。菩薩の五業も亦た爾なり。一には二聚を滿ぜしむ。二には解脫を得せしむ。三には諸障を斷ぜしむ。四には世間樂を與ふ。五には出世利を與ふ。是を菩薩の五種の似和上の業と名づく。

已に菩薩の七似饒益を說けり。次に衆生の六種の報恩を說かん。[五四]偈に曰く、

　不著と及び不犯と、　知作と亦た善行と、

　是の如く六度を修す。　是れ菩薩の恩を報ずるなり。　（一四）

釋して曰く、菩薩の衆生を饒益する如く、衆生も菩薩の恩に報ずること亦た是の如し。不著とは、布施報恩、不犯とは、持戒報恩、知作とは、修忍報恩。菩薩は彼を愛忍することを知つて作す。卽ち是れ報恩なり。善行とは、餘の三度を行じて報恩す。精進行定慧を以て卽ち解脫を得るが故に、後三度を合して善行と名づく。

已に衆生の六種の報恩を說けり。次に菩薩の五種の希望を說かん。[五五]偈に曰く、

　六增と及び六減と、[illegible]　成生と進地と、

　大覺と是の五處[に於て]　希望に五種あり。　（一五）

釋して曰く、諸の菩薩は五處に於て常に希望を起す。一には[五六]六度の增長せんことを希望す。二には[五七]六蔽の損減せんことを希望す。三には[五八]衆生を成熟せんことを希望す。四には[五九]諸地に勝進

【五二】此の偈は菩薩の七似饒益の第七似和上饒益を說示す。

【五三】和尙(Upādhyāya)。

【五四】此の偈は衆生の菩薩に對する報恩を說示す。

【五五】此の偈は菩薩の五種の希望を說示す。

【五六】六度增長(Pāramitāvṛddhiṁ)。

【五七】六蔽損減(Tadvipakṣahāniṁ)。

【五八】成熟衆生(Satvaparipācanaṁ)。

【五九】勝進諸地(Bhūmi-viśeṣa-gamanaṁ)。

問ふ、云何が似同侶饒益なる。[四四]偈に曰く、

與樂と及び與利と、　樂恒と利も亦た恒なると、
及以び不離散との　五業は同侶の如し。　（一〇）

釋して曰く、譬へば智ある同侶の已に於て五種の饒益の業を作すが如し。一に與樂、二に與利、三に恒與樂、四に恒與利、五に不乖離なり。菩薩の五業も亦た爾なり。一には不顚倒の樂を與ふ。世間を成就する者を樂と名づく、此に由りて樂受を得るが故なり。二には不顚倒の利を與ふ。出世を成就する者を利と名づく、此に由りて煩惱病を對治するが故なり。餘の三は解すべし、是を菩薩の似同侶の業と名づく。

問ふ、云何が似健奴饒益なる。[四五]偈に曰く、

生を成ずると出要を開くと、　忍害と二成と、
示すに巧方便を以てするとの、　五業は健奴の如し。　（一一）

釋して曰く、健奴の主の爲めに五種の饒益の業を作すが如し。一には[四六]諸の所作を極む。二には[四七]不欺誑を得。三には[四八]諸の打罵を忍ぶ。四には[四九]作事精妙なり。五には[五〇]巧方便を解す。菩薩の五業も亦た爾なり。一には衆生を成就す。二には出要を開示す。三には諸の惡事を忍ぶ。四には世間の樂を與ふ。五には出世の利を與ふ、是を菩薩の五種の似健奴の業と名づく。

問ふ、云何が似闍黎饒益なる。[五一]偈に曰く、

遍授と及び示要と、　舒顏と亦た愛語と、
彼の恩執を求めざるとの、　五業は闍黎の如し。　（一二）

釋して曰く、無生忍を得る者を說いて闍黎と爲す。譬へば闍黎の弟子に於て、五種の饒益業を作すが如し、一には其の諸法を教ゆ。二には其の速要を示す。三には身に舒顏を知る。四には口に愛

【四四】此の偈は菩薩の七似饒益の第四似同侶饒益を說示す。

【四五】此の偈は菩薩の七似饒益の第五似健奴饒益を說示す。

【四六】極諸所作(Utthāna-sampannobhavati kṛtyeṣu)。

【四七】得不欺誑(Avisaṁvādako bhavati)。

【四八】忍諸打罵(Kṣamo bhavatiparibhāṣaṇa-tāḍanādīnāṁ)。

【四九】作事精好(Nipuṇo bhavati sarvakārya-karaṇāt)。

【五〇】解巧方便(Vicakṣaṇa aśca bhavati upāyajña:)。

【五一】此の偈は菩薩の七似饒益の第六似阿闍梨饒益を說示す。

三に[29]長養、四に[30]防害、五に[31]教語なり。菩薩の衆生を饒益する五業も亦た爾なり。一に等心に衆生に向ふ。二に之を聖地に生む。三に諸の善根を長養す。四に諸の惡作を防護す。五に教習するに多聞を以てす。是れを菩薩の五種の似母業と名づく。

問ふ、云何が似父饒益なる。[32]偈に曰く、

信ぜしむると戒定せしむると、　　脫せしむると勸請せしむると、
亦た後障を防ぐことを爲すとの、　　五業は慈父の如し。　（八）

釋して曰く、譬へば慈父の子に於て、五種の饒益の業を作すが如し。一に[33]種子を下す。二に[34]工巧を敎ゆ。三に[35]娉室を爲す。四に[36]善友を付す。五に[37]絕債を爲し後償せしめず。菩薩の五業も亦た爾り、一には信を起さしめ、以て聖體の種子と爲す。二には增上戒定を學せしめ、以て工巧と爲す。三には解脫喜樂を得せしめ、以て娉室と爲す。四には諸佛を勸請せしめ以て善友と爲す。五には諸の障閡を遮することを爲して以て絕債と爲す。是れを菩薩の五種の似父業と名づく。

問ふ、云何が似善友饒益なる。[38]偈に曰く、

祕深と及び呵犯と、　　讃持と敎授と、
諸の魔事を覺せしむるとの、　　五業は善友の如し。　（九）

釋して曰く、譬へば善友の已に於て、五種の饒益の業を作すが如し。一には[39]密語を覆と爲す。二には[40]惡行を斷ぜしむ。三には[41]善行を稱譽す。四には[42]所造を佐助す。五には[43]惡事を習するを遮す。惡事に四種あり、一には射獵、二には姧非、三には耽酒、四には博戲なり。菩薩の五業も亦爾り。一には器に非ざる者には、其の深說を祕す。二には戒を犯す者は、如法に呵責す。三には戒を具する者には、善を以て稱譽す。四には修行者には、敎へて速に證せしむ。五には魔事者は卽ち覺知せしむ。是を菩薩の五種の似善友の業と名づく。

【二九】長養(Āpāyayati)。
【三〇】防害(Poṣayati)。
【三一】教語(Saṁvardhayati)。
【三二】此の偈は菩薩の七似饒益の第二似父饒益を說示す。
【三三】下種子(Bījaṁ teṣaṁ avaropayati)。
【三四】敎工巧(Śilpaṁ śikṣayati)。
【三五】爲娉室(Pratirūpair-dārair-niyojayati)。
【三六】付善友(Saṁmitreṣu-upanikṣipati)。
【三七】爲絕債(Anṛṇaṁ karoti)。
【三八】此の偈は菩薩の七似饒益の第三似善友饒益を說示す。
【三九】密語爲覆(Guhyaṁ gūhayanti)。
【四〇】惡行令斷(Kuceṣṭitaṁ vigarhanti)。
【四一】善行稱譽(Suceṣṭitaṁ praśaṁsanti)。
【四二】所造佐助(Karaṇīyeṣu sahāyaṁ gacchanti)。
【四三】遮習惡事(Vyasanasthānebhyaś cnivārayanti)。

利を起さん爲めに而も勤行するが故なり。禪とは、是れ學定心平等なり。菩薩定を修し、亦た諸善根を起すが爲めに、及び諸の利益を起すが爲めに而も精進するが故なり。無分別とは、是れ修慧心平等なり、初發心より乃至究竟まで所行の諸度皆な三輪清淨なるが故なり。是れを諸度心平等と名づく。

已に菩薩の平等心を說けり。次に菩薩の衆生を饒益する事を說かん。[一八]偈に曰く、

令器と及び令禁と、　耐惡と助善と、
入法と亦た斷疑との、　六行饒益の事なり。　（六）

釋して曰く、此の偈は諸の菩薩の六波羅蜜を以て、諸の衆生を饒益することを顯示す。令器とは、施を以て饒益す。彼をして修善の器を成ずるを得せしむるが故なり。令禁とは、戒を以て饒益す。其の堪能に隨つて持せしむるが故なり。耐惡とは、忍を以て饒益す。能く衆生の違逆事を受くるが故なり。助善とは、進を以て饒益す。衆生を佐助し、善業を營ましむるが故なり。入法とは、定を以て饒益す。邪を迴して正に入り、通力を能くするが故なり。斷疑とは、智を以て饒益す。若しは凡、若しは聖の所有(あらゆる)疑網皆な除くが故なり。

已に菩薩の六度饒益を說けり。次に菩薩の七似饒益を說かん。一に[一九]似母饒益、二に[二〇]似父饒益、三に[二一]似善友饒益、四に[二二]似同侶饒益、五に[二三]似健奴饒益、六に[二四]似闍黎饒益、七に[二五]似和上饒益なり。

問ふ、云何が似母饒益なる。[二六]偈に曰く、

等心と聖地に生ずると、　長善と諸惡を防ぐと、
教習するに多聞を以てするとの、　五業は慈母の如し。　（七）

釋して曰く、譬へば慈母の子に於て、五種の饒益の業を作すが如し。一に[二七]懷胎、二に[二八]出生、

[一八] 此の偈は菩薩は六度を以て社會を饒益するを說示す。
[一九] 似母饒益(Satvamātṛkalpā)。
[二〇] 似父饒益(Satvapitṛkalpā)。
[二一] 似善友饒益 (Satvamitrakalpa)。
[二二] 似同侶饒益(Satvabandhukalpā)。
[二三] 似健奴饒益(Satvadāsakalpa)。
[二四] 似闍梨饒益(Satvācāryakalpā)。
[二五] 似和上饒益(Satvopādhyāyakalpā)。
[二六] 此の偈は菩薩の七似饒益の第一似母饒益を說示す。
[二七] 懷胎(Garbhena dhārayati)。
[二八] 出生(Janayati)。

離欲と[一一]　得悲と[一二]、　勝修と及び[一三]　平等と[一四]、
此に依りて諸度を修す、　是の行は希有に非ず。　（三）

釋して曰く、若し菩薩已に離欲を得て而も布施を行ずるは希有と爲すに非ず、物に染せざれば、物は捨て易きが故なり。若し菩薩大悲を得るを以て而も持戒忍辱するは、希有と爲すに非ず。若し菩薩已に勝修を得、謂く第八地・無功用無分別に由るが故に、後三度を行ずるは希有と爲すに非ず。若し菩薩已に自他平等心を得て、一切諸度を行ずるも、亦た希有に非ず。利他の時は卽ち自利の如きに由り、退屈心あること無きが故なり。

已に菩薩の非希有を說けり。次に菩薩の平等心を說かん。[一五]偈に曰く、

菩薩は衆生を愛するに、　同じく[一六]五愛を生ぜず、
自身と眷屬と、　子と友と及び諸親となり。　（四）

釋して曰く、此の偈は菩薩の諸の衆生に於て、平等心を得るを顯示す。衆生に五種の愛心ありて平等を得ず。一に自身を愛す、二に眷屬を愛す、三に兒子を愛す、四に朋友を愛す、五に諸親を愛す。此の五愛に由りて平等を得ず。亦た畢竟に非ず、人の如く或時は亦た自害を行ず。菩薩の衆生を愛する心は則ち平等なり。不捨不退に由るが故なり。[一七]偈に曰く、

無遍と及び無犯と、　遍忍と善利を起すと、
禪と亦た無分別と、　六度心平等なり。　（五）

釋して曰く、此の偈は菩薩の六度を行じて、心平等を得ることを顯示す。無遍とは、是れ布施心平等なり。諸の求者に於て、愛憎に墮せざるが故なり。無犯とは、是れ持戒心平等なり。乃至微細の戒行も亦た缺かざるが故なり。遍忍とは、是れ忍辱心平等なり、普ねく勝劣の衆生に於て、皆な能く忍ぶが故なり。善利を起すとは、是れ精進心平等なり。一切の善根を起し、及び自他一切種の

【一一】離欲(Vairāgyaṁ)。
【一二】得悲(Karuṇāṁ)。
【一三】勝修(Bhāvanāṁ paramaṁ)。
【一四】平等(Samacittatvaṁ)。
【一五】此の偈は菩薩の衆生に於ける平等心を說示す。
【一六】五愛の對象。自身(Ātman)。眷屬(Dāra)。兒(Suta)。朋友(Mitra)。諸親(Bandhu)。
【一七】此の偈は菩薩の衆生を愛する心は平等なることを說示す。

卷の第十二

功德品第二十二[一]

釋して曰く、已に菩薩の諸覺分を說けり。次に菩薩の諸功德を說かん。[二]偈に曰く、

捨身と及び勝位と、　忍下と亦た長勤と、
不味と不分別との、　六行を[三]希有と說く。（一）

釋して曰く、此の偈は希有を行ずることを顯示す。[四]檀行者若し能く自の身命を施さば、則ち希有と爲す、餘は希有に非ず。戒行者若し能く勝位を棄捨し、道を慕つて出家せば則ち希有と爲す、餘は希有に非ず。忍行者若し能く身命を顧みず、下劣の衆生を忍ばゞ則ち希有と爲す、餘は希有に非ず。精進行者若し能く長時に正勤し、乃至生死の際を窮めて斷絕せざれば則ち希有と爲す、餘は希有に非ず。禪行者若し能く勝定樂に於て噉味せず、彼に受生せざれば則ち希有と爲す、餘は希有に非ず。慧行者若し能く無分別智を起さば則ち希有と爲す、餘は希有に非ず。若し聲聞の人は四諦を分別して而も厭離あらんも、菩薩は則ち爾らず。是れを六種行の希有と名づく。[五]偈に曰く、

[六]生れて如來の家に在ると、　[七]得記と幷に　[八]受職と、
及以び　[九]菩提を得るとの、　四果を希有と說く。（二）

釋して曰く、此の偈は果の希有を顯示す。菩薩は四種の果あり。一には初地に入る時、如來の家に生ず。是れ須陀洹果なり。二には第八地の中に於て而も授記を得、是れ斯陀含果なり。三には第十地の中に於て而も受職を得、是れ阿那含果なり。四には佛地、是れ阿羅漢果なり。前三は是れ學果、第四は是れ無學果なり。

已に菩薩の希有を說けり。次に菩薩の非希有を說かん。[一〇]偈に曰く、

【一】功德(Guṇa)。
【二】此の偈は菩薩の諸功德中、六種行の希有を說示す。
【三】希有(Āścarya)。
【四】檀行者とは布施を行ずる者の義である。檀とは檀那(施者)の略。
【五】此の偈は菩薩の四果の希有を說示す。
【六】生在如來家(Tathāgatakule Janma)。
【七】得記(Vyākaraṇa)。
【八】受職(Abhiṣeka)。
【九】得菩提(Prāptirbodhi)。
【一〇】此の偈は菩薩の四事の非希有を說示す。

是れ假人なるを知る。若し佛意は是れ假人と說かず、實人と說かば則ち無用なり、衆生の我見を起すに由るが故なり。[一〇二]偈に曰く、

我見を起さんが爲めならず、　見は已に起れるに由るが故に、
無始已に習するが故に、　無用應に解脫すべし。（三五）

釋して曰く、佛は應に衆生の我見を起す爲めに實の人ありと說くべからず、衆生の我見は先に已に起れるに由るが故なり。亦た衆生をして數我見を習せしむるが爲めに實の人ありと說かず、衆生の我見は先に已に習せるに由るが故なり。亦た我見の衆生をして解脫を得せしむるが爲めの故に實の人ありと說かず、一切の功用無き者は、皆な應に自然に解脫を得可きが故なり。是を以ての故に一切の未だ諦を見ざる者は、我見ありて而も解脫無し、苦の體を先時に見ず、後時に方に見るが如きには非ず。人は是の如きにはあらず、先に見ず後時方に見るに非ず。又苦の體を先時に見ず後に亦た見ざるが如し。即ち解脫無き人の體亦た爾なり。先時にも亦た見、後時にも亦た見るは則ち解脫無し。若し實に我あれば則ち決定して我所あり、此の二執に從つて即ち我愛及び餘の煩惱を起す。是の如くんば則ち解脫無し。是を以ての故に應に實の人あるを得んと欲すべからず、我見等の過皆な悉く起るを以ての故なり。

是の如く別して菩提分を說き已れり。次に前義を總結せん。[一〇三]偈に曰く、

慚羞等の功德を、　菩薩は常に具足す、
自利既に捨せず、　亦た他利をして成ぜしむ。（三六）

釋して曰く、此の義は前に顯はす所の略說の如し。覺分品究竟

【一〇二】此の偈も無我の敎理に對する難問を辯駁す。

【一〇三】此の偈は前來述べ來れる要點を總結す。

道理に依りて、實人は不可得なりと說く。

復た次に、[九五]偈に曰く、

諸法無我の印、　及び眞實空と說く、
有我に五過あり、　是の故に無我を知る。　(二二三)

釋して曰く、[九六]法印經中に、佛は一切法は無我なりと說きたまひ、[九七]眞實空經の中に、佛は有業有報作者得可からず、前陰を捨し後陰を起す、起滅は唯だ法なりと說きたまふ。[九八]增五經の中に若し我有りと執せば五の過失ありと說く。一には見處に墮し我見命者見を起す。二には外道に同ず。三には僻行邪行。四には空に於て不欲不信不住なり。五には聖法清淨を得ざるなり。是の如く阿含の說に依り實の人あるも亦た不可得なり。

問ふ、若し實の人無くんば云何が世尊は處々の經中に而も人有りと說いて、知者負擔者及び建立隨信行等の人を謂ふや。[九九]偈に曰く、

染淨の法に由依り、　位、斷を說くに異あり、
行異と相續異、　實無きに假に人を說く。　(二二四)

釋して曰く、染汚の法及び清淨の法に由依り、位差別及び斷差別あり、故に假人を建立するに差別あり。若し假人差別無ければ、則ち有行差別及び相續差別を說く可からず。[一〇〇]知經の中に說くが如く何等の諸法か染汚の法と謂ひ、何等の知の爲めにか清淨の法と謂ふや。[一〇一]負擔經中に說くが如く何をか負擔を染淨法と謂ひ、何をか棄擔を清淨法と謂ふや。若し行差別及び相續差別無ければ則ち說く可からず。此の二法を知者負擔者と爲す。菩提分法は多位差別せり。謂はく方便道見道修道究竟道なり。若し行及び相續差別無ければ則ち說く可からず。彼の菩提分法は隨信行等の人の差別あり、實の人無きに由り法差別を約して假說することを得可し。此の道理を以ての故に說く所但だ

【九五】此の偈は有我の見に五過あることを說示す。
【九六】法印經(Dharma-uddāna)。
【九七】眞實空經(Paramārtha-śūnyatā)。
【九八】增五經(Pāñcaka)。
【九九】此の偈は無我の敎理に對する難問に答ふ。
【一〇〇】知經(Prajñā-sūtra)。
【一〇一】負擔經(Bhārahāra-sūtra)。

問ふ、彼れ何の疑ふ處ぞ。[九二] 偈に曰く、

若し自然起を用とせば、　即ち三過有つて生ず。
若し人を以て緣と爲さば、　眼等は則ち用無し。（三〇）

釋して曰く、若し眼等の功用自然起と言はゞ、人は眼等に於て事業を作さず、則ち三種の過を生ずるあり。若し人を以て緣と爲し功用起るを得と言はゞ、眼等の諸根は則ち一向に功用あること無し。

問ふ、何者か是れ功用の自然起の三過なるや。[九三] 偈に曰く、

人は作者に非ざるが故に、　用は常起に非ざるが故に、
起は一時に非ざるが故に、　自起は則ち然らず。（三一）

釋して曰く、若し眼等の功用人の作を待たずして自然に起らば、則ち人は作者に非ず、云何が見者乃至識者と名づけん。此は是れ第一の過失なり。若し眼等の功用自然に起らば、則ち應に常に起るべし、應に起る時非常なるべからず。此は是れ第二の過失なり。若し眼等の功用常に起らば、則ち起は應に一時なるべし、云何が並起を得ざらん。此は是れ第三の過失なり。此の義に由るが故に若し自然に起ると言はゞ然らず。

問ふ、人を以て緣と爲す復た何の過かある。[九四] 偈に曰く、

人住なれば用先に無し、　人壞なれば則ち人斷ず、
更に第三體あつて、　緣を爲すこと此の義無し。（三二）

釋して曰く、若し人住と功用とを緣と爲すと言はゞ、人既に常に有り、何が故に功用先に無く後に有らんや。是の義爾らず。若し人壞を緣と爲すと言はゞ、人壞なれば則ち無常に墮す、是れ亦た然らず。若し更に第三の不住不壞の人ありて、緣と爲すと言はゞ、此の義あること無し。是の如き

【九二】此の偈は眼等の功用は自然起といふも不可、人を以て緣となして起るといふも不可なる所以を說示す。

【九三】此の偈は自然起の三過を說示す。

【九四】此の偈は人を以て緣と爲すの過誤を說破す。

好滅し及び惡生ず、生と云ふも復た理に非ず。（二一八）

釋して曰く、若し人、人は實ありと執せば、謂く[八一]見者・[八二]聞者・[八三]覺者・[八四]識者・[八五]食者・[八六]知者・[八七]說者なり。若し爾らば彼の眼等の識起るは、人を以て緣と爲し、人は是れ作者なりと說くと爲すか、人は是れ主なるを以て人は是れ作者なりと說くと爲すかなり。若し人を以て緣と爲さば二あるが故に識起る、人緣は則ち義に非ず、人は識の起る中に於て少力の見る可きあること無きに由るが故なり。若し人是れ主なるを以てならば、好滅し及び惡生ずるも、生と言ふも復た理に非ず。若し人を主と爲さば已に所愛の識を生ず、應に畢竟滅せざらしむべし、滅せしむべからず。未生の不愛識は應に畢竟生ぜざらしむべし、生ぜしむるべからず。是を以ての故に汝人は是れ見者乃至識者と執すべからず。

復た次に、[八八]偈に曰く、

汝が實人と執する中、何の業をか成立す可き、

實無きを强ひて實ならしむるは、佛の三菩提に違す。（二一九）

釋して曰く、若し人是れ實有ならば汝何の業を以てか成立を得可き。凡そ是れ實有は必ず事業あり、眼等の淨色の、見等の事業を以て成立することを得可きが如し。人は是等の事業無くして成立を得可し、是の故に人は實有に非ず。復た次に、汝が實人無き中に於て、强ひて實人あらしめんと欲するは、即ち如來の三種の菩提に違す。一には[八九]甚深菩提、二には[九〇]不共菩提、三には[九一]出世菩提なり。若し實人を見るは、則ち甚深菩提に非ず、則ち不共菩提に非ず、則ち世間不習菩提に非ず、是の故に此の執は是れ世間所取、是れ外道著處、是れ生死恒習なり。復た次に、若し人是れ見者乃至識者なれば眼等の諸根は有功用と爲すか無功用と爲すか。若し有功用とせば自然起と爲すか、人に由りて起ると爲すか。

【八一】見者（Draṣṭā）。
【八二】聞者（Śrotā°）
【八三】覺者（Moktā°）
【八四】識者（Vijñātī）。
【八五】食者（Bhoktā）。
【八六】知者（Jñātā）。
【八七】說者（Vaktā）。

【八八】此の偈も實我の見を破す。

【八九】甚深菩提（Gaṁbhīrā=bhisaṁbodha）。
【九〇】不共菩提（Asādhāraṇā=bhisaṁbodha）。
【九一】出世菩提（Lokottarāb=hisaṁbodha）。

若し一異を說かば、　　則ち二過有つて生ぜむ。　　（二五）

釋して曰く、假人と陰と一と說く可からず異と說く可からず。若し一異を說かば二過則ち生ず。二過とは、若し人と陰と一なりと說かば、陰卽ち是れ人、及び人是れ實なり。若し人と陰と異なりと說かば、陰は人に非ずと雖も人亦た是れ實なり。是を以ての故に人は是れ施設の有なり。一異と說く可からず。是の故に如來は止記論を成ず。[七八]偈に曰く、

若し人是れ實なりと執せば、　　一異應に說くべし、
一異說く可からず、　　此の說則ち理無し。　　（二六）

釋して曰く、若し人大師の敎に違ひ、實の人ありと執せば、是れ實に人と陰との一異則ち應に說く可し、而も執と陰との一異は不可說なり。此の說は則ち道理無し。若し汝、人は火と薪との異に非ず不異に非ざるが如く說く可からずと言はゞ然らず。[七九]偈に曰く、

異相と及び世見と、　　聖說亦た然らず、
火と薪とは不[可]說に非ず、　　二の可得あるが故なり。　　（二七）

釋して曰く、異相とは、火の謂く火大、薪の謂く餘大、各別相あり、是の故に火と薪とは異なり。世見とは、世人火を離れて薪を見る、謂く燒く可き木等なり。亦た薪を離れて火を見るなり。風の燄を吹き去るが如し、是の故に火と薪とは異なり。聖說亦た然らずとは、佛世尊は處として火の薪と一異を說く可からずと說きたまふ無し。是の故に汝火薪の一異を說く可からずと執するは此の說道理無し。若し汝薪を離るゝに非ずして火を見るに、風卽ち薪なりと言ふは然らず、二の可得あるが故なり。火と風と二相別なるに由るが故なり。

復た次に、[八〇]偈に曰く、

二あるが故に識起る、　　人緣は則ち義に非ず、

【七八】此の偈は我の見に執するを破す。

【七九】此の偈は異相及世見の方面より人我の見に執するを破す。

【八〇】此の偈も實我の見を破す。

故なりと。若し汝、諸行の刹那燈燄の如くならば、世人何が故に知らざるやと言はゞ、應に說くべし諸行は是れ顚倒物に由るが故なりと。相續刹那隨轉是れ知る可からず、而も實に別別に起る。世人謂く、是れ前物顚倒の知を生ずと。若し爾らざれば則ち無常倒無し、倒體若し無ければ染汚も亦た無し。復た何れの處より而も解脫あるや。是の難問に由りて則ち諸行の刹那成ず。

無常の義を成立し已れり。次に無我の義を成立せん。問ふ、人は有と說く可しと爲すか、無と說く可しと爲すか。[七六]偈に曰く、

人は假にして實有に非ず、　實と言ふも得可からず、
顚倒及び染汚、　染因成立するが故なり。　(二一四)

釋して曰く、人は假にして實有に非ずとは、說く可し人は是れ假名有にして實體あるに非ずと。若し此の如くんば一向執に墮せず、有無を離るゝが故なり。問ふ、人は是れ實有なるに云何が無と知るや。答へて言く、實は不可得なり、彼の人は色等の有の實に可得なるが如くならず、覺智の證に非ざるが故なり。問ふ、人覺智に非ざるを證せず、佛も又我は現在可得なりと說きたまふ。汝不可得なりと言ふは然らずと。答ふ、此に可得と言ふも實は可得に非ず、顚倒に由るが故なり。佛は無我と說き給ふに我と計す、是れを顚倒と名づく。問ふ、云何が是れ顚倒なりと知るや。答ふ、染汚に由るが故なり。身見は是れ染汚、所謂我我所の執なり。若し不顚倒ならば、則ち染汚に非ず。問ふ、云何が我執是れ染汚なりと知るや。答ふ、染汚の因なるが故なり。我執を因と爲して貪等の染汚起るを得るに由り、是の故に是れ染汚なしと知る。

問ふ、汝が許す所の如く色等の五陰に於て人は假有なりと說く。此の人と陰と一と爲すや異と爲すや。[七七]偈に曰く、

假人と實陰とは、　一異を說く可からず。

【七六】此の偈は人無我の義を說示す。

【七七】此の偈は人と五蘊との一異相關を說示す。

大所作、火水風に由るが故なり。四に[七五]時節所作、時改轉して異相現ずるに由るが故なり。若し刹那無ければ四變を得可からず、因無體なるが故なり。地の六因あるを、是れ刹那なりと知る如く、色香味觸の六因も亦た爾り。是の故に亦た是れ刹那なり。火に一因あり、所謂薪力なり。薪力は火を增ずが故なり。火の起るを得已れば火と共に起りて薪卽ち住なるを得ず。火薪を燒き已つて火亦た住まらず。若し火薪に由らずんば後時に薪無くとも火は應に久しく住すべし。同義に隨ふに由るが故に火聲後に在りと說く。聲に一因あり、所謂漸微なり。譬へば鐘聲の如く後時に漸微を得可し。若し刹那無ければ後時に小聲を得可き理無し。法入色に一因あり、謂く隨心起なり、受戒の時の如く心の下中上に隨つて起る、心は刹那に因るが故に彼の果亦た刹那なり。是の故に外法の刹那亦た成ず。復た次に、總じて難問に由るが故に我れ今汝に問はん、何が故に諸行の無常を得んと欲し、諸行の刹那滅を得んと欲せざる。若し汝一一の刹那滅は知る可からざると言はゞ然らず、譬へば燈燄の如く、不動位に於て彼の刹那亦た知る可からず、汝何が故に彼の體をして刹那無からしめんと欲せざる。若し汝燈燄の體は刹那あるも細なるが故に覺す可からずと言はゞ、諸行も亦た爾なり。何が故に刹那あらしめんと欲せざる。若し汝燈燄と諸行とは、相似せずと言ふは然らず。不相似に二種あり、一に自性不相似、二に時分不相似なり。若し此れ自性不相似なれば、此の譬は成ずるを得、自體を譬と爲すに非ざるが故なり。燈を以て燈に喩へ、牛を以て牛に喩ふが如きに非ざる譬は則ち成ぜず。若し時分不相似を取らば、此の譬も亦た成ず、燈燄及び諸行は皆な刹那相似するに由るが故なり。若し刹那に非ざる譬は則ち成ぜず。今更に汝に問はん、人の乘に乘りしが如き、其の乘住まる時其の人は去るや不や。答ふ、不なり。若し爾らば所依の根住まるに能依の識去るは亦た道理無し。若し汝、何が故に現に燈燄を見るに、念念滅する燈炷是の如く住まるやと言はゞ、應に說くべし汝が見は見に非ず、炷の相續して刹那刹那に壞あり起あるに、汝如實に知らざるに由るが

【七五】時節所作（Kālakṛta）。

此の因は第十三の無種起を成立す。若し刹那無く、而も死ある時、種無く起るとは然らず。先に種ありて起り、後に命終の時、方に種無く起るは、是れ亦た然らず。一一の刹那の因無體なるに由るが故なり。是の故に死心は刹那に成を得可からず。第九隨心とは、此の因は第十四の像起を成立す。心自在なるに由り、刹那刹那に彼の像起るを得。若し刹那無くして像の起るを得ること此の理無きが故なり。

問ふ、是の如く別して內の有爲法の刹那を成立し已れり。復た何の因ありてか、能く外法の四大、及び六種の造色是れ刹那なることを成立するや。[六六]偈に曰く、

[六七]滋に由り及び潤に由る。　[六八]性動、增、亦た減。　(一二二)
[六九]二起と四變と。　[七〇]薪力と、及び[七一]漸徴と。
亦た隨心起を說く。　及以び難問を成ず。
一切諸の外法は、　刹那の體に非ざること無し。　(一二三)

釋して曰く、此の二偈は十四因を以て外法の是れ刹那なることを成立せしむ。水に二因あり、一に滋、二に潤なり。若し刹那無ければ水は或時は滋長、或時は乾潤なることを顯現す可からず。若し人是の如きの問を作さば『既に刹那無し水何の因ありてか滋し、復た何の因ありてか潤る』と。彼れ則ち答ふる能はざらむ。今水に滋潤あるを見るが故に、刹那は是れ水の滋潤の因なることを知る。風に三因あり。一に性動、二に增盛、三に減息なり。若し風性住なれば則ち動時無し、行無體なるが故なり。亦た增盛無く、亦た減息無し、彼の住に由るが故なり。地に六因あり。謂く二起と四變となり。二起とは、水に由り、風に由り、地の起るを得可し。謂く劫生の時彼の地は是れ水風の果なり、故に知る地も亦た是れ刹那なりと。四變とは、四の所作に由りて地變を得可し。一に[七二]業力所作、衆生の業力に差別あるに由るが故なり。二に[七三]人功所作、掘鑿等に由るが故なり。三に[七四]諸

【六六】此の二偈は十四の因を擧げて外法の刹那なる理由を說示す。
【六七】滋と潤とは水の二因なることを說く。
【六八】性動、增盛、減息は風の三因なることを說く。
【六九】二起と四變とは地の六因なることを說く。
【七〇】薪力は火の一因なることを說く。
【七一】漸徴は摩の一因なることを說く。
【七二】業力所作 (Karmakṛta)。
【七三】人功所作 (Upakrama-kṛta)。
【七四】諸大所作 (Bhūtakṛta)。

だ無く、不住ならば則ちあり、心轉ずるに由るが故なり。無無明起も亦た爾なり、後時に變異無きが故なり。第六去過とは、此の因は第十一の異處起を成立す。若し諸行の餘處に住するを名づけて去なりと執するは然らず。我れ今汝に問はん、諸行の去を作すや、起を爲し已つて將に諸行餘處に往かんとするや、不起を爲して將に諸行餘處に往かんとするや。若し起り已つて將に往かんとすとは此處に起り已つて餘處に起らず、此は卽ち是れ住にして而も去と言ふは、是の義相違す。若し起らずして將に往かんとすとは、起らざれば則ち本來去無し、而も去と言ふは此の語義無し。又復た若し諸行去を作すに此處に住せば卽ち所作を作して諸行をして去らしむ、是れ亦た然らず。住なれば則ち餘處に到るを得ざるが故なり。若し諸行の餘處に到るに方に所作を作さば、是れ亦た然らず、離去あること無く、而も諸行の餘處に到ることあるが故なり。若しは此處に住し、若しは餘處に住す、諸行を離れて外に畢竟求作不可得なり。是の故に諸行相續して去あるに異らず、去を作すこと既に無體なれば則ち刹那の義成ず。若しは汝言はん、若し實に去なければ、云何が世人去を見るやと。應に說くべし無間相續に由り、假に說いて去と名づく、實は去體無しと。若し汝復た何の因ありてか、諸行相續し去るを得るやと言はゞ、應に說くべし、因緣は無量なり、心力自在あり、威儀等の去の如し。宿業自在あり、中陰中の去の如し。手力自在あり、放箭擲石の去の如し。依止自在あり乘車乘船の去の如し。使力自在あり風の物を吹いて去るが如し。自體自在あり風性の傍に去り火性の上に去り水性の下に去るが如し。術力自在あり、呪に依り藥に依り空に在りて去るが如し。磁石自在あり、能く鐵をして去らしむ。通力自在あり、乘通し去るが如し。是の如き等の無量の因緣あり、能く諸行をして相續せしめ、假に說いて去と名づくること、是の義應に知るべし。第七無住とは、此の因は第十二の種起を成立す。若し諸行住を得ば餘の時更に種子の起るあるは然らず。刹那刹那餘因無きが故なり。若し諸行住せずして後に種子起るは、是の義然る可し。第八有死とは、

亦た隨心の相あり、　　　　行者應當に知るべし、
此の如き九種の因は、　　　　前の十四起を成ずることを。（二一）

釋して曰く、此の二偈は九種の因を以て前の十四起を成立す。九種の因とは、一に續異、二に斷異、三に隨長、四に隨依、五に住過、六に去過、七に無住、八に有死、九に隨心なり。第一續異とは、此の因は第一の初起を成立す。若し最初起る時、因體無差別ならば、則ち後時に諸行の相續して起るも亦た無差別なり。因體無差別なるが故なり、因に差別あるに由るが故なり、後に餘の諸行の刹那を成ずるを得。第二斷異とは、此の因は第二の續起を成立す。若し一一の刹那に差別の因無ければ則ち後時の斷の差別も亦た不可得なり。斷は有差別なるに由るが故に諸行の刹那此の義成ずるを得。第三隨長とは、此の因は第三の長起を成立す。能く諸行を圓滿ならしむるが故に名づけて長と爲す。若し刹那無くして諸行の長養するは然らず、彼の住に由るが故なり。若し諸行住を得れば則ち漸く大圓滿なることを得ず、長養と謂ふに非ず。第四隨依とは、此の因は第四の依起を成立す。若し能依は住せず、所依は住を得と執せば然らず、人の馬に乘るに、人去りて馬去らずと、此の理あること無きが如し。是の如く識は根に依る。識は刹那あり、依は刹那無し[と謂ふの]然らざること亦た爾なり。第五の住過とは、此の因は六起を成立す。謂く變起・熟起・劣起・勝起・明起・無明起なり。變起・熟起を成立すとは、若し諸行初めに起らば卽ち住して不滅なりと執せば然らず、變起無きが故なり。謂く貪等の變色は永く不可得なり、初め無變なれば後も亦た爾るに由るが故なり。若し初め無變にして後諸熟位なることは亦た得可からず。先に有邊にして後に方に熟するに由るが故なり。劣起勝起を成立する刹那も亦た爾なり。若し諸行の住を得て、而も善惡の熏習次第に果を與ふるありと執せば然らず。諸行は不住にして、次第に相續して各果を與ふることを得、此義爾るべし。明起無明起を成立する刹那も亦た爾なり。若し諸行住することを得れば則ち明起も亦

一切下劣にして、福を作る衆生の得る所の外物は一切妙好なるが如し、故に諸行は皆な是れ心の果なるを知る。因は是れ刹那にして果は刹那に非ずとは此の道理無し、因自在に由るが故なり。是の如く總じて一切內外の諸行は、是れ刹那なることを成立し已れり。次に別して內法は是れ刹那なることを成立せん。[六四] 偈に曰く、

初起と及び續起と、　長起と及び依起と、
變起と熟起と、　劣起と亦た勝起と、　（一八）
明起と無明起と、　及以び異處起と、
種起と無種起と、　像起との十四起なり。　（一九）

釋して曰く、此の二偈は十四種の起を以て、內法の諸行は是れ刹那の義なることを成立せしむ。一には初起、謂く最初に自體生ず。二に續起、謂く初刹那を除き餘の刹那生ず。三には長起、謂く眠食梵行正受を長養するが故に生ず。四には依起、謂く眼等の諸識は眼等の根に依止して生ず。五には變起、謂く貪等の染汚、色等をして變生せしむ。六には熟起、謂く成胎嬰兒童子少壯中年老位等生ず。七には劣起、謂く諸の惡道生ず。八には勝起、謂く諸の善道生ず。九には明起、謂く欲界後二天及び色界無色界の一切の天生ず。十には無明起、謂く前の明處を除き所餘の諸處生ず。十一には異處起、謂く此處に死し彼處に生ず。十二には種起、謂く阿羅漢を除き、最後の五陰生ず。十三には無種起、謂く前に除く所の、最後の五陰生ず、後生の種子無きに由るが故なり。十四には像起、謂く解脫禪に入る者は、定自在力の故に諸行の像生ず。

問ふ、復た何の因を以てか此の十四種の起を成立するや。[六五] 偈に曰く、

續異と及び斷異と、　隨長と亦た隨依と、
住過と及び去過と、　無住と無無死と、　（二〇）

【六四】此の偈は十四の起を以て內法の刹那なる理由を說示す。

【六五】此の二偈は九種の因を以て前の十四種の起の成立する所以を說示す。

きたまふ有爲法有爲相は一向に決定して、謂ゆる無常なり。汝諸行起り已りて卽滅するに非ずと執するは、是の有爲法は則ち少時あつて無常に非ず、便ち非一向相に墮す。第七隨轉とは、若し汝、若し物は刹那刹那に新に生ぜば云何ぞ中に於て舊物の解を作すと言はゞ、應に說くべし相似隨轉に由りて是の知を作すを得と。譬へば燈燄の相似て起るが故に、舊燈の知を起すが如し、而も實に差別するは前の體無きが故なり。第八滅盡とは、若し汝云何が後佛の前に非ざるを知るを得んやと言はゞ、應に說くべし滅盡に由るが故にと。若し住滅せざれば則ち後の刹那と初めの刹那と住に差別無し、差別あるに由るが故に後物の前物に非ざるを知る。第九變異とは、若し汝物の初めて起るや、卽ち變異するに非ずと言はゞ然らず。內外の法體は後邊不可得の故なり。初めに起りて卽ち變じ漸く明了するに至るに由る。譬へば乳の酪位に至りて酪相方に現ずるが如し。而も變體微細にして了知す可きこと難し。相似隨轉に由り是れを前物と謂ふ。是を以ての故に刹那刹那滅の義成ずるを得。第十因とは、若し汝心は是れ刹那滅なることを許さば、彼の心の起因は謂く眼色等の諸行なり。彼の果刹那滅なるが故に因も亦た刹那なり、常因を以て無常の果を起す可からざるに由るが故なり、第十一果とは、彼の眼等の諸行は、亦た是れ心の果なり。是の故に刹那滅の義成ずるを得。無常の因を以て、常果を起す可からざるに由るが故なり。第十二執持とは、若し汝云何が眼等の諸行亦た是れ心の果なりと知るを得んやと言はゞ、應に說くべし心執持に由りて增長を得るが故にと。第十三增上とは、又佛の說きたまふ如く、心は世間を將つて去り、心は世間を牽いて來る、心自在なるに由り世間隨轉し識名色を緣ずと。此の說亦た爾るが故に諸行は是れ心の果なりと知る、第十四隨淨とは、淨は是れ禪定の人の心、彼の人の諸行は、淨心に隨つて轉ず。經の中に說くが如く、修禪の比丘は神通を具足し、心自在を得、若し木をして金たらしめんと欲せば、則ち意に隨ふを得、故に諸行には皆な是れ心の果なりと知る。第十五隨生とは、罪を作る衆生の得る所の外物は

者あらば然らず。若し汝物は暫時住ありて後時に先の者は滅し、後の者起るを相續と名づくと言はば、則ち相續無し、暫住の時は後起無きに由るが故なり。第二從因とは、凡そ物の前滅後起は必ず因緣を籍る、若し因緣を離るれば則ち體無きが故なり。若し汝、彼の物は初因能く後時に多果を生ずと言はゞ、然らず、初因の作業は即便ち滅盡す、豈に後の諸果を與ふる因を作すを得んや。若し汝初因起り已つて更に起らずと言はゞ、此の因を建立する復た何の用ふる所ぞ。若し汝起り已つて未だ滅せず、後時方に滅せんと言はゞ、彼れ後時に至つて誰れをか滅因と爲すや。第三相違とは、若し汝復た是の能起の因復た滅因を爲すと執せば、然らず、起滅相違同じく共に一因なりとは此の理無きが故なり。譬へば光暗並ばず冷熱俱ならざるが如し。此れ亦た是の如し。是の故に起因は即滅因に非ず。若し汝諸行起り已りて即滅するに非ずと執せば、則ち阿含及び道理に違す、阿含に違すとは、佛、諸の比丘に語げたまふ、諸行は幻の如し、是れ壞滅の法なり、是れ暫時の法なり、刹那も住せずと、道理に違すとは、諸の修行の人、諸行の生滅の中に於て、刹那刹那の滅を思惟するなり。若し是の如くならずんば、臨終の時に於て彼の滅相を見て、則ち厭惡離欲解脫無からん、是れ則ち餘の凡夫に同じ。第四不住とは、若し汝諸行起り已りて住有ることを得と言はゞ、行は自住にして他住に因ることを得と爲す。若し行自住ならば何が故に恒に住する能はざる。若し他住に因らば、彼の住體無し、何の所にか因る可き。二俱に爾らず。是の故に刹那刹那の滅の義成ずるを得。第五無體とは、若し汝住因無しと雖も壞因未だ至らず、是の故に住を得、壞因若し至りて後時に即滅するは、火の黑鐵を變ずる者の如きには非ずと執するも然らず。壞因は畢竟體あること無きが故なり。火の鐵を變ずる譬は我れ此の理無し。鐵と火と合するに、黑の相似滅し赤の相似起る。能く赤の相似を牽くは是の火の功能を起すも、實に火を以て黑鐵を變ずるには非ず。又水を煎るに極少位に至るが如し、後に水生ぜず、亦た火と水と合して方に無體なるに非ず。第六相定とは、佛の說

四には[四一]涅槃寂滅印なり。此の中應に知るべし無常印及び苦印は無願三昧の依止を成ぜんが爲め、無我印は空三昧の依止を成ぜんが爲め、寂滅印は無相三昧の依止を成ぜんが爲めなり。菩薩此の四印を說きて、三三昧の依止と爲すは、皆な諸の衆生を利益せんが爲めの故なり。

問ふ、何等か是れ無常の義、乃至何等か是れ寂滅の義なる。[四二]偈に曰く、

[四三]無義と[四四]分別の義と、　[四五]不眞分別の義と、
[四六]諸分別を息むるの義と、　是れを四印の義と名づく。（一五）

釋して曰く、此の中諸の菩薩は無義を以て是れ無常の義とす、分別の相は畢竟常無きに由るが故なり。分別の義を以て是れ無我の義とす、分別の相は唯だ分別あるに由る。此の二は是れ分別の相なり、無體なるに由るが故なり。不眞分別の義は是れ苦の義なり、三界の[四七]心心法は苦を體と爲すに由るが故なり。此は是れ依他の相なり。諸の分別を息むるの義は是れ寂滅の義、此は是れ眞實の相なり。復た次に應に知るべし依他相は復た剎那剎那に壞するを以て無常の義と爲すことを。

問ふ、云何が剎那の壞の義を成立するや。[四八]偈に曰く、

[四九]由起と及び[五〇]從因と、　[五一]相違と亦た[五二]不住と、
[五三]無體と[五四]相定と、　[五五]隨轉と并に[五六]滅盡と、（一六）
[五七]變異と[五八]因と亦た[五九]果と、　[六〇]執持と[六一]增上と、
[六二]隨淨と及び[六三]隨生と、　義を成ずるに十五あり。（一七）

釋して曰く、此の二偈は十五義を以て剎那剎那滅の義を成立す。一に由起、二に從因、三に相違、四に不住、五に無體、六に相定、七に隨轉、八に滅盡、九に變異、十に因、十一に果、十二に執持、十三に增上、十四に隨淨、十五に隨生なり。此の十五義に由りて剎那壞の義成立するを得可し。第一由起とは、諸行相續して流れ名起る。若し剎那剎那に滅の義無く、而も諸行相續して流れ名起る

【四一】涅槃寂靜(Śāntaṁ nirvāṇam)。
【四二】此の偈は四法印の意義を說示す。
【四三】無義(Asadārtha)。
【四四】分別義(Avikalpārtha)。
【四五】不眞分別義(Parikalpārtha)。
【四六】息諸分別義(Vikalpopaśamārtha)。
【四七】心心法とは心の主體たる心王と心の屬性たる心所とをいふ。
【四八】此の二偈は剎那壞の義を說明す。
【四九】由起(Ayoga)。
【五〇】從因(Hetu)。
【五一】相違(Virodha)。
【五二】不住(Asthi°)
【五三】無體(Abhāva)。
【五四】相定(Lakṣaṇaikānti)。
【五五】隨轉(Anuvṛtti)。
【五六】滅盡(Nirodha)。
【五七】變異(Upalabdha)。
【五八】因(Hetutva)。
【五九】果(Phalatva)。
【六〇】執持(Upāttatva)。
【六一】增上(Adhipatva)。
【六二】隨淨(Suddhasatva)。
【六三】隨生(Anuvṛtti)。

す。是れを三三昧と名づく。

問ふ、三三昧の名義云何。[三五]偈に曰く、

空定は無分別、　無願は厭背を生ず、
無相は恒に樂得、　彼の依は常に寂滅なり。　(一二)

釋して曰く、空定は無分別とは、無分別の義は是れ空三昧の義なり。人法二我分別せざるに由るが故なり。無願は厭背を生ずとは、厭背の義は是れ無願三昧の義なり、我執の所依を厭背するに由るが故なり。無相は恒に樂得、彼の依は常に寂滅なりとは、樂得の義は是れ無相三昧の義なり。彼の所依は畢竟寂滅するを樂得するに由るが故なり。

問ふ、三三昧は云何にして起るや。[三六]偈に曰く、

應に知るべく及び應に斷ずべく、　及以び應に作證すべし。
次第に空等の定を、　修習するに三種あり。　(一三)

釋して曰く、應に知るべし及び應に斷ずべし及以び應に作證すべしとは、應に知るべきは、人法二無我を謂ひ、應に斷ずべきは、二の我執の所依を謂ひ、應に證すべきは、彼の依は畢竟寂滅なることを謂ふ。次第に空等の定る修習するに三種ありとは、此の中人法二無我を知るが爲の故に空三昧を修し、彼の二執所依を斷ぜんが爲の故に無願三昧を修し、彼の依は畢竟寂滅なることを證せんが爲の故に無相三昧を修す。

已に菩薩の三三昧を修習することを說けり。次に菩薩の四法[三七]憂陀那を說かん。偈に曰く、

前の三三昧の如く、　四印を依止と爲す。
菩薩は是の如く說く、　群生を利せんが爲めの故なり。　(一四)

釋して曰く、四法印とは、一には[三八]一切行無常印、二には[三九]一切行苦印、三には[四〇]一切法無我印、

【三五】此の偈は菩薩の修する三三昧の名義を說明す。
【三六】此の偈は三三昧の起る所以を說示す。
【三七】憂陀那(Uddāna)。
【三八】一切行無常(Sarva-saṃskāra-anityaṁ)。
【三九】一切行苦(Sarva-saṁskāra-duḥkhaṁ)。
【四〇】一切法無我(Sarva-dharma-anātmana)。

受持す。此を以て業と爲す。

已に菩薩の陀羅尼を說けり。次に菩薩の諸願を起すことを說かん。[20] 偈に曰く、

思と欲とを共に體と爲し、　　智は獨り是れ彼の因なり。

諸地を卽ち地と爲し、　　二果を亦た果と爲す。　　（九）

應に知るべし差別の三は、　　種種と大と清淨なりと。

此の業に二種あり、　　自利と利他となり。　　（一〇）

釋して曰く、此の二偈は六義を以て諸願を分別す。一に[21] 自性、二に[22] 因、三に[23] 地、四に[24] 果、五に[25] 差別、六に[26] 業なり。彼の思欲相應を共に自性と爲し、智を以て因と爲し、諸地を地と爲し、二果を果と爲す、謂く卽果及び未來果なり。諸願を以て因と爲す、心遂ぐるを得るが故なり。心遂ぐとは、心の欲する所の如く皆な成就するが故なり。又願力を以て諸願の果に遊ぶ、謂ゆる身光明を放ち、口音響を發す、乃至廣く說く。差別に三種あり。一に種種、謂く信行地の願是の如く是の如く得んと欲するが故なり。二に廣大、謂く入地の菩薩十大願の故なり。三に清淨、謂く後後の諸地轉々して清淨、乃至佛地極めて清淨なるが故なり。是れを差別と名づく。彼の業は二種なり。一に[27] 自利成就、二に[28] 利他成就なり。是を名づけて業と爲す。

已に菩薩の諸願を說けり。次に菩薩の三三昧を修習することを說かん。[29] 偈に曰く、

應に知るべし二の無我と、　　及以び二の我依と、

二依常に寂滅なるとは、　　三定所行の境なることを。　　（一一）

釋して曰く、三三昧に三種の所行あり。一には[30] 人法二無我、是れ[31] 空三昧の所行なり。二には彼の二執所依の[32] 五取陰、是れ[33] 無願三昧の所行なり。三には此の依は畢竟寂滅なり。是れ[34] 無相三昧の所行なり。彼の三種の所取の體を三種の境界と爲し、彼の三種の能取の體を三種の三昧と爲

【二〇】此の偈は菩薩の諸願を起すことを說示す。
【二一】自性(Svabhāvata)。
【二二】因(Nidānata)。
【二三】地(Bhūmita)。
【二四】果(Kāryata)。
【二五】差別(Prabhedata)。
【二六】業(Karmata)。
【二七】自利成就 (Svārtha-prasādhana)。
【二八】利他成就(Parārtha-prasādhana)。
【二九】此の偈は菩薩の三三昧を修習することを說示す。
【三〇】人法二無我 (Pudgala-dharma-nairātmyaṁ)。
【三一】空三昧 (Śūnyata-samādhi)。
【三二】五取陰 (Pañcopadāna-skandhā)。
【三三】無願三昧(Apraṇihita-samādhi)。
【三四】無相三昧(Animitta-samādhi)。

釋して曰く、此の偈上半は巧の差別を明し、下半は巧の業を明す。差別とは、此の五方便は諸の菩薩に於て最上無等なり。何以故、諸地の中に於て二乘を共にせざるが故なり。是れを差別と名づく。業とは、能く自身他身の一切の利益を成爲す。是れを名づけて業と爲す。

已に菩薩の巧方便を說けり。次に菩薩の陀羅尼を說かん。[一五]偈に曰く、

[一六]業報と及び[一七]聞習と、　亦た定を以て因と爲すと、
此の三行に依止す、　持類に三種あり。　(六)

釋して曰く、陀羅尼の品類に三種あり。一に報得、先世の業力に由りて得るが故なり。二に習得、現在の聞持力に由りて得るが故なり。三に修得、定力に由依りて得るが故なり。

問ふ、云何が種の差別なる。[一八]偈に曰く、

二を小、一を大と爲す、　一大に復た三種あり、
地前と地上と、　不淨と及び淨との故に。　(七)

釋して曰く、二を小、一を大と爲すとは、彼の三種の品類の中に於て、報得及び習得は應に知るべし、此の二を小と爲すことを。修得は應に知るべし、此の一を大と爲すことを。一大に復た三種ありとは、彼の大種類の中に於て應に知るべし、復た三種ありと。謂く軟中上なり。未だ地に入らざる菩薩の所有を軟と爲し、不淨地に入る菩薩の所有を中と爲す、謂く初七地なり。淸淨地に入る菩薩の所有を上と爲す、謂く後三地なり。

問ふ、云何が業なる。[一九]偈に曰く、

應に知るべし諸の菩薩は、　恒に陀羅尼に依りて、
法を聞き及び法を持す、　作業皆な是の如し。　(八)

釋して曰く、此の中應に知るべし、諸の菩薩は陀羅尼に依止して、恒に妙法を開示し、及び常に

【一五】此の偈は菩薩の陀羅尼の品類を說示す。
【一六】業報(Vipāka)。
【一七】聞習(Śrutābhyāsa)。
【一八】此の偈は菩薩の陀羅尼の品類の種の差別を說示す。
【一九】此の偈は菩薩の業の何たるかを說示す。

問ふ、此の二行云何が種の差別なる、復た云何が業なる。[六]偈に曰く、

[七]能通と及び　[八]能出と、　[九]無相と亦た　[一〇]無爲と[は種の差別なり]。
[一一]淨土と及び　[一二]淨果と、　是の二は卽ち業と爲す。　(三)

釋して曰く、此の偈上半は種の差別を明し、下半は業を明す。此の二法信行地に在るを依止修と名づく。若し大地に入れば復た四種の差別あり。一に能通修、謂く初地に入る。二に能出修、謂く乃至六地に入る。彼の六地に於て有相方便を出すが故なり。三に無相修、謂く第七地に入る。四に無爲修、謂く後三地に入る、功用修を作すを有爲と名づけ、後三地は功用を作さざるが故に無爲と名づく。此の五は是れ種の差別なり。淨土とは、後三地に依りて淨土の行を修す。淨果とは、轉依行を作す。此の二淨は卽ち是れ彼の業なり。

已に菩薩の止觀を說けり。次に菩薩の五種の功方便を修習することを說かん。[一三]偈に曰く、

自熟と成生と、　速果と幷に作業と、
生死の道絕へざると、　此を說いて五巧と爲す。　(四)

釋して曰く、五種の巧方便とは、一に自ら佛法を熟し、無分別智を以て巧方便と爲す。二に衆生を成熟し、四攝法を以て巧方便と爲す。三に速に菩提を得、懺悔し隨喜し轉法輪を請ひ勝願を主起するを以て巧方便と爲す。四に作業を成就す、二門を以て巧方便と爲す。二門とは、謂く陀羅尼門及び三昧門なり、此の二門能く衆生を利益する業を成就するが故なり。五に生死の道絕へず、無住處涅槃を以て巧方便と爲す。

問ふ、云何が巧の差別なる。云何が巧の業なる。[一四]偈に曰く、

菩薩の巧は無等なり、　差別は諸地に依る。
能く自他の利を成ず、　是れを說いて名づけて業と爲す。　(五)

[六] 此の偈は菩薩の止觀の種の差別と業とを說示す。
[七] 能通(Prativedha)。
[八] 能出(Niryāṇa)。
[九] 無相(Animitta)。
[一〇] 無爲(Asaṃskṛta)。
[一一] 淨土(Pariśuddhi)。
[一二] 淨果(Viśuddhi)。
[一三] 此の偈は菩薩の五種の功德方便を說示す。
[一四] 此の偈は菩薩の巧方便の差別と業とを說示す。

巻の第十一

覺分品第二十一の二

釋して曰く、已に菩薩の道分を修習することを說けり。次に菩薩の止觀を修習することを說かん。偈に曰く、[一]

心を[二]正定に安んず、　此を即ち名づけて[三]止と爲す。
正住法の分別、　是を名づけて[四]觀相と爲す。　（一）

釋して曰く、心を正定に安んず、此を即ち名づけて止と爲すとは、謂く心は正定に依りて而も心を見ず、正定無きに非ず而も止を立つるが故に、是れを止相と名づく。正住法の分別、是れを名づけて觀相と爲すとは、謂く正住に依りて法體を分別す、是れを觀相と名づく。

問ふ、此の二行は云何が修する。[五]偈に曰く、

普ねく諸の功德を欲せば、　是の二悉く應に修すべし。
一分と非一分となり、　修に單雙あるが故に。　（二）

釋して曰く、普ねく諸の功德を欲せば是の二悉く應に修すべしとは、若し人遍ねく諸の功德を求めんと欲せば、是の人は止觀の二行に於て悉く應に修習すべし。經の中に說くが如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、若し所求あらば、云何が得せしめん。諸の比丘は欲を離れ惡不善の法を離る、乃至廣く說く。諸の比丘に二法あり、應に須らく修習すべしと、所謂止と觀となり。一分と非一分となりとは、一分は、謂く或は止、或は觀。非一分は、謂く止觀を合せるなり。問ふ、何が故ぞ。答ふ、修に單雙あるが故なり。單雙とは、一分なり。或は止修、或は觀修なり。雙修とは、非一分なり、謂く止觀の合修なり。

【一】此の偈は菩薩の止觀を說示す。
【二】正定(Samyaksamādhi)。
【三】止(Śamatha)。
【四】觀相 (Vipaśyanā-lakṣaṇa)。
【五】此の偈は止觀の修習と諸功德の獲得との關係を說示す。

薩の修行は惡を棄て善を取るは無分別智に隨つて住する所無功用なるが故なり。七覺分と七寶との相似を成就する其の義此の如し。偈に曰く、

依止と及び自性と、　出離と功德と、
第五は不染と說く、　此の分に三種あり。　（四九）

釋して曰く、七覺分は其の次第の如く、念は是れ[二九]依止分、一切の菩提分は此に依りて行するが故なり。擇は是れ[三〇]自性分、一切の菩提は此を以て自體と爲すが故なり。進は是れ[三一]出離分、此を以て能く菩薩をして究竟に至らしむるが故なり。喜は是れ[三二]功德分、此を以て能く心を樂滿せしむるが故なり。猗定捨の三は是れ[三三]不染分、猗は是れ不染の因なるが故なり。定は是れ不染の依止なるが故なり。捨は是れ不染の自性なるが故なり。

已に菩薩の七覺分を修習することを說けり。次に菩薩の八正道分を修習することを說かん。[三四]偈に曰く、

一轉は前覺の如し、　立分の二亦た然り、
次の三は三業淨なり。　後の三は三障を斷ず。　（五〇）

釋して曰く、一轉は前覺の如しとは、第一分なり。前位の中の如實の覺の如く後時に隨轉するを說いて正見と名づく。立分の二亦た然りとは、第二分なり。前位の中自所立分の如く而も解し、佛經中に入り佛所立の如く、他の爲に分別するを正思惟と名づく。次の三は三業淨なりとは、三は謂く正語・正業・正命なり。三業は謂く語業・身業・俱業なり。其の次第の如く、次の三正を以て此の三業を攝するが故なり。後の三は三障を斷方とは、後三は謂く正勤・正念・正定なり。三障は謂く智障・定障・自在障なり。其の次第の如く、後の三正を以て此の三障を治斷す。正勤を修して長時に退屈せざるに由るが故に智障斷ず。正念を修して掉沒無體なるに由るが故に定障斷ず。正定を修して勝德成就するに由るが故に自在障斷ず。是の如く八正道分を建立すること應に知るべし。

【二九】依止分(Niśrayāṅga)。
【三〇】自性分(Svabhavāṅga)。
【三一】出離分(Niryāṇāṅga)。
【三二】功德分(Anuśaṁsāṅga)。
【三三】不染分(Akleśāṅga)。
【三四】此の偈は菩薩の八正道を修習することを說示す。

諸法及び衆生、　　此に於て平等を得。　（四五）

釋して曰く、諸の菩薩は初地に入る時、彼の法を覺するが故に覺分を建立す。問ふ、云何が覺なる。答ふ、一切法及び自他身に於て平等の解を得。此の如きを覺と名づく。其の次第の如く、法無我及び人無我の故なり。[二五]偈に曰く、

譬へば輪王の行くに、　[二六]七寶を先導と爲すが如く、
菩薩の正覺に趣くや、　七分常に圓滿なり。　（四六）

釋して曰く、此は菩薩の[二七]七覺分と轉輪聖王の七寶と相似することを明す。
問ふ、何の分か何の寶と相似なる。[二八]偈に曰く、

念は諸境を伏し、　擇法は分別を破す。
進速に餘覺無く、　明增せば喜身に遍し。　（四七）
障盡猗して樂み、　諸作は定より生ず。
時に住せんと欲する所に隨ひ、　棄取皆な捨に由る。　（四八）

釋して曰く、第一念覺分と輪寶と相似す。未だ降らざる國土を輪は能く降すが故なり。未だ伏せざる境界を念は能く伏するが故なり。第二擇法覺分と象寶と相似す。諸國の勍敵を象能く摧くが故なり。分別勝怨を擇能く破するが故なり。第三精進覺分と馬寶と相似す。大地闊邊も馬速に窮むるが故なり。眞如極際も進速に覺するが故なり。第四喜覺分と珠寶と相似す。珠光幽を燭らし王の歡極まるが故なり。法明暗を破し心に喜滿つるが故なり。第五猗覺分と女寶と相似す。王は快樂なる女の摩觸を受くるが故なり。智は障惱を脱し惡を猗息するが故なり。第六定覺分と藏臣寶と相似す。王の所須あるは臣より出づるが故なり。智の所用あるは定より生ずるが故なり。第七捨覺分と兵寶と相似す。主兵の衆を閲し、弱を棄て强を取るや轉輪聖王の所住に隨つて疲倦せざるが故なり。菩

【二五】此の偈は菩薩の七覺支と轉輪聖王の七寶との相似を說示す。
【二六】七寶とは金輪と白象と紺馬と神珠と玉女と居士と主兵とである。
【二七】七覺分とは、（一）擇法覺支、智慧を以て法の眞僞を批判す。（二）精進覺支、勇猛心を振り興して、邪行を離れ、正法を行す。（三）喜覺支、善法を得て心に歡喜を生ず。（四）輕安覺支、身心の麁重を斷除して、身心をして輕利安適ならしむ。（五）念覺支、常に定慧を明記して忘れず、之をして均等ならしむ。（六）定覺支、精神を統一して散亂せしめざること。（七）行捨覺支、諸の妄謬を捨て一切の法を捨て、虛心坦懷更に追憶せざること。
【二八】以下二偈は七覺支と七寶との關係を說示す。

彼所に往き、天耳通は其の音を聞きて而も說法を爲す。他心通は障の有無を知り之を除斷するが爲めなり。宿住通は過去の行を知り、力を借りて知らしめ、其をして信を生ぜしむ。天眼通は此に死し彼に生ずるを知り、其をして厭を生ぜしむ。漏盡通は之が爲に說法し、解脫を得せしむるなり。遊戲成就とは、此に多種あり、謂く變化等の諸定なり。遊願成就とは、謂く願力に入りて諸願果に遊ぶ、謂く放光發聲等、此は數ふ可らず、廣く十地經に說くが如し。自在成就とは、謂く十自在なり、亦た十地經に說くが如し。得法成就とは、謂く得力無所畏及び不共法なり。

已に菩薩の四神足を修習することを說けり。次に菩薩の五根を修習するを說かん。[103]偈に曰く、

[104]覺・[105]行・[106]聞・[107]止・[108]觀は、　信等の根の所緣なり。
增上は是れ根の義、　利益を成就するが故に。　(四三)

釋して曰く、[109]信根は菩提を以て所緣と爲し、[110]進根は菩薩行を以て所緣と爲し、[111]念根は大乘法を聞くを以て所緣と爲し、[112]定根は奢摩他を以て所緣と爲し、[113]慧根は如實智を以て所緣と爲す。問ふ、云何が是れ根の義なる。答ふ、此の信等は所緣に於て增上するが故に名づけて根と爲す。能く利益を成就するが故なり。

已に菩薩の五根を修習することを說けり。次に菩薩の五力を修習することを說かん。[114]偈に曰く、

應に知るべし信等の根は、　初地に垂入し、
前の五根の障の如く、　能く羸つが故に力と名づく。　(四四)

釋して曰く、此の中五根は初地に臨入する時、能く不信懈怠失念亂心無知羸劣ならしむるが故に名づけて力と爲す。

已に菩薩の五力を修習することを說けり。次に菩薩の七覺分を修習することを說かん。偈に曰く、

菩薩は初地に入り、　覺分を建立す、

【一〇三】此の偈は菩薩の五根修習に就いて說明す。
【一〇四】覺(Bodhi)。
【一〇五】行(Calyā)。
【一〇六】聞(Śrutaṁ)。
【一〇七】止(Śamatha)。
【一〇八】觀(Vipaśyanā)。
【一〇九】信根(Śraddhendriya)。
【一一〇】進根(Viryendriya)。
【一一一】念根(Smṛtindriya)。
【一一二】定根(Samādhindriya)。
【一一三】慧根(Prajñendriya)。
【一一四】此の偈は菩薩の五力修習に就いて說示す。

一に欲、二に精進、　三に心、四に思惟なり。　（四〇）

釋して曰く、應に知るべし禪波羅蜜の所依止に此の四足の差別あることを。

問ふ、云何が方便なる。[八八]偈に曰く、

起作と及び隨攝と、　繫縛と幷に對治と[を以て]、

隨次に八斷を行じ、　三一二二を成ず。　（四一）

釋して曰く、起作と及び隨攝と、繫縛と幷に對治とは、方便に亦た四種あり。一に[八九]起作方便、二に[九〇]隨攝方便、三に[九一]繫縛方便、四に[九二]對治方便なり。問ふ、此の四種の方便は各何等の行を以て成ずるや。答ふ、隨次に八斷を行じ、三一二二を成ず。八斷行とは、一に信、二に欲、三に勤、四に猗、五に念、六に智、七に思、八に捨なり。此の中其の次第に隨つて、信欲勤の三行を以て起作方便を成立す。信に由りて欲を起し、欲に由りて勤を起す、是の如く次第するが故なり。[九三]猗の一行を以て隨攝方便を成立す、猗息み已つて定生ずるを得るに由るが故なり。念智の二行を以て繫縛方便を成立す、正念に由るが故に心定中に於て所緣を離れず、正智に由るが故に心所緣の覺を離れ已つて隨攝す。[九四]思と[九五]捨との二行を以て對治方便を成立す、思に由るが故に、沒纒を對治し、捨に由るが故に掉纒を對治す。此の二は是れ諸の煩惱を對治するが故なり。

問ふ、云何が成就す。[九六]偈に曰く、

[九七]能見と及び[九八]能授と、　[九九]遊戲と亦た[一〇〇]遊願と、

[一〇一]自在と幷に[一〇二]得法と、　此の六種を成就す。　（四二）

釋して曰く、六成就とは、一に能見成就、二に能授成就、三に遊戲成就、四に遊願成就、五に自在成就、六に得法成就なり。能見成就とは、謂く五眼。肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼、此を成就するが故なり。能授成就とは、謂く六通、此に依つて能く教授するが故なり。其の次第の如く、身通は

【八八】此の偈は菩薩の四神足の方便を說示す。
【八九】起作(Vyāvasāyika)。
【九〇】隨攝(Anugrahāka)。
【九一】繫縛(Naibandhika)。
【九二】對治(Pratipakṣika)。
【九三】猗(Praśrabdhi)。
【九四】思(Cetanā)。
【九五】捨(Upekṣā)。
【九六】此の偈は菩薩の四神足に六の成就あることを說示す。
【九七】能見(Darśana)。
【九八】能授(Avadāda)。
【九九】遊戲(Sthitivikrīḍita)。
【一〇〇】遊願(Praṇidhirya)。
【一〇一】自在(Vaśitā)。
【一〇二】得法(Dharmaprāpti)。

乘の作意を離る。四に[七八]入地行、謂く初六地に入る。五に[七九]住寂行、謂く第七地に入る。六に[八〇]得記行、謂く第八地に入る。七に[八一]成生行、謂く第九地に入る。八に[八二]受職行、謂く第十地に入る。九に[八三]淨土行、謂く第八第九第十の三地なり。十に[八四]圓滿行、謂く佛地に入る。菩薩は此の十行の障を對治せんが爲めの故に、四正勤を修習す、是れを廣說差別と爲す。

問ふ、此の十の差別の修の義云何。[八五]偈に曰く、

　欲に依止するが故に、　　勤を起し精進を起す、
　攝心と正持と、　　十治の修是の如し。　（三八）

釋して曰く、修の義とは、謂く欲に依りて勤を起し、勤に依りて精進を起し、心を攝して正持す、是を修の義と名づく。此の中平等修あり、有相修あり、精進修あり。平等修とは、正勤能く止觀をして平等ならしむるに由るが故なり。有相修とは、止擧捨の三相を合修するに由るが故なり。精進修とは、止觀の中沒掉の二障を斷じ、精進を起すが爲めの故なり。問ふ、云何が精進を起す。答ふ、謂く攝心と及び正持となり。攝心とは、謂く奢摩他、正持とは、若し心平等なれば則ち是の如く住す。是の如き正持は此の三修を以て前の十行を修す、是を修正勤と名づく。

已に菩薩の四正勤を修習することを說けり。次に菩薩の四神足を修習することを說かん。[八六]偈に曰く、

　四神足を分別するに、　　略して三事を以て解す、
　應に知るべし依止と及び方便と、　　亦た成就となることを。　（三九）

釋して曰く、此の中略して三事を以て四神足を分別す。一に依止、二に方便、三に成就なり。

問ふ、云何が依止する。[八七]偈に曰く、

　禪定の依止する所の、　　差別に四足なり。

【七八】入地(Bhūmipraveśa)。
【七九】住寂(Animitta-vihāra)。
【八〇】得記(Vyākaraṇalābha)。
【八一】成生(Sattvānāṁ paripācana)。
【八二】受職(Abhiṣeka)。
【八三】淨土(Kṣetraviśuddhyarthaṁ)。
【八四】圓滿(Niṣṭhāgamana)。
【八五】此の偈は前偈に於ける十種の差別の修の義にも十種あることを說示す。
【八六】此の偈は菩薩の四神足を分別するに三事を以てすることを說示す。
【八七】此の偈は菩薩の四神足の依止を說示す。

體の爲めの故なり。對治勝修とは、謂く能く不淨苦無常無我の法想の四倒を對治す、身等の法無我に入るに由るが故なり。入諦勝修とは、謂く其の次第の如く、次第に苦集滅道諦に入るが故なり。自入他入、中邊分別論に說くが如し。緣緣勝修とは、謂く一切衆生の身等を緣じて境界と爲すが故なり。作意勝修とは、謂く身等不可得の故なり。至得勝修とは、謂く身等不離不合の故なり。隨順勝修とは、謂く諸障對治を得、能く彼の障を對治するが故なり。隨轉勝修とは、謂く凡夫二乘の修する所の念處亦た攝して隨轉し敎授を爲すが故なり。覺境勝修とは、謂く身は幻の如く、色相似なるを知るが故なり。受は夢の如く皆な邪覺なるを知るが故なり。心は空の如く自性淨なるを知るが故なり。法は客の如くなるを知る、客とは謂く垢に纒はるゝなり。譬へば虛空の煙雲塵霧あるが如きが故なり。受生勝修とは、謂く故意に受生し、轉輪王等の最勝を成就し、身受心法も亦た不染なるが故なり。極限勝修とは、謂く下品の念處を修するも亦た餘人の最上品を修するに過ぐ。自性利なるが故なり。最上勝修とは、謂く能く功用を作さず、總別に四念處を修習するが故なり。長時勝修とは、謂く修は無餘涅槃に至るも亦た無盡なるが故なり。後證勝修とは、謂く十地及び佛地の中皆な得可きが故なり。

已に菩薩の四念處を修習することを說けり。次に菩薩の四正勤を修習することを說かん。[七四]偈に曰く、

三捨と及び入地と、　住寂と得記と、
成生と亦た受職と、　淨土と并に圓滿と。　(三七)

釋して曰く、菩薩は四念處の障を對治せんが爲めの故に、四正勤を修習す、若し廣く此の對治を說かば則ち十種の差別あり。十行の障を對治するに由るが故なり。十行とは、一に[七五]捨著行、謂く受有中の勝報にして染著せられず。二に[七六]捨蓋行、謂く一切の障蓋を離る。三に[七七]捨下行、謂く二

【七四】此の偈は菩薩の四正勤に十種の差別あることを說示す。
【七五】捨著(Asaṃkliṣṭatyāga?)。
【七六】捨蓋(Nivāraṇatyāga)。
【七七】捨下(Śrāvakapratyekabuddha-manaskāra-tyāga)。

釋して曰く、此の偈上半は名を釋し、下半は業を顯はす。名とは、[五七]三婆羅を名づけて聚と爲す。三とは、正修の義、婆羅とは數修の義なり。正修及び數修の善法に由りて則ち資長を得、資長に由るが故に聚と名づく。業とは、此の聚に由るが故に、則ち能く自他の二利を成就す、是を名づけて業と爲す。

問ふ、二聚の種の差別云何。[五八]偈に曰く、

地に入り無相に入り、　及び無功用に入り、
受職幷に究竟、　二聚次第に因[を爲す]。（三四）

釋して曰く、此の中種の差別とは、彼の信行地の聚は入地の因を爲し、六地の中の聚は入無相の因を爲す。無相とは、第七地所攝の聚なり。彼相起らざるが故なり。第七地の聚は、入無功用の因を爲し、第八第九地の聚は入受職の因を爲し、第十地の聚は入究竟の因を爲す。究竟とは、佛地所攝の故なり。

已に菩薩の二聚の功德を說けり。次に菩薩の四念處を修習することを說かん。[五九]偈に曰く、

依止と及び對治と、　入諦と緣緣と、
作意と幷に至得と、　隨順と亦た隨轉と、（三五）
覺境と及び受生と、　限極と將た最上と、
長時と後證と、　勝修十四種[あり]。（三六）

釋して曰く、此の二偈は菩薩の四念處に十四種の勝修あることを明す。一に[六〇]依止勝修、二に[六一]對治勝修、三に[六二]入諦勝修、四に[六三]緣緣勝修、五に[六四]作意勝修、六に[六五]至得勝修、七に[六六]隨順勝修、八に[六七]隨轉勝修、九に[六八]覺境勝修、十に[六九]受生勝修、十一に[七〇]限極勝修、十二に[七一]最上勝修、十三に[七二]長時勝修、十四に[七三]後證勝修なり。依止勝修とは、謂く大乘經に依りて聞思修の慧を起す、自

[五七] 三婆羅(Sambhāra)。
[五八] 此の偈は二聚の種の差別を說示す。
[五九] 此の二偈は菩薩の四念處に十四種の勝修あることを說示す。
[六〇] 依止(Niśrayā)。
[六一] 對治(Pratipakṣa)。
[六二] 入諦(Avatāra)。
[六三] 緣々(Ālambana)。
[六四] 作意(Manaskāra)。
[六五] 至得(Prāptita)。
[六六] 隨順(Ānukūlyata)。
[六七] 隨轉(Anuvṛtti)。
[六八] 覺境(Parijñatā)。
[六九] 受生(Utpattita)。
[七〇] 限極(Mātrata)。
[七一] 最上(Paramatva)。
[七二] 長時(Bhāvanāta)。
[七三] 後證(Samudāgamata)。

を以て內諸法の平等如辯を得ることを證し、後に後得世智を以て外諸法の法門差別を覺るに由る。此の道理に由るが故に無礙辯と名づく。業とは、復た此の辯に由りて能く一切衆生の一切の疑網を斷ず。此を名づけて業と爲す。

已に菩薩の四無礙辯を說けり。次に菩薩の二聚功德を說かん。[五四]偈に曰く、

福智を二聚と爲す、　勝報と亦た不汚と、
一切諸の菩薩の、　勝相は皆な此の如し。（三一）

釋して曰く、福智を二聚と爲すとは、二聚とは、謂く福聚及び智聚なり。勝報亦た不汚とは、諸の菩薩は福聚に由るが故に、生死の中に於て勝報成就の因を作し、智聚に由るが故に、彼の勝報に於て不染汚の因を作す、是の故に菩薩の勝相は無等なり。

問ふ、二聚の六度を攝すること云何。[五五]偈に曰く、

初の二は福の體を爲し、　第六は卽ち是れ智、
餘の三は二聚の因、　五亦た智聚を成ず。（三二）

釋して曰く、初二は福の體を爲すとは、應に知るべし、施戒の二波羅蜜を福聚の體と爲すことを、第六は卽ち是れ智とは、應に知るべし、般若波羅蜜は卽ち智聚の體を爲すことを。餘の三は二聚の因とは、應に知るべし。忍辱、精進、禪定の三波羅蜜は、通じて二種の因と爲ることを。俱作に由るが故なり。五亦た智聚を成ずとは、復た般若能く廻向するに由るが故に、一切の諸波羅蜜皆な智聚を成ず。

問ふ、云何が聚と名づけ、云何が聚業なる。[五六]偈に曰く、

正修と及び數修と、　資善とを名づけて聚と爲す、
自利と他利と、　成就とは則ち業と名づく。（三三）

【五四】此の偈は菩薩の二聚功德を說示す。

【五五】此の偈は二聚と六度との關係を說く。

【五六】此の偈は聚と名け業と稱する理由を說示す。

此は卽ち是れ菩薩の、　四種の無礙解なり。　（二一七）

釋して曰く、第一は謂く門智を知る、能く義の中の所有名門差別を知るが故なり。第二は謂く相知を知る、能く此の義此の名に屬することを知るが故なり。第三は謂く言智を知る、能く異土の言音を知るが故なり。第四は智智を知る、能く自ら能說の法を知るが故なり。此の四種を知る是れ無礙解なり。[五一]偈に曰く、

能說と及び所說と、　說具とを合して三事「と爲す」、
四二復た二種、　次第に三事の因なり。　（二一八）

釋して曰く、能說と所說と說具との此の三事に各因緣あり。能說に四因緣あり。一に敎授智、二に成熟智、三に聚滿智、四に令覺智なり。所說に二の因緣あり。一に法、二に義なり、四智は此の二に於て有用なるが故なり。說具に二因緣あり。一に言、二に智なり、此の二は成說を得るに由るが故なり。[五二]偈に曰く、

擧法と及び釋法と、　令解と避難との、
四無礙を建立す、　是の義を以て應に知るべし。　（二一九）

釋して曰く、擧法とは、門を以ての故なり。釋法とは、相を以ての故なり。令解とは、言を以ての故なり。避難とは、智を以ての故なり。應に知るべし。此の中、所說の法及び義を以て、說具の言及び智を以て、次第に四無礙解を建立することを。

問ふ、云何が無礙解と名づけ、無礙解に何の業かある。[五三]偈に曰く、

內證と及び外覺との、　故に無礙解と稱す、
能く一切の疑を斷ず、　此は卽ち是れ彼の業なり。　（二二〇）

釋して曰く、此の偈の上半は名を立て、下半は業を顯はす。名とは、諸の菩薩は初めに出世間智

【五一】此の偈は菩薩の說法構成の要素たる能說と所說と說具とに四・二・二の因緣あることを說示す。

【五二】此の偈は菩薩の四無礙解構成の要素を說示す。

【五三】此の偈は四無礙解と稱する所以と四無礙解の業とを說示す。

卽ち是れ世間業を知ればなり。

已に菩薩の知世間を說けり。次に菩薩の修習四量を說かん。[四一]偈に曰く、

能詮と及び義意と、　了義と亦た無言と、

當に知るべし此の四種は、　是れを四量相と說くことを。　（二一四）

釋して曰く、能詮とは、如來所說の[四二]十二部經なり。此れ法を量と爲し、人を量と爲すに非ず。義意とは、謂く文中の所以なり、此れ義を量と爲す、語を量と爲すに非ず。了義とは、謂く世間の可信及び佛の印可する所なり。是れ了義を量と爲す、不了義を量と爲すに非ず。無言とは、謂く[四三]出世の證智なり、此れ智を量と爲す、識を量と爲すに非ず。

問ふ、世尊は何の故に此の四量を說きたまふや。[四四]偈に曰く、

謗法と及び非義と、　邪思と可言と、

此の四事を遮するが故に、　次第に四量を說く。　（五二一）

釋して曰く、能詮の法を說いて量と爲し、謗說人說を遮す。義意を量と爲して非義文句說を遮す。了義を量と爲して邪思倒解說を遮す。智を量と爲して可言智を遮す。

問ふ、此の四量に依れば何の功德かある。[四五]偈に曰く、

信心と及び內思と、　正聞と證智とは、

菩薩の不可壞なり、　量に依る功德爾り。　（二一六）

釋して曰く、第一量に依れば、則ち信心壞す可らず。第二量に依れば則ち正思壞す可らず。第三量に依れば則ち正聞壞す可からず。第四量に依れば則ち世智壞す可からず。

已に菩薩の修習四量を說けり。次に菩薩の四無礙解を說かん。[四六]偈に曰く、

[四七]門と[四八]相と[四九]言と[五〇]智とに於て、　通達して比倫無し、

【四一】此の偈は菩薩の修習する四量を說示す。

【四二】十二部經とは一切經を十二種類に分けた名である。（一）修多羅（Sūtra）譯して契經といふ。（二）祇夜（Geya）譯して應頌又は重頌といふ。（三）伽陀（Gāthā）譯して諷誦又は孤起頌といふ。（四）尼陀那（Nidāna）譯して因緣といふ。（五）伊帝目多（Itivṛtaka）譯して本事といふ。（六）闍多伽（Jātaka）譯して本生といふ。（七）阿浮達摩（Abhidharma）譯して未曾有といふ。（八）阿波陀那（Avadāna）譯して譬喩といふ。（九）優婆提舍（Upadeśa）譯して論議といふ。（十）優陀那（Udāna）譯して自說といふ。（十一）毘佛略（Vaipulya）譯して方廣といふ。（十二）和伽羅（Vyākaraṇa）譯して授記といふ。

【四三】出世とは涅槃の世界をいふ。

【四四】此の偈は佛が此の四量を說き給ふ理由を說示す。

【四五】此の偈は前に說ける四量の功德を讚す。

【四六】此の偈は菩薩の四無礙解を說示す。

【四七】門（Paryāya）。

【四八】相（Lakṣaṇa）。

【四九】言（Vakya）。

【五〇】智（Jñāna）。

し、彼に隨つて化攝するが故なり。陀羅尼門を以て佛法を成熟し、所得の法に隨つて皆な能持するが故なり。

已に菩薩の知法を說けり。次に菩薩の知世間を說かん。[三七] 偈に曰く、

身知亦た口知、　及以び[三八] 實諦知[を以て]、
菩薩は世間を知ること、　最勝にして餘に等しきもの無し。　(一一)

釋して曰く、菩薩に三種の知世間あり。一に身知世間、二に口知世間、三に諦知世間なり。

問ふ、云何が身知、云何が口知なる。[三九] 偈に曰く、

身知は則ち舒顏、　口知は則ち先語、
器を成ぜしめんが爲めの故に、　正法に隨つて修行す。　(一二)

釋して曰く、舒顏とは、謂く凞怡歡笑、此は是れ身知の世間なり。先語とは、謂く慰問讃美、此は是れ口知の世間なり。問ふ、此の知は何の所爲ぞ。答ふ、器を成ぜしめんが爲めの故なり。問ふ、何の器をか成ぜしむる。答ふ、正法に隨つて修行して此の器を成ぜしむ。

問ふ、云何が諦知の世間なる。[四〇] 偈に曰く、

二知は世の生ずるを知り、　二知は世の滅するを知る。
息の爲めに復た得の爲めに、　諦知を勤めて修行す。　(一三)

釋して曰く、二知は世の生ずるを知るとは、苦集の二諦を知れば、則ち世間の常に生ずべきを知る、生及び生方便に由るが故なり。二知は世の滅するを知るとは、滅道の二諦を知れば、則ち世間の滅す可きを知る、滅及び滅方便に由るが故なり。問ふ、知諦世間は復た何の所爲ぞ。答ふ、息の爲めに復た得の爲めに諦知を勤めて修行す。息とは苦集諦、得とは滅道諦なり。諸の菩薩は苦集諦を息むるが爲めに、滅道諦を得んが爲めの故に、諸諦を觀じ修習具足す、是の如く世間を知るは、

【三七】此の偈は菩薩は世間を知る上に於いて最勝なることを說示す。

【三八】實諦知(Satyajñāna)。

【三九】此の偈は前偈を受けて身知と口知とを說示す。

【四〇】此の偈は菩薩の實諦知即ち四諦觀を說示す。

釋して曰く、此の二偈は不退の品類と依止と自性と差別とを顯示す。彼の品類に三種あり。一に聞法無厭の不退、二に恒に大なる精進の不退、三に生死苦惱の不退なり。依止に二種あり。一に慚、二に勇なり。慚ある者は不退なり、退は羞恥す可きが故なり。勇ある者は不退なり、退は猛健に非るが故なり。自性は、謂はく欲樂大菩提なり、欲樂若し迴せば卽ち退を得るが故なり。差別に三種あり。一に未成、謂はく信行地の菩薩の不退なり。二に成、謂はく初地より七地に至る菩薩の不退なり。三に極成、謂はく八地已上の菩薩の不退なり。

已に菩薩の不退を說けり。次に菩薩の知法を說かん。[三一]偈に曰く、

法を知り法業を知り、　相を知り無盡を知る、
得果及び二門、　成生亦た住法。　（二一）

釋して曰く、法を知るとは、謂く五明處を知るなり。一に[三二]內明、二に[三三]因明、三に[三四]聲明、四に[三五]醫明、五に[三六]巧明なり。此の五論を知る是れを法を知ると謂ふ。法業を知るとは、謂はく自利利他を知る、此を以て業と爲す。內論を知るは、自修の爲めに、及び他の爲めに說くなり。因論を知るは、已れの義を申べ、及び他の義を屈せんが爲めなり。聲論を知るは、自ら音を善くして他をして信受せしめんが爲めなり。醫論を知るは、他の疾を除かんが爲めなり。巧論を知るは、他をして解せしめんが爲めなり。論相を知るとは、謂はく此の五論を知りて五因あることを得、是れ菩薩の知論の相なり。一に聞得、二に持得、三に誦得、四に思得、五に通得なり。菩薩は先に論に於て聞あり、聞き已つて受持し、持し已つて習誦し、誦し已つて正思し、思し已つて通達す。通達とは、此は是れ功德、此は是れ過失、此は是れ善語、此は是れ惡語なりと知るなり。無盡を知るとは、謂く此の如きの知、乃至無餘涅槃も亦た無盡なるが故なり。得果とは、謂く自ら一切種智を得ることを知るが故なり。二門とは、一に三昧門、二に陀羅尼門なり。知論の菩薩は三昧門を以て衆生を成熟

[三一] 此の偈は菩薩の知法と知法業と知相と知無盡とを說示す。
[三二] 內明(Adhyātma-vidyā)。
[三三] 因明(Hetu-vidyā)。
[三四] 聲明(Śabda-vidyā)。
[三五] 醫明(Cikitsā-vidyā)。
[三六] 巧明(Śilpakarmasthāna-vidyā)。

違逆者あるも無畏を得るが故なり。五には聞深、謂はく實義を聽く時無畏を得るが故なり。六には能化、謂はく化し難き衆生を通力を以て化するに無畏を得るが故なり。七には彼を佛身に置く、謂はく衆生を大菩提に建立するに、無畏を得るが故なり。八には亦た諸の苦行を行ず、謂はく種種の難行苦行を行ずるに、無畏を得るが故なり。九には生死を捨てず、謂はく故意に受生して、無畏を得るが故なり、十には生死も染すること能はず、謂はく染不染に處して無畏を得るが故なり。

問ふ、已に差別を說けり。云何が堅固なる。[二四]偈に曰く、

[二五]惡朋と及び[二六]重苦と、　[二七]聞深と[に於ても]退する能はず、
譬へば[二八]鎓の翅風の、　須彌海を動かさゞるが如し。（一七）

釋して曰く、菩薩の無畏は三緣に於て不動なることを得。一に惡明に遇ふ。二に重苦に遭ふ。三に深法を聞く。譬へば鎓蟖の羽を振ふも海を蕩し、山を搖がす能はざるが如し。彼の三緣の菩薩の心を動する能はざることも亦た復た是の如し、是の故に菩薩の無畏は堅固を得。

已に堅固を說けり。云何が殊勝なる。[二九]偈に曰く、

諸說の無畏の中、　菩薩の無畏は上なり。
相異堅殊勝、　彼と相似せざればなり。（一八）

釋して曰く、前三義の勝に由るが故に、菩薩の無畏は諸說の無畏の中に於て最も殊勝と爲す。

已に菩薩の無畏を說けり。次に菩薩の不退を說かん。[三〇]偈に曰く、

不退の諸菩薩の、　品類に三事あり、
聞と進と苦とに於けるが故なり。　慚と勇とを依止と爲す。（一九）
大菩提を欲樂す、　是を不退の性と說く。
未成と成と極成との、　差別は諸地を顯はす。（二〇）

【二四】此の偈は菩薩は三緣に遇うて無畏堅固なることを說示す。
【二五】惡朋(Kumitra)。
【二六】重苦(Duḥkha)。
【二七】聞信(Gambhīra-śrava)。
【二八】鎓(Śala)。
【二九】此の偈は菩薩の無畏の最勝なるを說示す。
【三〇】此の二偈は菩薩の不退に就いて細說す。

進と定と慧との三起り、　勇・健・勤・猛の作、
是れを無畏の相と說く、　亦た衆名を顯はす。（一三）

釋して曰く、精進・禪定・般若、此の三若し起らば、是れ無畏の體相なり。勇健勤猛の此の四は無畏の衆生を顯はす。

問ふ、此の三は何の行中に於て無畏なるや。[二] 偈に曰く、

[三] 諸の所作の中に、　下と動と愚より則ち畏[を生ず]、
三を離るれば三決定す。　是れを無畏安と名づく。（一四）

釋して曰く、菩薩は諸の所作の中に於て其の心若しは下、若しは動、若しは愚なれば、則ち怖畏を生ず。何以故、下心は彼に於て勤修無きが故なり。動心は彼に於て心住せざるが故なり。愚心は彼に於て方便無きが故なり。彼の三對治は其の次第に隨つて卽ち是れ精進、禪定、般若なり。是の故に精進等の三若し決定を得ば則ち無畏と名づく。問ふ、云何が決定するや。答ふ、此の三對治任運に現前す、是れを決定と名づく。

問ふ、已に體相を說けり。云何が差別なる。[三] 偈に曰く、

自性と及び大願と、　不顧と及び不退と、
聞深と亦た能化と　彼を佛身に置くと、（一五）
亦た諸の苦行を行ずると、　生死を捨てざると、
生死の染する能はざると、　此の十は是れ差別なり。（一六）

釋して曰く、此の二偈は其の次第に隨つて無畏に十種の差別あることを說く。一には自性、謂はく性成就して無畏を得るが故なり。二には大願、謂はく菩提心を發して無畏を得るが故なり。三には不顧、謂はく自利を勤むる時、身命を顧みず無畏を得るが故なり。四には不退、謂はく利他を勤むる時、

【二】 此の偈は菩薩の無畏を說示す。

【三】 この偈の原文 Līnatvācca calatvācca moh=āccotpadyate bhayam / Kṛtyeṣu tasmādvijñeyā dhṛ=tisaṃjñā nije traye / 卽ち下・動・愚は皆從格になつてゐるか意味が極めて明瞭である。

【三】 以下二偈は菩薩の無畏に十種の差別あることを說示す。

故なり。衣服の譬は慚の能く諸の煩惱の住するを對治することを顯はし、虛空の譬は慚の能く染著の八法を對治することを顯はし、莊嚴の譬は慚の能く隨順同行するを顯はし、慈母の譬は慚の能く衆生を成熟することを顯はすなり。

問ふ、菩薩の慚を行ずるに何の相かある。[一三]偈に曰く、

不忍と及び不行と、　亦た忍と及び亦た行と、
當に知るべし此の四種は、　是れ慚を行ずる相を說くことを。（一〇）

釋して曰く、此の偈は四種の慚を行ずる相を顯示す。一に不忍、二に不行、三に忍、四に行なり。何以故、慚有る者は一切の過惡に於て前の二相あり。不忍の故なり、不行の故なり。一切の功德に於て後の二相あり、忍の故なり、行の故なり。

問ふ、云何が慚羞無上を得るや。[一四]偈に曰く、

慚羞を敎習するに、　亦た五の自意を起す、
信法等別なるが故に、　無上なること前の如くなるを知る。（一一）

釋して曰く、前の如くなるを知るとは、大乘經說に於て、慚羞の處に淨信を生ずるが故なり。九種の深心を以て修習するが故なり。無分別智の攝に由るが故なり。一果を以て一切果に入るが故なり。

已に菩薩の有羞を說けり。次に菩薩の無畏を說かん。[一五]偈に曰く、

諸の菩薩の無畏は、　[一六]體相と及び　[一七]差別と、
[一八]堅固と　[一九]殊勝と、　今當に次第に解すべし。（一二）

釋して曰く、菩薩の無畏に四義の解釋あり。一に體相、二に差別、三に堅固、四に殊勝なり。

問ふ、體相は云何。[二〇]偈に曰く、

【一三】此の偈は慚を行ずるに四種の相あることを顯示す。
【一四】此の偈は慚羞の無上なる所以を說示す。
【一五】此の偈は菩薩の無畏に四義あることを說く。
【一六】體相(Lakṣaṇa)。
【一七】差別(Prabheda)。
【一八】堅固(Dhṛti)。
【一九】殊勝(Dṛḍatva)。
【二〇】此の偈は菩薩の無畏の體相を說示す。

天人聰慧生じ、　速に二聚を滿たす。
生を成じて退轉せず、　離不離を果と爲す。　（六）

釋して曰く、初めの偈は有羞の離過の功德を顯示す。前の過失の如し、菩薩は有羞一切あらざるが故なり。後の偈は有羞の功德を集得することを顯示す。聚集五勝の果を具足するが故なり。天人聰慧生ずとは、是れ果報果を得、謂はく常に天上及び人中に生じ、恒に聰慧を得るが故なり。速に二聚を滿たすとは、是れ增上果を得、謂はく大菩提の二聚を得るが故なり。生を成じて退轉せずとは是れ丈夫果を得、丈夫の所作なるが故なり。離とは、是れ相離果を得、彼の障を離るゝが故なり。不離とは、是れ依果を得、一切の生處に彼の障の對治を離れざるが故なり。

問ふ、有羞の功用譬喩云何。[二]偈に曰く、

有衣有垢を翻す、　凡夫は無慚の故に。
天衣は更に無垢なり、　菩薩慚あれば爾り。　（七）
菩薩慚を具足すれば、　空の如く汚す可からず。
諸の菩薩に勝れんと欲す、　亦た慚を以て莊嚴す。　（八）
譬へば慈母の愛の如く、　慚の衆生を護ること然り。
觀生と及び化生とは、　此の事慚の起るに由る。　（九）

釋して曰く、此の中第一偈は[三]慚は衣服の如くなることを顯示す。何以故、慚ある者は過垢も汚す能はざるが故なり。第二偈の上半は慚の虛空の如くなることを顯示す。何以故、慚ある者は世間の八法に値ふと雖も染せられざるが故なり。第二偈の下半は慚の莊嚴の如くなることを顯示す。何以故、慚ある者は端正にして餘の菩薩に勝るゝが故なり。第三偈は慚の慈母の如くなることを顯示す。何以故、慚ある者は生死一切の過失を擁護すること象馬軍の如く、觀生化生此の起るに由るが

【二】此の三偈は譬喩を以て有羞の功用を說示す。其の中第一偈は慚は衣服の如くなることを說き、第二偈は慚は虛空の如く又莊嚴の如くなることを明し、第三偈は慚は慈母の如くなるを顯示す。

【三】慚愧を衣服に喩ふるは佛教道德の特色の一である。佛遺教經に「慚愧の服は諸の莊嚴に於いて最も第一なり」とあるが如きは其の好適例である。

亦た似なれば則ち下と爲す、　此に反するは應に上と知るべし。　（三）

釋して曰く、六品とは、不定地の中前六品の有羞を下と爲す。二品とは、諸の定地の中、前二品の有羞を下と爲す。七地とは、菩薩の十地の中、前七地の有羞を下と爲す。二乘とは、謂はく下心の衆生の有羞を下と爲す。增上慢あるに由るが故なり。亦似とは、謂はく未だ無生忍を得ざる菩薩の、彼の有羞も亦た下と爲す。此の諸の下なる有羞を翻せば、應に知るべし即ち是れ諸の上なる有羞なりと。

問ふ、何の法か是れ有羞の障なりや、及び彼の障に幾の過失ありや。[九]偈に曰く、

無羞は惑を斷ぜず、　三害及び六呵［を生じ］、

墮と難と退との苦三［あり］、　前の十二失の如し。　（四）

釋して曰く、無羞とは、是れ菩薩の有羞の障なり。若し此の障あれば則ち煩惱斷ぜず、煩惱斷ぜざれば則ち先づ三害を生ず。一には自害、謂はく不正思惟なり、自惱に由るが故なり。二に他害、謂はく瞋及び捨なり。他を惱ますに由るが故なり。問ふ、瞋は衆生を惱ますこと爾るべきも、捨は云何が衆生を惱ますや。答ふ、菩薩は衆生を應化するに捨して化せず、是を謂つて惱と爲す。俱害とは謂はく尸羅を破る、自他を惱ますに由るが故なり。三害を起し已つて即ち現法に於て六呵責を得、疑悔・天利・失護・棄捨・治罰・惡名に由るが故なり。其の次第に隨つて六種の呵責を得、所謂自呵責乃至十方人呵責なり、是の如くし已つて後復た三種の過失の生ずることあり、一に諸の難處に退墮す。二に已得未得の善法を退失す。三に彼より大苦受を生ず。是を無羞十二種の過失を生ずと謂ふ。

問ふ、已に障及び過失を知れり。何者か是れ有羞の功德なる。[一〇]偈に曰く、

此等の一切の惡は、　菩薩若し羞あらば、

當に知るべし一切盡くと、　彼の對治を起すが故なり。　（五）

【九】此の偈は菩薩の羞恥の障を顯示す。

【一〇】此の二偈は羞恥の功德を說示す。

卷の第十

[一]覺分品第二十一の一

釋して曰く、諸の菩薩は羞相あり、羞は慚愧を兼ぬ、此の中應に說くべし。[二]偈に曰く、

治障と及び合智と、　緣境と亦た成生と、
菩薩は羞相あり、　是の如き四つの差別なり。　（一）

釋して曰く、此の偈は菩薩の有羞に四種の相あることを顯示す。一に[三]自性、二に[四]伴類、三に[五]境界、四に[六]作業なり。治障とは、謂く無羞を離る、此は卽ち是れ羞の自性なり。合智とは、無分別智と相應す、此の智は是れ羞の伴類なり。緣境とは、菩薩は小無障の衆生を以て可羞の境と爲す。卽ち是れ聲聞緣覺なり。小とは、大乘に對するが故なり、無障とは、煩惱障を破するが故なり。成生とは、菩薩の有羞は衆生を建立するを以て業と爲す。此は是れ有羞の四種の相なり。

問ふ、諸の菩薩の有羞は何の行中に於て起るや。[七]偈に曰く、

菩薩は六度に於て、　障增と及び治滅と、
不勤と亦た勤行と[の時]、　此に於て有羞起る。　（二）

釋して曰く、諸の菩薩は四事の中に於て、極めて羞恥を生ず、一には諸度障增の時に於て、極めて羞恥を生ず、二には諸障治滅の時に於て、極めて羞恥を生ず。三には諸度を修するに懈怠の時、極めて羞恥を生ず。四には煩惱法に隨順して勤行する時、極めて羞恥を生ず。所謂諸根常に開いて禁守せざるなり。

問ふ、菩薩有羞の種の差別云何。[八]偈に曰く、

六品と及び二品と、[illegible]　七地と二乘と、

【一】覺分(Bodhipakṣa)。

【二】此の偈は菩薩は四種の羞相あることを說示す。

【三】自性(Svabhāva)。
【四】伴類(Sahāya)。
【五】境界(Ālambana)。
【六】作業(Karma)。

【七】此の偈は菩薩は四事の中に於いて羞恥を生ずることを說示す。

【八】此の偈は菩薩の羞恥の種の差別を說示す。

ずるが故なり。深心に由るとは、九種の心を以て梵住を修するが故なり。神通に由るとは、虚空等の定に依りて修習するが故なり、方便に由るとは、無分別智の所攝に依るが故なり。和合に由るとは、一果を以て一切果に入るが故なり。梵住品究竟。

大悲の諸度を增長するを說き已れり。此の大悲は四緣より成ず、亦た應に顯示すべし。[一〇六]偈に曰く。

苦樂不苦樂と、　因力と及び善友と、
自體相續流とは、　大悲四緣の義なり。(四七)

釋して曰く、苦樂不苦樂とは、緣緣・具緣を顯示す。三受三苦倶に悲を起すが故なり。問ふ、捨受云何が苦なる。答ふ、行苦に由るが故なり。因力とは、因緣を顯示す。善友とは、增上緣を顯示す。自體相續流とは、次第緣を顯示す。

問ふ、大悲は是の如くして生じ已る。云何が平等を得る。[一〇七]偈に曰く、

行相と及び思惟と、　隨順と離障と、
不得と亦た清淨との、　六義は悲の平等なり。(四八)

釋して曰く、大悲の平等に六種あり。一には行相平等、三受位の衆生平等は是の苦を知るに由るが故なり。二には思惟平等、平等に憐愍するに由るが故なり。三には隨順平等、平等に救濟するに由るが故なり。四には離障平等、平等に不惱なるに由るが故なり。五には不得平等、自他及び悲の三輪平等不可得なるに由るが故なり。六には清淨平等、八地無生忍の時、平等に得るに由るが故なり。

問ふ、是の如く別して大悲を說き已れり、此の四梵住云何が修習して無上ならしむるを得るや。[一〇八]偈に曰く、

慈等無上ならしむ、　自意の修に亦た五あり、
信と心と通と方便と、　和合と前說の如し。(四九)

釋して曰く、前の諸佛を供養し善友に親近するは、皆な五種の自意に由り、修習して無上ならしむることを得たるが如く、梵住も亦た爾なり。淨信に由るとは、大乘經說に於て梵住處に淨信を生

【一〇六】此の偈は大悲は四緣より成ずることを說示す。

【一〇七】此の偈は大悲の平等に六種あることを說示す。

【一〇八】此の偈は五種の自意によりて、梵住をして、無上ならしむる所以を說示す。

盡と廣と勝と常と喜と、　　離著と亦た淸淨とは、
二處に廻向す、　　菩提と及び善根となり。（四四）

釋して曰く、盡とは、內外の物を施すが故なり。廣とは、多物を施すが故なり。勝とは、妙物を施すが故なり。常とは、恒に施すが故なり。喜とは、瞋を離れて施すが故なり。謂く乞ひ求むる者は不饒益を作す時忍んで而も喜び施す。離著とは、希望無きが故なること、前に無著を說けるが如し。淸淨とは、如法を以ての故なること、前に淨句を說けるが如し。菩提に廻向すとは、大菩提に廻向するが故なり。善根に廻向すとは、善根に隨順する器に廻向するが故なり。

已に大悲の行施を說けり。次に大悲の受用差別を說かん。[一〇一]偈に曰く、

有財にして自用、　　及び用つて衆生に施す、
得喜施喜勝なり、　　三樂養心の故に。（四五）

釋して曰く、菩薩は自受用財に喜を生じ、及び財を用つて衆生に布施して喜を生ず。二の喜相比するに施喜を勝と爲す。何以故、三樂養心の故なり。三樂とは、一に[一〇二]布施喜、二に[一〇三]攝他喜、三に[一〇四]菩提聚滿足喜なり。

已に大悲の受用差別を說けり。次に大悲の諸度を增長することを說かん。[一〇五]偈に曰く、

慳と惡と瞋と放逸と、　　緣著と及び邪著と、
是の如き六蔽は、　　悲[者]は六度を增さしむ。（四六）

釋して曰く、慳とは、少物をも捨つる能はざるが故なり。惡とは、戒を破り及び他を惱ますが故なり。瞋とは、少しも饒益せざるに於て、大瞋を起すが故なり。放逸とは、諸の善法に於て勤行せざるが故なり。緣著とは、五欲心を亂すが故なり。邪著とは、外道慧無きが故なり。是の如き六蔽に住する者は大悲憐愍して爲めに過失と說き、六波羅蜜をして增長を得せしむ。

【一〇一】此の偈は大悲の受用差別を說示す。
【一〇二】布施喜(Dānapriti)。
【一〇三】攝他喜(Parānugraha=priti)。
【一〇四】菩提聚滿足喜(Bodhi=saṁbhāraṇapriti)。
【一〇五】此の偈は大悲の諸波羅蜜多を增長することを說示す。

悲者は大悲を以て、　盡く施し及び常に施す、[九八]
應に是の如く施を作すべし、　愼んで施果を求むること勿れ。（四〇）

釋して曰く、此の偈は無間の施を行ずることを敎ふること應に知るべし。偈に曰く、

若し我れ施を樂はず、　施果を施さゞる時、
施は一刹那も無し、　施愛無きを以ての故に。（四一）

釋して曰く、此の偈は無厭の施を行ずることを敎ふること應に知るべし。[九九]偈に曰く、

作さざれば果を與へず、　果を與へ作を與ふるは、
是れ汝が恩過を觀る、　我れと相似せず。（四二）

釋して曰く、此の偈は捨恩施を行ずることを敎ふ。菩薩は施を語りて云く、若し人汝に行ぜば、汝方に果を與ふ。是れ汝が報恩を待つ過失なり。我れは則ち爾らず、是れ汝我れと相似せず。復た次に若し人汝に行ぜば、汝但だ此の人に果を與ふ、汝は則ち是れ報恩を待つ者なり。我は則ち爾らず。行ずる所の施果を一切衆生に與ふ。是れ汝が我と相似せざるなり。

已に大悲の敎施を說けり。次に大悲の行施を說かん。偈に曰く、

無障と及び淨句と、　彼を利し亦た自ら量る、
無求と無著と、　悲者は是の如く施す。（四三）

釋して曰く、無障とは、謂く他物を奪はざるなり。施を行ずるが故なり。淨句とは、如法の財を以て施を行ず、謂く毒物兵仗酒等を以て施さざるが故なり。彼を利すとは、施を以て他を攝する時、善根を置施するが故なり。自ら量るとは、自の眷屬をして乏少あらしめざるが故なり。無求とは、謂く前の衆生或は心に求むること無く、或は口に求むることなく、彼の乏少を見て自然にして施し、及び福田を簡ばざるが故なり。無著とは、報恩及以び果報を求めざるが故なり。[一〇〇]偈に曰く、

【九八】此の偈は大悲は無厭の施を行ずることを敎ふ。

【九九】此の偈は菩薩は報恩を待たざるものなることを說示す。

【一〇〇】此の偈は大悲の行施を說示す。

ば云何が自ら樂しむを得ん。自樂せしむるを以ての故に樂を施して他苦を拔くとは、若し菩薩衆生に樂を施して衆生の苦を拔く時、即ち是れ菩薩自ら樂を作すなり。

已に大悲の樂勝を說けり。次に大悲の教授を說かん。[九四]偈に曰く、

悲者は自施を教ゆ、　彼に施して自求すること勿れ、
施報願を受けず、　願あらば還つて施を以てす。（三七）

釋して曰く、此の偈は無求施を行ずることを教ふ。悲者は自施を教ふ、彼に施して自求すること勿れとは、大悲義言はく、汝施を他に施す時、自樂を求むること莫れ、他樂若し無ければ自樂も亦た無し、何以故、樂不別の故なり。施の報願を受けず願あらば還つて施を以てすとは、若し我が施果を亦た願ふとも受けず、設し果ある時は還つて布施を以てす。[九五]偈に曰く、

施と及び施果と、　普ねく一切に施す、
他の樂は我が樂なるが故に、　彼に施すも我れ須つこと無し。（三八）

釋して曰く、此の偈は施果の施を行ずることを教ゆ。謂く施と及び施の所得の果とを普ねく一切衆生に施すなり。何以故、悲者は彼の樂を以て自らの樂と爲すが故なり。是の故に菩薩は所有施果を皆な應に一切衆生に布施すべし。大悲は是の如く教授を作す。[九六]偈に曰く、

財を輕んじて以て施せば、　來ること多く復た來ること好し。
用ゐずして自ら來る、　還つて用ゐて展轉して施す。（三九）

釋して曰く、此の偈は厭財の施を行ずることを教ふ。若し人財を厭ふて施を行ぜば、是の人は財を欲せずと雖も、而も財自ら來る。極好極妙の道理此の如し。大心を以ての故なり。若し此の如く還つて用ゐて布施せば、是れ則ち資財來りて復た來る。菩薩は則ち施して復た施す。何以故、自樂を求むるに非ず、施をして無窮ならしめんと欲するが故なり。[九七]偈に曰く、

【九四】此の偈は大悲は無求施を行ずることを教ふ。

【九五】此の偈は施の結果をも施すものなることを說示す。

【九六】此の偈は厭財の施を行ずることを教ふ。

【九七】此の偈は大悲は常に布施を行じて、其の果報を欣求せざることを教ふ。

[86]悲と[87]施と[88]財との三果を　悲者は恒に增長す、
愛生と及び攝生と、　資生と復た三樂[を生ず]。　（三四）

釋して曰く、悲施財の三果を悲者は恒に增長すとは、謂く菩薩の大悲は能く三種の果を增長す。一には增悲、修習するに由るが故に、能く自體をして增長せしむ。二には增施、悲の自在なるに由るが故に、能く施をして增長を得せしむ。三には增財、施の自在なるに由るが故に能く財として增長を得せしむ。愛生及び攝生、資生復た三樂を生ずとは、是の三果より復た三樂を生ずるなり。一には悲を因と爲すより[89]愛生樂を生ず。二には施を因と爲すより[90]攝生樂を生ず。三には財を因と爲すより[91]資生樂を生ず。

已に大悲の增果を說けり。次に大悲の勸進を說かん。[92]偈に曰く、

悲長と及び施增と、　成生と亦た樂起と、
牽來と復た將去と　大悲の勸是の如し。　（三五）

釋して曰く、大悲の勸進は菩薩は六種の功德を行ず。大悲義は言はく、菩薩よ、汝我を修習し、我をして滋長せしめよ。汝資財を捨て、施を增進せしめよ。汝應に施を以て衆生を成熟すべし。汝應に施を以て自の樂を起さしむべし。汝若し施さば大菩提を招引し、二聚及び餘は已に向つて來らしめよ、汝若し施さば二聚及び餘を將道して大菩提に向つて去らしめよと。

已に大悲の勸進を說けり。次に大悲の樂勝を說かん。[93]偈に曰く、

苦者は諸苦を悲しむ、　施さずんば云何が樂しまん、
自樂せしむるを以ての故に、　樂を施して他苦を拔く。　（三六）

釋して曰く、苦者は諸苦を悲しむとは、諸の菩薩は悲を以て諸苦を起す。是の故に苦者と名づく。施さずんば云何が樂しまんとは、菩薩は大悲の故に他苦を以て自苦と爲す。若し他に樂を施さずん

【八六】悲(Karuṇā)。
【八七】施(Dāna)。
【八八】財(Bhoga)。
【八九】愛生樂(Snehajanitaṁ)。
【九〇】攝生樂(Satvānugraha=janitaṁ)。
【九一】資生樂(Kriyāśakti=kṛtaṁ)。
【九二】此の偈は大悲の勸進を說示す。
【九三】此の偈は大悲の樂勝を說示す。

已に偏るゝに由るが故なり。

已に大悲の無厭を說けり。次に大悲の苦勝を說かん。[八二] 偈に曰く、

悲苦最も希有なり、　苦は一切の樂に勝る、
更に樂悲生ずるが故に、　辨ずるもの有るに非ず況んや餘をや。（二一一）

釋して曰く、悲苦最も希有なりとは、謂く他苦より大悲を生じ、大悲より自苦を生ず、是の如く悲苦何の希有かあらん、而も此を過ぐるを得るが故に最も希有と爲す。苦は大切の樂に勝るとは、卽ち此の悲苦は一切世間の樂に勝るなり。問ふ、何が故ぞ。答ふ、更に樂悲生ずるが故なり。此の諸の菩薩は更に悲苦を以て樂と爲す、此の苦は大悲より生ずるに由るが故なり。辨ずるもの有るに非ず況んや餘をやとは、彼の樂所作已に辨ずる者すら尙ほ無し。況んや餘の世間の有るを得んや。

已に大悲の苦勝を說けり。次に大悲の施勝を說かん。[八三] 偈に曰く、

施と悲と共に起り、　能く菩薩をして樂しましむ。
三界中の樂受、　此に比して一分無し。（二一二）

釋して曰く、若し布施と大悲と俱に生ずれば則ち能く菩薩の勝樂を起す、三界中に於て作す所の諸樂と大悲施の作す所の樂とを比せんと欲するに、一分あつて相似を得ること無し。

已に大悲の施勝を說けり。次に大悲の忍苦を說かん。[八四] 偈に曰く、

生死は苦の自性なり、　捨てざるは悲に由るが故なり。
苦を起すは利他の因なり、　云何が捨を習せざらん。（二一三）

釋して曰く、一切の苦は悉く生死の苦中に入る。諸の菩薩は生死を捨てず、大悲に由るが故なり。菩薩の苦を起すは是れ利他の因なり、菩薩は生死を捨てざる時、卽ち是れ一切の苦を捨てず。

已に大悲の忍苦を說けり。次に大悲の施果を說かん。[八五] 偈に曰く、

【八二】此の偈は大悲の苦勝を說示す。

【八三】此の偈は大悲の施勝を說示す。

【八四】此の偈は大悲の忍苦を說示す。

【八五】此の偈は大悲の施果を說示す。

體是れ障ゆ、世間の悲を行ずる體は障に非ずと雖も、而も是れ世間なり。菩薩の悲愛は自體の障盡きて復た世に過ぐ、故に最勝と爲す。

問ふ、云何が障盡くるや。[七九]偈に曰く、

有苦及び無智は、　大海及び大闇なり。
拔濟するに方便を以てす、　云何が障盡きざらん。（二一八）

釋して曰く、有苦を大海と爲し、無智を大闇と爲す、能く拔濟方便する是れ大悲にして、此の悲愛則ち障盡なり。

問ふ、云何が世を過ぐ。[八〇]偈に曰く、

羅漢と及び緣覺と、　是の如きは悲愛無し、
何に況んや餘の世間をや、　豈に世を過ぎざるを得んや。（二一九）

釋して曰く、阿羅漢辟支佛すら尚ほ大悲愛無し。況んや餘の世間に而も得可きあらんや。若し是の如くなれば豈に世を過ぎざらんや。

已に大悲の愛勝を說けり。次に大悲の無厭を說かん。[八一]偈に曰く、

悲を得る諸菩薩は、　苦を捨てゝ苦を起す。
彼れ初めに苦怖を起し、　證する時欣樂甚し。（二二〇）

釋して曰く、捨苦とは、謂く諸の菩薩は大悲を以ての故に他苦を捨てんと欲す。而も苦を起すとは、他苦を捨つるに由りて、則ち自苦を起すなり、彼れ初めに苦怖を起すとは、彼れ初めは謂ゆる信行地の菩薩なり、彼れ起苦の中に於て怯怖を生ず、自他平等なることを未だ見ざるに由るが故なり。苦の如實なるに未だ觸れざるに由るが故なり。證する時欣樂甚しとは、證時は謂ゆる淨心地の菩薩なり。彼れ起苦の中に於て極欣樂を生ず。自他平等を見るに由るが故に、苦の如實なることに

【七九】此の偈は大悲は何故に一切の障を盡くすかを說明す。

【八〇】此の偈は大悲なきものの世を過ぐる理由を說明す。

【八一】此の偈は大悲の無厭を說示す。

の事の中に於て、正念を起するに由るが故なり。是の故に思を以て枝と爲す、願は相續を以て能く長成せしむ、前滅して後生すること、譬へば葉の長落するが如きなるに由るが故に抽新なり、是の故に願を以て葉と爲す。生は圓緣成ずるを以て實と爲す、自身成就すれば則ち受生虛しからざるに由り、是の故に生を以て華と爲す、成熟は外緣の成ずるを以て實と爲す。他身成熟すれば則ち利益虛しからざるに由り、是の故に衆生を成熟するを以て果と爲す、是の如く次第に成立すること應に知るべし。

已に大悲の樹の如くなるを說けり。次に大悲の功德を讚せん。[七五]偈に曰く、

　大悲は利益を作す、　誰か他に於て起さざらん。
　苦に於て勝樂生ず、　樂生は悲に由るが故なり。　（一一五）

釋して曰く、此の義は偈に說く所の如し。

已に大悲の功德を讚せり。次に大悲の無著を說かん。[七六]偈に曰く、

　菩薩の悲は自在なり、　[七七]寂靜にすら尙ほ住せず、
　世樂及び身命、　此の愛云何が起らん。　（一一六）

釋して曰く、一切世間皆な世樂及び自の身命を愛す。一切の聲聞緣覺は、世樂及び自の身命を愛せずと雖も、而も涅槃に於て住著の意を起す。菩薩は爾らず、大悲自在なるが故に、涅槃に於てすら尙ほ住せず、何に況んや彼の二愛の中に住せんや。

已に大悲の無著を說けり。次に大悲の愛勝を說かん。[七八]偈に曰く、

　貪愛は無障に非ず、　世悲亦た世間、
　菩薩は悲愛を起す、　障盡くるも亦た世に過ぐ。　（一一七）

釋して曰く、悲愛の最勝に自ら二義あり。一には障盡、二には過世なり。愛親等貪なれば則ち自

【七五】此の偈は大悲の功德を讚美す。
【七六】此の偈は大悲の無執着なる特色を說示す。
【七七】寂靜とは涅槃のこと。
【七八】此の偈は大悲の愛勝なることを說示す。

辱、三には[六九]思惟、四には[七〇]勝願、五には[七一]勝生、六には[七二]成熟なり。此は卽ち是れ根莖枝葉華果の六位なり。問ふ、此の事云何。答ふ、この樹は大悲を以て根と爲し、忍辱を以て莖と爲し、衆生を利益せんと思惟するを以て枝と爲し、勝生願を以て葉と爲し、所得の勝生を以て華と爲し、衆生を成熟するを以て果と爲す。

問ふ、何の故に六事の先後此の如くなるや。[七三]偈に曰く、

無悲なれば則ち無忍なり、　是の六の次第の如く、
勝生若し得ざれば、　衆生を成就すること無し。（一一二）

釋して曰く、若し大悲無ければ則ち大苦難行の忍を起す能はず。若し大苦難行の忍無ければ、則ち衆生を利益せんとする思惟を起す能はず。若し衆生を利益せんとする思惟無ければ、則ち勝生の願を起す能はず。若し勝生の願無ければ、則ち勝生の處に向ふ能はず。若し勝生の處に向はざれば、則ち衆生を成熟すること能はざるなり。

問ふ、前後の相似此の如し。成立の相似復た云何。[七四]偈に曰く、

根生ずるは慈潤を以てし、　莖擢づるは樂廣を以てし、
念正しければ則ち枝を增し、　願績けば則ち葉を長じ、（一一三）
內緣成つて華と爲り、　外緣成つて果と爲る。
當に知るべし悲根等は、　是の如く次第に成ずることを。（一一四）

釋して曰く、此の中の成立相似とは、悲は慈潤を以て能く滋生せしむ。有慈とは、他苦を見已つて悲苦を生ずるに由るが故なり。是の故に悲を以て根と爲す。忍は樂想を以て能く抽擢せしむ、菩薩は他の苦を利して樂想を生じ、樂想生じ已つて能く忍辱をして廣大なるを得せしむるに由るが故なり。是の故に忍を以て莖と爲す。思は正念を以て能く增進せしむ。忍廣くなり已つて、能く利他

【六九】思惟(Cintā)。
【七〇】勝願(Paripidhāna)。
【七一】勝生(Janma)。
【七二】成熟(Paripāka)。
【七三】此の偈は前偈の六事の順序を說明す。
【七四】以下二偈は樹に喩へて成立の相似を說明す。

亦た[五二]如實知を求め、知り已つて恒に修して厭はず。是れを大悲の功德と名づく。

已に大悲の功德を說けり。次に大悲の差別を說かん。[五三]偈に曰く、

　[五四]自性と　[五五]數擇と、　　[五六]宿習及び　[五七]障斷と、

　應に知るべし菩薩の悲は、　　此の如く四の差別あることを。（一九）

釋して曰く、此の大悲は其の次第に隨つて四の差別あり。一には自性、自然を成ずるが故なり。二には數擇、功德の過失を見るが故なり。三には宿習、先世に久しく修せしに由るが故なり。四には障斷、欲を離れ所治の惱障を斷じ、清淨を得るに由るが故なり。復た六種の差別あり。[五八]偈に曰く、

　非等亦た非常、　　非深亦た非順、

　非道非不得、　　六悲を翻すること是の如し。（二〇）

釋して曰く、非大悲の六種の差別を翻ぜば、即ち是れ大悲の六種の差別なり。一には[五九]平等、二には[六〇]常恒、三には[六一]深極、四には[六二]隨順、五には[六三]淨道、六には[六四]不得なり。平等とは、樂受等に於て衆生の所有(あらゆる)諸受は皆な是れ苦なりと知るが故なり。常恒とは、乃至無餘涅槃も亦た盡くること無きが故なり。深極とは、入地の諸菩薩は自他平等を得るが故なり。隨順とは、一切衆生の苦に於て、理の如く拔濟するが故なり。淨道とは、所對治の惱を斷除することを得るが故なり。不得とは、[六五]無生法忍を得る時、諸法不可得の故なり。

已に大悲の差別を說けり。次に大悲は樹の如くなるを說かん。[六六]偈に曰く、

　悲と忍と思と願と生と、　　成熟と次第に說く、

　大根より大果に至る、　　悲樹六事成ず。（二一）

釋して曰く、此の大悲樹は應に知るべし六事を以て成就することを、一には[六七]大悲、二には[六八]忍

【五二】如實知(Yathābhūtam)。
【五三】此の偈は大悲の四種の差別を說示す。
【五四】自性(Prakṛtyā)。
【五五】數擇(Pratisaṁkhyayā)。
【五六】宿習 Pūrvanivāsa
【五七】障斷(Vipakṣahīnā)。
【五八】此の偈は大悲の六種の差別を說示す。
【五九】平等(Samā)。
【六〇】常恒(Sadā)。
【六一】深極(Adhyāśaya)。
【六二】隨順(Pratipatti)。
【六三】淨道(Vairāgya)。
【六四】不得(Anupalambha)。
【六五】無生法忍(Anutpattikadharmakṣānti)。
【六六】此の偈は大悲を根莖枝葉華果を有する一本の樹に喩ふ。
【六七】大悲(Karuṇā)。
【六八】忍辱(Kṣānti)。

なり。

已に大悲の境界を說けり。次に大悲の得果を說かん。[四四]偈に曰く、

[四五]障斷と及び　[四六]覺因と、　[四七]與樂と亦た　[四八]愛果と、
[四九]自流との五依の故に、　是の人は佛を去ること近し。　（一六）

釋して曰く、障斷とは、是れ相離果なり、彼の障を斷ずるが故なり。覺因とは、是れ增上果なり、衆生を利益するが故なり。與樂とは、是れ丈夫果なり、丈夫の所作の故なり。愛果とは、是れ果報果なり、可愛の報を得るが故なり。自流とは、是れ依果なり、未來の勝悲を與ふるが故なり。是の如き五果は皆な大悲の所得に依る。當に知るべし此の如き菩薩は佛菩提を去ること則ち遠からずと爲すと。

已に大悲の得果を說けり。次に大悲の不住を說かん。[五〇]偈に曰く、

生死は苦を體と爲し、　及び無我を以て性と[爲]す。
不厭亦た不惱なり、　大悲勝覺の故に。　（一七）

釋して曰く、一切の生死は苦を以て體と爲し、無我を以て性と爲す。菩薩は苦に於て如實智を得、無我に於て無上覺を得。是の如く知覺を得已つて、大悲に由るが故に生死に於て厭離を生ぜず。勝覺に由るが故に亦た煩惱の爲めに惱まされず。是の故に菩薩は涅槃に住せず、亦た生死に住せざるを得。

已に大悲の不住を說けり。次に大悲の功德を說かん。[五一]偈に曰く、

苦の自性を見る時、　苦を知り悲苦を生ず、
亦た捨方便を知り、　恒に修して生を厭はず。　（一八）

釋して曰く、菩薩は世間の苦を觀じ、其の自性を見る時、即ち悲苦を生ず。彼の遠離方便の如く、

【四四】此の偈は大悲所得の果を說示す。
【四五】障斷(Heṭhāpaham)。
【四六】覺因(Bodhibijaṁ)。
【四七】與樂(Sukhāvahaṁ)。
【四八】愛果(Iṣṭahetuṁ)。
【四九】自流(Svabhāvadaṁ)。
【五〇】此の偈は菩薩は生死涅槃に住せざることを說示す。
【五一】此の偈は大悲の功德を明かにす。

離するが故なり。二には衆生を捨てず、衆生を成熟するが爲めに、生死も汚す能はざるが故なり。

問ふ、已に功德を知れり。此の功德云何が最尊最上なることを知るや、[三二]偈に曰く、

人に一子の有德なるものあれば、　極愛を生ずるが如く、
菩薩は一切に於て、　梵勝を起すこと彼に過ぐ。　（一三）

釋して曰く、過に由り此の譬は則ち菩薩の四種の梵住の最尊最上なることを顯示す。

問ふ、大悲は何等の衆生を以てか所緣と爲す。[三三]偈に曰く、

[三四]熾然と及び[三五]怨勝と、　[三六]苦逼と亦た[三七]闇覆と、
[三八]住險と將た[三九]大縛と、　[四〇]食毒と幷に[四一]失道と、
復た[四二]非道住にあると、　及以び[四三]瘦澁者と、　（一四）
此の如きの十衆生は、　大悲心の所緣なり。　（一五）

釋して曰く、菩薩の大悲は略して十種の衆生を以て境界と爲す。一に是れ熾然の衆生、謂く欲染に染著せる者なり。二に是れ怨勝の衆生、謂く善を修する時、魔の障礙を爲す者なり。三に是れ苦逼の衆生、謂く三途に在る者なり。四に是れ闇覆の衆生、謂く恒に不善を行ずる者なり。業報を識らざるに由るが故なり。五に是れ住險の衆生、謂く涅槃を樂はざる者なり。生死の險道斷絕せざるに由るが故なり。六に是れ大縛の衆生、謂く外道僻見の者なり、解脫に向はんと欲して種々の僻見を爲し堅縛に縛せらるゝに由るが故なり。七には是れ食毒の衆生、謂く定味を噉ふ者なり。譬へば美食も毒を雜へれば則ち能く人を害するが如く、善定も亦た爾なり。貪所著の爲めに則便ち退失す。八には是れ失道の衆生、謂く增上慢の者なり、眞實解脫道の中に於て而も迷謬なるに由るが故なり。九には是れ非道住の衆生、謂く下乘に於る不定者なり、退あるに由るが故なり。十には是れ瘦澁の衆生、謂く諸の菩薩の二聚に於る未滿者なり。此の如き十種の衆生は是れ菩薩の大悲所緣の境界

【三二】此の偈は梵住の功德の最尊最上なる理由を說示す。
【三三】此の偈は大悲所緣の衆生の何たるかを明す。
【三四】熾然(Pradīptān)。
【三五】Śatruvaśagān.
【三六】Duḥkhakrāntān.
【三七】Tamovṛtān.
【三八】住險(Durgamārgasamārūḍhān)。
【三九】大縛(Mahābandhanasaṃyutān)。
【四〇】食毒(Mahāśanaviṣākrāntalolān)。
【四一】失道(Mārgapranaṣṭakān)。
【四二】非道住(Utpathaprasthitān)。
【四三】瘦澁者(Satvandurbalān)。

問ふ、多失とは云何。[二五]偈に曰く、

是の如き諸の煩惱、　起れば則ち三害あり、
[二六]自を害し又[二七]彼を害し、　及以び[二八]尸羅を害す。　（九）

釋して曰く、此の偈は三害の過失を顯示す。一に自害、謂く自苦思作なり。二には他害、謂く他苦思作なり。三には尸羅害、謂く倶苦思作なり。[二九]偈に曰く、

有悔と亦た失利と、　失護と及び師捨と、
治罰と並に惡名と、　是の如きは六呵責なり。　（一〇）

釋して曰く、此の偈は六種の呵責過失を得ることを顯示す。一には自呵責、憂悔あるに由るが故なり。二には他呵責、利養を失ふに由るが故なり。三には天呵責、擁護を失ふに由るが故なり。四には大師呵責、大師の捨つる所に由るが故なり。五には梵行呵責、智慧梵行の人は如法に治罰するに由るが故なり。六には十方人呵責、惡名流出するが故なり。[三〇]偈に曰く、

後身諸難に墮す、　梵住今亦た退す、
心數亦苦を得、　復た次に三過生ずるなり。　（一一）

釋して曰く、此の偈は後得の三種の過失を顯示す。一には墮難、此の惡業に由りて後世に惡報を得るが故なり。二には退行、已得を退し及び未得を退し、現在未來の梵住を退失するに由るが故なり。三には苦生、心數法彼れより大憂苦を生ずるに由るが故なり。

問ふ、已に過失を說けり。何者か是れ功德なる。[三一]偈に曰く、

善く梵住に住する人は、　彼の諸の惡を遠離し、
生死も汚す能はず、　群生も濟ふことを捨てず。　（一二）

釋して曰く、梵住に住する者は二の功德を得。一には煩惱を捨つ、前に說く所の如く過失悉く遠

【二五】此の偈は前の四障に三種の過失あることを說示す。
【二六】自害(Hantyātmānaṁ)。
【二七】害彼(Satvānupahanti)。
【二八】尸羅害(Śīlamupahan=ti)。尸羅は譯して戒といふ。
【二九】此の偈は六種の呵責過失を說示す。
【三〇】此の偈は後得の三種の過失を說示す。
【三一】此の偈は梵住の二種の功德を說示す。

と爲す、謂く諸の聲聞の故なり。相似を亦た下と爲す、謂く未だ無生法忍を得ざる菩薩なるが故なり。說く所の下の如き、是の下を翻すれば則ち上と爲ること應に知るべし。

問ふ、此の四梵住は能く幾果を得るや。[一七]偈に曰く、

所生欲界の報と、　滿聚と亦た成立と、
不離と及び離障と、　五を具足するを果と爲す。　(六)

釋して曰く、菩薩は諸の梵住に住するを因と爲して、具に五果を得、一には欲界の衆生の中の生なり、是れ[一八]果報果なり。二には二聚圓滿す、是れ[一九]增上果なり。三には衆生を成熟す、是れ[二〇]丈夫果なり。四には一切生處に梵住を離れず、是れ[二一]依果なり。五には所生の處恒に彼の障を離る、是れ[二二]相離果なり。

問ふ、この梵住の中、何等の事あつてか是れ菩薩の相なる。[二三]偈に曰く、

設ひ重障の緣、　及以び自の放逸に遭ふとも、
菩薩の相を知らんと欲す、　梵心退轉無し。　(七)

釋して曰く、菩薩に二事あり。梵心不動應に知るべし、是を菩薩の相と爲すことを。一には設ひ重障の因緣に遇ふとも、心終に異無し、是れ菩薩の相なり。二には設ひ自ら放逸なるも、謂ゆる能治現前せざる時は心亦た異無し、是れ菩薩の相なり。況んや無量現前する時をや。

問ふ、梵住の障礙は云何。[二四]偈に曰く、

四梵に四障あり、　瞋と惱と憂と欲との故なり。
菩薩はこの障を具す[るが故に]、　多種の過失起る。　(八)

釋して曰く、彼の四梵の所對治は四障を具有す。其の次第の如く、一に瞋、二に惱、三に憂、四に欲なり。此の如きの障は梵の無體なるに由るが故なり。若し此の四あらば復た多種の過失を生ず。

【一七】此の偈は梵住の所得なる結果を說示す。
【一八】果報果(Vipākaphalaṁ)。普通には異熟果といふ。
【一九】增上果(Adhipatiphalaṁ)。
【二〇】丈夫果(Puruṣakāraphalaṁ)。普通には士用果といふ。
【二一】依果(Niṣyandaphalaṁ)。普通には等流果といふ。
【二二】相離果(Visaṁyogaphalaṁ)。普通には離繫果といふ。
【二三】此の偈は菩薩の特性を說明す。
【二四】此の偈は梵住の障礙を說明す。

くの說を法緣と名づく。無緣とは、卽ち是れ彼の如なり、無分別を以ての故に說いて無緣と名づく。

[九]偈に曰く、

　及び彼の如の義の故に、　忍位淸淨を得。
　身口業の所攝、　亦た諸の煩惱を盡す。　(三)

釋して曰く、彼の四種の行は應に知るべし。無緣の慈とは、[一〇]如の緣を以ての故なり。八地無生法忍の時、一切の善根を得、亦た圓滿を得。彼れ淸淨なるが故なり。及び慈所依の身口二業の所攝とは、諸の煩惱亦た盡く。煩惱所緣の如く、意の自體諸の煩惱斷を說く、所緣を斷ずるが故なり。是の如く修多羅の中に說く。

問ふ、彼の四梵住は何等の行の差別かある。[一一]偈に曰く、

　有動と及び不動と、　亦た噉と及び不噉と、
　應に知るべし四梵住は、　是の如きの行の差別ありと。　(四)

釋して曰く、彼の四梵住は應に知るべし四種の行の差別ありと。一には[一二]動、二には[一三]不動、三には[一四]噉、四には[一五]不噉なり。動とは退分なり、可退の故なり。不動とは、住分及び勝分なり、不可退の故なり。噉とは、染汚たり、貪著樂味に大心無きが故なり。不噉とは、不染汚なり。此の退等の行是れ梵住の差別なり。諸の菩薩は不動及び不噉の中に住し、動及び噉の中に住せず。

問ふ、梵住の種の差別云何。[一六]偈に曰く、

　前六及び前二、　下地亦た下心、
　相似等を下と爲し、　下を翻せば則ち上と爲す。　(五)

釋して曰く、下上の差別とは、彼の不定地の自性前六品を下と爲し、一切定地前二品を亦た下と爲す。謂く軟軟軟中下地を亦た下と爲す。謂く下七地の菩薩は上地を觀るが故なり。下心を亦た下

【九】此の偈は無緣の慈と、慈所依の身口の所攝とを顯示す。
【一〇】以如緣故(Tathatālambanatvāt)。
【一一】此の偈は梵住の四種の行の差別を說く。
【一二】動(Calā)。
【一三】不動(Acalā)。
【一四】噉(Āsvāditā)。
【一五】不噉(Anāsvāditā)。
【一六】此の偈は梵住の種の差別を說く。

とは、大乘經說に親近する處に淨信を生ずるが故なり。深心に由るとは、心に亦た九種あり。謂く味心乃至善淨心もて、親近し修行するが故なり。神通に由るとは、謂く虛空藏等の三摩提に依りて親近するが故なり。方便に由るとは、謂く無分別智の攝に依るが故なり。和合に由るとは、諸の大菩薩は一果を以て一切果に入るが故なり。親近品究竟

梵住品第二十[一]

釋して曰く、菩薩の修する所の四梵住は此れ云何。[二]偈に曰く、

梵住に四種あり、　其の一一に四相あり、
治障と合智と、　轉境と及び成生となり。　（一）

釋して曰く、梵住とは、謂く[三]四無量、卽ち慈悲喜捨なり。此の中應に知るべし菩薩の四無量の一一に各四種の相あることを。一に治障、所治斷ずるに由るが故なり。二に合智、無分別智を得て對治勝るゝが故なり。三に轉境・衆生緣・法緣・無緣に由るが故なり。四に成生・勝業を作し衆生を成就するに由るが故なり。

問ふ、何等の衆生をか衆生緣と爲し、何等の法及び無緣を法緣及び無緣と爲す。[四]偈に曰く、

樂と苦と喜と煩惱と、　是の如きが衆生緣なり。
法緣は彼の法を說き、　無緣は卽ち彼の如なり。　（二）

釋して曰く、四種の衆生聚是れ衆生緣なり。一に[五]求樂の衆生聚、二に[六]有苦の衆生聚、三に[七]有喜の衆生聚、四に[八]煩惱の衆生聚なり。慈とは求樂の衆生聚に於て與樂の行を起し、悲とは有苦の衆生聚に於て拔苦の行を起し、喜とは有喜の衆生聚に於て不離の行を起し、捨とは諸受に煩惱を起す衆生聚に於て令離の行を起す。是れを衆生緣と名づく。法緣とは、卽ち是れ彼の四種の梵住法を說

【一】梵住(Brahmyā Vihāraḥ)。
【二】此の偈は梵住卽ち四無量心の一々に各四相あることを說示す。
【三】四無量心とは、一に慈(Maitrī)無量心、能く樂を與ふる心である。二に悲(Karuṇā)無量、能く苦を拔く心である。三に喜(Muditā)無量、他の離苦得樂を見て、慶悅の心を生ずるのである。四に捨(Upekṣā)無量、怨親平等にして怨を捨て親を捨つる心である。
【四】此の偈は衆生緣(Satvālambanā)と法緣(Dharmālambanā)無緣(Anālambanā)との意義を說示す。
【五】求樂(Saukhārtha)。
【六】有苦(Duḥkhārta)。
【七】有喜(Sukhita)。
【八】煩惱(Kliṣṭa)。

を顯示す。田に二種あり。一に衆生田、二に佛土田なり。問ふ、此の二云何が田と名づく。答ふ、自ら聞く所の法を衆生相續の中に於て建立するが故なり。住する所の佛土に隨つて清淨の因を修するが故なり。法の爲にして財の爲にせずとは、依止親近を顯示す。菩薩は但だ法利具足を以て依止と爲す。是の故に善知識に親近し、財利具足を以て依止と爲さざるが故なり。

問ふ、善知識に親近する種差別云何。[八]偈に曰く、

因果と及び隨法と、　內外と麁細と、
勝劣と亦た遠近と、　是を種差別と謂ふ。　(六)

釋して曰く、因果差別とは、謂く過去の親近を因と爲し、現在の親近を果と爲し。現在の親近を因と爲し、未來の親近を果と爲す。隨法差別とは、謂く善知識所流の法門を其の差別に隨つて修行するが故なり。內外差別とは、自ら親近するを內と爲し、他をして親近せしむるを外と爲す。麁細差別とは、自ら聽くを麁と爲し、內心に思惟するを細と爲す。勝劣差別とは、慢ある親近を劣と爲し、慢無き親近を勝と爲す。遠近差別とは、現在趣の中の親近を近と爲し、[九]生報趣の中の親近を遠と爲す。復た次に生報趣の中の親近を近と爲し、[一〇]後報趣の中の親近を遠と爲す。復た次に無間親近を近と爲し、隔世親近を遠と爲す。復た次に現在に於て親近を願ふを近と爲し、未來に於て親近を願ふを遠と爲す。

問ふ、何等をか善知識に親近するに最上と爲すを得る。[一一]偈に曰く、

善友に親近する勝は、　自意の五なること前の如し。
信と心と通と方便と、　和合等と別なるが故なり。　(七)

釋して曰く、前に諸佛を供養したてまつるに、五種の自意に由るが故に最勝と爲すを得、謂く淨信、深心、神通、方便、和合なりし如く、此の中善知識に親近する最勝も亦た爾なり。淨信に由る

【八】此の偈は善知識に親近する種の差別を說示す。
【九】生報趣とは順次生受の世界をいふ。
【一〇】後報趣とは順後次受の世界をいふ。
【一一】此の偈は最上の親近の何たるかを說示す。

應す、[四]根調なるに由るが故なり。寂靜とは、定と相應す、因を攝するに由るが故なり。惑除とは、信念と慧と相應す。煩惱斷ずるが故なり。德增とは、戒定慧を具して缺減せざるが故なり。有勇とは、他を利益する時疲倦せざるが故なり。經富とは、多聞を得るが故なり。覺眞とは、實義を了するが故なり。善說とは、顚倒せざるが故なり。悲深とは、希望を絕するが故なり。離退とは、一切時に於て恭敬して說くが故なり。[五]偈に曰く、

敬養と及び給侍と、　　身心亦た相應す。
願樂と及以(およ)び時と、　　下心とを緣起と爲す。　（三）

釋して曰く、此の偈上半は物親近を顯示し、下半は緣起親近を顯示す。物親近に三あり。一には財、謂く恭敬供養なり。二には身、謂く隨順給侍なり。三には心、謂く給侍する時身心相應す。緣起親近も亦た三種あり。一には願樂、二には知時、三には除慢なり。[六]偈に曰く、

貪著を離れんが爲に、　　隨順行を求めんが爲に、
隨順すること所敎の如く、　　此を以て彼をして喜ばしむ。　（四）

釋して曰く、此の偈上半は廻向親近を顯示し、下半は因親近を顯示す。廻向親近とは、貪著利養の爲にせざるが故なり。但だ隨順修行の爲にするが故なり。因親近とは、菩薩は教授せらるゝが如く隨順修行し、善知識に親近する因と爲す。何以故(なんとなれば)、菩薩は此の隨順を以て彼の善知識をして心に歡喜を生ぜしむるが故なり。[七]偈に曰く、

善く三乘を解し、　　自乘を成就せしむ、
成生と及び淨土と、　　法の爲にして財の爲にせず。　（五）

釋して曰く、此の偈は智と田と依止との三種の親近を顯示す。善く三乘を解し、自乘を成就せしむとは、智親近を顯示す。善く三乘を解するは、智に由るが故なり。成生と及び淨土とは、田親近

【四】根とは眼耳舌耳身意の六根をいふ。
【五】此の偈は善知識に親近するに、物親近と緣起親近の兩方面あることを說示す。
【六】此の偈は廻向親近と因親近とを說示す。
【七】此の偈は智親近と田親近と依止親近とを說示す。

信と心と通と方便と、　和合との五勝の故に。（五）

釋して曰く、五種の自意[を以て]如來を供養したてまつる。應に知るべし此の供養を最上供養と爲すことを。何をか謂つて五と爲す。一には[18]淨信、二には[19]深心、三には[20]神通、四には[21]方便、五には[22]和合なり。淨信とは、大乘の法に於て供養を說く處に淨信を生ずるが故なり。深心とは、此の心に九種あり、一に味心、二に隨喜心、三に希望心、四に無厭心、五に廣大心、六に勝喜心、七に勝利心、八に無染心、九に善淨心なり。此の九心は修諸波羅蜜の中に說くが如し。神通とは、謂く虛空藏等の諸三摩提に依るが故なり。方便とは、謂く無分別智方便の攝なるが故なり。和合とは、謂く一切諸の大菩薩一果に和合して一切果に入るが故なり。供養品究竟

[1]親近品第十九

釋して曰く、已に如來を供養したてまつることを說けり。云何が善知識に親近せん。偈に曰く、

[2]前に佛を供養したてまつるに、　略して說くに八種ありしが如く、
善友に親近するも、　應に知るべし八亦た然りと。（一）

釋して曰く、應に知るべし善知識に親近するも亦た依等の八種あることを。問ふ、此の中の八義復た云何。[3]偈に曰く、

調と靜と除と德增と、　有勇と阿含富と、
覺眞と善說法と、　悲深と退減を離るゝとなり。（二）

釋して曰く、此の偈は第一の依の親近を顯示す。若し善知識。十種の功德を具足する者は應に親近に堪ふべし。何をか謂つて十と爲す。一には調伏、二には寂靜、三には惑除、四には德增、五には有勇、六には經富、七には覺眞、八には善說、九には悲深、十には離退なり。調伏とは、戒と相

【一八】Adhimukti.
【一九】Āśaya.
【二〇】Vibhutva.
【二一】Upāya.
【二二】Parigraha.

【一】親近(Sevā)。
【二】此の偈は善知識に親近するに八種の差別あることを說示す。
【三】此の偈は八種の內容を說明す。

得可らざるが故なり。諸の衆生を成熟すとは、謂く田供養なり。衆生を田と爲し彼に供養を敎へ、善根を種えしむるが故なり。最後に十一種ありとは、謂く依止供養なり。此の依止に十一種あり。一には依止物、財物に由依りて供養するが故なり。二には依止思惟、味思惟・隨喜思惟・希望思惟に由依るが故なり。三には依止信、大乘を信じ、菩提心を發するに由るが故なり。四には依止願、弘く誓願を發すに由るが故なり。五には依止悲、衆生を憐愍するに由るが故なり。六には依止忍、難行を能く行ずるに由るが故なり。七には依止行、諸波羅蜜に由るが故なり。八には依止正念、如法不倒に由るが故なり。九には依止正見、如實覺了に由るが故なり。十には依止解脫、聲聞の煩惱滅するに由るが故なり。十一には依止眞實、大菩提を得るに由るが故なり。

問ふ、供養の種の差別云何。[一六]偈に曰く、

因と果と及び內と外と、　麁と細と大と小と、
亦た遠と近との差別[あり]、　是を供養の種と名づく。　(四)

釋して曰く、世等の差別を供養の種の差別と爲す。彼の過去を因と爲し現在を果と爲す。現在を因と爲し未來を果と爲す。是の如き因果を去來今と謂ふ。應に知るべし內とは自ら供養し、外とは他をして供養せしむることを。麁とは利供養、細とは隨順供養なり。小とは劣供養、大とは勝供養なり。慢あるものを劣と爲し、慢無き者を勝と爲す。三輪分別せざるが故なり。遠とは後時に供養せんと欲し、近とは卽今時に供養するなり。復た次に隔世供養者を遠と爲し、無間供養者を近と爲す。復た次に未來に發願して供養せんと欲するを遠と爲し、現在に發願して供養に卽く者を近と爲す。

問ふ、何等をか如來を供養したてまつるに最上供養と爲すや。偈に曰く、

[一七]諸の如來を供養したてまつる、　最上は自意に由る、

【一六】此の偈は供養の種の差別を說示す。

【一七】此の偈は最上の供養の何たるかを說示す。

卷の第九

供養品第十八[一]

釋して曰く、已に業の聚集する所の諸行を說けるも、未だ如來を供養することを說かず。此の供養を今當に說くべし、偈[二]に曰く、

依[三]と 物[四]と 緣[五]と 廻向[六]と、　因[七]と 智[八]と 田[九]と 依止[一〇]と、
是の如き八供養[を以て]、　諸の如來を供養したてまつる。　（一）

釋して曰く、略して如來を供養したてまつることを說くに八種あり。何をか謂ひて八と爲す。一には依供養、二には物供養、三には緣起供養、四には廻向供養、五には因供養、六には智供養、七には田供養、八には依止供養なり。問ふ、此の八義云何ん。偈[一一]に曰く、

[一には] 現前[一二] 不現前[一三]、　[二には] 衣服[一四]飲食等、
[三には]深く善淨の心を起す、　[四には] 二聚[一五]を滿さんが爲め、　（二）
[五には]常に佛世に生きんと願ふ、　[六には]三輪分別せず、
[七には]諸衆生を成熟す、　[八には]最後に十一種あり。　（三）

釋して曰く、此の二偈八句は前の八義を顯示す。應に知るべし現前不現前とは、謂く依供養なり。現在及び過去未來の諸佛に依りて供養するが故なり。衣服飲食等とは、謂く物供養なり。衣服等を以て供養するが故なり。深く善淨心を起すとは、謂く緣起供養なり。深淨の信心を以て供養するが故なり。二聚を滿さんが爲めとは、謂く廻向供養なり。福智の二聚を滿さんが爲めに供養するが故なり。常に佛世に生ぜんと願ふとは、謂く因供養なり。宿願あるに由りて佛世に生じ、我をして有益不虛供養せしめんと願ふが故なり。三輪分別せずとは、謂く智供養なり。設供・受供・供具の三事

【一】 供養(Pūjā)。
【二】 此の偈は如來を供養するに八種あることを說示す。
【三】 Āśraya.
【四】 Vastu.
【五】 Nimittā.
【六】 Pariṇāmana.
【七】 Hetu.
【八】 Jñāna.
【九】 Kṣetra.
【一〇】 Niśrayā.
【一一】 以下の二偈は供養の八義を細說す。
【一二】 Samukha.
【一三】 Vimukha.
【一四】 Cīvara.
【一五】 二聚とは福と智とをいふ。

菩薩の衆を攝せんと欲するや、　此の四方便に依る、
大利と及び易成と〔の故に〕、　三益を讃するを得るが故に。　(四六)

釋して曰く、若し諸の菩薩、徒衆を攝せんと欲せば、一切皆な須らく此の四攝に依りて以て方便と爲すべし。何以故、一切の大利成就を得るに由るが故なり。是の樂易方便に由るが故なり。諸佛の稱揚を得るに由るが故なり。[一二六]偈に曰く、

四攝は三世に於て、　恒時に衆生を攝す。
衆生を成就するの道は、　餘に非ず唯だ四攝なり。　(四七)

釋して曰く、此の四攝は三世の中に於て一切衆生を已に攝し、當に攝すべし、現に攝す。是の故に四攝は是れ衆生を成就するの道なり。餘の諸道に非ず。餘道は無體なるが故なり。

六度の四攝を別說し已れり。次に一偈を以て前義を總說せん。[一二七]偈に曰く、

不著と及び寂靜と、　能耐と將た意勇と、
不動と幷に離相と。　亦た攝は衆生を攝す。　(四八)

釋して曰く、此の偈上の三句は六度の義を結び、下の一句は四攝の義を結ぶ。偈の義は前解の如し。菩薩は此の六行を以て此の四攝を行じ、六波羅蜜を顯示し、自利利他を成就す。四攝の成就も亦た爾なり。是の故に其の次第の如く、先に六度を說き、後に四攝を說く。度攝品究竟

【一二五】此の偈は菩薩の大衆を攝するには、皆この四攝法によることを說示す。

【一二六】此の偈は菩薩の四攝法は三世を通貫する旨を說示す。

【一二七】此の偈は前來說けるところの總結である。

問ふ、四攝の業云何。[一三二] 偈に曰く、

器ならしめ及び信ぜしめ、　行ぜしめ亦た解せしむ。
是の如き四事を作すこと　次第に四攝の業なり。　(四三)

釋して曰く、布施とは、能く法に於て器を成ぜしむ。財に隨順すれば則ち受法に堪ゆるに由るが故なり。愛語とは、能く法に於て信を起さしむ、法義を敎へて彼の疑を斷ずるに由るが故なり。利行とは、能く法に於て行を起さしむ、如法に依行するに由るが故なり。同行とは、能く彼をして解脱を得せしむ、淨を行じて長時なれば饒益を得るに由るが故なり。是れを四攝の業と爲す。

問ふ、世尊は亦た二攝を說きたまふ。此れ云何。[一三三] 偈に曰く、

四體に二攝を說く、　財攝及び法攝なり。
財の一法に三あり、　次第に四攝を攝す。　(四四)

釋して曰く、此の四攝の體は世尊餘處に說きたまふに二攝と爲す。謂く財攝と法攝となり。即ち二攝を以て四攝を攝す。財攝は初の一攝を攝し、法攝は後の三攝を攝す。問ふ、云何が後の三を攝する。答ふ、法に三種あり。一に所緣法、二に所行法、三に所淨法なり。其の次第の如く後の三攝を攝すること應に知るべし。[一三四] 偈に曰く、

下・中・上の差別、　是の如き四攝の種は、
倍無と及び倍有と、　亦た純と合して三益[あり]　(四五)

釋して曰く、四攝の種の差別に三あり。謂く下・中・上なり。諸の菩薩は三乘の人差別を攝するに由るが故なり。此の三種の差別に由つて次第に復た三益あり。一に倍無益、二に倍有益、三に純有益なり。倍無益とは、謂く解行地菩薩の攝なり。倍有益とは、謂く入大地菩薩の攝なり。純有益とは、謂く八地已上の菩薩の攝なり。彼れ決定して能く衆生をして成就せしむるが故なり。偈に曰く、

【一三二】此の偈は四攝法の業の何たるかを說示す。

【一三三】此の偈は四攝法を財と法との二つに攝する所以を說示す。

【一三四】此の偈は四攝法の種の差別に三攝あることを說示す。

謂く施施戒施乃至般若施なり。他に於て檀等を相續し建立するが故なり。依法とは、所有諸經、所有檀等の諸義の顯示なり。所有諸經、所有檀等の諸義の顯示は處處に相攝すること應に知るべし。爲因とは、謂く檀を戒等の因と爲すなり。何以故、財を顧みざる者は能く戒等を行ずるが故なり。戒は亦た施等の因なり、何以故、比丘受護者は能く一切の所有受を捨するが故なり。住戒者は能く忍等を具足するが故なり。又攝善法戒を受くるは檀等の爲めの故なり。是の如く忍等の互に因を爲すこと其の所應作の如し。

是の如く六波羅蜜の義を説き已れり。次に四攝行を説かん。[一一二]偈に曰く、

[一一三]布施と將た　[一一四]愛語と、　[一一五]利行と丼に　[一一六]同利と、
施平と及び彼説と、　建立と亦た自行と、　（四一）

釋して曰く、四攝とは、一に布施攝、二に愛語攝、三に利他攝、四に同利攝なり。施平とは、即ち布施攝なり。彼説とは　謂ゆる愛語攝なり、彼の波羅蜜の義を説くが故なり。建立とは、謂ゆる利行攝なり、衆生を建立するに、波羅蜜の中に於てするが故なり。自行とは、謂ゆる同利攝なり、他を建立し已つて自も亦た是の如く行ずるが故なり。問ふ、何が故に此の四攝體を説くや。答ふ、是れ他を攝する諸方便を説くなり。[一一七]偈に曰く、

他の四方便を攝す、　即ち是れ四攝の性なり。
[一一八]隨攝と亦た　[一一九]攝取と、　[一二〇]正轉と及び　[一二一]隨轉となり。　（四二）

釋して曰く、布施とは、是れ隨攝方便なり、財施を他身に隨つて起攝するに由るが故なり。愛語とは、是れ攝取方便なり、無知なる疑惑者に受義せしむるが故なり。利行とは、是れ正轉方便なり、此れ諸の善轉を行ずるに由るが故なり。同利とは、是れ隨轉方便なり、菩薩は自ら説くが如く、衆生の知を行じ已つて先に未だ行ぜざる善も亦た隨行するが故なり。

【一〇五】Atuṣṭi-vīrya.
【一〇六】此の偈は菩薩の精進の退治差別を説明す。
【一〇七】此の偈は六度の相成に四義あることを説示す。
【一〇八】Anyonya-saṃgraha.
【一〇九】Prabhedata.
【一一〇】Dharmata.
【一一一】Nimittā.
【一一二】此の偈は菩薩の四攝行を説示す。
【一一三】Dāna.
【一一四】Priyākhyāna.
【一一五】Arthacaryā.
【一一六】Samārthata.
【一一七】此の偈は四攝行には四種の方便を含むことを説示す。
【一一八】Anugrakara.
【一一九】Grāhaka.
【一二〇】Pravartaka.
【一二一】Anuvartaka.

亦た二下上の覺は、　　利に小大あるが故なり。　（三八）

釋して曰く、彼の精進は人の差別に依りて復た三種及び二種を說く。三種とは三乘行人の差別に依り、其の次第の如く下中上精進の故なり。問ふ、何に因りてか復た二種なるや。答ふ、下上覺の故なり。下覺とは、二乘行人に依り、上覺とは、大乘行人に依り、其の次第の如く小利及び大利を說くが故なり。何以故、自利の爲めの故なり、他利の爲めの故なり。[一〇六]偈に曰く、

財著と煩惱著と、　　厭著と知足著との、

四著は退する能はざる、　　對治分の四種なり。　（三九）

釋して曰く、此の偈は精進の退治差別を說く。四著を對治するに由り四不退あるを四種の對治差別と說く。問ふ、此れ云何。答ふ、檀等の諸行は四著を礙と爲すに由るが故に行ずるを得ず。一には財著、財に於て極めて悋なるが故なり。二には煩惱著、財に於て染を起すが故なり。三には厭著、檀等の行に於て退屈あるが故なり。四には知足著、少施等に於て喜び滿足するが故なり。精進を行ずる者は此の如き四著を對治し、能く不退を得るが故に、四種の對治差別を說く。

已に六波羅蜜の功德を說けり。次に六波羅蜜の五顯を說かん。[一〇七]偈に曰く、

[一〇八]相攝と及び[一〇九]差別と、　　[一一〇]依法と亦た[一一一]爲因と、

六度互に相成じ、　　一切種を分別す。　（四〇）

釋して曰く、六波羅蜜の相成に自ら四義あり。一に相攝、二に差別、三に依法、四に爲因なり。相攝とは無畏施は、戒忍の二度を攝し、此の二度に由りて能く無畏を與ふるが故なり。法施は定智の二度を攝し、此の二度に由りて能く法を與ふるが故なり。俱施は精進一度を攝し、此の一度に由りて能く二施を行ずるが故なり。問ふ、戒は幾種をか攝するや。答ふ、攝善法戒は一切の檀等を皆な攝す。是の如く忍等互に攝すること其の所應作の如し。差別とは、檀等の六種卽ち六施を爲す。

根增長して、能く身の懈怠を破する力。（三）念力とは念根增長して、能く諸の邪念を破する力。（四）定力とは定根增長して、能く諸の亂想を破する力。（五）慧力とは慧根增長して、能く三界の諸惑を破する力。要するに前の五根が增長して、五障を治する勢力を有するものを五力といふのである。

【九九】　七覺分は七覺支とも七菩提分ともいふ。（一）擇法覺支とは智慧を以て法の眞僞を簡擇すること。（二）精進覺支とは勇猛の心を以て、邪行を離れ眞法を行ずること。（三）喜覺支とは心に善法を得て歡喜を生ずること。（四）輕安覺支とは身心の麤重を斷除して、身心をして輕利安適ならしむること。（五）念覺支とは常に定慧を明記して忘れず、之をして均等ならしむること。（六）定覺支とは精神を統一して散亂せしめざること。（七）行捨覺支とは諸の妄謬を捨て、一切の法を捨て、平心坦懷更に追憶せざること。

【一〇〇】　此の偈は菩薩の精進の種に五異あることを說示す。

【一〇一】　Samnaha-virya.

【一〇二】　Prayoga-virya.

【一〇三】　Alina-virya.

【一〇四】　Akṣobhya-virya.

釋して曰く、此の偈は精進の業の差別を說く。此の業の差別に七種あり。一に現法樂住を得、二に世間法を得、三に出世間法を得、四に資財を得、五に動靜を得。動靜とは、是れ出間の究竟ならざるに由るが故なり。六に解脫を得。解脫とは、身見を斷ずるに由るが故なり。七に菩提を得。菩提とは、大菩提に由るが故なり。偈に曰く、

[九五]增減と及び增上と、　捨障と亦た入眞と、
轉依と大利との、　六を精進の種と說く。　(三六)

釋して曰く、此の偈は精進の種の差別を說く。種の差別に六種あり。一に增減精進、謂はく[九六]四正勤なり、二惡法減じ、二善法增すが故なり。二に增上精進、謂はく[九七]五根なり、解脫法に於て增上義を爲すに由るが故なり。三には捨障精進、謂はく[九八]五力なり。彼の障礙の礙すること能はざるに由るが故なり。四には入眞精進、謂はく[九九]七覺分なり、見道の建立に由るが故なり。五には轉依精進、謂はく八聖道分なり。修道是れ究竟轉依の因なるに依るが故なり。六には大利精進、謂ばく六波羅蜜なり。自利利他に由るが故なり。[一〇〇]偈に曰く、

種に復た五異あり、　弘誓と將た發行と、
無下と及び不動と、　第五を無厭と說く。　(三七)

釋して曰く、五異とは、一に[一〇一]弘誓精進、謂はく行を發起せんことを欲するが故なり。二に[一〇二]發行精進、謂はく諸善を現行するが故なり。三に[一〇三]無下精進、謂はく大果を得て下體無きが故なり。四に[一〇四]不動精進、謂はく寒熱等の苦動かす能はざるが故なり。五に[一〇五]無厭精進、謂はく少得を以て足れりと爲さざるが故なり。此の五種は經中に說く所の如く、弘誓精進あり、現起精進あり、勇猛精進あり、堅固精進あり、不捨佛道精進あり。諸の善法の中に於て其の次第の如く應に知るべし。偈に曰く、

三種の下中上は、　三乘に由依りて爾り。

【九五】此の偈は菩薩の精進の種の差別を說明す。

【九六】四正勤とは四意斷とも四正勝ともいふ。
一に已に生じたる處に對して、除斷のために勸めて精進す。
二に未だ生ぜざる惡に對して、更に生ぜざらしめんがために勸めて精進す。
三に未だ生ぜざる善に對して、生ぜしめんがために勸めて精進す。
四に已に生じたる善に對して、增長せしめんがために勸めて精進す。
要するに一心に精進して此の四法を行ずるが故に四正勸といふ。

【九七】五根とは略して信進念定慧といふ。(一)信根とは三寶四諦等の敎を信ずること。(二)精進根とは勇猛に善法を修すること。(三)念根とは正法を憶念すること、(四)定根とは精神を統一して散失せしめざること。(五)慧根とは眞理を思惟すること。要するに此の五法は能く他の善法を生ずる本となるが故に五根といふ。

【九八】五力の名義は前の五根と同じである。(一)信力とは信根增長して、諸の邪信を破する力。(二)精進力とは精進

菩薩は一切を捨つるも、　大饒益の想を得。（三二一）

釋して曰く、此の偈は菩薩の大悲の差別を顯はす。偈に曰く、

乞者自在に取ること、　路傍の果を取るが如し。
菩薩は能く大に捨つ。　餘人は此の事無し。（三二二）

釋して曰く、此は菩薩の無着の差別を顯はす。

問ふ、種々の不共功德の差別を説き已れり。精進の不共功德の差別復た云何。[八六]偈に曰く、

[八七]勝と[八八]因と[八九]依と[九〇]業と[九一]種と、　[九二]對治等と異るが故に、
是の如き六種の義、　精進に差別あり。（三二三）

釋して曰く、精進に六種の差別あり。一に勝の差別、二に因の差別、三に依止の差別、四に業の差別、五に種の差別、六に對治の差別なり。此の偈は總じて擧げたるなり。餘偈は別釋なり。偈に曰く、

[九三]白法は進を上と爲す、　進は亦た是れ勝因なり。
諸の善法を得るに及んで、　進は則ち依止と爲る。（三二四）

釋して曰く、此の偈は精進の勝の差別、因の差別、依止の差別を説く。白法は進を上と爲すとは、最勝の差別を説く。一切の善法の中に於て精進を説くを最勝と爲すに由るが故なり。進は亦た是れ勝因なりとは、因の差別を説く、精進は是れ無上の因と説くに由るが故なり。諸の善法を得るに及んで、進は則ち依止と爲るとは、依止の差別を説く。依止に由つて精進は一切の善法を得るが故なり。[九四]偈に曰く、

現業と世法と、　出世と及び資財と、
動靜と及び解脫と、　菩提との七を業と爲す。（三二五）

【八六】此の偈は精進に六種の差別あることを説示す。
【八七】Pradhānya.
【八八】Kāraṇa.
【八九】Āśraya.
【九〇】Karman.
【九一】Prakāra.
【九二】Pratipakṣa.
【九三】此の偈は精進の六種の差別の中、前三の差別を説明す。
【九四】此の偈は菩薩の精進の業の差別を説明す。

を得るなり。偈に曰く、

乞者の所欲に隨つて　菩薩は一切を捨す。
彼が求むるところは身の爲めの故なり。　彼を利せんが爲めに百種施す。　(一七)

釋して曰く、此の偈上半は總說なり。謂はく彼の所求に隨つて菩薩は悉く捨す。下半は解釋なり。謂はく彼の乞者は自利の爲めの故に一切得んと欲し、菩薩は自利の爲めの故に百種悉く捨す。偈に曰く、

身を捨てゝ尙ほ苦とせず、　何に況んや餘財を施すをや、
出世の喜を得るが故に、　苦を起すこと是れ無上なり。　(一八)

釋して曰く、菩薩は身を捨つる時心に由るが故に苦を生ぜず。此の心は菩薩の出世間を顯示す。何以故、歡喜を得るが故なり。問ふ、此の喜は何より得るや。答ふ、苦を起すより得。是の故に苦を起すは是れ菩薩の無上なり。是の故に菩薩は出世間の上に在り。偈に曰く、

乞者は一切を得て、　喜を得るも大喜に非ず。
菩薩は一切を捨つ、　彼の喜を喜ぶこと大なるが故なり。　(一九)

釋して曰く、乞者の須つ所菩薩皆な捨す。乞者は喜を得るも此の喜は是れ大喜に非ず。問ふ、何が故ぞ。答ふ、菩薩一切皆な捨して彼の財を得るを喜ぶ、此の喜を大と爲す。彼の喜を奪ふに由るが故なり。偈に曰く、

乞者一切を得て、　財あるも富を見るに　非ず。
菩薩は一切を捨て　無財なるも大富を見る。　(二〇)

釋して曰く、此の偈は菩薩の財の無盡の差別を顯はす。偈に曰く、

乞者は一切を得るも、　大饒益の想に非ず。

釋して曰く、八無上とは、一に依、二に類、三に緣、四に迴向、五に因、六に智、七に田、八に依止なり。問ふ、此の八は六度に於て云何が無上を得る。答ふ、檀の依とは、菩薩に依るを以ての故なり。檀の類とは、此に三種あり、一に物施、自の身命を捨するを以ての故なり。二に無畏施、惡道生死の畏を救濟するを以ての故なり。三に法施、大乘の法を說くを以ての故なり。檀の緣とは、大悲を以て緣起と爲すが故なり。檀の迴向とは、大菩提を求むるを以ての故なり。檀の因とは、先世の施業の薰習せる種子を以て因と爲すが故なり。檀の智とは、無分別智を以て三輪を觀察し、施者受者財物を分別せざるが故なり。檀の田とは、田に五人あり。一に求人、二に苦人、三に無依人、四に惡行人、五に具德人なり。應に知るべし此の中具德の勝人を以て無上と爲すことを。檀の依止とは、三種の依止に由るが故に、一に依止信向、二に依止思惟、三に依止三昧なり。依止信向とは分別修中信思惟所說の如し。依止思惟とは、分別修中味思惟、隨喜思惟、希望思惟所說の如し。依止三昧とは、謂はく金剛藏等の定に依る、勢力依止修中所說の如し。是の如く依等無上なるが故に檀無上を得。檀の八無上の如く戒等の五波羅蜜の八無上も應に知るべし亦た爾りと。此の中戒の品類無上とは、謂はく菩薩の戒なり。忍の品類無上とは、謂はく來つて菩薩を殺す者は卑下劣弱なり。精進の品類無上とは、謂はく諸波羅蜜を修して對治する所の斷なり。禪の品類無上とは、謂はく菩薩の三摩提なり。智の品類無上とは、謂はく如如に境を緣ず。戒等は勝田の無上なるに由るとは、謂はく大乘の法なり。餘の六無上は檀中に說けるが如し。

復た次に、檀及び精進に復た不共差別の功德あり。問ふ、檀の差別は云何。[八五] 偈に曰く、

一に施し樂を得せしめ、　多劫自ら苦を受け、

尙ほ捨すは愛深なるが爲めなり。　何に況んや利彼を翻するをや。　（二六）

釋して曰く、若し諸の菩薩は一衆生に施して其をして樂を得せしむるをや。自身は多劫に大福利

【八五】以下七偈は布施の不共の功德を讃美す。

は是の如く他の爲めに精進す、豈に復た難行せん、是の故に精進清淨なり。[六八]偈に曰く、

　[六九]少樂、二、[七〇]自樂、　[七一]著、[七二]退、[七三]盡、[七四]癡の故に、
　是を三人禪と說く、　菩薩禪は彼を翻す。　(一一三)

釋して曰く、此の偈は禪波羅蜜の清淨の功德を顯示す。少樂とは、世間禪を謂ひ、二自樂とは、聲聞禪及び緣覺禪を謂ふ。著とは、若しは世間禪は自見に著し、若しは二乘禪は涅槃に著す。退とは、世間禪を謂ひ、盡とは、二乘禪を謂ふ、無餘涅槃の時盡くるが故なり。癡とは、彼の三人の禪、其の所應の如し。染癡あり染癡無きが故なり。菩薩禪は彼を翻すとは、謂はく彼の三人禪を翻すなり。何以故(なんとなれば)、多樂自樂他樂の故に、不著不退無盡無癡の故なり。是を禪定の清淨の功德と謂ふ。[七五]偈に曰く、

　暗觸及び二燈、　是の如きは三人の智なり。
　譬へば日光の照すが如く、　菩薩の智は比無し。　(一一四)

釋して曰く、此の偈は般若波羅蜜の清淨の功德を顯示す。譬へば暗中に手を以て物に觸るゝが如く、凡夫人の智亦た是の如し。何以故、少境を得るが故なり。明了ならざるが故なり。恒定ならざるが故なり。譬へば二燈の室中に物を照らすが如く、聲聞人の智及び緣覺の智も亦た是の如し。何以故、少境を得るが故なり。漸く明了なるが故なり。未だ極淨ならざるが故なり。譬へば日光の物を照すが如く菩薩の智も亦た是の如し。何以故、遍滿を得るが故なり。明了を以ての故なり。極清淨の故なり。是の如く無比なり。是を菩薩の般若の清淨の功德と謂ふ。

復た次に、六波羅蜜は後の八種の無上功德あり。[七六]偈に曰く、

　[七七]依と[七八]類と[七九]緣と[八〇]迴向と、　[八一]因と[八二]智と[八三]田と[八四]依止と、
　是の如き八種の勝は、　無上の義なること應に知るべし。　(一一五)

【六八】此の偈は菩薩の禪定波羅蜜多の清淨の功德を說示す。
【六九】Alpasukhaṁ.
【七〇】Ātmasukhaṁ.
【七一】Līnaṁ.
【七二】Parihāṇikaṁ.
【七三】Kṣayi.
【七四】Samohaṁ.
【七五】此の偈は菩薩の般若波羅蜜多の清淨の功德を說示す。
【七六】此の偈は六度に八種の無上の功德あることを說示す。
【七七】Āśraya.
【七八】Vastu.
【七九】Nimitā.
【八〇】Pariṇāmana.
【八一】Hetu.
【八二】Jñāna.
【八三】Kṣetra.
【八四】Niśraya.

を作す。豈に他の眷屬を壞するを欲し、而も兩舌を作さんや。菩薩は大悲恒に一切衆生の苦を拔除せんと欲し、他苦の中に於て極めて怖懼を生ず。豈に他を苦しめんが爲に惡口を作すを欲せんや。菩薩は恒に正勤を行じ、恒に一切衆生を成就せんと欲す、豈に他を成就せずして綺語を作すを欲せんや。是の故に菩薩は能く極めて此の三語の過を遠離す。[六二]偈に曰く、

[六三]普施と及び[六四]有悲と、　極善緣起の法と[六五][あり]、
何に因つてか意地の三煩惱を、　耐ふること能はざらん。　（二〇）

釋して曰く、此の偈は意の三惡行を遠離することを明す。菩薩は普ねく一切の物を施すに由るが故に貪煩惱を離れ、大悲に由るが故に瞋煩惱を離れ、極善緣起の法に由るが故に邪見煩惱を離る。是の如き等の破戒對治の差別是れ菩薩戒の清淨の功德なり。[六六]偈に曰く、

損者は益想を得、　苦事に喜想生ず。
菩薩既に是の如し、　忍誰れか何の忍ぶ所ぞ。　（二一）

釋して曰く、此の偈は羼提波羅蜜の清淨の功德を顯示す。損者は益想を得とは、菩薩は彼の不饒益者に於て饒益の想を得。應に須らく忍辱すべし。何以故、忍辱の因を成ぜんが爲めの故なり。苦事に喜想生ずとは、菩薩は苦を受くる事の中に於て更に喜想を生ず。何以故、利他の因を成就せんが故なり、菩薩は既に不饒益の想の起る處及び苦想の起る處無し、誰れか邊に於て忍を起し、何事に於てか忍を起さん。[六七]偈に曰く、

菩薩は他想斷す、　他を愛すること自愛に過ぐ、
他の難行の事に於て、　精進即ち無難なり。　（二二）

釋して曰く、此の偈は毘梨耶波羅蜜の清淨の功德を顯示す。菩薩は他の爲めに難行精進して而も不難を得。何以故、他想斷ずるが故なり。及び一切時に他愛を生じ、自愛に過ぐるが故なり。菩薩

【六二】此の偈は菩薩は意の三惡行を遠離することを擧示す。
【六三】Sarvapada.
【六四】Krpālu.
【六五】Pratityadharma.
【六六】此の偈は菩薩の忍辱波羅蜜多の清淨の功德を說示す。
【六七】此の偈は菩薩の精進波羅蜜多の清淨の功德を說示す。

を生ぜざるに由るが故なり。菩薩は一切時に乞求者に於て彼の三喜を翻し、亦た三喜を生ず。一には彼を見るを得る時喜を生じ、二には彼の願を遂ぐる時喜を生じ、三には彼を求見し求逐する時喜を生ず。應に知るべし彼の求者の三喜は菩薩の三喜に如かざることを。何以故(なんとなれば)、菩薩は大悲を具足するが故なり。偈に曰く、[五五]

自身、財、眷屬[に於て]　悲に由りて恒に施を喜ぶ、
彼の三遠離行は、　何に因つてか禁守せざらんや。　（一七）

釋して曰く、此より下は尸羅波羅蜜の清淨の功德を顯示す。此の偈は身の三惡行を遠離することを明す。菩薩は自身・自財・自眷屬の中に於て、大悲に由るが故に尙ほ恒に歡喜して他に施すを好む、況んや他身・他財・他眷屬の中に於て三種の遠離を行じて禁守せざらんや。[五六]偈に曰く、

不顧[五七]と及び平等[五八]と、　無畏[五九]と亦た普施[六〇]と[を以て]、
悲極なり。何の因ありてか、　他を惱まして妄語せんや。　（一八）

釋して曰く、此の偈は妄語惡行を遠離するを明す。凡そ妄語を起すに四因緣あり。一には自利の爲めなり、身命を戀ふが故に。二には利他の爲めなり、所愛を利するが故に。三には怖畏の爲めなり、王法を懼るゝが故に。四には求財の爲めなり、所須あるが故に。菩薩は則ち爾らず、一には不顧、身命を戀はざるが故なり。二には平等、他身と自と等心を得るが故なり。三には無畏、五怖を離るゝが故なり。四には布施、一切の物を以て一切に施すが故なり。菩薩の悲愍は恒に深し。復た何の因ありてか妄語を起さん。[六一]偈に曰く、

平等の利益を作し、　大悲他苦を懼る、
亦た勸めて生を成熟し、　極めて三語の過を遠ざく。　（一九）

釋して曰く、此の偈は餘の三語の惡行を遠離するを明す。菩薩は一切衆生に於て恒に平等の利益

【五五】此の偈は菩薩は身の三惡行を離るゝことを顯示す。

【五六】此の偈は菩薩は妄語を遠離することを明す。
【五七】Nirapekṣa.
【五八】Samacitta.
【五九】Nirbhī.
【六〇】Sarvaprada.

【六一】此の偈は菩薩は惡口兩舌綺語の三惡語を遠離することを顯示す。

三摩提を攝して修習するが故なり。禪を捨て下處に生ずとは、無上禪の樂住を棄捨し、來つて下劣處に就いて受生す。何以故、大悲に由るが故なり。[四七]偈に曰く、

恒に眞と餘境とを了じて、　佛斷尙ほ著せず。[四八]
智に因りて菩提を建つ、　悲は智を攝して無盡なり。　（一四）

釋して曰く、此の偈は般若波羅蜜の利他功德を顯示す。恒に眞と餘境とを了ずとは、了眞は第一義諦平等相を謂ふ、人法二無我智の故なり。餘境は無邊を謂ふ、名相等の差別の故なり。佛斷尙ほ著せずとは、佛斷は涅槃を謂ふ、諸の菩薩は般若を修するも尙ほ佛涅槃に著せず、何に況んや生死を求むるをや。此の中前五波羅蜜は無分別智の攝を以ての故に、乃至無餘涅槃の功德無盡なり。般若波羅蜜は大悲の攝なるを以ての故に、恒に衆生を捨てず、功德無盡なり。

[この]六偈は別に利他の功德を說き已れり。次に一偈を以て前義を總說せん。[四九]偈に曰く、

[五〇]廣大と及び[五一]無求と、　[五二]最勝と[五三]無盡と、
當に知るべし一々の度は、　四德悉く皆な同じと。　（一五）

釋して曰く、四功德とは、一に廣大功德、二に無求功德、三に最勝功德、四には無盡功德なり。前六偈の第一句は廣大の功德を顯はす。多く衆生を利するが故なり。第二句は無求の功德を顯はし、第三句は最勝の功德を顯はし、第四句は無盡の功德を顯はす。

復た次に、六波羅蜜は復た清淨の功德あり。[五四]偈に曰く、

得見と及び遂願と、　幷求を合して三喜なり。
菩薩は喜相を翻す、　彼は悲極を退するが故に。　（一六）

釋して曰く、此の偈は檀波羅蜜の清淨の功德を顯示す。彼の乞求者は菩薩に於て三喜を生ず。一には得見の時喜を生じ、二には遂願の時喜を生じ、三には求見求遂の時喜を生ず。不見不遂の時喜

【四七】此の偈は般若波羅蜜多の利他の功德を說示す。
【四八】佛斷とは涅槃の義である。
【四九】此の偈は六度の一々に各四種の功德あることを說示す。
【五〇】廣大(Audārya)。
【五一】無求(Anāmiṣatva)。
【五二】最勝(Mahārthā)
【五三】無盡(Aṣayatā)。
【五四】此の偈は布施波羅蜜多の清淨の功德を說示す。

戒に因りて菩提を建つ、　智は戒を攝して無盡なり。　（一〇）

釋して曰く、此の偈に尸羅波羅蜜の利他功德を顯示す。恒時に禁・勸を守るとは、菩薩に三聚戒あり。一に[四一]律儀戒、二に[四二]攝善法戒、三に[四三]攝衆生戒なり。初戒は禁妨を以て體と爲し、後の二戒は勸勇を以て體と爲す。諸の菩薩は一切時恒に守護するが故なり。戒及び善趣を離るとは、謂はく得戒に著せず、及び愛果を求めざるが故なり。[四四]偈に曰く、

恒時に他毀を耐へ、　求と畏と無能とを離れ、
忍に因りて菩提を建つ、　智は忍を攝して無盡なり。　（一一）

釋して曰く、此の偈は羼提波羅蜜の利他功德を顯示す。恒時に他毀を耐ゆとは、諸の菩薩は一切時に於て、若し一切衆生の一切極惱事を以て來り、菩薩を毀るも、菩薩は悉く能く忍受するが故なり。求と畏と無能とを離るとは、報恩を求めず、善趣を求めず、怖畏を爲さず、無能を爲さゞるが故なり。[四五]偈に曰く、

恒時に誓つて勤作し、　殺賊を無上と爲し、
進に因りて菩提を建つ、　智は進を攝して無盡なり。　（一二）

釋して曰く、此の偈は毘梨耶波羅蜜の利他功德を顯示す。恒時に誓つて勤作すとは、諸の菩薩の比無く、精進を修するに二自性あり。一に弘誓を自性と爲し、二に勤方便を自性と爲す。殺賊を無上と爲すとは、菩薩の精進を修するは、但だ自他煩惱の賊を殺さんが爲め、無上菩提を得んが爲の故なり。[四六]偈に曰く、

恒時に諸定を習し、　禪を捨て下處に生ず、
定に因りて菩提を建つ、　智は定を攝して無盡なり。　（一三）

釋して曰く、此の偈は禪波羅蜜の利他功德を顯示す。恒時に諸定を習すとは、諸の菩薩は無邊の

【四一】律儀戒(Saṃvara-śīlam)。
【四二】攝善法戒(Kuśaladharmasaṃgrāhaka-śīlam)。
【四三】攝衆生戒(Sattvārtha-kriyā-śīlam)。
【四四】此の偈は六波羅蜜の功德の中、忍辱波羅蜜の利他の功德を說示す。
【四五】此の偈は六波羅蜜の功德の中、精進波羅蜜の利他の功德を說示す。
【四六】此の偈は禪波羅蜜の利他の功德を說示す。

釋して曰く、檀は七著を離るゝが故に、不著に七種を說くとは、彼の檀の著に七種あり。一に資財著、二に慢緩著、三に偏執著、四に報恩著、五に果報著、六に障礙著、七に散亂著なり。此の中障礙著とは、謂く檀所對治の貪なり、隨眠斷ぜざるが故に、散亂著とは、散亂に二種あり。一に下意散亂、小乘を求むるが故に。二に分別散亂、三輪を分別するが故に。菩薩は檀を行ずる時、此の七著を遠離するに由るが故に七不著を說く。應に知るべし餘の五度の、障治の七皆な然ることをとは、應に知るべし戒等の五波羅蜜も亦た各七著ありと。七著を離るゝが故に亦た各七不著を說く。此の中差別あるは檀波羅蜜の資財著を離るゝを翻すなり。卽ち是れ戒等の五波羅蜜は、第一著を離る。所謂戒は破戒著を離れ、忍は瞋恚著を離れ、精進は懈怠著を離れ、禪定は亂心著を離れ、智慧は愚癡著を離るゝなり。戒等の障礙著を離るゝは、彼の障隨眠を皆な斷除するが故なり。戒等の分別著を離るゝは、其の三輪不分別に隨ふが故なり。

已に六波羅蜜の治障を說けり。次に六波羅蜜の功德を說かん。此の中先づ利他の功德を說かん。[三九]偈に曰く、

恒時に身命を捨す、　求を離れ他を愍むが故に。
施に因り菩提を建つ、　智は施を攝して無盡なり。　（九）

釋して曰く、此の偈は檀波羅蜜の利他の功德を顯示す。恒時に身命を捨すとは、謂はく諸の菩薩は、一切時に自の身命を施し、一切の求者に與ふるが故なり。求を離れ他を愍むが故にとは、報恩及以び愛果を求めず、大悲を因と爲すに由るが故なり。施に因りて菩提を建つとは、是の施に因りて、已に一切衆生を建立す。三乘菩提に於るが故なり。智は施を攝して無盡なりとは、此の施は無分別智の所攝、乃至無餘涅槃に由り、其の福無盡無窮にして一切衆生を利益するが故なり。[四〇]偈に曰く、

恒時に禁・勸を守り、　戒及び善趣を離る。

【三九】此の偈は六波羅蜜の功德の中、先づ布施波羅蜜の利他の功德を說示す。

【四〇】此の偈は六波羅蜜の利他の功德の中、持戒波羅蜜の利他の功德を說示す。

[三一] 捨俱の三品の故なり。[三二] に曰く、

正擇と定持と、　善脫と及び命說と、
諸法の上首なると、　彼に亦た三種あるとなり。 (六)

釋して曰く、此の偈は般若波羅蜜の六義を明す。正擇とは是れ慧の自性なり。邪業及び世間の所識業を離れ、正しく出世間の法を擇ぶに由るが故なり。定持とは、是れ慧の因なり。定持の慧に由りて如實に法を解するが故なり。善脫とは、是れ慧の果なり。謂はく染汚に於て善解脫を得。何以故、[三三] 世間・[三四] 出世間・[三五] 大出世間を正擇するに由るが故なり。命說とは、是れ慧の業なり、慧命及び善說慧命は彼の無上正擇を以て命と爲すに由るが故なり。善說とは、正しく正法を說くが故なり。諸法の上首とは、是れ慧の相應なり。經の中に說くが如く、般若とは一切法中上なるが故なり。彼に亦た三種ありとは、是れ慧の品類なり。彼の人、世間・出世間・大出世間の三品の正擇あるが故なり。

已に六波羅蜜の差別を說けり。次に六波羅蜜の攝行を說かん。[三六] 偈に曰く、

一切の自淨法は、　應に知るべし[三七] 亂・定・俱なりと。
六度は總じて三雙なり、　是の類皆な悉く攝す。 (七)

釋して曰く、一切の自淨法とは、謂く檀等の諸行法なり。應に知るべし、彼の行法は總攝するに三種ありと。一には亂、二には定、三には俱なり。彼の亂とは、前二波羅蜜を以て施戒の不定を攝するが故なり。定とは、後二波羅蜜を以て禪及び實慧の定を攝するが故なり。俱とは、中の二波羅蜜を以て忍及び精進の定不定を攝するが故なり。

已に六波羅蜜の攝行を說けり。次に六波羅蜜の治障を說かん。[三八] 偈に曰く、

檀は七著を離るゝが故に、　不著に七種を說く、
應に知るべし餘の五度の、　障治の七皆な然ることを。 (八)

【三一】 捨俱(Upekṣabhaṅgata)。
【三二】 此の偈は六波羅蜜の第六智慧波羅蜜の六義を說示す。
【三三】 世間(Laukika)。
【三四】 出世間(Hīnalokottara)。
【三五】 大出世間(Mahālokottara)。
【三六】 此の偈は六波羅蜜の攝行の何たるかを說示す。
【三七】 亂・定・俱(Vikṣiptasamāhitobhaya)。
【三八】 此の偈は六波羅蜜の治障の何たるかを說示す。

に曰く、

善に於てと正勇に於てと、　有信と有欲の故にと、
念增と及び對治と、　具德と彼の七種となり。（四）

釋して曰く、此の偈は毘梨耶波羅蜜の六義を明す。善に於てと正勇に於てとは、是れ精進の自性なり。餘業の中の勇猛を遮するが故に善と言ひ、外道解脱中の勇猛を除くが故に正と言ふ。有信有欲の故にとは、是れ精進の因なり。信及び求に由り精進を起すを得るが故なり。念增とは、是れ精進の果なり。念定等の功德は復た精進の起るに由るが故なり。對治とは、是れ精進の業なり。經の中に說くが如く、精進を起す者は能く樂住を得。諸惡不善法を雜へざるが故なり。具德とは、是れ精進の相應なり。無貪等の功德を具するに由るが故なり。彼の七種とは、是れ精進の品類なり。彼の人七品の精進あり。一に學戒精進、二に學定精進、三に學慧精進、四に身精進、五に心精進、六に無間精進、七に尊重精進なり。[一七]偈に曰く、

[一八]心住と及び[一九]念進と、　[二〇]樂生と亦た[二一]通住と、
諸法の上首なると、　彼の種の三復た三となり。（五）

釋して曰く、此の偈に禪波羅蜜の六義を明す。心住とは、是れ定の自性なり。心は內に住するに由るが故なり。念進とは、是れ定の因なり。念あるが故に緣に於て忘れず、進に依るが故に禪定起るを得。樂生とは、是れ定の果なり。方便を離退し、果を離れて虛しからざるが故なり。通住とは、是れ定の業なり。通は五通を謂ひ、住は三住を謂ふ。[二二]聖住、[二三]天住、[二四]梵住なり。禪定は能く五通及び三住をして皆自在住を得せしむるが故なり。諸法の上首とは、是れ定の相應なり。經の中に說くが如く、[二五]三摩提は諸法の上首なるが故なり。彼の種の三復た三なりとは、是れ定の品類なり。彼の人に二種の三品あり。一には[二六]有覺有觀、[二七]無覺有觀、[二八]無覺無觀の三品の故に。二には[二九]喜俱、[三〇]樂俱、

【一七】此の偈は六波羅蜜の第五禪定波羅蜜の六義を說示す。
【一八】心住(Sthiti-cetasa)。
【一九】念進(Smṛt-virya)。
【二〇】樂生(Sukhoppatta)。
【二一】通住(Abhijñāvihāra)。
【二二】聖住(Ārya-vihāra)。
【二三】天住(Divya-vihāra)。
【二四】梵住(Brāhma-vihāra)。
【二五】三摩提(Samādhi)。
【二六】有覺有觀(Savitarkasa-vicāra)。
【二七】無覺有觀(Avitarkavi-cāra)。
【二八】無覺無觀(Avitarka a-vicāra)。
【二九】喜俱(Prītisahagata)。
【三〇】樂俱(Sātasahagata)。

諸學足に由るが故なり。滅有邊とは、是れ戒の因なり。滅は是れ涅槃、涅槃を求めんが爲に諸の有邊を度し、行戒を受くるが故なり。善道とは、是れ戒の果なり。善道及び不悔等の次第の五心住は戒に因つて得るが故なり。持等とは、是れ戒の業なり。戒に三能あり。一には能持、能く一切の功德を任持すること大地の如くなるに由るが故なり。二には能靜、能く一切の煩惱の火熱を止息するに由るが故なり。三には無畏、能く一切の怖憎等の諸罪の緣起を起さず、豈に諸罪を起すを畏れんやに由るが故なり。福聚具足の故にとは、是れ戒の相應なり。一切時の身口意の業、皆善行を行ずるに由るが故なり。二得は二種と爲すとは、是れ戒の品類なり。二得は[一一]受得及び[一二]法得を謂ふ。受得とは、波羅提木叉の護を攝し、法得とは、禪護及び無流護を攝するが故なり。偈に曰く、

[一三]不報と[一四]耐と智性と、　大悲と及び法依と、
五德と幷に二利と、　具勝と彼の三種となり。　(三)

釋して曰く、此の偈は羼提波羅蜜の六義を明す。不報と耐と智性ととは、是れ忍の自性なり。一に不報、二に耐、三に智、此の三は次第に是れ三の忍の自性なり。不報とは、是れ他毀忍の自性なり。耐とは、是れ安苦忍の自性、智とは、是れ觀法忍の自性なり。大悲及び法依とは、是れ忍の因なり。一に大悲を因と爲し、二に法依を因と爲す。法依とは、謂はく受戒及び多聞の故なり。五德とは、是れ忍の果なり。經中に說くが如く、忍は五種の果を得、一に少憎嫉を得、二に不壞他意を得、三に喜樂を得、四に臨終不悔を得、五に身壞生天を得。二利とは、是れ忍の業なり。三忍に由るが故に、能く自利利他二種の業を作す。經の偈に說くが如く、彼の二義を作すは自利利他なり。若し他の瞋を知らば彼に於て自ら息む。具勝とは、是れ忍の相應なり。[一五]忍は行じ難きが故に最勝と名づけ、最勝を具足するを相應と名づく、經の中に說くが如く、忍は最上の難行なるが故なり。彼の三種とは、是れ忍の品類なり。彼の人三品あり。一は他毀忍、二は安苦忍、三は觀法忍の故なり。[一六]偈

【一一】受得(Saṁketa-labdha)。
【一二】法得(Dharmatā-prati-labdha)。
【一三】此の偈は六波羅蜜の六義の第三戒波羅蜜の六義を說示す。
【一四】耐(Marṣa)とは辛抱強くして、苦惱に耐え安んずること。
【一五】佛遺教經に『忍の德たること、持戒苦行も及ぶこと能はず』とすると同調異音である。
【一六】此の偈は六波羅蜜の第四精進波羅蜜の六義を說示す。

卷の第八

度攝品第十七の二

釋して曰く、已に六波羅蜜を修習することを說けり。次に六波羅蜜の差別を說かん。六波羅蜜の差別に各六義あり。一には[一]自性、二には[二]因、三には[三]果、四には[四]業、五には[五]相應、六には[六]品類なり。偈に曰く、

[七]彼に施すと及び共思と、　二成と亦た二攝と、
具に不慳に住するが故にと、　法・財・無畏の三となり。(一)

釋して曰く、此の偈は檀波羅蜜の六義を明す。彼に施すとは、是れ施の自性なり。己れの物を以て諸の受者に施すに由るが故なり。共思とは、是れ施の因なり。無貪の善根と思と倶生なるに由るが故なり。二成とは、是れ施の果なり。財成就及び身成就に由るが故なり。身成就と言ふは命等の五事を具攝するなり。[八]五事經の中に說くが如し。施食は五事を得。一には得命、二には得色、三には得力、四には得樂、五には得辯なり。二攝とは、是れ施の業なり。自他の二攝滿足し及び大菩提の滿足に由るが故なり。具に不慳に住するが故にとは、是れ施の相應なり。具足して不慳の人の心中に住するに由るが故なり。法財無畏の三とは、是れ施の品類なり。品類に三あり、一には法施、二には財施、三には[九]無畏施の故なり。是の如き六義、智者は應に知るべし、應に習すべし。偈に曰く、[一〇]

六支と滅有邊と、　善道と及び持等と、
福聚具足の故と、　二得は二種と爲す。(二)

釋して曰く、此の偈は尸羅波羅蜜の六義を明す。六支とは、是れ戒の自性なり。住具戒乃至受學

【一】自性(Svabhāva)。
【二】因(Hetu)。
【三】果(Phala)。
【四】業(Karma)。
【五】相應(Yoga)。
【六】品類(Vṛttyartha)。
【七】此の偈は六波羅蜜の第一布施波羅蜜の六義を說示す。
【八】五事經(Pañca sthāna sutra)。
【九】無畏施とは無畏を人に施すをいふ。持戒の人は殺害の心がないから、一切衆生の無畏、これに過ぎたるはないのである。
【一〇】此の偈は六波羅蜜の第二持戒波羅蜜の六義を說示す。

を饒益するも、我が自利は極饒益の爲めに非ず、是の如き相心を是を戒等を修するの勝利心と名づく。若し菩薩戒等を修する時、報恩及以び果報を求めざれば、是の如き相心、是を戒等を修するの不染心と名づく。若し菩薩廣く戒等を修して生ずる所の福聚、得る所の果報を、願はくは一切衆生に施し、自受の爲めに非ず、又一切衆生と之を共にし無上菩提に迴向せば、是の如き相心、是を戒等を修するの善淨心と名づく。方便依止の諸波羅蜜を修するに三種あり。三種とは即ち是れ三輪清淨なり。此の清淨は無分別智を方便と爲すに由るが故なり。此の方便を以て一切の作意悉く成就することを得。勢力依止の諸波羅蜜を修するに亦た三種あり。一には身勢力、二には行勢力、三には說勢力なり。身勢力とは、應に知るべし是れ佛の自性身及び受用身なり。行勢力とは、應に知るべし是れ佛の化身なり。此の化身を以て一切相に於いて、一切衆生の爲めに一切の善行を示現するが故なり。說勢力とは、謂はく六波羅蜜一切種を演說する時滯礙無きが故なり。

は善淨心なり。何をか檀を修する六種の心と謂ふ。若し菩薩滿恒河沙數の世界の七寶及以び身命を以て、一刹那に於いて一衆生に施し、是の如く乃至衆生界を盡し、願ふ所無上菩提を成熟する者は、此の門施を以て心厭足無し、是の如きの相心、是れを檀を修する無厭心と名づく。若し菩薩是の如きの相施を初めより相續し乃至成佛し、刹那の頃も絕あり減あること無くんば、是の如き相心、是を檀を修する廣大の心と名づく。若し菩薩施を以て他を攝する時、極重の歡喜を生じ、受者の財を得る時、喜を生ずるに過ぐれば、是の如きの相心、是を檀を修する勝喜心と名づく。若し菩薩施を以て他を攝する時、他の受物の極めて我を饒益するを見るも、我が自用は極饒益の爲めに非ず、何以故、施に由りて他を攝し、我をして無上菩提の因を成就せしむるが故なり。是の如きの相心、是れを檀を修する勝利心と名づく。若し菩薩是の如く廣く施すに報恩及以び果報を求めざれば、是の如きの相心、是を檀を修する不染心と名づく。若し菩薩是の如く廣く施して生ずる所の福聚、得る所の果報を、願はくは一切衆生に施し、自受の爲めに非ず、又一切衆生と之を共にし、無上菩提に廻向せば、是の如きの相心、是を檀を修する善淨心と名づく。何をか修戒等の六種の心と謂ふ。若し菩薩恒河沙數の自身あり、一一の身復た恒河沙數の劫壽あり、一一の壽中復た一切資生に乏し、此の乏中に於いて復た火聚あり、三千大千世界に遍滿す。菩薩此の多身を以て此の多壽を經、此の火聚に在りて、四威儀を起し、一刹那に於いて但だ一戒を修す。是の如く乃至諸の戒聚を盡し、乃至諸の智聚を盡し、能く無上菩提を得ば、菩薩は之を修して心に厭足無し、是の如きの相心、是を戒等を修する無厭心と名づく。若し菩薩初め修戒より乃至修智まで極めて道場に坐し、間斷あること無くんば、是の如き相心、是を戒等を修するの廣大心と名づく。若し菩薩戒等を修して他を攝する時、極重歡喜を生じ、受攝者の利益を得る時、喜を生ずるに過ぐれば、是の如きの相心、是を戒等を修するの勝喜心と名づく。若し菩薩戒等を修して他を攝する時、他の利を得るを見、極めて我

已に六波羅蜜の次第を說けり。次に六波羅蜜の名を釋せん。偈に曰く、

[五九]貧を除くと、亦た[六〇]凉ならしむると、[六一]瞋を破すると、[六二]善を建つると、
[六三]心を持すると、及び[六四]眞を解すると、是を六行の義と說く。

釋して曰く、能く貧窮を除くが故に施と名づく。能く淸凉ならしむるが故に戒と名づく。具戒者は境界相中に於いて煩惱の熱息むに由るが故なり。能く瞋恚を破するが故に忍と名づく、忍は瞋恚を破し、能く盡さしむるが故なり。能く善を建つるが故に進と名づく、善法を建立するは此の力に由るが故なり。能く心を持つが故に定と名づく。內意を攝持するが故なり。能く眞法を解するが故に慧と名づく、第一義諦を曉了するが故なり。

已に六波羅蜜の名を釋せり。次に六波羅蜜を修習することを說かん。[六五]偈に曰く、

物と思と及び心と、　方便と幷に勢力と、
當に知るべし六行を修するに、　五依止ありと說くことを。（一〇）

釋して曰く、諸の菩薩の諸波羅蜜を修習するに五依止あり。一には物依止、二には思惟依止、三には心依止、四には方便依止、五には勢力依止なり。物依止は諸波羅蜜を修するに四種あり。一には依止因、種性力に依りて修習するが故なり。二には依止報、自身成就の力に依つて修習するが故なり。三には依止願、昔の願力に依りて修習するが故なり。四には依止數、智慧の力に依りて修習するが故なり。思惟依止は諸波羅蜜を修するに亦た四種あり。一には信思惟、諸波羅蜜相應の教に於いて信心を生ずるが故なり。二には味思惟、諸波羅蜜の中に於いて功德味を見るが故なり。三には隨喜思惟、一切世界、一切衆生の所有諸波羅蜜に於いて、皆な隨喜を生ずるが故なり。四には悕望思惟、自身及び他の未來の所有勝波羅蜜に於いて悕望を起すが故なり。心依止は諸波羅蜜を修するに六種あり、一には無厭心、二には廣大心、三には勝意心、四には勝利心、五には不染心、六に

【五九】 Dāridryasya apanayanāt. は布施を表す。
【六〇】 Śaityasya lambhanāt. は持戒を表す。
【六一】 Kṣayāt kruddheḥ. は忍辱を表す。
【六二】 Varayogāt. は精進を表す。
【六三】 Adhyātmaṃ manaso dhāraṇāt. は禪定を表す。
【六四】 Paramārtha jñānāt. は般若を表す。
【六五】 此の偈は六度を修習する上に五依止の必要なることを說く。

已に六波羅蜜の數を制せり、次に六波羅蜜の相を顯はさん。偈に曰く、

[四九]六度の體を分別するに、　一一に四相あり、
治障と及び合智と、　滿願と亦た成生となり。　（八）

釋して曰く、諸の菩薩諸の波羅蜜を修するに一一皆な四相あり。一に治障、二に合智、三に滿願、四に成生なり。治障とは、檀等の六行なり、其の次第の如く[五〇]慳貪・[五一]破戒・[五二]瞋恚・[五三]懈怠・[五四]亂心・[五五]愚癡を對治するが故なり。合智とは、悉く無分別智と共に行ず、法無我に通達するに由るが故なり。滿願とは、施は求財者に其の所欲に隨つて之を給與し、戒は求戒者に其の所欲に隨つて身に意を以て護りて之を教授し、忍は悔過者に之に歡喜を與へ、精進は作業者に欲に隨つて之を助け、定は學定者に欲に隨つて法を授け、智は有疑者に欲に隨つて決斷す。成生とは先づ施を以て攝し、後三乘の法を以て其の所應に隨つて之を成熟し、先づ戒等の中に安立し、後三乘を以て成熟すること亦た爾り。

已に六波羅蜜の相を顯はせり。次に六波羅蜜の次第を說かん。偈に曰く、

[五六]前後及び[五七]下上、　[五八]麁細次第に起る、
是の如く六度を說く、　不亂に三因あり。　（九）

釋して曰く、六波羅蜜の次第に三因緣あり。一に前後、二に下上、三に麁細なり。前後とは、謂く前に依りて後起るを得。何以故資財を顧みざるに由るが故に戒を受持す。持戒を行じ已つて能く忍辱を起し、忍辱し已つて能く精進を起し、精進し已つて能く禪定を起し、禪定し已つて能く眞法を解す。下上とは、前者を下と爲し、後者を上と爲す。下は施、上は戒、乃至下は定、上は智なり。麁細とは、前者を麁と爲し、後者を細と爲す。麁は施、細は戒、乃至麁は定、細は智なり、何以故麁は入り易く作し易きが故なり。何以故細は入り難く作し難きが故なり。

【四九】此の偈は六度の相を明かにするを目的とす。
【五〇】Vipakṣa.
【五一】Dauḥśīlya.
【五二】Krodha.
【五三】Kausīdya.
【五四】Vikṣepa.
【五五】Dauṣprajñā.
【五六】前 Pūrva. 後 Uttara.
【五七】下 Hīna. 上 Utkarṣa.
【五八】麁 Audārika. 細 Sūkṣma.

舍那平等所攝の故なり。此の如き四因は一切大乘の因を攝し盡す。[四二]偈に曰く、

[四三]不著と及び[四四]不亂と、　[四五]不捨と亦た[四六]増進と、
[四七]淨惑と及び[四八]智障と、　是の道皆な悉く攝す。　（六）

釋して曰く、此の偈は大乘の六道を攝せんが爲めの故に、波羅蜜の數を立つるに唯だ六あることを顯示す。問ふ、道とは何の義なるや。答ふ、方便あるを道と爲す。此の中檀波羅蜜は、諸の資財に於いて著せざるを道と爲す。施す時境に於いて染著を離るゝに由るが故なり。尸羅波羅蜜は、諸の境界に於いて、亂れざるを道と爲す、受戒を求むる時、一切の心亂を攝して住せしむるに由るが故なり、及び比丘住護者の境界を求むる時、一切の業亂轉ずる能はざるが故なり。羼提波羅蜜は、諸の衆生に於いて捨せざるを道と爲す、一切の不饒益事に厭を生ぜざるに由るが故なり。毘黎耶波羅蜜は、諸善を修するに於いて增長するを道と爲す、精進發起し增上せしむるに由るが故なり。禪波羅蜜は、煩惱障に於いて清淨ならしむるを道と爲す。般若波羅蜜は、智慧障に於いて清淨ならしむるを道と爲す。是の如き六種の道は一切大乘道を攝し盡す。偈に曰く、

三學を攝するが爲めの故に、　度を說くに六種あり、
初三二初一、　後二二一三なり。　（七）

釋して曰く、此の偈は三種の增上學を攝せんが爲めの故に、六波羅蜜の數を立つるに唯だ六あることを顯示す。此の中初三の波羅蜜を立つるは初一の戒增上學を攝せんが爲めなり。戒に二種あり、謂く聚、及び眷屬なり。尸羅を聚と爲し、檀及び羼提を眷屬と爲す。何以故施は求受の時に於いて資財を悋まざるが故なり。忍は護持の時に於いて打罵を報ぜざるが故なり。此の中後の二波羅蜜を立つるは、其の次第の如く心慧の二增上學を攝せんが爲めなり。此の中第四の一波羅蜜を立つるは、應に知るべし具さに三增上學を攝することを。一切の三學は精進を伴と爲すに由るが故なり。

【四二】此の偈は大乘の六道を攝せんがために六度に六數ある所以を說示す。
【四三】「不著」は布施波羅蜜多を表す。
【四四】「不亂」は持戒波羅蜜多を表す。
【四五】「不捨」は忍辱波羅蜜多を表す。
【四六】「增進」は精進波羅蜜多を表す。
【四七】「淨惑」は禪定波羅蜜多を表す。
【四八】「智障」は般若波羅蜜多を表す。

釋して曰く、此の偈は二利六事を攝せんが爲めの故に波羅蜜の數を立つるに唯だ六あることを顯示す。初めに利他の三事を攝せんが爲めの故に前の三波羅蜜を立て[28]正勤を起さしむ。其の次第の如く一には彼に施す、二には惱まさず、三には彼の惱を忍ぶ。後に自利の三事を攝せんが爲めの故に、須らく後の三波羅蜜を立てゝ正勤を起さしむべし。其の次第の如く一には有因、精進に由依るが故なり。二には心住、心の不定を定ならしむるに由るが故なり。三には解脫、心已に定まりて解脫せしむるに由るが故なり。[29]偈に曰く、

[30]不乏と亦た[31]不惱と、　[32]忍惱と及び[33]不退と、
[34]歸向と[35]善說とは　利他卽ち自ら成ず。（四）

釋して曰く、此の偈は利他の六事を攝せんが爲めの故に、波羅蜜の數を立つるに唯だ六あることを顯示す。菩薩は波羅蜜を行ずる時、其の次第の如く、彼の受用に於いて、乏しからざるが故に、彼を惱まさゞるが故に、彼の惱を忍ぶが故に、彼の所作を助けて退かざらしむるが故に、[36]神通力を以て歸向せしむるが故に、善說法を以て彼の疑を斷ずるが故なり。菩薩は是の如く利他卽ち是れ自利、他の所作を卽ち自の所作と爲す。此の因緣に由りて大菩提を得るが故なり。[37]偈に曰く、

[38]不染と及び[39]極敬と、　[40]不退に二種あると、
亦た二の[41]無分別と、　具さに大乘の因を攝す。（五）

釋して曰く、此の偈は大乘の四因を攝せんが爲めの故に、波羅蜜の數を立つるに唯だ六あることを顯示す。一には不染、二には極敬、三には不退、四には無分別なり。菩薩は施を修行する時、財に於いて染まず、顧戀無きが故なり。持戒を受持する時、諸學處に於いて極敬を起すが故なり。忍辱精進を行ずる時、此の二不退なり。衆生非衆生の所作の苦を忍んで不退を得るが故なり。精進は修行の善時に於いて不退を得るが故なり。禪定般若を行ずる時、此の二無分別なり、奢摩他・毘鉢

【二八】Samyakpra yukta.
【二九】此の偈は利他の六事を攝せんが爲に六度の數を立つるに六ある所以を說示す。
【三〇】「不乏」は布施波羅蜜多。
【三一】「不惱」は持戒波羅蜜多。
【三二】「忍惱」は忍辱波羅蜜多。
【三三】「不退」は精進波羅蜜多。
【三四】「歸向」Āvarjana. は禪定波羅蜜多。
【三五】「善說」は智慧波羅蜜多。
【三六】Rddhi-prabhāva.
【三七】此の偈は大乘の四因を攝せんがために六度に六數ある所以を說示す。
【三八】「不染」は布施波羅蜜多を表す。
【三九】「極敬」は持戒波羅蜜多を表す。
【四〇】「不退」は忍辱精進の二波羅蜜多を表す。
【四一】「無分別」は禪定般若の二波羅蜜多を表す。

度攝品第十七の一[一]

釋して曰く、已に起業方便を說けり、業の聚集する所の諸波羅蜜は今當に說くべし、此の中先づ[二]優陀那偈を說かん。偈に曰く、

[三]數と相と次第と名と、　修習と差別と攝と、
治障と德と互顯と、　度の十義應に知るべし。(一)

釋して曰く、此の中の六波羅蜜は、應に知るべし十種の義あることを。一に[四]制數、二に[五]顯相、三に[六]次第、四に[七]釋名、五に[八]修習、六に[九]差別、七に[一〇]攝行、八に[一一]治障、九に[一二]功德、十に[一三]互顯なり。此の中六偈あり、六波羅蜜を制立する數は唯だ六あるのみ。偈に曰く、

[一四]資生と身と眷屬と、　發起とは初の四の成ずる所なり。
第五は[一五]惑不染、　第六は[一六]業不倒なり。(二)

釋して曰く、此の偈は自利の三事を攝せんが爲めの故に波羅蜜の數を立つるに唯だ六あることを顯示す。一には增進、二には不染、三には不倒なり。彼の初の四波羅蜜は其の次第の如く、能く四事を增進せしむ、一に[一七]資生成就、布施に由るが故なり。二に[一八]自身成就、持戒に由るが故なり。三に[一九]眷屬成就、忍辱に由る。忍辱を行ずれば多く人の愛するが故なり。四には[二〇]發起成就、精進に由る、一切の事業は此に因りて成ずるが故なり。第五の禪波羅蜜は能く煩惱をして不染ならしむ、煩惱を折伏するは此の力に由るが故なり。第六の般若波羅蜜は業をして不顚倒ならしむ。一切の所作を如實に知るが故なり。[二一]偈に曰く、

[二二]彼に施すと、及び[二三]惱まさゞると、　[二四]惱を忍ぶとは是れ利他なり、
[二五]有因と及び[二六]心住と、　[二七]解脫とは是れ自利なり。(三)

【一】Pāramitā.
【二】Uddāna.
【三】此の偈は六度の十義を說示す。
【四】Saṁkhyātha.
【五】Lakṣaṇmā.
【六】Anupūrvī.
【七】Nirukti.
【八】Abhyāsaguṇa.
【九】Prabhedana.
【一〇】Saṁgrahaṇa.
【一一】Jñeya.
【一二】Guṇa.
【一三】Anyonyavini.
【一四】此の偈は六度を制立する內容を顯示す。
【一五】Kleśāvaśagatvaṁ.
【一六】Kṛtyeṣvaviparyāsa.
【一七】Bhoga sampat.
【一八】Ātmabhāva-sampat.
【一九】Parivāra-sampat.
【二〇】Ārambha-sampat.
【二一】此の偈は利他の三事と自利の三事とを攝せんが爲に六度の數を立つるに六ある所以を說く。
【二二】「彼に施す」は布施波羅蜜多。
【二三】「惱まさゞる」は持戒波羅蜜多。
【二四】「惱を忍ぶ」は忍辱波羅蜜多。
【二五】「有因」は精進波羅蜜多。
【二六】「心住」は禪定波羅蜜多。
【二七】「解脫」は智慧波羅蜜多。

て大苦を生じ、彼をして異乘の心を轉ぜしめんと欲するが故に、種々の形を變じ、無量の世界に於いて無量の劫數を經、而も能く久しく勤苦を受け、種々の難行の業を作す。身口心自性彼を拔いて退轉せずとは、謂く菩薩は彼を拔かんが爲めの故に復た處處に久しく勤苦を受くと雖も、三業自性終に退屈無し。偈に曰く、

[六]人の四害を怖れて、　深く自身の爲めに防ぐが如く、
菩薩の二乘を畏れ、　業を護ることも亦た是の如し。　（三）

釋して曰く、此の偈は菩薩の自ら業を護るの方便を顯示す。人の四害を怖れて、深く自身の爲めに防ぐが如しとは、何をか四害と謂ふ、一には毒物、二には兵仗、三には惡食、四には怨仇、是を四害と謂ふ。深く防ぐとは、自身を利益せんが爲めの故なり。菩薩の二乘を畏れ、業を護ること亦た是の如しとは、毒等の四害は二乘の人の諸業方便に譬ふ、菩薩は此を怖畏するが故に深く自ら二乘の心の起るを防護す。何以故(なんとなれば)大乘の種を斷ずるに由るが故なり。大乘の善根未だ起らざれば、起らざらしむるが故に、已に起れば、復た滅せしむるが故に、及び佛果を與ふるに障礙を作すが故なり。[七]偈に曰く、

[八]作者と[九]業と[一〇]所作との　三輪は不分別なり。
淨業の海を度ることを得ば、　功德は邊あること無し。　（四）

釋して曰く、此の偈は菩薩の清淨の業方便を顯示す。作者と業と所作との三輪は不分別とは、何をか三輪と謂ふ、一には作者、二には業、三には所作、是を三輪と謂ふ。不分別とは、此の三不可得の故なり。此に由るが故に三輪清淨を得。三輪清淨の故に業清淨なり。淨業海を度り得ば功德邊あること無しとは、業の彼岸に到るが故なり。功德邊無しとは、無盡なるに由るが故なり。

【六】此の偈は菩薩の自ら業を護る方便を說示す。
【七】此の偈は菩薩の清淨の業方便を說示す。
【八】Karmiṇa.
【九】Karma.
【一〇】Karmana.

爾の時無分別勝覺を得と名づく。譬へば日輪の大に出でゝ能く幽暗を除き、世間を照朗するが如し。此れ畢竟時に大義利を得ることを明すなり。

是の如く廣く說き已つて次に一偈を以て前義を總結せん。偈に曰く、

[三六]佛子は善を集め滿し、　極廣定を成就す。
恒に尊教授を受け、　能く功德海を窮む。　（三五）

釋して曰く、此の偈は文の顯現の如し。

業伴品第十六[一]

釋して曰く、已に如來の大教授を說けり。菩薩の起業は方便を以て伴と爲す、今當に說くべし。偈に曰く、

[二]譬へば大地種の、　四種の物を任持するが如く、
是の如く三種の業は、　一切の善を建立す。　（一）

釋して曰く、此の偈は菩薩の起業を集むる方便を顯示す。譬へば大地の種の四種の物を任持するが如くとは、何をか四物と謂ふ、一には大海、二には諸山、三には草木、四には衆生、是を四物と謂ふ。是の如く三種の業は一切の善を建立すとは、海等の四物は一切の善法に譬ふ。是の如く菩薩の三業は能く一切の諸善を聚集す。所謂[三]檀等の諸波羅蜜及び一切の菩提分法なり。偈に曰く、

[四]難行の業を能く行ず、　形に應ずること無量劫なり。
身口心自性、　彼を拔いて退轉せず。　（二）

釋して曰く、此の偈は菩薩の救他の業方便を顯示す。難行の業を能く行ず形に應ずること無量劫なりとは、何をか難行の業と謂ふ。謂く[五]衆生は小乘の出離を得んと欲す。菩薩は彼に於いて極め

【三六】此の偈は前に說けるところを總括的に結論す。

【一】Upāya sahita karman.

【二】此の偈は菩薩起業の方便を說示す。

【三】檀とは檀那（ダーナ）の略。

【四】此の偈は菩薩の衆生救濟の方便を說示す。

【五】此の一段は菩薩の眞の面目を語り盡して余蘊なし。

釋して曰く、轉依は究竟淨なりとは、謂く永く一切の煩惱障及び智障を離るゝが故なり。一切種を成就すとは、謂く一切種智を得て、無上なるに由るが故なり。此の所作事に住すとは、謂く此の位の中に住し、乃至衆生生死の際を窮め、成道を示現し、及び涅槃を現ずるが故なり。問ふ、此の事何の爲す所ぞ。答ふ、但だ群生を利せんが爲めなり。此の如き等の事一向に但だ一切衆生を利益せんが爲めの故なり。自下次に大教授に因りて大義利を得るを明さん。偈に曰く、

[五四]牟尼尊の見難きを、　常に見て大義を得、
[五五]無等の法を聞くを以て、　淨信は養心を資す。　（三二）

釋して曰く、此の偈は菩薩の大教授に因りて常に現前に佛を見ることを得、常に無等の正法を聞き、常に極深の淨信を起し、心に遍滿することを明す。此れ初時に大義利を得ることを明すなり。偈に曰く、

若し教授の中に於いて　法門は欲に住するが如し、
人の險難を拔くが如く、　佛の勸むることも亦た是の如し。　（三三）

釋して曰く、若し教授の中に於ける法門は欲に住するが如しとは、諸の菩薩あり、教授時の中に於いて、或は如來の法門に於いて心に樂住を欲するなり。人の險難を拔くが如く佛の勸めも亦た復た是の如しとは、譬へば人あり深坑に墮在するに能く髮を捉へ、高岸に懸擲することあるが如し。佛の勸めも亦た爾なり。若し彼の菩薩寂滅の深坑に樂住せば、諸佛如來は強いて能く之を佛果の高岸に置く。此れ次時に大義利を得ることを明すなり。偈に曰く、

世間の極淨眼は、　勝覺無分別なり、
譬へば大日の出でて、　幽を除いて世間を朗にするが如し。　（三四）

釋して曰く、若し諸の菩薩成佛する時は、永く一切世間の法を退くが故に、眼は最極清淨を得。

【五四】以下三偈は菩薩の大教授によりて大義利を得ることを説示す。
【五五】無等の法とは等しきもののなき法といふ意味、即ち第一義諦である。

希有は希有に非ず、　他利自利の故なり。　（二一八）

釋して曰く、他に於いて等愛を行じ他を利して退轉せずとは、菩薩は一切衆生に於いて、平等愛心を行じて、差別あること無し。若しくは利益を求樂し、若しくは利益を行樂し、若しくは求行の時、利益の心退轉あること無し。希有は希有に非ず他利自利の故なりとは、此の不退轉の事は諸の世間に於いて希有最上なり。然も此の希有は亦た希有に非ず。何以故(なにゆゑなれば)他の益を得る時、卽ち是れ菩薩自ら益を得るが故なり。偈に曰く、

餘地に[四九]修道を說き、　二智を勤めて修習す、
[五〇]無分別と[五一]建立と、　淨法及び衆生と、　（二一九）

釋して曰く、餘地とは、謂く後九地なり。問ふ、餘地に何の修する所ぞ。答ふ、二智を勤めて修習す。二智とは、一に無分別智、二に如所建立智なり。無分別智は謂ゆる出世智なり。如所建立智は謂ゆる後得世智なり。問ふ、此の二智は何の功能かある、答ふ、淨法と及び衆生となり。此の中の無分別智は佛法を成熟す、是れ其の功能なり。如所建立智は衆生を成熟す、是れ其の功能なり。偈に曰く、

修位二僧祇、　最後に[五二]受識を得、
彼の[五三]金剛定に入り、　諸の分別を破し盡す。　（二二〇）

釋して曰く、修位二僧祇最後に受識を得とは、二僧祇は謂く第二及び第三大劫阿僧祇なり。最後は謂く究竟修なり。此の修位に於いて方に受識を得。問ふ、受識し已つて更に何の所作か[ある]。答ふ、分別隨眠を此れ能く破するが故なり。是の故に此の定を金剛喩と名づく。偈に曰く、

轉依は究竟淨なり。　一切種を成就し、
此の所作事に住す、　但だ群生を利せんが爲めなり。　（二二一）

【四九】Bhāvanā-mārga.
【五〇】Nirvikalpa.
【五一】Vyavasthāna.
【五二】如法に行を積みたる人に對して、秘法を傳受し、阿闍梨の職位を紹がしむる灌頂を受職灌頂又は傳教灌頂といふ。
【五三】菩薩の最後位に最極微細の煩惱を斷ずる禪定の名。其の智用の堅利なるを金剛に譬へたのである。

無我復た我見、　無苦亦た極苦、
彼を益して報を求めず、　自我を利するを以ての故なり。（二一五）

釋して曰く、此の中の諸菩薩の無我とは、謂く自身なく義我なきの見なり。復た我見とは、謂く他身あり義我を大にするの見なり。無苦とは、自身より起す所の諸苦なきを謂ふ。亦た極苦とは、有他身より起す所の諸苦あるを謂ふ。彼を益して報を求めずとは、希望無きが故なり。何以故自我を利するを以ての故なり。諸菩薩は衆生を利益する時、即ち是れ自我を利益す。是の故に外に希望無し。偈に曰く、

自脫の心は最上なり、　他縛は即ち堅廣なり、
苦邊は盡す可らず、　是の如く應に勤作すべし。（二一六）

釋して曰く、自脫心とは、謂く、自ら見道所斷の煩惱を滅するが故なり。最上とは、此の解脫は無上乘なるに由るが故なり。他縛は即ち堅廣なりとは、一切衆生の相續して起す所の煩惱に由るが故なり。苦邊は盡す可らずとは、衆生界は無邊にして虛空の如くなるが故なり。是の如く應に勤作すべしとは、衆生は是の如く苦なり、菩薩は應に衆生の爲めに苦を斷ずべし。作邊作し已つて復た作す、應に休息すべからざるが故なり。偈に曰く、

自苦を自ら忍ばず、　豈に他の諸苦を忍ばんや、
此生及び窮生、　彼を翻するを菩薩と謂ふ。（二一七）

釋して曰く、衆生は一期の生苦、及び窮生死際に於いて、不可思議の苦を能く忍受する者無し。此の菩薩は彼の忍受する能はざるを翻して、悉く能く之が忍受を爲すが故に彼を翻して菩薩と謂ふと言ふ。偈に曰く、

他に於いて等愛を行し、　彼を利して退轉せず、

[三四]無體と及び似體と、　自性と合して三空なり。
此の三空に於ける辨、　此れを說いて辨空と名づく。（一一一）

釋して曰く、三空とは、一に[三五]無體空、謂く[三六]分別性にして、彼の相體無きが故なり。二に[三七]似體空、謂く[三八]依他性にして、此の相分別性の如く體無きが故なり。三に[三九]自性空、謂く[四〇]眞實性にして自體空自體の故なり。此の偈は菩薩の空辨脫門を得るを顯はす。偈に曰く、

[四一]應に知るべし緣無相は、　悉く諸の分別を盡し、
此の中無願緣は、　不眞分別を盡すと。（一一二）

釋して曰く、此の偈上半は[四二]無相辨脫門を得るを顯はし、下半は[四三]無願辨脫門を得るを顯はす。應に知るべし此の中の菩薩は具して三辨脫門を得ることを。偈に曰く、

此の時得る所の法は、　一切菩提分なり、
應に知るべし彼の菩薩は、　同じく如の見道を得ることを。（一一三）

釋して曰く、一切[四四]菩提分とは、謂く四念處等なり。彼の菩薩は見道を得る時、亦た此の法を得るなり。偈に曰く、

世を覺れば唯だ諸行のみなり、　無我、唯だ苦著のみなり、
無義は自我を滅し、　[四五]大義は[四六]大我に依る。（一一四）

釋して曰く、世を覺れば唯だ諸行のみなり、無我は唯だ苦著のみなりとは、此の菩薩は諸の世間は、但だ是れ諸行のみにして實に我あること無きを覺る。衆生の計著は唯だ苦に著するのみ。無義は自我を滅すとは、謂はく染汚の身見滅するが故なり。[四七]大義とは一切衆生を利益するが故なり。[四八]大我とは一切衆生を以て自己と爲るが故なり。此の中の菩薩は自我の見を滅し、大我の見に依りて衆生利益の事を作す。是れを大義は大我に依ると謂ふ。偈に曰く、

【三四】此の偈は三辨脫門の中の空門を說示す。
【三五】Abhāva-śūnyatā.
【三六】Parikalpita.（徧計所執性ともいふ）。
【三七】Bhāvasyaśūnyatā.
【三八】Paratantra.
【三九】Prakṛti-śūnyatā.
【四〇】Pariniṣpanna.（圓成實性ともいふ）。
【四一】此の偈は三辨脫門の中の無相無願の二門を說示す。
【四二】Animittaṁ.
【四三】Apraṇihitaṁ.
【四四】Bodhipakṣā.
【四五】Mahārthā.
【四六】Mahātma.
【四七】此の句は大義の意味を最も鮮に言ひ盡してゐる。
【四八】此の句は大我の義を最も鮮に說き盡して居る。

の位なり。何以故初地を得るが故なり。問ふ、依は極淨なりや。答ふ、後無量劫を經て依の淨方に圓滿す。此の初めに於いて卽ち極清淨を得るに非ず、後無量阿僧祇劫を經るに由りて、此の依方に清淨圓滿を得るが故なり。偈に曰く、

爾の時法界に通ず、　他自心平等なり。
平等に五種あり。　五に差別無きが故に。　（一九）

釋して曰く、爾の時法界に通ず、他自心平等なりとは、菩薩は初地に於いて、卽ち平等法界に通達することを得。此の通達に由るが故に、能く他身卽ち是れ自身なりと觀じ、亦た心平等を得。問ふ、此の時幾種の心平等をか得る。答ふ、平等に五種あり。五の無差別の故なり。何をか謂つて五と爲す。一には[三〇]無我平等、謂く自他の相續に於いて我あるを見ず、差別無きが故に。二には[三一]有苦平等、謂はく自他の相續に於いて所有諸苦、差別無きが故に。三には[三二]所作平等、謂はく自他の相續に於いて斷苦を作さんと欲す、差別無きが故に。四には[三三]不求平等、謂く自他の所作に於いて反報を求めず、差別無きが故に。五には同得平等、餘の菩薩の所得の如く、我が得も亦た爾り、差別無きが故に。偈に曰く、

諸行は虛分別なり、　淨智は無二を了す、
解脫は見の滅する所、　是の如く見道を說く。　（二〇）

釋して曰く、諸行は虛分別なり、淨智無二を了すとは、此の中の菩薩は三界に於いて諸行は唯だ不眞分別なりと見、極淨智を以て彼の無二を了す。淨智とは、出世間の故なり。無二とは、二執無なるが故なり。彼の無二の體は卽ち法界なり。解脫は見の滅する所、是の如く見道を說くとは、謂く解脫見道所滅の煩惱、法界卽ち是れ解脫、若し見解脫の煩惱を滅する時說いて菩薩初めに見道を得と名づく。偈に曰く、

【三〇】 Nairātmya-samatayā.
【三一】 Duḥkha-samatayā.
【三二】 Kṛtya-samatayā.
【三三】 Niṣpratikāra-samata=yā.

釋して曰く、此の中の菩薩は法明を增長せんが爲めの故に堅固の精進を起す。是の法明に住して唯心に通達す。此の通達は卽ち是れ菩薩の頂位なり。偈に曰く、

諸義悉く是れ光、　唯心を見るに由るが故に、
所執の亂を斷するを得、　是れ則ち忍に住す。　（一五）

釋して曰く、此の中の菩薩は若しくは諸義を見るも悉く是れ心光にして、心光の外別に異見あるに非ず、其の時所執の亂滅するを得。此の見卽ち是れ菩薩の忍位なり。偈に曰く、

所執の亂斷ずと雖も、　尙ほ能執を餘すが故に、
此を斷して復た速に、　[二八]無間三摩提を證す。　（一六）

釋して曰く、此の中の菩薩は能執の亂を斷ぜんが爲めの故に、復た速に無間三摩提を證す。問ふ、何の義あるが故に、此の三摩提を無間と名づくるや。答ふ、能執の亂滅する時、爾の時無間に入るに由るが故に此の名を受く。此の無間に入るは、卽ち是れ菩薩の世間第一法位なり。其の次第に隨つて煖等の諸位を說き已れり、次に見道の起るを說かん。偈に曰く、

彼の二執を遠離し、　出世間無上、
無分別離垢、　此の智を此の時得。　（一七）

釋して曰く、彼の二執を遠離すとは、所執能執不和合の故なり。出世間無上とは、無上乘を得るが故なり。無分別とは、卽ち彼の二執分別無きが故なり。離垢とは、[二九]見道所斷の煩惱滅するが故なり。菩薩は爾の時、塵を遠ざかり垢を離れて法眼淨を得と名づく。偈に曰く、

此れ卽ち是れ轉依、　初地を得るを以ての故に、
後無量劫を經て、　依の淨方に圓滿す。　（一八）

釋して曰く、此れ卽ち是れ轉依、初地を得るを以ての故にとは、此の離垢は卽ち是れ菩薩の轉依

【二八】Ānantarya samādhi.

【二九】見道所斷煩惱滅故 Darśanajñeyakleśaprahāṇāt

ふ、器體淨を成ずるが故に無上乘に進むに堪ゆ。此の菩薩は如來の稱揚を得已つて、便ち清淨の器體を成就し、無上乘に於いて則ち進入するに堪ゆ。問ふ、如來の彼の菩薩を稱揚したまふ何等か五功德なる。偈に曰く、

念念に諸の習を融し、　身猗と及び心猗と、
圓明と見相と、　諸の法身を滿淨す。（一一）

釋して曰く、五功德とは、一には融習、二には身猗、三には心猗、四には圓明、五には見相なり。融習とは、一一の刹那に一切の習氣聚を消融するが故なり。身猗とは、輕安を修習し、身に遍滿するが故なり。心倚も亦た爾なり。圓明とは、一切種の空なることを圓解し、分數を離るゝが故なり。見相とは、無分別の相を見て、後に清淨の因と爲るが故なり。諸の法身を滿淨すとは、一切種の法身を爲滿爲淨し、常に是の如き五因を作すが故なり。問ふ、何れの時が滿し、何れの時が淨する。答ふ、十地の時滿し、佛地の時淨す。此の中應に知るべし五種の功德の前三は是れ奢摩他分、後二は是れ毘鉢舍那分なりと。菩薩は此の時中に於いて世間法に於いて皆な具足を得。是の如く稱揚を得已つて次に通達分善根を起す。偈に曰く、

爾の時此の菩薩は、　次第に定心を得、
唯た意言を見るが故に、　一切義を見ず。（一二）

釋して曰く、此の菩薩は初めて定心を得て意言を離れ、自相總相の一切の諸義を見ず、唯だ意言のみを見る。此の見は卽ち是れ菩薩の煖位にして此の位を明と名づく。佛の[二七]灰河經中に說きたまふ所の明の如し。此の明を見法忍と名づく。偈に曰く、

法明を長ぜんが爲めの故に、　堅固精進起る。
法明增長し已つて、　唯心住に通達す。（一四）

【二七】 Kṣāranadī.

とは、謂く持住心なり。作意に由らず總持を得るが故なり。

是の如く住心を得ることを修習し已つて、次に此の心をして最上柔輭を得しむ。偈に曰く、

下猗修を進めしめ、　進の爲に本定を習す、
淨禪を通となすが故に、　當に勝輭心を成すべし。（九）

釋して曰く、下猗修を進めしめ、進習本定を爲すとは、菩薩は住心を得る時應に知り已つて下品の身猗心猗を得。此の倚を增進せんが爲めに更に根本の禪定を修す。問ふ、更に本定を修して何の功德をか爲すや。答ふ、淨禪を通と爲すが故に當に勝輭心を成すべし。諸の菩薩は諸の神通を起さんが爲めの故に、最勝の柔輭心を成就せんと欲するが爲めの故に、是の故に本定を進修す。問ふ、諸の神通を起して何の所作をか欲するや。勝柔輭心復た云何が成ぜん。偈に曰く、

通を起して諸界に遊び、　諸の世尊に歷事す、
最上の輭心は、　諸佛を供養することを得るが故なり。（一〇）

釋して曰く、通を起して諸界に遊び諸の世尊に歷事すとは、諸の菩薩は無量の世界に往かんと欲し、無量劫數を經んと欲し、無量の諸佛を歷んと欲し、承事供養し及び正法を聞かんと欲す。此の事を爲さんが故に諸の神通を起す。問ふ、何が故に此の事を作す。答ふ、最上の輭心は諸佛を供養するを得るが故なり。諸佛を供養することを因と爲るに由るが故に、更に第一勝柔輭心を成就することを得。是の如く勝心を得已つて便ち諸佛に稱揚せるゝを得。偈に曰く、

未だ淨心に入らざるに前ち、　五種の稱揚を得、
器體淨を成ずるが故に、　無上乘に進むに堪ゆ。（一一）

釋して曰く、未だ淨心に入らざるに前ち五種の稱揚を得とは、謂く此の菩薩は淨心地の前に於いて先づ如來の稱揚を得。其は五種の功德なり。問ふ、此の稱揚は菩薩に於いて何の利益かある。答

意言を離れて相續し諸法を觀察す。止道とは、謂く奢摩他作意なり。此の作意は但だ諸法の名を緣ず。觀道とは、謂く毘鉢舍那作意なり。此の作意は但だ諸法の義を緣ず。二俱とは、謂く二相應作意なり。此の作意は能く一時に名義を緣ず。拔沉とは、謂く起相作意なり。此の作意は若しくは名を緣じ、心沈めば卽ち能く策起す。抑掉とは、謂く攝相作意なり。此の作意は若しくは義を緣じ、心散ずれば卽ち能く攝持す。正住とは、謂く捨相作意なり。此の作意は若しくは心平等にして能く捨心に住す。無間とは、謂く恒修作意なり。此の作意は能く正住に依りて修習を廢すること無し。尊重とは、謂く恭敬作意なり。能く習時に於いて名義を尊重す。

是の如く十一種の作意を起し已つて復た應に九種の住心を修習すべし。偈に曰く、

繫緣と將た速攝と、　　內略と及び樂住と、
調厭と息亂と、　　　惑起滅亦爾と、　　　（七）
所作の心は自ら流ると、　爾の時に無作を得ると、
菩薩は復た應に、　　　此の如きの九住心を習すべし。　（八）

釋して曰く、九種の住心とは、一に安住心、二に攝住心、三に解住心、四に轉住心、五に伏住心、六に息住心、七に滅住心、八に性住心、九に持住心なり。此の九住の敎授方便應に知るべし。繫緣とは、謂く安住心なり。心所緣に安し離れしめざるが故なり。速攝とは、謂く攝住心なり。若し覺心亂るれば、速に攝持するが故なり。內略とは、謂く解住心なり。覺心は外廣く更に內略なるが故なり。樂住とは、謂く轉住心なり。定の功德を見て樂住に轉ずるが故なり。調厭とは、謂く伏住心なり。心若し樂しまざれば應に折伏すべきが故なり。息亂とは、謂く息住心なり。亂過失を見て止息せしむるが故なり。惑起滅亦た爾りとは、謂く滅住心なり。貪愛等起れば卽ち滅せしむるが故なり。所作の心自ら流るとは、謂く性住心なり。所作任運に自性を成ずるが故なり。爾の時無作を得

増益し廣く大乘に進趣すとは、此の菩薩若し教授を得ば則ち[10]奢摩他智を増益し、廣く大乘に於いて而も能く進修す、是の如く教授を得已りて次に六種の心を起す。偈に曰く、

想名と及び了句と、　思義と亦た義知と、
法總と及び義求と、　六心次第に起る。（四）

釋して曰く、六心とは、一に[11]根本心、二に[12]隨行心、三に[13]觀察心、四に[14]實解心、五に[15]總聚心、六に[16]悕望心なり。想名とは、謂く根本心なり、初めに修多羅等の法に於いて二義あること無きを觀察す、唯想名の聚なるが故なり。了句とは、謂く隨行心なり。次に諸句に隨つて差別と及び次第とを決了するが故なり。思義とは、謂く觀察心なり、次に彼の義に於いて內に正思惟するが故なり。義知とは、謂く實解心なり、彼の思義に於いて如實に知るが故なり。法總とは、謂く總聚心なり、更に前法を聚め、復た總觀するが故なり。義求とは、謂く悕望心なり、彼の義趣に於いて得意を求むるが故なり。是の如く六心を起し已つて次に十一種の作意を起す。偈に曰く、

有求と亦た有觀と、　一味と將た止道と、
觀道と及び二俱と、　拔沉と并に抑掉と、（五）
正住と無間と、　中に於いて亦た尊重と。
心に置いて一切を緣ず、　作意に十一あり。（六）

釋して曰く、十一種の作意とは、一に[17]有覺有觀作意、二に[18]無覺有觀作意、三に[19]無覺無觀作意、四に[20]奢摩他作意、五には[21]毘鉢舍那作意、六に[22]二相應作意、七に起相作意、八に[23]擧相作意、九に[24]捨相作意、十に[25]恒修作意、十一に[26]恭敬作意なり。有求とは、謂く有覺有觀作意なり。此の作意は意言を以て相續し諸法を觀察す。有觀とは、謂く無覺有觀作意なり、此の作意は覺を離ると雖も亦た意言を以て相續し諸法を觀察す。一味とは、謂く無覺無觀作意なり。此の作意は

[10] Śamathajñā.
[11] Mūlacittaṁ.
[12] Anucaracittaṁ.
[13] Vicāraṇacittaṁ.
[14] Avadhāraṇacittaṁ.
[15] Saṁkalanacittaṁ.
[16] Āśāsticittaṁ.
[17] Savitarka savicāra.
[18] Avitarka vicāra.
[19] Avitarka avicāra.
[20] Śamathamanaskāra.
[21] Vipaśyanāmanaskāra.
[22] Yuganaddhamanaskāra.
[23] Śamathanimittamanaskāra.
[24] Upekṣānimittamanaskāra.
[25] Sātatyamanaskāra.
[26] Satkṛtyamanaskāra.

卷の第七

教授品第十五[1]

釋して曰く、已に菩薩の隨修を說けり。次に如來の敎授を說かん。偈に曰く、

一僧祇を行盡して、　長へに信を增上せしむ、
衆善信に隨つて集まり、　亦た具すること海の滿つるが如し。　(一)

釋して曰く、一僧祇を行盡して長へに信を增上せしむとは、若し諸の菩薩の行、一阿僧祇を行盡せば、爾の時は信を長養して方に上品に至る。問ふ、獨り信を增すのみなるや。答ふ、衆善信に隨つて集まり、亦た具すること海の滿つるが如し。謂ゆる信の增す時に於いて一切の衆善信に隨つて聚集し、亦た具足を得ること大海の水の湛然として圓滿するが如し。偈に曰く、

福德を聚集し已れば　佛子最初に淨なり。
極智[2]と及び　輭心[3]と、　諸[4]の正行を勤修す。　(二)

釋して曰く、福德を聚集し已るとは、前の所說の如く聚集するが故なり。佛子最初に淨なりとは、清淨を護らしむるが故に、及び大乘に於いて[5]正直の見を作し、不顚倒の受の義なるが故なり。極智とは、多聞を得るが故なり。輭心とは、[6]諸障を離るゝが故なり。諸の正行を勤修すとは、堪能あるが故なり。偈に曰く、

自後諸佛の、　[7]法流と而して　[8]敎授とを蒙り、
[9]寂靜智を增益し、　廣く大乘に進趣す。　(三)

釋して曰く、自後諸佛の法流と而して敎授とを蒙るとは、此の諸の菩薩は此より已後、諸佛如來の修多羅等の法を以て、而も爲めに之を說くを蒙る。譬へば爲めに十地經を說くが如し。寂靜智を

【一】Avavādānuśāsani.
【二】Suvijñā.
【三】Kalpacitta.
【四】Bhāvanā.
【五】Dṛṣtirju.
【六】離諸障故(Vinivaraṇatvāt)。
【七】Dharmasrotas.
【八】Avavāda.
【九】Śamathajñāna.

法を修習して曾て間心無し。八には善く三昧を行ず、譬へば財を出して保信を得人の日日に滋益するが如く、菩薩も亦た爾なり。諸定を修習して亂せず味せず功德增長す。九には善く般若を行ず、譬へば幻師の幻の非實なることを知るが如く、菩薩も亦た爾なり。所觀の法に於いて不顚倒を得。是れを菩薩の修行の差別と名づく。

已に修行の差別を說けり。次に三輪清淨を說かん。偈に曰く、

[五四]常に大精進を勤め、　二を熟して清淨ならしむ
淨覺と無分別と　漸漸に菩提を得。　（二一九）

釋して曰く、常に大精進を勤め二を熟して清淨ならしむとは、菩薩は大精進力を以て自他の二利を勤行す。是の故に衆生と及び自と並びに成熟を得。是れを清淨と名づく。淨覺と無分別と漸漸に菩提を得とは、淨覺は謂く、法無我智なり。此の智は三輪を分別せず。謂く修者と所修と正修との故に清淨を得。此の淨に由るが故に漸漸に無上菩提を成ずるを得。隨修品究竟。

【五四】此の偈は菩薩の三輪清淨を說示す。

[三三] 善く生死を行ずること、　病の苦藥を服するが如く、
善く衆生を行ずること、　醫の病者に近づくが如し。　(二四)
善く自心を行ずること、　未成の奴を調ふるが如く、
善く欲塵を行ずること、　商人の善く販賣するが如し。　(二五)
善く三業を行ずること、　人の善く浣衣するが如く、
善く他を惱まさゞることを行ずること、　父の愛子に於けるが如し。　(二六)
善く修習を行ずること、　火を鑽りて息まざるが如く、
善く三昧を行ずること、　財と信と人との如し。　(二七)
善く般若を行ずること、　幻師の幻を知るが如し。
是を諸の菩薩は、　善く諸の境界を行ずと名づく。　(二八)

釋して曰く、諸の菩薩の修行に九種の差別あり。一には善く生死を行ず、譬へば病久しくして苦澀の藥を服するが如く、但だ差病の爲めに貪染を生ぜず。菩薩も亦た爾なり。生死に親近して但だ思惟策勵を爲し、染著を爲すに非ず。二には善く衆生を行ず、譬へば良醫の病者に親近するが如く、菩薩も亦た爾なり。大悲に有るが故に煩惱病苦の衆生を捨せず。三には善く自心を行ず、譬へば有智の主の善能く未成就の奴を調服するが如く、菩薩も亦た爾なり。善能く未調伏の心を調伏す。四には善く欲塵を行ず、譬へば商人の販賣を善くするが如く、菩薩も亦た爾なり。檀等の諸度に於いて資財を增長す。五には善く三業を行ず、譬へば善き浣衣師の能く穢苦を除くが如く、菩薩も亦た爾なり。三業を修治して能く清淨ならしむ。六には善く衆生を惱まさゞるを行ず、譬へば慈父の小兒を愛して、穢と雖も惡まざるが如く、菩薩も亦た爾なり。衆生の損を加ふるも未だ嘗て瞋惱せず。七日は善く修習を行ず、譬へば火を鑽るに未だ熱せざれば息まざるが如く、菩薩も亦た爾なり。善

【三三】以下四偈は菩薩の修行に九種の差別あることを說示す。

て之を名づけて心と爲す。卽ち此の心を說いて自性淸淨と爲す。此の心卽ち是れ阿摩羅識なり。

已に怖畏を遮せり、次に貪罪を遮せん。偈に曰く、

[五三]菩薩は衆生を念じ、　之を愛して骨髓に徹し、
恒時に利益せんと欲す、　猶ほ一子の如きが故なり。　(二一〇)

釋して曰く、諸の菩薩は諸の衆生を愛す、之を名づけて貪と爲す。餘は偈に說くが如し。偈に曰く、

群生を利するの意に由り、　貪を起すも罪を得ず、
瞋は則ち彼れと違す、　恒に他を損せんと欲するが故なり。　(二一一)

釋して曰く、若し菩薩は諸の衆生を愛し、貪を起すを罪と名づくと謂はゞ、此の義然らず。何以故此の貪は恒に衆生を利益する因を作すが故なり。偈に曰く、

鴿の自子に於いて、　普ねく覆ふて極愛を生ずるが如く、
是の如く有悲の人の、　生に於ける愛も亦た爾なり。　(二一二)

釋して曰く、譬へば鴿鳥の多く貪りて諸子を愛念し、最も增上を得るが如く、是の如く菩薩の多く悲しみて諸の衆生を愛する增上も亦た爾なり。偈に曰く、

慈と瞋心とは違し、　息苦と苦心とは反す
利は則ち無利と違し、　無畏は畏心に違す。　(二一三)

釋して曰く、菩薩は諸の衆生に於いて慈心を得るに由るが故に瞋心と相違し、苦心を息むることを得るに由るが故に作苦心と相違す。利益心を得るに由るが故に無利心と相違し、無畏心を得るに由るが故に作畏心と相違す。是の故に菩薩は是の如きの貪を起すも罪と名づくるを得ず。

已に貪罪を遮せり、次に修行の差別を說かん。偈に曰く、

【五三】以下四偈は貪の罪を遮す。

亦た離塵淸淨なりと說くが如く、法界の性淨及び無垢なることも亦た復た是の如し。是の故に此の二處に於いて怖畏すべからず。

復た次に更に畫に似たる譬喩あり、能く前の二怖畏を遮す。[五二]偈に曰く、

　譬へば工畫師の如く、　　畫平にして凹凸を起す、

　是の如きの虛分別は、　　無に於いて能所を見る。　　（一七）

釋して曰く、譬へば善巧の畫師の能く平壁に畫きて凹凸の相を起し、實に高下無くして而も高下を見るが如く、不眞分別も亦た復た是の如し。平等法界無二相處に於いて而も常に能所の二相あるを見る。是の故に應に怖畏すべからず。

此の中復た水に似たる譬喩あり。能く後の二怖畏を遮す。偈に曰く、

　譬へば淸水の濁れるが如く、　　穢を除けば本の淸に還る、

　自心の淨も亦た爾り。　　唯だ客塵を離るゝが故なり。　　（一八）

釋して曰く、譬へば淸水の垢來れば則ち濁り、後時に若し淸なるは唯だ垢を除けるのみ。淸は外より來るに非ず、本性淸なるが故なり。心方便の淨も亦た復た是の如し。心性は本淨にして客塵の故に染まり、後時に淸淨なるは客塵を除けるのみ。淨は外より來るに非ず、本性淨なるが故なり。是の故に應に怖畏すべからず。偈に曰く、

　已に心性淨なるも而も、　　客塵に染せらるゝを說けり、

　心眞如を離れて、　　別に心性淨あるにあらず。　　（一九）

釋して曰く、譬へば水性は自ら淸きも而も客垢の爲めに濁せらるゝが如く、是の如く心性も自淨にして而も客塵の爲めに染せらる。此の義は已に成ぜり。是の義に由るが故に心の眞如を離れて別に異心あるにあらず。謂ゆる依他の相を說いて自性淸淨と爲す。此の中應に知るべし心眞如を說い

【五二】以下三偈は菩薩は怖畏を遮することを說示す。

[四九] 菩薩は地獄に處し、　物の爲めに苦を辭せず、
有を捨し小心を發す、　此の苦則ち劇を爲す。　(一四)

釋して曰く、菩薩の慈悲は諸の衆生の爲めに大地獄に入りて大苦を辭せず。若し三有の功德を滅し小乘心を起さば、菩薩は此を以て苦と爲すこと最も深重爲り。

問ふ、此の義云何。偈に曰く、

恒に地獄に處すと雖も、　大菩提を障へず、
若し自利心を起さば　是れ大菩提の障なり。　(一五)

釋して曰く、菩薩は衆生の爲めに長時に大地獄に入ると雖も、以て苦と爲さず。何以故廣淨の菩提に於いて障と爲らざるが故なり。若し異乘に涅槃を樂む心を起さば卽ち大苦と爲す。何以故大乘に於いて樂住して障と爲るが故なり。此の偈は前の偈の義を顯はすこと應に知るべし。

已に二乘の心を遮することを說けり。次に怖畏心を遮することを說かん。偈に曰く、

[五〇] 無體と及び可得と　此の事猶ほ幻の如し。
性淨と無垢と、　此の事則ち空の如し。　(一六)

釋して曰く、無體と及び可得と此事猶幻の如しとは、一切諸法自性あること無し、故に無體と曰ふ。而も復た相貌有りて顯現するを見る。故に可得と曰ふ。諸の凡夫の人此の二處に於いて互に怖畏を生ず。此れ應に爾るべからず。何以故幻相似の故なり。譬へば幻等の實に體あること無くして而も顯現して可見なるが如く、諸法の無體にして可得なることも亦た爾り。是の故に此の二處に於いて應に怖畏すべからず。性淨と無垢と此の事則ち空の如しとは、法界は本來清淨なるが故に性淨と曰ひ、後時に塵を離れ清淨なるが故に無垢と曰ふ。諸の凡夫の人は此の二處に於いて互に怖畏を生ずるも此れ應に爾るべからず。何以故空と相似なるが故なり。譬へば虛空の本性清淨にして後時

[四九] 此の偈は二乘の心を遠離することを說示す。

[五〇] 此の偈は怖畏の心を遮する旨を說示す。

[四一]可樂と及び[四二]無難と、　[四三]無病と[四四]寂靜と、
[四五]觀察と此の五種は、　宿植善根の故なり。（一〇）

釋して曰く、此の偈は先福輪を明す。先福も亦た五の因緣を具す。一には可樂、二には無難、三には無病、四には三昧、五には智慧なり。第一事は勝土に住するを因と爲すに由り、第二事は善人に値ふを因と爲すに由り、後三事は自正成就を因と爲すに由る。

已に四種の不放逸輪を說けり、次に煩惱と煩惱を出づることを說かん。偈に曰く、

[四六]法界を遠離すれば、　別に貪法ある無し、
是の故に諸佛は說きたまふ、　貪は貪を出づと、餘も爾り。（一一）

釋して曰く、佛の先に、我は異貪の法ありて能く貪より出づと說かず、瞋癡も亦た爾なり、と說きたまふが如し。法界を離るれば則ち別に體無きに由るが故なり。是の故に貪等の法性は貪等の名を得。此れ貪等の法性能く貪等を出づと說く。此の義は是れ經の旨趣なり。偈に曰く、

[四七]法性を離れて外に、　別に諸法あること無きに由る、
是の故に是の如く說く、　煩惱卽ち菩提なりと。（一二）

釋して曰く、經の中に[四八]無明と菩提と同一なりと說くが如し。此れ謂ゆる無明法性菩提の名を施設するなり。此の義是の經の旨趣なり。偈に曰く、

貪に於いて正思を起し、　貪に於いて解脫を得、
故に貪は貪を出づと說く、　瞋癡の出亦た爾り。（一三）

釋して曰く、若し人貪に於いて正思觀察を起し、是の如く知り已らば貪に於いて卽ち解脫を得。故に貪を以て貪を出離すと說く。瞋癡を出離することも亦た復た是の如し。

已に煩惱は煩惱を出づることを說けり、次に二乘の心を遠離するを說かん。偈に曰く、

【四一】Rati.
【四二】Kṣanopapatti.
【四三】Arogya.
【四四】Samādhi.
【四五】Prajñā.
【四六】以下三偈は煩惱を出離することを說示す。
【四七】梵語の原典には法性を法界(Dharmadātu)に作る。
【四八】Avidyā ca bodhiś ca ekam.

き分數、是を地建立智と名づく。此の如き二智は並起及び間餘法起を得ず、恒に無間に行ず。是を菩薩の隨行と名づく。菩薩は能く是の如く隨行するに四種の不放逸輪あり。一には勝土輪、二には善人輪、三には自正輪、四には先福輪なり。此の如き四輪今當に次第に說くべし。[二一]偈に曰く、

[二二]易求と及び[二三]善護と、　[二四]善地と亦た[二五]善伴と、
[二六]善寂と此の勝土に　菩薩は則ち往生す。　（七）

釋して曰く、此の偈は勝土輪を明す。勝に五の因緣あり。一には易求、謂く[二七]四事身に供はり得難からざるが故なり。二には善護、謂く國王如法にして、惡人盜賊住するを得ざるが故なり。三には善地、處所調和し疫癘無きが故なり。四には善伴、謂く同戒同見伴侶と爲るが故なり。五には善寂、謂く晝日喧無く、夜聲を絕するが故なり。[二八]偈に曰く、

[二九]多聞と及び[三〇]見諦と、　[三一]巧說と亦た[三二]憐愍と、
[三三]不退と、此の丈夫は、　菩薩の勝依止なり。　（八）

釋して曰く、此の偈は善人輪を明す。善人も亦た五の因緣を具す。一には多聞、阿含を成就するが故なり。二には見諦、聖果を得るが故なり。三には巧說、能く法を分別するが故なり。四には憐愍、貪利せざるが故なり。五には不退、疲倦無きが故なり。[三四]偈に曰く、

[三五]善緣と及び[三六]善聚と、　[三七]善修と及び[三八]善說と、
[三九]善出と、此の五種、　是れを自正勝と名づく。　（九）

釋して曰く、此の偈は自正輪を明す。自正も亦た五の因緣を具す。一には善緣、妙法を緣とするが故なり。二には善聚、福智を具足するが故なり。三には善修、止觀の諸相を時に應じて修するが故なり。四には善說、利を求むること無きが故なり。五には善出、所有上法を恭敬して修するが故なり。[四〇]偈に曰く、

【二一】此の偈は菩薩の四種の不放逸輪中、第一勝土輪の意義を說示す。
【二二】Sulābha.
【二三】Svadhiṣṭhāna.
【二四】Subhūmi.
【二五】Susahāyaka.
【二六】Suyoga.
【二七】四事とは、飲食・衣服・醫藥・臥具を云ふ。
【二八】此の偈は菩薩の四種の不放逸輪中、第二善人輪の意義を說く。
【二九】Bahuśruta.
【三〇】Dṛṣṭasatya.
【三一】Vāgmī.
【三二】Samanukampaka.
【三三】Akhina.
【三四】此の偈は菩薩の四種の不放逸輪中、第三自正輪の意義を說く。
【三五】Svālambanā.
【三六】Susaṃbhārā.
【三七】Subhāvanā.
【三八】Deśitā.
【三九】Suniryāṇa.
【四〇】此の偈は菩薩の四種の不放逸輪中、第四先福輪の意義を說く。

何以故是の法の應に捨すべきこと、譬へば筏の如きが故なり。是を知法と名づく。偈に曰く、

　[七]凡夫に二智あり、　　卽ち二無我に通ず、
　彼の智を成ぜんが爲めの故に、　　說の如く法に隨つて行ず。　　（三）

釋して曰く、此の偈は菩薩の[八]隨法を明す。凡夫に二智ありとは、謂く知義智と、知法智なり。卽ち二無我に通ずとは、此の二智に由るが故に亦た能く人法二種の無我に通達す。彼の智を成ぜんが爲めの故に說の如く法に隨つて行ずとは、菩薩は彼の二種の智を成就せんが爲めに、應に所說の法の如く隨順修行すべし。是を隨法と名づく。偈に曰く、

　[九]彼の智を成就する時、　　出世間無上なり。
　凡そ初地に住する者は、　　所得皆な同得なり。　　（四）

釋して曰く、此の偈は菩薩の同得を明す。彼の智を成就する時出世間無上なりとは、彼の智體最勝なるに由るが故なり。[一〇]初地は謂く[一一]歡喜地なり。一切の歡喜地に住する菩薩の得る所の功德は彼の初入地の人も亦た皆な同じく得るが故なり。[一二]偈に曰く、

　[一三]見道所滅の惑は、　　應に知るべし[一四]一切盡くるものなることを。
　次に隨つて餘地を修す、　　[一五]智障を斷ぜんが爲めの故に、
　應に知るべし諸地の中、　　[一六]無分別と[一七]建立と、
　[一八]次第無間に起ると　　是の如く隨行を說く。　　（五・六）

釋して曰く、此の二偈は菩薩の隨行を明す。此の中見道所滅の煩惱は初地に入る時一切悉く盡く。此の故に餘地を修習するは但だ智障を斷ぜんが爲めなり。然れども諸地に於いて各二智あり、一は[一九]無分別智、二は[二〇]地建立智なり。菩薩若し正歡にあらば刹那刹那に於いて爾所の法を得て而も分別せず、是を無分別智と名づく。菩薩出觀の後觀中所得の法を分別すること是の如し、是の如

【七】此の偈は菩薩の隨法修行の中、隨法の意義を說示す。
【八】Anudharma.
【九】此の偈は菩薩の隨法修行の中、同得の意義を說示す。
【一〇】Ādhibhūmi.
【一一】Pramuditā-bhūmi.
【一二】以下二偈は菩薩の隨法修行の中、隨行の意義を說示す。
【一三】Darśanajñeya-kleśa.
【一四】Sarvasaṁkṣaya.
【一五】Jñeyāvaraṇa.
【一六】Avikalpa.
【一七】Vyavasthāna.
【一八】Sahacāri.
【一九】Avikalpajñāna.
【二〇】Bhūmivyavasthāna-jñāna.

なり。二には恒時說、不退に由るが故なり。三には離求說、大悲に由るが故なり。四には令信說、名稱遠に由るが故なり。五には隨機說、巧便に由るが故なり。此の五因に由り能く說法して衆生を導引し、多く恭敬を生ず。譬へば日出でゝ世間を照朗するが如し。弘法品究竟。

隨修品第十四[一]

釋して曰く、已に菩薩の弘法を說けり。次に菩薩の隨法修行を說かん。此の中隨修に知義あり、知法あり、隨法あり、同得あり。隨行あり。今當に次第に顯示すべし。偈に曰く、

[二]二に於いて無我を知り、　三に於いて邪正を離る、
菩薩は是の如く解す、　是を知義の人と名づく。　（一）

釋して曰く、此の偈は菩薩の知義を明す。二に於いて無我を知るとは、謂く、人法の二種に於いて無我なることを知る、能取所取體あること無きを知るに由るが故なり。三に於いて邪正を離るとは、三とは謂く三種の三昧、卽ち空、無相、無願なり。空三昧に由り體あること無きを知る、分別性を解するが故なり。無相・無願三昧に由りて自體無きを知る、依他眞實の性を解するに由るが故なり。邪正を離るとは、此の三三昧出世智を引くが故に不邪なり。是れ世間の故に不正なり。菩薩は是の如く解す、是を知義の人と名づくとは、菩薩若し人法二種の無我なることを知り、能く三種の三昧を知らば、邪を離れ正を離る、此の如くなれば則ち[三]知義と名づく。偈に曰く、

[四]是の如く義を知り已つて、　法は猶ほ[五]筏の如しと知る、
法を聞いて應に喜ぶべからず、　法を捨するを知法と名づく。　（二）

釋して曰く、此の偈は菩薩の[六]知法を明す。初學の菩薩は知義を得已つて、次に應に法を知るべし、謂く能く修多羅の經法は猶ほ筏喩の如しと知る、但だ聞くのみにして歡喜を生ずることを得ず。

【一】Pratipatti.

【二】此の偈は菩薩の隨法修行の中、先づ其の知義を顯示す。

【三】Arthajña.

【四】此の偈は菩薩の知法を顯示す。

【五】經典を筏に喩ふることは佛教の特色の一にて、理想の彼岸に到達し了れば何日までも筏に執着するの要なきが如く、一切の經典も佛教徒としての目的を達し終れば、其の一字一句に執着するの必要はないのである。

【六】Dharmajña.

ことを得と說く。不定障を對治せんが爲めの故に大乘經に、諸佛は聲聞に授記し、當に作佛を得べしと說き、及び一乘を說く。是を大乘を受持して八障を離るゝを得と名づく。偈に曰く、

[一二] 若しは文、及び若しは義、　二偈勤めて受持すれば、
功德の數十あり、　是を勝慧者と名づく。　(二一)
善種の圓滿を得、　死する時歡喜勝れ、
受生所欲に隨ひ、　念生智亦た成ず。　(二二)
生生恒に佛に値ひ、　法を聞いて信慧を得、
二障を遠離し、　速に無上道を成ず

釋して曰く、此の三偈は大乘を受持して功德を集得することを顯示す。此の功德に十種あり。一には一切善根の種子圓滿依止を成就す。二には命終の時に臨み、無上の喜悅を得。三には一切處に於いて隨願受生を得。四には一切の生處に於いて自性念生智を得。五には所生の處恒に佛に値ふことを得。六には恒に佛邊に在りて大乘の法を聞く。七には增上信根を成就す。八には增上慧根を成就す。九には惑智の二障を遠離するを得。十には速に無上菩提を成就することを得。若し人一切の大乘經典の若しくは文、若しくは義、乃至一句に於いて、正に勤めて受持せば、則ち是の如き十種の功德を得ん。此の中應に知るべし、現在世に於いて初めの二種の功德を得、未來世に於いて餘の八種の功德を得て、漸漸增勝せんことを。

已に持法の功德を說けり。次に說法の功德を說かん。偈に曰く、

[一三] 慧善と及び不退と、　大悲と名稱遠と、
巧便と[によりて]諸法を說く、　四の世間を朗にするが如し。　(二三)

釋して曰く、若し諸の菩薩五因を具足せば善說法と名づく。一には不倒說、慧善なるに由るが故

【一二】以下の三偈は大乘受持の功德を說示す。

【一三】此の偈は說法の功德を說示す。

說くが如く、是の如き等の說を是を別義意と名づく。別時意とは、佛、若し人阿彌陀佛を見んと願はゞ、一切皆な往生を得と說きたまへるが如し。此れ別時に由りて生を得るに由るが故に是の如く說きたまへり。是の如き等の說、是れを別時意と名づく。別欲意とは、彼の人是の如き善根あり、如來或時は讃歎し、或時は毀呰す、少善根を得て便ち足れりと爲すに由るが故なり。是の如き等の說、是れを別欲意と名づく。

已に說法の意を說けり。次に大乘を受持するの功德を說かん。偈に曰く、[一〇九]

佛を輕んずると、及び法を輕んずると、　懈怠と、少知足と、
貪行と、及び慢行と、　悔行と、不定等、　（一九）
是の如き八種の障、　大乘に對治を說く、
是の如く諸障を斷ず、　是の人は正法に入る。　（二〇）

釋して曰く、此の二偈は大乘の斷障の功德を顯示す。障に八種あり。一には輕佛障、二には輕法障、三には懈怠障、四には少知足障、五には貪行障、六には慢行障、七には悔行障、八には不定障なり。輕佛障を對治せんが爲めの故に大乘經に、往昔の毗婆尸佛は卽ち我身是れなりと說く。輕法障を對治せんが爲めの故に大乘經に、無量恒河沙の佛所に於いて大乘を修行せば、乃ち解を生ずることを得と說く。懈怠障を對治せんが爲めの故に大乘經に、若し衆生ありて[一一〇]安樂國土に生ぜんと願はゞ、一切當に往生を得べく、[一一一]無垢月光佛の名を稱念せば決定して當に作佛を得べしと說く。少知足障を對治せんが爲めの故に大乘經に、ある處に於いては、檀等の行を讃歎し、ある處に於いては檀等の行を毀呰すと說く。貪行障を對治せんが爲めの故に大乘經には、諸佛の國土は極妙樂事なりと說く。慢行障を對治せんが爲めの故に大乘經には、或は佛土あり最勝成就を說く。悔行障を對治せんが爲めの故に大乘經には、或は衆生あり、佛菩薩に於いて不饒益事を起さば、善道を生ずる

【一〇九】此の偈は大乘受持するの功德を說示す。

【一一〇】Sukhāvatī. こゝに無著時代の往生思想を窺ふことを得。

【一一一】Vimala-candra-prabha-tathāgata.

次第に四義に依りて、　節を說くに四種あり。　（一七）

釋して曰く、令入節とは、應に知るべし諸の聲聞を教へ、法義に入りて不怖を得しむることを。色等は是れ有なりと說くが故なり。相節とは、應に知るべし分別等の三種の自性に於いて無體無起自性清淨なりと一切法を說くが故にと。對治節とは、應に知るべし諸過を斷じ、八種の障を對治するに依るが故なりと。大乘の中に說くが如く二偈を受持し、爾所の功德を得るは皆な對治の爲めの故なりと說く。此の對治は後に當に解くべし。秘密節とは、應に知るべし諸の深語に依りて語を廻し方に義を得るに由るが故にと。大乘經の偈に說くが如く、不堅堅固解、善く顚倒に住し、煩惱の爲めに惱まされ速かに大菩提を得。此の節の中の不堅堅固解とは、不堅は諸の衆生其の心亂れざるを謂ふ。此の不亂に於いて堅固の解を作す。此の解は最勝にして能く菩提を得。亂とは心馳せ堅く著して菩提に至り得ること能はざるが故なり。此は是れ第一句義なり。善く顚倒に住すとは、顚倒は常樂我淨の執を謂ふ。若し人能く顚倒の中に於いて無常・無樂・無我・無淨を解せば、善く不退に住して卽ち能く速に菩提を得、爾らざれば得ざるが故なり。此れは是れ第二句義なり。煩惱の爲めに惱まされるとは、長時に難行苦行を勤修し、極めて疲倦して能く菩提を得るも、爾らざれば得ざるに由るが故なり。此れは是れ第三句義なり。

已に說法の節を說けり。次に說法の意を說かん。偈に曰く、

[一〇八] 平等と及び別義と、　別時と及び別欲と、
此の四種の意に依り、　諸佛說を應に知るべし。　（一八）

釋して曰く、諸佛の說法は四意を離れず、一に平等意、二に別義意、三に別時意、四に別欲意なり。平等意とは、佛、往昔の毗婆尸佛卽ち我身是れなり。法身無差別に由るが故にと說くが如く、是の如き等の說を是を平等意と名づく。別義意とは、佛、一切諸法自性無きが故に、無生の故にと

【一〇八】此の偈は說法の意を說示す。

義正と及び語巧と、　　能く四梵行を開く。　（一四）

釋して曰く、此の法は隨時に善にして信・喜・覺の因を生ずとは、隨時善は、謂く初中後善なり。其の次第の如く聞思修の時、信因と爲るが故なり。喜因と爲るが故なり。覺因と爲るが故なり。覺因と爲るとは、定めて心に此の法の道理を觀察し、如實智を得るが故なり。義正と及び語巧と能く四梵行を開くとは、義正は謂く善義と及び妙義となり。世諦と第一義諦と相應するが故なり。語巧は謂く、受け易く及び解し易からしむ。文顯はれ義現はるゝに由るが故なり。此に由るが故に四種の梵行を開示す。問ふ、何者か四なるや、偈に曰く、

[一〇五] 他と共に相應せざると、　　具に三界の惑を斷ずると、
自性と及び無垢と、　　是等の行を四種と爲す。　（一五）

釋して曰く、四梵行とは、一には獨、二には滿、三には清、四には白なり。他と共に相應せずとは、是れ獨の義なり。此の行は外道と共に同じく行ぜざるに由るが故なり。具に三界の惑を斷ずとは、是れ滿の義なり。此の行は具に三界の煩惱を斷ずるに由るが故なり。自性とは是れ清の義なり。此の行は是れ無漏の自性淨なるに由るが故なり。無垢とは是れ白の義なり。此の行に由りて漏盡の身の種類在り、無垢にして淨なることを得る故なり。

已に說法の義の成就を說けり。次に說法の節を說かん。偈に曰く、

[一〇六] 所謂る令入節と、　　相節と、對治節と、
及以び秘密節と、　　是を名づけて四節と爲す。　（一六）

釋して曰く、諸佛の說法は四節を離れず。一には令入節、二には相節、三には對治節、四には秘密節なり。問ふ、此の四節は何の義に依るや。偈に曰く、

[一〇七] 聲聞と及び自性と、　　斷過と亦た語深と、

【一〇五】此の偈は四種の梵行の何たるかを說示す。

【一〇六】此の偈は說法の四節を顯示す。

【一〇七】此の偈は說法の四節の義を說示す。

釋して曰く、開演とは、謂く言說なり。施設とは、謂く諸句なり。建立とは、謂く能く相應するなり。是の如く分別し開示し、其の次第の如く、總擧し別說す。斷疑とは、義の淺近を解し易からしめ、聽受者として所說の法に於いて決定を得しむるが故なり。略とは、一たび說くなり。彼の利根の人は速に解を得るが故なり。廣とは、重ねて說くなり。彼の鈍根の人は遲く解を得るが故なり。偈に曰く、

[102]說者と及び所說と、　受者との三輪淨なり。
復た八種の過を離る、　說者の淨應に知るべし。　（一一）

釋して曰く、說者と及び所說と受者との三輪淨なりとは、何等か三輪なる、一に是れ說者、謂く諸佛菩薩なり。二には是れ所說、謂く名字等の諸種を總說するなり。三に是れ受者、謂く前の略說得解の人、廣說得解の人なり。復た八種の過を離る說者の淨應に知るべしとは、說者淸淨なり應に知るべし復た八種の過失を離るゝことを。問ふ、何をか八なる。[103]偈に曰く、

懈怠と及び不解と、　拒請と不開義と、
及以び不斷疑と、　斷疑不堅固と、　（一二）
厭退と及び有悋と。　是の如き八種の過は、
諸佛に彼の體無し。　故に無上說を成ず。　（一三）

釋して曰く八種の過とは、一に懈怠、二に不解義、三に拒請、四に不開義、五に不斷疑、六に斷疑不決定、七に心に厭退あり、一切時に說かざるが故なり。八に有悋、盡く開示せざるが故なり。一切の諸佛は是の如き八過は悉く皆な遠離す。是の故に無上の說法を成ずるを得。已に說法の大を說けり。次に義の成就を說かん。偈に曰く、

[104]此の法は隨時に善にして　信、喜、覺の因を生ず、

【九三】Aninditā.
【九四】Acañcalā.
【九五】Acapalā.
【九六】Sarvaparṣadanuvavitā.
【九七】Sarvakāravaropetā.
【九八】此の偈は說法の分解と効用とを表示す。
【九九】Ākhyāti.
【一〇〇】Prajñāpayati.
【一〇一】Prasthāpayati.
【一〇二】此の偈は說法の効果を顯示す。
【一〇三】此の偈は說者と所說と及び受者は八種の過失を離ることを說示す。
【一〇四】此の偈は說法の義の成就を顯示す。

が故なり。[六二]可愛聲とは、自利果を得しむるが故なり。[六三]渴仰聲とは、已に果を得たる人深く願樂するが故なり。[六四]敎勅聲とは、不思議の法を正說するが故なり。[六五]令解聲とは、思議の法を正說するが故なり。[六六]相應聲とは、驗に違せざるが故なり。[六七]有益聲とは、其の所應の如く敎示し導くが故なり。[六八]離重聲とは、虛說せざるが故なり。[六九]師子聲とは、外道を怖れしむるが故なり。[七〇]象聲とは、振大なるが故なり。[七一]雷聲とは、深遠なるが故なり。[七二]龍聲とは、信受せしむるが故なり。[七三]緊那羅聲とは、歌音美なるが故なり。[七四]迦陵頻伽聲とは、韻清亮なるが故なり。[七五]梵聲とは、出でゝ遠く去るが故なり。[七六]命命鳥聲とは、初めに吉祥を得て一切事成るが故なり。[七七]天王聲とは、敢て違ふこと無きが故なり。[七八]天鼓聲とは、魔を破するの初めなるが故なり。[七九]離慢聲とは、讃毀し高ぶらざるが故なり。[八〇]入一切聲とは、[八一]毘伽羅論一切種相に入るが故なり。[八二]離不正聲とは、憶して忘れざるが故なり。[八三]應時聲とは、敎化の事一切時に起るが故なり。[八四]無著聲とは、利養に依らざるが故なり。[八五]不怖聲とは、慚羞を離るゝが故なり。[八六]歡喜聲とは、聞きて厭くこと無きが故なり。[八七]隨捨聲とは、一切明處の善巧に入るが故なり。[八八]善友聲とは、一切衆生の利成就するが故なり。[八九]常流聲とは、相續して斷ぜざるが故なり。[九〇]嚴飾聲とは、種々に顯現するが聲なり。[九一]滿足聲とは、一音に無量の聲もて說法するが故なり。[九二]衆生根喜聲とは、一語に無量の義顯現するが故なり。[九三]不毀訾聲とは、所立の義の如く信順するが故なり。[九四]不增減聲とは、時量に應じて說くが故なり。[九五]不躁急聲とは、疾がずして疾かに說くが故なり。[九六]遍一切聲とは、遠近の徒衆同じく依止するが故なり。[九七]一切種成就聲とは、世間の法義をして皆な譬喩「を以て」解せしむるが故なり。

已に字の成就を說けり。次に說法の大を說かん。[九八]偈に曰く、

[九九]開演と及び[一〇〇]施設と、　[一〇一]建立と並に總擧と、
別說と斷疑と　略廣によりて皆な解せしむ。　(一〇)

【六二】 Premaṇīya.
【六三】 Abhinandanīya.
【六四】 Ājñāpanīya.
【六五】 Vijñāpanīya.
【六六】 Yuktā.
【六七】 Sahitā.
【六八】 Punaruktadoṣajahā.
【六九】 Siṁhasvaravegā.
【七〇】 Nāgasvaraśabda.
【七一】 Meghasvaraghoṣā.
【七二】 Negendrarutā.
【七三】 Kinnarasaṁgītaghoṣā.
【七四】 Kalavinkasvararutā.
【七五】 Brahmasvararutāravi=ta.
【七六】 Jīvaṁjīvakasvararutā=ravitā.
【七七】 Devendramadhurani=rghoṣā.
【七八】 Dundubhisvarā.
【七九】 Anunnatā.
【八〇】 Sarvaśabdānupraviṣṭā.
【八一】 Vyākaraṇa.
【八二】 Apaśabdavigatā.
【八三】 Avikalā.
【八四】 Alīnā.
【八五】 Adīnā.
【八六】 Pramuditā.
【八七】 Prasṛtā.
【八八】 Akhilā.
【八九】 Saritā.
【九〇】 Lolitā.
【九一】 Sarvasvarapūraṇī.
【九二】 Sarvasatvendriyasaṁtoṣaṇī.

[三一] 易解と而して [三二] 應機、 [三三] 出離と [三四] 隨順との故に。 （八）

釋して曰く、擧名とは、相應の諸字句違驗せざるが故なり。釋義とは、釋言の諸字句理に違せざるが故なり。隨乘とは、隨乘の諸字句三乘に違せざるが故なり。柔輭とは、離難の諸字句聲に違せざるが故なり。易解とは、聚集の諸字句義を得ること易きが故なり。應機とは、應物の諸字句機宜に逼ふが故なり。出離とは、不在の諸字句涅槃に向ふが故なり。隨順とは、正行の諸字句八支聖道に隨順するが故なり。偈に曰く、

[三五] 菩薩の字の成就は、 前の義の如く應に知るべし。

聲に六十種あり、 是を如來事と說く。 （九）

釋して曰く、如來に六十種の不可思議の音聲あり。[三六] 佛秘密經の中に說くが如く、[三七] 寂靜慧如來は六十種の聲語を具足す。所謂 [三八] 潤澤、[三九] 柔輭、[四〇] 可意、[四一] 意樂、[四二] 清淨[等]、是の如く廣く說く。此の中潤澤聲とは、衆生の善根能く攝を持つが故なり。柔輭聲とは、現前に法を聞きて樂觸を得るが故なり。可意聲とは、善義に由るが故なり。意樂聲とは、善字に由るが故なり。清淨聲とは、無上出世の後に得るが故なり。[四三] 無垢聲とは、諸惑習氣相應せざるが故なり。[四四] 明亮聲とは、字句辨し易きが故なり。[四五] 善力聲とは、功德を具足し、諸の外道の惡邪見を破するが故なり。[四六] 樂聞聲とは、信順出離の故なり。[四七] 不絕聲とは、一切の外道能斷無きが故なり。[四八] 調伏聲とは、貪等の煩惱を能く對治するが故なり。[四九] 無刺聲とは、戒を制し方便を樂しむが故なり。[五〇] 不澁聲とは、戒を犯せる人をして正出を得せしむるが故なり。[五一] 善調聲とは、敎化敎授の故なり。[五二] 悅耳聲とは、亂心對治の故なり。[五三] 身倚聲とは、能く [五四] 三摩提を引くが故なり。[五五] 心了聲とは、能く [五六] 毘鉢舍那を引くが故なり。[五七] 心喜聲とは、善く疑を斷するが故なり。[五八] 喜樂生聲とは、決定して邪を拔くが故なり。[五九] 無熱惱聲とは、信受して悔いざるが故なり。[六〇] 能持智聲とは、思の因、智の依止を成就するが故なり。[六一] 不隱覆聲とは、法を慳まずして說く

【三一】Prātitya.
【三二】Athārhan.
【三三】Nairyaṇya.
【三四】Anukūlyatva.
【三五】此の偈も復た字の成就を顯示す。
【三六】Guhyakādhipati-nirdeśa.
【三七】Śāntamati-tathāgata.
【三八】Snigdhā.
【三九】Mṛdukā.
【四〇】Manojñā.
【四一】Manoramā.
【四二】Śuddhā.
【四三】Vimalā.
【四四】Prabhāsvarā.
【四五】Valgu.
【四六】Śravaṇīya.
【四七】Anantā.
【四八】Vinītā.
【四九】Akarkaśā.
【五〇】Aparṣā.
【五一】Suvinītā.
【五二】Karṇasukhā.
【五三】Kāyaprahlādanakarī.
【五四】Samādhi.
【五五】Cittaudvilyakarī.
【五六】Vipaśyanā.
【五七】Hṛdayasaṃtuṣṭikarī.
【五八】Prītisukhasaṃjananī.
【五九】Niṣparidāhā.
【六〇】Ājñeya.
【六一】Vispaṣṭā.

依らざるが故に他をして信受せしむ。第四は世諦と第一義諦に通達するに由るが故に能く二種の眞實を顯はす。謂く染相眞實と淨相眞實となり。偈に曰く、

美語と及び離醉と、　無退と無不盡と、
種々と及び相應と、　令解と非求利と、
及以び遍教授と、　復た次に說を成就す。　(六)

釋して曰く、美語とは、他の瞋罵する時惡報せざるが故なり。離醉とは、醉に二種あり。一は他の稱讚する時に醉ひ、二は自の成就する時に醉ふ。謂く家色財等の成就に[於いて]愛喜を生ずるが故なり。離とは此の如き二醉を心に於いて滅するが故なり。無退とは、懈怠せざるが故なり。無不盡とは、[一五]法慳を離れて一切を說くが故なり。種種とは、重說せざるが故なり。相應とは、[一六]現比量に達せざるが故なり。令解とは、字句解すべきが故なり。非求利とは、財利の爲めに彼をして信ぜしめざるが故なり。遍教授とは、三乘に被らすが故なり。

已に說法の成就を說けり。次に語の成就を說かん。[一七]偈に曰く、

[一八]不細と及び[一九]調和と　[二〇]善巧と亦た[二一]明了と、
[二二]應機と亦た[二三]離求と、　[二四]分量と[二五]無盡と。　(七)

釋して曰く、不細とは徒衆に遍するが故なり。調和とは可意を悅ぶが故なり。善巧とは開示の字句分明なるが故なり。明了とは、解し易からしむるが故なり。應機とは隨宜に說くが故なり。離求とは名利に依らず說くが故なり。分量とは聞を樂しみて厭無きが故なり。無盡とは窮す可らざるが故なり。

已に語の成就を說けり。次に字の成就を說かん。[二六]偈に曰く、

[二七]擧名と及び[二八]釋義と、　[二九]隨乘と亦た[三〇]柔輭と、

【一五】 Ācaryamuṣṭi.
【一六】 Pramāṇā.
【一七】 此の偈は語の成就を顯示す。
【一八】 Ādīnā.
【一九】 Madhurā.
【二〇】 Sūktā.
【二一】 Pratīta.
【二二】 Yathārhā.
【二三】 Anāmiṣā.
【二四】 Parimitā.
【二五】 Aparyāttā.
【二六】 此の偈は字の成就を顯示す。
【二七】 Uddeśa.
【二八】 Nirdeśa.
【二九】 Yānānulomana.
【三〇】 Ślakṣṇya.

彼の修は果を得るが故に、　修說は義無きに非ず、
但だ聞と及び不聞と、　修說は則ち理無し。（三）

釋して曰く、彼の修は果を得るが故に修說は義無きに非ずとは、諸佛は方便を以て自ら證する所を說き世間を引接したまふ。能く行ずる者の修力自在に由りて果を得るが故なり。是の故に彼の修及び佛の說きたまふ所は義無きに非ざることを得。但だ聞と及び不聞と、修說は則ち理無しとは、若し但だ法を聞きて眞義を見るを得ば彼の修は則ち利益無し。若し法を聞かず修に入るを得ば彼の說は則ち利益無し。[五]

已に說法の利益を說けり。次に說法の差別を說かん。[六]偈に曰く、

[七]阿含說と　[八]證說とは、　謂く口と謂く通力となり。
通力は謂く相好と、　餘色と及び虛空となり。（四）

釋して曰く、諸の菩薩の說法に二種の差別あり。一には阿含說、謂く口力を以て說くなり。二には證說、謂く通力を以て說くなり。通力說に復た多種あり、或は相好說、或は樹林說、或は樂器說、或は空中說なり。

已に說法の差別を說けり。次に說法の成就を說かん。[九]偈に曰く、

[一〇]無畏及び　[一一]疑を斷じ、　[一二]信ぜしめ亦た　[一三]實を顯はす、
此の如く諸の菩薩の、　說の成就應に知るべし。（五）

釋して曰く、諸の菩薩の說法の成就は四種の義に由る。一には無畏、二には斷疑、三には令信、四には顯實なり。[一四]梵天王問經に說くが如く、菩薩は四法具足すれば、則ち能く廣大の法施を開く。何等が四と爲す、一には妙法を攝治す。二には自慧明淨なり。三には善く丈夫の業を作す。四には染淨を顯示す。此の中第一は多聞の故に無畏を得。第二は大慧の故に能く疑を斷ず。第三は名利に

【五】此の偈も復た前偈を受けて說法の利益を說く。
【六】此の偈は說法の差別を說示す。
【七】Āgama.
【八】Adhigama.
【九】次の二偈は說法の成就を說示す。
【一〇】Viśadā.
【一一】Saṁdehajahā.
【一二】Ādeyā.
【一三】Tattvadarśikā.
【一四】Brahmaparipṛcchā.

弘法品第十三

釋して曰く、已に求法を說けり。次に應に法を以て人の爲めに演說すべし。偈に曰く、

[二] 得難く復た堅からず、　苦を愍んで恒に喜び施す、
況んや法を以て世を利するをや、　增長亦た無盡なり。　(一)

釋して曰く。此の偈は先づ法慳を遮す。得難く復た堅からずとは、謂く身命財なり。苦を愍んで恒に喜び施すとは、菩薩は尙ほ能く一切時に於いて、此の三種の不慳の法を捨て、諸の苦厄の衆生に施す、慈悲に由るが故なり。況んや法を以て世を利するをや、增長亦た無盡なりとは、何に況んや大法は之を得ること難からざるも、而も慳悋を生ず、是の故に菩薩は應に此の法を以て廣く世間を利すべし。何以故、法增長を得亦た無盡なるが故なり。

已に法慳を遮せり。次に利益を說かん。偈に曰く、

[三] 自證は說く可らず、　物を引いて法性を說く、
法身は寂滅を口とす。　悲流は[四]蟒吸の如し。

釋して曰く、自證は說く可からず、物を引いて法性を說くとは、世尊は自ら證する所の法を說きたまはず。不可說に由るが故なり。衆生を引接せんが爲めに、復た方便を以て法性を說きたまへり。問ふ、云何んが方便なる。答ふ、法身は寂滅を口とす悲流は蟒吸の如し。佛は法性を以て身と爲し、寂滅を口と爲す。極廣淸淨にして二障を離るゝが故なり。大慈悲を以て敎網を流出し、衆生を引接すること、譬へば大蟒の口を張り、涎を吐き、諸物を吸引するが如し。一切諸佛の身口悲同引接も亦た爾り、大悲無盡にして畢竟に由るが故なり。偈に曰く、

[一] Deśanā.
[二] 此の偈は法を慳むことを遮するを以て目的とす。
[三] この偈は說法の利益を顯示す。
[四] Ajagara.

直實にして顚倒せざるが故なり。二には他利大、世間の依怙と作り第一義を以て安置するに由るが故なり。三には自利大、一切の功德は海の如く滿足するに由るが故なり。述求品究竟。

已に求法の因緣を說けり。次に求遠離分別を說かん。偈に曰く、

[五三]無體と體と增と減と、　　一と異と自と別相と
名の如きと義の如き者と、　　分別に十種あり。　　（四二）

釋して曰く、[五四]十種の分別あり。一には無體分別、二には有體分別、三には增益分別、四には損減分別、五には一相分別、六には異相分別、七には自相分別、八には別相分別、九には名の如く義を起す分別、十には義の如く名を起す分別なり。般若波羅蜜經の中に、諸の菩薩をして、此の十種の分別を遠離せしめんが爲めに、十種の對治を說けり。無體分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、菩薩菩薩ありと。有體分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、菩薩等を見ずと、增益分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、舍利弗よ色は自性空なりと。損減分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、色は空を滅するに非ずと。一相分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、若しくは色・空は色に非ずと。異相分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、空は色に異らず、色は空に異らず、空卽ち是れ色なりと。自相分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、此の色は唯だ名のみなりと。別相分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、色は不生不滅非染非淨なり等と。名の如く義を起す分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、名とは客を作すが故に名の如く義は著すべからずと。義の如く名を起す分別を對治せんが爲めの故に經に言はく、一切の名は見る可からず、見る可からざるが故に義の如く名は著すべからずと。

已に求遠離分別を說けり。次に求法大を說かん。偈に曰く、

[五五]菩薩の勝勇猛、　　二求眞實を得、
諸の世間に隨順し　　功德は海の滿てるが如し。　　（四三）

釋して曰く、求法に三種の大あり、一には方便大、最上の精進に由り世諦第一義諦を求むるに、

【五三】　此偈は菩薩の分別を遠離する要旨を說示す。

【五四】　十種の分別の原語は左の如し。
(1)無體分別(Abhāvavikalpa)。(2)有體分別(Bhāvavikalpa)。(3)增益分別(Adhyāropavikalpa)。(4)損減分別(Apavādavikalpa)。(5)一相分別(Ekatvavikalpa)。(6)異相分別(Nānātvavikalpa)。(7)自相分別(Svalakṣaṇavikalpa)。(8)別相分別(Viśeṣavikalpa)。(9)如名起義分別(Yathānāmārthābhiniveśavikalpa)。(10)如義起名分別(Yathārthanāmābhiniveśavikalpa)。

【五五】　此の偈は菩薩の求法に三種の大あることを說示す。三種の大の原語は左の如し。
(1)方便大(Upāyamahātmyaṃ)。(2)他利六(Parārthamahātmyaṃ)。(3)自利大(Svārthamahātmyaṃ)。

無身と亦た有身と、　　得身と及び滿身と、
多慢と及び少慢と、　　及以び無慢との故に。　（三九・四〇）

釋して曰く、求法に十三種の差別あり。一には增長求、謂く正聞を以て信を增長するが故なり。二には上意求、謂く佛邊に在りて法流を受くるが故なり。三には廣大求、謂く得神通の菩薩具足して遠く諸佛の法を聞くが故なり。四には有障求、謂く初めて信を增長する者の故なり。五には無障求、謂く上意求者なるが故なり。六には神通求、謂く廣大求者なるが故なり。七には無身求、謂く聞思慧のみにして法身無きが故なり。八には有身求、謂く修慧のみにして多聞の熏習種子身あるが故なり。九には得身求、謂く初地より七地に至る。十には滿身求、謂く八九十地なり。十一には多慢求、謂く信行地なり。十二には少慢求、謂く初の七地なり。十三には無慢求、謂く後の三地なり。

已に求法の差別を說けり。次に求法の因緣を說かん。偈に曰く、

[五一]色の爲め非色の爲め、　　通の爲め正法の爲めなり。
相好と及び病愈と、　　自在無盡の因なり。　（四一）

釋して曰く、求法に四の因總あり。一は色の爲め、二は非色の爲め、三は神通の爲め、四は正法の爲めなり。色の爲めとは相好因の故なり。非色の爲めとは煩惱病を滅するの因なるが故なり。神通の爲めとは自在因の故なり。正法の爲めとは無盡因の故なり。[五二]梵天王問經の說の如し。菩薩の求法は四想を具足す。一には如妙寶想、得難き義の故なり。二には如良藥想、病を除く義の故なり。三には如財物想、散ぜざる義の故なり。四には如涅槃想、苦滅の義の故なり。法は是れ相好莊嚴の因に由るが故に如妙寶想なり。法は是れ煩惱病を滅するの因なるに由るが故に如良藥想なり。法は是れ神通自在の因なるに由るが故に如財物想なり。法は是れ正法無盡の因なるに由るが故に如涅槃想なり。

【五一】此の偈は菩薩の求法の因緣を說示す。
【五二】梵天王問經(Brahma-paripṛcchāsūtra)。

釋して曰く。此の偈に四種の作意あり。一に不欲修作意、二に欲修作意、三に不隨作意、四に欲得作意なり。菩薩は次に是の念を作さく、我れ今相似の諸波羅蜜に於て應に修習すべからずと。是れを不欲修作意と名づく。次に此の念を作さく、我れ今眞實の諸波羅蜜に於て應に勤修習すべしと。是れを欲修作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜の障礙に於て作意應に斷ずべしと。是れを不隨作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今授記位諸波羅蜜を得んと欲し、決定地諸波羅蜜を得んと欲すと。是れを欲得作意と名づく。偈に曰く、

定めて未來行を作し、　常に他行の滿を觀る、
信解自ら第一、　體無上を知るが故に。　(三七)

釋して曰く、此の偈に三種の作意あり。一に定作作意、二に觀他作意、三に我勝作意なり。菩薩は次に是の念を作さく、我れ今當來の諸趣を見、智方便を以て一切の波羅蜜を決定して當に行ずべしと。是れを定作作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今應に十方の諸の大菩薩の諸波羅蜜の滿足を得る時を觀じて、願はくは我れ亦た滿足を得ん、一事を同じうするが故にと。是れを觀他作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今自ら行ずる所の諸波羅蜜を信じて、諸行の中に於て最も第一と爲す。何以故、我れ此の體を觀るに上無きが故なりと。是れを我勝作意と名づく。偈に曰く、

此の諸の作意を以て、　諸度を修習し、
菩薩は一切時に、　善根圓滿することを得。　(三八)

釋して曰く、此の偈は總じて前の義を結ぶこと應に知るべし。

已に長養善根を求むることを説けり。次に求法の差別を説かん。偈に曰く、

求法は謂く增長と、　上意と及び廣大と、
有障と亦た無障と、　及以び諸神通と、

想作意と名づく。偈に曰く、

衆生の邊に墮することを離ると、　　大義と及び轉施と、

究竟と無間と、　　是の如く復た五種あり。　（二四）

釋して曰く、此の偈に五種の作意あり。一に離邊作意、二に大義作意、三に轉施作意、四に究竟作意、五に無間作意なり。菩薩は次に是の念を作さく、我れ今應に諸波羅蜜を以て一切衆生に於て轉ずべしと。是れを離邊作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今應に諸波羅蜜を以て廣く一切衆生を饒益すべしと。是れを大義作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今所有(あらゆる)諸波羅蜜の功德を願はくは一切衆生に施さんと。是れを轉施作意と名づく。次に是の念を作さく、願はくは一切衆生所有(あらゆる)諸波羅蜜もて三處を究竟せん。謂く菩薩地究竟と、如來地究竟と、利益衆生究竟となりと。是れを究竟作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ應に諸波羅蜜を修習するに、一切時に於て間斷あること無かるべしと。是れを無間作意と名づく。偈に曰く、

方便恒に隨攝し、　　心不顚倒に住し、

退に於ては則ち喜ばず、　　進めば則ち歡喜生ず。　（二五）

釋して曰く、此の偈に三種の作意あり。一に隨攝作意、二に不喜作意、三に歡喜作意なり。菩薩は次に是の念を作さく、我れ今應に不顚倒心に住すべし、佛の所知に於て應に諸波羅蜜を以て恒時に隨攝すべしと。是れを隨攝作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜を退屈する者に於て悅を生ぜざるべしと。是れを不喜作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜を增進する者に於て應に慶悅を生ずべしと。是れを歡喜作意と名づく。偈に曰く、

相似に修するを欲せず、　　眞實に修習せんと欲す。

不隨と及び欲得と、　　欲得に二種あり。　（二六）

喜集と及び見義と、　　　樂求となり。求に四種あり、
平等と無分別と、　　　現持と當緣との故に。　　（三二）

釋して曰く、此の偈に三種の作意あり。一に喜集作意、二に見義作意、三に樂求作意なり。菩薩知り已つて次に是の念を作さく、我れ應に歡喜して福智の二聚を聚集すべしと。是れを喜集作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜の自性を見て、能く無上菩提の利益を得と。是れを見義作意と名づく。次に是の念を作さく、今是の利を見て應に四求を起すべし。一は求平等、止觀雙修の故に。二は求無分別、三輪清淨の故に。三は求現持、持能く諸度の法義を成ずるを求むるが故に。四は求當緣、未來に諸度の緣を成就するを求むるが故に。是れを樂求作意と名づく。偈に曰く、

七[種]の非有取見と　　四種の希有想とあり。
此を翻せば非希有なり、　此の想も亦た四あり。　　（三三）

釋して曰く、此の偈に三種の作意あり。一に見非有取作意、二に希有想作意、三に非希有想作意なり。菩薩樂求し已つて次に是の念を作さく、七種の非有取を我れ今應に見るべし、一は非有爲有非有取、二は過失非失非有取、三は功德非德非有取、四は非常爲常非有取、五は非樂爲樂非有取、六は非我爲我非有取、七は寂滅非滅非有取なり。如來は此の七の非有取を對治せんが爲に次第に空等の三三昧を說き、及び四種の法優陀那を說きたまふと。是れを見非有取作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜に於て應に四種の希有想を起すべし、所謂大想、廣想、不求報恩想、不期果報想なりと。是れを希有想作意と名づく。次に是の念を作さく、此を翻せば希有は諸波羅蜜に於て亦た四種の非希有想あり。所謂諸波羅蜜廣大に由るが故に能く無上菩提を得、能く自他平等に住し、能く一切世間の供養を求めず、能く過りて諸の世間の勝身勝財を求めずと。是れを非希有

近するなり。是れを勇猛作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今應に四無量心を起すべし、諸波羅蜜現前する時、應に慈心を起すべし、慳等現前する時、應に悲心を起すべし、他人の諸波羅蜜現前する時、應に喜心を起すべし、他人の諸波羅蜜を信ずる時、應に無染心を起すべしと。是れを憐愍作意と名づく。偈に曰く、

有羞と亦た有樂と、　及以び無屈心と、
修治と稱說と、　此れ復た五種を爲す。（三〇）

釋して曰く、此の偈に五種の作意あり。一は有羞作意、二は有樂作意、三は無屈作意、四は修治作意、五は稱說作意なり。菩薩は次に是の念を作さく、若し我れ諸波羅蜜に於て懈怠不作及以び邪作ならば、應に深く慚愧等を起すべし、應に擯等を轉ずべしと。不轉なれば是を有羞作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今所緣の諸波羅蜜の境界に於て應に持心を亂さざるべしと。是れを有樂作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜を退する方便に於て怨家の想を作すと、是れを無屈作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜相應の諸論に於て應に善集修治すべしと。是れを修治作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今他をして解を生ぜしめんが爲に應に其の機根に應ずるが如く諸波羅蜜の法義を讃揚すべしと。是れを稱說作意と名づく。偈に曰く、

度に依りて菩提を得、　自在等に隨ふに非ず、
過惡及び功德、　此の二亦た應に知るべし。（三一）

釋して曰く、此の偈に二作意あり。一は依度作意、二は應知作意なり。菩薩は前の如く稱揚し已つて次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜に依止して大菩提を得、自在天等に依るに非ずと。是れを依度作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今應に諸波羅蜜を障ふる過惡と及び諸波羅蜜の功德とを知るべしと。是れを應知作意と名づく。偈に曰く、

淨信と及び領受と、　樂說と被鉀と、
起願と亦た希望と、　方便と復た七種あり。　（二一八）

釋して曰く、此の偈に七種の作意あり。一に淨信作意、二に領受作意、三に樂說作意、四に被鉀作意、五に起願作意、六に希望作意、七に方便作意なり。菩薩次に是の念を作さく、我れ今應に諸波羅蜜の法義に於て深信の力を起し持すべしと。是れを淨信作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜の法義に於て應に一向に起求して誹謗を生ぜざるべしと。是れを領受作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今應に諸波羅蜜の法義を以て他人に開示すべしと。是れを樂說作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今應に諸波羅蜜をして滿足して大勇猛を起さしむべしと。是れを被鉀作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜を滿足せんが爲に滿足して諸緣に値はんことを願ふと。是れを起願作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今正に成就の緣を求むと。是れを希望作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜の業件方便を思惟すと。是れを方便作意と名づく。此の中被鉀作意、起願作意、希望作意は教授中に當に分別すべし。偈に曰く、

勇猛と及び憐愍と、　是の如き二作意は、
應に知るべし二差別に、　一一四種ありと。　（二一九）

釋して曰く、此の偈に二種の作意あり。一は勇猛作意、二は憐愍作意なり。此の二は各四種の差別あり。菩薩方便を思惟し已つて、次に是の念を作さく、我れ今應に四種の勇猛を起すべしと。堅牢の爲の故に、成熟の爲の故に、供養の爲の故に、親近の爲の故なり。堅固の爲とは、六の六波羅蜜の修なり。謂く六施乃至六智なり。六施は謂く施施乃至施智なり。戒等の六種も亦た復た是の如し。成熟の爲とは、諸波羅蜜を以て攝物の方便と爲し、衆生を成熟するなり。供養の爲とは、檀を以て利益供養と爲し、戒等を以て修行供養と爲す。親近の爲とは、不到教授もて諸波羅蜜の人を親

四意次第に隨つて、　諸の善根を修習す。　(二一六)

釋して曰く、此の偈に四種の作意あり。一に知因作意、二に念依作意、三に共果作意、四に信解作意なり。菩薩最初性に住して是の念を作さく、我れ今自ら波羅蜜の性を見て增長す可きを知ると。是れを知因作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今已に大心を發して諸の波羅蜜決定し、當に圓滿を得べし、何以故、此の大心を以て依止と爲すが故にと。是れを念依作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ已に發心して自他を利せんが爲に諸波羅蜜を勤修す、此の果若し共ならば即ち是を願受し、若し不共他ならば願不受ならんと。是れを共果作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今自他の利を勤行する時、應に涅槃眞實方便に通達すべし、所謂不染三輪なり、過去の諸佛曾て解し、未來の諸佛當に解すべく、現在の諸佛今解するが如く我れ皆な正に信ずと。是れを信解作意と名づく。是の如く後後の作意應に知るべし次第亦た爾りと。偈に曰く、

[五〇] 得喜に四種あり、　二惡は退する能はず、
應に知るべし修意に隨ふと。　此に復た四種あり。　(二一七)

釋して曰く、此の偈に三種の作意あり。一に得喜作意、二に不退作意、三に隨修作意なり。菩薩次に是の念を作さく、我れ今諸波羅蜜を信解して四種の喜を得、謂く障斷喜、聚滿喜、自他二利を攝する喜、依報二果を與にする喜なりと。是れを得喜作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今自他の佛法を成就せんが爲に諸波羅蜜を修行する時、惡人違逆惡事逼惱に遇ふと雖も、終に退心無からんと。是れを不退作意と名づく。次に是の念を作さく、我れ今無上菩提を得んが爲に、諸波羅蜜に於て應に四種の隨修を起すべし、所謂應に六波羅蜜の諸障を懺悔すべし、應に六波羅蜜の諸行を隨喜すべし、應に六波羅蜜の法義を勸請すべし、應に六波羅蜜を以て無上菩提に廻向すべしと。是れを隨修作意と名づく。偈に曰く、

【五〇】此の二偈は菩薩の求法の差別を說示す。

所作未だ辨ぜざる人、　生して無佛世に在り。
修禪は化の爲の故に、　漸く大菩提を得。　（二四）

釋して曰く、所作未だ辨ぜざる人とは、謂く諦を見て未だ愛を斷ぜず未だ阿羅漢果を得ざる人なり。此の人生じて無佛世界に在り、生じ已つて自ら能く諸禪を勤修す、變化の爲の故なり。此の人此の化に依止して漸漸に更に無上菩提を得。此の如き三位は佛の勝鬘經に說きたまへるが如し。是の如く聲聞の次に緣覺を得、後に作佛を得。大譬の中に說くが如く、一には先見諦位、二には佛空時生、自ら能く禪を修し、生身を捨し化身を受く。三には當に無上菩提を得べし。

已に一乘を求むることを說けり。次に明處を求むることを說かん。偈に曰く、

[四二]菩薩は五明を習す、　總じては種智を求めんが爲めなり。
解・伏・信・治・攝を　五と爲し五は別求なり。　（二五）

釋して曰く、菩薩は五明を習す總じては種智を求めんが爲めなりとは、明處に五あり。一に[四三]內明、二に[四四]因明、三に[四五]聲明、四に[四六]醫明、五に[四七]巧明なり。菩薩は此の五明を學す。總意は一切種智を求めんが爲なり。若し五明を勤習せざれば一切種智を得ざるが故なり。問ふ、別意云何。答ふ、解・伏・信・治・攝の五と爲す。五の別求は其の次第の如く學す。內明は自解を求めんが爲に學し、因明は外執を伏せんが爲に學し、聲明は他をして信ぜしめんが爲に學し、醫明は所治方の爲に學し、巧明は一切衆生を攝せんが爲なり。

已に明處を求むることを說けり。次に長養善根を求むることを說かん。所謂作意滿足諸波羅蜜なり。此の作意に四十四種あり。初めは謂く知因作意、乃至最後は謂く知我勝作意なり。此等の作意を今當に顯說すべし。[四八]偈に曰く、

[四九]知因と及び念依と、　共果と信解と、

【四二】此の偈は菩薩の總別の五明を說示す。
【四三】內明(Adhyātmavidyā)。
【四四】因明(Hetuvidyā)。
【四五】聲明(Śabdavidyā)。
【四六】醫明(Cikitsāvidyā)。
【四七】功明(Śilpakarmasthānavidyā)。
【四八】以下十一偈は菩薩の四十四種の作意を顯示す。
【四九】知因(Hetūpalabdhitusiti)。念依(Niśrayatadanusrti)。共果(Sādhāraṇaphala)。信解(Bodhādhimuoyanā)。

聲聞に二不定あり、　[三六]見義と[三七]不見義となり。
見義の[三八]不斷愛、　[三九]斷愛倶に[四〇]輭根なり。　(二〇)

釋して曰く、聲聞の不定に復た二種あり。一には見義乘、彼の諦を見て大乘を發すが故なり。二には不見義乘、彼の諦を見て大乘を發さゞるが故なり。見義に復た二種あり。一には斷愛、彼れ已に欲界の欲を離るゝが故なり。二には不斷愛、彼れ未だ欲界の欲を離れざるが故なり。此の中の見義の二人應に知るべし輭品を倶足することを、根鈍なるに由るが故なり。偈に曰く、

二の聖道を得たるの人、　諸有に[四一]迴向す。
迴向は不思議なり　三生相應の故に。　(二一)

釋して曰く、是の如き見義の聖道を得たる二人は能く聖道を以て諸有に迴向す。是の如き迴向を不思議と名づく、聖道を以て生を迴向するに由るが故なり。此の如く二人と二生とは相應するなり。
問ふ、何者か二生なる。偈に曰く、

願力と及び化力と、　欲に隨つて生を受く、
願力は不斷愛にして、　化は阿那含に住す。　(二二)

釋して曰く、二生とは一に願自在生、二に化自在生なり。初は是れ未だ欲を離れざる人、後は是れ阿那含の人なり。
問ふ、是の如き二人は云何が輭品なる。偈に曰く、

二ながら涅槃を樂ふに由り、　數數自ら厭ふが故に。
二は倶に鈍道と說き、　久久にして菩提を得。　(二三)

釋して曰く、此の二人は先に滅を樂ふの心あるに由るが故に、恒に自ら厭ふ心を起すが故に、是の故に彼の道を說いて鈍道と爲す。速に無上菩提を得る能はざるに由るが故なり。偈に曰く、

【三六】見義(Dṛṣṭārtha)。
【三七】不見義(Adṛṣṭārtha)。
【三八】不斷愛(Avitarāga)。
【三九】斷愛(Vitarāga)。
【四〇】輭根(Mṛdu)。
【四一】迴向(Pariṇāma)。已が修する所の功德を迴轉して、期する所に趣向せしむること、(1)已が善根功德を回轉して、他に施與せんと期するは、衆生に回向するのである。(2)已が功德を以て自他共に佛果を成ぜんと期するは佛道に回向するのである。

釋して曰く、此の中の八意に「より」、佛は一乘と說きたまふ。一には法同じきが故に、謂く聲聞等の人別に法界無く、趣く所同じきに由るが故に一乘と說く。二には無我同じきが故に、謂く聲聞等の人同じく無我體にして趣者同じきに由るが故に、故に一乘と說く。三には解脫同じきが故に、謂く聲聞等の人同じく惑障を滅し、出離同じきに由るが故に、故に一乘と說く。四には性別なるが故に、謂く不定の三乘性の人、大乘に引入するが故に、一乘と說く、五には諸佛同じく自意を得るが故に、謂く諸佛は此の如きの意を得、我が所得の如く一切衆生も亦た我が得に同じ、此の意に由るが故に、故に一乘と說く。六には聲聞は作佛意を得るが故に、謂く諸の聲聞は昔大菩提衆を行ずるの時定めて作佛の性ありき、彼の時佛加するが故に、勝攝の故に、自ら作佛意を知ることを得。此の人前後相續すること無別なるに由るが故に一乘と說く。七には變化の故に、謂く佛は聲聞を示現して般涅槃し敎化を爲すが故に。佛の自ら說きたまへるが如し。我れ無量無數聲聞乘を以て涅槃を示現するは、此の方便を離れて更に方便の小根の人を化して大乘に入らしむること無きに由るが故に、理實唯一の故に一乘と說く。八には究竟の故に、謂く佛體に至りて復た去處無きが故に一乘と說く。是の如く處處の經中、此の八意を以て佛一乘を說きたまふ。而も亦た三乘無きにあらず。

問ふ、若し爾らば復た何の義ありて彼彼の意を以て而も一乘を說くや。偈に曰く、

（三五）諸の聲聞を引接し、　諸の菩薩を攝住す。
此の二不定に於て、　諸佛は一乘を說きまたふ。（一九）

釋して曰く、彼彼の意に二義あり。一は諸の聲聞を引接せんが爲の故に、二は諸の菩薩を攝住せんが爲の故なり。若し諸の聲聞自の乘に於て不定ならば、佛は彼の人を引接して大乘に入れしめんが爲の故に一乘を說きたまふ。若し諸の菩薩自の乘に於て性不定ならば、佛は彼の人を攝住して大乘を退かざらしめんが爲の故に一乘を說きたまふ。偈に曰く、

【三五】此の偈は佛陀は何の義を以て一乘と說き給へるかを說明す。

執著す。是の如き異分別の相も亦た復た體無し。是の故に一切諸法は無自體を成す。偈に曰く、

自體無きが故に成ず、　前は後の爲に依止たり。
無生復た無滅、　本靜性涅槃なり。　（一六）

釋して曰く、自體無きが故に成ず前は後の爲めに依止たりとは、前無生なるに由るが故に次第に後の無生等を成立す。問ふ、此れ云何、答ふ、無生復た無滅、本靜性涅槃なり。若し無性ならば則ち無生、若し無生ならば則ち無滅、若し無滅ならば則ち本來寂靜、若し本來寂靜ならば則ち自性涅槃なり。是の如く前前の次第は後後の依止と爲り、此の義成ずるを得。

已に無自性を求むることを說けり。次に[三二]無生忍を求むることを說かん。偈に曰く、

[三三]本來と及び眞實と、　異相と及び自相と、
自然と及び無異と、　染汚と差別との八なり。　（一七）

釋して曰く、八種の無起の法あり、無生法忍と名づく。一には本來無起、生死は本起ある非ざるに由るが故なり。二には眞實無起、法に先後の異無く先起の法無きに由るが故なり。三には異相無起、舊種に非ざる處更に起を得るに由るが故なり。四には自相無起、分別の性は畢竟不起なるに由るが故なり。五には自然無起、依他性は自性不起に由るが故なり。六には無異無起、眞實性は異體ありて起るに非ざるに由るが故なり。七には染汚無起、盡智の時染汚の諸見復た起らざるに由るが故なり。八には差別無起、諸佛の法身は差別ありて起るに非ざるに由るが故なり。此の八無起の法を說いて無生法忍と名づく。

已に無生忍を求むることを說けり。次に一乘を求むることを說かん。偈に曰く、

[三四]法と無我と解脫と、　同じきが故にと性別なるが故にと、
二意と變化とを得ると、　究竟とにより一乘を說く。　（一八）

【三二】無生忍(Anutpattidharmakṣānti)。

【三三】本來(Ādi)。眞實(Tattva)。異相(Anyatva)。自相(Svalakṣaṇa)。自然(Svayamathā)。無異(Anyathābhāva)。染汚(Saṃkleśa)。差別(Viśeṣa)。

【三四】此の偈は佛陀が凡ての法は一乘なりと說き給へる旨を說示す。

釋して曰く、復た別解脱門あり。能持と所持と聚とにはとは、能持は謂く所聞の法、所持は謂く正憶念、聚は謂く福智滿なり。先聚力に由るが故に而も所持あり。觀の故に唯だ名のみありとは、但だ言説ありて義あること無きが故なり。復た次に唯名とは唯識の故なり。復た次に唯名とは非色四陰の故なり。名を觀ずるに名を見ず無名解脱を得とは、復た次に所觀の名を觀ずるに復た名を見ず。義無體に由るが故に、又識を見ざるが故に、又非色四陰を見ざるが故なり。是の如き名は亦た不可得なり。有所得を離るゝが故なり、故に解脱と名づく。偈に曰く、

[二九]我見熏習して心　　諸趣に流轉す。
安心して内に住し、　　流を迴するを解脱と説く。　（一四）

釋して曰く、復た別解脱門あり。我見熏習して心諸趣に流轉すとは、二種の我見に滋灰あるが故に熏習と言ふ。此の熏習を因と爲すに由り、是の故に生死に流轉す。安心して内に住し流を迴するを解脱と説くとは、若し所緣の不可得なることを知り、心を内に置き、攝して散ぜざらしむ、卽ち彼の流を迴するを説いて解脱と名づく。

已に解脱を求むることを説けり。次に[三〇]自體無きことを求めん。偈に曰く、

[三一]自無と及び體無と、　及以び體不住と、
執の如く無體の故に、　法は無自體を成ず。　（一五）

釋して曰く、自無と及び體無と及以び體不住ととは、自無とは諸法の自然無なるを謂ふ、不自起なるに由るが故なり。不自起とは、因緣に屬するが故なり。體無とは謂く諸法已に滅すれば復た起らざるが故なり。及以び體不住とは、現在の諸法は刹那刹那に住せざるが故なり。此の三種は自體無く、一切有爲の相に遍し、是の義應に知るべし。執の如く無體の故に法無自體を成ずとは、執著する所の如き實に自體無し、自體は體無きに由るが故なり。諸の凡夫の如く自體に於て常樂我淨に

【二九】此の偈も復た他の解脱門を説示す。
【三〇】無自體（Niḥsvabhāvatā）。
【三一】此の偈は諸法は因緣生のものにして、自體あるものに非らざることを説示す。

釋して曰く、意と受と分別との轉は、四種の自在を得とは、若しくは意、若しくは受、若しくは分別、此の如きの三光若し轉ずれば卽ち四種の自在を得。問ふ、何をか四と爲す。答ふ、無分別と刹土と智と業に次第するが故に、一に無分別自在を得、二に刹土自在を得、三に智自在を得、四に業自在を得。偈に曰く、

應に知るべし後三地には、　四の自在ありと說く。
不動地に二あり、　餘地は各餘の一なり。（一一）

釋して曰く、應に知るべし後三地には四の自在ありと說くとは、謂く[26]不動地、善慧地、法雲地は彼の四種の自在を成就す。不動地に二あり、餘地は各餘の一なりとは、不動地に第一無分別自在、第二刹土自在あり。無功用無分別に由るが故なり。刹土清淨に由るが故なり。善慧地に第三智自在あり。四辯善巧勝を得るに由るが故なり。法雲地に第四業自在あり。諸通業無障礙に由るが故なり。偈に曰く、[27]

三有と二無我とは、　眞の唯識に了入す。
亦た唯識の光無く、　離を得るを解脫と名づく。（一二）

釋して曰く、復た別解脫門あり。三有と二無我とは眞唯識に了入すとは、二無我を知りて方便を爲すに由るが故なり。菩薩は三有の中に於て人法皆な體あること無きを分別す、是の故に無我なり。是の如く知り已つて亦た一向に都べて體あること無きに非ず、一切諸法眞實唯識を取るが故なり。亦た唯識の光無く離を得るを解脫と名づくとは、菩薩爾の時に唯識に安心して識光亦た無く、卽ち解脫を得。何以故、人法不可得にして有所得を離るゝに由るが故なり。偈に曰く、

[28]能持と所持と聚とには、　觀の故に唯だ名のみあり。
名を觀ずるに名を見ず、　無名解脫を得。（一三）

【二六】不動地(Acalabhūmi)。善慧地(Sādhumatibhūmi)。法雲地(Dharmameghabhūmi)。

【二七】此の偈は別解脫門を說示す。

【二八】此の偈は他の別解脫門を說示す。能持(Ādhāra)。所持(Ādhāna)。聚(Sambhāra)。

故なり。明悟とは出世間の慧なり、彼の有は如實に有と見、非有は如實に非有と見る。有は法無我を謂ひ、非有は能取所取を謂ふ、此に於て明見するが故なり。轉依とは偈に曰く、

[23] 聖性は證平等にして、　解脱の事も亦た一なり。
勝に則ち五義あり、　不滅亦た不增なり。　（八）

釋して曰く、聖性は證平等にして解脱の事も亦た一なりとは、聖性は無漏界を謂ひ、證平等とは諸聖同じく得るが故なり。解脱の事も亦た一なりとは諸佛の聖性と聲聞緣覺と平等にして解脱同じきに由るが故なり。勝に則ち五義あり、不滅亦た不增なりとは、復た聖性は平等なりと雖も然も諸佛は最勝にして自ら五義あり。一には清淨勝、漏習俱に盡くるに由るが故なり。二には普遍勝、刹土通淨に由るが故なり。三には身勝、法身に由るが故なり。四には受用勝、轉法輪受用不斷に由るが故なり。五には業勝、兜率天等に住し、諸の化事を現じ、衆生を利益するに由るが故なり。不滅とは謂はく染分滅する時なり。不增とは謂く淨分增す時なり。此は是れ五種學地の解相なり。彼の解脱の所相法及び三種の能相法を[24]以ての故なり。

已に所相能相を說けり。次に解脱を求むることを說かん。偈に曰く、

是の如く種子轉じ、　句・義・身・光轉ず、
是を無漏界と名づく、　三乘同じく依[止]する所なり。　（九）

釋して曰く、是の如く種子轉ずとは、阿黎耶識の轉ずるが故なり。句・義・身・光轉ずとは、謂はく餘識の轉ずるが故なり。是を無漏界と名づくとは、解脱に由るが故なり。三乘同じく依「止」する所なりとは、聲聞緣覺と佛と同じく依止するが故なり。偈に曰く、

[25] 意と受と分別との轉は　四種の自在を得、
次第は無分別と、　刹土と智と業との故なり。　（一〇）

【二三】此の偈は能相の五種の學境の中、第五の轉依を說示す。

【二四】大正藏經には似とあるも、以の誤寫なること明かなり。

【二五】意（Manas）。受（Udgraha）分別（Vikalpa）。

不眞分別の故に、　　是れを依他の相と說く。

釋して曰く、此の偈は依他の相を顯示す。此の相の中自ら所取の相と及び能取の相とあり。所取の相に三光あり、謂く[一三]句光、義光、身光なり。能取の相に三光あり、謂く[一四]意光、受光、分別光なり。意は謂く一切時の染汚識、受は謂く五識身、分別は謂く意識なり。彼の所取相の三光と及び能取相の三光とは、此の如きの諸光は皆な是れ不眞分別の故に、是れ依他相なり。偈に曰く、

[一五]無體の體は無二なり、　非寂靜は寂靜なり、
無分別を以ての故に、　是れを眞實の相と說く。　(六)

釋して曰く、此の偈は眞實の相を顯示す。眞實は謂く[一六]如なり。此の相に三種あり、一は自相、二は染淨相、三は無分別相なり。無體の體は無二とは、是れ眞實の自相なり、無體とは一切諸法は但だ分別の故なり。體とは無體を以て體と爲すが故なり。無二とは體と無體と別無きが故なり。非寂靜は寂靜なりとは、是れ眞實染淨の相なり。非寂靜とは客塵煩惱に由るが故なり。寂靜とは自性淸淨に由るが故なり。無分別を以ての故にとは、是れ眞實無分別の相なり。分別して境界を行ぜず戲論無きに由るが故なり。

已に三種の能相を說けり。復た次に偈に曰く、

[一七]應に知るべし五の學境[ありと]、　[一八]正法と及び[一九]正憶と、
[二〇]心界と[二一]有非有となり、　第五を[二二]轉依と說く。　(七)

釋して曰く、彼の能相に復た五種の學境あり。一は能持、二は所持、三は鏡像、四は明悟、五は轉依なり。能持とは謂く佛の說きたまふ所の正法なり、此の法に由り彼の能緣を持するが故なり。所持とは卽ち正憶念なり、正法を所持するに由るが故に。鏡像とは謂はく心界なり、得定に由るが故なり。安心法界は、先に說く所の如く、皆な是の名を見る、定心を鏡と爲し、法界を像と爲すが

【一三】句光(Padābhāsaṁ)。義光(Arthābhāsaṁ)。身光(Dehābhāsaṁ)。
【一四】覓光(Manobhāsaṁ)。受光(Udgrahābhāsaṁ)分別光(Vikalpābhāsaṁ)。
【一五】此の偈は能相の三種の中、第三の眞實相(Parinispannalakṣaṇa)を說示す。
【一六】如の原語は Tathatā にて、物の眞實の狀態、又は眞の性質といふ意味である。
【一七】此の偈は能相に復た五種の學境あることを說示す。
【一八】正法(Niṣpandadharma)。
【一九】正憶(Ālambya Yoniśa)。
【二〇】心界(Cittasya dhātu)。
【二一】有非有(Sadasat)。
【二二】轉依(Āśrayaparāvṛtti)。

釋するなり。偈に曰く、

[九]共と及び心と及び見と、　及び位と及び不轉と、
略して說かば所相五[なり]　廣く說かば則ち無量なり。　(四)

釋して曰く、共及び心及び見及び位及び不轉とは、所相に五あり、一には色相、二には心法、三には心數法、四には不相應法、五には無爲法なり。彼の共とは謂く色法なり。心とは謂く識法なり。見とは謂く心數法なり。位とは謂く不相應法なり。不轉とは謂く虛空等の無爲法なり。略して說かば所相五[なり]廣く說かば則ち無量なりとは、彼の識は常に是の如きの五相を起す。此の五の所相、是れを世尊は略して說きたまへり。若し廣く說かば則ち無量の差別あり。

已に所相の諸相を說けり。次に能相の諸相を說かん。偈に曰く、[一〇]

意言と習光と、　名義互に光起る、
非眞分別の故に、　是を分別の相と名づく。　(五)

釋して曰く、能相は略して說くに三種あり、謂く、分別相、依他相、眞實相なり。此の偈は分別相を顯示す。此の相に復た三種あり。一は有覺分別相、二は無覺分別相、三は相因分別相なり。意言とは謂く義想なり。義は卽ち想境なり、想は卽ち心數なり。此の相に由り義に於いて能く是の如く是の如く意言の觧を起す、此は是れ有覺分別の相なり。習光とは、習は謂く意言の種子、光は謂く彼の種子より直に起る義光なり。未だ能く是の如く是の如く意言の觧を起さざる、此は是れ無覺分別相なり。名義互に光起るとは、名に依りて義起り、光は義に依りて起るを謂ふ。名光の境界、非眞は唯だ是れ分別世間なり。所謂若しくは名若しくは義、此は是れ相因分別相なり。是の如き三種の相は悉く是れ非眞分別なり。是を分別の相と名づく。偈に曰く、

[一一]所取と及び[一二]能取と、　二相に各三光あり、

【九】此の偈は二相の中の所相を細釋して、所相に五種あることを顯示す。

【一〇】此の偈は二相の中の能相を細釋して、能相に三種ある中、第一の分別の相(Parikalpitalakṣaṇa)を說示す。

【一一】此の偈は能相の三種の中、第二の依他の相(Paratantralakṣaṇa)を說示す。

【一二】能取(Grāhaka)。所取(Grāhya)。

卷の第五

述求品第十二の二

釋して曰く、已に染淨を求むることを說けり。次に[一]唯識を求むることを說かん。偈に曰く、

[二]能取と及び所取と、　此の二は　[三]唯心の光なり。
貪光と及び信光と、　二光は二法無し。　（一）

釋して曰く、能取と及び所取と、此の二は唯心の光なりとは、唯識を求むる人は應に知るべし、能取と及び所取と、此の二種は唯だ是れ心光なることを。貪光と及び信光と、二光は二法無しとは、是の如き貪等の煩惱光及び信等の善法光、是の如き二光は亦た染淨の二法無し。何以故、心光を離れて、別に貪等信等の染淨の法あらざるが故なり。是の故に二光も亦た二相無し。偈に曰く、

[四]種種の心光起るも、　是の如き種種の相の、
光體は體に非らざるが故に　彼の法の實を得ず。　（二）

釋して曰く、種種の心光起るも、是の如き種種の相とは、種種の心光は卽ち是れ種種の事相なり。或は異時に起り、或は同時に起る。異時に起るは謂く[五]貪光瞋光等なり。同時に起るは謂く信光進光等なり。光體は體に非らざるが故に彼の法の實を得ずとは、是の如きの染位の心數と淨位の心數は唯だ光相のみありて而も光體無し。是の故に世尊は彼を眞實の法と爲すと說きたまはず。

已に唯識を求むるを說けり。次に諸相を求むるを說かん。偈に曰く、

[六]所相と及び　[七]能相と、　是の如き相の差別は、
衆生を　[八]攝利せんが爲めに、　諸佛は開示現したまふ。　（三）

釋して曰く、相に二相あり、一には所相、二には能相なり。此の偈は總じて擧げ、餘の偈は別に

【一】 唯識(Vijñapti-mātratā)。唯とは簡別の義、識外に法なきを簡別して唯といひ、識とは了別の義、了別の心は略して三種、廣くしては八種あるを云ふ。

【二】 此の偈は唯心の意義を明かにす。

【三】 唯心(Bitta-mātra)。一切諸法は唯だ内心のみあり、心外に法なきを唯心といふ。

【四】 此の偈は染淨の二光ともに實體あるに非らざることを說示す。

【五】 貪光(Rāgābhāsaṁ)。瞋光(Dveṣābhāsaṁ)。

【六】 此の偈は總じて二種の相を顯示す。

【七】 所相(Lakṣyaṁ)。能相(Lakṣaṇaṁ)。

【八】 攝利の原語は(Anugrahārthaṁ)にて、愛護し利益するの義である。

分別智なり、即ち出世の後に世智を得るが故に。是の如きの四種の智は能く一切の境を知るとは、此の四智具足に由り一切の境界を知るなり。

已に求智を說けり。次に求染汚及び清淨を說かん。偈に曰く、

二九　自界及び二光、　　癡は諸惑と共に起る。
　是の如き諸分別の、　　二實は應に遠離すべし。　（三〇）

釋して曰く、自界及び二光、癡は諸惑と共に起るとは、自界は謂く自の阿梨耶識の種子、二光は謂く能取光所取光なり。此等の分別は無明及び諸餘(そのよ)の惑を共にするに由るが故に生起を得。是の如きの諸分別の二實は應に遠離すべしとは、二實は謂く所取實及び能取實なり。是の如き二實の染汚は應に遠離を求むべきなり。偈に曰く、

三〇　彼の三緣を得已りて、　　自界處應に學すべし、
　是の如きの二光の滅するは、　　譬へば箭皮を調へるが如し。　（三一）

釋して曰く、彼の三緣を得已りて自界處應に學すべしとは、三緣は謂く內外倶なること前に說けるが如し。自界は謂く諸分別なり、應に是の如く解すべし。處は謂く名處なり、此の名處は應に安心すべし。應學は謂く止觀の二道を修するなり。是の如きの二光の滅すること譬へば箭皮を調ふるが如しとは、謂く分別二種の光の息むこと、譬へば柔皮熟鞹を輭せしむるが如く、亦た箭を調じて端の曲を直ならしむるが如く、轉依も亦た爾なり。若しは止、若しは觀一一須らく修すべく、心慧の二脫を得ば則ち二光起らず、是の如きの清淨は應に至得を求むべし。

【二九】此の偈は染汚及び清淨の何たるかを顯示す。

【三〇】此の偈は分別依他の二種の染汚の遠離すべきを顯示す。

問ふ、世尊は處處に說きたまへり。幻の如く、夢の如く、焰の如く、像の如く、影の如く、響の如く、水月の如く、化の如しと。此の如き八譬は各何の所顯ぞ。偈に曰く、

幻の如く[より]化の如しに至るは、　次第に諸行に譬ふ、
二つの六と二と二の六と　一一に三有り。（一八）

釋して曰く、幻の如く[より]化の如しに至るは次第に諸行に譬ふとは、幻は內の六入に譬ふ、我等の體あること無く、但だ光の顯現するが故なり。夢は外の六入に譬ふ、所受用の塵體あること無きが故なり。焰は心及び心數の二法に譬ふ、迷を起すに由るが故なり。像は復た內の六入に譬ふ、是の宿業の像に由るが故なり。影は復た外の六入に譬ふ、是の內入影は內入の增上を起すに由るが故なり。響は所說の法に譬ふ、法は響の如くなるが故なり。水月は依定の法に譬ふ、定は則ち水の如く、法は則ち月の如く、彼の澄靜に由り法顯現するが故なり。化は故意に菩薩の受生するに譬ふ、一切の所作事に染せざるが故なり。二の六と二の六と、一一有三とは、初めの二六は謂く內の六入と外の六入となり、彼の幻夢の二譬の顯はす所なり。二は心及び心數を謂ひ、彼の焰譬の顯はす所なり。復た二六は內の六入、外の六入を謂ひ、彼の像影の二譬の顯はす所なり。一一は說法三昧受生を謂ひ、彼の響月化の三譬の顯はす所なり。

已に眞實の義を說けり。次に能知智を求めん。偈に曰く、

[二八]不眞と及び似眞と、　眞と及び似不眞と、
是の如きの四種の智は、　能く一切の境を知る。（一九）

釋して曰く、不眞と及び似眞と、眞と及び似不眞とは、不眞は謂く不眞分別智なり。出世智の分別に隨順せざるに由るが故に。似眞は謂く非眞非不眞分別智なり、初極通達分より出世智に隨順するに由るが故なり。眞は謂く出世無分別智なり、眞如を證するが故に。似不眞は謂く非分別非不

【二八】此の偈は能知智の何たるかを說示す。

有非有幻の如しとは、是の如く體は有なりと說くは虛妄分別に由るが故なり。非有なりと說くは能取所取の二體は非體と無別なるに由るが故なり。是の如く有も亦た幻の如く、無も亦た幻の如く、此の相は幻の如しと說く。偈に曰く、

二六 應に知るべし能治の體は、　念處等の諸法なりと、
是の如きの體は無相にして、　幻の如く亦た是の如し。　(二六)

釋して曰く、應に知るべし、能治の體は卽ち是れ念處等の諸法なりとは、此の中應に知るべし、能治の體は是れ諸法なりと。諸法とは、謂はく佛の說きたまふ所の念處等の法なり、是の如く是の如き體なるが故に。是の如きの體は無相にして幻の如く亦た是の如しとは、彼の體亦た幻の如し、何以故、諸の凡夫の所取の如く、是の如く是の如き有體なるが故に、諸佛の說きたまふ所の如く、是の如く是の如く無體なるが故なり。是の如きの體は無相にして佛世尊は入胎出生踰城出家成正覺を示現したまへり。是の如く無相にして光顯現す、是の故に幻の如し。

問ふ、若し諸法同じく幻の如くんば何の義を以ての故に、一は能治と爲り、一は所治と爲るや。偈に曰く、

二七 譬へば强き幻王の、　餘の幻王を退かしむるが如く、
是の如く淸淨の法は、　能く染法をして盡くさしむ。　(二七)

釋して曰く、譬へば强き幻王の餘の幻王をして退かしむるが如しとは、彼の能治の淨法も亦た幻王の如く、能く染法を對治し增上を得るに由るが故に。彼の所治の染法も亦た幻王の如く、境界に於て增上を得るに由るが故なり。是の如く淸淨の法は能く染法をして盡くさしむとは、彼の强力の幻王の能く餘の幻王をして退かしむるが如く菩薩も亦た爾なり。法の幻の如くなるを知りて能く淨法を以て染法を對治す、是の故に無慢なり。

【二六】此の偈は能治の體の何たるかを說示す。

【二七】此の偈は如幻の諸法が、一は能治となり、他は所治となる理由を說示す。

色識の因無きが故に、　識識の體も、亦た無し。　(一一二)

釋して曰く、色識は迷の因たり、識識は迷の體たりとは、彼の所迷の境を色識と名づけ、彼の能迷の體を非色識と名づく。色識は無體なるが故に識識の體も亦た無しとは、色識無きが故に非色識も亦た無し。何以故、因無きに由るが故に彼の果も亦た無し。偈に曰く、

[二三]幻像と及び取幻と、　迷ふが故に二ありと說く、
是の如く彼の二無し、　而も二は可得なり。　(一一三)

釋して曰く、幻像と及び取幻と迷ふが故に二ありと說くとは、迷ふ人は幻像及び取幻に於て、迷に由るが故に、能取所取の二事ありと說く。是の如く彼の二無く而も二は可得なりとは、彼の二無しと雖も而も二は可得なり。迷に由りて顯現するが故なり。

問ふ、此の譬は何の所顯をか欲する。偈に曰く、

[二四]骨像と及び取骨と、　觀ずるが故に亦た二と說く、
無二にして而も二なりと說く、　可得も亦た是の如し。　(一一四)

釋して曰く、骨像と及び取骨と觀ずるが故に亦た二なりと說くとは、觀行の人骨像と及び取骨とに於て、觀に由るが故に能觀取觀の二事ありと說く。無二にして而も二なりと說く。可得も亦た是の如しとは、彼の二無なりと雖も而も二亦た可得なり、觀に由りて顯現するが故なり。

問ふ、是の如く觀じ已つて何の法をか所治と爲し、何の法をか能治と爲すや。偈に曰く、

[二五]應に知るべし所治の體は、　彼の法の迷相を謂ふと。
是の如く體と無體と、　有と非有と幻の如し。　(一一五)

釋して曰く、應に知るべし所治の體は彼の法の迷相を謂ふとは、此の中應に知るべし所治の體は即ち是れ法の迷相なりと。迷相とは、謂く是の如く是の如きの體なるが故なり。是の如く體無體、

【二三】此の偈は能迷所迷俱に虛妄分別なる旨を說示す。

【二四】此の偈は觀行の人の能觀と取觀俱に假相なる旨を說く。

【二五】此の偈は所治の體の何たるかを說示す。

ることを顯はす。何以故、有とは彼の二光顯現するが故なり。非有とは彼の實體不可得なるが故なり。是の故に色等は有體卽ち無體なりと說くとは、此の義に由るが故なり。故に色等は有體卽ち是れ無體なりと說く。偈に曰く、

一〇

無體無體に非ず、　非無の體卽ち體なり、
是の故に色等は、　無體と體と無二なりと說く。　（一〇）

釋して曰く、無體無體に非ず、非無の體卽ち體なりとは、此れ虛妄分別の非有にして而も有なることを顯はす。何以故、非有とは、彼の二光の無體は實體無きに由るが故なり。而も有とは、彼の二光の非無體は光の顯現するに由るが故なり。是の故に色等は無體と體と無二なりと說くとは、此の義に由るが故なり。故に色等は無體と體と而も二あること無しと說く。

問ふ、體と無體と何ぞ一向定說せずして而も彼の二をして無差別ならしむるや。偈に曰く、

一一

有邊を遮せんが爲めに立し、　無邊を遮せんが爲めに謗す、
大を退けて小滅に趣く、　彼を遮するも亦た是の如し。　（一一）

釋して曰く、其の次第の如く、一には有邊を遮せんが爲め、二には無邊を遮せんが爲め、三には小乘の寂滅に趣くを遮せんが爲めにす。是の故に一向に定說することを得ず。問ふ、云何が有邊を遮するや。答ふ、有邊は遮せんが爲めに立す。此れ無體に於て無體を知るに由るが故に應に有を安立すべからざることを明す。問ふ、云何が無邊を遮するや。答ふ、無邊は遮せんが爲めに謗す。此れ有體に於て世諦を知るに由るが故に應に無を非謗すべからざることを明す。問ふ、云何が小乘の寂滅に趣くことを遮するや。答ふ、大を退き小滅に趣くことを遮す。彼も亦た是の如し。此は彼の二は無別なるに由るが故に、應に體を厭ひ小涅槃に入るべからざることを明す。偈に曰く、

一二

色識は迷の因たり、　識識は迷の體たり。

【一〇】此の偈は虛妄分別の非有にして而も有する旨を說示す。

【一一】此の偈は有無の二邊と小乘の寂滅主義とを斥破す。

【一二】此の偈は迷の因と迷の體とをあげて、迷の因果の虛妄なる旨を說示す。

倒の因は體無きが故に、　倒無く自在に行ず。　（一六）

釋して曰く、迷の因は體無きが故に迷無く自在に行ずとは、世間の木石等復た體無しと雖も而も迷の因と爲る。若し無迷の行を得ば則ち自在にして他に依らざるなり。倒の因は體無きが故に倒無く自在に轉ずとは、是の如きの依未だ轉ぜざる時、復た體無しと雖も而も倒の因と爲る。若し轉を得る時は無倒なるに由るが故に、聖人も亦た自在を得、自在に依つて行ず。偈に曰く、

一七 是の事彼處にあり、　彼れ體あり亦た無し、
有體無有の故に、　是の故に是れ幻なりと説く。　（一七）

釋して曰く、是の事彼處にあり彼れ體あり亦た無しとは、此れ幻事の有にして而も非有なることを顯はす、何以故、有とは是れ幻像の事の彼處に顯現するが故なり。非有とは彼の實體の得可からざるが故なり。有體無有の故に是の故に是れ幻なりと説くとは、是の如く有體と無體とは無二なり、此の義に由るが故に彼は是れ幻なりと説く。偈に曰く、

一八 無體は無體に非ず、　非無の體即ち體なり。
無體と體と無二なり、　是の故に是れ幻なりと説く。　（一八）

釋して曰く、無體は無體に非ず、非無の體即ち體なりとは、此れ幻事の非有にして而も有なることを顯はす。何以故、非有とは彼の幻事の體無く實體無きに由るが故なり。而も有とは彼の幻事の體無きに非ず、像の顯現するに由るが故なり。無體と體と無二なり、是の故に是れ幻なりと説くとは、是の如く無體と體とは無二なり。此の義に由るが故に彼は是れ幻なりと説く。偈に曰く、

一九 二種の光あり、　而も二の光は體無しと説く。
是の故に色等は、　有體即ち無體なりと説く。　（一九）

釋して曰く、二種の光あり而も二の光は體無しと説くとは、此れ虛妄分別の有にして而も非有な

【一七】此の偈は幻事の有にして而も非有なる旨を説示す。

【一八】此の偈は幻事の非有にして而も有する旨を説示す。

【一九】此の偈は虛妄分別の有にして而も非有なる旨を説示す。

已に眞實を求むることを說けり。次に眞實を求むることの譬喩を說かん。偈に曰く、

[一四] 彼の起幻師の如きは、　譬へて虛分別を說き、
彼の諸幻事の如きは、　譬へて二種の迷を說く。　（一三）

釋して曰く、彼の起幻師の如く、譬へば虛分別を說くとは、譬へば幻師の呪術力に依りて木石等を變じ、以て迷因を爲すが如く、是の如く虛分別す。依他性も亦た爾なり。種種の分別を起して顚倒の因を爲す。彼の諸幻事の如く、譬へば二種の迷を說くとは、譬へば幻像の金等の種種の相貌顯現するが如く、是の如く所起の分別性も亦た爾なり、能取所取の二迷恒時に顯現す。偈に曰く、

[一五] 彼が如く無體なるが故に、　第一義に入ることを得。
彼が如く可得なるが故に、　世諦の實に通達す。　（一四）

釋して曰く、彼が如く無體なるが故に第一義に入ることを得とは、彼の幻者の幻事の實體あること無しと謂ふが如く、此の譬の依他分別の二相も亦た實體なし。此の道理に由れば即ち第一義諦に通達することを得。彼が如く可得なるが故に世諦の實に通達すとは、可得とは幻者の幻事の體も亦た可得なるを謂ふ。此の譬の虛妄分別も亦た爾なり、此の道理に由れば即ち世諦の實に通達することを得。偈に曰く、

[一六] 彼の事無體なるが故に、　即ち眞實の境を得、
是の如く轉依するが故に、　即ち眞實の義を得。　（一五）

釋して曰く、彼の事無體なるが故に即ち眞實の境を得とは、若し人彼の幻事の體無きことを了ぜば即ち木等の實境を得。是の如く轉依するが故に即ち眞實の義を得とは、若し諸の菩薩、彼の二迷の體無きことを了して、轉依を得る時、即ち眞實性の義を得。偈に曰く、

迷の因は體無きが故に、　迷無く自在に行ず。

【一四】此の偈は譬喩をあげて、分別性及び依他性の眞實の義を說示す。

【一五】此の偈は分別依他の二相の無體なることを知り了つて、第一義諦に通達することを說示す。

【一六】此の偈は二迷の轉依によりて、眞實の義を得ることを說示す。

達す。自在作意とは、自在に三種あり。一に惑障極清淨、二に惑智二障極清淨、三に功徳極清淨なり。小作意とは、謂く初めの清淨なり。大作意とは、謂はく後の二清淨なり。

已に作意を求むることを說けり。次に眞實の義を求むることを說かん。偈に曰く、

【二】離二と及び迷依と、　無說無戲論、
三應と及び二淨と、　二淨は三譬によりて顯はる。　（一一）

釋して曰く、離二と及び迷依と無說無戲論とは、此の中應に知るべし三性俱に是れ眞實なりと。離二とは、謂く分別性眞實なり、能取所取畢竟無なるに由るが故に。迷依とは、謂はく依他性眞實なり、此に由りて諸の分別を起すが故に。無說無戲論とは、眞實性眞實なり、自性は無戲論不可說なるに由るが故に。三應と及び二淨と、二淨三譬顯はるとは、三應は謂はく初めの眞實なり。應に知るべし第二の眞實は應に斷ずべく、第三の眞實は應に淨なるべきことを。二淨は謂く一には自性清淨、本來清淨なるに依るが故なり。二には無垢清淨、客塵を離るゝに依るが故なり。此の二淨は三種の譬喩に由つて顯現することを得可し。謂はく空と金と水となり。此の如きの三譬は一は則ち俱に自性清淨に譬ふ、空等は自性清淨ならざるに非ざるに由るが故なり。二は則ち俱に無垢清淨に譬ふ、空等の客塵を離れ清淨ならざるに非ざるに由るが故なり。偈に曰く、

【三】法界と世間と、　未だ曾つて少異あらず、
衆生は癡盛なるが故に、　無に著して有を棄つ。　（一二）

釋して曰く、法界と世間と未だ曾つて少異あらずとは、法界と世間とは少異あるに非ず、何以故、法性と諸法と差別無きが故なり。衆生は癡盛なるが故に無に著して有を棄つとは、衆生は愚癡熾盛なるに由り、世間の無法に於て、著すべからざるに而も著を起し、如如の有法に於て捨つべからさるに而も棄捨す。

【二】此の偈は三性眞實の義を說示す。

【三】此の偈は現象と本體との二にして不二なる所以を說示す。

脫を知るなり。四に覺に通達す。謂はく解脫智を知るなり。修種作意とは、此に四種の修及び三十七種あり。四種の修を修すとは、謂く人無我種修、法無我種修、見種修、智種修なり。三十七種の修とは、謂く不淨苦無常無我の四種の修、是を四念處種の修と名づく。復た次に習斷對治の四種の修を得、是を四正勤種の修と名づく。復た次に知足・亂疑・掉動・沈沒の四障を對治せんが爲めの故に欲進念慧の四種の修あり、是を四神足種の修と名づく。復た次に住心とは、出世間を成就せんが爲めの故に起信勤不忘心住簡擇の五種の修あり、是を五根種の修と名づく。復た次に是の如きの五修の能く五障を治するを卽ち名づけて力と爲す、是を五力種の修と名づく。復た次に菩提に於て正憶・簡擇・勇猛・慶悅・調柔・心住・平等の七種の修あり、是を七覺分種の修と名づく。復た次に決定を得るが故に淨持地業を成ず、思惟分別の故に、聖く受くる所の三戒を能く持するが故に、先に得る所の道を勤習するが故に、法住の相を忘れざるが故に、無想心住轉依の故に。是の如き八種の修あり、是を八道分種の修と名づく。自性作意とは、此に二種あり、一には奢摩他、二には毘鉢舍那なり。此の二は是れ道の自性の故なり。功力作意とは、力に二種あり、一には熏習を拔除し、二には相見を拔除す。領受作意とは、諸佛菩薩の教授する所有法流は悉く受持するが故なり。方便作意とは、定所行の處に於て方便に五あり、一には解數方便、名句字數に於て悉く通達するが故なり。二には解具方便、具に二種あり。一には分量具、所謂諸字なり、二に非分量具、所謂名句等なり。三には解分別方便、分別に二種あり、一は名に依りて義を分別し、二は義に依りて名を分別す。非分別とは字なり。四には解次第方便、謂く先に名を取り、後に轉じて義を取る。五には解通達方便、通達に十一種あり。一には客塵に通達し、二には境光に通達し、三には義不可得に通達し、四には不可得不可得に通達し、五には法界に通達し、六には人無我に通達し、七には法無我に通達し、八には下劣心に通達し、九には高大心に通達し、十には得る所の法に通達し、十一には立つる所の法に通

に知るべし、彼の三緣は是れ聞思修の三慧の依止なりと。

已に求緣を說けり。次に求作意を說かん。偈に曰く、

[一]最初に謂ゆる種性と、　所作と及び依止と、
信安と及び欲生と、　依止と亦た依智と、
別緣と種種緣、　通達と及び修種と、
自性と功力と、　領受と及び方便と、
自在と小と大等と、　是の如く十八あり、
盡く諸の作意を攝す、　行者應に勤修すべし。　（八・九・一〇）

釋して曰く、十八種の作意とは、一には種性作意、二には所作作意、三には依止作意、四には信安作意、五には欲生作意、六には依定作意、七には依智作意、八には別緣作意、九には種種緣作意、十には通達作意、十一には修種作意、十二には身性作意、十三には功力作意、十四には領受作意、十五には方便作意、十六には自在作意、十七には小作意、十八には大作意なり。種性作意とは、聲聞等の三乘の性定まるに由るが故なり。所作作意とは、福智の二聚圓滿せるに由るが故なり。依止作意とは、在家出家の迫作不迫作の差別に由るが故なり。信安作意とは、念佛相應の故なり。欲生作意とは、佛時に隨念し信心相應の故なり。依定作意とは、有學有觀等の三三昧相應の故なり。依智作意とは、聞思修の方便に從つて次第に生ずるが故なり。別緣作意とは、此に五種あり。修多羅、憂陀那、伽陀、阿波陀那に於て一に受け、二に持ち、三に讀み、四に思ひ、五に說くが故なり。種種緣作意とは、此に七種あり。名緣、句緣、字緣、人無我緣、法無我緣、色緣、無色緣なり。色緣は身緣を謂ひ、無色緣は受心法緣を謂ふ。通達作意とは、此に四種あり。一に物に通達す。謂く苦の體を知るなり。二に義に通達す。謂はく苦無常空無我の義を知るなり。三に果に通達す。謂く解

【一】此の三偈は十八種の作意を說示す。

し。

已に求法を解けり。次に求緣を說かん。偈に曰く、

[九]佛所緣の法を說きたまふに、　應に知るべし內と外と俱と〔あり〕、
二の無二の義を得、　二も亦た不可得なり。　（六）

釋して曰く、佛所緣の法を說きたまふに應に知るべし內と外と俱と〔あり〕とは、佛一切所緣の法を說きたまふに三種あり。一には內、二には外、三には俱なり。彼の能取の自性は身等を內と爲し、所取の自性は身等を外と爲し、二の自性を合して俱と爲す。二の無二の義を得、二も亦た不可得なりとは、此の內外の二緣に於て、其の次第の如く無二の義を得。問ふ、云何が得る。答ふ、若しは所取の義と能取の義と別觀無く、若しは能取の義と所取の義と別觀無し。復た次に二を合して一と爲すは、內外の二緣に於て、如如を得るに由るが故なり。是の如く彼の二は二義あること無ければ、則ち此の二緣も亦た不可得なり。

問ふ、已に得緣を說けり。云何が智を得る。偈に曰く、

[一〇]三緣によりて三智を得、　淨く意言の境を持し、
義光を了別し已り、　安心唯だ名のみあり。　（七）

釋して曰く、三緣は謂く前說の如く內外俱の三境なり。三智は謂く聞思修の三慧なり。三緣に依由して能く三慧を得。問ふ、云何が得る。答ふ、若し三緣に於て淨く意言の境を持せば卽ち聞慧を得、意言とは分別なり。淨とは決定を信ずるなり。持とは彼の種を撰ぶなり。此に由りて聞慧を得。若し三緣に於て、義光を了別し已れば、卽ち思慧を得。謂く義及び光は意言に異らざるを知り、此に由りて思慧を得。若し三緣に於て安心し、唯だ名のみあらば、卽ち修慧を得、謂く義及び光は但唯是れ名のみなるを知る。此に由りて修慧を得。先は說く所の如く二緣は不可得なり、是の故に應

【九】此の偈は求緣の義を說示す。

【一〇】此の偈は內外俱の三緣によりて、聞思修の三慧を得ることを說示す。

法とは謂く陰界入緣生諦食等の法なり。義とは謂く所以を釋するなり。偈に曰く、

[七] 對の故に及び數の故に、　伏の故に及び解の故に、
是の如きの四種の義は、　是れ毘曇の義を說く。　（四）

釋して曰く、阿毘曇に此の四義あり。一には對、二には數、三には伏、四には解なり。對とは是れ涅槃に向ふの法なり。諦菩提分解脫門等と說くが故に。數とは是れ相續法なり、一一の法に於て色非色、可見不可見等の差別無量と說くが故に。伏とは是れ勝上法なり、諍論の衆中に於て法義を決判し、彼の說を退くるが故に。解とは是れ釋義の法なり、阿毘曇に由りて修多羅の義は易く解す可きが故に。偈に曰く、

[八] 罪と起と淨と出との故に、　人と制と解と判との故に、
四義復た四義、　是れ毘尼の義を說く。　（五）

釋して曰く、毘尼に二種の四義あり。初めの四義とは、一に罪、二に起、三に淨、四に出なり。罪とは罪の自性、謂く五種罪なり。起とは罪の緣起なり、此に四種あり、一には無知、二には放逸、三には煩惱疾利、四には無恭敬心なり。淨とは罪を淨に還すなり。善心に由り、治罰に由るにあらず。出とは罪の出離なり、此に七種あり。一には悔過、謂く永く相續を遮す。二には順教、謂く與學羯磨治罰。三には開許、謂く先時に已に制し後時に更に開く。四には更捨、謂く僧の和合は學者の捨を與ふ。是の時先の犯は還て淸淨を得。五には轉依、謂く比丘比丘尼男女轉根出不共罪なり。六には實觀、謂く法憂陀那は勝觀察に由る。七には性得、謂く見諦するの時細罪無體なり。法空法爾所得を證するに由る、復たの四義とは、一に人、二に制、三に解、四に判なり。人とは謂く犯罪人なり。制とは謂く彼の犯人に依り、大師衆を集め彼の過失を說き學足を制立す。解とは謂く所制の如く更に廣く分別す。判とは謂く云何(いかん)が罪を得、云何が罪を得ずと、是の如く應に持すべ

【七】此の偈は論の四義を說示す。四種の義とは、對(Abhimukha)と數(Abhikṣṇa)と伏(Abhibhava)と解(Gatita)とである。

【八】此の偈は律に二種の四義あることを說示す。第一種の四義は罪(Āpatti)と起(Utthāna)と淨(Niḥsṛti)と出(Vinaya)とであり、第二種の四義は人(Pudgala)と制(Prajñapti)と解(Pravibhāga)と判(Viniścaya)とである。

邊を對治せんが爲めなり。樂行の邊を離れんが爲めに有過受用を遮し、苦行の邊を離れんが爲めに無過受用を聽くなり。阿毘曇を立つるは、自心見取を對治せんが爲めに、不倒法の相此れ能く示すが故なり。復た次に修多羅を立つるは、三學を說かんが爲めなり。毘尼を立つるは戒學を成ぜんが爲めなり。心學は持戒に由るが故に不悔なり、不悔に由るが故に隨次に定を得。阿毘曇を立つるは慧學を成ぜんが爲めなり。復た次に修多羅を立つるは法及び義を正說せんが爲めなり。毘尼を立つるは謂ゆる法及び義を成就し、勤方便して煩惱を滅するに由るが故なり。阿毘曇を立つるは法及び義に通達せんが爲めなり、種種の簡擇此れ方便を爲すに由るが故なり。此の九因に由るが故に三藏を立つ。問ふ、別用は此の如し、通用は云何。答ふ、[四]熏と覺と寂と通との故に、生死の事を解脫す。此れ生死を解脫する是れ其の通用なることを明す。聞に由るが故に熏じ、思に由るが故に覺し、止に由るが故に寂し、觀に由るが故に通ず。此の四義に由り、生死の諸事永く解脫を得。偈に曰く、

[五]經と律と阿毘曇と、　是れに各四義あり。
具に解して種智を成し、　一偈は漏盡を得。　（二）

釋して曰く、若し略して三藏を說かば一一に各四義あり。若し菩薩は能く此の義を了ずれば、則ち一切種智を成就す。若し聲聞は能く一偈を了ずれば、則ち諸漏永く盡くることを得。

問ふ、云何が一一の四種の義なる。偈に曰く、

[六]依の故に及び相の故に、　法の故に及び義の故に、
是の如きの四種の義は、　是れ多羅の義を說く。　（三）

釋して曰く、修多羅に此の四義あり。一には依、二には相、三には法、四には義なり。依とは是れ處、是れ人、是れ用なり。是れ何の國土に隨ひ、是れ何の諸佛に隨ひ、是れ何の衆生に隨ふを謂ふ。如來は此の三種に依りて修多羅を說きたまへり。相とは謂く世諦の相及び第一義諦の相なり。

【四】熏（Vāsanā）は香はす又は香をつける意味、覺（Bodhana）は覺醒せしむ、目覺めしむるの義、寂（Śamana）は靜かなること、平和なることの意味、最後の通（Prativedha）貫通の意味である。

【五】此の偈は經律論の三藏に各四義あること顯示す。

【六】此の偈は經の四義を說示す。四種の義とは、依（Āśraya）と相（Lakṣaṇa）と法（Dharma）と義（Artha）とである。

あらざるなり。諸の菩薩は是の如く他に大乘經を說くに依りて大福德を得、自利に依りて說く所の小乘經は大福德を得ざるなり。

已に勝福を說けり。次に得果を說かん。偈に曰く、[一〇]

大法は大信を起す、　大信の果に三有り、
信增と及び福增と、　佛功德の體を得るとなり。（一三）

釋して曰く、大法は大信を起し大信の果に三有りとは、謂く有智の人は大乘聖法に於て大信を生ず、此の大信に由りて三種の果を得。問ふ、何等の果をか得る。答ふ、信增と及び福增と佛功德の體を得るとなり。此れ一に大信の果を得て信增長するが故なると、二に大福の果を得て福增長するが故なると、三に大菩提の果を得て功德無等及び佛體大なるが故なるとを明すなり。明信品究竟。

述求品[一]第十二の一

釋して曰く、是の如く已に種種の信を說けり。次に信を以て諸法を求むることを說かん。偈に曰く、[二]

三藏或は二攝、　三を成ずるに九因あり、
熏と覺と寂と通との故に、　生死の事を解脫す。（一）

釋して曰く、三藏或は二攝とは、三藏とは謂く修多羅藏・毘尼藏・阿毘曇藏なり。或は二とは謂く此の三は下、上乘の差別に由るが故なり。復た次に聲聞藏及び菩薩藏と爲す。問ふ、彼の三及び二は云何が藏と名づく。答ふ、攝に由るが故なり。謂く一切所應知の義に攝す。問ふ、云何が三を成ずる。答ふ、三を成ずるに九因あり。修多羅を立つるは、疑惑を對治するが爲めなり、若し人義に於て處處に疑を起さば、彼の人をして決定を得せしむるが爲の故なり。毘尼を立つるは、受用の二[三]

【一〇】此の偈は大信の果に三あることを明かにす。

【一】述求の原語は Dharmaparyeṣṭi にて、「求法」を意味する言葉である。

【二】此の偈は信を以て諸法を尋求する要旨を述ぶ。

【三】二邊の原語は Antadvaya にて、兩極端を意味する言葉である。

の如し。一切時に於て種種に信ずるが故なり。譬へば、盲龜の水中に六を藏するが如く、諸の外定を習する人の信も亦た復た是の如し。唯だ世間の定を修習するを知るのみなるが故なり。譬へば賤奴の主を畏るゝが如く、諸の自利を勤作する人の信も亦た復た是の如し。生死を怖るゝが爲に勤方便するが故なり。譬へば大王の自在に詔敕するが如く、諸の利他の人の信も亦た復た是の如し。增上敎化して休息無きが故なり。菩薩は自ら諸信を解し、復た廣く分別し、他をして解を得せしめ、是の如く諸の衆生を勸めて、大乘の信を生ぜしむ。

已に信の功德を讃せり。次に下劣の心を遮せん。偈に曰く、

[八]人身と及び方處と、　時節と皆無限なり。
三因は菩提を得、　下劣の心を起すこと勿れ。（一一）

釋して曰く、人身と及び方處と時節と皆無限なりとは、無上菩提を得るに三因ありて無限なり。一には人身無限、人道の衆生無限を得るに由るが故なり。二には方處無限、十方世界無限を得るに由るが故なり。三には時節無限、盡未來際刹那刹那無限を得るに由るが故なり。三因は菩提を得、下劣の心を起すこと勿れとは、此の三因の無限に由り、是の故に諸の菩薩は無上菩提に於て、應に退屈して下劣の心を起すべからざるなり。

已に下劣の心を遮せり。次に福德の勝を顯はさん。偈に曰く、

[九]福を得るは彼に施すに由るなり。　自受用に由るに非ず、
他に大乘を說くに依る。　自義の法に依るにあらず。（一二）

釋して曰く、福を得るは彼に施すに由るなり。身受用に由るに非ずとは、譬へば食を以て彼に施すに、則ち大福を得るが如し。利他に由るが故に。自受用能く大福を得るに非ず、自利に由るが故なり。問ふ、若し爾らば菩薩は云何が福を得る。答ふ、他に大乘を說くに依る、自義の法に依るに

【八】此の偈は無上菩提を得るに三因あることを顯示す。

【九】此の偈は福德の勝れたることを顯示す。

問ふ、何の障か信の種を障ゆる。偈に曰く、

[五] 不厭と及び不習と、　有厭と亦た有覆と、
無應と及び無聚と、　應に知るべし信の種を障ゆることを。(七)

釋して曰く、不習は可奪の信、有聞の信に於て障を爲す、不厭は小信に於て障を爲す、生死を厭はざるが故なり。有覆は大信に於て障を爲す、生死を厭ふが故なり。有覆は無覆の信に於て障を爲し、無應は相應の信に於て障を爲し、無聚は有聚の信に於て障を爲す。

已に信の障難を顯示せり。次に信の功德を讃歎せん。偈に曰く、

[六] 信に大福德あり、　不悔と及び大喜と、
不壞と將た堅固と、　進位と并に得法と、
自利と他利と、　亦た復た諸通を速にす、
此の諸の功德を以て、　信の利益を讃歎す。(八・九)

釋して曰はく、大福德とは現在の信を讃するなり。不悔とは過去の信を讃す、追變せざるが故なり。大喜とは正受信と及び似受信とを讃す、定相應の故なり。不壞とは友力の信を讃す、正道は不壞なるが故なり。堅固とは自力の信を讃す、退轉せざるが故なり。進位とは不迷の信、現前の信、聽法の信、求義の信、觀察の信、有聞の信を讃し、得法とは無間の信を讃し、自利とは少信を讃し、他利とは多信を讃するなり。速通とは諸の自分信を讃す。謂く無覆信・相應信・有聚信・極入信・遠入信なり。偈に曰く、

[七] 狗・龜・奴、王の譬は、　次第に四信を譬ふ、
習欲「の人」と習諸定「の人」と　自利「の人」と利他の人となり　(一〇)

釋して曰く、譬へば餓えたる狗の食を求めて飽くこと無きが如く、諸の習欲の人の信も亦た復た是

【五】此の偈は信の種を障ゆるもの〻何なるかを顯示す。

【六】此の二偈は信の功德を總讃し、其の功德に十四種あることを顯示す。

【七】此の偈は四種の譬をあげて信の差別を明かにす。

復た此の十三義〔を以て〕　信の種を分別す。　（三・四）

釋して曰く、信の種の差別も亦た十三あり。一には可奪信、謂く下品信なり。二には有間信、謂く中品信なり。三には無間信、謂く上品信なり。四には多信、謂く大乘信なり。五には少信、謂く小乘信なり。六には有覆信、謂く有障信、勝進を能くせざるに由るが故なり。七には無覆信、謂く無障信、勝進を能くするに由るが故なり。八には相應信、謂く熟修信、恒行及び恭敬行に由るが故なり。九には不相應信、謂く不熟修信、前の二行を離るゝに由るが故なり。十には有聚信、謂く有果信、能く大菩提を得るに由るが故なり。十一には無聚信、謂く無果信、大菩提を得る能はざるに由るが故なり。十二には極入信、謂く功用信、初地より七地に至るが故なり。十三には遠入信、謂く極淨信、八地より佛地に至るが故なり。

已に信種を說けり。次に信の障難を說かん、偈に曰く、

〔四〕多忘と亦た懈怠と、　行迷と幷に惡友と、
善羸と及び邪憶と、　放逸と復た少聞と、
聞喜と及び思喜と、　固定增上慢と、
應に知るべし此等の過は、　信相を障礙すと。　（五・六）

釋して曰く、障とは相違の義なり。多忘は已生の信に於て障を爲し、懈怠は未生の信に於て障を爲す、行迷は正受と似受の信に於て障を爲す。先の所受能受の執着するが如きの故なり。惡友は他力の信に於て障を爲す、倒法を以て受けしむるが故なり。善羸は自力の信に於て障を爲し、邪憶は不迷の信に於て障を爲し、少聞は聽法の信に於て障を爲す。了義を聽かざるが故なり。聞喜は求義の信に於て障を爲す、少思惟の故なり。思喜及び定慢は觀察の信に於て障を爲す、少修及び細かに觀察せざるが故なり。

【四】此の偈に[illegible]顯示してある。

卷の第四

明信品第十一[一]

釋して曰く、已に無上菩提の隨順を說けり。菩提とは所謂信なり。此の信の相は今當に說くべし。偈に曰く、[二]

已生と及び未生と、　正受と及び似受と、
他力と亦た自力と、　有迷と亦た不迷と、
現前と不現前と、　聽法と及び求義と、
觀察等との十三[を以て]　信の相を分別す。　（一・二）

釋して曰く、信相の差別に十三種あり。一には已生信、謂く過去現在信なり。二には未生信、謂く未來信なり。三には、正受信、謂く內信なり。四には似受信、謂く外信なり。五には他力信、謂く麁信、善友の力に由りて生ずるが故なり。六には自力信、謂く細信、自力に由りて生ずるが故なり。七には有迷信、謂く惡信、顚倒に由るが故なり。八には不迷信、謂く好信、無倒に由るが故なり。九には現前信、謂く近信、無障に由るが故なり。十には不現前信、謂く遠信、有障に由るが故なり。十一には聽法信、謂く聞信、聞に由りて生ずるが故なり。十二には求義信、謂く思信、思に由りて生ずるが故なり。十三には觀察信、謂く修信、修に由りて生ずるが故なり。已に信相の差別を說けり。次に信種の差別を說かん。偈に曰く、[三]

可奪と間と無間と、　有多と亦た有少と、
有覆と及び無覆と、　相應と不相應と、
有聚と亦た無聚と、　極入と亦た遠入と、

【一】明信の原語は Adhimukti にて、信任信賴等を意味す。

【二】次の偈は十三種の信相の差別を說く。十三種とは一に已生信(Jāta)、二に未生信(Ajāta)、三に正受信(Grāhikā)、四に似受信(Grāhyabhūtā)、五に他力信(Mitradāttā)、六に自力信(Svātmato)、七に有迷信(Bhrāntikā)、八に不迷信(Abhrāntānya)、九に現前信(Amukhā)、十に不現前信(Anyā)、十一に聽法信(Ghoṣācārā)、十二に求義信(Caisikā)、十三に觀察信(Ceaikā)である。

【三】此の偈は信種の差別に十三あることを顯示す。一に不奪信(Hāryā)、二に有間信(Kirṇā)、三に無間信(Avyavakirṇa)、四に多信(Udārā)、五に少信(Hinā)、六に有覆信(Āvṛitā)、七に無覆信(Anāvṛtā)、八に相應信(Yuktā)、九に不相應信(Ayuktā)、十に有聚信(Saṁbhṛtā)、十一に無聚信(Asaṁṛtā)　十二に極入信(Vishtā)、十三に遠入信(Dūrugā)である。

入るを得ざるが故なり。諸水若し大海に入らば卽ち同じく依を一にす。卽ち同じく體を一にす。水一なるに由るが故に事業も亦た一なり、水大なるに由るが故に水蟲の受用も亦た大なり。若し諸の菩薩同じく佛體に入らば卽ち同じく意を一にし、卽ち同じく解を一にす。解一なるに由るが故に作業も亦た一なり、解大なるに由るが故に利益も亦た大なり。極一切衆生の聚も亦た盡あること無し。

是の如く已に諸佛の體用を說けり。次に一偈を說いて悕求を勸進せん。偈に曰く、

[188]無比にして圓なる白法は、　衆生利樂の因なり、
無盡藏に樂住す、　智者は應に發を求むべし。　（八〇）

釋して曰く、無比にして圓なる白法とは、佛の[189]自利成就に由るが故なり。衆生利樂の因なりとは、佛の[190]利他成就に由るが故なり。無盡藏に樂住すとは、佛の善根は無過無上にして是れ無盡の樂藏なるに由るが故なり。智者應に發を求むべしとは、有智の人は應に此の如き最勝樂住を求めて、大菩提心を發すべきが故なり。菩提品究竟。

【一八八】此の偈は智者は應に最勝の樂に住して大菩提心を發すべきを勸進す。
【一八九】自利成就(Svārthasaṁpatti)。
【一九〇】利他成就(Parārthasaṁpatti)。

るべし、是の如き菩薩は佛菩提を去ること卽ち甚だ遠しと爲す。何以故彼れ慢あるが故なり。偈に曰く、

[一八一]觀法は唯だ[一八二]分別なり、　此義前の如く知る、
菩薩[一八三]無分別なれば、　彼れ速に成佛すと說く。（七五）

釋して曰く、若し菩薩一切諸法は唯だ是れ分別なりと觀じ、彼の分別も亦た無分別なりと觀ずれば、卽ち彼の無生忍位に入ることを得、此の如き義に由りて菩提を得と說く。

已に入佛の方便を說けり。次に諸佛の同事を說かん。偈に曰く、

[一八四]應に知るべし諸の河水は、　[一八五]依を別にし亦た事を別にす。
水少なければ蟲用少し、　[一八六]未だ大海に入らざるが故なり。（七六）
一切大海に入れば、　依を一にし亦た事を一にす。
水大なれば蟲用大にして、　亦た復た常に無盡なり。（七七）
是の如く諸の別解は、　意を別にし業を別にす。
解少ければ利亦た少し、　[一八七]未だ佛體に入らざるが故なり。（七八）
一切佛體に入れば、　解を一にし亦た意を一にす。
解大なれば利亦大にして、　極聚亦た無盡なり。（七九）

釋して曰く、別水は諸の菩薩の解を別にするに譬ふ。依を別にするは諸の菩薩の意を別にするに譬ふ。水を一にするは諸の如來の解を一にするに譬ふ。依を一にするは諸の如來の意を一にするに譬ふ。諸の河水の別なるに由るが故に水の事業亦た別なり。水少きに由るが故に水蟲の受用亦た少し。何以故未だ同じく大海に入るを得ざるが故なり。諸の菩薩も亦た爾なり。解別なるに由るが故に作業亦た別なり、解少きに由るが故に衆生を利益することも亦た少し、何以故未だ同じく佛體に

【一八一】觀法(Paśyatāṁ)。
【一八二】分別(Kalpa)。
【一八三】無分別(Akalpana)。
【一八四】以下四偈は諸佛の同事を說示す。
【一八五】依(Āśraya)。
【一八六】未入大海故(Pātālamasampraviṣṭāḥ)。
【一八七】未入佛體故(Buddhatvamasampraviṣṭāḥ)。

虛ければ則ち應に餘の菩薩は菩提を得ざるべし。二聚不虛に由るが故にと、是の義然らず。故に佛は不一なり。一切とは、若しくは言ふ唯だ一佛のみあらば、則ち應に是の佛は一切衆生を利益せざるべし、佛は一切衆生を建立して佛と作すに由るが故にと、是の義然らず。故に佛は不一なり。無始とは若しくは言ふ、唯だ最初の一佛のみあらば是の佛應に福智二聚無くして成佛を得べしと、是の義然らず、故に佛は不一なり。無別とは、若しくは言ふ、別佛あらば福智の二聚無しと、是の義然らず。故に佛は不一なり。不多とは、依同に由るが故なり。一切諸佛の法身は無漏界に由依するが故なり。

已に諸佛の智を說けり。次に入佛の方便を說かん。偈に曰く、

[一七四]分別若し[一七五]恒有ならば、　眞實は則ち[一七六]永無ならん。
分別若し永無ならば、　眞實は則ち恒有ならん。（七二）

釋して曰く、若し分別自性是れ恒有ならば、則ち眞實自性是れ永無ならん。不可得に由るが故なり。若し分別自性是れ永無ならば、則ち眞實自性是れ恒有ならん。可得に由るが故なり。偈に曰く、

[一七七]最上の修を修せんと欲せば、　一切の修を見ず、
[一七八]最上の得を得んと欲せば、　一切の得を見ず。（七三）

釋して曰く、彼の是の如き最上の修は彼れ修するも得べからず。彼の是の如き最上の得は彼れ得るも得べからず。偈に曰く、

[一七九]尊重及び[一八〇]長時、　佛の希有の法を觀じ、
此を緣じて速に佛を得と謂はゞ　佛菩提を去ること遠し。（七四）

釋して曰はく、若し菩薩あり、佛世尊に於いて極めて尊重を生じ、及び長時に正勤して佛の未曾有の法を觀じ、此の觀心及び長時の精進に緣りて、我れ當に速に無上菩提を得べしと謂はゞ、應に知

【一七四】以下四偈は入佛の方便を說示す。
【一七五】恒有(Vidyamāna)。
【一七六】永無(Avidyamāna)。
【一七七】最上修(Paramā bhāvanā)。
【一七八】最上得(Paramā pratilambha)。
【一七九】尊重(Gurutvaṁ)。
【一八〇】長時(Dīrghaṁ)。

[一五九]恒に大衆の中に在りて、　種々皆な示現し、
能く諸の[一六〇]疑網を斷ず、　[一六一]大法雨を雨らすが故に。　（六八）

釋して曰く、此の偈は觀智の用の義を顯示す。偈說の如く此の觀智は卽ち是れ食身なり。偈に曰く、

[一六二]事智は諸界に於いて、　種々に化事を起すこと、
無量不思議なり、　[一六三]群生を利せんが爲の故に。　（六九）

釋して曰く、此の偈は前五識を轉じて作事智を得ることを顯示す。彼の作事智は一切世界の中に於いて種々變化の事を作すこと無量無邊にして思議すべからず。此の如き等の業は皆な一切衆生を利益せんが爲めの故なり。此の作事智は卽ち是れ化身なり。偈に曰く、

[一六四]攝持と及び[一六五]等心と、　[一六六]開法と亦た[一六七]作事と、
是の如きの四義に依りて、　次第に四智起る。　（七〇）

釋して曰く、攝持とは、謂はく聞法して攝持するが故なり。等心とは、謂はく一切衆生に於いて自他平等を得るが故なり。開法とは謂はく、正法を演說するが故なり。作事とは謂はく、種々の化業を起すが故なり。第一義に依りて鏡智起り、第二義に依りて平等智起り、第三義に依りて觀智起り、第四義に依りて作事智起る。[一六八]偈に曰く、

[一六九]性別と及び[一七〇]不虛と、　[一七一]一切と亦た[一七二]無始と、
[一七三]無別の故に一ならず、　依同の故に多ならず。　（七一）

釋して曰く、此の偈は諸佛の不一不多を顯示す。不一とは性別に由るが故に、不虛の故に、一切の故に、無始の故に、無別の故なり。性別とは、無邊の諸佛性別なるに由る、若しくは言ふ唯だ一佛のみあつて當に菩提を得べき者ありと、是の義然らず、故に佛は不一なり。不虛とは若し福智聚

【一五九】此の偈は觀智の作用を說示す。
【一六〇】疑網(Saṁśaya)。
【一六一】大法雨(Mahādharma-pravarṣa)。
【一六二】此の偈は前五識を轉じて作事智を得ることを說示す。事智(Kṛtyānuṣṭhāna-jñāna)は普通には成所作智と譯す。
【一六三】爲利群生故(Sarvasattva-Ortha-Kārakaṁ)。
【一六四】攝持(Dhāraṇa)。
【一六五】等心(Samacitta)。
【一六六】開法(Dharmaprakāśana)。
【一六七】作事(Kṛtyānuṣṭhāna)。
【一六八】此の偈は諸佛の一にあらず多にあらざることを說示す。
【一六九】性別(Gotrabheda)。
【一七〇】不虛(Avaiyarthya)。
【一七一】一切(Sākalya)。
【一七二】無始(Anāditā)。
【一七三】無別故不一、依同故不多(Abhedānnaika-buddhatvaṁ bahutvaṁ cāmalāśraye)。

智を說いて以て鏡智と爲し玉ふ。偈に曰く、

[一五二]衆生の[一五三]平等智は、　淨を修して菩提を證し、
涅槃に住せず、　究竟無きを以ての故に。（六五）

釋して曰く、此の偈は第七識を轉じて平等智を得るを顯示す。衆生の平等智は淨を修して菩提を證すとは、若し諸の菩薩法を證して現前する時は、卽ち一切衆生平等智を得。若し此智を修習せば最も極淸淨にして卽ち無上菩提を得。涅槃に住せず、究竟無きを以ての故にとは、衆生は無盡なるに由るが故に究竟無く、究竟無きが故に涅槃に住せざるなり。此義に由るが故に說いて平等智と爲す。[一五四]偈に曰く、

[一五五]大慈と[一五六]大悲と、　是の二は恒に絶ゆること無し、
衆生若し信あらば、　[一五七]佛像卽ち現前せん。（六六）

釋して曰く、此の偈は平等智の用を顯示す。大慈と大悲と、是の二は恒に絶ゆること無しとは、諸佛如來一切時に於いて衆生を隨逐す、何以故(なんとなれば)大慈大悲斷絶すること無きが故なり。衆生若し信あらば佛像卽ち現前せんとは、其の所信の如く彼に隨つて現するが故なり。是の故に或は衆生ありて如來は靑色なりと見、或は衆生ありて如來は黃色なりと見る。是の如きの一切は此れ前二智、卽ち是れ法身なり。偈に曰く、

[一五八]觀智は識と所識に、　恒時に礙あること無し、
此の智は大藏の如く、　總持三昧の依止するところたり。（六七）

釋して曰く、此の偈は第六識を轉じて觀智を得ることを顯示す。觀智は所識の一切の境界に於いて恒に障礙無し。譬へば大藏の如く一切陀羅尼門一切三昧門のために依止と爲る。何以故(なんとなれば)是の如きの二門は皆な此智より生ずるが故なり。偈に曰く、

【一五二】此の偈は第七識を轉じて平等智を得ることを說示す。
【一五三】平等智(Samatājñāna)。
【一五四】此の偈は平等智の作用を說示す。
【一五五】大慈(Mahāmaitrī)。
【一五六】大悲(Mahākaruṇā)。
【一五七】佛像卽現前 (Buddha-biṁbanidarśana)。
【一五八】此の偈は第六識を轉じて觀智を得ることを說示す。

已に諸佛の身を說けり。次に諸佛の智を說かん。偈に曰く、

[一四四]四智[一四五]鏡は不動にして、　三智の所依なり。
八七六五識は、　次第に轉得するが故に。　（六一）

釋して曰く、四智鏡は不動にして三智の所依なりとは、一切の諸佛は四種の智あり、一には鏡智、二には[一四六]平等智、三には[一四七]觀智、四には[一四八]作事智なり。彼の鏡智は不動を以て相と爲し、恒に餘の三智の依止する所たり。何以故(なんとなれば)三智は動なるが故なり。八七六五識は次第に轉得するが故にとは、第八識を轉じて鏡智を得、第七識を轉じて平等智を得、第六識を轉じて鏡智を得、前五識を轉じて作事智を得。是の義應に知るべし。偈に曰く、

[一四九]鏡智は無分を緣して、　相續して恒に斷ぜず、
諸の所識に愚ならず　諸相現前せず　（六二）

釋して曰く、此の偈は第八識を轉じて鏡智を得ることを顯示す。鏡智は無分を緣ずとは、一切の境界に於て分段を作さずして緣ずるが故なり。相續して恒に斷ぜずとは、一切時に於いて常に行じて斷絕せざるが故なり。諸の所識に愚ならずとは、一切境界の障永く盡くることを了知するが故なり。諸相現前せずとは、諸の境界に於いて行相を離れ緣じて無分別なるが故なり。偈に曰く、

[一五〇]鏡智は諸智の因なり、　是れを[一五一]大智藏と說く、
餘身及び餘智の　像現は此より起る。　（六四）

釋して曰く、此の偈は鏡智の用を顯示す。鏡智は諸智の因なり、是れを大智藏と說くとは、彼の平等智等の諸智一切種は皆な鏡智を以て因と爲す、是の故に此の智は譬へば大藏の如し。是れ諸の智の藏なるに由るが故なり。餘身及び餘智の像現は此より起るとは、餘身は受用身等を謂ひ、餘智は平等智等を謂ふ。彼の身像及び彼の智像は、一切皆な此智より出生するに由り。是の故に佛は此

【一四四】此の偈は諸佛に四智あることを說示す。
【一四五】鏡智(Ādarśajñāna)。
【一四六】平等智(Samatājñāna)。
【一四七】觀智 (Pratyavekṣajñāna)。
【一四八】作事智(Kṛtyānuṣṭhānajñāna)。
【一四九】此の偈は第八識を轉じて鏡智を得ることを說示す。
【一五〇】此の偈は鏡智の作用を說示す。
【一五一】大智藏 (Mahājñānākara)。

づけて化身と爲す。二身とは謂はく、食身と化身となり。二利とは謂はく、自利と他利となり。食身は自利の成就を以て相と爲し、化身は他利の成就を以て相と爲す。此の如き二利は、一切種を成就するが故に、次第に食身及び化身を建立す。[一三五]偈に曰く、

[一三六]工巧と及び [一三七]出生と、 [一三八]得道と般涅槃と、
此の大方便を示して、 他をして解脱を得しむ。 (五九)

釋して曰く、復た次に化身は一切時に於いて衆生を敎化するに或は工巧を現し、或は出生を現し、或は得菩提を現し、或は般涅槃を現す。是の如く種々に大方便を示し、皆な衆生をして解脱を得しむ。此は是れ他利成就の相なり。偈に曰はく、

[一三九]應に知るべし佛の三身は、 是れ佛身に皆な攝すと、
[一四〇]自他利の依止は、 悉く三身を示現す。 (六〇)

釋して曰く、應に知るべし此の三身は一切諸の佛身を攝すと。一切の自利他利の依止を示現するが故なり。[一四一]偈に曰く、

[一四二]依・心・業に由るが故に 三佛倶に平等なり。
[一四三]自性は間續無く、 三佛倶に常住なり。 (六一)

釋して曰く、彼の三種の身は其の次第の如く、一切の諸佛は悉く皆な平等なり。依に由るが故に一切諸佛は自性身平等なり。法界は別無きが故に。心に由るが故に一切諸佛は食身平等なり。佛心は別無きが故に。業に由るが故に、一切諸佛は化身平等なり。同一所作の故に。復た次に、一切の諸佛は悉く同じく常住なり。自性常なるに由るが故に一切諸佛は自性身常住なり、畢竟無漏の故に。無間常に由るが故に一切の諸佛は食身常住なり。說法斷絕無きが故に。相續常に由るが故に一切諸佛は化身常住なり。此に滅すと雖も復た彼に現するが故に。

【一三五】此の偈は佛の利他成熟の相を顯示す。
【一三六】工巧(Śilpa)。
【一三七】出生(Janma)。
【一三八】得道(Mahābodhisadā)。
【一三九】此の偈は一切の自利々他の業は皆一佛身に攝することを顯示す。
【一四〇】自他利(Svaparātha)。
【一四一】此の偈は三身平等にして又常住なる旨を說示す。
【一四二】依(Āśraya) 心(Āśaya) 業(Karmah)。
【一四三】自性(Prakṛtya)。

已に諸佛法界の清淨を說けり。次に諸佛の三身を說かん。偈に曰はく、

[一二二]性身と及び食身と　化身との三身を合す。
應に知るべし[一二三]第一身は、　餘の二の依止なり。(五五)

釋して曰く、一切の諸佛は三種の身あり、一には自性身、轉依の相に由るが故なり。二には食身、大集衆の中に於いて法食を作すに由るが故なり。三には化身、所化の衆生の利益を作すに由るが故なり。此の中應に知るべし自性身は食身化身の依止と爲ること。是れ本に由るが故なり。偈に曰はく、

[一二四]食身は諸界に於いて、　受用差別あり。
[一二五]衆生を身業と名づく　一切皆な異るが故なり。(五六)

釋して曰く、食身は一切世界の中に於いて諸の徒衆、諸の刹土、諸の名號、諸の身、諸の業、此の如き諸の受用事は悉く皆な同じからず。偈に曰く、

[一二六]平等[一二七]微細身と、　[一二八]受用身と相合す。
應に知るべし受用身は、　[一二九]復た是の化身の因なることを。(五七)

釋して曰く、平等とは謂く、自性身なり、一切諸佛等しうして別無きが故なり。微細とは此の身は知り難きに由るが故なり。受用身とは謂はく食身なり、此の身と平等身と合して依起するに由るが故なり。應に知るべし受用身は[一三〇]復た是れ化身の因とは、欲する所の受用一切を示現するに由るが故なり。偈に曰く、

[一三一]化佛は無量化なり、　是の故に[一三二]化身と名づく
二身[一三三]二利を成じ　[一三四]一切種を建立す。(五八)

釋して曰く、化身の諸佛は一切時に於いて無量の差別を作すに由る。佛は此の化に由るが故に名

【一二二】此の偈は諸佛の三身を說示す。
【一二三】第一身とは自性身のことである。
【一二四】此の偈は食身の意義を細說す。
【一二五】大正藏經に「土」に作るも「生」の誤ならん。
【一二六】此の偈は食身は化身の因なることを說示す。
【一二七】微細(Sūkṣma)。
【一二八】受用身(Sambhogakāya)。
【一二九】大正藏經には「得」に作るも「復」の誤ならん。
【一三〇】此の「復」の字は上の偈文に「得」に作ることの誤なることを證す。
【一三一】此の偈は化身の意義を說示す。
【一三二】化身(Nirmāṇa-Kāya)。
【一三三】二利(Dvayārtha)。とは自利と利他とである。
【一三四】一切種(Sarvakārā)?

相は[二二]煩惱障及び[二三]智障悉く永く盡くるに由るが故なり。諸物及び緣智、自在にして亦た無盡なりとは、謂はく自在の相は諸物及び彼の智を緣じて、二種の自在永く無盡なるに由るが故なり。偈に曰く、

[二三]一切種如智　　淨法界の因を修し、
衆生を利樂して化す、　　此の果も亦た無盡なり。　(五二)

釋して曰く、此の偈は法界の因の義を顯示す。一切種如智淨法界の因を修すとは、謂く清淨法界の爲めに一切時に於いて一切種如門智を修し、以て因と爲るが故なり。衆生を利樂し化す、此の果亦た無盡なりとは、謂はく衆生を敎化せんが爲めに一切時と一切衆生とに於いて利樂の二果恒に無盡なるが故なり。偈に曰く、

[二四]身口心を發起し、　　三業恒時に化す。
二門及び二聚、　　方便悉く圓滿す。　(五三)

釋して曰く、此の偈は法界の業の義を顯示す。身口心を發起し三業恒時に化すとは、謂はく身業・口業・心業を起し、一切時に衆生を敎化するが故なり。二門及び二聚方便悉く圓滿すとは、[二五]謂はく二門二聚を具足して方便と爲すが故なり。二門とは謂はく三昧門と陀羅尼門となり。二聚とは謂はく、[二六]福德聚と[二七]智慧聚となり。[二八]偈に曰く、

[二九]自性と及び[三〇]法食と、　　[三一]變化との位を差別す、
此れ法界の淨は　　諸佛の所說に由る。　(五四)

釋して曰はく、此の偈は法界の位の義を顯示す。自性と及び法食を變化との位を差別すとは、謂はく自性身、食身、化身の位を差別するが故なり。此れ法界の淨は諸佛の所說に由るとは、若し法界清淨ならざれば此の位成ぜざるが故なり。

【二二】煩惱障(Kleśāvaraṇa)。
【二三】智障(Jñeyāvaraṇa)。
【二三】一切種如智(Sarvakatathatājñāna)。
【二四】身口意(Kāyavākcitta)。
【二五】大正藏經には「論」に作るも「謂」の誤ならん。
【二六】福德聚(Puṇyasaṁbhāra)。
【二七】智慧聚(Jñānasaṁbhāra)。
【二八】此の偈は自性身食身化身の位の差別を說示す。
【二九】自性(Svabhāvika)。
【三〇】法食(Dharmasaṁbhoga)。
【三一】變化(Nairmāṇika)。

三乘教門の故なり。偈に曰く、

[一〇五] 日の自然に光りて、　闇を照らし百穀を成ずるが如く、
[一〇六] 法の日光も亦た爾り、　惑を滅して衆生を熟す。　（四八）

釋して曰く、此の偈は自然の義を顯はすを譬ふ、譬へば日輪の勤方便無く、自然に光を放つて處處に闇を破り、百穀を成熟するが如く、諸佛も亦た爾り。無功用なりと雖も法の日光を以て處處に惑を滅し、衆生を成熟す。偈に曰く、

[一〇七] 一燈衆燈を燈し　極聚の明無盡なり、
一熟多熟を化し、　無盡の化亦た然り。　（四九）

釋して曰く、此の偈は展轉成熟の因を顯示す。譬へば一燈傳へて衆燈を燈し、極大燈聚の無量無數にして而も一燈の盡くる無きが如く、諸佛も亦た爾なり。一佛の成熟は多成熟を化し、極大衆生聚無量無數にして然も其の化力亦た復た無盡なり。偈に曰く、

[一〇八] 巨海は衆流を納れて　厭くこと無く亦た溢るゝこと無し、
[一〇九] 佛界は衆善を攝して、　滿たず亦た增さず。　（五〇）

釋して曰く、此の偈は無厭の成熟の因を顯示す。譬へば巨海の廣く百川を納れて、厭足あること無く、亦た盈溢無きが如し、容受を爲すが故なり。佛界も亦た爾なり、常に無量清淨の善根を攝して、而も滿足せず、亦た增長せず、希有に由るが故なり。

已に諸佛の衆生を成熟するを說けり。次に諸佛法界の清淨を說かん。偈に曰く、

[一一〇] 二障已に永く除き、　法如清淨を得、
諸佛と及び緣智と　自在にして亦た無盡なり。　（五一）

釋して曰く、此の偈は法界の性の義を顯示す。二障已に永く除き法如清淨を得とは、謂くは清淨の

【一〇五】此の偈は自然の義を顯はすに譬を以てす。
【一〇六】法日光(Dharmārka)。
【一〇七】此の偈は展轉成熟の因を說示す。
【一〇八】此の偈は諸佛の衆生を成熟するに無厭なることを說示す。
【一〇九】佛界(Buddho dhātu)。
【一一〇】此の偈は法界の清淨を說示す。

得難きを已に具に得、　處處に物の歸となる。
希有は希有に非ず、　善方便を得るに由る。（四五）

釋して曰く、此の偈は已に熟したる菩薩行は希有の相に非ざることを顯示す。得難きを已に具に得、處處に物の歸となるとは、無上菩提最上の功德は、此れ未だ曾て有らざるを、今已に具足相應す、此の相應に由るが故に能く恒に十方世界に於て物の歸する處となる。希有は希有に非ずとは、是の如く處處に衆生を成熟する是れ希有なり、此の如きの希有は亦希有に非ず、何以故善方便を得るに由るが故なり。善方便とは、謂ゆる機に隨ふの道、即ち是れ淸淨行なり。偈に曰く、

〔一〇二〕轉法と及び法沒と、　得道と亦た涅槃と、
處々に方便を起して、　眞法界を動せず（四六）

釋して曰く、此の偈は普遍の成熟の因を顯示す。轉法と及び法沒と、得道と亦た涅槃とは、謂はく一刹那の中に於いて、有る處には無量の法輪を轉ずるを示現し、ある處には正法の滅盡を示現し、ある處には大菩提を得るを示現し、ある處には涅槃に入るを示現す。此れ衆生の行の不同に由るが故なり。處々に方便を起し、眞法界を動ぜずとは、若し衆生の應に成熟す可きは如來彼の住處に隨つて處處に敎化す、然れども無漏法界に於いては亦た復た動ぜざるなり。偈に曰く、

〔一〇三〕分別の意を起さず　去來今に成熟し
處處に衆生を化し、　〔一〇四〕三門常に示現す。（四七）

釋して曰く、此の偈は自然成熟の因を顯示す。分別の意を起さず、去來今に成熟すとは、一切の諸佛是の念を作さず、我れ曾て衆生を成熟せり、我れ當に衆生を成熟すべし、我れ今衆生を成熟すと。何以故無分別に由るが故なり。處處に衆生を化し、三門常に示現すとは、無功用なりと雖も而も一切時に諸善根を以て、十方世界に於いて遍く三門を以て衆生を成熟するなり。三門とは謂ゆる

【一〇二】此の偈は普遍なる成熟の因を說示す。

【一〇三】此の偈は自然成熟の因を說示す。

【一〇四】三門（Trayamukhāni）。

是の如きの[九六]欲染の轉において　　變化は增上を得、
佛の無上樂に住して、　　妻に無染なることを示現す。　（四一）

釋して曰く、此の偈は欲染を轉ずるの變化を顯示す、此の轉に由るが故に二種の變化を得。一には無上樂に住するを得、二には妻に於いて無染なることを得。偈に曰く、

[九七]是の如きの[九八]空想の轉において　　變化は增上を得、
欲するに隨つて一切を得、　　去る所皆な無擁なり。　（四二）

釋して曰く、此の偈は空想を轉ずるの變化を顯示す。此の轉に由るが故に二種の變化を得、一には所欲皆な得、[九九]虛空藏を得るが故なり。二には所去皆な無擁なり、虛空辨を得るが故なり、偈に曰く、

是の如きの[一〇〇]無量の轉において　　是の如きの無量の化は
不思議の所作なり、　　諸佛は無垢に依る。　（四三）

釋して曰く、此の偈は前の義を總結す。無量を轉ずるに由るが故に無量の變化を得。是の如きの諸佛の不思議の業は一切皆な無漏法界に依る。是の義應に知るべし。

已に諸佛の變化を說けり。次に諸佛の衆生を成熟するを說かん。偈に曰く、

[一〇一]集めしめ亦た長ぜしめ、　　熟せしめ亦た脫せしむ。
熟々無餘あらず、　　世間無盡なるが故に。　（四四）

釋して曰く、此の偈は次第成熟の因を顯示す。未だ善根を集めざる者は聚集せしめ、已に善根を集めたるものは增長せしめ、已に善根を長じたる者は成熟せしめ、已に善根を熟したる者は解脫せしめ、最極清淨を得しむ。是の如く十方の諸佛は各各善說す。熟し已つて復た熟し般涅槃せず、何以故諸の世間は盡くることあること無きに由るが故なり。偈に曰く、

【九六】欲染轉(Maithunasya-parāvṛtti)。
【九七】此の偈は諸佛の空想を轉ずる變化を說示す。
【九八】空想轉（Ākāśasaṃjñā-parāvṛtti)。
【九九】虛空藏(Gaganagarbha)。
【一〇〇】無量轉(Ameya-parāvṛtti)。
【一〇一】此の偈は諸佛の衆生を成熟する因を說示す。

諸義所作に遍ずると　　功德千二百となり。　　（三六）

釋して曰く、此の偈は五根を轉ずるの變化を顯示す。此の變化は二種の增上を得。一には諸義所作に遍ずるを得、謂く一一の根は皆能く互に一切の境界を用ふるが故なり。二には功德千二百を得、謂く一一の根は各千二百の功德を得るが故なり。偈に曰く、

是の如く意根の轉において　　變化は增上を得、
極淨無分別にして　　恒に變化行に隨ふ。　　（三七）

釋して曰く、此の偈は意根を轉ずるの變化を顯示す。意根は染汚識を謂ふ。此の轉に由るが故に極淨無分別智を得、恒に一切の變化と隨行し、共に所作するが故なり。偈に曰く、

是の如く[九二]義受の轉において　　變化は增上を得、
[九三]淨土は所欲の如く、　　受用皆な現前す。　　（三八）

釋して曰く、此の偈は義受を轉ずるの變化を顯示す。義は五塵を謂ひ、受は五識を謂ふ。此の二轉に由りて刹土清淨にして所欲現前し、意に隨つて受用す。偈に曰く、

是の如きの分別の[九四]轉に於いて　　變化は增上を得、
諸智所作の業、　　恒時に無礙業なり。　　（三九）

釋して曰く、此の偈は分別を轉ずるの變化を顯示す、分別は意識を謂ふ、此の轉に由るが故に諸智所作一切時の變化障礙あること無し。偈に曰く、

是の如きの[九五]安立の轉において　　變化は增上を得、
佛の不動句に住して、　　涅槃に住せず。　　（四〇）

釋して曰く、此の偈は安立を轉ずるの變化を顯示す、安立は器世間を謂ふ、此の轉に由るが故に佛不動なる無漏法界に住して般涅槃せざるを得、恒に增上變化を起す。偈に曰く、

【九二】義受轉(Sārthodgrahaprāvṛtti)。
【九三】淨土(Kṣetraśuddhi)。
【九四】分別轉(Vikalpasyaparāvṛtti)。
【九五】安立轉(Pratiṣṭhāyāḥprāvṛtti)。

[八六]一切別無きが故に、　如にして清淨を得るが故に
故に諸の衆生を說いて、　名づけて如來藏と爲す。（三三）

釋して曰く、此の偈は法界は是れ[八七]如來藏なることを顯示す。一切別無きが故にとは、一切衆生と一切諸佛等と差別無し、故に名づけて如と爲す。如にして清淨を得るが故にとは、清淨を得て和を以て自性と爲すが故に如來と名づく。是の義を以ての故に說くべし、一切衆生を名づけて如來藏と爲すと。已に無漏界の甚深なることを說けり。次に諸佛の變化を說かん、偈に曰く、

[八八]聲聞と及び緣覺と、　菩薩と如來と、
初は化して世間を退し、　佛に至りて菩薩を退す。（三四）

釋して曰く、此の偈は增上變化を顯示す。一切世間變化・聲聞變化は能く退し、一切聲聞變化・緣覺變化は能く退し、一切緣覺變化・菩薩變化は能く退し、一切菩薩變化・諸佛變化は能く退す。而も一人の變化して能く諸佛變化を退するものあること無し、是の故に如來變化は最も增上を得。偈に曰く、

是の如く佛の變化は、　無量不思議なり。
人に隨ひ世界に隨ひ、　時に隨つて種々に現ず。（三五）

釋して曰く、此の偈は甚深の變化を顯示す、此の甚深に二種あり、一には[八九]無量、二には[九〇]不思議なり。問ふ、此の事云何。答ふ、何根の人に隨つて何の世界に隨ひ、何の時節に隨ふも、其の差別の如く若しくは多く若しくは少く種々に變化す、是の如く無量亦た不思議なり。是の故に如來變化を最甚深と爲す。

自下次に別轉變化を說かん、偈に曰く、

是の如く[九一]五根轉に於いて　變化は增上を得、

【八六】此の偈は法界は卽ち如來藏なることを說示す。
【八七】如來藏（Tathāgatagarbha）。
【八八】此の偈は諸佛の變化の最も增上を得ることを說示す。
【八九】無量（Aprameya）。
【九〇】不思議（Acintya）。
【九一】五根轉（Pañcendriyāparāvṛtti）。

譬へば諸の[67]日光に、　雲等の[68]翳あるを說くが如く、
淨界の諸佛の智にも　衆生の障ありと說く。（三〇）

釋して曰く、此の偈は法界の不作の業を顯示す。譬へば日光に雲等の翳を爲して、是の故に照らさゞるが如く、是く如く佛光にも衆生の過失障を爲す。[69]五濁多きが故なり、是の故に所作あらず、偈に曰く、

譬へば[70]滋灰の力の　衣を染めて種々の色となすが如く、
淨界は[71]行願の力により、　解脫して種々の智あり。（三一）

釋して曰く、此の偈は法界解脫智の業を顯示す。譬へば衣を染むるに滋灰力に由りて、ある處は種々の色も得、ある處は種々の色も得ざるが如く、三乘の淨界も亦た爾り、行願力に由りて諸佛は解脫して種々の智を得、二乘は解脫して種々の智を得ず。偈に曰く、

[72]無漏界は甚深にして、　[73]相と處と業との三種あり、
諸佛は是の如く說きたまふ　譬へば畫の空を染むるが如し。（三二）

釋して曰く、此の偈は重ねて前の甚深の義を顯はす。無漏界甚深の相處業の三種とは、此の無漏界に世尊は略して三種の甚深を說きたまふ。一には相甚深、二には處甚深、三には業甚深なり、相甚深に四種あり一は[74]清淨相、二は[75]大我相、三は[76]無記相、四は[77]解脫相なり。其の次第の如く前の四偈の顯はす處甚深一種に由る、謂く一多住せざるが故なり。第五偈に顯はす所の業甚深に八種あるに由る。一は[78]寶依止業、二は[79]成熟衆生業、三は[80]到究竟業、四は[81]說正法業、五は[82]化所作業、六は[83]無分別業、七は[84]智不作業、八は[85]解脫智業なり。其の次第の如く後の八偈の顯はす所に由る。諸佛は是の如く說きたまふ。譬へば畫の空を染むるが如しとは、此の無漏果は戲論あること無し。譬へば虛空を畫くが如し、是の義應に知るべし。偈に曰く、

【六七】日光(Ādityaraśmi)。
【六八】雲等翳(Meghādyāvaraṇa)。
【六九】五濁多故(Pañcakaṣāyātyutsadatayā)。
【七〇】滋灰力(Pāṃśuvaśa)。
【七一】行願力(Āvedhavaśa)。
【七二】無漏界(Anāsravadhātu)。
【七三】相・處・業 (Lakṣaṇa, Sthāna, Karma)。
【七四】清淨相(Viśuddhilakṣaṇa)。
【七五】大我相(Paramātmalakṣaṇa)。
【七六】無記相(Avyākṛtalakṣaṇa)。
【七七】解脫相(Vimuktilakṣaṇa)。
【七八】寶依止業(Ratnāśrayatvakarma)。
【七九】成熟衆生業(Satvaparipācanakarma)。
【八〇】到究竟業(Niṣṭhāgamanakarma)。
【八一】說正法業 (Dharmadeśanakarma)。
【八二】化所作業 (Nirmāṇādikṛtyakarma)。
【八三】無分別業(Avikalpanakarma)。
【八四】智不作業(Citrākārajñānakarma)。
【八五】解脫智業 (Vimuktisāmānyajñānaviśeṣakarma)。

淨界も亦た是の如し、　善を流して衆生を熟す。　（二一五）

釋して曰く、此の偈は法界の衆生を成熟する業を顯示す。清淨法界より諸の善根を流して衆生を成熟するに由るが故なり。偈に曰く、

譬へば日月の盈ちて　皎淨輪の圓滿なるが如し。
淨界も亦た是の如く、　善根聚圓滿なり。　（二一六）

釋して曰く、此の偈は法界の究竟に到る業聚を顯示す。諸の福智は清淨法界に由る、此の如く二聚圓滿を得るが故なり。偈に曰く、

譬へば日輪の出でて　光を流して一切を照らすが如し。
淨界も亦た是の如く、　說を流して群生を化す。　（二一七）

釋して曰く、此の偈は法界の正法を說く業を顯示す。偈に曰く、

譬へば日光の同事を合して　世間を照らすが如し、
淨界も亦た是の如く、　佛は同業を合して化す。　（二一八）

釋して曰く、此の偈は法界の化する所の作業を顯示す。譬へば多日多光一時に和合して同じく一事を作すが如し、謂く乾熟等なり。是の如く多佛多智一時に和合して同じく一業を作す、謂く變化等なり。偈に曰く、

譬へば日光の照らすに　無限にして亦た一時なるが如し。
淨界の佛光の二事を照すも　亦た是の如し。　（二一九）

釋して曰く、此の偈は法界無分別の業を顯示す。譬へば日光の普く照らして分限あること無く、亦た復た一時なるが如く、是の如く佛光の普く照して無限一時なることも亦た復た是の如し。偈に曰く、

[55]譬へば鐵の熱息むが如く、　譬へば眼の瞖除くが如く、
[56]心智の息も亦た爾なり、　[57]有無の體を說かず。　（一二二）

釋して曰く、此の偈は法界解脫の相を顯示す。譬へば鐵の熱の息むが如く、譬へば眼の瞖の除かるゝが如しとは、是の如き二物の熱息瞖除は、體に非ず非體に非ずと說く可し。何以故體に非ずとは、熱瞖の無相に由るが故なり。非體に非ずとは息の相は體あるに由るが故なり。心智の息も亦た爾り。有無の體を說かずとは、諸佛の心智は貪を以て熱と爲し、無明を以て瞖と爲す、彼の二若し息まば亦體に非ず非體に非ずと說く。何以故非體は貪及び無明の息に由るが故なり。非體に非らずとは[58]心慧解脫有るに由るが故なり。是れを法界解脫の相と名づく。已に相の甚深なることを說けり。次に處の甚深なることを說かん。偈に曰く、

[59]諸佛の[60]無漏界は、　[61]一に非ず亦た多に非ず、
[62]前身隨順するが故なり、　[63]非身にして空の如くなるが故なり。　（一二三）

釋して曰く、此の偈は法界處の甚深なることを顯示す。諸佛の[64]無漏法界は一に非ず亦た多に非ず、何以故非一は前身隨順するに由るが故に、非多は非身に由るが故なり。問ふ、云何んが非身なる。答ふ、虛空の如きが故なり。是れを法界處の甚深と名づく。已に處の甚深を說けり。次には業の甚深を說かん。偈に曰く、

[65]譬へば大寶藏の　衆寶の所依なるが如し。
淨界も亦た是の如く、　佛法の依止なり。　（一二四）

釋して曰く、此の偈は法界依止の業を顯示す。清淨法界は力無畏等の諸の菩提分寶の依止する所と爲るに由るが故なり。偈に曰く、

[66]譬へば密雲の布いて、　雨を灑いで百穀を成ずるが如く、

【五五】此の偈は法界解脫の相を顯示す。
【五六】心智(Cittajñāna)。
【五七】有無の體(Bhāvābhāva)。
【五八】心慧解脫(Citehprajñā-vimuktyā)。
【五九】此の偈は法界處の甚深なるを顯示す。
【六〇】無漏界(Amala-dhātu)。
【六一】非一亦非多(Naikatā bahutā na ca)。
【六二】前身隨順故(Pūrvadeha anusārata)。
【六三】非身如空故(Akāśavadadehatva)。
【六四】無漏法界(Anāsravadhātu)。
【六五】此の偈は清淨法界は佛法の依止する所なることを顯示す。
【六六】此の偈は清淨法界は諸の衆生を成熟するを顯示す。

[四四]前の如く後も亦た爾り、　及び一切の障を離る、
淨に非ず不淨に非ず。　佛說を名づけて如と爲す。　（一九）

釋して曰く、此偈は法界淸淨の相を顯示す。前の如く後も亦た爾りとは、所謂非淨なり、自性は不染なるに由るが故なり。及び一切の障を離るとは、所謂不淨に非るなり、後時に客塵を離るゝに由るが故なり。淨に非ず不淨に非ず、佛說を名づけて如と爲すとは、是の故に佛說は是れ如にして淨に非ず不淨に非ざるなり。是を法界淸淨の相と名づく。偈に曰く、

[四五]淸淨空無我なるを、　佛は第一我なりと說き玉ふ。
諸佛は我淨の故に、　故に佛を[四六]大我と名づく。　（二〇）

釋して曰く、此偈は法界大我の相を顯示す。淸淨空無我とは、此の無漏界は[四七]第一無我を自性と爲すに由るが故なり。佛は[四八]第一我なりと說き玉ふとは、第一無我は曰く、淸淨にして如なり。彼の淸淨如は即ち是れ諸佛の我なり自性なり。諸佛は我淨なるが故に、故に佛は大我と名づくとは、佛此の我に由りて最淸淨を得、是の故に佛を號して以て大我と爲す。此の義意に由り諸佛は無漏界に於て第一我を建立す。是れを法界大我の相と名づく[四九]。偈に曰く、

[五〇]體に非ず[五一]非體に非ず、　是の如く[五二]佛體を說く。
是の故に是の論を作す、　定んで是れ[五三]無記法なり。　（二一）

釋して曰く、此の偈は法界の無記の相を顯示す。體に非ずとは人法の二相說く可からざるが故なり。非體に非ずとは、[五四]如相は實有なるが故なり。是の如く佛體を說くとは、此の因緣に由るが故に佛體は體に非ず非體に非ずと說くなり。是の故に是の論を作す定んで是れ無記法なりとは、無記は謂ゆる死後如來有り死後如來無し、死後如來亦た有り死後如來亦無し、死後如來有るに非ず如來無きに非ず、是の如き四句は記す可からざるが故なり。是の故に法界は是れ無記の相なり。偈に曰く、

【四四】此の偈は法界淸淨の相を說示す。
【四五】此の偈は法界大我の相を說示す。
【四六】大我(Mahātmyam)。
【四七】第一無我(Agram-nairātmyam)。
【四八】第一我(Paratmā)。
【四九】此の偈は法界無記の相を說示す。
【五〇】體(Bhāva)。
【五一】非體(Abhāva)。
【五二】佛體(Buddhatva)。
【五三】無記法(Avyākṛta)。
【五四】如相(Tathatā-lakṣaṇa)。

釋して曰く、此偈は佛體遍しと雖も、而も衆生の見ざることを顯示す。譬へば水器の破壞して月像を見ざるが如し。是の如き衆生の過失は佛像を見ず、此義成ずるを得。偈に曰く、

[三八]譬へば[三九]火聚性の、　或は然え或は滅盡するが如く、
是の如く諸佛の化は、　或は出で或は涅槃す。　（一六）

釋して曰く、此偈は諸佛の教化の出あり沒あることを顯示す。譬へば火性のある時は熾然なるも或る時は滅盡するが如く、諸佛の教化も亦た復た是の如し。ある時は出世を示現し、ある時は涅槃を示現す。是の如く已に如來の轉依を說けり。次に如來の事業の恒に[四〇]無功用なることを說かん。偈に曰く、

[四一]意珠及び天皷は　自然に自事を成ず、
佛化及び佛說の、　無思なることも亦た是の如し。　（一七）

釋して曰く、此偈は佛事の無功用なることを顯示す。譬へば如意寶珠の、復た無心なりと雖も、自然に能く種々の變現を作るが如し。如來も亦た爾なり、復た無功用心と雖も自然に能く種々の變化を起す。譬へば天皷の復た無心なりと雖も、自然に能く種々の音聲を出すが如く、如來も亦た爾り。復た無功用心なりと雖も自然に能く種々の妙法を說く。偈に曰く、

[四二]依空の業は無間なるも、　而も業には增減あり。
依界の事は斷ぜざるも、　而も事には生滅あり。　（一八）

釋して曰く、此の偈は佛事の無間なることを顯示す。譬へば世間の空に依る所作は時に斷絕無きが如く、諸佛も亦た爾り。[四三]無漏界に依りて佛事を作すも亦た斷絕無し。譬へば世間の空に依る所作は增あり減あるが如く、諸佛も亦た爾り。無漏界に依りて佛事を作すも亦た生滅あり。已に無功用心の佛事を捨せざるを說けり。次に無漏法界の甚深を說かん。偈に曰く、

【三八】此の偈は諸佛の教化に出沒あることを顯示す。
【三九】火聚性(Agnirjvalata)。
【四〇】無功用(Anābhoga)。
【四一】此の偈は如來の事業の常に無功用なることを說示す。
【四二】此の偈は如來の事業には常に間斷なきことを說示す。
【四三】無漏界(Anāsrava-dhātu)。

廣大と無二と、　無住と亦た平等と、
殊勝と遍授と、　是を如來轉と說き、
十の功德を顯示す、　差別の義應に知るべし。　（一二・一三）

釋して曰く、此二偈は如來の轉依に十種の功德差別あることを顯示す。何等か十と爲す、一には他義轉、謂く轉依し已りて利他の爲めにするが故なり。二には無上轉、謂く轉依し已りて一切法中而も自在を得ること、二乘の轉に過るが故なり。三には不轉轉、謂く、染汚の諸因を轉依し已りて此の依を轉ずる能はず、彼依轉するが故なり。四には不生轉、謂く轉依し已れば一切の染汚の法は畢竟起らざるが故なり。五には廣大轉、謂く轉依し已れば現に大菩提、及び般涅槃を得ることを示現するが故なり。六には無二轉、謂く轉依し已れば生死涅槃は二あること無きが故なり。七には不住轉、謂く轉依し已れば有爲無爲俱に住せざるが故なり。八には平等轉、謂く轉依し已れば聲聞緣覺と同じく煩惱障を解脫するが故なり。九には殊勝轉、謂く轉依し已れば力無畏等一切の佛法與等無きが故なり。十には遍授轉、謂く轉依し已れば恒に一切乘を以て教授するが故なり。偈に曰く、

三六 空の一切に遍きが如く、　佛も亦た一切に遍し、
虛空は諸色に遍く、　諸佛は衆生に遍し。　（一四）

釋して曰く、此偈は佛體の一切に遍きこと、虛空と相似することを顯示す。初の二句は直に說き、後の二句は釋して說く、譬へば虛空の一切色聚に遍きが如く、佛體も亦た爾く一切衆生聚に遍し。若し衆生を以て現に佛に非るが故に、佛體は遍ねからずと言はゞ是の義然らず、未だ成就せざるが故なり。偈に曰く、

三七 譬へば水器の壞れたるが如きは　月像現前せず、
是の如く衆生過たば　佛像亦た現ぜず。　（一五）

【三六】此の偈は佛體の遍一切處なることを說示す。

【三七】此の偈は佛體は遍一切處なるも衆生の心水汚濁なれば佛像を見ること能はざるを說示す。
Yathodabhājane bhinne candrabimbaṃ na dṛśyate.
Tathā duṣṭeṣu satveṣu buddhabimbaṃ na dṛśyate,

[二七]未來際を盡して、　普く一切の生に及ぼし、
恒時に彼を利益す、　是れ[二八]歸依大を說くなり。　（九）

釋して曰く、此の偈は歸依大を顯はす、大に三義あり、一には時大、一切衆生の生死の際を窮むるが故なり。二には境大、一切衆生を以て境と爲すが故なり。三には事大、恒時に利益を作し、其の苦を救脫し、出離せしむるが故なり。已に無上の歸依を說けり。次に如來[二九]轉依の相を說かん。偈に曰く、

[三〇]二障の種恒に隨ひ、　彼れ滅して極めて廣く斷ず
[三一]白法圓滿なるが故に、　依轉の二道成ず。　（一〇）

釋して曰く、此偈は轉依に離有り得有ることを顯示す。二障の種恒に隨ひ彼れ滅して極めて廣く斷ずとは、此は所治遠離を明す。謂ゆる煩惱障智障の二種の種子已來恒時に隨逐す。今永く滅極を得とは、一切智廣者一切種此れ皆た斷ずるが故なり。白法圓滿なるが故に依轉二道を成ずとは、此れ能治の成就を明す。謂ゆる佛體は最上圓滿の白法と相應す。爾の時依轉は二道成就を得、一には[三二]極清淨出世智道を得、二には[三三]無邊所識境界智道を得、是を轉依と名づく。偈に曰く、

[三四]彼處に如來は住し玉ふ、　動ぜざること山王の如く、
尙ほ滅を樂ふ人を悲しむ　況んや諸有に著する者をや。　（一一）

釋して曰く、此偈は如來の轉依は諸轉中に勝れたることを顯示す。何以故(なんとなれば)如來は轉依して無漏界處に住し玉ふこと、山王の地を鎭め安住して不動なるが如し。是の如く轉じ已りて聲聞緣覺に於いて寂滅を樂ふ人を見て尙ほ憐愍を生ず、何に況んや遠邊下賤にして有に著する苦惱の衆生をや。偈に曰く、

[三五]他利と及び無上と、　不轉と及び不生と、

【二七】此の偈は歸依の大を說き、大に三義あることを顯示す。
【二八】歸依大(Śaraṇaṁ ma=hat)。
【二九】轉依(Āśrayaparāvṛtti)。
【三〇】此の偈は轉依に二道あることを說示す。
【三一】白法(Śukladharma)。
【三二】極清淨出世智道(Suvi=śuddhalokottara jñānamārga)。
【三三】無邊所識境界智道(Ana=ntajñeyaviṣaya jñānamārga)
【三四】此の偈は如來の轉依は諸の轉依の中、最も勝れたることを顯示す。
【三五】此の二偈は如來の轉依に十種の功德差別あることを顯示す。

生染汚なり。問ふ、云何んが救護する、答ふ、此三種の衆生に於て一切時に救護して捨てず、卽ち是れ畢竟の義なり。[一七]偈に曰く、

[一八]諸災及び　[一九]惡趣、　[二〇]身見亦た小乘、
是の如き諸の衆生、　一切皆な救護す。　(六)

釋して曰く、此偈は廣く救護の義を顯はす、諸災とは謂く、盲聾瘖瘂、狂亂形殘等の衆生なり。佛力に由るが故に盲者は視を得、聾者は聽を得、瘂者は言ふことを能くし、狂者は正を得、亂者は定を得、形殘は具足を得、是の如く救護す。惡趣とは謂く、地獄等の衆生は光を放ちて觸を照らし、苦を離るゝことを得て復た更に入らざらしむ、是の如く救護す。身見とは謂く、我に著するの衆生は人無我の解を得て二乘涅槃に入らしむ、是の如く救護す。小乘とは謂く、二乘性不定の衆生は方便もて大乘に引入す、是の如く救護す。偈に曰く、

[二一]佛を[二二]勝歸處と爲す、　無比の故に無上なり、
前の種々の畏の如きは　脫せしめざる者無し。　(七)

釋して曰く、此偈は歸依の勝を顯はす、佛は譬喩無きに由るが故に無上と爲す。是の故に前に說く所の三種の染汚の衆生、及び餘災の衆生の如きは、一切皆な能く救護す。偈に曰く、

[二三]諸佛は善を滿すの身にして、　[二四]一切世間に於いて勝れたり。
[二五]妙法は衆生を化し、　以て[二六]悲海を度すが故なり。　(八)

釋して曰く、此偈は歸依の勝因を顯はす、諸佛は善を滿たすの身にして一切を世間に於いて勝れたりとは、此れ自利究竟に由り、力無畏等諸の善功德の自性滿つるに由るが故なり。妙法は衆生を化す、以て悲海を度すが故なりとは、善く衆生を教化するの方便を解し、及び大悲の海岸に度して究竟するが故なり。偈に曰く、

【一七】此の偈は諸佛の救護の義を廣說す。
【一八】諸災(Sarva-upadrava)。
【一九】惡趣(Apāya)。普通には惡生と譯す。惡趣の普通の原語は Durgati である。
【二〇】身見(Satkāyadṛṣṭi)。
【二一】此の偈は佛は歸依の最勝處なることを說示す。
【二二】勝歸處(Śaraṇam upamam)。
【二三】此の偈は歸依の勝因を顯示す。
【二四】一切世間勝(Sarvajagatamsreṣṭham)。
【二五】妙法(Saddharma)。
【二六】度悲海故(Karuṇāpāragamanat)。

[七]白法を佛身と爲す、　無に非ず亦た有に非ず、
佛を法寶の因と爲す、　法は則ち善根の因なり。　(三)

釋して曰く、白法を佛身と爲すとは、六波羅蜜等一切の善法を轉じて佛體と爲すが故なり。無に非ず亦た有に非ずとは、此體は無に非ず、何以故[八]眞如無別の故なり。亦た復た有に非ず、何以故自性を成就せざるが故なり、是を無二の相と名づく。佛を法寶の因と爲すとは、佛は一切法を說きたまひしが故なり。及び神通力を以ての故なり。法は則ち善根の因なりとは、衆生を田と爲し、善根を穀と爲す。是の如き法寶は、所化衆生の田に於て、善根の穀を成長せしむるが故なり。偈に曰く、

[九]法を具し亦た法を離る、　[一〇]藏の如く亦た[一一]雲の如し、
生法は[一二]法雨を雨らす、　故に是の如きの譬を成ず。　(四)

釋して曰く、此偈は重ねて前の義を顯はす、法を具し亦た法を離るとは、諸佛は一切の善法を具足するが故なり。又一切の不善法を遠離するが故なり。藏の如く亦た雲の如しとは、佛寶は藏の如く、法寶は雲の如し。問ふ、此は何の義を以てするや、答ふ、生法は法雨を雨らすが故に是の如き譬を成す。佛寶は能く法寶を出生すること大藏と相似し、法寶は能く一切衆生の善根を生長すること大雲と相似す。已に佛身無二の相を說けり。次に是の無上歸依を說かん。偈に曰く、

[一三]諸佛は常に衆生の　三染汚を救護し玉ふ。
所謂[一四]諸惑と[一五]諸惡行と、　及以[一六]生老死となり。　(五)

釋して曰く、此偈は略して救護の義を顯はす。諸佛は常に救護し玉ふとは、畢竟して救護し玉ふに由るが故なり。問ふ、何の法をか救護する、答ふ、衆生の三染汚、謂ゆる煩惱染汚、業染汚、生染汚なり。諸惑とは、即ち煩惱染汚なり、諸惡行とは、即ち業染汚なり、及以生老死とは、即ち

【七】此の偈は白法を佛身となし其の相は無二なることを顯示す。
【八】眞如(Tathatā)。
【九】此の偈は佛身は一切の白法を具し又一切の染法を遠離することを說示す。
【一〇】如藏(Ākaropamaṁ)。
【一一】如雲(Meghopamaṁ)。
【一二】雨法雨(Dharmāmbuvarṣa)。
【一三】此の偈は諸佛の救護の義を廣說す。
【一四】諸惑(Sarvakleśa)。
【一五】諸惡行(Sarvaduścarita)。
【一六】生死(Janmaraṇa)。

卷の第三

菩提品第十[一]

釋して曰く、已に菩薩の衆生を成熟することを說けり、次に菩薩の[二]一切種智を得ることを說かん。偈に曰く、

[三]一切の難已に行じ、　一切の善已に集り、
一切の時已に度り、　一切の障已に斷ず。　(一)

釋して曰く、此の偈は[四]一切種智の因圓滿することを顯す。一切の難已に行ずとは、無量百千種難行の行を具足し行じ、未だ曾て疲倦せざるに由るが故なり。一切の善已に集むとは、諸波羅蜜の自性の善根を具足し聚集するに由るが故なり。一切の時已に度るとは、長時の大劫阿僧祇を具足し經るに由るが故なり。一切の障已に斷ずとは、一切の大乘の障、謂ゆる諸地の所有微細の障を具足し斷ずるに由るが故なり。偈に曰く、

[五]一切種を成就する、　此れを卽ち佛身と爲す。
譬へば大篋の開かるれば、　衆寶の現ぜざる無きが如し。　(二)

釋して曰く、此の偈は一切種智の果圓滿にして三義の分別あることを顯す、一には[六]至得、二には自性、三には譬喩なり。一切種を成就すとは、謂ゆる至得分別なり。此より已後一切種智を成就するが故なり。此を卽ち佛身と爲すとは、謂ゆる自性分別なり。卽ち一切種智を說いて、佛の身體と爲すが故なり。譬へば大篋を開けば、衆寶の現ぜざる無きが如しとは、謂ゆる譬喩分別なり。不可思議の菩提分寶、皆な現前するが故なり。已に一切種智の佛身たることを說けり。次に此の身の無二の相を說かん。偈に曰く、

【一】菩提(Bodhi)。
【二】一切種智(Sarvajñatā)。
【三】此の偈は菩薩の一切種智の因圓滿することを顯示す。Ameyair duṣkaraśatair ameyaiḥ kuśalā cayaiḥ / Aprameyena kālena ameyāvaraṇakṣayāt // 譯文に「一切」とあるも、原文は四句共に「無量」となつて居る。
【四】一切種智(Sarvākārajñatā)。
【五】此の偈は菩薩の一切種智の果圓滿するに三義の分別あることを顯示す。
【六】至得(Samdāgama)。

して皆な圓滿することを得しむ。偈に曰く、

〔三〕善趣及び三乘、　大悲三品あり。
未來際を盡して、　是の如く衆生を熟す。（二二）

釋して曰く、此偈は大成熟の相に三種あるを顯示す。一には位大、謂く四位を窮め、善消及び三乘を安立す。二には品大、悲三品を極む、下は信行地、中は初地より七地に至る、上は八、九、十地なり。三には時大時節無邊にして未來際を盡す。菩薩は是の如く衆生を利益す、是を大成熟の相と名づく。成熟品究竟。

【三】此の偈は菩薩の大成熟の相に三種あることを明かにす。

釋して曰く、此の偈は羼提波羅蜜の衆生を成熟するを顯示す。若し他、不饒益の事を以て菩薩に來向せば、菩薩は彼に於て饒益の解を得、極忍辱を起す。何以故、彼の隨順に由つて我が忍波羅蜜をして、增長を得しむるが故なり。亦た是の忍を以て二世隨攝す。現在世に於て歸向を起さしめ、未來世に於て善根を種ゑしむ。偈に曰く、

二〇 久劫上勤を行じ、　利物心退無く、
一念善を生ぜしむ　況んや善無量を欲するをや。　（一九）

釋して曰く、此偈は毘梨耶波羅蜜の衆生を成熟するを顯示す。菩薩は億百千劫に於いて最上の精進を行じ、無邊の衆生を成熟せんが爲めに心退轉すること無し。是を以て精進して二世隨攝す。現在世に於いて但だ一念善心を生ずるを得せしむ、況んや未來に於いて無量の善根をして皆な增益を得しむるをや。偈に曰く、

二一 上自在禪を得、　染及び見慢を離る、
現在に歸向せしめ、　未來は善法增す。　（二〇）

釋して曰く、此偈は禪波羅蜜の衆生を成熟するを顯示す。菩薩所得の禪定は愛見慢等を遠離するが故に自在最上なり。是の禪定を以て二世隨攝す。現在世に於いて第一妙法に歸向せしめ、未來世に於いて一切の善根を增長せしむ。偈に曰く、

二二 知眞及び知意、　能く一切の疑を斷ず、
法に於いて恭敬して、　自他功德をして滿たしむ。　（二一）

釋して曰く、此の偈は般若波羅蜜の衆生を成熟するを顯示す。知眞とは、法を解して顚倒せざるが故なり。知意とは、衆生の心行を了達し彼の疑を斷ずるが故なり。是の般若を以て二世隨攝す、現在世に於いて大法に向ひ、深く恭敬を生ぜしめ、未來世に於いて彼の自身の功德及び他身の功德を

【二〇】此の偈は菩薩の精進波羅蜜の衆生を成熟することを顯示す。

【二一】此の偈は菩薩の禪定波羅蜜の衆生を成熟することを明かにす。

【二二】此の偈は菩薩の智慧波羅蜜の衆生を成熟することを顯示す。

菩薩は自愛を捨す、　　但だ他を愛せんが爲めの故なり。（一五）

釋して曰く、世人は自愛せんと欲すと雖も、尙ほ自ら利處に安ずる能はず、況んや能く他を愛し、他を利處に安んぜんや。菩薩は爾らず、自愛を捨するは但だ他を愛せんが爲なり。是の故に衆生を成熟するの勝彼に過ぐ。

問ふ、此の心勝を用ゐて云何んが成熟せん。偈に曰く、

[一七] 身財一切捨と、　　平等と及び無厭ともて、
乏しき所を充足せしめ、　　善根を安立す。（一六）

釋して曰く、此の偈は檀波羅蜜の衆生を成熟するを顯示す。檀に三種あり、一には資生檀、內外の身財一切捨つるが故なり。二には平等檀、諸の施田に於て高下を離るゝが故なり。三には無厭檀、勇猛に恒に施して疲倦せざるが故なり。是の三檀を以て二世隨攝す。現在世に於いて皆な充足せしめ、未來世に於いて善根を安立す。偈に曰く、

[一八] 常と性と及び滿と、　　自樂と不放逸と、
戒足に引入す、　　二果常に無盡なり。（一七）

釋して曰く、此偈は、尸羅波羅蜜の衆生を成熟するを顯示す。菩薩に五種の尸羅あり、一には常尸羅、生生常有の故に。二には自性尸羅、功用の心無くして眞實體に住するが故に。三には圓滿尸羅、十善業道皆な具足するが故に。十地經に說くが如し。四には自樂尸羅、恒に自ら愛樂するが故に。五には不放逸尸羅、念念無犯の故なり。是の五種の尸羅を以て二世隨攝す、現在世に於て戒品を安立し、未來世に於て依報二果の功德を絕ゆること無からしむ。偈に曰く、

[一九] 不益は益想を得、　　極忍は方便を解す。
彼をして隨順を起し、　　及び諸の善根を種ゑしむ。（一八）

【一七】此の偈は菩薩の布施波羅蜜の衆生を成熟することを明かにす。

【一八】此の偈は菩薩の持戒波羅蜜の衆生を成熟することを顯示す。

【一九】此の偈は菩薩の忍辱波羅蜜の衆生を成熟することを明かにす。

已に菩薩の自ら成熟を得るを說きぬ。次に菩薩の衆生を成熟するを說かん、偈に曰く、

[一三] 癰熟すれば則ち治するに堪ふ、　食熟すれば則ち噉ふに堪ふ、
衆生の熟するも亦た爾り、　二分は捨と用との故に。（一二）

釋して曰く二分とは、一には障分、二には治分なり。障熟すれば須らく捨つべきこと、癰の熟すれば須らく潰すべきが如し。治熟すれば須らく用ふべきこと、食の熟すれば須らく噉ふべきが如し、是を成熟依止と名づく。已に成熟依止を說けり、次に成熟の差別を說かん。偈に曰く、

[一四] 捨と普と勝と隨と善と、　得と常と漸とは八を爲す、
此の如き諸の成熟、　是れ差別種を說くなり。（一三）

釋して曰く、他を成熟するの相に八種あり。一には捨成熟、煩惱を滅せしむるが故に。二には普成熟、化するに三乘を以てするが故に。三には勝成熟、外道の法に過ぐるが故に。四には隨成熟、機に應じて說くが故に。五には善成熟、心恭敬の故に。六には得成熟、不倒に解せしむるが故に。七には常成熟、永く不退ならしむるが故に。八には漸成熟、次第に增長せしむるが故なり。已に成熟の差別を說けり。次に成熟の心勝を說かん。偈に曰く、

[一五] 子を利し及び親を利し、　已れを利す、三利勝なり。
菩薩は一切を利す、　彼の勝に過ること比無し。（一四）

釋して曰く、譬へば世人の自子を安樂にし、自親を安樂にし、自身を安樂にするが如し。此心最勝なり。菩薩は普く一切衆生を成熟せんと欲す、彼の三心に過ぐること比と爲すべからず、是故に菩薩は衆生を成熟して、其心最勝なり。

問ふ此勝云何んが成立する、偈に曰く、

[一六] 世間は自ら愛せず、　何に況んや能く他を愛せんや、

【一三】此の偈は菩薩の衆生を成熟するを明かにす。

【一四】此の偈は菩薩の衆生を成熟するに八種の相あることを顯示す。

【一五】此の偈は菩薩の衆生を成熟せんとする心は、世人の自子を安樂にし、自親を安樂にし、自身を安樂にせんとするにも勝れたることを說示す。

【一六】此の偈は菩薩の衆生を成熟する心の勝れたるは如何にして成立するかを明かにす。

[八]報淨善く隨順し、　極めて善惡の說に入り、
能く大般若を起す、　念成熟の相を說く。　（七）

釋して曰く、清淨の器を得る、是を念因と名づく。所聞に隨つて善惡の二義を說き、聞思修し已りて深く了して忘れず、是を念體と名づく。能く出世般若を生ずる是を念業と名づく。偈に曰く、

[九]二聚界圓滿し、　果起るは最上に依る、
世間第一を得、　力成熟の相を說く。　（八）

釋して曰く、福智二聚の種子充滿す、是を力因と名づく。能く最上の依止を得る、是を力體と名づく。世間第一隨意に成熟する、是を力業と名づく。偈に曰く、

[一〇]深く妙法の理を觀ず、　諸魔も奪ふ可らず。
能く異部の過を與ふ、　堅成熟の相を說く。　（九）

釋して曰く、妙法の道理は心觀察を作す、是を堅因と名づく。惡魔破旬も障礙する能はず、是を堅體と名づく。能く他部を與へて過失を作す、是を堅業と名づく。偈に曰く、

[一一]所有の善根聚、　勤に依りて能く發起す
惡を離れ及び善を修す、　支成熟の相を說く。　（一〇）

釋して曰く、彼れ善根聚を成熟す、是を支因と名づく。此因に依り能く上精進を發起す、是を支體と名づく。諸の不善を離れ樂んで勝善を修す、是を支業と名づく。偈に曰く、

[一二]此の如き九種の物、　自ら熟し亦た他を熟す、
善を增し法身を增す　世の極親者の如し。　（一一）

釋して曰く、欲等の九物は能く自ら成熟し亦た他を成熟す、常に一切の善根を增長し及び法身を增長す。此の二種の增に由るが故に世間第一の親者の如似し。

【八】此の偈は菩薩の念の因と體と業とを明かにす。

【九】此の偈は菩薩の力の因と體と業とを顯示す。

【一〇】此の偈は菩薩の堅の因と體と業とを明かにす。

【一一】此の偈は菩薩の支の因と體と業とを顯示す。

【一二】此の偈は前に說ける欲乃至支等は自ら成熟し亦他を成熟せしむることを說示す。

名づく。上大精進一切不思議の處究竟して疑無し、是を欲體と名づく。大乘の法に於いて災橫ある處則ち能く守護す、菩薩の所說は信心に領受す是を欲業と名づく。

偈に曰く、

[四]如來の禍智衆、　淨心は壞すべからず、
速に定智果を受く、　信成熟の相を說く。　（三）

釋して曰く、婆伽婆は是の如く廣く說きたまふ、是れを信因と名づく。不壞の淨を得る是れを信體と名づく。定智果を得る是れを信業と名づく。偈に曰く、

[五]善く六根を護し、　惡を離れて對治を起し、
諸の善法を樂修す、　捨成熟の相を說く。　（四）

釋して曰く、念倚等を以て善く六根を護る、是を捨因と名づく。不善の覺を離れ無間の道を起す、是れを捨體と名づく。一切の善法を恒に樂んで修習する是を捨業と名づく。偈に曰く、

[六]諸の衆生の苦を見、　哀憐して小心を離れ、
身に世間勝を受く、　悲成熟の相を說く。　（五）

釋して曰く、菩薩は衆生の苦を見る、是を悲因と名づく。極めて憐愍を起し小乘の心を遠離す、是を悲體と名づく。一切世間勝諸地を得退せざる是を悲業と名づく。偈に曰く、

[七]持性と數修習と、　極苦能く安忍すると、
善根恒に樂み進むと、　忍成熟の相を說く。　（六）

釋して曰く、耐忍を持すとは謂く、名門の數習して性を成ずるなり。是を忍因と名づく。能く極風寒等の苦を受く、是を忍體と名づく。勝れたる生處に隨つて恒に善法を修す、是を忍業と名づく。

偈に曰く、

【四】此の偈は菩薩の信の因と體と業とを明かにす。

【五】此の偈は菩薩の捨の因と體と業とを顯示す。

【六】此の偈は菩薩の悲の因と體と業とを明かにす。

【七】此の偈は菩薩の忍の因と體と業とを顯示す。

[三]能く不自在を安し、　常に利物を勤む、
[三]有に行じて怖畏無し、　勇猛獅子の如し。　（一〇）

釋して曰く、菩薩の神通に三種の大あり。一に自在大、衆生は煩惱に由るが故に自在を得ず、菩薩の智力は能く自在安置なるが故なり。二に歡樂大、常に勤めて衆生を利益し、一向に樂しむに由るが故なり。三に無畏大、三有中に行じ、極めて勇猛を得ること師子の如きが故なり。神通品究竟。

成熟品第九[一]

釋して曰く、已に諸菩薩の神通を說けり。諸菩薩は云何んが自ら成熟する。偈に曰く、

[二]欲と、信と、捨と、悲と、忍と、　念と、力と、堅と、支との具を、
應に知るべし自成熟なりと、　此九は皆な上品なり。　（一）

釋して曰く、菩薩は九種の自成熟あり、一には欲成熟、大法を希求するに由るが故なり。二には信成熟、淨心說者に由るが故なり。三には捨成熟、煩惱を滅離するに由るが故なり。四には悲成熟、衆生を憐愍するに由るが故なり。五には忍成熟、能く難行を行ずるに由るが故なり。六には念成熟、一切受持に由るが故なり。七には力成熟、皆な能く通達するに由るが故なり。八には堅成熟、惡魔外道の奪ふ能はざるに由るが故なり。九には支成熟、善分圓滿するに由るが故なり。此の如き九種は最上位を窮む、是を成熟の相と名づく、此九成熟の一一は有因、有體、有業なり、今當に說くべし。偈に曰く、

[三]友に近づくと聞と亦た思と、　勝勇と勝究竟と、
攝法と及び受法と、　欲成熟の相を說く。　（二）

釋して曰く、善友に親近し、正法を聽聞し、如法に思惟す。此三は能く大欲を起す、是を欲因と

【三】此の偈は菩薩の神通に三種の大あることを顯示す。

【一】成熟の原語は Paripāka にて、「熟すること」を意味す。

【二】此の偈は菩薩に九種の自成熟あることを顯示す。

【三】此の偈は菩薩の欲の因と體と業とを顯示す。

釋して曰く、此の偈の上半は戲業を顯示す。佛衆の中に於て諸定に遊戲し、最も自在を得。下半は化業を顯示す。化に三種あり。一に業化、工巧業處自在に化するが故に。二に隨化、他の所欲に隨つて自在に化するが故に。三に上化、兜率天等の勝土に住し、化するが故なり。是の三化を以て恒に利益を爲す。偈に曰く、

[九]智力普ねく自在、　刹土欲に隨つて現す、
無佛に佛を聞かしめ、　有佛の境に懸擲す。（七）

釋して曰く、此偈は淨業を顯示す。淨業に二種あり、一に淨刹土、二に淨衆生なり。上半の偈は淨刹土を明す、智自在にして他の所欲に隨つて能く水精瑠璃等の清淨世界を現するに由るが故なり。下半の偈は淨衆生を明す、無佛世界に於て能く佛を聞き淨信心を起し、有佛の處に生ぜしむるが故なり。已に業用を說きぬ。次に相應を說かん。偈に曰く、

[一〇]衆生力を成熟し、　諸佛に稱譽せらる
發語信ならざる無し、　是の如く相應を說く。（八）

釋して曰く、神通相應に三種あり、一に成生相應、譬へば鳥翅の初めて成就を得るが如し。二に稱譽相應、常に諸佛に讃歎せらるゝを得、三に信受相應、凡そ言說する所人皆な信受す。已に相應を說けり。次に住神通具を說かん。偈に曰く、

[一一]六智と及び三明と、　八解と八勝處と、
十遍と諸の三昧とは、　勇猛に神通を呑く。（九）

釋して曰く、菩薩の神通に住するに具さに六種の差別あり。一に六智、二に三明、三に八解脫、四に八勝處、五に十遍入、六に諸三昧なり。是の如きの六義は是れ神通具の差別するなり。已に住神通具を說けり。次に神通大を說かん。偈に曰く、

【九】此の偈の上半は淨刹土を明し、後半は淨衆生を明す。

【一〇】此の偈は菩薩の神通相應に三種あることを顯示す。

【一一】此の偈は菩薩の神通に住するに六種の差別あることを顯示す。

[四]三住の住は無比なり、　所住は善供養なり。
彼をして清淨を得せしむ　是れ神通の果を說くなり。　（三）

釋して曰く、神通に三種の果あり、一に勝住果、此住に三種あり、一に聖住、二に梵住、三に天住なり、所得無比無上なるが故に。二に善供養果、所住の處に隨つて世間衆生大に供養するが故に。三に他清淨果、能く供養する者をして清淨を得しむるが故なり。問ふ、神通に六種の業あり、一に自業、二に他業、三に光業、四に戲業、五に化業、六に淨業なり、此れ云何。偈に曰く、

[五]世の生成壞の事、　彼を見ること猶ほ幻の如し、
種々に他の欲する所、　自在に意に隨つて成す。　（四）

釋して曰く、此の偈の上半は自業を顯示す。諸の世界及び諸の衆生の若しくは成し若しくは壞するを見ること猶ほ幻の如きが故なり。下半は他業を顯示す。謂く、動地放光等の事は、他の所欲に隨つて自在に現するが故なり。十種の自在は[六]十地經に說くが如し。偈に曰く、

[七]神光惡趣を照らし、　信をして善道を生ぜしめ、
威力天宮を震ひ、　殿を動かし魔を怖れしむ。　（五）

釋して曰く、此偈は光業を顯示す。光業に二種あり、一に救苦、二に怖魔なり。上半の偈は救苦を明す、謂く、下は惡道衆生を照らし、信心を發して善道を生ずるを得しむるが故なり。下半の偈は怖魔を明す、謂く上は天宮を照らし、魔の宮殿を動かし、魔をして驚怖せしむるが故なり。偈に曰く、

[八]諸の三昧に遊戲するは、　僧中最も第一たり。
恒に三種の化を現じ　是を以て衆生を利す。　（六）

【四】此の偈は菩薩の神通に三種の果あることを顯示す。

【五】此の偈の上半は自業を顯示し、下半は他業を顯示す。

【六】十地經(Daśabhūmika)。

【七】此の偈の上半は救苦を說き、下半は惡道の衆生を照らすことを明らかにす。

【八】此の偈の上半は戲業を顯示し、後半は化業を顯示す。

如く處處に念轉し、諸念は唯だ是れ分別にして實有に非るを辯知するが故なり。問ふ、此の如く知り已つて何の位に進み得るや。答ふ、速に功德海を窮む、謂く是の如く佛果功德海を知り已つて能く速に彼岸を窮むるが故なり。眞實品究竟。

神通品第八 【一】

釋して曰く、眞實の義を說き已んぬ、次に菩薩の神通の相を顯はさん。偈に曰く、

【二】起滅と及び言音と、　心行と亦た先住と、
向彼と出離せしむと、　この六智は自在通なり。（一）

釋して曰く、起滅とは謂く、生死智の境なり、諸の衆生の生死を知るが故に。言音とは謂く、天耳智の境なり。彼の所起の言語に隨つて悉く聞知するが故に。心行とは謂く、他心智の境なり、能く他人の心行差別を知るが故に。先住とは謂く、宿命智の境なり。彼の先住の善惡所集を知るが故に。向彼とは謂く、如意智の境なり、彼の處處に隨つて往いて敎化するが故に。出離とは謂く、漏盡智の境なり、彼の衆生の出離の應不應を知るが故に。此の如きの六智は諸の世界の六義の差別に於て遍知無礙勇猛自在なり、是れを菩薩の神通の自性と名づく。

已に自性を說けり。次に修習を說かん。偈に曰く、

【三】第四極淨禪は、　無分別智の攝なり。
所立方便の如く、　此の淨は諸通に依る。（二）

釋して曰く、所依の禪の如く、所攝の智の如く、所立方便の如く、菩薩の作意修習は則ち最上の神通を得。

已に修通を說けり。次に得果を說かん。偈に曰く、

【一】神通の原語は Prabhāva にて、超自然的の力を意味するが故に、此に神通力と譯するのである。

【二】此の偈は菩薩の神通の相を顯示す。

【三】此の偈は菩薩の修習を顯示す。

釋して曰く、此偈は第二通達分位を顯はす、一切の諸義は唯だ是れ意言を性と爲すと解するに由り、則ち一切の諸義は悉く是れ心光なりと了す。菩薩は爾の時善く唯識に住すと名づく。彼より後法界を現見し、所有二相を了達し、即ち能執所執を解脱す。偈に曰く、

一〇 心外に物ある無く、　物無く亦た心無し、
二無を解するを以ての故に、　善く眞法界に住す。　（八）

釋して曰く、此偈は第三見道位を顯はす、彼が如く法界を現見するが故に、心外に所取の物ある無しと解す。所取の物無きが故に、亦た能取の心無し。所取能取の二相を離るゝに由るが故に、應に知るべし善く法界の自性に住すと。偈に曰く、

一一 無分別智力もて、　恒に平等に遍く行ず。
過聚體を壞するが爲めに、　藥の如く毒を除くが如し。　（九）

釋して曰く、此偈は第四修道位を顯はす。菩薩は第一義智に入り、轉依し已りて無分別智を以て恒に平等に行じ、及び遍處に行ず、何以故依他性に依止する熏習稠林の過聚の相を壞せんが爲めの故なり。問ふ、此智力云何。答ふ、譬へば一二阿伽陀の大藥の如く、能く一切の衆毒を除く、彼の力此の如し。偈に曰く、

一三 佛の善成の法を緣じ、　心根法界に安ず、
念唯だ分別を解し、　速に功德海を窮む。　（一〇）

釋して曰く、此偈は第五究竟位を顯はす。佛の善成法を緣ずとは、諸の菩薩、佛の善く成立したまふ一切の妙法の中に於て總聚緣を作すが故なり。問ふ、云何が總聚緣なる。答ふ、心根法界に安ずるなり、此れ第一義の智に入るを明むるが故なり。此慧に由り法界に安住す。是の故に此心を根と名づく。問ふ、此の後復た云何。答ふ、念唯だ分別を解す、謂く、此の後起の觀は、前觀の事の

【一〇】此の偈は菩薩の見道位を顯示す。
【一一】此の偈は菩薩の修道位を顯示す。
【一二】阿伽陀(Agada)は譯して藥といふ。
【一三】此の偈は菩薩の究竟位を顯示す。

云何んが緣起の體にして、　現見は異見を生ずるや。
闇い故に有を見ず、　亦た復た見あらず。（四）

釋して曰く、云何んが緣起の體にして、現見は異見を生ずるやとは、咄なるかな、世間は云何が、諸行は各緣より起ることを現見して、而かも此體に依つて、橫に異見を生じ、眼等の諸根の體は緣起に非ずと謂ふや。闇い故に有を見ず亦た復た見あらずとは、無明に由るが故なり。緣起の法は是れ有にして而も有を見ず、我の體は有ならずして而も復た見有るなり。

問ふ、若し爾らば云何が涅槃を得るや、偈に曰く、

[七] 生死と涅槃と、　無二にして少異無し、
善く無我に住するが故に、　生盡きて涅槃を得。（五）

釋して曰く、生死涅槃は二あること無く、乃至少異あること無し。何以故無我平等の故なり。若し人善く無我に住して善業を修せば、則ち生死便ち盡きて涅槃を得ん。

是の如く已に顚倒を遮せり。次に應に彼の對治を說くべし。偈に曰く、

[八] 福智は邊際無く、　生長し悉く圓滿す、
思法決定し已り、　義類の性に通達す。（六）

釋して曰く、此の偈は第一集大聚位を顯はす。福智無邊際とは、差別無類及び時節無邊に由るが故なり。生長し悉く圓滿すとは、菩薩は此の大聚を集めて、彼岸に到るが故なり。思法決定し已りとは、定心に依止して思惟するが故なり。義類の性に通達すとは、思ふ所の諸法の義類を解し、悉く意言を以て自性と爲るが故なり。偈に曰く、

[九] 已に義類の性を知り、　善く唯だ心光に住し、
法界を現見するが故に、　二相を解脫す。（七）

【七】此の偈は生死即涅槃の大乘の主張を歌ふ。

【八】此の偈は菩薩の第一集大聚位を顯示す。

【九】此の偈は菩薩の第二通達分位を顯示す。

起る時滅する時法界正に是の如く住するが故なり。非淨とは、自性無染にして淨を須ゐざるが故なり。非不淨とは、客塵去るが故なり。是の如きの五種二相無し、是れ第一義の相なること應に知る可し。

已に第一義を說けり。次に彼に於いて顚倒を起すを遮せん。偈に曰く、

[四]我見は [五]見我に非ず、　無相は無緣に非ず、
二に異し無我なるが故なり、　解脫は唯だ迷の盡くるなり。　（一一）

釋して曰く、我見非見我とは、我相無きが故なり。何以故(なんとなれば)我相は但だ是れ分別に由るが故なり。非無緣とは、煩惱習氣の所起五受陰を緣するが故なり。異二無我の故にとは、二とは我見及び五受陰を謂ふ、亦た是の二種を異にして我相あるに非ず、是の如き我見は但だ是れ迷謬にして我相の得べき無きが故なり。解脫唯迷盡とは、自身を緣じて解脫を起すも亦唯迷ひ盡くるのみにして、別に我あつて解脫と名づくる者無きが故なり。

已に妄見を遮しぬ。次に顚倒を訶せん。偈に曰く、

[六]云何んが我見に依り、　苦の自性を見ざる
迷苦と及び苦者と　法性と無性と。　（一二）

釋して曰く、云何が我見に依り苦の自性を見ざるとは、咄なるかな世間は云何んが我見に依止して、種種の迷を起し、諸行は是れ苦の自性なることを了達すること能はずして、而も常に隨逐するや。迷苦及び苦者、法性と無性とは、苦とは彼の苦觸を受くるを謂ひ、苦者とは謂く、苦斷せず我と苦と相應に非るを名づけて苦者と爲す。迷苦とは苦の自性を解せざるを謂ひ、迷苦者とは無我を解せざるを謂ふ。法性とは、唯法、人無我に由るが故なり。無性とは法に非らず。法無我に由るが故なり。偈に曰く、

【四】此の偈の目的は顚倒の邪見を斥破するにある。
【五】漢譯には「我見非見我」とあるも、梵本には na ca āt-madṛṣṭi svayam ātmalakṣaṇā とあるから、恐らくは「我見非自我」の誤寫であらう。
【六】此の偈の目的は顚倒を呵するにある。

彼に於て常に大忍を起し大悲を增長す。是の故に彼に於て惱心を起さず、亦た不隨順の事を作すを欲せず。

已に不忍心を遮せり。次に隨順大を顯はさん。偈に曰く、

[三]勝出と寂靜と、　功德と及び利物と、
次第に四義に依りて、　大に四種ありと說く。　(一一)

釋して曰く、諸の菩薩に四種の隨順大あり。一には勝出大、三有五趣の中に於て勝出するが故なり。般若波羅蜜經に說くが如く、須菩提よ、若し色の有法[若くは]無法[を說くは]是れ摩訶衍の一切世間天人阿修羅に勝出する能はざるが故なり。二には寂靜大、無住處涅槃に隨向するが故なり。三には功德大、福智の二聚增長するが故なり。四には利物大、常に大悲に依つて衆生を捨てざるが故なり。二利品究竟。

[一]眞實品第七

釋して曰く、已に隨順修行を說けり。次に第一義の相を說かん。偈に曰く、

[二]有に非ず亦た無に非ず　如に非ず亦た異に非ず
生に非ず亦た滅に非ず　增に非ず減に非ず
淨に非ず不淨に非ず　此五は二相無し、
是を第一義と名づく、　行者應に當に知るべし。　(一)

釋して曰く、無二の義是れ第一義なり。これを五種に示現す。非有とは、分別依他二相無きが故なり。非無とは、眞實の相あるが故なり。非如とは、分別依他の二相一實體無きが故なり。非異とは、彼の二種如にして異體無きが故なり。非生非滅とは、[三]無爲の故なり。非增非減とは、淨染二分

【三】此の偈は菩薩に四種の隨順大―勝出大・寂靜大・功德大・利物大―あることを顯す。

【一】眞實の原語は Tattva にて、第一原理又は眞理等を意味する。

【二】此の偈は非有・非無・非如・非異・非生・非滅・非增・非減・非淨・非不淨の八非をあげて第一義の相を顯示す。

【三】無爲の原語は Anabhi-saṃskṛtatva にて、造られざるもの、爲されざるものゝ義である。

樂滅は煩惱を斷ずるなり、　大悲は佛法を求むるなり。（七）

釋して曰く、習欲とは、欲界の人を謂ふ。大いに畏る可しとは、身心苦多く及び惡趣に向ふが故なり。有愛とは、色無色界の人を謂ふ。動にして倒とは、彼の無常なるを樂ふが故に動じ、苦なるを行ずるが故に倒る。樂滅とは、自利の人を謂ふ。斷煩惱とは、煩惱の取持に由つて則ち苦斷ぜず、離苦の爲の故に自ら煩惱を斷じて寂滅を求むるなり。大悲とは、利他の人を謂ふ。佛法を求むとは、此の人常に一切の佛法を求め、一切の衆生を利せんと擬するが故なり。偈に曰く、

[八]世間は自樂を求むるも、　樂ならずして恒に極苦なり。
菩薩は勤めて他を樂ましむ、　二利を上樂と成す。（八）

釋して曰く、世間は愚癡にして常に自樂を求むるも而も樂を得ず、反つて極苦を得。菩薩は爾らず、常に勤めて他を樂しましめ而も二利成就し、更に第一大涅槃の樂を得。此は是れ菩薩の勝隨順の差別なり、已に利他の隨順を說けり。次に此の行を以て衆生に迴向す。偈に曰く、

[九]異根は異處に於て、　異作は異行あり、
凡て是れ諸の所作は、　迴り以て衆生を利す。（九）

釋して曰く、菩薩の迴向は眼等の諸根に隨つて種種の處を行じ、種種の威儀業行を作し、衆生を利益す。凡そ是の諸行、若し事相應し、及以び相似せば彼れ皆一切衆生に迴向すること、[一〇]行清淨經中に廣く說くが如し。

已に迴向心を說けり。次に不忍心を遮せん。偈に曰く、

[一一]衆生は自在ならず、　常に諸の惡業を作す、
彼を忍び悲を増すが故に、　無惱亦た無違なり。（一〇）

釋して曰く、衆生は煩惱の爲に惱まされ心自在ならず、是の故に諸の惡業を作す。菩薩の智慧は

【八】此の偈は世間の愚癡を斥け、菩薩の二利を讃美す。

【九】此の偈は二利の行を以て衆生に迴向する旨を說く。

【一〇】行清淨經(Gocara Parisuddhi Sūtra)。

【一一】此の偈は菩薩の大忍と大悲とを說示す。

攝取し、十三種の隨順を以て利益す。一には善く說く、隨敎及び記心に由るが故なり。二には歸向せしむ、神通力に由るが故なり。三には入らしむ、[五]向し已つて能く正敎を信受せしむるに由るが故なり。四には調せしむ、入り已つて其の疑を斷ずるに由るが故なり。五には成ぜしむ、善根を成熟するに由るが故なり。六には住せしむ、敎授して心を住せしむるに由るが故なり。七には覺せしむ。智慧を得るに由るが故なり。八には解脫せしむ、神通等の諸の勝功德を得るに由るが故なり。九には集德、遍ねく福智を集むるに由るが故なり。十には生家、佛家に生ずるに由るが故なり。十一には得記、八地に受記するに由るが故なり。十二には受職、十地に受職するに由るが故なり。十三には如來知を得、佛地に入るに由るが故なり。

問ふ、此の如き隨順は云何が成立するや。偈に曰く、

[六]不倒と及び不高と、　無著と亦た通達と、
能忍と及び調順と、　遠去と亦た無盡と、
應に知るべし此の八義は、　彼の十三を成就すと。　（六）

釋して曰く、不倒とは、若し人已に性に住せば菩薩に機に隨つて僞に說法し、妄りに授けざるが故なり。不高とは、彼れ歸向する時神通を恃んで而も自ら高ぶらざるが故なり。無著とは、彼れ正法に入る時衆生に染せざるが故なり。通達とは、彼の疑網を斷ずるが故なり。能忍とは、善く彼を成熟するが故なり。調順とは、隨順敎授にして不調敎授に非るが故なり。遠去とは、生家等に隨順し遠去して他をして能く作さしめざるに非るが故なり。無盡とは、菩薩は衆生を利益する一切時に願盡くること無きが故なり。是を成就應知と名づく。

問ふ、此の隨順云何が勝差別なる。偈に曰く、

[七]習欲は大いに畏る可し、　有愛は動にして倒なり、

【五】向し已つてとは、歸向し了つての義である。

【六】此の偈は十三種の隨順は、如何にして成り立つやを說く。

【七】此の偈は菩薩の隨順の勝差別を明かにす。

得る時廣く一切衆生を利するの業成就するが故なり。

已に次第を說けり。次に自他の無差別を說かん。偈に曰く、

[二] 他と自との心平等なれば、　愛は則ち彼に於て勝る、
是の如きの勝相あり、　二利何ぞ差別せん。　（二）

釋して曰く、菩薩は他と自との心平等を得るに、或は信得に由る、謂く世俗の發心時なり。或は智得に由る、謂く第一義の發心時なり。菩薩は此の心ありと雖も然も他身を愛すること則ち自身に勝る。他に於て既に此の如きの勝想あれば、則ち復た何をか自利と爲し、何をか利他と爲すを分別せず、倶に別無きが故なり。

已に無差別を說けり。次に利他の勝を說かん。偈に曰く、

[三] 世に於て怨業無く、　彼を利して恒に自ら苦しむ、
悲性自然に起る、　是の故に利他は勝る。　（三）

釋して曰く、菩薩は諸の世間に於て久しく怨業を絕つ、是の故に恒に他利を成就せんが爲に自身に諸の勤苦を受く、大悲を體と爲すに由りて自然に起るが故なり。此の道理に由り則ち利他を勝と爲す。

問ふ、是の如き利他は云何が隨順するや。偈に曰く、

[四] 善く說くと歸向せしむると、　入らしむると亦た調せしむると、
成ぜしむると亦た住せしむると、　覺せしむると解脫せしむると、　（四）
集德と及び生家と、　得記と幷に受職と、
如來智を成するに至ると、　是[等]を以て群生を利す。　（五）

釋して曰く、三種の衆生は、下中上の性に住するを謂ふなり。菩薩は其の所住の如くにして之を

【二】此の偈は菩薩は自他の差別なく、心常に平等を持することを明かにす。

【三】此の偈は菩薩の利他行の勝れたる理由を明かにす。

【四】此の偈は菩薩の利他行は十三種に隨順することを明かにす。

偈に曰く、

〔二六〕大悲恒に意に在り、　　他苦を自苦と爲し、
自然に所作を作す、　　勸を待ちて深く慚羞す。　（二〇）

釋して曰く、諸の菩薩は〔二七〕大悲[阿]闍梨常に心中に在り。若し衆生の苦を受くるを見れば卽ち自ら苦を生ず。此の道理に由りて自然に所應の作を作す、若し善友の勸發を待たば深く極重の慚羞を生ず。偈に曰く、

衆生の擔を荷負す、　　懈怠は醜にして勝に非ず、
自他の縛を解かんが爲に、　　精進應に百倍すべし。　（二一）

釋して曰く。菩薩の發心は衆生の重擔を荷負す。若し去除緩なれば此は是れ醜事にして第一端正の衆生の爲に非ず。菩薩は應に思ふべし、若しくは自、若しくは他、種種の急縛あり、謂く惑業生ぜば、此の縛を解かんが爲に應に須らく百倍精進して彼の聲聞の所應の作を作すに過ぐべし。發心品究竟。

二利品第六

釋して曰く、已に發心を說けり。次に此の發心に依りて隨順し、自他の利行を修行するを說かん。偈に曰く、

〔一〕大依と及び大行と、　　大果とを次第に說き、
大取と及び大忍と、　　大義との三事成ず。　（一）

釋して曰く、大依とは、大菩提に依止して發心するが故なり。大行とは、自他を利せんが爲めに發行するが故なり。大果とは、無上菩提を得せしむるが故なり。其の次第の如し。大取とは、發心の時一切衆生を攝するが故なり。大忍とは、發行の時一切の大苦を忍ぶが故なり。大義とは、果を

〔二六〕此の偈は菩薩は怖畏によりて退心することなきを明す。

〔二七〕大悲阿闍梨(Mahākaruṇācārya)。

〔一〕此の偈は菩薩の自利々他の修行を明かにす。

釋して曰く、若し彼義を略示せば菩薩は他を愛すること自らを愛するに過ぐ。此に因るが故に自らの身命を忘れて他を利す。自利の爲に而も彼を損せず、此に由るが故に能く衆生に於て諸の惡業を絶つ。

已に不作護を得るを說けり。次に不退心を得るを說かん。偈に曰く、

〔二三〕法を觀ずること幻を知るが如く、　生を觀ずること苑に入るが如し。
若しくは成、若しくは不成、　惑苦皆怖無し。　（一七）

釋して曰く、菩薩の一切諸法を觀ずること幻を知るに似たるが如し。若し成就の時は煩惱に於て怖を生ぜず。菩薩の自生處を觀ずることは園苑に入るが如し。若し成就せざる時は苦惱に於て亦た怖を生ぜず。若し是の如くんば更に何の意ありてか菩提心を退せんや。

復た次に偈に曰く、

〔二四〕自嚴と及び自食と、　園地と戲喜と、
是の如きの四事あり。　悲者は餘乘に非ず。　（一八）

釋して曰く、菩薩は自の功德を以て自嚴と爲し、利他の歡喜を以て自食と爲し、作意の生處を以て園地と爲し、神通變化を以て戲喜と爲す。此の如きの四事は唯だ菩薩のみあり、二乘に於ては無し。菩薩既に此の四事あり、云何が當に菩提心を退すべき。

已に不退心を說けり。次に畏苦心を遮せん。偈に曰く、

〔二五〕極めて勤めて衆生を利す、　大悲を性と爲るが故なり。
無間は樂處の如し、　豈諸有の苦を怖れんや。　（一九）

釋して曰く、菩薩は大悲を以て體と爲す、是の故に極めて勤めて他を利し、阿鼻地獄に入ると雖も樂處に遊ぶが如し。菩薩是の如し、餘苦の中に於て豈怖畏を生じ、此の怖畏に因りて退心せんや。

〔二三〕此の偈の目的は菩薩の不退心を顯示するにある。

〔二四〕此の偈の目的は菩薩の自嚴と自食と園地と戲喜とを說くにある。

〔二五〕此の偈は菩薩は利他の爲めに苦を畏るゝの心なきことを明かにす。

能く世界を成ずるが如く、方便相應の發心も亦た是の如し。八相成道を示現し衆生を化するが故なり。此の如き等の及び二十二譬は彼の發心に譬ふること、聖者[一九]無盡慧經の説くが如し。廣説は應に知るべし。

[二〇]已に發心の譬喩を説けり。次に不發心の過失を説かん。偈に曰く、

利を思ひ及び方を得、　義を解し亦た實を證す、
是の如きは四時の樂、　寂に趣くは則便ち捨なり。　（一四）

釋して曰く、菩薩に四種の樂あり。一に思利の樂、謂く他を利益せんことを思惟するの時なり。二に得方の樂、謂く巧方便を得るに至る時なり。三に解義の樂、謂く大乘の意を解了する時なり。四に證實の樂、謂く人法無我を證する時なり。若し人衆生を棄捨し寂滅に趣向せば、應に知るべし、是の人は菩薩の是の如きの四樂を得ざることを。

[二一]已に不發心を呵しぬ。發心者は應に讃歎す可し。偈に曰く、

最初に大心を發し、　善く無邊の惡を護り、
善增悲增の故に、　樂喜、苦亦た喜なり。　（一五）

釋して曰く、若し菩薩初めに大菩提心を發さば、爾の時無邊の衆生に依り、即ち善護を得て諸惡を爲さず、此を作すが故に是の人惡道に退墮するの畏を遠離す。復た次に善及び增あるに由るが故に樂に於て常に喜び、悲及び增あるに由るが故に苦に於て常に喜ぶ、此を爲すが故に是の人善道を退失するの畏を遠離す。

[二二]已に發心を讃せり。次に此の發心に因りて不作護を得るを説かん。偈に曰く、

他を愛すること自愛に過ぎ、　己を忘れて衆生を利す、
自の爲に他を惱まず、　豈不善業を作さんや。　（一六）

【一九】無盡慧經（Aryākṣayamati-sūtra）。

【二〇】此の偈には不發心の過失を説き、衆生を棄捨して、寂滅に趣向する者の非を呵してある。

【二一】此の偈の目的は發心を讃美するにある。

【二二】此の偈の目的は、菩薩の本領を説くにあり。

心も亦た是の如し。一切の佛法能く生持するが故なり。譬へば淨金の如く、依相應の發心も亦た是の如し。利他安樂退壞せざるが故なり。譬へば新月の如く、勤相應の發心も亦た是の如し。一切の善法漸漸に增すが故なり。譬へば增火の如く、極依相應の發心も亦た是の如し。薪を益せば火熾にして積んで依極を行ずるが故なり。譬へば大藏の如く、檀波羅蜜相應の發心も亦た是の如し。財を以て周く給するも亦た無盡なるが故なり。譬へば寶篋の如く、尸波羅蜜相應の發心も亦た是の如し。功德の法寶彼より生ずるが故なり。譬へば大海の如く羼提波羅蜜相應の發心も亦た是の如し。諸來の違逆に心動ぜざるが故なり。譬へば金剛の如く、毘梨耶波羅蜜相應の發心も亦た是の如し。勇猛堅牢にして壞す可からざるが故なり。譬へば山王の如く、禪波羅蜜相應の發心も亦た是の如し。物の能く動ずる無く不亂なるを以ての故なり。譬へば藥王の如く、般若波羅蜜相應の發心も亦た是の如し。惑智の二病を此に能く破するが故なり。譬へば善友の如く、無量相應の發心も亦た是の如し。一切時中衆生を捨てざるが故なり。譬へば如意珠の如く、神通相應の發心も亦た是の如し。所欲に隨つて能く成就を現ずるが故なり。譬へば盛日の如く、攝相應の發心も亦た是の如し。日の穀を熟するが如く衆生を成熟するが故なり。譬へば美樂の如く、辯相應の發心も亦た是の如し。說法敎化して衆生を攝するが故なり。譬へば國王の如く、量相應の發心も亦た是の如し。能く王道不壞の因と爲るが故なり。譬へば倉庫の如く、聚相應の發心も亦た是の如し。福智寶財の聚る所なるが故なり。譬へば王路の如く、覺分相應の發心も亦た是の如し。大聖先づ行き餘は隨行するが故なり。譬へば車乘の如く、[一五]止觀相應の發心も亦た是の如し。二輪具足して安樂に去るが故なり。譬へば涌泉の如く、[一六]總持相應の發心も亦た是の如し。聞者多しと雖も法は無盡なるが故なり。譬へば喜聲の如く、[一七]法印相應の發心も亦た是の如し。解脫を求むる者の樂聞する所なるが故なり。譬へば河流の如く、自性相應の發心も亦た是の如し。[一八]無生忍道自然にして流れ作意せざるが故なり。譬へば大雲の

【一五】止の原語はŚamathaにて、心の海面が平靜に歸した狀態 absence of passion の狀態を云ふ。止には停止の義と止息の義と二義がある。前者は諦理に停止して動かざるを意味し、後者は一切の妄念を止息するを意味する。觀の原語は Vipaśyana にて、正智を以て觀達し眞如に契合するの義と、正智を以て一切の煩惱を殄滅するの義とがある。

【一六】總持の原語 Dhāraṇā は、善を持して失はず、惡を持して起らざらしむるの義である。

【一七】法印の原語 Dharmoddana とは、佛の正法たることを證明するものなるの義である。

【一八】無生忍道の原語は Anutpattika-dharma-kṣānti にて、無生無滅の理に安住して動かざるを云ふ。

〔一二〕生勝は四義に由り、　願大は十種あり、
勇猛にして恒に退かず。　淨依の二利生、　（九）
巧便餘地に進み、　出離善く思惟す。
此の如きの六の道理は　次第に六勝を成す。　（一〇）

釋して曰く、生勝は四義に由るとは、一に種子勝、大乘の法を信じて種子と爲すが故に。二に生母勝、般若波羅蜜を生母と爲るが故に。三に胎藏勝、大禪定樂を胎藏と爲るが故に。四に乳母勝、大悲長養を乳母と爲るが故なり。願大に十種ありとは、十大願を十地經に說けるが如く、此の願勝を發するが故なり。勇猛にして恒に退かずとは、能く難行を行じ、永く退かざるが故なり。淨依の二利生とは、一に自ら菩提に近づくを知り、二に利他の方便を知るが故なり。巧便餘地に進むとは、上地に趣き方便を得るが故なり。出離善く思惟すとは、諸地の中に住して建立する所の法を思惟するが故なり。問ふ、云何んが思惟する。答ふ、建立する所の分齊の如く分別して知るが故なり、是の分別を以て亦た無分別を知るが故なり。

已に發心を說けり。次に譬喩を說きて此の發心を顯はさん。偈に曰く、

〔一三〕地の如く淨金の如く、　月の如く增火の如く、
〔一四〕藏の如く寶篋の如く、　海の如く金剛の如し。　（一一）
山の如く藥王の如く、　友の如く如意の如く、
日の如く美樂の如く、　王の如く庫倉の如し。　（一二）
道の如く車乘の如く、　泉の如く喜聲の如く、
流の如く亦た雲の如し。　發心は譬へば是の如し。　（一三）

釋して曰く、此の如き發心と諸の譬喩と何の義か相似する。答ふ、譬へば大地の如く、最初の發

〔一二〕此の九・十の二偈は前偈の六勝を細說す。

〔一三〕以下の三偈は、二十二の譬喩をあげて、發心の意義を明かにす。

〔一四〕大藏の如く乃至藥王の如しまでの六喩は、布施波羅蜜相應發心、乃至般若波羅蜜相應發心の意義を明す。

復た次に、彼の四力の發心は總じて二種と爲す。一には不堅發、謂く友力によりて發心するが故なり。二には堅發、謂く因等三力によりて發心するが故なり。

已に世俗の發心を說けり。次に第一義の發心を說かん。偈に曰く、

九　正遍知に親近し、　善く福智聚を集め、
法に於て分別無ければ　最上の眞智生ず。　（六）

釋して曰く、第一義の發心は三種の勝あるを顯はす。一は敎授勝、正遍知に親近するが故なり。二は隨順勝、善く福智聚を集むるが故なり。三は得果勝、無分別智を生ずるが故なり。此の發心を歡喜地と名づく、歡喜勝に由るが故なり。

問ふ、此の勝は何を以て因と爲るや。偈に曰く、

一〇　諸法と及び衆生と、　所作と及び佛體と、
此の四に於て平等なるが　故に歡喜勝を得。　（七）

釋して曰く、四平等とは、一は法平等、法無我に通達するに由るが故なり。二は衆生平等、自他平等に至得するに由るが故なり。三は所作平等、他をして苦を盡すに自ら苦を盡すが如からしむるに由るが故なり。四は佛體平等、法界と我と別無く、決定して能く通達するに由るが故なり。

已に勝因を說けり。次に勝差別を說かん。偈に曰く、

一一　生位と及び願位と、　亦た猛と亦た淨依と、
餘巧と及び餘出となり、　六勝復た是の如し。　（八）

釋して曰く、第一義の發心は復た六勝あり。一は生位勝、二は願位勝、三は勇猛勝、四は淨依勝、五は餘巧勝、六は餘出勝なり。

問ふ、此の六は如何んが勝なる。偈に曰く、

【九】此の偈は第一義の發心を顯示す。

【一〇】此の偈は第一義發心の歡喜勝と謂はるゝ所以を明す。

【一一】此の偈は第一義發心の勝に六種の差別あることを明す。

已に差別を說けり。次に當に廣く釋すべし。問ふ、此の如き發心は何を以て根と爲す、何の所にか依止する、何か所信なる、何か所緣なる、何か所乘なる、何か所住なる、何等か障難なる、何等か功德なる、何等か自性なる、何の所にか出離する、何れの處にか究竟する。偈に曰く、

[六]大悲と利物と、　大法と將た種智と、
勝欲と亦た大護と、　受障と及び增善と、　(三)
福智と修度と、　及び以地地滿と、
初根より後境に至る、　隨次に解す應に知るべし。　(四)

釋して曰く、菩薩の發心は大悲を以て根と爲し、利物を以て依止と爲し、大乘の法を以て所信と爲し、種智を以て所緣と爲す、彼を求めんが爲の故なり。勝欲を以て所乘と爲す。無上乘を欲するが故なり、大護を以て所住と爲す、菩薩戒に住するが故なり。受障を以て難と爲す、異乘心を起すが故なり。增善を以て功德と爲し、福智を以て自性と爲し、諸度を習ふを以て出離と爲し、地滿つるを以て究竟と爲す、地地に由りて方便を勸め、彼彼と相應するが故なり。

此の如く已に廣く分別せり。次に[七]受世俗の發心を說かん。偈に曰く、

[八]友力と及び因力と、　根力と亦た聞力との、
四力は總じて二發とす、　不堅と及以堅となり。　(五)

釋して曰く、他說に從つて覺を得て發心するが若きは是れを受世俗發心と名づく。此の發心は四力に由る。一には友力發心、或は善知識を得て隨順するが故なり、二には因力發心、或は過去の曾つての發心を性と爲るが故なり。三には根力發心、或は過去曾つて諸の善根を行じ圓滿する所なるが故なり。四には聞力發心、或は處處の說法の時無量の衆生菩提心を發すが故に、又善根を習する者或は現在如法に常に聞き受持する等の故なり。

【六】此の二偈は菩薩の發心の根・依止・所信・所緣・所乘・所住・障難・功德・自性・出離及び究竟の何たるかを顯示す。

【七】受世俗(Samādāna-sāṃketika.)。

【八】此の偈は世俗の發心を顯示す。

卷の第二

發心品第五[1]

釋して曰く、[2]是の如く已に菩薩の種性を分別せり。次に菩薩の發菩提心の相を分別せん。偈に曰く、

[3]勇猛と及び方便と、　利益と及び出離と、
四大の三功德は、　二義の故に心起る。　(一)

釋して曰く、菩薩の發心に四種の大あり。一には勇猛大、謂く弘誓精進の甚深難作にして長時に隨順するが故なり。二には方便大、謂く弘誓鉀せられ已り、恒時に方便して精進を勤むるが故なり。三には利益大、謂く一切時に自他の利を作すが故なり。四には出離大、謂く無上菩提を求むるが爲の故なり。

復た次に、此の四種の大は三種の功德を顯示す。第一、第二の大は丈夫所作の功德を作すを顯示し、第三の大は大義の功德を作すを顯示し、第四の大は受果の功德を顯示す。此の三功德は二義を以て緣と爲す。所謂無上菩提及び一切衆生は、此の思に由るが故に菩提心を發す。

已に發心の相を說けり。次に發心の差別を說かん。偈に曰く、

[4]信行と[5]淨依と、　報得と及び無障と、
發心は諸地に依りて、　差別するに四種あり。　(二)

釋して曰く、菩薩の發心は諸地に依りて四種の差別あり。一には信行發心、謂く信行地なり。二には淨依發心、謂く前七地なり。三には報得發心、謂く後三地なり。四は無障發心、謂く如來地なり。

【一】發心の原語は Cittotpāda である。
【二】大正藏經には「如是」を「如說」に作るも、そは誤寫なること明かなり。
【三】此の偈は菩薩の發心に、四種の大あることを說示す。
【四】此の偈は菩薩の發心に四種の差別あることを明す。
【五】淨依の原語は Adhyāśaya にて淨き依り處、淨き住所などを意味する。

せしむ。二知とは謂く諸の凡夫と及び諸の聲聞となり。若し是の如きを得ば、彼の諸の二人は、則ち知る自性々德圓滿の性最も殊勝たることを。

問ふ、云何が勝なる。偈に曰く、

菩提樹を增長し、　樂を生じ及び苦を滅し、
自他の利を果と爲す、　此の勝は[一七]吉根の如し。　（一三）

釋して曰く、是の如きの種性は能く極廣の功德大菩提樹を增長し、能く大樂を得、能く大苦を滅し、能く自他の利樂を得、以て大果と爲す。是の故に此の性最も第一たり。譬へば吉祥樹根の如し、菩薩の種性も亦た爾なり。種性品究竟。

【一七】此の偈は甚深廣大なる大乘の法を演說して、凡夫及び聲聞の徒をして、大法を信解せしめ、其の性德をして、最勝圓滿ならしむることを明す。

【一八】吉根とは吉祥樹根（Bo-dhi-vṛkṣa）の略語。

し、三には一切煩惱障智障の得淸淨を依止と爲し、四には一切神通變化を依止と爲すなり。
已に種性の金性譬を說けり。次に種性の寳性譬を說かん。偈に曰く、

〔一三〕譬へば妙寳の性の如し。　　四種の成就の因たり。
大果と及び大智と、　　大定と大義との故なり。　（一〇）

釋して曰く、妙寳性は四種の成就の依止なり。一には眞成就の依止、二には色成就の依止、三には形成就の依止、四には量成就の依止なり。菩薩の種性も亦た爾なり。一には大菩提の因と爲り、二には大智の因と爲り、三には大定の因と爲る。定とは心住に由るが故なり。四には大義の因と爲る。無邊の衆生を成就するが故なり。
已に廣く性位を分別せり。次には無性位を分別せん。偈に曰く、

〔一四〕一向に惡行を行じ　　普ねく諸の白法を斷ず。
解脫の分あること無く、　　善少くして亦た無因なり。　（一一）

釋して曰く、無般涅槃の法とは是れ無性位なり。此に略して二種あり。一には〔一五〕時邊般涅槃法、二には〔一六〕畢竟無涅槃法なり。時邊般涅槃法とは四種の人あり、一には一向に惡行を行ず。二には普く諸の善法を斷ず。三には解脫分の善根無し。四には善根具足せず。畢竟無涅槃法とは、無因の故に彼れ般涅槃の性無し。此れ所謂但だ生死を求めて涅槃を樂はざるの人なり。
已に無性を說けり。次には令入を說かん。偈に曰く、

廣く深大の法を演べ、　　信ぜしめ極忍せしめ、
大菩提を究竟せしめ、　　二知をして二性勝たらしむ。　（一二）

釋して曰く、廣く深大の法を演ぶとは、利他の爲の故なり。謂く無智の者には大信を得せしめ、已に大信の者には極忍を成就して能く行不退ならしめ、已に極忍の者には究竟して無上菩提を成就

〔一三〕此の偈は菩薩の種性の九種の差別中、第九の寳譬の四義を明す。
〔一四〕此の偈は無性位として無般涅槃法（Aparinirvāṇadharma）の二方面を說く。
〔一五〕Tatkālaparinirvāṇadharma
〔一六〕Atyantāparinirvāṇadharma

遇緣次第の如し、　品類に四種あり。(六)

釋して曰く、菩薩の種性の品類は略して說くに四種あり。一には決定、二には不定、三には不退、四には退墮、其の次第の如し。決定とは遇緣で退、不定とは遇緣退墮なり。

已に種性の品類を說けり。次には種性の過失を說かん。偈に曰く、

〔一〇〕應に知るべし菩薩の性は、　略して說くに四失ありと。
習惑と惡友と、　貧窮と屬他との故なり。(七)

釋して曰く、菩薩の種性の過失は略して說くに四種あり。一には習惑、功德を行ぜず煩惱を多く行ずるが故なり。二には惡友、善知識に離れ弊人に狎るゝが故なり。三には貧窮、須ゆる所の衆具皆乏少なるが故なり。四には屬他、人に繫屬して自在ならざるが故なり。

已に種性の過失を說けり。次に種性の功德を說かん。偈に曰く、

〔一一〕功德亦た四種あり、　惡道に墮すと雖も、
遲入と復た速出と、　苦薄と及び悲深となり。(八)

釋して曰く、菩薩の種性は前の如く過失ありと雖も、若し惡道に墮せば應に知るべし中に於て復た四種の功德ありと。一には遲入、數墮せざるが故なり。二には速出、久しく住せざるが故なり。三には苦薄、逼惱輕きが故なり。四には悲深、衆生を哀愍し亦た成就するが故なり。

已に種性の功德を說けり。次に種性の金譬を說かん。偈に曰く、

〔一二〕譬へば勝れたる金性の如く、　出生に四種あり。
諸善及び諸智、　諸淨、諸通の故なり。(九)

釋して曰く、勝れたる金性は、所出に四義あり、一には極多、二には光明、三には無垢、四には調柔なり。菩薩の種性も亦た爾り。一には無量の善根を依止と爲し、二には無量の智慧を依止とな

【一〇】此の偈は菩薩の種性の九種の差別中、第六の過失の四義を明す。

【一一】此の偈は菩薩の種性の九種の差別中、第七の功德の四義を明す。

【一二】此の偈は菩薩の種性の九種の差別中、第八の金譬の四義を明す。

善根の普攝に由り、三には善根の大義に由り、四には善根の無盡に由る。何以故、諸の聲聞等の善根は是の如く明淨に非るが故なり。一切人の善根は力無畏等を攝するに非るが故なり。餘人の善根は他利無きが故なり。餘人の善根は涅槃の時盡くるが故なり。菩薩の善根は爾らず、此れを因と爲すに由り種性最勝なり。

已に種性の最勝を説けり。次に種性の自性を説かん。偈に曰く、

[七] 性種と及び習種と、　所依と及び能依と、
應に知るべし有非有とは、　功德度の義の故なることを。（四）

釋して曰く、菩薩の種性に四種の自性あり。一には性種の自性、二には習種の自性、三には所依の自性、四には能依の自性なり。彼れ其の次第の如し。復た次に、彼の有とは因體有なるが故なり。非有とは果體非有なるが故なり。問ふ、若し爾らば云何が性と名づくるや。答ふ、功德度の義の故なり。度とは功德を出生するの義なり。此の道理に由り是の故に性と名づく。

已に種性の自性を説けり。次に種性の相貌を説かん。偈に曰く、

[八] 大悲と及び大信と、　大忍と及び大行と、
若し此の如き相あらば、　是れを菩薩の性と名づく。（五）

釋して曰く、菩薩の種性に四種の相貌あり。一には大悲を相と爲す、一切の苦衆生を哀愍するが故なり。二には大信を相と爲す、一切大乘の法を愛樂するが故なり。三には大忍を相と爲す、能く一切難行の行に耐ゆるが故なり。四には大行を相と爲す、遍く諸の波羅蜜多を行ずる自性善根の故なり。

已に種性の相貌を説けり。次に種性の品類を説かん。偈に曰く、

[九] 決定と及び不定と、　不退と或は退墮と、

【七】此の偈は菩薩の種性の九種の差別中、第三の自性の四義を明す。

【八】此の偈は菩薩の種性の九種の差別中、第四の相貌の四義を明す。

【九】此の偈は菩薩の種性の九種の差別中、第五の品類の四義を明す。

有と勝と性と相と類と、　過惡と及び功德と、
金譬と寶譬と、　九種各四種あり。　(一)

釋して曰く、種性に九種の差別あり。一には有體、二には最勝、三には自性、四には相貌、五には品類、六には過惡、七には功德、八には金譬、九には寶譬なり。是の如きの九義一々各四種の差別あり。此の偈には總じて擧げ、餘の偈には別に釋せん。此の中先づ有體を分別せん。[三]偈に曰く、

[四]界に由り及び信に由り、　行に由り及び果に由る、
此の四の差別に由り、　應に有性の體を知るべし。(二)

釋して曰く、種性の有體は四種の差別に由る。一には界の差別に由り、二には信の差別に由り、三には行の差別に由り、四には果の差別に由る。界の差別に由るとは、衆生に種々の界無量の差別あり、[五]多界修多羅の說の如し、界の差別に由るが故に應に知るべし三乘の種性に差別ありと。信の差別に由るとは、衆生に種々の信の得可きあり、或は因力有つて起り、或は緣力有つて起る。能く三乘に於て一乘を隨信し、一切を信ずるに非ず。若し性の差別無ければ則ち亦た信の差別無けむ。行の差別に由るとは、衆生の行を行ずるに、或は能く進むあり、或は能く進まざるあり、若し性の差別無ければ則ち亦た行の差別無けむ。果の差別に由るとは、衆生の菩提に下中上あり。十果相似するが故なり。若し性の差別無ければ、則ち亦た果の差別無けむ。此の四の差別に由り、是の故に應に種性の有體を知るべし。

已に種性の有體を說けり。次に種性の最勝を說かん。偈に曰く、

[六]明淨と及び普攝と、　大義と亦た無盡と、
善く四勝あるに由り、　種性第一を得。(三)

釋して曰く、菩薩の種性は四種の因緣に由り最勝と爲すを得。一には善根の明淨に由り、二には

【二】此の偈は種性に九種の差別あることを明かにす。

【三】次の偈は種性の九種の差別中、第一有體の四義を明す。

【四】界の原語は Dhātu にて、構成的要素又は本質或は實體を意味す。信の原語は Adhimukta にて、信賴又は信任を意味す。

【五】Bahu-dhātu-sūtra

【六】此の偈は種性の九種の差別中、第二最勝の四義を明かにす。

は、謂く神通の善根、無餘涅槃に至るも亦た無盡なるが故なり。

已に歸依の勝義を說けり。次には歸依の差別を說かん。偈に曰く、

[三] 悕望と及び大悲と、　種智と亦た不退と、
三出と及び二得と、　差別に六種あり。（一一）

釋して曰く、歸依の差別に六種あり。一には自性、二には因、三には果、四には業、五には相應、六には品類なり。悕望を自性と爲す、至心に佛體を求むるが故なり。大悲を因と爲す、一切衆生の爲の故なり。種智を果と爲す、無上菩提を得るが故なり。不退を業と爲す、利他難行の行を行じ不退不屈なるが故なり。三出を相應と爲す、三乘出離の行を具足するが故なり。二得を品類と爲す、世俗にして法性を得ると、麁細の差別を得るとの故なり。

已に功德の差別を說けり、次に行の差別を說かん。偈に曰く、

歸依に大義あり、　功德聚增長し、
意悲世間に遍く、　廣く大聖の法を流す。（一二）

釋して曰く、大義とは自他の利行を謂ふ、自利の行とは、謂く功德增長するなり。復た多種あり、若しくは思度、若しくは數數、若しくは時節、皆な量あること無し。思度す可からざるに由るが故なり。數知す可からざるが故なり、畢竟恒に行ずるに、時に分齊無きが故なり。他利の行とは、作意と及び悲と一切衆生に遍きが故なり。廣く方便を勸めて大聖の法を流すが故なり。大聖の法とは、大乘の法なるが故なり。歸依品究竟。

種性品第四 [一]

釋して曰く、已に歸依の義を說けり。次に種性の差別を說かん。偈に曰く、

【三】此の偈は歸依の功德に六種の差別を明かにす。

【一】種性の原語 Sotra は、種族・民族・家族を意語す。

の波羅蜜に入るを得。二には常に處處に經中に大菩提分寶を見る、法を忘れざるに由るが故なり。三には常に如來の身口意の蜜を持す。四には常に能く無邊の衆生を利益す。

已に勇猛の義を說けり、次に得果の義を說かん。偈に曰く、

一〇

福德と及び尊重と、　有樂と亦た苦滅と、
證樂と證法陰と、　習盡と有滅捨と。　（九）

釋して曰く、大乘の歸依は此の八果を得。一には信解の時大福德聚を得。二には發心の時三有尊重を得。三には故意に受生する時三有の中の樂を得。四には自他平等を解する時、大苦聚の滅を得、亦た一切衆生の苦力を滅するを得。五には無生忍に入る時、最上樂を覺證す。六には菩提を得る時、大法陰を證す。法陰とは所謂法身なり。此の如き法身を名づけて大と爲し、名づけて勝と爲し、名づけて常と爲し、名づけて善聚と爲す。是れ無邊の修多羅等の法藏なるが故に大と名づけ、一切法の中最上なるが故に勝と名づけ、永く盡くることあること無きが故に常と名づけ、力無畏等の善法積聚を爲すが故に善聚と名づく。七には熏習聚は盡く永く滅して餘無きを得。八には有を得て捨を滅することを得。有捨とは生死に任せざるなり、滅捨とは涅槃に任せざるなり。

已に得果の義を說けり。次に不及の義を說かん。偈に曰く、

一一

大體と及び大義と、　無邊と及び無盡とは、
善く世出世の、　神通を成熟するに由るが故なり。　（一〇）

釋して曰く、大乘の歸依とは、所有善根は四因に由るが故に一切聲聞辟支佛の及ぶ能はさる所なり。一には大體、二には大義、三には無邊、四には無盡なり。問ふ、此れ云何。答ふ、大體とは、謂く世間の善根、已に二乘を超過するを得るが故なり。大義とは、謂く出世の善根、二乘の出世は但だ自利なるが故なり。無邊とは、謂く成熟の善根、能く無邊の衆生を成熟するが故なり。無盡と

【一〇】此の偈は大乘の歸依の最勝なる理由一たる得果の義を明かにせんが爲めに、八つの果を擧ぐ。

【一一】此の偈は大乘の歸依の最勝なる理由の一たる不及の義を明かにす。

復た次に、善生は勇猛に由るが故に恒に勝身を得。偈に曰く、

[七]妙相と成生力と、　大樂と大方便と、
此の如きの四成就、　是を名づけて勝身と爲す。　（六）

釋して曰く、菩薩の身勝に四種あり。一には色勝、妙相嚴身を得、轉輪王等の相に勝るが故なり。二には力勝、成熟の衆生は自在力を得るが故なり。三には樂勝、寂滅上品の佛智は無邊の樂を得るが故なり。四には智勝、一切衆生を救ふ大巧方便を得るが故なり。此の四成就は、是を佛子の善生と名づく。所謂色成就、力成就、樂成就、智成就なり。

復た次に、此の勇猛に由り、王子と相似するを得。偈に曰く、

[八]光授と法自在と、　巧說と善治攝と、
此の四因に由るが故に、　佛種は則ち斷ぜず。　（七）

釋して曰く、四の因緣に由りて王種は斷ぜず。一には入位受職、二には增上無違、三には善能決判、四には分明賞罰なり。善生佛子も亦た爾り。一には光授を蒙る、謂く一切諸佛と大光明と受職せしむるが故なり。二には法自在、謂く一切法の中に於て智慧自在にして他に違無きが故なり。三には能巧說、謂く佛衆生に對し、善く說法するが故なり。四には善治罰、謂く學戒者に於て過惡能く治し、功德能く攝するが故なり。

復た次に、此の勇猛に由り、大臣と相似するを得。偈に曰く、

[九]入度と見覺分と、　持蜜と利衆生と、
此の四因に由るが故に、　大臣に似るを得。　（八）

釋して曰く、四種の因あり、是れ大臣の功德なり。一には王の禁宮に入る。二には王の妙寶を見る。三には王の蜜語を秘す。四には賞賜を自在にす。勇猛の菩薩も亦た爾なり。一には常に善く諸

【七】此の偈は同上の理由により、諸の菩薩は恒に勝身を得ることを明かにす。

【八】此の偈は同上の理由により、菩薩は恒に王子と相似する四種の因緣を說く。

【九】此の偈は同上の理由により、菩薩は恒に大臣と相似する四種の因緣を說く。

するが爲の故なり。他利とは所謂願行なり。願行は是の名聞の因に由るが故なり。自利とは所謂大義なり。大義は是の自體の果に由るが故なり。

前に四義を說けり、今當に先づ一切遍の義を說くべし。偈に曰く、

[四]衆生遍と、乘遍と、　　智遍と、寂滅遍と、
是れを智慧者は、　　四種一切遍と名づく。　　（三）

釋して曰く、大乘の歸依には四種の一切遍あり。一には衆生一切遍、一切衆生を度せんと欲するが故なり。二には乘一切遍、善く三乘を解するが故なり。三には智一切遍、二無我に通達するが故なり。四には寂滅一切遍、生死涅槃は體是れ一味にして過惡と功德とを分別せざるが故なり。

已に一切遍の義を說けり。次に勇猛の義を說かん。偈に曰く、

[五]佛の菩提を悕望し、　　不退なるは難行の行なり。
諸佛の平等覺は、　　勇猛の勝れたるもの三あり。　　（四）

釋して曰く、大乘の歸依に三種の勝勇猛あり。一には願勝勇猛、佛に歸依する時大菩提を求め、多く歡喜を生じ勝功德を知るが故なり。二には行勝勇猛、修行を起す時不退不屈にして難行を行ずるが故なり。三には果勝勇猛、佛を成ずるに至る時一切諸佛と平等に覺するが故なり。

復た次に此の勇猛に由り、彼の諸佛子は恒に善生を得ん。偈に曰く、

[六]發心と智度と、　　聚滿と亦た大慈とは、
種子と及び生母と、　　胎藏と乳母との勝なり。　　（五）

釋して曰く、菩薩の善生に四義あり。一には種子勝、菩提心を以て種子と爲るが故なり。二には生母勝、般若波羅蜜多を以て生母と爲るが故なり。三には胎藏勝、福智の二聚の住持を以て胎藏と爲るが故なり。四には乳母勝、大悲長養を以て乳母と爲るが故なり。

【四】此の偈は大乘の歸依の最上第一なる四つの理由の中の第一の理由たる一切遍の義を明かにす。

【五】此の偈は三種の勇猛の義をあげて、大乘の歸依の勝れたるを顯示す。

【六】此の偈は大乘の歸依の最勝なる理由の一たる勇猛の義の故に諸の菩薩は恒に善生を得ることを明かにす。

已に邪思を遮せり。次に惡意を遮せん。偈に曰く、

二六 惡意と自性惡と、　不善は應に起すべからず。
況んや善處に移すをや、　應に大過は捨つべきが故なり。　（一七）

釋して曰く、惡意とは是れ憎嫉心なり。自性惡とは、此心は是れ自性罪なり、倘ほ過失法中に於て起す可からず、何に況んや非過法中に於て起すをや。是の故に急に應に須らく捨つべし、そは大過患なるべきが故なり。成宗品究竟。

歸依品第三[1]

釋して曰く、此の如く已に大乘を成立せり。次に大乘に依りて勝歸依を攝せん。偈に曰く、

二 若し人三寶に歸するは、　大乘の歸第一なり。
一切遍と、勇猛と、　得果と、不及との故なり。　（一）

釋して曰く、一切の歸依三寶の中應に知るべし、大乘の歸依を最も第一と爲すと。何以故、四種の大義自性勝なるが故なり。何をか四種なる。一には一切遍の義、二には勇猛の義、三には得果の義、四には不及の義なり。此の義は後に當に說くべし。此の四義多く留難あるに由り諸の歸依は或は能、不能なり、能者は勝れたり。

已に歸依の勝を說けり。次に勝歸依を勸めん。偈に曰く、

三 起し難く亦成し難し、　應に須らく大志意なるべし、
自他の利を成ぜんが爲めに、　當に勝歸依を作すべし。　（二）

釋して曰く、難起とは所謂勝願は弘誓に由るが故なり。難成とは所謂勝行は無量劫を經るに由るが故なり。此の如き難に由り應に須らく大志意を發すべし。何以故、他利と自利とを成就せんと欲

【二六】此の偈は惡意を以て大乘を難ずる者を誡しむ。

【一】歸依の原語は Śaraṇa-gamana にて、直譯すれば庇護の下に行く、避難所に行く、などの意である。

【二】此の偈は一切の歸依三寶の中、大乘の歸依を最上第一となすことを主張す。

【三】此の偈は最勝第一の歸依を勸說す。

ければ解脱を得とは、若し汝、何が故に獨り深義を解し能く解脱を得るや、非思量の人能く解脱を得るやと言はゞ、是の如き怖畏を起すは、應に爾るべからず。

是の如く已に此の法句を怖畏するを遮せり。次に不信を以て大乘を成立せん。偈に曰く、

　小なる[二二]信、界、伴に由りて、　深大の法を解せず、
　汝不解に由るが故に、　我れ無上の乘を成ず。　（一四）

釋して曰く、小信とは、狹劣なる信解の故なり。小界とは、阿梨耶識中に小種子を熏習するが故なり。小伴とは、相似せる信、界を眷屬とするが故なり。此の三若し小なれば、則ち別に大乘ありと信ぜず。此の不信に由れば則ち我が立つる所、是れ無上の法なるを成ず。

已に大乘を成立することを説けり。次に大乘を誹毀するを遮せん。偈に曰く、

　[二三]聞に隨つて覺を得、　未た聞かずんば愼んで毀る勿れ。
　無量の餘未だ聞かず、　謗る者は癡業を成ず。　（一五）

釋して曰く、汝少聞に隨つて覺悟あることを得、應に聞に隨つて復た誹毀すべからず。汝未聞に於て信無きは爾る可し。何以故、善を積まざるが故なり。未聞の者は多く愼んで謗毀する勿れ。汝簡別無くして若し謗毀を生ぜば、更に癡業を増さん、前聞を壞するが故なり。

已に謗毀を遮せり。次に邪思を遮せん。偈に曰く、

　[二四]文の如く義を取る時、　[二五]師心は眞慧を退く、
　説を謗り及び法を輕んず、　此に緣りて大過生ず。　（一六）

釋して曰く、師心とは、謂く自見取なり。非智の者は邊に義を求むるが故なり。眞慧を退くとは、如實の眞解未だ得ず退くが故なり。謗説とは、善説を毀るが故なり。輕法とは、所聞を嫉むが故なり。此の非福に緣りて、次身に大苦報を受く。是を大過起ると名づく。

【二二】信の原語 Adhimukti は信頼又は信任を意味す。界の原語 Dhātu は要素・原素・本質などを意味す。伴の原語 Sahāya は伴侶又は隨伴者を意味す。

【二三】此の偈は淺學少識にして大乘を誹謗する者を誡しむ。

【二四】此の偈は邪思を以て大乘を誹る者を誡しむ。

【二五】師心の原語 Svapratyaya は自己の見解卽ち我見又は己見などを意味す。

の經中に多門異說もて大なる要用を顯はし、諸の分別を破し無分別智を得。若し此に異して大用無しと說かば、如來但だ應に空と言ひて如、法性、實際等と說かざるべし。既に多門ありと說く、何に因りてか獨り空を怖れんや。文義の如くあるに非ずとは、大乘は甚深にして文義の如からず、何に因りてか文に隨ひ義を取りて空を怖れんや。諸佛は甚深の體とは、佛性は甚深にして卒に覺識し難し。應に了別を求むべし。何に因りてか怖れんや。是の如き等の因緣に由るが故に、聰慧正觀の人は此の大乘に於て應に怖畏すべからず。

已に應に怖畏すべからざるの因を說けり。次に能く此の法智を行ずるを說かん。偈に曰く、

三
聞思修に隨次して、　法を得及び慧を得、
此の智此の法を行ず、　未だ得ざるに非毀すること勿れ。　（一一）

釋して曰く、若し人最初に善知識に依らば、能く正聞を起し、次に正義に於て能く正憶を起し、次に眞實の境界に於て正智を生ずるを得、次に彼れ彼の法果を證することを得ん。次に彼より後解脫智を起さば、是の人此の智の深に隨ひ遠に入つて能く此の法を行ぜん。汝若し自ら此の智無くんば、應に決定して佛語に非ずと言ふべからず。

已に能く此の法智を行ずるを說けり。次に此の法句を怖畏するを遮せん。偈に曰く、

不解なれば、解深からず、　深は思度の解に非ず、
解深ければ解脫を得、　諸怖は應に爾るべからず。　（一二）

釋して曰く、不解とは、若し汝是の如きの深法は我が解する所に非ずと言はゞ、是の如き怖畏を起すは應に爾るべからず。解不深とは、若し汝佛解も亦深からず、其の解深きが如くんば、何が故に深と說くと言はゞ、是の如き怖畏を起すは應に爾るべからず。深は思度の解に非ずとは、若し汝、何が故に此の深は思量の境界に非ざると言はゞ、是の如き怖畏を起すは、應に爾るべからず。解深

【三】此の偈の目的は、未だ善知識に依りて、法智を得ざる聲聞乘の人に對して、大乘非佛說の非毀をなす勿れと誡しむるにある。

一八 非性と、一九 非法明と、　　少慧と少因力と[のために]

此の深妙の法を怖れ、　　大菩提を退失す。　　（九）

釋して曰く、人の怖を生ずるが若きは四の因縁に由る。一には種性に非ず、菩薩性を離るゝが故なり。二には法明に非ず、善知識に離るゝが故なり。三には少慧力にして未だ大乘の法空を解せざるが故なり。四には少因力にして先世に諸波羅蜜自性善根を種ゑざるが故なり。此の因縁に由つて甚深の妙法に於て、横に怖畏を生じ、此の想に由るが故に、大菩提に於て福智の二聚應に得可きを得ず、是れを名づけて退と爲す。汝今應に知るべし、此の退の過患は最も深重を極む。已に怖過及び怖因を說けり、次に應に怖畏すべからざる因を說かん。偈に曰く、

無異は卽ち互無、　　有異は卽ち險處、

無譬種々說、　　續說多門說、

二〇 文義の如きあるに非ず、　　諸佛は甚深の體なり、　　（一〇）

聰慧正觀人は、　　應に知るべし應に怖るべからずと。　（一一）

釋して曰く、無異は卽ち互無とは、若し汝、聲聞乘卽ち是れ大乘、大乘の體に異ること無しと言はん。若し是の如きは卽ち聲聞辟支佛乘復た體あること無し。何以故、佛を得るに由るが故なり。是の如く一切は皆是れ佛乘なり、何に因りてか怖れんや。有異は卽ち險處とは、若し汝大乘の體に異なること有りと許さば、此の體は卽ち是れ一切智道、最も第一險處と爲す、度し難きに由るが故なり。此れ應に仰信すべし。何に因りてか怖れんや。無譬とは、一時中に於て二大乘並び出で以て相比す可き無し、何に因りてか一を怖れ二を怖れざらんや。種種說とは、今此の大乘は獨り空を說くに非ず、亦大福智聚を說く。應に此の意を解すべし、何に因りてか獨り空を怖れんや。續說とは、一切時中決定相續して空を說く、汝乍ち聞くに非ず、何に因りてか怖れんや。多門說とは、彼れ彼

【一八】非性の原語Agotraは、非種族又は非家族の義なるが故に、菩薩の種性を離れたるものといふ意味である。

【一九】非法朋の原語Asammitraは非朋友の義なるが故に、善智識を離れたるものといふ意味である。

【二〇】此の偈の目的は、聰慧正觀の人は、此の大乘に於いて、怖畏すべからざる理由を說くにあり。

故に、不定の故に、緣俗の故に、不普の故に、退屈の故なり。彼の有依とは、智は[一三]敎に依りて生じ、[一四]證智に非ざるが故なり。不定とは、有る時は更に異智の生ずることあるが故なり。緣俗とは、世諦を忖度し、第一義諦に及ばざるが故なり。不普とは、世諦を緣ずと雖も但だ少解を得、一切を解せざるが故なり。退屈とは、諍論するに辯窮して卽ち默然たるが故なり。大乘は卽ち所依無く乃至終に退屈せず。不退屈は無量經中百千偈ありて大乘の法を說く、此の法を得るに由るが故に辯才無盡なり、是の故に大乘は忖度の人の境に非ず。

問ふ、汝聲聞乘は佛菩提の方便に非ずと說く、若し爾らば何者か是なるや。偈に曰く、

[一五]廣大及甚深、　成熟無分別、
此の二方便を說く、　卽ち是れ無上の乘なり。（七）

釋して曰く、廣大とは、謂く諸の神通の極めて方便を勤め他をして信解せしむるに由るが故なり。甚深とは、謂く無分別智の行じ難きに由るが故なり。其次第の如く、一には衆生を成熟せんが爲め、二には佛法を成熟せんが爲なり。卽ち此の二を說いて無上菩提の方便と爲す。此の二方便卽ち是れ無上乘の體なり。

問ふ、若し爾らば人あり、中に於て怖畏せば過失云何。偈に曰く、

[一六]應に怖るべからずして怖れ、　怖に由りて燒然せらる、
怖は非福を引くが故に、　長時に過患起る。（八）

釋して曰く、若し人怖畏の處に非ざるに妄りに怖畏を生ずれば是の人卽ち極熱惡道に墮して燒然せられん。何以故、此の怖畏に由りて大非福聚の生を引き、此の罪に由るが故に能く是の人をして無量劫を經て大熱惱を受けしむ。

問ふ、彼の人復た何の因ありてか此の怖畏を生ずるや。[一七]偈に曰く、

【一三】敎は梵語 Āgama の譯語、アーガマとは、聖典又は敎學、學派などを意味する語である。
【一四】證智は梵語 Dṛṣṭa-satya の譯で、理解されたる眞理の義である。
【一五】此の偈の目的は、大乘は廣大甚深の敎にして、無上菩提の方便なる旨を說くにあり。
【一六】此の偈の目的は、無上乘の說を聞いて、怖畏すべからざるに、怖畏する者の罪過を說くにあり。
【一七】此の偈の目的は、怖畏すべからざるに怖畏するは、四種の因緣なることを說くにあり。

[四]發心と教授と、　方便と及び住持と、
時節と下上乘と、　五事一切異なれり。（四）

釋して曰く、聲聞乘と大乘と五種の相違あり。一には發心異なり、二には教授異なり、三には方便異なり、四には住持異なり、五には時節異なり、聲聞乘は若しくは發心、若しくは教授、若しくは勤方便皆自ら涅槃を得んが爲めの故に、住持亦少なり、智聚小なるが故に、時節亦少なり、乃至三生にして解脱を得るが故なり。大乘は爾らず、發心、教授、勤方便皆利他の爲めの故に、時節亦多し、三大阿僧祇劫を經るが故なり。是の如く一切相違す。是の故に應に小乘行を以て大乘果を得可からず。

復次に、若しくは汝、佛語に三相あり、一には[五]修多羅に入り、二には[六]毘尼を顯示し、三には[七]法空に違せず。汝一切法は無自性を以て教授を爲せば此の三相に違するが故に佛語に非ずと言はん、若し此の執を作さば、是の義然らず。偈に曰く、

[八]自ら大乘[九]經に入り、　自の[一〇]煩惱の滅を現す、
[一一]廣大甚深の義は、　自ら法空に違せず。（五）

釋して曰く、今此の大乘も亦三相に違はず、自ら大乘の修多羅に入るが故に、自ら煩惱毘尼を現ずるが故に、菩薩は分別を以て煩惱と爲すが故に、廣大甚深は卽ち是れ菩薩法空、此の空に違せず大菩提を得るが故なり。是の故に此の乘は三相と相違せず。

復次に、前に說きし不行は、我今更に此の義を示し、汝をして信受せしめん。偈に曰く、

[一二]有依と及び不定と、　緣俗と亦不普と、
退屈と忖度する人は、　寧んぞ大乘の義を解せん。（六）

釋して曰く、五因あるに由り、彼の忖度の者は大乘の境界に入るを得ること能はず。彼智有依の

【四】此の偈は五の事項をあげて、小乘と大乘との異なる所以を論證してゐる。

【五】修多羅は梵語 Sūtra の音譯、漢譯して經といふ。

【六】毘尼は梵語 Vinaya の音譯、漢譯して律といふ。

【七】法空とは、精神物質兩界の諸現象は、悉く因緣によりて生ぜられたるものにして、永久不變の實體なきをいふ。

【八】此の偈の目的は、小乘教徒が、佛語の三特色——修多羅と毘尼と法空と——をあげて、大乘の佛說にあらざることを難ぜるに對して、大乘も亦佛語の三特色に違はざることを主張するにあり。

【九】これ修多羅の特色である。

【一〇】これ毘尼の特色である。

【一一】これ法空の特色である。

【一二】忖度者は、大乘の境界に入ること能はざる五つの理由——有依と不定と緣俗と不普と退屈と——を說明するのが、此の偈の目的である。

さば、是の義然らず。偈に曰く、

諸佛の三因緣は、　現見と亦護法と、
如來智無礙となり。　捨は應に爾るべからず。　（二）

釋して曰く、若し此の大乘佛說に非ずんば、是れ大障を爲す、諸佛に三因緣あり。何が故に不記たる。一に無功用智恒に起り是の眼「を以て」恒に見る。二に恒に正勤を作して正法を守護す。三に如來の智力は障礙あること無し。此の三因に由り、汝捨して記せずと言ふは道理に應ぜず。

復た次に、若し汝有體とは卽ち聲聞乘是れ大乘の體なり。何以故卽ち此の乘を以て大菩提を得るが故にと言はん、若し此の執を作さば是義然らず。偈に曰く、

全に非ず不違に非ず、　行に非ず教授に非ず、
是の故に聲聞乘は、　卽ち是れ大乘に非ず。　（三）

釋して曰く、四因緣ありて卽ち聲聞乘を以て大乘の體と爲すに非ず。「そは」全に非ざるが故なり、不違に非ざるが故なり、行に非ざるが故なり、教授に非ざるが故なり。全に非ずとは、聲聞乘は利他の教授あること無く、但だ自ら厭離し解脫せんと欲して教授するが爲の故なり。不違に非ずとは、若し聲聞乘は自方便を以て他を教授す、卽ち是れ利他教授と言はゞ、是の義然らず、何以故、自利を以て他を安んずと雖も、彼亦自ら涅槃を求めて勤行方便す、此を以て大菩提を得可からざるが故なり。行に非ずとは、若しくは汝、若し能く久しく聲聞乘の行を行ぜば則ち大菩提果を得んと言はば、是の義然らず。方便に非ざるが故に聲聞乘は大菩提に非ず、方便は以て久しく行ぜず、方便は能く大乘果を得るに非ざるなり。譬へば角を搆つて乳を求むるが如く、不可得なるが故なり。教授に非ずとは、大乘の教授の如きは聲聞乘には無し。是の故に聲聞乘は卽ち是れ大乘を得ず。

復次に、今更に汝に相違の義を示さん。偈に曰く、

不記と亦同行と、　不行と亦成就と、
體と非體と能治と、　文異との八因より成る。（一）

釋して曰く、大乘を成立するに略して八因あり。一には不記、二には同行、三には不行、四には成就、五には體、六には非體、七には能治、八には文異なり。第一の不記とは、先法已に盡きて後佛正に出づ、若し此大乘是れ正法に非ずんば、何故に世尊初めに記せざるや。譬へば未來異あれば世尊卽ち記するが如し。此の不記の故に、是れ佛說なるを知る。第二同行とは、聲聞乘と大乘と先に非ず後に非ず、一時同行なり。汝云何が此大乘獨り佛說に非ずと知るや。第三不行とは、大乘は深廣にして忖度する人の能く信ずる所に非ず。況んや復た能く外道諸論を行ずるをや。彼の種不可得なり。是の故に不行なり、彼れ不行に由るが故に是れ佛說なり。第四成就とは、若し汝餘の菩提を得る者は說くに大乘あり、是の今佛說には大乘あるに非ずと言はん、若し此の執を爲さば則ち反りて我が義を成ず。彼れ菩提を得るも亦卽ち是れ佛の是の如く說くが故なり。第五の體とは、若し汝が餘の佛は大乘の體あり、此の佛は大乘の體無しと言はん、若し此の執を爲さば亦我が義を成ず。大乘は異無く體は是れ一なるが故なり。第六の非體とは、若し汝が此の佛に大乘の體無しと言はば、則ち聲聞乘にも亦體無し。若し汝聲聞乘は是れ佛說なるが故に體あり、大乘は佛說に非ざるが故に體無しと言はん、若し此の執を作さば大過失あらん。若し佛乘無く、而も佛出でゝ聲聞乘を說くものあらば理應ぜざるが故なり。第七の能治とは、此の法に由り依つて修行せば無分別智を得、無分別智に由りて能く諸の煩惱を破す。此の因に由るが故に大乘無しと言ふを得ず。第八の文異とは、大乘は甚深にして文義の如くに非ず、應に一向に文に隨つて義を取り、佛語に非ずと言ふ可からず。

復次に若し汝初めの不記とは、佛の[二]無功用心と[三]捨とに由るが故なりと言はん。若し此の執を作

【二】無功用心とは、梵語の Anābhoga の譯語にて、盡力せざること、努力せざること、骨折らざるなどを意味する。
【三】捨とは、梵語の Upekṣā の譯語にて、等閑に附する、忽がせにする、打ち捨てゝおく、無視する、顧みぬなどを意味する。

譬へば藥を飲んで苦しむに、　病差ゆれば則ち樂と爲るが如し。
文に住すると及び義を解すると、　苦藥も亦是の如し。（六）
譬へば難事の王の、　事に因りて威力を得るが如し。
是の如き難解の義は、　解に因りて法財を得るなり。（七）
譬へば生寶を見るに、　別ならざれば則ち愛せざるが如し。
是の如きの妙法を聞くも、　覺らざれば亦喜ばず。（八）

釋して曰く、此三偈は次第に妙法に三の功德あるを顯示す。一には斷障因の功德を顯はし、二には自在因の功德を顯はし、三には妙喜因の功德を顯はす。問ふ、此義云何。答ふ、苦藥を飲むが如し。初時には則ち苦しむ、服し難きを以ての故なり。後時には則ち樂しむ、病差ふを以ての故なり。此法も亦爾なり。文に住する時は苦しむ、味の得難きが故なり。義を解する時は樂しむ、障病の破するが故なり。嚴王に事ふるが如し。初時則ち苦しむは、意を得難きが故なり。後時には則ち樂しむは、威力を與ふるが故なり。此法も亦爾なり。思惟の時苦しむ、深くして解し難きが故なり。思度の時樂しむ、聖財を長ずるが故なり。生寶を見るが如く、未別の時なれば則ち愛せず、謂く無用なるが故なり。識別の時なれば則ち深重す。有用を知るが故なり。此法も亦爾なり。修行の時は則ち喜ばず、謂く空しくして無用なるが故なり。修度の時は則ち深く悅ぶ、大用あるを知るが故なり。緣起品究竟。

成宗品第二

釋して曰く、人あり此大乘は佛の所說に非ず、云何んが此功德得可きありやを疑ふ。我今彼の疑網を決し、[一]大乘は眞に是れ佛說なるを成立せん。偈に曰く、

【一】大正藏經には、此の間に「制」の字あるも、恐らくは衍字ならむ。

問ふ、誰が爲の故に莊嚴するや。答ふ、大乘の心を發す者の爲なり。問ふ、幾ばくの義を以て莊嚴するや。答ふ、略して五義を以て示現す。問ふ、何をか五義なる。偈に曰く、

譬へば金の器と成ずるが如く、　譬へば華の正に敷くが如く、
譬へば美饍を食ふが如く、　譬へば文字を解するが如し。　(三)
譬へば寶篋を開くが如し、　是れ各歡喜を得、
五義の法を莊嚴するの　歡喜も亦是の如し。　(四)

釋して曰く、此中の五譬は卽ち彼の五義の莊嚴に譬ふ、其の次第の如し。能く大心を發すものをして信に向はしむる故なり。敎を受くるが故なり。思惟する故なり。修習するが故なり。證得するが故なり。問ふ、其義云何。答ふ、金の[器を]成すの譬は、信向して彼の心を轉ぜしめんが爲の故なり。華の敷く譬は、受敎して彼を開示せしめんが爲の故なり。食饍の譬は、思惟して法味を得せしめんが爲の故なり。文を解するの譬は、修習して更に思はざらしめんが爲の故なり。開篋の譬は、眞實菩提分寶を證得して自ら覺證せしめんが爲の故なり。此の五義に由りて、大乘を分別し、能く彼の人をして愛樂を生ずるを得せしむ。問ふ、若し彼の法、自性功德具足せんに、何の義か更に莊嚴を爲すを須ひん。此の問に答へんが爲めに、偈に曰く、

譬へば美質を莊るもの、　鏡に臨んで勝喜を生ずるが如く、
妙法を莊嚴し已れば、　喜を得ること更に第一なり　(五)

釋して曰く、譬へば美質の莊像を加ふるに、現じて鏡にあれば、則ち勝喜を生ずるが如し。何以故、悅あるが爲の故なり。菩薩も亦爾なり、妙法を莊嚴するに、義自心に入れば、則ち勝喜を生ず。何以故、問あるが爲の故なり。問ふ、彼の法何の功德ありてか此の莊嚴を須ひ、強いて他をして恭敬し信受せしめんと欲するや。偈に曰く、

人生の意義を知悉すること、人生の目的を辨知することを意味する術語である。能く人生の意義を知悉し、人生の目的を辨知するから、其の言ふところが無垢である。無垢の言とは人をして能く涅槃の城に至らしむるの功德ある。

【五】大乘非佛說の論議が、無著時代にも、相當盛んなりしものなることが、想像し得られる。蓋し次の偈の示すが如く、不記乃至文異の八因を以て、大乘は眞に是れ佛說なることを論證せんと試みてゐるからである。

大乘莊嚴經論

[二]無著菩薩造

大唐天竺三藏[三]波羅頗蜜多羅譯

卷の第一

縁起品第一

偈に曰く、

[四]義智は諸義を作す、　言句は皆無垢なり。
苦の衆生を救濟す、　慈悲を性と爲すが故に。　（一）
方便の法を巧說す、　所謂最上乘なり。
大心を發す者の爲に、　略して五義を以て現はす。　（二）

釋して曰く、[五]大乘の經論を莊嚴するに誰か能く莊嚴する。答ふ、義智能く莊嚴す。問ふ、義智は云何が莊嚴する。答ふ、諸義を開作す。問ふ、何を以てか開作する。答ふ、言及び句を以てす。問ふ、何等の言を以てし、何等の句を以てするや。答ふ、無垢の言を以てし無垢の句を以てす。無垢の言とは謂はく、能く涅槃の城に至る。無垢の句とは謂はく、字句相應するなり。若し無垢の言句を離るれば、則ち諸義に於て開曉すること能はず。問ふ、何の義を以ての故に莊嚴するや。答ふ、苦の衆生を救濟せんが爲の故なり。問ふ、衆生は自ら苦しむ、何に因りてか救濟するや。答ふ、菩薩は大悲を體と爲し、憐愍を生ずるが爲の故なり。問ふ、若し他苦を救ふは何の法をか莊嚴するや。答ふ、如來の巧說し給へる方便の法を莊嚴す。問ふ、何等か方便の法なる。答ふ、所謂最上乘なり。

【一】大乘莊嚴經論（Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra）。一名大莊嚴論とも云ふ。大正藏經第三十一卷瑜伽部下（三）

【二】無著は梵名阿僧伽（Asaṅga）の譯語。印度に於ける唯識宗の大成者、支那にては法相宗の祖と仰がる。婆藪槃豆傳に『旣に大乘の空觀を得たり、此に因つて名と爲し、阿僧伽（アサンガ）と名づく。阿僧伽は譯して無着と爲す』とある。三藏法師傳卷三には『城の西南五六里にして故伽藍あり、是れ阿僧伽菩薩說法の處なり。菩薩は夜、覩史多天に昇り、慈氏菩薩の所に於いて、瑜伽論莊嚴論大乘論中邊分別論を受く。晝は則ち天を下り、衆の爲めに說法す、阿僧伽亦た無著と名づく。卽ち健陀羅（ガンダーラ）國の人なり。佛滅度の後、一千年中に、世に出現し、彌沙塞部に從つて出家し、後に大乘を信ず』とある。

【三】波羅頗蜜多（Prabhākaramitra）。中天竺の人、唐の高宗武德九年、京に達して興善寺に住し、大莊嚴經論等を譯す。大宗の貞觀七年に寂す。世壽六十九。

【四】義智とは梵語のArthajña）を直譯した言葉で、能く

近の何たるかを明かにしてある。

【梵住品第二十】　此の品には先づ菩薩の修する所の梵住とは、慈悲喜捨の四無量にして、其四無量の一々に各四種の相あることを說き、次に梵住の行と種の差別、梵住の果、梵住に於ける菩薩の相、梵住の障礙、梵住者の功德等を明かにし、次に菩薩は生死にも涅槃にも住せざること並に菩薩の大悲の功德・大悲の差別・大悲の無著・大悲の愛勝・大悲の無厭・大悲の苦勝・大悲の施勝・大悲の忍苦・大悲の施果・大悲の勸進・大悲の樂勝・大悲の敎授と行施・大悲の平等等を詳說してある。

【卷第十。覺分品第二十一ノ一】　此の品には菩薩の羞相に四種あること、菩薩は四事に於いて羞耻を生ぜざること、菩薩有羞の障礙、有羞の功德、菩薩の四無礙辨、及び菩薩の修習する三十七の助道品等に就いて詳說してある。

【卷第十一　覺分品第二十一ノ二】　此の品には菩薩の修習する止觀、五種の巧方便、陀羅尼及び菩薩の起つる所の諸願、菩薩の修習する三三昧。並に大乘佛敎の四法印等に就いて細說してある。

【卷第十二　功德品第二十二】　此の品には先づ菩薩の諸功德中、行の希有を說き次に果の希有と非希有と、菩薩の平等心と、六度を以て衆生を饒益することゝ、菩薩の七似饒益と、六種報恩と、五種の希望と、四種の不空果と、六種の正行と乃至大乘の七大義と、大乘を總攝する八法等を詳說してある。

【卷第十三　行住品第二十三】　此の品には菩薩の特色として、憐愍・愛語・勇健・開手・釋義の五種を擧げ、在家出家兩菩薩の優劣を明かにし、次に菩薩の五種の極大心、四種の攝衆生、四種の受生、十一住相を說き、次に菩薩の隨地修學修習成就未成就、入地の十種の相、乃至四種の得地差別と修行差別を明かにしてある。

【敬佛品第二十四】　此の品には如來の無量・三處・無諍・願智・無礙・神通・相存・清淨・力・無畏・斷習・不忘・大悲・不共・種智・度滿・佛相等の勝功德を讚歎し敬重してある。

三、本論の梵本

佛蘭西の梵語學者シルヴン・レギー敎授によりて、一九〇七年に巴里で出版されてゐる、漢譯と梵本との對照表を作り初めたけれども餘りに出版を急がれたから中止した。

昭和八年一月八日

譯者　山上曹源　識

【述求品第十二ノ一】此の品の眼目は信を以て諸法を求むることを力說する點にある。先づ最初に三藏を立つる理由と修多羅の四義と、阿毘曇の四義と、毘尼の二種の四義とを說いて、求法の意義を明かにし、次に求緣と、求作意と、求眞實義と、求能知智と、求染汚及淸淨と、求遠離とを解釋してある。

【卷第五　述求品第十二ノ二】此の品には、先づ求唯識を說いて、能取も所取も共に心光なるが故に、染淨の二法の無差別なることを明かにし、次に所相の五種と、能相の三種と、求解脫と、求無自體と、求無生忍と、求一乘と、求明處と、求長養善根と、求法差別と、求法因緣と求遠離分別と、求法大とを明かにしてある。

【卷第六　弘法品第十三】此の品には人の爲に演說する者に、法慳の遮すべきを喝破し、次に說法の利益と、說法の差別と、說法成就と、語と字と義との成就と、說法の四節と、大乘の功德と、持法の功德と、說法の功德とを說いてある。

【隨修品第十四】隨修とは菩薩の隨法修行といふ意味あるが、此の品には先づ菩薩の知義と知法と隨法と同得と隨行とを明し、次に不放逸の四輪と、煩惱卽菩提の玄旨と、二乘心の遠離と、怖畏心及び貪罪の遮斥と、菩薩の修行の九種の差別とを說いてある。

【卷第七　敎授品第十五】此の品には先づ菩薩は、如來の敎授を蒙り、廣く大乘に進趣して、廣く六種の心と十一種の作意を起し、九種の住心を修習して心の柔軟を得、諸佛の稱揚する所となる要旨を說き、次に菩薩の煖等の諸位と見道と三解脫門と、四念處等の菩提分法を明し次に菩薩を無我を觀じて大我を體得する要義を說き、『大我とは一切衆生を以て自己と爲すなり』と道破し、此の大我を體現する時、人は恰も日輪が東天に昇れば、夜の幽暗を驅除して世界を朗かにするが如く、胸中の天地は忽にして快晴明朗なるを覺ゆるであらうと說いてある。

【業伴品第十六】此の品には菩薩の三業は、恰も大地の大海諸山草木及び衆生等を任持するが如く、一切の善法を建立することを讃美してある。

【卷第八　度攝品第十七ノ一】度攝品第十七ノ二。此の二品には菩薩の三業によりて聚集する所の六度を有ゆる方面から詳說してある。

【卷第九　供養品第十八】此の品には如來の供養に、依、物、緣起、迴向、因、智、田、依止の八種あることを說き、次に供養の種の差別と、最上の供養の何たるかを明かにしてある。

【親近品第十九】此の品には、善知識に親近するにも、前品の如來供養と同じく、依等の八種の親近あることを說き、善知識に親近する種の差別と、最上の親

は功德、八には金譬、九には寶譬——を擧げ、此等九義の一々に、各四種の差別あることを詳說してある。

【卷第二　發心品第五】　此の品には、先づ菩薩の發心に、(一)勇猛大、(二)方便大、(三)利益大、(四)出離大の四種の大あることを說き、次に菩薩の發心に(一)信行發心、(二)淨依發心、(三)報得發心、(四)無障發心の四種の差別あることゝ、受世俗發心の四力と、第一義發心の三勝及び六勝とを說き、更に二十二種の譬喩を擧げて、發心の意義を明かにし次に不發心の過失を呵し、最後に發心を讃美してある。

【二利品第六】　已に菩薩の發心を說いたので、此の品には菩薩の行持たる自利と利他とを並べ說いて、自他の無差別なることを主張し、若し自利と利他との優劣を比較せば、利他の遙に勝れてゐる所以を論じ、次に菩薩は二利を成就して、大涅槃を得ることを高調し、最後に四種の隨順大を說いて、菩薩の特色を讃美してある。

【眞實品第七】　眞實とは第一義の代へ言葉である。で、此の品には先づ第一義の特性として、非有亦非無、非如亦非異非生亦非滅、非增亦非減、非淨非不淨の五種の無二相を擧げ、次に第一義の何たるかを解せざるより起る妄見を遮訶し、次に生死卽涅槃の大義と、菩薩の第一集聚位と、第二通達分位と、第三見道位と第四修道と、第五究竟位とを說いてある。

【神通品第八】　此の品には先づ菩薩の六神通を列擧し、次に各神通に三種の果あることゝ、神通の三種の相應と菩薩の神通に住する具の六種と、神通の三種の大とを說いてある。

【成熟品第九】　此の品には菩薩の成熟に自成熟と他成熟との兩方面の存することを明かにしてあるが、先づ自成熟に九種あることゝ、其の九種の一々に因と體と業との三方面あることを明かにし、次に他成熟卽ち菩薩の衆生を成熟するに、障分と治分との二方面あることゝ、他成熟の八種の差別と六度の一々に於ける成熟と、成熟に三種の大あることゝを說いてある。

【卷第三　菩提品第十】　李百藥の序文に、『菩提一品最爲微妙』とあるが如く、此の品には大乘佛敎の最要點を說示してあるから、斯の論を讀む者は、須らく此の品を再讀三讀して翫味せられんことをお勸めする。

【卷第四　明信品第十一】　此の品には先づ『菩提は謂ゆる信なり』と說破して、其の信相に十三種の差別あることゝ、信の障種にも十三種の差別あることゝ、信の障礙と、信の功德の讃美と、下劣心の遮斥と、信の福德の勝れたることゝ、信の果に三種あることを說いてある。

大乘莊嚴經論解題

一、本論の成立と漢譯

本論は無著が彌勒菩薩の旨を承けて著す所の五部大論の一である。唯識了義燈の著者惠沼が、瑜伽十支論の一に數へてゐる大莊嚴論は、本頌を彌勒の造、釋を天親の造と傳へてゐるけれども、恐らくは本論のことであらう。されば學佛者の間に、本論は相當廣く深く研討された書に相違ないが、慧淨の疏十一卷を外にしては、本論の註釋書は一部も傳へられてゐない。加之唯一の慧淨の疏すら、予は不幸にして未だ曾て拜閱するの機會を有ち得ないのである。本論の漢譯者たる波羅頗蜜多三藏は、印度マガダ國の刹帝利族の家に生れ、唐の貞觀元年十二月を以て入京した仁である。師が戒行精勵才識明敏な立派な人格者であつたことは、本論に對する李百藥の序文によりて察することが出來る。本論は慧淨その他の輔佐によつて、貞觀七年の春を以て飜譯の業を畢つたとあるから、今を去ること千三百年の昔である。

二、本論の內容梗概

【卷第一　緣起品第一】此の品は、品名自らをして物語らしめてゐるが如く、謂はゞ本論の序分である。で、斯の論を造る理由を述べて、如來の巧說方便法たる大乘を莊嚴せんがためであると言ひ、五つの譬喩を擧げて、莊嚴の意義を明かにし、次に大乘の敎法は何の功德あつて莊嚴を加ふる價値あるかとの問に對して三つの譬喩――如飮苦藥、如事嚴王、如見生寶――を以て、妙法に三種の功德あることを明かにしてある。

【成宗品第二】此の品には、先づ大乘は非佛說なりとの疑難を破斥するに、八つの理由を擧げて、大乘の眞に佛說たる意義を明かにするのみならず、四つの因緣を擧げて、聲聞乘の大乘に及ばざる要旨を說き、次に大乘と小乘との相違五點をあげて、愈益大乘の勝れたることを明かにしてある。

【歸依品第三】此の品には、一切の歸依三寶の中、大乘の歸依を以て、最勝第一なりと高調し、其の理由として、遍一切の義と、勇猛の義と、得果の義と、及び不及の義と、四種の大義を詳說してある。

【種性品第四】種性とは、原語によれば家族、眷屬、種族等を意味する語であるが、此の品には、種性の九義――一には有體、二には最勝、三には相貌、四には自性、五には品類、六には過惡、七に

猶、世人の諸の俗事なる瓶衣等の處に於て、以て實有と爲して、瓶衣等と名づくるが如く、智者も亦、爾り、當に世間に順じて言說を興すべし。實有に非ざるを知りて、若し樂ふて煩惱の過失を觀察し、解脫を求めば、宜しく是の如き眞勝義の中に於て、周遍に推尋し、如理に作意すべし。諸の境處及び能緣の妄識に於て、煩惱の繫縛、復、生長せざらん。

掌中論終

[一四] 妄有は實にあらざるが故に、　　所見と同じからず。
境相虚妄なるに由つて、　　能縁も亦有にあらず。

論に曰はく、若し、我も亦彼の瓶衣等の事に於て、彼の自性は是れ不可得にして皆是れ妄識の所分別なるも、然れども彼の相狀を縁ずる亂識は是れ其れ實有なり、健達婆城及び幻人等を觀る共識は是れ有なればなりと言はゞ、設ひ此の識有るも亦、實有に非ざるが故に所見の事と相應せざるが故なり。此の惑亂の識は所縁の境に於て[一五]有性の解を作すも、彼の事の自性は已に有にあらず。境已に無なれば、能縁の妄識も亦、實有にあらざるなり。云何ぞ彼の妄識をして有ならしめむや。然るに世間に於て曾て能生の種子無きこと有りて所生の芽等有ることを見ず。斯に由つて汝が說く幻城等の喩は道理として成ぜず。

頌に曰はく、

[一六] 斯は皆是れ假設なり、　　善覺者は能く知る。
智人煩惱を斷ずるに、　　易きこと蛇の怖を除くが若し。

論に曰はく、三界には但、假名のみ有りと說いて、[一七]瓶等の麁覺既に除遣し已り、名言に從つて而も其の事有ることを知り、善く觀察せば、能く了知し已つて、即ち繩の處に於て蛇の怖は除遣せられ、復、審に思惟して彼の差別を了せば、繩等の處に於て妄執も亦なしと說くが如く、是の如く觀ずる時は、一切は能く離染の法を生じ、速かに煩惱の羅網を蠲除し、及び諸業の果自ら當に斷滅すべきこと易し。

別頌あり、曰はく、

[一八] 智人は俗事を觀じて、　　當に俗の所行に隨ふべきも、
煩惱の斷を求めむと欲せば、　　要らず眞勝義を明すべし。

【一四】此四句一頌は眞諦譯に缺けて居る。

【一五】有性とは有ることとの意味。

【一六】眞諦譯、「一切は假名物なり、若し細心に思量する、智人ならば欲等の惑を、能く除くこと蛇の怖の如し。」

【一七】眞諦譯には以下別偈に至るまでに義淨譯になき詳しき文あり。

【一八】眞諦譯は別偈たることを示さずして、「智人は世に違はずして、隨うて世間法を說くも、若し惑障を斷ぜむと欲せば、眞に依りて應に觀察すべし」となす。

他に從ふものにして皆假名なり。　乃至世俗の境なり。

論に曰はく、繩等の支分の處に於て、別別に分析し、審に觀察する時は、實の體なく、唯、是れ妄心のみなることを知るが如く、[八]是の如く應に知るべし、一切の諸法は但是れ假名なるのみ。瓶衣等の物の遲縷等に藉りて成じ、乃至、言說識の所行の境にして、未だ破壞に至らざるを名づけて瓶等と爲すが如し。他に從ふものと言ふは世俗の言說に從うて而も有なるも、[九]勝義に於てには非ざるを謂ふ。

頌に曰はく、

[一〇]分なきは見らるゝにあらざるが故に、　至極は非有に同じ。
[一一]但、惑亂の心に由るのみ。　智者は應に執すべからず。

論に曰はく、[一二]若し復、執して、諸有の假の事は、極微位に至れば、分析すべからず復方分無くも是れ實有なりと言はゞ、此は卽ち猶、空華及び兎角等の如し。不可見の故に力の能く彼を緣ずる識を生ずることなきが故に、所執の極微は定んで實有にはあらざるなり。所以に須らく不可見の因を說くべし。彼は極微を安立して實有を成ずること能はざるに由るが故なり。所以は云何。方分有りて事は差別するが故なり。猶、現に有なるを見る瓶衣等の物には東西北等の方分別なるが故に、斯れ皆現有にして、支分は可得なるが如し。若し極微は是れ現有なりと言はゞ、必ず方分有り。別異性なるが故に、是れ則ち應に東西北等を許すべし、支分別なるが故なり。此の實の極微は理として成就せず、亦一體にもあらず、多分の成なるが故に、事の別なるを見るが故に、一實の極微は定んで不可得なり。是の如く、應に極微の論を捨つべし。[一三]是の故に智者は三界は咸、是れ妄情なることを了知し、妙理を欲求して應に實なりと執すべからず。

頌に曰はく、

【八】明本には「是の如く知り已れば」とあり。眞諦譯には、此句の代りに「實に境あることなし」の句が挿入せられてゐる。
【九】眞諦譯には「勝義に於てには非ざるなり」の句はない。
【一〇】眞諦譯。「最後は分析無し、皆無なるを離るゝを顯はすこと難し。」
【一一】眞諦譯では此半は後に出づ。
【一二】以下瓶衣等の物云々までは眞諦譯と譯文異る。
【一三】眞諦譯は次に「智人は俗に境に於て、眞實の意を起すこと勿れ」の半偈を出す。

掌中論一卷

陳那菩薩造

三藏法師義淨制を奉じて譯す

[一]論に曰はく、謂はく三界に於ては但假名のみ有りて、[二]實には外境なし、妄執なるに由るが故なり。今彼の未だ眞を證せざる者の爲に、諸法の自性の門を決擇して倒解なからしめむと欲するが故に、斯の論を造る。

[三]頌に曰はく、[illegible]

[三]縄に於て蛇の解を作すも、　縄を見れば境なきことを知る。

[四]若し彼の分を了する時は、　蛇の解の如き謬なることを知る。

論に曰はく、遠くに非ざるも分明ならざる處に於ては唯、縄と蛇との相似の事のみを見未だ彼の差別の自性を了する能はずして、惑亂せらるゝが故に、定んで執して蛇と爲すも、後時に彼の差別の法を了し已れば、妄執の誑亂に由つて生ぜしが故に、但是れ錯解のみにして實事有ることなく、[五]復た縄の處の支分の差別に於ても善く觀察する時は、縄の自體も亦不可得なるを知るが如く、是の如く知り已れば、所有の縄の解は、猶蛇の覺の如く、唯妄識有るのみ。[六]縄の處に於て、惑亂の識のみ有るが如く、亦彼の分の毫釐等の處に於ても、相は假藉にして、實には可得無しと知る。是の故に、縄及び分等を緣ずる心の所有の相狀は但妄識なるのみ。

頌に曰はく、

[七]諸有の假設の事は、　詳に自性を觀ずる時は、

【一】眞諦譯。「三界は唯、言名を以て體と爲す。」假名と言名とは同語異譯である。

【二】眞諦譯。「强分別に由る、實有の法にあらず、故に眞を得ず。簡擇門に由つて、諸法の自性に、不顚倒の智を生ぜしめむが爲の故に此論を立つ。」强分別の强は妄の意と同じ。故に妄執とは同語異譯であらう。

【三】眞諦譯。「藤に於て蛇の知を起すも、藤を見れば則ち境無し。」蛇も縄も同語の異譯であるが藤と譯すのは眞諦獨特の譯字である。

【四】此半偈は眞諦譯は後に出ず。

【五】眞諦譯は此前に「若し藤の分を見已れば、藤の知は蛇の知の如し」の半偈を出す。

【六】此「縄の處に於て惑亂の識のみあるが如く」の一句は眞諦譯にはない。

【七】眞諦譯。「一切の假名の類は、自性を簡擇する時は、假名は他に從うて起る、乃至俗智の境なり。」

に至り眞實性となるといふのである。第二頌に於ては此喩を諸有の假設の事にあてゝ說いて一切は世俗諦の境となし、第三頌では、恰も麻叉は分に當る如き極微が殘ると考へられむも至極微は非有と同じで惑亂心の所產のみとなすのである。第四頌は既に境相が無いのであるから、此所緣の無から當然能緣の非有がいはれねばならぬとなし、所謂境識倶泯が其最後點なることを表はして居る。第五頌は以上を實踐に適用して煩惱斷除に進むべきを說くのである。最後の別頌は以上のいはゞ、自利の行を利他の方面に向はしめ、和光同塵の同事に於て化他に努め其間にも眞勝義を明にして共に解脫に至るべきを勸むるものである。かく一覽するに此論は甚だ要領を得た簡潔な論なることが判る、まさにこれ陳那菩薩が攝大乘論に基いて簡單にかく述べたもので、菩薩にはかゝる簡潔にして要領を得た著書が少くない。漢譯に傳はらなかつた入瑜伽論の如きも亦かゝる種類の論である。

掌中論には古い異譯として眞諦三藏が陳代に譯した解拳論が在する。解拳の拳は數々捲ともせられて居るが、此場合捲は拳と全く同意味で、相通じて用ひられたものに外ならぬ。掌中と解拳とでは如何にも意味が反對の如くにも見ゆるが、實際はさうではなくして、恐らく師の祕する如き掌中の說を、掌中論はこゝに解き明して述ぶる意味となし、解拳論をそれを解き述べるの意味となしたのであると見るべきであらう。從つて掌中も解拳も其原語を異にするのではなく、全く同一であつたに相違ない。原語が如何なる字であつたかについては說が異つて、或はハスターバヷ(hastābhava)ともハスタヷーラ(hastavāla)ともハスタパーサ(hastapāsa)ともムシュテイ(muṣṭi)ともターラーンタラカ(talāntāraka)ともなさるゝが、或は此中ではハスタパーシャ(hastapāśa)が適當であらうかとも想像さるゝ。然し此外に眞の原語たるものがあるのかも知れぬ。

昭和七年十二月十日

譯者　宇井伯壽　識

掌中論解題

掌中論は唐の義淨三藏が七〇三年に譯出したものである。著者が陳那菩薩であつて、此の點については支那日本に何等の異說もなく、從つて義淨三藏の時からかくいはれて居たのであると考へらる る。然るに此論は西藏語に譯せられて西藏大藏經に存し、そこでは龍樹菩薩の弟子提婆菩薩の著とせられて居る。西藏に於ける翻譯は、一般に遲いものであるから、たとひ此論が西藏に譯された時既に提婆菩薩の著とせられて居たにしても、漢譯よりも後である爲に、此論の著者に關する說としても、漢譯の方が古傳である。又義淨三藏は印度に留まつたこと長く、印度で此論を自ら得て來たのであるから、陳那菩薩の著となすことも印度の說である。西藏の提婆菩薩說も、たとひそれが印度の說であつて決して西藏に來てからいはるるに至つたのではないにしても、年代上西藏に傳はつた說の方が新しい。故にかゝる點のみでいうても古說たる陳那菩薩說を眞と認むべきである然し既に傳說が一致しない以上は、一層決定的となる根據は之を此論中の內容に求むべきである。其內容は所謂蛇繩麻の三喩によつて唯識無境を明すにあるのであるから、かゝる說が提婆菩薩の時代に存する所以は、到底考へらるゝことでない。殊に蛇繩麻の三喩は元來攝大乘論に於て說かれたものであつて、從つて此論はそれに基いて簡單に纏めたものであると見らるゝ。故に此內容は瑜伽行派の人たる陳那菩薩の著となす方が正しいと考へらるゝ。從つて時に學者が兩傳說を折衷して論中の頌文は提婆作で釋文が陳那造であらうとなすのも決して承認せられ得る說でないといはねばならぬ。

本論は極めて簡單なものであつて、僅に六頌と長行とから成つて居る。而も最後の一頌は別頌といはれて居るから、本論に屬するものとしては五頌のみの理である。第一頌に蛇繩麻の三喩が說かれて居るのであるが、こゝには麻はなくして分又は長行に支分とせられて居る。此喩は一切の境は繩に喩へらるゝ依他性のもので因緣法たるに過ぎないが、凡夫は、之を蛇と計度妄想し蛇想によつて恐怖等の心を起して居るも、元來繩に過ぎないことを知れば、分別性たる蛇の解は消散するに至るに相違ないし、更に又之と同じく依他性の繩も麻であり、分が繩と現はれて居るに外ならぬことを了知し得れば、繩の解も亦消散すること蛇の解の如くで分のみとなり遂には分も留まらない

（一一三）[51]此の論は中邊と深密と堅實との義と、
　廣大と一切との義とを辯じ、諸の不吉祥を除く。（結頌）

[52]論に曰はく、此の論は能く中邊の行を辯ずるが故に辯中邊と名づく、即ち是れ處中と二邊との能緣の行の義を顯了するなり。又此は能く中邊の境を辯ずるが故に辯中邊と名づく、即ち是れ處中と二邊との所緣の境の義を顯了するなり。或は此は正しく初と後との邊を離れたる中道法を辯ずるが故に辯中邊と名づく。

此の論の所辯は是れ深密義なり、諸の尋思の所行の處に非ざるが故なり。是れ堅實義なり、能く他の辯を摧きて彼の伏するものに非ざるが故なり。是れ廣大義なり、能く自他を利樂する事を辯ずるが故なり。是れ一切義なり、普く能く三乘の法を決了するが故なり。又能く諸の不吉祥を除滅す、永に煩惱と所知との障を斷ずるが故なり。[53]

　[54]我が此の論を辯ぜし諸の功德を、咸持して普く群生の類に施し、
　　勝生を得、福慧を増して、疾に廣大の三菩提を證せしめん。（結勸頌）

辯中邊論 終

【五一】結頌。「此の論は中と甚深と眞實との義と大義と一切義とを分別して諸の不吉祥を除く。」

【五二】中邊論は本節を右の偈の前に置く。

【五三】中邊論は此次に無上の總義と正行の總義と無倒の總義とを舉げ、更に倶舍論にある二偈を出す。

【五四】釋論者の結頌。「我今此の論を作りて、世の福と慧との行の爲にし、普く一切衆をして願の如く菩提を得しめん。」

應に知るべし、卽ち前の二種なり、到彼岸等の差別の法門は要ず法界に通達することに由りて成ずるが故なり。第五は謂はく聞所成の慧の境なり、文を任持するが故なり。第六は謂はく思所成の慧の境なり、義を印持するが故なり。第七は謂はく修所成の慧の境なり、內に別持するが故なり。第八は謂はく初地の中の見道の境なり。第九は謂はく修道の中、乃至、七地の境なり。第十は謂はく卽ち七地の中の世出世の道の品類差別にして、分分證の境なり。第十一は謂はく第八地の境なり。第十二は謂はく第九と第十と如來地との境なり。應に知るべし、此の中のものは卽ち初と第二となるも、諸義の位に隨つて彼彼の名を得るなり。

是の如く已に所緣無上を說きたり。修證無上は其の相云何。頌に曰はく、

(一一二)[四八]修證とは謂はく無闕と不毀と動と圓滿と
　　起と堅固と調柔と不住と無障と息となり。

論に曰はく、是の如き修證に總じて十種有り。一には種性修證、緣が無闕なるが故なり。二には信解修證、大乘を毀謗せざるが故なり。三には發心修證、下劣乘に擾動せらるゝに非ざるが故なり。四には正行修證、波羅蜜多が圓滿するを得るが故なり。五には離生に入る修證、聖道を起すが故なり。六には有情を成熟する修證、堅固の善根が長時に集するが故なり。七には淨土修證、心が調柔なるが故なり。八には不退地の受記を得る修證、生死と涅槃とに[四九]住せざるを以て、此の二種に退轉せらるゝに非ざるが故なり。九には佛地修證、二障無きが故なり。十には示現菩提修證、休息無きが故なり。

[五〇]無上乘の總義とは略して三種の無上乘の義有り。謂はく正行無上の故にと、正行持無上の故にと、正行果無上の故にとなり。

何が故に此論を辯中邊と名づくるや。頌に曰はく、

【四八】「具足と及び不起と遠離と圓滿ならしむと生起と及び堅固と隨事と無住處と無障と及び不捨とは十の習起なり、應に知るべし。」

【四九】現行本には住著とあるも述記に著の字なし。

【五〇】中邊論は本節を結末の部に置く。

く、或は全く用無しと執すればなり。是の如き二邊の分別を離れんが爲に、初の燈の喩を說く。
不起を分別し、時等を分別すれば、各一邊と爲る、彼は能治は畢竟して起らずと執し、或は染と應に時長を等しくすべしと執すればなり。是の如き二邊の分別を離れんが爲に、後の燈の喩を說く。
[四一]是の如く已に二邊を離れたる正行を說きたり。差別無差別の正行は云何。頌に曰はく、

(百十)[四二]差別と無差別とは、應に知るべし、十地に於ける
十波羅蜜多の增上と等との修集なり。

論に曰はく、十地の中に於て、十到彼岸の隨一が增上し而して修集せば、應に知るべし、說いて差別正行と爲し、一切地に於て皆等しく布施等の十波羅蜜多を修集せば、是の如き正行を無差別と名づく。
[四三]六の正行の總義とは、謂はく卽ち是の如きは品類の最勝なり。此に由りて施設する所に如ふ大乘法等を思惟す。是の如き品類の無亂轉變に由りて[四四]奢摩他を修し、及び無倒轉變にて[四五]毘鉢舍那を修す。是の如き義の爲に中道行を修して出離を求む。十地の中に於ては差別と無差別との行を修習す。
是の如く已に正行無上を說きたり。所緣無上は其の相云何。頌に曰はく、

(百一)[四六]所緣とは謂はく安と界と所と能との立と任持と、
印と內との持と通達と增と證と運と最勝となり。

論に曰はく、是の如き所緣に十二種有り。一には安立法施設所緣、二には法界所緣、三には所立所緣、四には能立所緣、五には任持所緣、六には印持所緣、七には內持所緣、八には通達所緣、九には增[四七]廣所緣、十には分證所緣、十一には等運所緣、十二には最勝所緣なり。此の中にて、最初は謂はく所安立の到彼岸等の差別の法門なり。第二は謂はく眞如なり。第三と第四とは、次の如く、

【四一】以上を中邊論は十四種の二邊となす。辯中邊論には數字を出さゞるも、述記は十五種とし、十四種となすは誤とし、安慧の釋にも十五種ありといふ。之によつて玄奘將來の梵本中に安慧釋のある本論ありしを知る。
【四二】「勝と有等との修行は、應に知るべし、十地に於てなり。」
【四三】中邊論は此節をこゝに置かずして、本論結尾の近くに置く。
【四四】śamatha 止と譯す。
【四五】vipaśyanā 觀と譯す。
【四六】「安立と及び性界と、所成と、能成就と持と決と定依止と通達と及び廣大と品行と及び生界と最勝と、なり。等は應に知るべし。」
【四七】廣は長ともあり、述記は廣とす。

於て分別して無と爲す。是の如き二邊の分別を離れんが爲に、中道行を說く、謂はく補特伽羅を滅せんが爲に方に空性を立つるならず、然も彼の空性は本性自ら空にして前際も亦空、後際も亦空、中際も亦空なり、乃至、廣說す。

所寂を分別し、能寂を分別すれば、各一邊と爲る、所斷有り及び能斷有りと執して、空を畏怖するが故なり。是の如き二邊の分別を離れんが爲に、虛空の喩を說く。

所怖を分別し、彼より生ずる所の可畏を分別すれば、各一邊と爲る、遍計所執の色等有りて怖を生ずべしと執するが故なり、彼より生ずる所の苦法有りて畏を生ずべしと執するが故なり。是の如き二邊の分別を離れんが爲に、畫師の喩を說く。前の虛空の喩は聲聞の爲に說き、今の畫師の喩は菩薩の爲に說く。

所取を分別し、能取を分別すれば、各一邊と爲る。是の如き二邊の分別を離れんが爲に、幻師の喩を說く。唯識の智に由りて無境の智生じ、無境の智が生ずるに由りて復唯識の智を捨つ、境にして旣に有に非ずんば、識も亦是れ無なり、要ず所緣に託して、識は方に生ずるが故なり。斯に由りて、所喩と喩とは同法なり。

正性を分別し、邪性を分別すれば、各一邊と爲る、如實觀を正と爲し、邪と爲すは二種の性なりと執するが故なり。是の如き二邊の分別を離れんが爲に、兩の木の火を生ずる喩を說く、謂はく兩の木には火相無しと雖、相鑽截するに由りて而も能く火を生じ、火旣に生じ已つて還た兩の木を燒くが如し。此の如實觀も亦復是の如し、聖道正性の相無しと雖、而も能く正性の聖慧を發生す、是の如く正性の聖慧生じ已つて、復能く此の如實觀を除遣す。斯に由りて所喩と喩と同法なり。然も如實觀には正性の相は無しと雖、正性に順ずるが故に、亦邪性の相も無きなり。

有用を分別し、無用を分別すれば、各一邊と爲る、彼は聖智は、要ず先に分別して方に能く染を除

治の邊なり。此の執を離れんが爲に、中道行を說く、謂はく二邊に於て隨ひ[39]勸め讃せざるなり。

有情法に於て定んで執して有と爲すは是れ常住の邊なり、定んで非有を執せば是れ斷滅の邊なり。此の執を離れんが爲に、中道行を說く、謂はく卽ち此の二邊に於ける中智なり。

無明有りと執せば、所取能取は各一邊と爲る、若し明有りと執せば、所取能取は各一邊と爲る。是の如く所治の諸行と能治の無爲と乃至、老死と及び能く彼を滅する諸の對治道有りと執せば、所取能取は各一邊と爲る、此の所治と能治との所取能取は卽ち是れ黑品と白品との差別なり。此の執を離れんが爲に、中道行を說く、謂はく明と無明とは[40]二無く二分無し、乃至、廣說す、明無明等の所取能取は皆有に非るが故なり。

雜染に三有り、謂はく煩惱雜染と業雜染と生雜染となり。煩惱雜染に復三種有り、一には諸見、二には貪瞋癡の相、三には後有の願なり。此れが能對治は謂く空智と無相智と無願智となり。業雜染とは謂はく所作の善惡業なり。此れが能對治は謂はく不作の智なり。生雜染に三種有り。一には後有の生と二には生じ已つて心心所の念念に起ると三には後有の相續となり。此れが能對治は謂はく無生智と無起智と無自性智となり。是の如き三種の雜染の除滅を說いて清淨と爲す。空等の智の境は謂はく空等の法なり。三種の雜染は其の所應に隨つて、空等の智が空等と作らしむるには非るなり。彼れが本性は是れ空性等なるに由る、法界の本來の性は無染なるが故なり。若し法界に於て、或は雜染と執し或は淸淨と執せば各一邊と爲る、本性は無染にして、染淨に非るが故なり。此執を離れんが爲に、中道行を說く。謂はく空に由らずして能く法を空ず、法性は自ら空なり、乃至、廣說す。

復七種有りて、二邊を分別す。何等をか七と爲す。謂はく有を分別し、非有を分別すれば、各一邊と爲る、彼は實に補特伽羅有りと執す、壞滅するが爲に空性を立るを以ての故なり、或は無我に

【三九】現行本に觀とあるも、述記に勸とあり。不隨、不勸、不讃の意にて、染淨に隨つて執を起さしめず、他に勸めて染淨を執せず、染淨を讃說して他をして信聞して定執を起さしめずの意味なり。

【四〇】二無しとは二體なきなり、二分無しとは離別して其を二と爲すべからざるなり。無明は十二緣起の最初のものをいふが故に、猶十一あり。故に此十一を廣說といひて省略せるなり。

(百六)異性と一性となり、外道と及び聲聞となり。[三五]
増益と損減との邊は有情と法とに各二あり。
(百七)所治と及び能治となり、常住と斷滅となり、
所取と能取との邊なり、染と淨との二には三種有り。
(百八)二邊の性を分別すれば、應に知るべし、復七有り。
謂はく有と非有との邊なり、所と能との寂なり、怖と畏となり、
(百九)所と能との取なり、正と邪となり、有用と并に無用となり、
不起と及び時等となり。是れ二邊を分別するなり。

論に曰はく、若し色等に於て我は異る有りと執し、或は是れ一なりと執せば、各一邊と爲る。[三六]此の執を離れんが爲に、中道行を說く、[三七]謂はく我乃至儒童無しと觀ずるなり。我有りと見れば定んで此の執を起す、我は身に異り、或は身に卽するが故なり。

若し色等に於て執して常住なりと爲さば、是れ外道の邊なり、無常と執せば、是れ聲聞の邊なり。此の執を離れんが爲に、中道行を說く、謂はく色等は常無常に非ずと觀ずるなり。

定んで我有りと執せば、是れ有情を増益するの邊なり、定んで我無しと執せば、是れ有情を損減するの邊なり、彼も亦假の有情を撥無するが故なり。此の執を離れん爲に、中道行を說く、謂はく我無我の二邊の中智に[三八]住するなり。

定んで心は有實なりと執せば、是れ法を増益するの邊なり、定んで心は無實なりと執せば、是れ法を損減するの邊なり。此の執を離れんが爲に、中道行を說く、謂はく此處に於ては心なく思なく意なく識なきなり。

不善等の諸の雜染法有りと執せば、是れ所治の邊なり、善等の諸の清淨法有りと執せば、是れ能

【三五】「別異邊と一邊となり、外道と及び聲聞となり、増益と損減との二種は人及び法にあり、非助と對治との邊なり、斷と常とを有邊と名づく、能取と及び所取となり、染と淨とにこの三あり、二種の邊を分別すれば、應に知るべし、七種有り、有と無となり、及び應止と能止となり、可畏と畏となり、能取と所取との邊なり、正と邪となり、事と無事となり、不生と及び俱時となり、有と無との分別の邊なり。」

【三六】現行本には各の代りに名とあり、名づけて一邊と爲すと讀まる。述記は各とす。述記の解釋には名づけて一邊と爲すともあり。

【三七】謂の次の觀無我乃至儒童が寶積經の文なり。乃至は述記に有情と命者と生者と養育者と數取趣者と意生者とを略せるを示し、合せて八となるとなす。

【三八】現行本に住なきも、述記にはあり。

無滅と亦無增と、是れ十の金剛句なり。

且く初に十の金剛句を安立す。自性とは謂はく自性の故に、所緣の故に、無分別の故に、難を釋するが故になり。自性の故にとは、謂はく三自性なり、即ち圓成實と遍計所執と及び依他起とにして、是れ初の三句なり、次の如し、應に知るべし。所緣の故にとは即ち三自性なり。無分別の故にとは、謂はく此に由る無分別は即ち無分別智なり、及び此に於ける無分別は即ち本性清淨なればなり、次の如く、應に知るべし、境と智とを安立するなり、謂はく三自性と及び無分別となり。難を釋するが故にとは謂はく所餘の句なり。且く有が難じて言はく、遍計所執と依他起との相は、若し實に是れ無ならば、云何が得べき、若し實に是れ有ならば、應に諸法は本性清淨なるべからずと。此の難を釋せんが爲に、幻等の喩を説く、幻事等の如きは、實には是れ無なりと雖、而も現じて得べければなり。復、有が難じて言はく、若し一切法にして本性清淨ならば、如何ぞ先に染にして後に淨なること有るを得んと。此の難を釋せんが爲に、染淨有ると及び虚空の喩とを説く、謂はく虚空の如きは本性淨なりと雖、而も雜染と及び清淨との時有り。復、有が難じて言はく、無量の佛有りて、世に出現して一一に能く無量の有情を度し、生死を出でて涅槃に入らしめば、云何ぞ生死に斷[三二]滅の失無く、涅槃界の中に增益の過無きやと。此の難を釋せんが爲に、染と及び淨とにて無滅無增なることを説く、又有情界と及び清淨品とは俱に無量なるが故なり。

第二に彼の自性を安立すとは、有頌に言ふが如し。

[三三]亂境と自性と因と無亂の自性と境と
亂と無亂との二果と及び彼の二の邊際となり。

是の如く巳に隨法正行を説きたり。二邊を離れたる正行を云何が應に知るべきや。[三四]寶積經の所説の中道行の如し。此の行は何等かの二邊を遠離するや。頌に曰はく、

【三二】現行本には斷滅とあれど、述記には斷減とあり。減の方可なり。

【三三】述記に「相傳に亦いふ、寶積經の頌なりと」とあり。中邊分別論に是に相當する偈なし。

【三四】大寶積經の略、(大正藏三一〇) 中邊論は寶頂經となす。

る無倒と名づく。

無怖無高に於ける倶の無顛倒とは、頌に曰はく、

（百五）有情と法とは無なるが故に染淨の性も倶に無なり。[二九]

此の無怖高を知らば、是れ二に於ける無倒なり。

論に曰はく、有情と及び法とは倶に有に非るが故に、彼が染淨の性も亦倶に有には非ず。染淨の義が倶に不可得なるを以ての故に、染淨品は減無く增無し。此に由りて中に於て無怖無慢なり。如實に無怖高を知見せば、應に知るべし、是を二に於ける無倒と名づく。

[三〇]無倒の行の總義とは謂はく文の無倒に由りて、能く正しく止と觀との二相に通達し、義の無倒に由りて、能く正しく諸の顛倒の相に通達し、作意の無倒に由りて、倒の因緣に於て能く正しく遠離し、不動の無倒に由りて、善く彼の相を取り、自相の無倒に由りて、彼が對治の無分別道を修し、共相の無倒に由りて、能く正しく本性清淨に通達し、染淨の無倒に由りて、未だ斷ぜざると及び已に斷ぜるとの障を了知し、客の無倒に由りて、如實に染淨の二相を了知し、無怖と無高との二種の無倒に由りて、諸の障は斷滅して永出離を得るなり。

此の十の無倒は、次の如く、彼の十種の金剛句の中に安立す。何等をか名づけて十の金剛句と爲すや。謂はく有非有と無顛倒と所依と幻等の喩と無分別と本性清淨と雜染清淨と虛空喩と無減と無增となり。

是の如き十の金剛句を攝せんが爲に二頌有り、言はく、

[三一]應に知るべし、有非有と無顛倒と所依と、

幻等と無分別と本性常に清淨なると、

及び雜染清淨なると性淨なること虛空に喩ふと

【二九】「染汚と及び清淨とは法と人との二に倶に無なり、無なるが故に怖と慢となし、是れ二處の無倒なり。」

【三〇】中邊論は本節をこゝに置かずして、論の最後部に置く。

【三一】述記に「西域相傳す、是れ寶積經の文なりと」とあり。中邊論には之に相當する偈なく、又此偈を釋する節なし。

(百一)自相に於ける無倒とは一切は唯名のみなることを知りて、[25]
一切の分別を離る。勝義の自相に依るなり。

論に曰はく、如實に一切の眼色乃至意法は皆唯名有るのみなることを知見せば、即ち能く一切の分別を對治す。應に知るべし、是れ自相に於ける無倒なり。此は勝義自相に依りて說くなり。若し世俗に依らば但名有るのみには非ず、種種なる差別の相を取るべきが故なり。

共相に於ける無倒とは、頌に曰はく、

(百二)眞法界を離れて別に一法も有ること無きを以て[26]
故に此に通達せば、共相に於ける無倒なり。

論に曰はく、一法として法無我を離れたる者無きを以ての故に、眞法界を諸法の共相に攝す。如實に此の共相を知見せば、應に知るべし、是れ共相に於ける無倒なり。

染淨に於ける無倒とは、頌に曰はく、

(百三)顚倒の作意の未だ滅せざると及び已に滅せるとを知らば、[27]
法界の雜染と淸淨とに於て無顚倒なり。

論に曰はく、若し未だ顚倒の作意を斷滅せずんば、爾時には法界を說いて雜染と爲し、已に斷滅せる時には說いて淸淨と爲す。如實に此染淨を知見せば、次の如く、是れ染淨に於ける無倒なり。

客に於ける無倒とは其の相は云何。頌に曰はく、

(百四)法界の本性は淸淨なること虛空の如し、[28]
故に染淨は主なるには非ずと知らば、是れ客に於ける無倒なり。

論に曰はく、法界の本性は淨なること虛空の如し。此に由りて、應に知るべし、先染と後淨との二の差別の相は是れ客にして主には非ず。如實に此の客相を知見せば、應に知るべし、是を客に於け

【二五】「一切は唯名有るのみ、爲に分別は起らず。是れ別相の無倒なり。」四分の一偈足らず。

【二六】「法界より出離せば更に一法も有ること無し、故に法界は通相なり。此の智は是れ無倒なり。」

【二七】「顚倒の邪思惟の未滅と及び已滅とは此の不淨と及び淨となり。是れ彼の不顚倒なり。」

【二八】「法界の性は淨なるが故に、之を譬ふれば虛空の如し。此の二種は是れ客なり。是れ彼の不顚倒なり。」

是を義に於ける無倒と名づくるなり。

作意に於ける無倒とは、頌に曰はく、

(九九)[三二]作意に於ける無倒とは、彼の言の熏習するは、

言の作意にして彼が依なり、現じて二に似る因なるが故なりと知るなり。

論に曰はく、所取と能取とは言の所熏習にして、言の作意と名づく。卽ち此の作意は是れ所と能との取の分別の所依なり。是は能く現じて二取に似るの因なるが故なり。此の作意は是れ戲論想の所熏習なるに由りて、言の作意と名づくるなり。如實に此の作意を知見せば、應に知るべし、是れ作意に於ける無倒なり。

不動に於ける無倒とは、頌に曰はく、

(百)[三三]不動に於ける無倒とは謂はく義の有にも非ず、

無にも非ず幻等の如く、有と無とが不動なるが故なりと知るなり。

論に曰はく、前に諸義は有と非有とを離ると說きたり、此は幻等の如く、有にも無にも非るが故なり。謂はく幻作の諸の象馬等の如きは彼は實には象馬等の性有るには非ず、亦全く無きにも非ず、亂識が彼の諸の象馬等に似て而も顯現するが故なり。是の如き諸義は現じて所取と能取とに似るも定んで實有の性の如きこと無し。亦全く無にも非ず、亂識が彼の所取と能取とに似て而も顯現するが故なり。等の[三四]聲は陽焰と夢境と及び水月と等を顯示す、應の如く、當に知るべし。能く義の幻等の如くなることを諦觀するを以て、有無品に於て心動散せざるなり。如實に此の不動を知見せば、應に知るべし、是れ不動に於ける無倒なり。

二相に於ける無倒とは謂はく自相と及び共相と有る中にて倶に顚倒無きなり。

自相に於ける無倒とは、頌に曰はく、

【三二】「此の言熏の言と思と彼が依とは思の無倒なり。二種を顯はすが爲の因なり。」四分の一偈足らず。

【三三】「幻等の如く有ならざると亦有なるとの義は、應に知るべし、是れ不動の無倒なり。有と無とは不散なるが故なり。」

【三四】聲は言の意。頌に幻等といふ等の字はこの意なり。

亂なり、下劣乘に依りて作意を起すが故なり。菩薩は此の六の散亂の相に於て應に遍く了知すべく、當に速に除滅すべし。

是の如く已に無散亂轉變を說きたり。無轉倒轉變は云何が應に知るべきや。頌に曰はく、

(九六)[19]知見の、文と義と作意と及び不動と、
　二の相と染淨と客と怖と高と無きとに於ける無倒なり。

論に曰はく、十事の中の如實の知見に依りて、應に知るべし、十の無倒の名を建立す。

此の中にて、云何が文に於ける無倒なる。頌に曰はく、

(九七)[20]但、相應と串習と或は此に翻ずるとに由りて、
　有義と及び有に非るとを知る、是れ文に於ける無倒なり。

論に曰はく、若し諸文に於て能く間斷無く次第に宣唱せば、說いて相應と名づけ、此名は唯此事にのみ目づくと共許し、展轉して憶念するを名づけて串習と爲す。但此の二のみに由りて有義の文と成る。此れと相違せば文は無義と成る。如實に此の二文を知見せば、應に知るべし、是を文に於ける無倒と名づく。

義に於ける無倒とは其の相は云何。頌に曰はく、

(九八)[21]二性に似て顯現すると現の如くには實には有に非ると、
　有と非有とを離るゝを知るとは是れ義に於ける無倒なり。

論に曰はく、二性に似て顯現すとは、謂はく所取と能取との性に似て現ずるなり、亂識が彼の行相に似て生ずるが故なり。現の如くには實には有に非ずとは謂はく所顯現の如くには實には是の如く有ならざるなり。有を離るとは謂はく此の義は所取能取にして性は有に非るが故なり。非有を離るとは謂はく彼の亂識が現じて有に似るが故なり。如實に此の中の義を知見せば、應に知るべし、

【一九】「言辭と義と思惟と不動と二相の處と不淨及び淨と客と無畏と及び無高となり。」

【二〇】「聚集と數習との故に義有ると義無きと是れ言辭の無倒なり。」四分の一偈足らず。

【二一】「顯現して二種に似ると顯の如くにして實有ならざると、是を義の無倒と名づく。有無の邊を遠離す。」

の如く說かざるや。頌に曰はく、

　勝[一六]の故なり、無盡の故なり。他を攝すると息まざるとに由るなり。

論に曰はく、此の大乘に於て諸の法行を修するは二緣に由るが故に最大の果を獲るなり。一には最勝の故なり、二には無盡の故なり。能く他の諸の有情を攝益するに由りて、是の故に大乘を說いて最勝と爲し、無餘涅槃を證得すと雖、他を利益するの事の而も恒に息まざるに由りて、是の故に大乘を說いて無盡と爲すなり。

是の如く已に作意正行を說きたり。隨法正行は其の相云何。頌に曰はく、

(九四)隨[一七]法行は二種なり、謂はく諸の無散亂と、

　無轉倒との轉變なり。諸の菩薩は應に知るべし。

論に曰はく、隨法正行に略して二種有り。一には無散亂轉變、二には無轉倒轉變なり、菩薩は此に於て應に正しく了知すべし。此の中には六種の散亂無きが故に無散亂と名づく。六の散亂とは、一には自性散亂、二には外散亂、三には內散亂、四には相散亂、五には麁重散亂、六には作意散亂なり。

此の六種の相を云何が應に知るべきや。頌に曰はく、

(九五)出[一八]定と境に於て流ると味沈掉と矯示と、

　我執と心下劣なるとなり。諸の智者は應に知るべし。

論に曰はく、此の中にて、出定は五識身に由るなり。當に知るべし、即ち是れ自性散亂なり。境に於て流るとは外緣に馳散するなり、即ち外散亂なり。味沈掉とは等持に味著すると惛沈と掉擧とにして、即ち內散亂なり。矯示とは即ち相散亂なり、矯に相を現じ已つて、修定加行するが故なり。我執とは即ち麁重散亂なり、麁重力に由りて我慢が現行するが故なり。心下劣なるとは即ち作意散

【一六】「最勝と無盡との故なり。他を利して息まざるが故なり。」

【一七】「隨法に三種有り。不散動と顚倒となり。」半偈足らず。

【一八】「觀より起つと六塵に行ずると貪味下掉の起ると決意無きと定に於ての思量處の我慢と下劣心との散亂なり。智者は當に知るべし。」

論に曰はく、若し諸の菩薩にして聞と思と修との所成の妙慧を以て、數數作意して、大乘を思惟し、布施等に依りて施設する所の契經等の法に[一一]如(かな)へば、是の如きを名づけて作意正行と爲す。

此の諸の菩薩は三の妙慧を以て大乘を思惟して何の功德有りや。頌に曰はく、

(九一)此は[一二]善界を增長すと義に入ると及び事の成ずとなり。

論に曰はく、聞所成の慧は大乘を思惟して能く善根界をして增長することを得しめ、思所成の慧は大乘を思惟して能く正しく所聞の實義に悟入し、修所成の慧は大乘を思惟して能く所求の事業をして成滿せしむ、謂はく能く修治地に趣入するが故なり。

作意正行に何の助伴有りや。頌に曰はく、

[一三]此の助伴は、應に知るべし、卽ち十種の法行なり。

論に曰はく、應に知るべし、是の如き作意正行は十の法行の攝受する所たるに由る。

何等をか名づけて十種の法行と爲すや、頌に曰はく、

(九二)[一四]謂はく書寫すと供養すと他に施すと聽くと披讀すと、

受持すと正しく開演すと諷誦すと及び思すと修すとなり。

論に曰はく、此の大乘に於て十の法行有り。一には書寫す。二には供養す。三には他に施す。四には若し他にして誦讀せば、專心に諦聽す。五には自ら披讀す。六には受持す。七には正しく他の爲に文義を開演す。八には諷誦す。九には思惟す。十には修習す。

十の法行を行じて幾種の福を獲るや。頌に曰はく、

(九十三)[一五]十の法行を行ぜば福聚を得ること無量なり。

論に曰はく、是の如きの十種の法行を修行せば獲る所の福聚は其の量無邊なり。

何が故に但大乘經等に於てのみ、法行を修して最大の果を獲ることを說き、聲聞乘に於ては、是

【一二】「界を長養すること、入ることゝを爲し事の究竟することを得ることを爲す。」

【一三】「十種の正行法と共に相應す、應に知るべし。」

【一四】「書寫すと供養すと施すと聽くと讀むと及び受持すと廣說すと及び讀誦すと思惟すと及び修習すとなり。」

【一五】「無量の功德聚が是の十種の正行にあり。」

十の波羅蜜多に皆斯の如きの十二の最勝有るに由りて、是の故に皆[七]到彼岸の名を得るなり。何等をか名づけて十の到彼岸と爲すや。頌に曰はく、

(八八)十の波羅蜜多とは謂はく施と戒と安忍と、[八]
　精進と定と般若と方便と願と力と智となり。

論に曰はく、此は施等の十度の別名を顯はす。施等は云何が各別に業を作すや。頌に曰はく、

(八九)饒益と不害と受と增德と能く入ると脱すと、[九]
　無盡と常に起ると定なると受用して他を成熟すとなり。

論に曰はく、此は施等の十の到彼岸の各別の事業を顯はす、次の如し、應に知るべし。謂はく諸の菩薩は布施波羅蜜多に依るが故に、諸の有情に於て普く能く饒益す。淨戒波羅蜜多に由るが故に、諸の有情に於て損害を爲さず。安忍波羅蜜多に由るが故に、他が損害する時にも深く能く忍受す。精進波羅蜜多に由るが故に功德を增長す。靜慮波羅蜜多に由るが故に、神通等を起し能く有情を引いて正法に入らしむ。般若波羅蜜多に由るが故に、能く正しく有情を教授し教誡して解脱を得しむ。方便善巧波羅蜜多に由るが故に、無上正等菩提に廻向して能く施等の功德をして無盡ならしむ。願波羅蜜多に由るが故に、施等に隨順する勝れたる生を攝受し、一切の生の中にて恒に佛に値ふことを得て恭敬し供養し、常に施等を起す。力波羅蜜多に由るが故に、思擇と修習との二力を具足して諸障を伏滅し、能く施等をして常に決定して轉ぜしむ。智波羅蜜多に由るが故に、聞くと言ふとの如くにして(起る)諸法の迷謬を離れ、施等の增上法樂を受用し、無倒にして一切の有情を成熟す。

是の如く已に最勝正等を説きたり。作業正行は其の相云何。頌に曰はく、

(九十)菩薩が三慧を以て恒に大乘を思惟し、[一〇]
　施設する所の法に[一一]如ふを作意正行と名づく。

【七】到彼岸は波羅蜜多(Pāramitā)の譯、度とも譯す。

【八】「施と戒と忍と精進と定と般若と方便と願と力と及び闍那と、此の十は無比の度なり。」

【九】「財利と不損害と安受と增功德と除惡と及び入らしむと解脱と無盡と常に起ると及び決定と樂法と事を成熟すとなり。」

【一〇】「正法を言説するが如くに大乘義を思量す。是れ菩薩の常事にして、三種の般若に依る。」

【一一】如は述記に相稱の義と釋す。故にかなふの意なり。然し、通常の意にて、如くと讀むも必ずしも不可ならず。從って「大乘の施設する所の如き法を思惟するを作意正行と名づく」並に「大乘の布施等に依りて施設する所の如き契經等の法を思惟せば」と讀むも可ならむ。

論に曰はく、即ち十種の波羅蜜多に於て修の差別に隨つて六の正行有るなり。一には最勝正行、二には作意正行、三には隨法正行、四には二邊を離れたる正行、五には差別正行、六には無差別正行なり。

最勝正行は其の相云何。頌に曰はく、

(八六)最勝[四]に十二あり。謂はく廣大と長時と、
　依處と及び無盡と無間と無難性と、
(八七)自在と攝と發起と得と等流と究竟となり。
　斯に由りて十度を說いて波羅蜜多と名づくるなり。

論に曰はく、最勝正行に十二種有り。一には廣大最勝、二には長時最勝、三には依處最勝、四には無盡最勝、五には無間最勝、六には無難最勝、七には自在最勝、八には攝受最勝、九には發起最勝、十には至得最勝、十一には等流最勝、十二には究竟最勝なり。此の中にて、廣大最勝とは終に一切の世間の富樂自在を欣樂せずして志高遠なるが故なり。長時最勝とは三無數劫に熏習して成ずるが故なり。依處最勝とは普く一切の有情を利樂せんが爲に依處と爲るが故なり。無盡最勝とは無上正等菩提に迴向して窮盡すること無きが故なり。無間最勝とは自他平等の勝解を得るに由りて諸の有情に於て施等の波羅蜜多を發起し速に圓滿するが故なり。無難最勝とは他の有情の所修の善法に於て但深く隨喜するのみにして自の施等の波羅蜜多をして速に圓滿せしむるが故なり。自在最勝とは虛空藏[五]等の三摩地の力に由りて所修の施等をして速に圓滿せしむるが故なり。攝受最勝とは無分別地の攝受する所にして、能く施等をして極淸淨ならしむるが故なり。發起最勝とは勝解行地の最上品の忍の中に在るなり。至得最勝とは極喜地[六]に在るなり。等流最勝とは次の八地に在るなり。究竟最勝とは第十地及び佛地の中に在るなり、菩薩と如來との因と果とが滿ずるが故なり。施等の

【四】「廣大と及び長時と增上體と無盡と無間と及び無難と自在と及び攝治と極作と至得と流と究竟とは無比の知なり。此處の無比の義にて十の波羅蜜なるを知る。」

【五】虛空藏三昧、大乘光明三昧、首楞嚴三昧など。三摩地は Samādhi の音譯、三昧とも音譯す。

【六】十地の第一地、次の八地とは第二地より第九地までをいふ。

謂はく卽ち數習と及び究竟との果なり、學と無學との位に次の如く煩惱の繫を遠離するが故なり。八には殊勝果、謂はく神通等の殊勝の功德なり。九には有上果、謂はく菩薩地なり。餘乘に超出するも未だ成佛せざるが故なり。十には無上果、謂はく如來地なり、此の上には更に餘の勝法無きが故なり。此の中の所說の後の六種の果は卽ち究竟等の前の四の差別なり。是の如き諸果は但是れ略說なるのみ。若し廣說すれば卽ち無量なり。

[六] 果の總義とは、謂はく攝受の故に、差別の故に、宿習の故に、後後引發の故に、標の故に、釋の故になり。此の中の攝受とは謂はく五果なり、差別とは謂はく餘果なり、宿習とは謂はく異熟果なり、後後引發とは謂はく餘の四果なり、標とは謂はく後後等の四果なり、釋とは謂はく隨順等の六果なり、前の四果を分別するが故なり。

[一] 辯無上乘品第七

已に得果を辯じたれば、無上乘を今當に說くべし、頌に曰はく、

(八四)[二] 總じて三の無上に由りて說いて無上乘と爲す。
謂はく正行と所緣と及び修證との無上なり。

論に曰はく、此の大乘の中にては、總じて三種の無上の義に由るが故に無上乘と名づく。三の無上とは一には正行無上、二には所緣無上、三には修證無上なり。

此の中にて正行無上とは謂はく、十の波羅蜜多の行なり。此の正行の相は云何が應に知るべきや。頌に曰はく、

(八五)[三] 正行に六種有り。謂はく最勝と作意と、
隨法と二邊を離れたると差別と無差別となり。

【六】 中邊論は此前に修習對治の總義と修住の總義とを擧げ、次に上文本節に相當する得果の總義を擧ぐ。これ中邊論は、此三品を中卷となすが故に、茲に中卷の所述を纏めて結論せるが爲に三の總義を擧げたるなり。辯中邊論述記の著者は修習對治と修住との二總義が中邊論に於て茲にあるは宜しからずとなす。而も梵本の中には中邊論と同順序のものありと記す。故に玄奘所持の梵本中にも中邊論と同じ形式のものありしこと明なり。

【一】 「無上乘品第七」

【二】 「無上乘は三處なり。修行と及び境界と亦聚集起を說くとなり。」四分の一偈不足す。

【三】 「修行に六種有り。」と「無比と及び思擇と隨法と離邊と別と及び通との六修なり。」とに分ち釋す。

巻の下[一]

辯得果品第六[二]

巳に修位を辯じたり。得果は云何。頌に曰はく、

(八二)器を說いて[三]異熟と爲すと力は是れ彼の增上なると、

愛樂と增長と淨とは、次の如く、卽ち五果なり。

論に曰はく、器とは謂はく善法に隨順する異熟なり。力とは謂はく彼の器の增上の力に由りて、諸の善法をして上品性を成ぜしむるなり。愛樂とは謂はく先世に數〻修せる善の力にて、今世に善法に於て深く愛樂を生ずるなり。增長とは謂はく現在に數〻修する善の力にて、所修の善根をして速に圓滿なるを得しむるなり。淨とは謂はく障の斷なり、永に繫を離ることを得ればなり。此の五は、次の如し、卽ち是れ五果なり、一には異熟果、二には增上果、三には等流果、四には士用果、五には離繫果なり。

復次に、頌に曰はく、

(八三)復略して餘果を說かば[四]、後後と初と數習と、

究竟と順と障滅と離と勝と上と無上となり。

論に曰はく、略して餘果の差別を說かば十有り。一には後後果、謂はく種性を因として發心の果を得、是の如き等の果が展轉するなり、應に知るべし。二には最初果、謂はく最初に出世間法を證するなり。三には數習果、謂はく此より後の諸の有學位なり。四には究竟果、謂はく無學位[五]なり。五には隨順果、謂はく漸次に因たり、應に知るべし、卽ち是れ後後果の攝なり。六には障滅果、謂はく能斷道なり、卽ち最初果にして、能く障を滅するが故に說いて障滅と爲すなり。七には離繫果、

【一】上巻の初と同じく造論者譯者を擧ぐ。

【二】「得果品第六。」

【三】「器果と及び報果と此は是れ增上果なり。愛樂と及び增上と淸淨との果は次第す。」

【四】「上上と及び初との果と數習と究竟との果と隨順と及び對治と相離と及び勝位と有上と無上となり。故に果を略說せば是の如し。」

【五】原文には無學法とあれど、述記には無學位とあり、又後文にも無學位とあれば、今改む。

は住種性なり、此は已發心なり等と。

[五]修の分位の總義とは、謂はく堪能位卽ち種性位なると、發趣位卽ち入と加行との位なると、不淨位と淨不淨位と、淸淨位と、有莊嚴位と、遍滿位謂はく十地に遍滿するが故なると、無上位となり。

【五】中邊論にはこゝに此節なきも、下の得果品の末部にあり。七位の中、初一は十八位の第一を、第二は第二第三を、第三と第四と第五とは順次に第一第二第三と第五と第六とを、第六は第七を、第八は第四第五第八第十一第十二第十三第十四第十五を、第九は第十六第十七第十八を攝す。

種性補特伽羅なり。二には入位、謂はく已發心なり。三には加行位、謂はく發心し已つて未だ果證を得ざるなり。四には果位、謂はく已に果を得たるなり。五には有所作位、謂はく住有學なり。六には無所作位、謂はく住無學なり。七には殊勝位、謂はく已に諸の神通等の殊勝の功德を成就せるなり。八には有上位、謂はく聲聞等を超えて已に菩薩地に入れるなり。九には無上位、謂はく已に成佛せるなり、此より以上には勝位無きが故なり。十には勝解行位、謂はく勝解行地の一切の菩薩なり。十一には證入位、謂はく極喜地なり。十二には出離位、謂はく次の六地なり。十三には受記位、謂はく第八地なり。十四には辯說位、謂はく第九地なり。十五には灌頂位、謂はく第十地なり。十六には證得位、謂はく佛の法身なり。十七には勝利位、謂はく受用身なり。十八には成所作位、謂はく變化身なり。

此の諸の分位の差別は多なりと雖、應に知るべし、略說せば但三種有るのみなり。其の三とは何れか。頌に曰はく、

(八十)[三]應に知るべし、法界の中に略して三の分位有り。
　不淨と淨不淨と清淨となり、所應に隨ふ。

論に曰はく、眞法界に於て位に略して三有り、其の所應に隨つて前の諸位を攝す。一には不淨位、謂はく因位より乃し加行に至るまでなり。二には淨不淨位、謂はく有學位なり。三には清淨位、謂はく無學位なり。

云何が應に前の諸位の差別に依りて、補特伽羅を建立することを知るべきや。頌に曰はく、

(八十一)[四]前の諸位の中の有らゆる差別の相に依りて、
　所應に隨つて諸の補特伽羅を建立す。

論に曰はく、應に知るべし、前の諸位の別相に依りて、應の如く、補特伽羅を建立す、謂はく此

【三】「法界に復三有り。不淨と不淨々と清淨となり、次第の如し。」

【四】「此の中に人を安立すること、應に知るべし、道理の如し。」

菩薩と二乘との所修の對治に差別の相有るを云何が應に知るべき。頌に曰はく、

(七七)[二六]菩薩の修習する所は所緣と作意と

　證得との殊勝に由るが故に二乘とは差別あり。

論に曰はく、聲聞と獨覺とは自の相續身等を以て境と爲して對治を修するも、菩薩は通じて自と他との相續身等を以て境と爲して對治を修す。聲聞と獨覺とは身等の境に於て無常等の行相を以て思惟して對治を修するも、若し諸の菩薩ならば身等の境に於て無所得の行相を以て思惟して對治を修す。聲聞と獨覺とが念住等を修するは但身等の速に離繫を得んが爲のみなるも、若し諸の菩薩ならば念住等を修するは身等の速に離繫を得んが爲ならずして、但無住涅槃を證得せんが爲のみなり。菩薩と二乘との所修の對治は此の三緣に由るが故に差別有るなり。

[二九]修對治の總義とは謂はく開覺修と損減修と瑩飾修と發上修と隣近修、謂はく見道に隣近するが故にと證入修と增勝修と初位修と中位修と後位修と有上修と無上修、謂はく所緣と作意と至得との殊勝なるとなり。

辯修分位品第五[一]

已に對治を修することを說きたり。修の分位は云何。頌に曰はく、

(七八)[二]所說の修對治は分位に十八有り。

　謂はく因と入と行と果と作と無作と殊勝と

(七九)上と無上と解行と入と出離と記と說と

　灌頂と及び證得と勝利と成所作となり。

論に曰はく、前の所說の如く諸の對治を修する差別の分位に十八種有り。一には因位、謂はく住

【二六】「境界と及び思惟と至得とにて差別有るなり。」半偈不足す。

【二七】本節は中邊論には此處になくして、下の得果品の末部にあり。初めより增勝修までは順次に四念住四正斷四神足五根五力七覺支八正道を指し、中間の三は修治差別異生と有學と無學との三を指し後の三は菩薩と二乘との所修の對治の差別を指す。

【一】「修住品第五」

【二】「修住に四種有り。因と入と行と自得と有作と不作と意と有上と亦無上と願樂位と入位と出位と受記位と說者位と灌位と至位と功德位と作事位とは已に說きたり。」四分の一偈多し。次の偈にそれだけ不足すれば、相補ふなり。

命となり。四には對治障支、亦三種有り、謂はく正精進と正念と正定となり。此に由りて道支は略すれば四にして廣ずれば八なり。何の緣にて後の二は各分れて三と爲るや。頌に曰はく、

(七五)[二四]見と戒と遠離とを表はして他をして深く信受せしめ
　本と隨との惑と及び自在障とを對治するが故なり。

論に曰はく、正語等の三は、次の如く、己の見と戒と遠離とを表はして他をして信受せしむるなり、謂はく正語に由りて論議決擇し、他をして己が勝慧を有することを信知せしめ、正業に由るが故に、邪業を爲さずして、他をして己が淨戒を有することを信知せしめ、正命に由るが故に、量に應じ時に應じ、如法に衣鉢等の物を乞求して他をして己が勝遠離を有することを知らしむ。正精進等の三は、次の如く、本と隨との二の煩惱と及び自在障とを對治するなり。

此の所對治に略して三種有り。一には根本煩惱、謂はく修所斷なり。二には隨煩惱、謂はく惛沈と掉擧となり。三には自在障、謂はく所引の勝品の功德を障するなり。此の中にて、正精進は別して能く初を對治す、彼を對治せんが爲に修道を勤むるが故なり。正念は別して能く第二を對治す、念を繫して止等の相の中に安住し、惛沈と及び掉擧とを遠離するが故なり。正定は別して能く第三を對治す、勝れたる靜慮に依りて速に能く諸の神通等の勝功德を引發するが故なり。

修治の差別を云何が應に知るべき。頌に曰はく、

(七六)[二五]有倒にして無倒に順ずると無倒にして有倒が隨ふと
　無倒にして無倒が隨ふとは是れ修治の差別なり。

論に曰はく、此の修對治に略して三種有り。一には有顚倒にして無顚倒に順ずるなり。二には無顚倒にして有顚倒が隨ふなり。三には無顚倒にして無顚倒が隨ふなり。是の如き三種の修治の差別は、次の如く、異生と有學と無學との位に在り。

【二四】「見と戒と及び知足とは、應に知るべし、他をして信ぜしむ。」と「大惑と及び小惑と自在障との對治なり。」とに分つて釋す。

【二五】「不倒に隨ふも倒有ると顚倒に隨ふも不倒なると倒なく隨倒無きとは修對治の三種なり。」隨は遂の意、倒の爲に隨逐せらるゝをいふ。

(七二)覺支に略して五有り。謂はく所依と自性と、[二〇]
出離と、并に利益と及び三の無染支となり。

論に曰はく、此の支は覺を助くるが故に覺支と名づく。此に由りて覺支位は見道に在り。廣ずれば七種有るも、略すれば五支と爲る。一には覺の所依の支、謂はく念なり。二には覺の自性の支、謂はく擇法なり。三には覺の出離の支、謂はく精進なり。四には覺の利益の支、謂はく喜なり。五には覺の無染の支、此は復三種なり、謂はく安と定と捨となり。何が故に復無染を說いて三と爲すや。頌に曰はく、

(七三)因緣と所依と自性とに由りて義は差別す。[二一]
故に輕安と定と捨とを說いて無染の支と爲す。

論に曰はく、輕安は卽ち是れ無染の因緣なり、麤重を因と爲して諸の雜染を生ずるに、輕安は是れ彼の近對治なるが故なり。所依とは謂はく定なり、自性は卽ち捨なり、故に此の無染義は別しては三有るなり。

覺支を修することを說き已りたれば、當に[二二]道支を修することを說くべし。所修の道支は云何が安立するや。頌に曰はく、

(七四)分別と及び誨示と他をして信ぜしむるに三有ると、[二三]
對治障にも亦三あるとの故に道支は八と成る。

論に曰はく、修道位に於て道支を建立す、故に此は道支なり。廣ずれば八にして、略すれば四なり。一には分別支、謂はく正見なり、此は是れ世間なりと雖而も出世後得にして、能く見道位の中の自の所證を分別するに由るが故なり。二には他を誨示する支、謂はく正思惟と正語と一分の等起となり、言を發して他を誨示するが故なり。三には他をして信ぜしむる支、謂はく正語と正業と正

【二〇】「依の分と自體の分と、第三の出離の分と第四の功德の分と三種の滅惑の分となり。」

【二一】「因緣と、依處との故に、自性との故に、言說す。」半偈を揭げざれど、長行の釋にて明なり。

【二二】八正道なり。

【二三】「分決と及び至らしむと他をして信ぜしむる三種と不助法を對治するとにて道を說くに八分有るなり。」

心は是れ我執の所依緣の事なるが故に、此を觀察して滅聖諦に入る、我の斷滅を怖るゝことは斯に由りて離るゝが故なり。法を觀察するが故に染淨の法に於て愚迷を遠離して道聖諦に入る。是の故に、四聖諦の理に入るが爲に最初に四念住觀を修することを說くなり。

已に念住を修することを說きたれば、當に正斷を修することを說くべし。頌に曰はく、

(六五)已に障と治との一切種の差別を遍知したれば、[五]
遠離と、修集との爲に　[六]四正斷を勤修す。

論に曰はく、前に念住を修し已つて能く一切の障と治との品類差別を遍知したり、今所治の障法を遠離せむが爲に、及び能對治道を修集せむが爲に、四正斷に於て精勤し修習す。說くが如し、已生の惡不善法をして斷ぜしめんが爲の故に、乃至廣說す。[七]

已に正斷を修することを說きたれば、當に神足を修することを說くべし。頌に曰はく、

(六六)堪能性に依住し、一切の事の成ずるが爲に[八]
五の過失を滅除して、八斷行を勤修す。

論に曰はく、前の所修の離と集との精進に依りて、心は便ち安住して堪能する所有り。勝事の成ずるが爲に　[九]四神足を修す、是れ諸の所欲の勝事の因なるが故なり。住とは謂はく心の住なり、此は卽ち等持なり。故に正斷に次いで四神足を說くなり。此の堪能性は謂はく能く五種の過失を滅除し八斷行を修するなり。

何をか名づけて五種の過失と爲すや。頌に曰はく、

(六七)懈怠と聖言を忘ずと及び惛沈掉擧と、[一〇]
行を作さざると行を作すとが是れ五失なり、應に知るべし。[一一]

論に曰はく、應に知るべし、此中にては惛沈と掉擧とを合して一失と爲す。若しくは惛沈掉擧を

【五】「已に助道に非ると一切種の對治とを知りたれば、上の二種の爲の故に、四正勤を修習す。」

【六】四正勤、四意斷、四正勝とも云ふ。

【七】已生惡不善法爲令斷故が四正斷の第一なり。乃至廣說は第二の未生惡不善法爲不令生故と第三の未生善法爲令生故と第四の已生善法爲令增長故とを省略せるを示す。

【八】「事に從つて彼に住し所須を成就するが爲に、五失を捨離するが故に、八資糧を修習す。」

【九】四如意足とも云ふ、欲、精進、心、思惟の四なり。

【一〇】「懈怠と尊敎を忘ずと及び下劣掉起と不作意と作意とが此れ五失なり、應に知るべし。」

【一一】中邊論には長行に、懈怠とは嫩惡處に沒するなり、尊敎を忘ずとは師の所立法の名句味等の如くには憶せず持せざるが故なりの文あり。辯中邊論は此解釋を缺く。

相應法とを總じて有爲と名づく。若しくは寂靜とは謂はく所證の滅と及び能證の道となり、能く寂靜なるが故なり。彼の所觀の義とは謂はく卽ち眞如なり、是れ寂靜道の所緣の境なるが故なり。是の如き所說の若しくは諸の寂靜と若しくは所觀の義とを總じて無爲と名づく。

應に知るべし、此の中蘊等の十義を緣じて起す所の正知を蘊等の善巧と名づくるなり。[二九]

眞實の總義に略して二種有り。謂はく卽ち能顯と所顯との眞實なり。能顯の眞實とは謂はく卽ち最初の三種の根本なり、能く餘を顯はすが故なり。所顯の眞實とは謂はく後の九種なり、是れ初の根本の顯示する所なるが故なり。所顯の九とは、一には離增上慢の所顯の眞實なり、二には對治顚倒の所顯の眞實なり、三には聲聞乘出離の所顯の眞實なり、四には無上乘出離の所顯の眞實なり、麤は能く成熟し、細は能く解脫するに由るが故なり、五には能伏他論の所顯の眞實なり、喩の道理に依りて他を降伏するが故なり、六には顯了大乘の所顯の眞實なり、七には入一切種所知の所顯の眞實なり、八には顯不虛妄眞如の所顯の眞實なり、九には入我執事一切秘密の所顯の眞實なり。

辯修對治品第四[一]

已に眞實を辯じたれば、今次に當に諸の對治を修することを辯ずべし、卽一切の[二]菩提分法を修するなり。此の中にて先づ應に[三]念住を修することを說くべし。頌に曰はく、

(六四)[四]麤重と愛因と我事と無迷とを以ての故に、
　四聖諦に入るが爲に、念住を修す、應に知るべし。

論に曰はく、麤重は身に由りて而も顯了することを得るが故に、此を觀察して苦聖諦に入る、身は麤重の諸行の有るを相と爲すを以ての故なり。諸の麤重は卽ち行苦の性なるを以て、此に由りて聖は有漏の皆苦なるを觀ず、諸の有漏受を說いて愛因と爲すが故に、此を觀察して集聖諦に入る。

【二九】中邊論には此處に次の四分の一偈あり。「此の十を眞實と名づくるなり」

【一】「對治修住品第四」

【二】三十七道品を指す、菩提に順趣するが故に菩提分と名く。

【三】舊譯には念處、四念處又は四念住なり。

【四】「麤行と貪因との故に、種の故に不迷の故に、四諦に入るが爲の故に、四念處觀を修す。」

二の寂滅と對治とは是れ諦の義なり、應に知るべし。

論に曰はく、應に知るべし、諦とは卽ち四聖諦なり。一には苦聖諦、謂はく一切の受と受の資糧となり。契經の中に、諸の有らゆる受は皆是れ苦なりと說くが故に。受の資糧とは謂はく受に順ずる法なり。[二六]二には集聖諦、謂はく卽ち彼の苦の所因の諸行なり。三には滅聖諦、謂はく前の二種の究竟寂滅なり。四には道聖諦、謂はく卽ち苦集の能對治の道なり。

已に諦の義を說きたり。乘の義は云何。頌に曰はく、

(六一)[二七]功德と過失と及び無分別との智に由りて、

他に依ると自らとの出離は是れ乘の義なり、應に知るべし。

論に曰はく、應に知るべし乘とは謂はく卽ち三乘なり。此の中、應の如くに其の義を顯示せむ。若し他より涅槃の功德と生死の過失とを聞きて而して此の智を起し、斯の智に由るが故に出離を得る者ならば、是れ聲聞乘なり。他より涅槃の功德と生死の過失とを聞かずして自ら此の智を起し、斯の智に由るが故に出離を得る者ならば、是れ獨覺乘なり。若し自然に無分別智を起し、斯の智に由るが故に出離を得る者ならば、無上乘と名づく。

已に乘の義を說きたり。云何が有爲無爲法の義なる。頌に曰はく、

(六二)[二八]有爲無爲の義とは謂はく若しくは假、若しくは因、

若しくは相、若しくは寂靜、若しくは彼の所觀の義なり。

論に曰はく、應に知るべし、此の中にて假とは謂はく名等なり、因とは謂はく種子所攝の藏識なり、相とは謂はく器と身と幷に受用具と及び轉識の攝なる意と取と思惟となり。意とは謂はく恒時に思量する性の識なり、取とは謂はく五識が現境を取るが故なり、思惟とは卽ち是れ第六意識なり、能く一切の境を分別するを以ての故なり。是の如く、若しくは假と若しくは因と若しくは相と及び

【二六】中邊論に受の資糧とは受生の緣なり。根塵等の諸法は、應に知るべし、彼の行を生ずる因と爲るとあり。受根受境受相應法の能く受を生ずるに順ずるは皆苦諦の攝にして、此に由りて卽ち無爲無漏の緣を簡ぶなり。

【二七】「得と失と無分別と智にて他に依りて出離すると智に因りて自ら出離するとなり。」四分の一偈不足す。

【二八】「言說有ると因有ると相有るとは有爲法なり。寂靜の義と及び境との後說は無爲法なり。」

て自在を得ずとは、謂はく妙行に由りては、愛欲無しと雖、而も善趣に昇る。三に淸淨に於て自在を得ずとは、謂はく五蓋を斷ぜず七覺支を修せずむば、決定して苦の邊際を作すこと能はざるなり。四に倶生に於て自在を得ずとは、謂はく一世界に二の如來と二の轉輪王とが倶時に出現すること無きなり。五に勝主に於て自在を得ずとは、謂はく女は轉輪王と作らざるなり。六に證得に於て自在を得ずとは、謂はく女は獨覺と無上正等菩提とを證せざるなり。七に現行に於て自在を得ずとは、謂はく見諦の者は必ず生を害する等の事を現行せざるなり、諸の異生の類は現行すべければなり。[二二]多界經の中に廣く此等を說く、應に隨つて是處と非處とを決了すべし。

是の如く已に處と非處との義を說きたり。根の義は云何。頌に曰はく、

(六十)[二三]根は取と住と續と用と二の淨とに於ての增上なり。

論に曰はく、二十二根は六事に於ける增上の義に依りて立つ。謂はく境を取るに於て眼等の六根は增上の義有り、命根は一期の相續に於て增上の義あり、男女の二根は家族を續くるに於て增上の義有り、能く善惡業の果を受用するに於て樂等の五根は增上の義有り、世間の淨に於て信等の五根は增上の義有り、出世の淨に於て未知等の根は增上の義有り。

已に根の義を說きたり。世の義は云何。頌に曰はく、

[二四]因と果との已と未との用は是れ世の義なり、應に知るべし。

論に曰はく、應に知るべし、因と果との已と未との受用は其の所應に隨つて三世の義別る。謂はく因と果とに於て倶に已に受用せるは是れ過去の義なり。若し因と果とに於て倶に未だ受用せざるは是れ未來の義なり。若し已に因を受用して未だ已に果を受用せざるは是れ現在の義なり。

已に世の義を說きたり。諦の義は云何。頌に曰はく、

(六十一)[二五]受と及び受の資糧と彼の所因の諸行と

【二二】中阿含四七。(大正藏、二六)

【二三】「取と住と及び相接と受用と二の淸淨となり」。

【二四】「果と因とを已に受用せると用有ると及び未だ用あらざるとなり。」

【二五】「受と及び受資糧の彼の行を生ずる因たると彼を滅すると及び對治となり。此を不淨と淨と爲す。」彼を滅すると以後を再び釋文中の集諦と滅諦との間に出し、最後に「此に因りて世諦を不淨と說き、此に因りて眞諦を淨と說く」の長行を加ふ。辯中邊論には之を缺く。

[一八] 能と所との取と彼の取との種子の義を界と名づく。

論に曰はく、能取の種子の義とは謂はく眼等の六內界なり。所取の種子の義とは謂はく色等の六外界なり。彼の取の種子の義とは謂はく眼識等の六識界なり。

已に界の義を說きたり。處の義は云何。頌に曰はく、

(五十八)[一九]能受と所了の境との用門の義を處と名づく。

論に曰はく、此の中にて、能受とは受用門の義、謂はく六內處なり。若し所了の境にして受用門の義ならば、是れ六外處なり。

已に處の義を說きたり。緣起の義は云何。頌に曰はく、

[二〇] 緣起の義は因と果と用とに於て增と減と無きなり。

論に曰はく、因と果と用とに於て、若し增益無く及び損減無くんば、是れ緣起の義なり。應に知るべし、此の中、因を增益すとは行等に不平等の因有ることを執するなり。因を損減すとは彼の無因を執するなり。果を增益すとは我を有する行等は無明等を緣として生ずるのみと執するなり。果を損減すとは無明等には行等の果無しと執するなり。用を增益すとは無明等は行等を生ずるに於て別の作用有りと執するなり。用を損減すとは無明等は行等を生ずるに於て全く功能無しと執するなり。若し是の如き三の增と減との執無くんば、應に知るべし、彼は緣起に於て善巧なるなり。

已に緣起の義を說きたり。處と非處との義は云何。頌に曰はく、

(五十九)[二一]非愛と愛と淨と倶生と及び勝主と
得と行とに於て自在ならざるが是れ處と非處との義なり。

論に曰はく、處と非處との義とは略して七種の自在を得ざるに由る、應に其相を知るべし。一に非愛に於て自在を得ずとは謂はく惡行に由りては、愛欲無しと雖、而も惡趣に墮す。二に可愛に於

【一八】「能取と所取と取との種子は是れ界の義なり。」

【一九】「塵を受くと分別の用と入門との故に入と名づく」。

【二〇】「因と果と及び作事との增損せざるを義と爲す」。

【二一】「不欲と欲と淸淨と同生と增上に及ぶと至得と及び起行との繫屬他を義と爲す」。

見を除かんが爲に十の善巧を修す。

云何が十種の善巧眞實は三の根本眞實に依りて建立するや。蘊等の十は三種の根本自性の中に攝在せざること無きを以ての故なり。如何が三自性の中に攝在するや。頌に曰はく、

[一六]此れが所執と分別と法性との義は彼に在り。

論に曰はく、此の蘊等の十に各三義有り。且く、色蘊の中に三義有りとは一には所執義の色、謂はく色の遍計所執性なり。二には分別義の色、謂はく色の依他起性なり。此の中の分別を以て色と爲すが故なり。三には法性義の色、謂はく色の圓成實性なり。

色蘊の中に此の三義有るが如く、受等の四蘊にも界等の九法にも各三義有り、應に隨つて當に知るべし。是の如き蘊等は三義の別に由りて彼の三性の中に攝入せざること無し、是の故に當に知るべし、十の善巧眞實は皆根本の三の眞實に依りて立つなり。

是の如く、十種の我見を對治せんと欲するが爲の故に、蘊等の善巧を修することを說くと雖、而も未だ此の蘊等の別の義を說かず。且く初の蘊の義を云何が應に知るべきや。頌に曰はく、

(五十七)[一七]非一と及び總略と分段との義を蘊と名づく。

論に曰はく、應に知るべし、蘊の義に略して三種有り。一には非一の義なり、契經に、諸の有らゆる色等の、若しくは過去若しくは未來若しくは現在若しくは內若しくは外若しくは麤若しくは細若しくは劣若しくは優若しくは遠き若しくは近きと言ふが如し。二には總略の義なり、契經に、是の如き一切を略して一聚と爲すと言ふが如し。三には分段の義なり、契經に、說いて色蘊等と名づくと言ふが如し、各別に色等の相を安立するが故なり。斯の聚の義に由りて蘊の義が成ずることを得ればなり、又世間が聚の義を蘊と名づくるを見ればなり。

已に蘊の義を說きたり。界の義は云何、頌に曰はく、

【一六】「分別と種類との色と法然の色とは等しく三なり」。

【一七】「不一と及び總擧と差別とは是れ陰の義なり」。

（五三）[13]名は遍計所執なり。相と分別とは依他なり。

　眞如と及び正智とは圓成實の所攝なり。

論に曰はく、相等の五事は其の所應に隨うて根本の三種の眞實に攝在す、謂はく名は遍計所執に攝在し、相と及び分別とは依他に攝在し、圓成實は眞如と正智とを攝す。

差別眞實には略して七種有り。一には流轉眞實、二には實相眞實、三には唯識眞實、四には安立眞實、五には邪行眞實、六には清淨眞實、七には正行眞實なり。云何が應に此の七眞實が三の根本眞實に依りて立つことを知るべきや。頌に曰はく、

（五四）[14]流轉と安立と邪行とは初の二に依り、

　實相と唯識と淨と正行とは後の一に依る。

論に曰はく、流轉等の七は其所應に隨うて根本の三種の眞實に攝在す、謂はく彼の流轉と安立と邪行とは根本の中の遍計所執と及び依他起とに依り、實相と唯識と清淨と正行とは根本の中の圓成實に依りて立つ。

善巧眞實とは謂はく十の我見を對治せんが爲の故に十種有りと說くものなり。云何が蘊等に於て十の我見を起すや。頌に曰はく、

（五五）[15]蘊等に於ける我見は一と因と受者と

　作者と自在轉と增上義と及び常と

（五六）雜染清淨依と觀と縛解者との性を執す。

論に曰はく、蘊等の十法に於て十種の我見を起す。一には一性を執す、二には因性を執す、三には受者性を執す、四には作者性を執す、五には自在轉性を執す、六には增上義性を執す、七には常性を執す、八には染淨所依性を執す、九には觀行者性を執す、十には縛解者性を執するなり。此の

【一三】「相と及び分別と名字とは二性の攝なり」と「聖智と如如との此の二は一性の攝なり。」とに分つて釋す。

【一四】「生の實は二性の攝なり、處と邪行とも亦爾り。相と識と及び淸淨と正行とは眞性の攝なり」。

【一五】「一と因と及び受者と作者と及び自在と增上義と及び常と垢染淸淨依と觀者と及び縛解との此の處に我見を生ずるなり」。

謂はく聖道なり、勝法を以て義と爲すが故なり。此の三の勝義は、應に知るべし、但三の根本の中の圓成實に依りてのみ立つ。

此の圓成實には總じて二種有り。無爲と有爲となり、差別有るが故なり。無爲は總じて眞如と涅槃とを攝す、異變無きが故に圓成實と名づく。有爲は總じて一切の聖道を攝す、境に於て無倒なるが故に亦圓成實とも名づくるなり。

極成眞實には略して二種有り。一には世間極成眞實、二には道理極成眞實なり。云何が此の二は彼の根本眞實に依りて立つや。頌に曰はく、

（五二）世[一〇]極成は一に依り、理極成は三に依る。

論に曰はく、若し事が世間の共に安立する所にして、串習し、隨入する覺慧の所取にして、一切の世間が同じく此の事は是れ地にして火に非ず、色にして聲に非ず等と執せば、是を世間極成眞實と名づく、此は根本の三の眞實の中に於て但遍計所執に依りてのみ而も立つ。若し理有るの義ならば、[一一]聰叡と賢善と能尋思との者の三量と證成道理とに依止して、施設し建立するを、是を道理極成眞實と名づく、此は根本の三の眞實に依りて立つ。

淨所行眞實にも亦略して二種有り。一には煩惱障の淨智の所行の眞實、二には所智障の淨智の所行の眞實なり。云何が此の二は彼の根本眞實に依りて而も立つや。頌に曰はく、

[一二]淨所行に二有り、一の圓成實に依る。

論に曰はく、煩惱と所知との二障の淨智の所行の眞實は、唯根本の三の眞實の中の圓成實にのみ依りて立つ、餘の二は此の淨智の境に非るが故なり。

云何が應に相と名と分別と眞如と正智とが根本の三の眞實に攝在することを知るべきや。頌に曰はく、

【一〇】「安立成就とは一は世俗に處して成ず」。之を釋して後、次の半偈を擧げて釋す。「名を離しては體無きが故に、三は道理に處して成ず」。

【一一】順次に外道と佛教者と一切異生とをいふ。

【一二】「清淨境の二種は一處に攝在す」。

謂はく習氣と等起と及び相の未離繋となり。

(四九)自性と二の不生と垢寂の二とは三の滅なり。

　遍知と及び永斷と證得とは三の道諦なり。

論に曰はく、苦諦に三有り、謂はく無常等の四の各の三相なり、前に已に說けるが如し。

集諦の三とは一には習氣集、謂はく遍計所執自性執の習氣なり。二には等氣集、謂はく業煩惱なり。三には未離繋集、謂はく未だ障を離れざる眞如なり。

滅諦の三とは一には自性滅、謂はく自性が生ぜざる故なり。二には二取の滅、謂はく所取と能取との二が生ぜざる故なり。三には本性滅、謂はく垢寂の二なり、卽ち擇滅と眞如となり。

道諦の三とは、一には遍知道、二には永斷道、三には證得道なり。應に知るべし、此の中にて、遍計所執に於ては唯遍知有るのみ、依他起に於ては遍知と及び永斷と有り、圓成實に於ては遍知と及び證得と有り、故に此の三に依りて道諦を建立するなり。

麁細眞實とは謂はく世俗と勝義との諦なり。云何が此は根本眞實に依るや。頌に曰はく、

(五〇)應[九]に知るべし、世俗諦は差別するに三種有り。

　謂はく假と行と顯了となり。次の如く本の三に依る。

(五一)勝義諦にも亦三あり。謂はく義と得と正行となり。

　本の一に依る無變と無到との二は圓實なり。

論に曰はく、世俗諦に三種有りとは一には假世俗、二には行世俗、三には顯了世俗なり。此の三の世俗は其の次第の如く三の根本眞實に依りて建立す。

勝義諦にも亦三種ありとは、一には義勝義、謂はく眞如なり、勝智の境を勝義と名づくるが故なり。二には得勝義、謂はく涅槃なり、此は是れ勝果にして亦義利なるが故なり、三には正行勝義、

【九】「麁の義にも三種有り。立名と及び取行と顯了とにして、俗諦と名づく。」と「眞諦は三の中の一なり」と「一には義と二には正修と三には至得との眞實なり」と無變異と、無倒との成就の二は眞實なり。」

次の如く四の三種は根本眞實に依る。

論に曰はく、無常の三とは一には無性無常、謂はく遍計所執なり、此は常に無なるが故なり。二には生滅無常、謂はく依他起なり、起盡有るが故なり。三には垢淨無常、謂はく圓成實なり、位が轉變するが故なり。

苦の三種とは一には所取苦、謂はく遍計所執なり、是れ補特伽羅と法との執の所取なるが故なり。二には事相苦、謂はく依他起なり、三苦の相なるが故なり。三には和合苦、謂はく圓成實なり、苦相の合なるが故なり。

空に三有りとは一には無性空、謂はく遍計所執なり、此は理趣の說いて有と爲す可き無ければ、此の非有に依りて說いて空と爲すが故なり。二には異性空、謂はく依他起なり、妄所執の如く是の如く有ならざるも、一切種性の全無なるには非るが故なり。三には自性空、謂はく圓成實なり、二空の所顯を自性と爲すが故なり。

無我の三とは一には無相無我、謂はく遍計所執なり、此の相は本無なり、故に無相と名づく、即ち此の無相を說いて無我と爲すなり。二には異相無我、謂はく依他起なり、此の相は有なりと雖、而も彼の遍計所執の如くならず、故に異相と名づく、即ち此の異相を說いて無我と爲すなり。三には自相無我、謂はく圓成實なり、無我の所顯を以て自相と爲す、即ち此の自相を說いて無我と爲すなり。

是の如き所說の無常と苦と空と無我との四種は、其の次第の如く、根本實實に依り各分れて三種と爲る。四の各の三種は前の如し、應に知るべし。

因果眞實とは謂はく四聖諦なり。云何が此は根本眞實に依るや。頌に曰はく、

(四八)苦の三相は旣に說きたり。[八]集にも亦三種有り。

【八】「苦の相等は旣に說きたり」と「集諦にも復三有り、熏習と發起と及び不相離等なり」と「體の滅と二種の滅と垢淨前後滅となり」と「觀智と及び除滅と證至道と三有るなり。」とに分つて其間に釋文を入れたり。

も、此の性の中に於ては許して眞實と爲す、顚倒無きが故なり。依他起相は有にして而も眞ならず、唯有なるのみにして眞に非るも、依他起に於ては許して眞實と爲す、亂性有るが故なり。圓成實相も亦有にして非有なり。唯有なるのみにして非有なるも、此の性の中に於ては許して眞實と爲す、空性有るが故なり。[五]

云何が相眞實なる。頌に曰はく、

(四四)法と數取趣と及び所取と能取と[六]
有と非有との性の中に於て、增益と、損減との見あり。
(四五)此れを知るが故に轉ぜず。是を眞實相と名づく。

論に曰はく、一切の法と補特伽羅とに於て有らゆる增益と及び損減との見あり、若し此を知るが故に彼が便ち轉ぜずんば、是れ遍計所執自性の眞實相なり。諸の所取と能取との法の中に於て有らゆる增益と及び損減との見あり、若し此を知るが故に彼が便ち轉ぜずんば、是を依他起自性の眞實相と名づく。有と非有とに於て有らゆる增益と及び損減との見あり、若し此を知るが故に彼が便ち轉ぜずんば、是を圓成實自性の眞實相と名づく。此は根本眞實相の中に於て顚倒無きが故に相眞實と名づくるなり。

無顚倒眞實とは、謂はく無常と苦と空と無我との性なり、此に由りて彼の常等の四倒を治せばなり。云何が應に此の無常等は彼の根本眞實に依りて立つと知るべき。頌に曰はく、

[七]無性と生滅と垢淨とは三の無常なり。
(四六)所取と及び事相と和合とは苦の三種なり。
空にも亦三種有り。謂はく無と異と自との性なり。
(四七)無相と及び異相と自相とは三の無我なり。

【五】以上は之を相品の最初の頌と對見すべし。

【六】「增益と損減との謗が法に於て、人の中と所取と及び能取と有と無との中の諸見とに於て知りて常に生ぜざるを見る、是れ眞實寂相なり。」

【七】「無常の義に三有り。無の義と生滅の義と有垢無垢の義にして、本實の中の次第なり」。之を擧げて釋して後更に「苦の三とは、一には取苦二には相三には相應なり。」を擧げて釋し、又更に「無の空と不如の空と性の空とは、合せて(恐らく空の﹅誤)三種なり」を擧げて釋し、最後に「無相と及び異相と自相とは三の無我なり。」を擧げて釋す。

卷の中[1]

辯眞實品第三[2]

已に其障を辯じたれば當に眞實を說くべし。頌に曰はく、

(四一)眞[3]實は唯十あるのみ。謂はく根本と相と
　無顚倒と因果と及び麤細との眞實と、
(四二)極成と淨所行と攝受と幷に差別と
　十善巧との眞實となり。皆我見を除かむが爲なり。

論に曰はく、應に知るべし、眞實は唯十種あるのみ。一には根本眞實、二には相眞實、三には無顚倒眞實、四には因果眞實、五には麤細眞實、六には極成眞實、七には淨所行眞實、八には攝受眞實、九には差別眞實、十には善巧眞實なり。

此の復十種は十の我見を除遣せんと欲するが爲の故なり。十の善巧とは一には蘊善巧、二には界善巧、三には處善巧、四には緣起善巧、五には處非處善巧、六には根善巧、七には世善巧、八には諦善巧、九には乘善巧、十には有爲無爲法善巧なり。

此の中如何が根本眞實なる。謂はく三自性なり。一には遍計所執自性、二には依他起自性、三には圓成實自性なり。此に依りて餘の眞實を建立するが故なり。此の所說の三自性の中に於て何れの義を眞實と爲すと許すや。頌に曰はく、

(四三)自[4]性に於て唯一のみは常に非有なり、
　一は有にして而も眞ならず、一は有と無とにして眞實なりと許す。

論に曰はく、卽ち是の如き三の自性の中に於て遍計所執相は常に非有なり、唯常に非有のみなる

【一】上卷の初と同じく造論者譯者を擧ぐ。

【二】「眞實品第三」

【三】「根本と相との眞實と、無顚倒の眞實と、果と因との俱眞實と、細麤等の眞實と、成就と淸淨境と攝取と分破との實と、勝智の實との十種あり。我見を對治することを爲す。」

【四】「性は三なり。一は恒に無なり。二は有にして眞實ならず、三は有と無とにして眞實なり。此の三は本眞實なり」。

るに由りて無生法忍を圓滿し證得し、諸の淸淨と雜染との法の中に於て一法として增有り減有ることを見ざればなり、四の自在有り。一には無分別自在、二には淨土自在、三には智自在、四には業自在なり。法界は此の四種の所依と爲れば四の自在の所依止の義と名づく、第八地の中にては唯能く初の二の自在の所依止の義に通達するのみ。第九地の中にては亦能く智自在の所依の義にも通達す、無礙解を圓滿し證得するが故なり。第十地の中にては復能く業自在の所依の義にも通達す。欲するに從つて種種に有情を利樂する事を化作するが故なり。

復略頌に曰はく、

(四十)[二八]已に諸の煩惱と及び諸の所知との障を說きたり。
此の二が盡くが故に一切障は解脫すと許す。

論に曰はく、此の二種は一切の障を攝するに由るが故に、此れが盡る時には一切のは解脫すと許すなり。

前の障の總の義に十一種有り。一には廣大障、謂はく具分障なり。二には狹小障、謂はく一分障なり。三には加行障、謂はく增盛障なり。四には至得障、謂はく平等障なり。五には殊勝障、謂はく生死を取捨する障なり。六には正加行障、謂はく九の煩惱障なり。七には因障、謂はく善等の十の能作に於ける障なり。八には入眞實障、謂はく覺分障なり。九には無上淨障、謂く到彼岸障なり。十には此の差別趣障、謂はく十地障なり。十一には攝障、謂はく略すれば二障なり。

【二八】「已に煩惱障と及び一切智障とを說きたり。是れ一切の障を攝す。彼を盡して解脫を得」。

せざるが故なり。

十地の功德に於ては別の障有りとは、頌に曰はく、

(二七)遍行と最勝と勝流と及び無攝と
　相續無差別と雜染も清淨も無きと
(二八)種種法無別と、及び不增不減と、
　幷に無分別等の四の自在の依との義なり。
(二九)斯の十の法界に於て不染無明の
　十地の功德を障するあり。故に說いて十障と爲す。

論に曰はく、遍行等の十の法界の中に於て不染無知が十地の功德を障する有り。次の如く建立して十地の障と爲す。謂はく初地の中の所證の法界を遍行義と名づく、此に通達するに由りて自他平等の法性を證得すればなり。第二地の中の所證の法界を最勝義と名づく、此に通達するに由りて是の思惟を爲す、是の故に我は今同出離の一切の行相に於て應に遍く修治すべしと、是を勤修相應出離と爲せばなり。第三地の中の所證の法界を勝流義と名づく、此に通達するに由りて所聞の法は是れ淨法界の最勝の等流なりと知り、此の法を求めんが爲に設ひ火坑の量の三千大千世界に等しき有るも身を投じ而も取りて以て難と爲さゞればなり。第四地の中の所證の法界を無攝義と名づく、此に通達するに由りて乃至法愛も亦皆轉滅すればなり。第五地の中の所證の法界を名づけて相續無差別義と爲す、此に通達するに由りて十の意樂平等淨心を得ればなり。第六地の中の所證の法界を無雜染無清淨義と名づく、此に通達するに由りて緣起法の無染無淨なることを知ればなり。第七地の中の所證の法界を種種法無差別義と名づく、此に通達するに由りて法の無相なるを知り、契經等の種種の法の相の中に行ぜざればなり。第八地の中の所證の法界を不增不減義と名づく、此に通達す

【二七】「遍滿と最勝義と勝流と繫屬する所無きの義と身に差別無きの義と染も清淨も無きの義と法門の無異なるの義と不減不增なるの義と四の自在の依の義と此は法界の無明にして此の染は是れ十障なり。十地の扶助に非ず、諸地は是れが對治なり」。

論に曰はく、四念住に於ては諸事に於て善巧ならざるの障あり。四正斷に於ては懈怠の障有り。四神足に於ては三摩地の二事を減ずるの障有り、一には欲勤心觀を圓滿するに於て隨つて一を減ずるが故なり、二には八斷行を修習するに中に於て隨つて一を減ずるが故なり。五根に於ては順解脫分を圓滿する勝れたる善根を植ゑざるの障有り。五力に於ては羸劣性の障有り、謂はく卽ち五根が障に雜らるるに由りて羸劣性有るなり。七等覺支に於ては見の過失の障有り、此は是の見道の所顯示なるが故なり。八聖道支に於ては麤重の過失の障有り、此は是れ修道の所顯示なるが故なり。

到彼岸に於ては別の障有りとは、頌に曰はく、

(三五)富貴[二六]と善趣と諸の有情を捨てざると
　　失と德とに於ける減と增と趣入せしむると解脫とを障すると、
(三六)施等の諸善の無盡と亦無間と
　　所作の善の決定と法を受用し成熟するとを障するとなり。

論に曰はく此は十種の波羅蜜多の所得の果の障を說き、以て十種の波羅蜜多の自性の障を顯はすなり。謂はく布施波羅蜜多に於て富貴自在の障を說き、淨戒波羅蜜多に於て善趣の障を說き、安忍波羅蜜多に於て有情を捨てざるの障を說き、精進波羅蜜多に於て過失を減じ功德を增すの障を說き、靜慮波羅蜜多に於て所化をして法に趣入せしむるの障を說き、般若波羅蜜多に於て解脫の障を說く。方便善巧波羅蜜多に於て施等の善の窮盡すること無きの障を說く、此に由りて無上菩提に廻向して施等の善をして窮盡すること無からしむるが故なり。願波羅蜜多に於て一切生の中の善の間轉無きの障を說く、大願力の攝受に由りて能く善法の生に順ずるが故なり。力波羅蜜多に於て所作の善の決定を得るの障を說く、思擇力と及び修習力とに由りて能く障を伏し、彼が伏するところに非るが故なり。智波羅蜜多に於て自他が法を受用し成熟するの障を說く、言を聞くが如くには而も義を覺

【二六】「富貴と及び善道と衆生を捨てざるとなり。增と減との功德と失と諸衆生をして入らしむと解脫と無盡量と善をして間有ること無からしむと所作が常に決定すると、同じく用ひて他をして熟せしむることを障す」。

は分離の障、謂はく無障に於てなり、此は障に於て繋を離るゝが故なり。七には轉變の障、謂はく廻向に於てなり、菩提心は轉變の相なるを以ての故なり。八には信解の障、謂はく不怖に於てなり、信解無き者は怖畏有るが故なり。九には顯了の障、謂はく不慳に於てなり、法に於て慳無き者は他の爲に顯了するが故なり。十には至得の障、謂はく自在に於てなり、此は是れ能く自在の相を得るが故なり。[二二]所障の十法の次第の義とは、謂はく無上菩提を證せんと欲する有らば勝れたる善根に於て先づ應に生起すべし。勝れたる善根力に任持せらるるが故に、必ず無上菩提に安住することを得。善根をして增長するを得しむるが爲の故なり。次に應に大菩提心を發起すべし、此の菩提心は菩薩性の與(ため)に所依止と爲ればなり。是の如く菩薩は已に大菩提心を發起すると、及び勝れたる善根力に持せらるるとに由るが故に、諸の亂倒を斷じて無亂倒を起す、見道の中には亂倒無きに由るが故なり。次には修道に於て一切の障を斷ず。既に障を斷じ已りて諸の善根を持し無上正等菩提に廻向す。廻向の力に任持せらるるに由るが故に深廣の法に於て便ち怖畏無し。既に怖畏無ければ便ち彼の法に於て勝れたる功德を見能く廣く他の爲に宣說し開示す。菩薩は是の如き種種の功德力に持せらるるが故に疾く無上正等菩提を證し、一切法に於て皆自在を得。是を善等の十義の次第と名づく。

善等の法は卽ち是れ覺分と波羅蜜多と諸他との功德なりと雖而も總と別と異る。今應に彼の菩提分等の諸障の差別を顯はすべし。頌に曰はく、

(三三ノ一半)[二三]覺分と度と地とに於ては別の障あり、應に知るべし。

論に曰はく、復覺分と波羅蜜多と諸地との功德に於て各(おのおの)別の障有り。[二四]菩提分に於て別の障有りとは、頌に曰はく、

(三四)[二五]事に於て善巧ならざると懈怠と定が二を減ずると、
植ゑざると羸劣性と見と麤重との過失となり。

【二二】以下所障の十法の次第義の說は中邊論になし。

【二三】「助道と、十度と、地とに復餘の別障有り。」

【二四】覺分といふと同じ、又助道ともいふ。三十七道品を指す。

【二五】「處の不明なると、懈怠と、三昧が二種を少くと、種せざると、及び羸弱と、諸見と麤惡との過なり。」

自在を得ざらしむるなり。一には匱聞、能く匱法を感ずる業を生長するが故にと、二には少聞なると、三には勝れたる三摩地を修治せざるとなり。

復次に是の如き諸障は善等の十に於て餘の義の中に隨つて十の能作あり。卽ち彼の義に依りて應に此の名を知るべし。十の能作とは、一には生起能作なり、眼等の眼識等に於けるが如し。二には安住能作なり、[二〇]四食が有情に於けるが如し。三には任持能作なり、謂はく能く任持すること器世間が有情世間に於けるが如し。四には照了能作なり、光明が諸色に於けるが如し。五には變壞能作なり、火等が所熟のもの等に於けるが如し。六には分離能作なり、鎌等が所斷のもの等に於けるが如し。七には轉變能作なり、金師等が金等を轉變して鐶釧等と成すが如し。八には信解能作なり、烟等の火等に於けるが如し。九には顯了能作なり、因の宗に於けるが如し。十には至得能作なり、聖道等の涅槃等に於けるが如し。

是の如きの義に依るが故に頌を說いて曰はく、

[二一] 能作に十種有り。謂はく生と住と持と照と
變と分離と轉變と信解と顯と至得となり。
識の因と食と地と燈と火と鎌の工巧と
烟と因と聖道等が識等に於ける所作の如し。

善等に於ける障も應に知るべし亦然り。一には生起の障、謂はく其の善に於てなり、諸の善法の應に生起すべきを以ての故なり。二には安住の障、謂はく菩提に於てなり、大菩提は動ずべからざるを以ての故なり。三には任持の障、謂はく攝受に於てなり、菩提心は能く任持するを以ての故なり。四には照了の障、謂はく有慧のものに於てなり、有慧のものの性は應に照了すべきを以ての故なり。五には變壞の障、謂はく無亂に於てなり、迷亂を轉滅するを變壞と名づくるが故なり。六に

【二〇】 段食、觸食、思食、識食の四。

【二一】 述記は此二頌を辯中邊論の頌ならず、他論のものを引きたるか又は世親の自作なるか何れかなりとなす。中邊論は此の頌に相當するものを缺く。

(三一)[一三]法を輕ずると、名利を重むずると有情に於て悲無きと、
[一四]匱聞と、及び少聞と妙定を修治せざるとなり。

論に曰はく、是の如きを名づけて善等の法の障と爲す。所障の善等は其の相如何。頌に曰はく、

(三二)[一五]善と菩提と攝受と有慧のものと亂と障との無きと、
廻向と怖と慳とをせざると自在とを善等と名づく。

論に曰はく、是の如き善等の十種の淨法の誰が前說の幾種の障を有するや。頌に曰はく。

(三三ノ一半)[一六]是の如き善等の十は各前の三障を有す。

論に曰はく、善に三障あり。一には加行無きと、二には非處に加行すと、三には不如理に加行すとなり。菩提に三障あり。一には善法を生ぜざると、二には正思惟を起さざると、三には資糧の未だ圓滿せざるとなり。菩提心を發するを名づけて攝受と爲す。此に三障あり。一には種性を闕くと、二には善友を闕くと、三には心の極めて疲厭する性となり。有慧のものとは、謂はく菩薩なり。此れが性を了するに於て三種の障あり。一には正行を闕くと、二には鄙者と共住すると、三には惡者と共住するとなり。此の中鄙者とは謂はく愚癡の類なり。他を毀壞することを樂ふを名づけて惡者と爲す。亂無きに三障あり。一には[一七]顚倒麁重と、二には[一八]煩惱等の三障の中の隨一の餘有るの性と、三には能く解脫を成熟する慧の未だ成熟せざる性となり。障の斷滅を障無しと名づく。此に三障あり。一には[一九]俱生の麁重と二には懈怠の性と三には放逸の性となり。廻向に三障ありて、心をして餘に向つて無上正等菩提に向はざらしむる。一には諸有に貪著すと、二には資財に貪著すと、三には心の下劣たる性となり。不怖に三障あり。一には補特伽羅を信重せざると、二には法に於て勝解無きと、三には言の如くに而も義を思ふとなり。不慳に三障あり。一には正法を尊重せざると、二には名譽利養恭敬を尊重すると、三には諸の有情に於て心に悲愍無きとなり。自在に三障ありて、

【一二】議とあれど、長行によりて改めたり。
【一三】「法を敬はざると利を重ずると衆生に於て悲無きと聞災と及び少聞と三昧の資料減ずとなり。」
【一四】乏しき聞慧、中邊論の長行に無聞慧とあり。少聞は聞慧の小弱の意。
【一五】「善と菩提と攝取と有智のものと迷と障との無きと廻向と怖と嫉とをせざると自在とは善等の十なり。」
【一六】「此の十に各三障あり、十事の中應に知るべし。」
【一七】常樂我淨の四倒、それに心想見を加へたる七倒をいふ。
【一八】煩惱等の三障とは煩惱と業と生とをいふ。此中の隨一即ち何れか一を起して餘の二の起らざるものあるの性、又は三の中の二は已になきも、餘の一の起り居ること有るの性を隨一の餘有るの性といふ。
【一九】一切の修道の惑をいふ。

利養恭敬等と遠離との徧知を障するが故なり。

論に曰はく、煩惱障の相は略して九種有り。謂はく愛等の九種の結なり。愛結は厭を障す、此に由りて順境に於て厭離すること能はさるが故なり。恚結は捨を障す、此に由りて違境に於て棄捨すること能はざるが故なり。餘の七結は眞見を障す。七徧知に於て次の如く障するが故なり。謂はく慢結は能く[五]僞身見の徧知を障す、現觀を修する時に有間にも無間にも我慢が現起し、此の勢力に由りて彼は斷ぜざるが故なり。無明結は能く身見の事の徧知を障す、此に由りて諸の取蘊を知らざるが故なり。見結は能く滅諦の徧知を障す、[六]薩迦耶と及び邊執見とに由りて滅を怖畏するが故に、邪見に由りて滅を謗るが故なり。取結は能く道の體の徧知を障す、餘法を取りて淨と爲すが故なり。疑結は能く三寶の徧知を障す、此に由りて三寶の功德を信受せさるが故なり。嫉結は能く利養恭敬等の徧知を障す、此に由りて彼の過失を見ざるが故なり。慳結は能く遠離の徧知を障す、此に由りて資生の具に[七]資著するが故なり。

復別の障の能く善等の十種の淨法を障するもの有り。其の相は如何。頌に曰はく、

(一一七)加行無きと[八]非處なると不如理なると生ぜざると
　正思惟を起さざると資糧の未だ圓滿せざると、
(一一八)種性と[九]善友とを闕くと心の極めて疲厭する性と
　及び正行を闕くと鄙と惡との者と同居すると、
(一一九)倒[一〇]麤重と三の餘と般若の未だ成熟せざると、
　及び本性の麤重と怠惰と放逸との性と、
(一二〇)有に著すと[一一]、資財に著すと、及び心性の下劣たると、
　信ぜざると、勝解無きと言の如く而も[一二]義を思ふと、

て釋し、次に「及び身見と身見所依法と滅と道と三寶とを障し利養恭敬等と輕財知止足とを障す。」を擧げて釋す。故に偈を三分して釋文を其間に入れ居るなり。

【五】我慢を以て身見の苗となすが故に僞身見といふ。

【六】Satkāya-dṛṣṭi。有身見又は身見。

【七】資とは愛翫の義なり。中邊論には貪著とあり。

【八】「行ぜざると處所に非ると所行如理ならざると生ぜざると、思量せざると資糧の具足せざると。」

【九】性と友と相稱はざると心疲るゝが故に厭離すると、修心相稱はざると惡と、怨との人との共住すると。

【一〇】麤と惑の三の隨一と般若の成就せざると自性の重の煩惱と懈怠と放逸と。

【一一】有及び欲塵に著すると下劣の心とも亦爾り信ぜざると、願樂無きと言の如くに義を思量すると。

心性は本より淨なるが故なり。客塵に染せらるるに由ればなり。

論に曰はく、云何が染にも非ず不染にも非る。心性は本淨なるを以ての故なり。云何が淨にも非ず不淨にも非ざる。客塵に染せらるるに由るが故なり。是を空の差別を成立する義と名づく。此より前の空の義は總じて二種あり。謂はく相と安立となり。相に復二あり。謂はく無と及び有となり。空性の有の相は有をも離れ無をも離れ、一をも離れ異をも離れたるを、以て其の相と爲す。應に知るべし、安立は卽ち異門等なり。

辯障品第二[一]

已に其相を辯じたれば、障を今當に說くべし。頌に曰はく。

(二四)具分[二]と及び一分と增盛と平等と
　生死に於ける取捨とは二の種性を障すと說く。

論に曰はく、具分障とは、謂はく煩惱障と及び所知障となり、諸の菩薩種性の法の中に於て具に障と爲るが故なり。一分障とは、謂はく煩惱障なり、聲聞等の種性の法を障するが故なり。增盛障とは、謂はく卽ち彼の食等の行なり。平等障とは謂はく卽ち彼の等分の行なり。生死を取捨すとは能く菩薩種性の所得の[三]無住涅槃を障ずれば、生死に於て取捨することある障と名づくるなり。是の如き五障は其の所應に隨つて菩薩と及び聲聞等との二種の種性を障すと說くなり。

　復次に頌に曰はく、

(二五)九種の煩惱の相[四]あり。謂はく愛等の九結なり。
　初の二は厭と捨とを障し、餘の七は眞見を障す。

(二六)謂はく能く身見と彼の事と滅と、道と寶と

淨にも非ず、不淨にも非ず、心は本清淨なるが故なり、煩惱は客塵なるが故なり。」

【一】「障品第二」

【二】「徧と及び一方と重と平等と及び取捨とを今二種の障と說く」これにては四分の一偈不足す。これより以下中邊論の偈に混雜あるが如し。

【三】無住處涅槃なり。生死を取捨すとは涅槃を取り生死を捨つるをいふ。これは法執なれば、二乘と同じことゝなりて無住處涅槃を障することとなる。

【四】「九結を惑と名づく」これに障の一字を加へて四分の一偈を擧げて釋し、更に「厭離と及び除捨と實見と」を擧げ

の位に至るも亦散捨すること無きが爲に而も空を觀ずるが故に無散空と名づく。諸の聖種姓は自體本有にして習の所成に非るを說いて本性と名づく。菩薩は此れが速に清淨なることを得んが爲に而も空を觀ずるが故に本性空と名づく。菩薩は大士の相好を得んが爲に而も空を觀ずるが故に相空と爲す。菩薩は[三七]力と無畏と等の一切の佛法をして皆清淨なることを得しめんが爲に而も此れが空を觀ずるが故に一切法空と名づく。

是の十四空は別に從つて安立するなり。此の中何れの者をか說いて名づけて空となすや。頌に曰はく、

(一一)[三八]補特伽羅と法との實性は俱に有に非ず。
　此れが無性なるが故に別に二空を立つ。

論に曰はく、[三九]補特伽羅と及び法との實性は俱に有に非ず。故に無性空と名づく。此の無性空は自性無きには非ず。空は無性を以て自性と爲せばなり。故に無性自性空と名づく。前の所說の能食の空等に於て其の空相を顯はさんが爲に別に二空を立つるなり。[四〇]此は補特伽羅と法との增益の執と空の損減の執とを遮止せんが爲に其の次第の如く後の二空を立つるなり。

是の如く已に空性の差別を顯はしたり。此れが成立の義は云何が應に知るべき。頌に曰はく、

(一二)[四一]此にして若し雜染なる無くんば一切は應に自ら脫すべし。
　此にして若し清淨なる無くんば功用は應に果無かるべし。

論に曰はく、若し諸法は空にして未だ對治を生ぜざるも雜染を容るること無くんば、一切の有情は功用に由らずして應に自然に解脫すべし。若し對治にして已に生ずるも亦清淨ならずんば則ち應に解脫を求めて勤勞すとも果無かるべし。既に爾らば、頌に曰はく、

(一三)[四二]染にも非ず、不染にも非ず、淨にも非ず、不淨にも非ず。

【三七】力は十力、無畏は四無所畏、等は三念住と大悲とを等取するなり。之を十八不共佛法といふ。佛法とは佛の有する特質の意。

【三八】「人と法との二は皆無なり、此の中にて名づけて空と爲す、彼れが無は是れ無なるに非ず、此の中に別の空有り。」

【三九】Pudgala。人又は我。

【四〇】中邊論には「上に說きしが如き能念等の十四は此二法に處して是を空と名づくるなり。空の眞實相を顯はさむが爲の故に、是の故に最後に二空を安立す。一には非有空、二には非有性空なり。」とあり。これによつて上文の意味を解すべし。非有空は無性空、非有性空は無性自性空なり。

【四一】「若し不淨なりと言はば衆生には解脫無からむ、若し無垢なりと言はゞ功用は施す所無からむ。」

【四二】「染ならず不染に非ず

塵を出離せるが如し。空の淨なるも亦然り。性が轉變するには非るなり。

[三四]此の空の差別に復十六有り。內空と外空と內外空と大空と空空と勝義空と有爲空と無爲空と畢竟空と無際空と無散空と本性空と相空と一切法空と無性空と無性自性空となり。此等の略義云何が應に知るべき。頌に曰はく。

(一八)能食と及び所食と此れが依の身と所住と[三五]
　能く此れを見ると如理と所求の二淨の空なると
(一九)常に有情を益するが爲生死を捨てざるが爲
　善の窮盡すること無きが爲の故に此れを觀じて空と爲すと、
(二〇)種性の淸淨なるが爲諸の相好を得むが爲[三六]
　諸の佛法を淨くせんが爲の故に菩薩は空を觀ずるとなり。

論に曰はく、能食の空なるは內處に依りて說く。卽ち是は內空なり。所食の空なるは外處に依りて說く。卽ち是れ外空なり。此れが依の身とは、謂はく能所食の所依止の身なり。此の身が空なるが故に內外空と名づくるなり。諸の器世間を說いて所住と爲す。此れが相は寬廣なるが故に名づけて大となす。所住が空なるが故に名づけて大空と爲す。能く此れを見るとは、謂はく智が能く內處等の空なるを見るなり。空の智も空なるが故に說いて空空と名づくるなり。如理とは、謂はく勝義なり。卽ち如實行なり。所觀の眞理は此れ卽ち空なるが故に勝義空と名づく。菩薩の修行は二淨を得んが爲なり、卽ち諸の有爲と無爲との善法なり。此の二は空なるが故に有爲空及び無爲空と名づく。有情に於て常に饒益を作さんが爲に而も空を觀ずるが故に畢竟空と名づく。生死は長遠にして初後際無し。此の空を觀ずるが故に無際空と名づく。觀じて空と爲さずむば便ち速に厭捨すれば、此の生死を厭捨せざらむが爲の故に此の無際の生死を觀じて空と爲すなり。所修の善が無餘依般涅槃

【三四】以下十八空論と比較すべし。

【三五】「食者と所食との空と身と及び依處との空と能見と及如理と所求の至得の空と」かく一偈あるのみなれば、こゝに二偈缺けたり。長行中より拔出して補へば、恐らく下の如くならむ。「常に他を利益するが爲と生死を捨てざるが爲と善の窮盡すること無きが爲と淸淨界の性の爲と大相好を得んが爲と佛法を淸淨にするが爲とにて菩薩は此の空を修す。是れ十四種の空なり。」

【三六】種性は種姓ともあり。以下に於ても爾り。性姓何れも用ひらる。

亦共相にも非るべし。此れ即ち空と妄分別とは一異の相を離れたることを顯はす。

所知の空性の異門は云何。頌に曰はく、

（一五）[三一]略して空の異門を説かば、謂はく眞如と實際と

　無相と勝義相と法界と等なり。應に知るべし。

論に曰はく、略して空性を説かば此の異門有り。云何が應に此の異門の義を知るべき。頌に曰はく、

（一六）[三二]無變なると無倒なると相の滅すると聖智の境なると

　及び諸の聖法の因なるとに由る。異門の義次の如し。

論に曰はく、即ち此の中にて所知の空性を説くに、無變なるの義に由りて、説いて眞如と爲す。眞性は常如にして轉易なきが故なり。無倒なるの義に由りて説いて實際と爲す。諸の顚倒の依と緣との事に非るが故なり。相の滅するの義に由りて説いて無相と爲す。此の中には永に一切の相を絶するが故なり。聖智の境なるの義に由りて説いて勝義性と爲す。是れ最勝智の所行の義なるが故なり。聖法の因なるの義に由りて説いて法界と爲す。一切の聖法は此れに緣りて生ずるを以ての故なり。此の中、界とは即ち是れ因の義なり。無我等の義も理の如く應に知るべし。

云何が應に空相の差別を知るべき。頌に曰はく、

（一七）[三三]此は雜染と清淨となり。有垢と無垢とに由る。

　水界と金と空との如し。淨なるが故に許して淨となす。

論に曰はく、空性の差別は略すれば二種有り。一には雜染、二には清淨なり。此れが染と淨とを成ずるは分位の別に由るなり。謂はく有垢の位を説いて雜染となし、垢を出離せる時を説いて清淨となす。先に雜染にして後に清淨と成ると雖、而も轉變して無常と成るの失には非ず。水界等の客

【三一】「如々と及び實際と無相と眞實と法界と法身と等は略して空の衆名を說くなり。」

【三二】「變異に非ると不倒なると相滅すると聖の境界なると聖法の因及び依なると是れ衆名の義の次なり。」

【三三】「亦は染亦は清淨なり、是の如きは空の分別なり。」此半偈を釋して後更に次の半偈を擧げて釋す。「水界と金と空とは淨なり、法界の淨も是の如し。」

には因雜染、謂はく煩惱と業となり。二には果雜染、謂く所餘の支なり。[二七]七の雜染とは、謂はく七種の因なり。一には顚倒因、謂く無明なり。二には牽引因、謂はく行なり。三には將導因、謂はく識なり。四には攝受因、謂はく名色と六處となり。五には受用因、謂はく觸と受となり。六には引起因、謂はく愛と取と有となり。七には厭怖因、謂はく生と老死となり。此の諸の雜染は皆虛妄分別に由りて而も生長することを得ざること無し。

此れより前は總じて虛妄分別に九種の相あることを顯はしたり。一には有相、二には無相、三には自相、四には攝相、五には無相に入る方便相、六には差別相、七には異門相、八には生起相、九には雜染相なり。

是の如く已に虛妄分別を顯はしたれば、今次に當に所知の空性を說くべし。頌に曰はく、

(一三)諸相と及び異門と義と差別と成立とは、[二九]

　應に知るべし、二が空なるの性なり。　略說せば唯此れのみに由る。

論に曰はく、應に知るべし、所取と能取との空性は略說せば但此の相等の五に由るのみなり。

所知の空性は其の相如何。頌に曰はく、

(一四)二無し、無有るが故なり。有にも非ず亦無にも非ず。[三〇]

　異にも非ず亦一にも非ず。是を說いて空相と爲す。

論に曰はく、二無しとは、謂はく所取と能取と無きなり。無有りとは、謂はく二取の無有るなり。此は卽ち空は無性を性と爲すことを顯はす。故に此の空相は有に非ず無に非るなり。云何が有に非る。二の有無きが故なり。云何が無に非る。二の無有るが故なり。此は空相は有にも非ず無にも非ることとを顯はす。此の空は彼の虛妄分別と異にも非ず一にも非ず。若し異ならば應に法性は法と異ることとなるべし。便ち正理に違せん。苦等の性の如し。若し一なるときは則ち應に淨智の境にも非ず

煩惱業生は通常いふ惑業苦なり。之を因果に分つについては三世兩重因果の解釋を參照すべし。

【二七】餘支とは識、名色、六入、觸、受、生、老死なり。

【二八】
- 無明——顚倒因
- 行——牽引因
- 識——將導因
- 名色・六處——攝受因
- 觸・受——受用因
- 愛・取・有——引起因
- 生・老死——厭怖因

【二九】「諸の相と及び衆名と其の義と分別と成立の理とは應に知るべし空を略解すること是の如し。」

【三〇】「二無きと此の無有りとの是の二を空相と名づく、故に有にも非ず、無にも非ず、異ならず、亦一ならず。」

論に曰はく、緣識とは、謂く[二〇]藏識なり。是れ餘識の生緣なるが故なり。藏識を緣と爲して生ずる所の[二一]轉識は受用の主なるが故に名づけて受者と爲すなり。此の諸の識の中にて受は能く受用し、想は能く分別し、思と作意と等の諸の相應行は能く諸識を推す。此の三は心を助くるが故に心所と名づくるなり。

今次に當に此れが[二二]雜染の相を說くべし。頌に曰はく、

(一一)[二三]覆障と及び安立と將導と攝と圓滿と

　　三分別と受用と引起と幷に連縛と

(一二)現前と苦果との故に唯此のみ世間を惱ます。

　　三と二と七との雜染は虛妄分別に由る。

論に曰はく、覆障の故にとは、謂はく無明が如實の理を覆ひて眞見を障ゆるに由るが故なり。安立の故にとは、謂はく諸行が本識の中に業熏習を植ゆるに由るが故なり。攝の故にとは、謂はく名色が有情の自體を攝するが故なり。圓滿の故にとは、謂はく[二四]六內處が諸の有情の體をして具足せしむるが故なり。三分別の故にとは、謂はく觸が能く根境識の三を分別して三受に順ずるが故なり。受用の故にとは、謂はく受支が順と違と[二五]非二との境を領納するに由るが故なり。引起の故にとは、謂はく愛の力が先業に引かれたる後有をして起ることを得しむるに由るが故なり。連縛の故にとは、謂はく取が識をして順の欲等を緣じて連縛して生ぜしむるが故なり。現前の故にとは、謂はく有の力が已作の業をして後有の諸異熟果を取與して現前するを得しむるに由るが故なり。苦果の故にとは、謂はく生と老死との性に逼迫有ると前因に酬ひたるとの故なり。唯此の所說の十二有支のみが世間を逼惱して安隱ならざらしむるなり。[二六]三の雜染とは一には煩惱雜染、謂はく無明と愛と取となり。二には業雜染、謂はく行と有となり。三は生雜染、謂はく[二七]餘支なり。二の雜染とは、一

[一九]「第一を緣識と名づく。第二は是れ用識なり。塵に於ける受と、分別と、行を引くとは謂く心法なり。」

[二〇] 阿賴耶識を藏識と譯す、一切の種子を含藏するが故に藏識と云ふ。

[二一] 阿賴耶識を本識と云ふに對して餘の七識を轉識と云ふ。本識より轉識が生ずるが故に本識を生緣となす。

[二二] 一切有漏法の總名。

[二三]「覆藏と及び安立と將導と攝持と圓滿と三分にての成と領觸と並に牽引と執着と及び現前と苦との故に世間を惱ます。三種と二種との雜と、亦七とは虛妄に由る。」

[二四] 六根を內の六處と云ふ。

[二五] 非二とは非順非違をいふ。

[二六]
無明・愛・取 ― 煩惱雜染
行・有 ― 業雜染
（煩惱雜染・業雜染 ― 因雜染）
識・名色・六處・觸・受・生・老死 ― 生雜染 ― 果雜染

境は所得無きことに依りて識は所得無くして生ず。

論に曰はく、[一六]唯識のみは所得有ることに依止するが故に、先に境に於て所得無くして生ずること有り。復、境に於て所得無きに依るが故に後に識に於ても所得無くして生ずること有るなり。是の方便に由りて所取と能取との無相に入ることを得るなり。

復次に、頌に曰はく、

(八)[一七]識の有得の性も亦無所得と成るに由るが、

故に知る、二の有得は無得性にして平等なりと。

論に曰はく、唯識のみ生ずる時に現じて種々の虚妄の境に似るが故に有所得と名づく。所得の境は實性無きを以ての故に、能得の實性も亦成ずることを得ざるなり。能得の識が所得無きに由るが故に、所取と能取との二の有所得なるは平等にして倶に無所得性を成ずるなり。

虚妄分別の無相に入るの方便の相を顯はし已れり。此れが差別と異門との相を今次に當に說くべし。頌に曰はく、

(九)[一八]三界の心心所は是れ虚妄分別なり。

唯境を了するのみなるを心と名づけ、亦別なるを心所と名づく。

論に曰はく、虚妄分別の差別の相とは、卽ち是れ欲界と色無色界との諸の心心所なり。異門の相とは唯能く境の總相を了するのみなるを心と名づけ、亦差別をも了するを名づけて受等の諸の心所法と爲すなり。

今次に當に此れが生起の相を說くべし。頌に曰はく、

(一〇)[一九]一を則ち緣識と名づけ、第二を受者と名づく。

此の中能く受用すると分別すると推すとは心所なり。

切萬法、圓成實性とは圓滿に成就せる眞實の性卽ち法性眞如。

【一五】「唯識に由依するが故に境の無體なるの義成ず。塵が體有ること無きを以て本識は卽ち生せず。」

【一六】中邊論には「一切三界は但唯、識有るのみなり。此の如き義に依りて外塵の體相の決(定)して無所有なるの此智が成ずることを得。所緣の境が體あることなきに由るが故に能緣の唯、識も亦生ずることを得ざるなり」とあり。彼此參照して其意味を解すべし。

【一七】「是の故に識成就して識を自性と爲すには非ず。」之を釋して後、次の半偈を擧げて又釋す。「應に知るべし、識と不識と此義に由りて平等なり。」但し此前半は「不識と及び識とは」とありて、其割註に「疏の本には應知識不識と云ふ」とあり。今は疏の本文を取れるなり。

【一八】「虛妄の總類とは三界と心心法となり。」此下の割註に「不識者疏本無不字」とあり。これは前偈に關す。而して此半偈を釋して後、次の半偈を擧げて釋す。「唯塵の智のみなるを心と名づけ、差別するを心法と名づく。」

とは、謂はく自他身の五根の性に似て現ずるなり。變じて我に似るとは、謂はく染の[一一]末那が我擬等と恒に相應するが故なり。此の境は實には有に非ずとは、謂はく似の義と似の根とは行相なきが故に、似の我と似の了とは眞現に非るが故に皆實有に非るなり。境無なるが故に識も無なりとは、謂はく所取の義等の四境無なるが故に能取の諸識も亦實有に非るなり。

復次に、頌に曰はく、

(五)[一二]虚妄分別の性は此義に由りて實有にも全無にも

非ることを成ずるを得。滅して解脱すと許すが故に。

論に曰はく、虚妄分別は此の義に由るが故に實有に非ることを成ずとは、所現の如くに起りて眞有に非るが故なり。亦全無にも非ずとは中に於て少しく亂識の生ずること有るが故なり。如何が此の性は全無なりと許さざるや。此が滅して解脱を得と許すを以ての故なり。若し此に異ならば、繫縛と解脱とは則ち應に皆無なるべし。是の如きは便ち雜染と及び清淨とを撥無する失を成ぜん。

已に虚妄分別の自相を顯はしたれば、此れが攝相を今當に説くべし。

但是の如きの虚妄分別のみ有りて即ち能く具(つぶさ)に三種の自性を攝す。頌に曰はく、

(六)唯(たゞ)[一三]、[一四]所執と依他と及び圓成實性とのみあり。

境なるが故に分別なるが故に及び二が空なるが故に説く。

論に曰はく、虚妄分別の境に依止するが故に徧計所執の自性有りと説き、虚妄分別の性に依止するが故に依他起の自性有りと説き、所取と能取との空に依止するが故に圓成實の自性有りと説く。

已に虚妄分別の攝相を顯はしたれば、當に即ち虚妄分別に於て無相に入るの方便の相を説くべし。

頌に曰はく、

(七)[一五]識は所得有ることに依りて、境は所得無くして生ず。

本識とは謂く阿黎耶識なり。生じて彼に似るとは謂く塵等の四物に似るなり。但、識のみ有りとは謂く但、亂識あるのみなり。彼無しとは謂く四物なきなり。何を以ての故に。似塵似根は實の形識にあらざるが故に、似我似識は顯現して境の如くならざるが故なり。彼にして無きが故に識も無しとは謂く塵が既に是れ無なれば識も亦是れ無なり。是の識の所取の四種の境界、謂く塵根我及び識の所攝は實には體相なきなり。所取にして既に無なれば、能取の亂識も亦復是れ無なり」となす。上欄の論文とは學説の相違あるを示す。必ずしも何れかゞ誤なりなどゝいふべきにあらず。

【一一】Monasの意、染の末那とは煩惱に汚れたる末那。中邊論は意識となす。

【一二】「亂識の虚妄の性は此の義に由りて成ずることを得。實の有と無とに非るが故に。彼を滅するが故に解脱す。」

【一三】「分別と、及び依他と、眞實とのみが唯三性なり。塵と亂識と及び二の無なるとに由るが故に説く。」

【一四】所執は徧計所執性、これ凡夫の妄執によりて實物と認めらるゝもの、依他は依他起性、因縁によりて生ずる一

空のみ有りとは、謂はく虚妄分別の中には但所取と及び能取とを離れたる空性のみ有るなり。彼に於ても亦此れのみ有りとは、謂はく卽ち彼二が空なるの性の中に於ても亦但此の虚妄分別のみ有るなり。若し此に於て有に非ずんば、彼に由りて觀じて空と爲す、所餘は無に非るが故に如實に知りて有と爲す、若し是の如くなるときは、則ち能く無倒にして空相を顯示す。

復次に、頌に曰く、

(三)[八]故に一切法は空に非ず不空に非ずと說く。
有と無と及び有との故に、是れ則ち中道に契ふ。

論に曰はく、一切法とは謂はく諸の[九]有爲と及び無爲との法なり。虚妄分別を有爲と名づけ、二取の空なるの性を無爲と名づく。前理に依るが故に此の一切法は空に非ず不空に非ずと說く。空の性と虚妄分別と有るに由るが故に空に非ずと說く。所取と能取との相無きに由るが故に不空に非ずと說く。有の故にとは、謂はく空性と虚妄分別と有るが故なり。無の故にとは、謂はく所取と能取との二性無きが故なり。及び有の故にとは、謂はく虚妄分別の中に空性有るが故と及び空性の中に虚妄分別有るが故となり。是れ則ち中道に契ふとは、謂はく一切法は一向空なるにも非ず、亦一向不空なるにも非ざれば、是の如きの理趣は妙に中道に契ひ、亦善く般若等の經の一切法は空にも非ず有にも非ずと說くにも符順するなり。

是の如く已に虚妄分別の有相と無相とを顯はしたれば、此れが自相を今當に說くべし。頌に曰はく、

[一〇](四)識が生じ變じて義と有情と我と及び了とに似る。
此の境は實には有に非ず。境無なるが故に識も無なり。

論に曰はく、變じて義に似るとは、謂はく色等の諸境の性に似て現ずるなり。變じて有情に似る

偈は本論全體の内容を示す、此の七項目によりて本論は七品に分たる。

【五】こゝに辯相品第一を置くが當然なり。これより以前は辯相品の文ならずして一論の總序なればなり。

【六】「虚妄分別は有なり、彼處には二有ることなし。彼の中には唯空のみ有り。此に於ても亦彼有り。」

【七】所取は中邊論には所執とあり、感覺認識せらるゝもの。能取は能執とあり、感覺認識するもの。

【八】「故に一切法は空に非ず不空に非ずと說く。有と無と及び有との故に是を中道義と名づく。」

【九】有爲とは因緣所生の事物。無爲とは因緣所生にあらざるもの。

【一〇】「塵と根と我と及び識とは本識が生じて彼に似るなり。但、識のみ有りて彼無し。彼にして無なるが故に識も無し。」中邊論は釋して、「塵に似るとは謂く本識が顯現して色等に相似するなり。根に似るとは謂く識が五根に似て自他相續中に於て顯現するなり。我に似るとは謂く意識が我見無明等と相應するが故なり。識に似るとは謂く六種の識なり。」

辯中邊論[1]

卷の上

世親菩薩造

大唐三藏法師玄奘詔を奉じて譯す。

辯相品第一[2]

[3]此の論を造りし善逝の體所生と及び我等に敎へし師とに稽首す。當に勤めて斯の義を顯はすべし。（歸敬頌）

此の中、最初に論體を安立す。頌に曰はく、

（一）[4]唯、相と障と眞實と及び諸の對治を修すると、

　卽ち此の修の分位と、得果と、無上乘とのみなり。（總序）

論に曰はく、此の論は唯是の如き七義のみを說く。一には相、二には障、三には眞實、四には諸の對治を修す、五には卽ち此の修の分位、六には得果、七には無上乘なり。[5]

今此の中に於て先に其相を辯ぜむ。頌に曰はく、

（二）[6]虛妄分別は有なり。此に於ては二は都て無し。

　此の中には唯空のみあり。彼に於ても亦此のみ有り。

論に曰はく、虛妄分別は有なりとは、謂はく[7]所取と能取との分別有るなり。此に於ては二は都て無しとは、謂はく卽ち此の虛妄分別に於ては、永く所取と能取との二性無きなり。此の中には唯

【一】西藏譯の此論に存する梵語題名は Madhyānta-vibhaṅga なり。梵語の最近發見せられたものには vibhaṅga は vibhāga なり。此方可なり。

【二】此品は本來いへば、七には無上乘なりの次に置かるべきものなり。

【三】釋論者の歸敬序。善逝體所生を通常は善逝體の所生と讀み、體は卽ち法身、善逝は受用變化なりなどとも解すれど附會說に過ぎぬ。體所生にてアートマヂヤ（ātmaja）の譯、單に子といふ意なり。中邊分別論は善逝體所生を善行子と譯す。此譯正し。以下註の欄に括弧して出せるものは凡て中邊分別論の偈の和譯なり。對照の爲に出す。「善行の子にして能く此正論を作れるものと、我等の爲に宣說せしものとを恭敬す。今當に此義を顯はすべし。」

【四】序頌。「相と、障と、及び眞實と、對治道を研習すると、修の住と、而して得果と、無上乘とのみ、唯爾り」此の

な標準の如くに見做され得るものでない。印度の當時の學者が既に已に古說に準ずる點が多くなかつたのである。必ずしも眞諦三藏の說又は古說のみが唯一の取るべきものといふのでもないが、然し眞諦三藏と玄奘三藏との傳へたものゝ間に其系統の相違と歷史的の變遷發達との考を入れてそして兩者を比較對照し兩者の內面的連絡を考へねばならぬものであることをいはむとするのである。決して述記のいふ所のみを盲信しそれに盲從すべきでない。此意味に於て眞諦三藏譯の中邊分別論は辯中邊論と同等に重要なものであり、同一論本に對する兩者の相異等を知るに缺くべからざる對照資料である。其幾分をなりと彷彿するを得しめむ爲に國譯の脚註に頌文のみは中邊分別論のものを國譯して添加して置いた。

世親菩薩の辯中邊論は安慧によりて複註せられて其全譯は西藏譯に存し西藏大藏經に保存せられて居る。然るに其梵文の斷片が最近佛蘭西の碩學によつてネポールより發見將來せられ、目下我國の學者の手によつて整理解讀公表せられつゝある。辯中邊論の重要なることゝ又幾分なりと安慧の說を知り得るとの兩方面に於て極めて興味あり又重要なものであると思はる。一日も早く完成して學界を俾益せられむことを望むで止まぬのである。

昭和七年十二月七日

譯者　宇井伯壽　識

以上の外第三十三頌前半と後半との間に二頌があり、第百五頌の次に二頌と一頌とあるが、述記には前の二頌は辯中邊論の頌ならずして世親菩薩が他論より引用したか又は自ら作つたか何れかであるとなし、後者の二頌と一頌とは共に西域相傳に寶積經の頌であるとなすといふて居る。中邊分別論には此五頌は凡て缺けて居るから、述記のいふ所は恐らく正しいものであらうと推斷せられ得る。蓋し述記なる名は慈恩大師が玄奘三藏から親承した所を記したもので自ら案出して述べたのではない意味を示すのであるから、これ等も玄奘三藏が印度で聞いて來たことに屬するのである。從つて又述記のいふ所は多くは玄奘三藏當時の印度の學者の說に基いて居ると見らるゝから其中には貴重なものを含むで居る。然るに頌文釋文を解釋する際隨處に眞諦三藏譯の中邊分別論に關說して數々之を排斥して居る。元來玄奘三藏が翻譯をなした際唐の高宗は勅して未だ漢譯にない新しい經論を先に譯し、既に先譯の存するものは後に譯する方針となせと命じたのであつたが、然し眞諦三藏の既に譯した論にして玄奘三藏の再譯したものは必ずしも少くない。此辯中邊論に關していへば、述記に眞諦が古く梁朝に之を譯したが文錯り義違すれば更めて譯したのであるといはれて居る如く、凡て文錯義違の爲再譯するといふ抱負を以てして居るのである。玄奘三藏が既にさうであるから慈恩大師も常に此精神態度を以て眞諦三藏の譯書に向ふのである。然し曾てもいうた如く、玄奘三藏の傳へた唯識說は護法の新說であつて、唯識の古說に反すること數々なるもの、眞諦三藏の傳へた唯識說は護法以前の說で而も多分に古說に準ずるものであるから、たとひ玄奘三藏の學說及び解釋は其當時の印度の學者のものを傳へて居るにしても、決して唯一正當

障品と辯眞實品と辯修對治品と辯修分位品と辯得果品と辯無上乘品との七品より成ることを言詮はせるもの、又最後の一頌卽ち論の最後よりの第二頌は同じく彌勒菩薩の作で、何故に此論を辯中邊と名づくるかの所以を述べた結頌である。此の如く前後を省いて中間の百十一頌が右の七品に分たれて各の義が述べられて居るのである。此七品の內容は大體下の如くになつて居る。

大乘經の解釋などを授けたとし、玄奘三藏は瑜伽師地論大乘莊嚴經論中邊分別論等というて居るから、玄奘三藏の時初めて辯中邊論が彌勒菩薩によつて無著菩薩に教へられた書中に明言せられたのである。然し印度の諸論師はこれよりも遙に古く辯中邊論を彌勒菩薩の說いたものとなして居るから、唯支那に入りて明確にしかいはれなかつたといふのみである。解題者は此彌勒菩薩は一般に信仰せられ居る當來佛たる兜率天の彌勒菩薩とは區別すべきであつて、全く史的人物として無著論師の師たる彌勒論師であつたのが、後に其名の同一や其他の事情の爲に混ぜらるゝに至つたのであると考へるから、辯中邊頌は彌勒論師の著書であると信ずる。然し今此解題の中に於て此の如き純學問上の研究問題を取つてとやかく議論せむとするが如き稚氣は之を差控ゆべきであると信ずるから、今こゝではむしろ古來の說を承けて信ずる方を讀者に望むのである。たゞ彌勒論師の存在を認めずに全く兜率天の彌勒菩薩に外ならぬとなすにしても、辯中邊頌は決して無著世親二論師何れの著はしたものでもないことは明確であるから、それだけに明となれば、それで十分である。

辯中邊論は其原名をマディヤーンタ・ヸバーガ（Madhyānta-vibhāga）といふ。マディヤが中、アンタが邊、ヸバーガが分別又は辯であるから、眞諦三藏は中邊分別論と譯し、玄奘三藏は辯中邊論と譯したのである。慈恩大師は中邊分別論と譯しては漢語の順序に應じて居ないと非難するが、玄奘三藏自身も西域記には中邊分別論とし、三藏の弟子も慈恩傳に中邊分別論となして居るから、一概に非難すべきものでもないであらう。辯は顯了の義で分別の異名である。此論は、たとひ釋が附せられて居ても、なか〳〵難解のものであつて、一見各說の目次を出した如きものであり、釋も唯それを一一分解して多少の解釋を附したが如きものであつて、決して後世の釋の如くに議論的に論述し各說の意味を悉く言詮はすが如きことをなして居ない。かゝる註釋風が世親菩薩の常例であり、恐らく古い時代の釋家の一般傾向であつたのであらう。そして此論には慈恩大師の辯中邊論述記三卷が作られて今に傳はつて居るが、これすら大師の他の註釋書程に解し易いものではない。從つて少しく內容の概觀を示して、何を說き居るかを見得る如くにし、以て理解の一助となすであらう。

頌文のみについていへば、最初にある一頌と最後にある一頌とは世親菩薩の作つたもので、歸敬序と結頌とである。此二頌を除いて更に最初にある一頌卽ち論の第二頌となつて居るものは彌勒菩薩の作つた總序であつて、此論が辯相品と辯

辯中邊論解題

辯中邊論上中下三卷は玄奘三藏が龍朔元年卽ち六六一年五月に譯出したものであるが、其前年顯慶五年正月から玉華宮に於て大般若經六百卷を譯し始め龍朔三年十月に譯了したのであるから、大般若經の翻譯の行はれつゝある間に玉華宮に於て譯されたものである。そして此論には辯中邊論頌と辯中邊論とがあり、前者は頌文のみで、後者は其頌文と之を釋せる長行との合したものである。元來論の字は梵語原本にあつたのではなくして漢譯する際漢譯の慣例として論の字を加へ、以て書名なることを明確にし又論藏に屬することを明示し、書名として適當ならしめたに外ならぬ。故に頌文のみならば、辯中邊頌と稱すべきであり、頌釋兩者を合せ又は釋のみが辯中邊註とか辯中邊釋とか呼ばるべきであらう。原題には辯中邊頌と辯中邊註又は釋との名があつたのである。然るに譯出の際は後者を前に譯し、其中から頌文のみを取出して別行したから、自然辯中邊論及び辯中邊論頌といはるゝことになつたのであらうと想像さるゝ。何故にかく二本が存する如くになつて居るか。

辯中邊論は既に古く眞諦三藏によつて中邊分別論の名によつて陳の永定二年(五五八年)臨川郡に於て三卷として譯せられ、同時に疏三卷が出されたこと並に十八空論が之と密接な關係を有する斷片なること十八空論の解題に述べた如くである。然るに眞諦三藏譯には頌文のみを特出した別行本はなく、又中邊分別論の初部に世親菩薩の所造とのみなし、恰も頌釋何れも世親菩薩の作なるかの如く思はしむる點があつて決して頌と釋とは作者を異にすることを示して居ない。然し印度に於て古くから常に頌と釋とは作者を異にすることを言傳へて居た爲に、玄奘三藏は之を知り之に基いて頌文のみを別行となすに至つたのである。頌と釋とが別人の作なる爲に、頌のみを別行せしめることは玄奘三藏の慣例であるともいへる程である。

辯中邊頌は彌勒菩薩が無著菩薩に敎へたもの、そして無著菩薩は之を世親菩薩に授けたから、世親菩薩が之を釋したのである。故に釋は世親菩薩の著である。彌勒菩薩と無著菩薩との關係のことを初めて支那に傳へたのは菩提流支で、次は眞諦三藏、次に玄奘三藏であるが、菩提流支は彌勒菩薩が無著菩薩に敎へたとして地持經金剛般若論のみを擧げて他をいはず、眞諦三藏の世親傳には十七地經諸

得るときは、則ち我見を離れ、後に自在を得て、意の如く能く爲すなり。三性の根本義に屬することは、已に前に釋せるが如し。例難は得べけんも、復重ねて記さず。[三九]

十八空論終

【三九】以上十種我見中第一、第二、第四、第五を述べしのみにてそれ以下を缺く、これ散逸したるなり。

有れば卽ち依他假なり、[三〇](三二には)此の兩が皆所有無ければ卽ち眞實假なり。無明の一支にして既に爾り、所餘の行等の十一も其れ例するに皆然り、復具さには釋せず。

五には自在者の執を破するが故に[三一]處非處の勝智を說く。外道の[三二]自在天を計するは、如意に能く善を作すも、惡道の果報を得、惡を生ずるも能く善道を招き、有流を作すも解脫を得、無流を作すも生死を感ぜん、何を以ての故に、自在を得るを以ての故なり。此の執を破せんが爲に處非處は皆是れ依他にして並に自在無しと說くなり。自在無きに三義有り、一には業に依る處非處、二には煩惱に依る處非處、三には果報に依る處非處なり。[三三]壽量義の中に廣く七種の是處非處の義を明せるが如し。業に依る處非處とは惡業に依りて惡道に入るを名づけて是處と爲す、自在力無きの入なり。若し惡業に依つて惡道に入らずんば名づけて非處と爲す、是の處有ること無し、善業も亦然り。煩惱に依るとは、若し人未だ[三四]五蓋を捨てず、未だ[三五]七覺を修習せずんば、終に苦際を盡すを得ること能はずして、煩惱に依つて解脫に至ることを得ず、故に自在の業無きを知る。凡夫は煩惱に依つて能く殺等の業を爲すも、煩惱無くんば依處[三六]無きが故に並に自在力無きなり。果報に依るとは、土に二王なく、世に兩佛無し、若し二王兩佛をして同時に俱に興らしめば是の處有ること無し、女人の轉輪王と爲るが如きも亦是の處無く、小乘の聲聞及び[三七]辟支佛の佛と作ることを得る者も亦是の處無し。轉輪王及び佛には同じく不共の業有り、此の業は最も一切に勝る、因緣果報等の力に依りて、復作意して同一處たるを欲すと雖、終に心に從ふを得ず、女人には兩業有り、一には心が善なるが故に人身を感得するも、二には惡業に由りて所以に女と爲りて、恒に[三八]人に隷屬して自在なるを得ず。皆是れ他の果報に依るなり。二乘の人は少欲知足なれば、此の業に依因するが故に今果を得、已に此の果を得て菩薩たるを求めんと欲するも、自在力無くして、終に得ること能はず、此の如き義に兩有り、一には業に依り、二には果に依るなり。若し此の七種の處非處の勝智を

【三〇】原文三の一字なきも明に脫せるなり。
【三一】處はコトワリの意、非處は其反對。處は是處ともいふ。是は是非の是なり。
【三二】自在天外道なり。
【三三】壽量義とは恐らく眞諦の金光明經壽量品を釋せる部を指すならむ。
【三四】蓋は蓋覆煩惱の別名、能く心性を覆うて善法を生ぜざらしむ。貪欲、瞋恚、睡眠、悼悔、疑の五を五蓋と云ふ。
【三五】七覺支。
【三六】原文に爲とす。明に無の誤なり。依處は身體をいふ。煩惱なくば身體を得る業なく、身體なくば殺生等はなし。
【三七】緣覺なり。
【三八】男子の意。

く行を生ずること無し、無明が若しくは在るも若しくは在らざるも、自然に行有るが故に、無明は力として行を生ずること無しと知ると謂ふものなり。若し[二七]十二有分の展轉相生することを解すれば、能く因果事等の增減の六種の邪執を離る。略して十二有分の因果の義を明すに自ら三種有り、一には無明を明し、二には動轉無きの意を明し、三には因果の體相を辨ずるなり。若し心にして是れ常なるときは、則ち因果無きも、心は是れ無常なるを以ての故に、因果の義が立つなり。若し別に動轉の意有りと言はゞ、則ち因は應に作意して果を生ずべく、果は應に作意して方に因より生ずべし。便ち是れ自在にして、依他なるとき則ち生ずと謂ふには非ず、依他の義ならば因は果に依り、果は因に藉りて成じ、互に相須待し、並に皆依他なり、所以に是れ假にして實性有ること無きなり。若し相似せざるときは、則ち因果の義を失ふ。豆の麥を生ぜざるが如き、因に非るを以ての故に、互に相生ぜざるなり。若し果をして因に似ず、因をして果に類せざらしめば、惡を作すも便ち應に天に生じ、善を爲すも則ち地獄に墮すべし、乃至、有流も應に解脫を感じ、無流も更に生死を增すべし。是の故に無常が無常を生ずるは此れ自然に住するの理なり、勞して作意有りと執せざれ。因果の相似を十二有分と名づくる此の義は三種の煩惱を破せんが爲なり、謂はく貪愛皮と我見肉と無明心となり。此の十二の緣の體の中にて、若し是れ果報分ならば、實に若し厭離せば貪愛を破するを以て、無願解脫門を顯はし、若し是れ因分ならば、我見を破するを以て、果が因に由りて生じて我の常作に非ることを顯はして空解脫門を明し無明を以て還つて無明を顯はし、若し能く諸の業行が無明より生ずることを解了せば、無明は暗を顯はすの心にして即ち無明を滅す、即ち是れ四謗執相の故なり。此の無明を破して、以て[二八]無相解脫門を顯はす。若し十二有分の增無く、減無きを體するときは、則ち我見を除き、作者の執を離るゝが故に、十二有分を以て正しく此の執を破するなり。[二九]三の本の所攝は無明に三義有り、一には分別の所顯なれば即ち分別假なり、二には因果の道理

五とするものなれば、動轉の譯は正し。

【二七】十二有分は十二有支ともいふ。十二因緣の一一を有分又は有支といふなり。有は生存の意。十二因緣の第十と同意。

【二八】無願空無相を三解脫門といふ。通常は空無相無願の順序なり。

【二九】三の本とは三種の根本の意。前の一者執の最後並に此論の最後部と比較せよ。

て、事の義と界の義と有りて根本眞實に從へばなり。眼に三有り、一には分別眼、二には種類眼、三には[一八]如(如)眼なり。乃至、[一九]行非行勝智も例するに五陰の中の釋の如し。

[二〇]四には作者の執を破せんが爲の故に、[二一]十二緣生の因と果と事との三義に增減無きことを說く、增減と言ふは謂はく行識等の十一支に於て因を立つるに不平等なるなり、何を以ての故に、無常法に常を立てゝ因と爲すを以ての故に不平等と名づくるなり、僧佉等の外道の無知の我を立てゝ因と爲すが如きも、亦優婁佉の常我を立てゝ因と爲すが如きも、及び[二二]自在天を執して常等にして而も能く業を作すと爲すも、亦是れ常を立てゝ因と爲すものにして能く無常の果を作つて、因果は卽ち相類せざるが故に、因を立つるの不平等の理と言ふなり。而して無常の果を論ずるが爲に、[二三]自は無明有るを以て因と爲すに、而も彼は常の因有りと謂ふ、卽ち是れ因の義を增益するなり。因を損減すとは、[二四]尼犍子等の外道の諸法は自然にして而も有りて、因緣有ること無しと謂ふが如きなり。實有なるを無なりと謂ふが故に、因を損減すと言ふ。增果とは僧佉等の所立の義の、因の中に已に果有り、果は本有なりと雖、因に由りて果を顯はすと謂ふが如し。此が既に是れ本有ならば、則ち因より生ぜざるに、而も理としては實に因緣の聚集に由りて、方に此の果有るなり。而も其を執して本有と言ふが故に增果と名づくるなり。損果とは[二五]斷見等の外道の義を立てゝ一切の業は皆果を感ぜずして未來の生無しと謂ふが如し。實には感ずること有り實には生有るに、而も邪執して無と立つるが故に損果と名づくるなり。增事とは自在天の所執の一切の事は皆我意心より而も有り、無明の體に別に作意有りて能く行を生ずるが如しと謂ふが如し。而も無明の體には實には別に作意有りて而も行を生ずること無し。又、優婁佉の所執の法體に於て別に動轉等の事業有りとするが如し、事業に五種有り、謂く[二六]上下屈申等にして動轉を以て體と爲すと執す。體を離れての外に實には別の事業無きに、而も邪執して有と爲すが故に增事と名づくるなり。損事とは外道の所執の無明は力として能

【一八】　如眼とあれど如々眼とすべきなり。前の色の三種を見よ。

【一九】　行非行勝智は中邊分別論の有爲無爲勝智にして、十種勝智中の最後の第十の勝智なり。行は有爲、非行は無爲の異譯。

【二〇】　此の前に第三の受者執を破する項脫落す。

【二一】　十二因緣、十二緣起といふと同じ。十二因緣は主として羅什譯語、十二緣起は玄奘の譯語、十二緣生は眞諦の譯語。

【二二】　自在天を執するは自在天外道とも摩醯首羅天師(Maheśvara)ともいはれるもの。

【二三】　自とはこゝにては佛教をいふ。從つて次の彼は數論派の前の三外道を指す。

【二四】　尼犍子はニガンタ(Nigaṇṭha)派にして、耆那教にならざる以前のものなれど、佛教にては耆那教をも指す。

【二五】　斷見外道は通常六師外道中の富蘭那迦葉(Pūraṇa-Kassapa)を指す、順世外道も此の中に入る。

【二六】　玄奘譯にては取捨屈伸行といふ。上下屈申行の方正しき譯なり。動轉は玄奘譯には業とす。勝論派の業は運動をいひ、之を上下屈申行の

六識は是れ執の種子にして、貪と內根と外塵とより生ずるなり。此の十八は因に從つて界と名づく。界は是れ種子なり、此の界を假說するに三種の義有り、一には能作、二には所作、三には作なり。倶絺羅が外道に在る時に、我は是れ能作なりと謂ひ、而して來つて佛に問ひしを破せんが爲に、佛は方便もて眼等は是れ能作なりと假說し、其の眼等は我の作爲りと執せば、又、破し一陰もて示して根を離れての外に別の我有ること無く、但是れ眼等の因緣より生ずるを謂ひて能作と爲すのみにして、實には能作なるには非ず、六塵を假說して名づけて所作と爲すと云へり。僧佉[15](等)の外道の所立に兩種の常我あり、一には有知の我にして是れ常我なりと謂ふ、既に是れ常なるが故に是れ能作なるには非ず、二には無知の我にして、卽ち一切法なりと執す、是れ有知我の用にして、自性成就の智なれば所作に非ずとするを破せんが爲に、是れ佛は六塵を假說して名づけて所作と爲すも、性有なるには非ず、既に實有の能作に非ざるが故に、塵も亦所作に非ずと知る。是の故に作は是れ六識なりと假說して、一には外道の一切の事は皆我意に由ると謂ふは、此は是れ增益の謗なりと破し、二には邪見外道の我は常なり、我は常なるを以ての故に諸法も亦常なりと謂ふは、既に兩種が倂に常なるが故に、能作と及び所作と有ること無く、卽ち損減の謗なりとし、此の二邊を離れんが爲の故に、六識を假說して作と爲すなり。根塵は作意せず、故に作有ること無し。若し根塵を離るれば亦識も有ること無し、何を以ての故に、識は必ず根塵に依りて方に生ずることを得るを以ての故なり。則ち作ならざる有ること無く、正しく外道の能作所作等の三種の無明を破せんが爲の故に、此の三義を立て、種子に能執所執等有ることを顯はさんが爲の故に、十八界[16]を立つるなり。若し十八界の[17]四緣より生ずることを解するときは、則ち我を執して能生等と爲さざるなり。根を能作と名づくるは、能作に二種有り、一には能く識識を生じ、二には能く塵の爲に緣と作るなり。塵を所作と爲すは、眼の爲に緣と作ると、識の所依と爲るとなり。識が是れ作なるは、作は是れ生起にし

【一五】 Sāṁkhya の音譯、數論派。次にある說には數論派の說とは一致せざるものあれば等の一字によりて他派の說をも等取せしむる意味にて等の字を補ふべし。

【一六】 六根六境六識の十八。

【一七】 因緣、次第緣、緣緣、增上緣の四。

和合せしめ、和合するが故に能く所知有り、知の故に樂有り、樂の故に苦有り、樂に由るが故に欲を生じ、苦に由つて瞋を生じ、樂を得んと欲し、所以に苦を厭ひ、而して功力を修し、功力の故に正念有り、解脫を得んと欲するが故に、須らく法非法を除くべく、法非法にして生ぜざるときは、則ち知有ること無く、知無きを以ての故に苦樂等も無し。若し解脫を求めば、當に四法を修すべし、一には眞實語、即ち執持なり、二には施なり、三には苦行なり、四には定なり。若し能く此の四種の正法を修するときは、則ち善道に生ずることを得、善道にて樂を得、樂には智慧有り、智慧は即ち法非法を厭ふ、法非法を厭へば則ち解脫を得るなり。大乘破して言はく、若し、先に我有りて、而して未だ法非法有らず、後時にも因緣有ること無くして而も生ずと說かば、解脫も亦爾り、解脫を得已つても、亦應に因緣有ること無くして、更に法及び非法を生ずべし、此の如くんば則ち解脫の時無し。

〔三〕界とは種子の義なり。自の分の種類是を種子と名づくれど、種子も亦是れ一義なり、種類同一なるを以ての故なり。但分が果を張(ひら)いて遂に十八界と成るなり。而るに種子には三有り、一には能執、二には所執、三には執なり。眼等の六根の能執の種子を自種の種類と名づく、即ち是れ能生なり、但因緣に隨つて〔四〕勝負に異有り、果を生ずるに優劣不同なるが故なり。過去の貪に由りて六塵は業を生じ、阿梨耶識に熏じ、種子をして既に同ならしむ、是れ一の貪なるが故に種子と言ふ。是れ一にして能く六根の異果を得するが故に、因に六種有りと說く。而して根の能執と言ふは、根は現に既に心法に非ざれば、實には能執ならざれど、但外道が根の中に別に人有り是れ能執者なりと言ふが故に、方便して根を說いて能執と爲すのみ。色等の六塵は是れ所執の種子にして自種に由りて生ず、故に過去の貪に由ると說くなり。內根は外塵を用ひんと欲するが故に、貪の根と貪とを以て此の塵を生ずるなり。又、貪と六塵とに由るが故に、六根有り、復貪と塵の貪とを以て六根を生ずるなり。

【三】界とは種子の義なりは前文と關係なく全く突然なり。こゝに中邊分別論を見るに、當る偈に能取所取取、種子是界義とありて、長行に復有別攝名界。界名顯何義。顯種子義とあり。この界のことを說くなり。次の文に能執とあるは能取、所執とあるは所取、執とあるは取と相同じ。
【四】勝負は强弱の意。

脱を得ること能はず、故に佛は爲に五陰の體の不同なるを説いて、受想等の異るを分別し、通別二相を立つることを爲すなり。別相は[九]證見を生じ、通相は比見を生ず。問ふ、五陰は云何が根本眞實の所攝と爲るや。答ふ、色に三種有り。一には分別色なり、亦長短大小方圓等の義有るも皆分別假に屬す、別體無きを以ての故なり。二には種類色なり、謂く各種類有るなり、因より果を生ずるが如く、火の生ずるを因と爲すを以て、火が[一〇]家の種類を生ずるなり。種類は既に其の相似にして、卽ち是れ實法の相なり、生じて依他假に屬す、其の種類は因に依つて成ずることを得て、是れ自性の力に非ざるを以てなり。三には如如色なり、若し是れ分別假ならば、一向無體と名づく、卽ち是れ法空なり、若し是れ依他假ならば、復體有りと雖、體は眞實なるに非ずして、他に依りて而して有なれば、卽ち有法空なり、此の兩空の體は既に是れ眞實なり、故に如如色と名づくるなり。是の如くの色の自性なるを以ての故に、色を以て如如に目づく、此は是れ[一一]如如が家の色なるが故に、如如色と言ふ。末は本に從ふを以て名と爲すも、亦本は來つて末に收まるを以て此の眞實を眞實假と名づくとも言ふを得べし。假の體は卽ち空なるが故に眞實假と名づくるなり、空は卽ち如如にして、眞實の相も亦不可得なればなり。色陰が既に卽ち三假なれば、三假の所攝の者と爲せば、受等の四陰は理として自ら皆然り、並に三假の所攝の者と爲る。受苦受樂は是れ分別假なり、分別の體は因緣より生ぜず、因有り果有らば卽ち依他假なり、如如ならば眞實假と名づく。若し能く通相別相を分別すれば、此の心は是れ想なり、若し受が苦樂を領して別執有ること無きときは、則ち名づけて受と爲す。

二には因者執とは、此の執を斷ぜんが爲に十八界の勝智を成ず。諸外道の輩が通じて一切法は我を因として生ずるを得と執するを因者の執と名づく。[一二]我に九法有り、謂く知と樂と苦と欲と瞋と功力と念と法と非法となり。我は既に本有にして、我より法非法を生じ、法非法は心をして我と共に

【九】證見は現量、比見は比量をいふ。別は特殊相、通相は共通相なり。

【一〇】家は家宅又は場所の意ならず。單に火のといふと同じ。火といふものに屬する又は火といふものゝ有するの意。

【一一】如々と色とを結合せる複合詞と解釋すれば、如々之色の意味にて、これ依主釋なり。この如々之色といふを如如が家の色と言詮はすなり。

【一二】これは勝論派のプラヤスタパーダ(Praśastapāda)に至つて說かれたる說。プラシャスタパーダは陳那同時の後輩なる故十八空論の陳那以後の作なること此の點より知らる。功力は通常勸勇といふと同じ。意志欲望又は努力の意。又念は通常いふ行(Saṁskāra)にて、法非法卽ち善惡業の遺す餘力。

て多と爲し、三世の色心を合集して同じく名づけて陰と爲す、故に合集と謂ひ、色聚は受に異り、受聚は想等に異る、故に別異と名づく、是を五陰と名づくるなり。若し五陰に此の三義有ることを解了するときは、則ち一者の執無し。三世と言ふは過去の已に謝せると、未來の未だ有らざると、現在の住せざるとにして、而も一切内外の諸色を以て、同じく陰と名づくるなり。三義を以て三種の無明を對治す、謂はく一と假說と及び相雜となり。一の無明とは、世入外道等が身は是れ一物にして、一物は是れ我人なりと謂ふが如し、但三世の五陰有るのみなるを知らざるが故に斷見に墮す。此は是れ陰に卽して我を計するなり、陰が滅すれば我は亡ず、故に佛は爲に三世の五陰は是れ多にして一に非ずと說いて、卽ち其の一者の執を破するなり。二に假說の無明とは、[五]優婁佉等の外道が身は分に異ると謂ひ、卽ち人有り法に異ると執するが如し。此は是れ陰を離れて我を執するが故に常見に墮するものなり。何を以ての故に、人と法とが旣に異らば、則ち陰が滅するも我は存すと謂ふは、其の諸陰を合集し假說して人と爲せば、但名のみにして體無きことを解せざるに由ればなり、此の假說に迷ふが故に假說の無明と名づくるなり。故に佛は爲に合集を假說して法と爲せば、體は卽ち是れ空なりと說いて卽ち其の此の執を破す。故に能く假說の無明を除くと謂ふ。三に相雜の無明とは、[六]一切有部の所執の八正道の中の正思と正見とは同じく是れ般若の所攝なりと謂ふが如し、其は兩の異を分別すること能はざるを以ての故に、此の執を生ずるなり。故に[七]經部と[八]大乘師とは正思の故ならば、前理を求めんと欲して未だ決斷せず、猶作意に屬す、作意は卽ち是れ意業なるが故に、是れ般若の所攝に非ず、唯正見のみ有らば是を般若と名づくと說く。通じて論ぜば、一切の知見の能く通達し選擇するは皆般若に屬するなり。五陰も亦爾り、若し受は想に異り想は行等に異ることを分別する能はずして、想と受とは只一物なるのみと謂ふときは、則ち其の體性を失ふ、故に相雜の無明と名づくるなり。相雜の無明なるが故に正見を失す、正見を失するときは、則ち解

【五】 Ulūka の音譯、勝論派の開祖カナーダ(Kaṇāda)の一名なるが故に勝論派を指す。

【六】 具には說一切有部、小乘廿部の一、一切の諸法の體は三世に於て恒に有なりと說くが故に一切有を說く部といふなり。

【七】 通常いふ經量部、小乘廿部の一、有部より別派せしものにて經を第一となす派、經部と譯する方經量部よりも正し。

【八】 大乘の諸論師。

には此の下の四相は皆是れ空無所有なるが故に皆眞實と名づくるなり、亦依止眞如なり。五に邪行眞如とは謂はゆる集諦なり。集に兩義有るが故に眞如と稱するなり、一には無倒眞如にして、謂はく能生の義なり、此の義の眞實なる、即ち是れ集眞如なり。二には能生所生は皆無所有なり、無所有なるを以ての故に、故に邪行眞如と名づくるなり。六に清淨眞如とは謂はゆる滅諦なり。亦兩義有り、一には無倒眞如なり、謂く[二]四德なり、皆是れ無倒なるが故に眞如と稱す。二には滅諦と生死とは差別有ること無く、同一如如にして、皆所有無し、故に清淨眞如と名づくるなり。七に正行眞如とは謂はゆる道諦なり。道は即ち般若にして、般若と無明とは體性相乖く、道は即ち無倒にして眞如は道の如し、及び煩惱は體同じきが故に二空に於て皆是れ無所有なり。故に是れ一味にして如如なり、故に正行眞如と名づくるなり。亦眞如とも名づけ亦如如とも名づけ亦眞實とも名づく、皆盡得す。

〔第　五〕

十に[一]勝智眞實とは[二]十種の勝智有りて、十種の我見を除くことを爲す。一には一者の執、二には因者の執、三には受者の執、四には作者の執、五には自在者の執、六には增上者の執、七には常者の執、八には不淨淨者の執、九には修行者の執、十には繋縛解脫者の執なり。

一には一者の執とは謂はく諸法を合集して共に一の名を立つる時は、則ち斷見に墮す、何を以ての故に、[三]世入論の偈の說く所の如し、譬へば岸が崩れば更に本に還らず、乃至、[四]塚間の體は再び來らざるが如し、唯根の境界のみを是を衆生と名づく、若し聖教に有なりと說くも、空と鳥跡と會して可見となるが如きのみ、此を世入外道が一者の執を顯はすと謂ふ。其は即ち身が是れ人にして、身が滅すれば我は亡ずと謂ふ、故に斷見に墮せるなり。此の執を破せんが爲の故に、五陰勝智を立つ。三義の謂はく多と合集と別異と有りと雖も、三世の色心を並に名づけて陰と爲す、故に名づけ

【二】常樂我淨の四德。

【一】十とは第十の意味にして、本節は前節が十種眞實の第九を說き終れるより續きて十種眞實中の第十種を說くなり。而も實際は其前半のみなり。

【二】十種の勝智を玆に列せざるは前に中邊分別論眞實品第三の最初に關する所に述べられ居りし爲ならん。

【三】原文に七入とあれどこれ世入の誤寫なること後文より知らる、世入論も世入外道も通常いふ順世外道(Lokāya=ta)なり、此の派は地水火風の四元素のみの存在を認むる唯物論にして、我を否定す。

【四】塚間の體は死者の埋められたる體をいふ。

所以に是れ淨なればなり。此の如く七種の眞如は卽ち是れ一切法の體性なり、是れ體性なるを以ての故に、故に說いて我と爲す。卽ち是れ常樂淨我の四德なり。

又釋す、此の七種を名づけて眞如第一義諦眞實性と爲す所以は、其が同じく是れ一味爲るが故なり。一に生眞如とは謂はく因と果と體一なるも而も名字は異有り、何が故に一と言ふや。同じく是れ依他なるが故に有なればなり。因が既に依他なれば、果も亦依他なり、此の因果の體は卽ち[八]五陰なり、五陰の[九]無記なるを說いて名づけて果と爲し、五陰の善惡有記の義を說いて名づけて因と爲し、其の能生なるを取つて因と爲し、所生なるを果と爲し、亦是れ前に對して果と爲し、後に對して因とも爲す、故に知る、只是れ一念の五陰のみにして、而も因有り果有る、之を體と名づくるのみ、實には未だ嘗て異有らずと、故に一體にして名字は異有りと爲すと言ふなり。此の因と此の果と既に並に依他なれば、則ち自性有ること無し、自性無きが故に體は眞實ならず、故に一味と名づくるなり、卽ち是れ同じく眞實無きが故に生眞如と名づく。二に一味と言ふは此の生眞如は既に是れ依他性なれば、則ち眞實の生無し、故に生眞如と名づくるも、卽ち是れ無生性空なり。無生を以ての故に、卽ち是れ一味なるなり。三に此れ依他性なれば、則ち必ず分別性有り、分別性ならば既に是れ無相性なり、無相性は卽ち是れ無相眞如なり、無相眞如は卽ち是れ一味なり。是の故に此の三義を以て生眞如と名づくるなり。二に相眞如とは法の通相を顯はすを以ての故に、是れ人法二無我なり。三に識眞如とは但唯識有るのみにして、境界有ること無きなり。境界が成ぜざるが故に、識も亦成ぜざるなり。此れ則ち能緣と所緣と同じく是れ不可得性なり、故に識眞如と名づくるなり。四に依止眞如とは謂はゆる苦の五陰を體と爲す、此の五陰は衆生の依處と爲り、此に託して我人衆生壽者等と爲す、故に依止と名づくるなり。苦諦に四の相有り、謂く苦と無常と空と無我となり。[一〇](一には)此の四義は同じく是れ無倒なれば、皆眞實と名づく、卽ち是れ依止眞如なり。二

【八】　五蘊、色、受、相、行、識の五。

【九】　善、惡と並べて三性の一、事物の性體中容にして善とも記すべからず惡とも記すべからざるもの。

【一〇】　原文にはなきも恐らく一の一字を脫せるなり。

是れ第一義諦にして卽ち眞實性の攝なりと知るや。答ふ、兩義に由るが故に此の七種が皆是れ最勝最極なるを知るなり。謂はく卽ち是れ[六]二智の境界なるなり。言ふ所の最勝とは卽ち是れ如如の第一義諦なり、此の第一義諦は卽ち如理智の爲に照らさるゝが故に最勝と名づくるなり。最極とは卽ち是れ一切智の境界にして卽ち是れ俗諦なり、此の俗諦は如量智の爲に照らさるゝなり。如理智は卽ち無分別智にして、如量智は卽ち是れ無分別後智なり。又、如理智は是れ一切種智にして、如量智は卽ち是れ一切智なり。唯是れ一智のみなるも、眞に通ずれば卽ち有なり、俗に通ずれば卽ち空なり、眞に卽する義を而も取つて如理智と名づけ、亦一切種智とも名づく、若し俗の義ならば、有の義を取つて如量智と名づけ、亦如一切智とも名づく。故に最勝最極と言ふ、而して是れ二智の境界にして、卽ち如理如量兩智の所知なるなり。

復別義有りて此の七種眞如は是れ眞實性の攝なるを知る。何を以ての故に、一切の眞實法が皆一異等の妄想を離るゝを明さば、謂はく非一非異にして、[七]四謗を離れたるが故なり。此の七種の眞如を明すに諸相に異るとも說くことを得べからず、亦諸相に異らずとも說くべからず、故に諸相に異ると言ふも說くことを得べからず、諸相に異らずといふも亦說くべからず、亦異亦不異も非異非不異も皆說く可からず。此の七種の眞如を明すに諸相の中に於ては說く可からず、其の是れ有なるも亦說く可からず、其の是れ無なるも亦有亦無なるも非有非無なるも皆說く可からず、四謗を離れたるが故なり。復別に有なるを信ずるを得る有り。何を以ての故に、卽ち是れ清淨の境界なるが故なり、故に是れ有なるを知る。若し人有りて能く心に此の法を緣ぜば、心は卽ち清淨なり。是の故に應に知るべし此の七種眞如は皆是れ常住なり、一切時に於て性が異らざるが故なり。是れ清淨の境界なるを以て、是の故に應に知るべし是れ眞實善性なり、此の理に由りて常は是れ善なり、是の故に應に知るべし是れ樂なり淨なり、何を以ての故に、常なるが故に、所以に是れ樂なり、善なるが故に、

特に注意すべきものなり。

【六】一に如理智、根本智とも名づく。佛菩薩の眞諦に如ふ實智。二に如量智、佛菩薩の俗諦の事量に如ふ智、後得智とも名づく。

【七】有と無と亦有亦無と非有非無とになすを四謗といふ。又は一と異と亦一亦異と非一非異となすをも指すと見るも可なる理なり。

道を修すべければなり。四に疑惑を除くとは、惑者の心は、旣に如如は是れ有なり是れ無なりと聞くときは、則ち猶豫を生じて決斷すること能はず、謂はく杌を見て人なりと謂ひ、人を呼んで杌と爲すが如くなるが故に、佛は爲に分別して、人法・二我は決定して是れ無なるも、人も無く法も無きの道理は決定して是れ有なりと明す、故に空には有無の兩義が存するなり。此の如きの道理は能く疑の心を除く。[四]

〔第　四〕

[一]第三は唯識眞實を明して、一切の諸法は唯淨識有るのみにして能疑も有ること無く亦所疑も無きことを辯ず。廣く釋すること唯識論の如し。但唯識のみなるの義に兩有り。一には方便なり、謂はく先に唯[二]阿梨耶識有るのみにして餘の境界無きことを觀じ、現に境智兩空を得て、妄識を除いて已に盡くるを名づけて方便唯識と爲す。二には正觀唯識を明すなり。生死虛妄の識心と及び境界とを遣蕩して、一切が皆淨盡し、唯阿摩羅淸淨心有るのみなり。第四は依處眞實を明す、謂はゆる苦依諦なり。第五は邪行眞實なり、謂はく集諦なり。第六は淸淨眞實なり、卽ち是れ滅諦なり。第七は正行眞實なり、卽ち是れ道諦なり。[三]四諦に各三種有ること已に別に解せるが如し。

[四]解節經は佛が七種眞如有るを說くことを明す、一には生、二には相、三には識、四には依止、五には邪行、六には淸淨、七には正行なり。第一の生眞如とは有爲の諸法の並に皆無きの如なるを謂ふ。二の相眞如とは人法の二の無我なるを謂ふ。三の識眞如とは一切の有爲は唯識有るのみなるを謂ふ。四の依止眞如とは所說の如き苦諦を謂ふ。五の邪行眞如とは所說の如き集諦を謂ふ。六の淸淨眞如とは所說の如き滅諦を謂ふ。七の正行眞如とは所說の如き道諦を謂ふ。此の七種の眞如は卽ち第一義諦なり、第一義諦は卽ち[五]眞實性の攝なり、是の故に名づけて七種の眞如と爲す。卽ち是れ前に明せる七種眞實なり。具には三無性論の中に廣く釋するが如し。問ふ、云何が此の七種は皆

【四】此れまでにて一段終了せり、中邊分別論に於ての其相品第一の修に該當す。

【一】此の第三に對して第一第二有るべきなるも現存のものには全く無し。中邊分別論に比較すると、前節までにて相品が終り、障品第二に當るべきものが存すべきに此處には全く缺けて居るから、次の眞實品第三を見るに、其中にて唯識眞實を第三として說く部を發見し得る。卽ち眞實品第三には十種眞實と十種我見とが說かるゝが、こゝの文は其中前者の初八種を缺き、更に第九種の七種眞實を說く中の初二を缺いて、そして初めて第三明唯識眞實となるのである。故に本節は十種眞實中第九眞實の後半に當る。

【二】Ālaya. 阿賴耶識、九識中の第八識。

【三】此の文によりて元來中邊分別論に有る十種眞實凡てが解釋せられありしに相違無きことが判る。

【四】佛說解節經、一卷、眞諦譯、解深密經中の勝義諦相品と同本（大正藏、六七七）、七種眞如は三無性論の七種如々と同一である。

【五】七種眞實凡てを眞實性の攝と爲すは本論が中邊分別論と異る說を有する點にして

なり。又、如如は禪定と異るを以ての故に、煩惱を離れざるが故に、不淨なりと言ふも而も復淨の義有りと言ふなり。[六]二には非有非無の道理を明す。人も無く法も無きが故に非有と言ひ、實には人も無く法も無きの道理有るが故に非無と言ふなり。亦眞實有眞實無と言ふも即ち非有非無なるなり。[七]三には不一不異の道理を明す。諸の淨不淨は、淨ならば則ち斷を離れ常を離る、常の義は我に異るが故に不一と言ひ、我の體は常なるが故に不異と言ふ。此れ如如が三徳を具することを明すなり。

[一]【第三】[illegible]

此の十六空に就いて[二]四科の料簡を作す。初に六空有りて空の自相を辯じ、次に八空有りて空の事用を辯じ、三に兩空有りて淨不淨を辯じ、四に此の十六空の理が能く四種の過失を除くことを明す、一に戲論を除き、二に怖畏を除き、三に懈怠を除き、四に疑惑を除くなり。一に戲論を除くとは、兩有り。一には世間の衆生は内外の法の中に於て無量の戲論を起し、有我無我等は皆人と道と果と等に依ると謂ふ、是を戲論と名づくるも、若し道と及び道の果とが皆悉く空なるを見るときは、則ち能く此等の戲論を除く、若し是れ内空と外空と内外空と大空との此の四空ならば、能く世間の人法二我の戲論を除く。[三]若し是れ空空と及び第一義眞實空との此の兩空ならば、能く出世間の因と果と境と智と等の戲論を除く。二に怖畏を除くとは、衆生は人の皆空なることを聞くときは、則ち怖畏を生じて道を修することを肯んぜず、故に如來は爲に此の空が事用有ることを說く、何を以ての故に、若し人が能く八空の事用を修するときは、則ち能く道と及び道の果と乃至三身等の一切の功德とを得ればなり。三に懈怠を除くとは、若し定んで淨なりと觀ずれば、道を修するを勞せず、若し定んで是れ不淨なりと言ふときは、則ち永に除滅すべからず、亦道を修するをも假らずして、唯生死に處するのみにして、永く解脫無し、是の故に須く是に淨不淨有ることを辨ずべし、何を以ての故に、惑有るの時には、則ち不淨なるも、惑を除いて已後は卽ち淸淨なるが故に、應に須らく

【六】本節の最初に道理に三ありといふ中の第二なり。

【七】これが第三なり。

【一】第三節は第一節第二節と連絡し來れるを結ぶ節、本節にて十八空論は十八空を說くのが主に非ずして十六空と說かれ居るに對して十八空が開合の相違として調和し得べきを明すのが趣意なることを知らる。この第三節は本論特有にして中邊分別論には無し。

【二】四科の料簡
第一、六空の自相……戲論を除く。
第二、八空の事用……怖畏を除く。
第三、兩空の淨不淨……懈怠を除く。
第四、兩空の非有非無……疑惑を除く。

【三】此の出世間に關する方が第二なるべし。故にこゝに、二には、を入れても可なり。

して煩惱の爲に覆はると雖、而も煩惱の爲に染せられざるが故に不淨なるに非ずして、而も是れ自性が淨ならば、是の自性の淨を以ての故に說いて不淨と爲さゞるなり。故に法界と五入とは體が異るを知る。問ふ、何が故に定んで是れ不淨なりと說かざるや。答ふ、禪定と異なること有るを明かさんが爲なり、何を以ての故に、若し法界は定んで煩惱有りと言はゞ、卽ち自性は不淨なり、而も此の法界は煩惱の爲に覆はると雖而も自性が不淨なるには非ず、故に定んで是れ不淨なりと說くを得ざるなり。不淨なるに非ざるは正しく是れ法界の道理にして定んで有なればなり。問ふ、何が故に[五]如如は定んで淨なりと說かずして而も淨不淨なりと言ふや。答ふ、衆生をして道を修せしめんが爲なり。故に說いて淨不淨と爲すは卽ち如如と五根とは異ること有るを顯はすなり、何を以ての故に、如如と五根とは同じく煩惱の爲に覆はれて、而も並に煩惱の爲に染せられざれば、同じく皆是れ淨なるも、而も淨の義は異ること有ればなり。何を以ての故に、五根の體は煩惱を離る、煩惱性に非ざるが故に、五根は唯淨なるのみにして是れ不淨なるに非ざるに、若し如如にして煩惱を離れずんば、而も是れ煩惱の自性なるが故に、淨にして而も復不淨の義有ることを知ればなり。又、如如と禪定とは同じく煩惱の爲に覆はれて並に不淨の義有るも、而も不淨の義は同じからず。若し是の禪定にして煩惱の爲に覆はれて、而も復染せらるれば、一向に自性を失ひて、擧體煩惱と成り、亦不善とも成るも、若し是れ如如ならば、復煩惱を離れざるを名づけて不淨と爲すと雖、而も猶自性を失はず、亦轉じて煩惱とも及び不善とも成らざればなり。故に不淨に卽して而も復淨の義有りと言ふは三句と爲るべし、一には五根が煩惱を離れ煩惱の爲に染せられざるときは、則ち但是れ淨なるのみにして是れ不淨なるに非ず、二には禪定が煩惱と成り煩惱の爲に染せらるれば、但是れ不淨なるのみにして復淨有ること無し、三には如如は五根と異るを以ての故に、煩惱の爲に染せられざれば是れ淨なるも、而も煩惱を離れざれば卽ち是れ不淨なり、故に淨なりと言ふも而も復不淨の義有る

【五】法性の理體不二平等なるを如と云ひ、此彼の諸法皆如なれば如々と云ふ。如々は通常いふ眞如と同じ。

たり、理と事と同じからず、體と相と差別すれば、若しくは離し若しくは合して其の義此の如くなり。

【第　二】

此の下の[一]第四に空を分別する道理に三有り。一には淨不淨なり。若し空は定んで是れ不淨なりと言はゞ、則ち一切の衆生は解脱することを得ず、何を以ての故に、定んで不淨なるは淨たらしむべからざるを以ての故なり。若し定んで是れ淨なりと言はゞ、則ち道を修すること無用なり、何を以ての故に、未だ解脱の無漏道を得ざる時にも、空體は本より已に自然に清淨なるが故に、則ち煩惱の能く智慧を障ふることを爲すこと無く、又、能く除けばなり。則ち功力に依らずして、一切の衆生は自ら解脱するを得ん。現見するに、功力を離れては衆生は解脱することを得ざれば、此の空は是れ定んで淨なるに非ざるを知る。復、功用に由りて而して解脱を得るが故に、此の空は定んで不淨なるに非るを知る。是を淨不淨の道理と名づく。又釋す、若し空理は定んで是れ不淨なりと言はば、一切の功力は則ち果報無し、何を以ての故に、[二]空(界)の自性が是れ不淨ならば、復道を生ずと雖、俗は除くべからず、道は則ち無用なるを以てなり。此の義無きが故に、故に此の空は性が不淨なるに非ざることを知る。問ふ、若し爾らば既に自性の不淨なること無くして、亦應に自性の淨なるも有ること無かるべし、云何ぞ法界は淨に非ず不淨に非ずと分判せんや。答ふ、[三]阿摩羅識は是れ自性清淨心なり、但客塵の爲に汚さるゝのみなるが故に不淨と名づくるも、客塵が盡くるが爲の故に立て淨と爲すなり。問ふ、何が故に定んで淨なり定んで不淨なりと說かずして、而も或は淨なり或は不淨なりと言ふや。答ふ、法界と[四]五入及び禪定とは義が異ることを顯はさんが爲なり。淨なりと說かるゝ所以は眼等の諸根は煩惱の爲に覆はると雖而も煩惱の爲に染せられざることを明さんが爲なり。又是れ淨なるに非ず、又自性淨なるに非ず、故に說いて淨と爲さゞるなり。若し是の法界に

【一】此れに對する第一、第二、第三は明瞭に書示されず。中邊分別論より見るに空の義を說くに、第一體相、第二衆名及其義、第三分別、第四成立理の四門あり、これによつて考ふるに、本論最初の十八空の列名は第三分別の後半に當り、こゝに云ふ第四は其第四成立理なるを知る。

【二】恐らく空界の界は衍字、或は法界の誤か、次には單に空といひ、また法界といふに參照。

【三】Amala. 菴摩羅識、阿末羅識、淸淨識無垢識等と譯す、九識中の第九。

【四】五入は恐らく六入中の前五入卽ち五根をいふならむ。

の謗を除かんが爲なり。增を離れ減を離るゝときは、則ち有無に非ざるが故に、名づけて空の體と爲す。故に此の兩空は還つて前の十四空の所攝に屬するなり。

第十七の有法無法空の此の一空は諸の空の相を出す。言ふ所の有法無法空とは此の空の體と相とを明す。決定して無なるの法なれば即ち決定無と名づけ、此の人法無きの道理有るが故に決定有と名づく。此の無と此の有とは是れ空の體と相となり。體は理として增減無きを明し、相は其の體の決定なるを明す。決定して是れ無なると決定して是れ有なるとは即ち是れ眞實無と眞實有とにして、眞實に人無く法無く、眞實に此の道理有るなり。

此の論が但十六空のみを明す所以は、正しく此れと兩空とを以て前六空の體の所攝に屬すればなり。亦十四空とも爲すは即ち後の四空が還た前の諸の體相を辨ずるが故に、此の後の空は併せて前の十四の攝に屬すればなり。故に十四とも十六とも十八とも有るは廣略の不同なり。

第十八は空の果を出す。言ふ所の不可得空とは此の果の得難きを明すなり、何を以ての故に、此の如き空理は斷にも非ず常にも非ずして而も即ち是れ大常なり、常の義が既に不可得なるが故に、斷の義も亦不可得なり、定相の可得なるもの有ること無ければなり、故に得難しと名づく。何を以ての故に、此の空理は苦にも非ず樂にも非ずして而も是れ大樂なり、我にも無我にも非ずして而も是れ大我なり、淨にも非ず不淨にも非ずして而も是れ大淨なればなり。此の空は八空の事用の所攝に屬す、人法無きは正しく是れ空の體なりと見るを以ての故に隨事用と名づく。離に同じからざるも張いて異を成ずるなり。

上に辯ずる所の如く、初の六空は空の體を明し、即ち十空は空の用を明す。用の中の後の兩空は十四空の所攝と爲り、第十七の一空は六空の體の所攝と爲り、第十八の一空は八空の用の所攝と爲る。故に十八は十六と成り、十六は還た十四となる。或は先に廣に後に略に、或は先に略に後に廣

生死にも非ずと言ふ、涅槃に非ずとは始終有るが故なり。生死に非ざれば則ち生死虛妄の相無きを以て、涅槃に非ざれば亦涅槃眞實の相無きを以て、故に相空と名づくるなり。若し菩薩にして能く此の相空を修するときは、則ち三十二相八十種好をして卽ち化身の相貌を修治せしめ、清淨なることを得しむ。故に第十三を名づけて相空と爲すなり。

第十四の一切法空とは謂く一切の如來の法の無量恒河沙の十力無畏等の如きが相離不相離空なるを明すものなり。若し法身を以て應身に望むれば、離不離有るも、但應身のみならば決して法身を離れず。何を以ての故に、一に法身は是れ本なるが爲に應身は末爲り、末は本を離れざるも、本は末を離るゝが爲なり。問ふ、法身にして若し應身を離れずんば、何れの過咎有りや。答ふ、若し爾るときは、則ち一人が佛を得れば、一切の人も皆應に得べきも、一切人は同じくは得ざるを以ての故なり。故に法身には應身に卽せざるの義有ることを知る。法身も亦應身を離れざるあり、何を以ての故に、法身は差別有ること無くして常に三世諸佛の功德を離れざるを以ての故なり。若し能く此の如くにして亦は離れ亦は離れざるの道理にて而も修行せば、此れ則ち能く應身の果を得。但應化の兩身は悉く能く物を利するも、化身は正しく種を下すことを爲し、應身は成熟することを爲して、此の一切法空をして一切佛法を清淨と爲さしむるなり。一切佛法には復兩義有り、一には則ち離無く不離無し、偏執すべからざるを以てなり、二には則ち執と及び所執と無し、境と智と差別無きを以ての故なり。此れ卽ち第十四に一切法空を辨ずるなり。此に至つて凡そ三空有りて自利利他の因を明し竟る。

[二九] 第十五の有法空と第十六の無法空との此の兩空は通じて前の十四空の體を出す。有法空と言ふは、謂く人法の二の無所有にして、增益の謗を除かんが爲なり。無法空と言ふは謂はく眞實有なり、此の人無く法無きの道理は衆生が妄執して此の道理無しと謂ふを除く、故に無法空と名づくるは損減

【二九】中邊分別論にては第十五と第十六は本論と前後して居つて第十五非有空、第十六非有性空とあり。

佛性無ければ、發心すること能はずと謂ふが故に高慢となる。若し此の理の此彼有ること無きを體せば、高心は卽ち滅す。故に能く高心を除くと言ふ。三には虛妄に著して眞實を棄捨することを除く。虛妄が是れ生死の過失たる所以は、人の來つて打拍し罵詈し毀辱する等の事の如く、一には本有に非ず、二には心に由る所作にして、虛妄の起す所なり、是れ自然に非ざれば卽ち是れ虛妄なり。若し眞實の道理を體せずして此は是れ眞實なりと謂ふときは、則ち虛妄に取著して皆眞實を捨つ。故に三毒等の利き煩惱を生ず。若し生死は虛妄にして是れ實有なるに非ずと識るときは、則ち能く拍つと罵るとを見ず。衆生の過失を見ざれば煩惱を生ぜずして卽ち虛妄を棄て、但衆生は皆佛性有りて功德の圓なること同じとのみ見る、卽ち是れ能く眞實を取るなり。此に由りて卽ち慈悲を生じて菩薩者を成ず。四には能く我見を除く。諸法の本來の自性は眞實にして、若しくは有、若しくは無、二皆平等なり。若し人にして能く此の解を作さば、卽ち我見執相の心を捨つるなり。五には怖畏を除き、能く衆生をして甚深の正法を信受せしむ。正法の有相と無相との體は佛性を解すれば則ち能く信受す。無相の正法は則ち大乘を謗らざるなり。次に此の性空が能く五種の功德を引くことを明すとは、一には下劣を除いて正勤を生じ、二には高慢を除いて平等を生じ、三には虛妄を除いて慈悲を生じ、四には我見を除いて般若を生じ、五には怖畏を除いて正法を受くるなり。故に性空は佛性の理に五種の功德有りて五の過失を離るゝを顯はすと言ふ。性を治護して淸淨なるを得しむるは卽ち是れ自利の因なり。故に此の第十二を名づけて性空と爲す、佛性は卽ち是れ空なり。

第十三の[二六]自相空は[二七]三十二の大相と八十の小相とを得ることを爲す。相に又二種有り、一には色相にして、謂はく四大五塵なり、二には無色相にして、謂はく一切の四陰と心法となり。化身は生死にも非ず涅槃にも非ず、何を以ての故に、生死は是れ虛妄顚倒にして、苦集の兩諦に過ぎざるも、化身は爾らず、法[二八]應身に依つて而して體有りて顚倒に非ず、復能く衆生の顚倒を除くが故に、

【二六】中邊分別論に相空と云ふ。

【二七】三十二相八十種好、佛及輪王の德を表す身相、後者は前者の細別なり、故に前者を大相、後者を小相と云ふ。

【二八】法身應身をいふ。

の所爲なりや。答ふ、淸淨佛性を卽ち空と爲す、故に性空とも名づくるなり。問ふ、何が故に性空とも名づくるや。答ふ、佛性は卽ち是れ諸法の自性なればなり、何を以ての故に、自然有なるが故なり、但し自性に兩義有り、一には無始なり、二には因なり。譬へば無始の生死の中にて有心無心の兩法が自然ならば因無きが如し。若し心が因有らば、此の因は本有爲りや、始有爲りや。若し本有の因ならば、此の因は卽ち是れ自然なり。旣に是れ自然ならば、亦應に心も是れ自然なりと許すべし。昔未だ因有らずんば、應に衆生の有る時無かるべく、因有らば、方に衆生有り、土石等の如し。若し因有る時ならば、應に衆生を成ずべきが故に、自然は一分は有心と作り、一分は無心と作ることを知る。故に譬へば無始の生死の中にて有心無心の兩法が自然ならば因無きが如しと言ふ、佛性も亦爾り。自然は因無くして虛妄なるすら尙自然の義有り、何ぞ況んや眞實にして而も自然ならざらんや、故に無始の佛性を因と爲すに由りて、所以に六入は解脫を求めんと欲するなり。若し佛性無くんば、解脫の果は成就することを得ず。譬へば淨珠の能く濁水を淸くするが如し。佛性は無始なるを以ての故に生死は無始なるなり。一異の空と淨不淨の空と等は上に說きたるが如し。此の空性は五失を離れ五種の功德を顯はさんが爲なり。人法は是れ分別性にして、人法より分別を生ずるは是れ依他性なり。分別性に就いて[三五](人)法を覓むるに不可得にして、依他性に就いて所分別の人法を覓むるも亦不可得なるは、卽ち眞實性なり。眞實は體無し、體無きが故に相無し、相無きが故に生無し、生無きが故に滅無し、滅無きが故に寂靜なり、寂靜は卽ち是れ自性涅槃なり。此の自性空は五種の過失を除く。一には下劣心を除く。薄んじて佛性は是れ有にして得べく、之を得れば無量の功德有ることを信ぜざるときは、則ち菩提心を發すること能はず、此の心を發せずんば常に下劣を守るも、佛性は其をして發心せしむ、故に能く下劣心を除くと言ふ。二には高心を除く。若し人にして佛性の平等なるを解せざれば我のみには佛性有りて、我のみは已に發心せるも、他には

【三五】原文に人なきも、明人を脫せるなり。

に、一切の諸佛は無餘涅槃の中に於ても亦功德善根門を捨てざればなり。[一六]有流の果報は已に盡くるも、功德善根は本、物を化せんが爲の故なれば、恒に此の用有るなり。如來は涅槃に入ると雖、猶衆生の機緣に隨つて[一七]應化の兩身を現じて[一八]含識を導利す。卽ち是れ更に心を起すの義なり。故に、衆生は盡きざれば應化の用も亦盡きず、故に無餘に入ると雖而も功德善根を捨てずと言ふ。若し二乘にして入滅せば更に心を起すこと無し、慈悲が薄少にして衆生を化せざるを以てなり。若し佛ならば、無餘に入るも而も更に心を起すは、諸佛菩薩の[一九]三身は物を利すること無窮なるを以ての故たり。如來の法身は卽ち是れ一切無流法の依處なるが故に、散滅するも功德を捨離せずと言ふ。涅槃の中に猶法身有るを知ることを得る所以は、用は體を證するを以てなり。既に應化の用の盡きざるを覩るが故に、此の身の體は常に自ら湛然として永く遷壞すること無きを知るなり。[二〇]毘婆沙師の說くが如くんば、無[二一](餘)涅槃は自相有ること無し、而も無しと言ふ可からず、何を以ての故に、能く事用を顯はすが爲の故なり。若し涅槃に依らずんば智慧を成ぜず、智慧が成ぜざるときは則ち煩惱は滅せず。涅槃が既に能く道を生ずれば、道は能く惑を滅す、卽ち是れ[二二]涅槃が家の事なり、既に事有るを見れば、則ち應に體有るべしと知る、故に無しと言ふを得ざるなり。如來の法身の涅槃の中に在るも卽ち義は亦爾り。涅槃を分別して功德を捨てざる卽ち是れ分別性なるを除くことを爲すも、眞實義の中には此の分別無きが故に、不捨離空と名づけ、涅槃を言說して功德を捨てずと語るも、而も涅槃の中には亦不捨の意も無きが故に不捨空と名づく、卽ち生死を捨てざるの意を成ず。前には生死を捨てずして畢竟して他を利するは二乘の永く利すること能はざるに異ることを明し、今は生死及び涅槃に在りと雖並に皆物を化すれば此の義が異らざることを明す、故に前より此に至つて凡て三空有りて利他事と名づく。此の卽ち第十一の不捨空なるを亦不散空とも名づくるなり。

第十二[二三]佛性空と十三[二四](自)相空と十四一切法空との此の三は自利利他の因を明す。問ふ、空は何

【一六】有は三界の果報、流は四種の惑。
【一七】應は應現、衆生の機類に應じて身を現ずるを云ひ、化は變化、眞佛が緣に應じて種々に變化するを云ふ。卽ち應身化身なり。
【一八】心識を含有するもの、卽ち有情。
【一九】法應化の三身、又は自性受用變化の三身、又は法報應の三身、何れも開合の相違に依りて名異るのみ。
【二〇】毘婆沙論を奉ずる諸師。主として說一切有部の人々。
【二一】無涅槃とあるも確に餘を脫せるなり。
【二二】涅槃が家とは涅槃に屬する又は涅槃の有するなどの意。家は決して家屋場所などの意味でない。
【二三】中邊分別論に性空と云ふ。
【二四】最初の十八空列名の處に自相空とあれば、こゝには自を補うて自相空となすべきである。然し次下には相空とあれば、相空となすも不可にはあらず。

第七第八の二の義は用を明す空にして、自ら十有り、二とは一には行空、二には非行空なり。菩薩の此の兩空を學ぶは二種の善法を得んが爲なり、一には謂く善道なり、二には謂く善果なり。道とは即ち[一一]三十七品等にして、善果とは即ち是菩提等なり。行空とは[一二]三乘諸道は人も法も無く眞實にも非ず虛妄にも非ざるを明す。此の四種の心を離るゝを是を善因と名づく。此の善因を得んが爲に、是の故に菩薩は行空を觀ずることを學ぶ。非行空とは謂く二種の善果なり、即ち[一三]餘と無餘との涅槃なり。若し有餘にして集を除かば、此の果は則ち四種の顚倒を離るゝも定んで常樂我淨なるには非ず。若し無餘にして苦を滅せば、即ち是れ[一四]常樂我淨なり。此の第七第八の兩空は是れ菩薩の自度を淨くするものにして、初は道を得、後の一は果を得るなり。

第九の畢竟空は恒に他を利益することを爲すなり、菩薩は空を修し、畢竟して恒に他を利して衆生の盡るに至らんを欲し、誓うて恒に教化すれば、此の心は著有るも、今此の觀心は此の心をして定んで畢竟の心を捨てゝ自然に利益せしむれば、方に是の眞實智を畢竟空と名づくるなり。若し畢竟心を作して能く利益を爲せば、作さずんば益せず復自然ならざるも、恒に利益して空ならざるなり。此の畢竟之心は是れ智にして、第九に畢竟空と名づくるものなり。

第十の無前後空は亦無始空とも名づく。畢竟空を成じ他を利益せんが爲の故に前後ならずして即ち始終無し。菩薩にして若し其の是れ空なることを解せずんば、則ち疲厭の心を生じ生死を捨棄せんも、既に生死が是れ空なるを見るときは、則ち前と後と及び始終とを分別せず。既に始終を分別せざる時は、則ち短に於ても長に於ても心に憂喜無し、長に於ても憂へず短を聞くも喜ばず。既に憂喜を離るゝときは則ち能く生死を捨てず。捨てざるを以ての故に畢竟して利益は乃ち成ずることを得。是の故に第十に無始空を觀ず。

第十一は[一五]不捨離空なり。菩薩が此の定止を修學するは功德善根の無盡の爲なり、何を以ての故

【一一】三十七道品と云ふ、修行の方法にして、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道である。
【一二】聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三。
【一三】變易生死の因盡くるを有餘涅槃と云ひ變易生死の果盡くるを無餘涅槃と云ふ。
【一四】涅槃の四功德。
【一五】中邊分別論は不捨空と云ふ。本論にても不捨空と云ひ亦不散空とも云ふ。

第三の內外空は謂はく身空なり。此の身は[八]四大にして內外の所依爲り。內依とは卽ち六根なり、若し五根ならば皆淨色有るものと及び意根とにして並に此の身に依る、故に內依と名づく。外依とは謂く外の六塵なり、若し已に身が四大ならば、唯五根の淨色のみを除いて、所餘の色香等は外の塵に屬す。五根を攝持するが故に名づけて依と爲す、根塵の所依なるなり。此の根と及び非根と皆悉く是れ空なり、故に內外空と名づくるなり。

第四の大空は謂く身の栖託する所にして、卽ち[九]器世界なり。十方無量無邊にして皆悉く是れ空なり、故に大空と名づく。

第五の空空は能く眞を照らすの相なり。前の四空を會し境に從つて名を得て、呼んで空智と爲すなり、空智も亦空なるが故に空空を立つ。

第六の眞實空は謂く[一〇]眞境空なり。行者は內外は皆空にして人も無く法も無く此の境の眞實なるを見て眞實の名を立つ。分別性は性が不可得なるに由りて分別性の性の空なる卽ち眞實空と名づくるなり。

此の六空は空體を辯ずるものにして自ら次第を成ず。一には受者空、二には所受空、三には自身空、四には身所住所空、五には能照空、六には所觀境空なり。前四は皆是れ所觀の境の空なり、第五は能觀の智の空なり、第六は所分別の境界の相貌の空なり。又前四は所知なり、第五は能知なり、第六は所知の相貌なり。第五の智の空が前の四境を治すれば、四境は是れ空なり、第六の眞空が第五智を治するが故に智は空を成ずるなり。若し第五の智の空が前の四境を治すること無くんば、則ち人も有り法も有り、是れ分別性なるも、此の智が前境は是れ人も無く法も無しと見るに由つて、卽ち前境を治す。若し第六の境空が第五の智を治すること無くんば、此の智は既に但眞解のみなれば、還つて分別性と成る、故に第六の眞實空を名づけて智を治すと爲すと言ふ。

【八】地水火風の四大種をいふ。

【九】器世間と云ふが普通、一切衆生の住居する國土世界にして、衆生世間又は有情世間に對する語。

【一〇】中邊分別論には第一義空と云ふ。

十八空論[一]　亦十六　亦十四　亦十八　亦十七

陳[二]天竺三藏眞諦譯

問ふ、空は無分別なるに、云何ぞ十八種有ることを得るや。答ふ、人法の二無我は是れ一切法の通相なることを顯はさんが爲に、今諸法の種類の不同なるに約して開いて十八と爲すなり。何れの者なりや。一には內空、二には外空、三には內外空、四には大空、五には空空、六には眞實空、七には有爲空、八には無爲空、九には畢竟空、十には無前後空、十一には不捨離空、十二には佛性空、十三には自相空、十四には一切法空、十五には有法空、十六には無法空、十七には有法無法空、十八には不可得空なり。此の十八を合して[四]十六空と爲す。凡そ兩義有るが故に十六空を立つるなり。一には體、二には用なり。

〔第[三]一〕

第一の內空は亦受者空とも名づく。凡夫と二乘とは六根を受者と爲すと謂ふ、能く六塵の果報を受くるを以ての故なり。今但六根有るのみにして能執有ること無きを明す。執無きを以ての故に受者空と言ふ。

第二の外空は亦所受空とも名づく。[五]六外入を離れて別法の受く可き者有ること無し。若し諸の衆生の所受所用にして但是れ[六]六塵のみならば、內に既に人の能く受くるもの無ければ、外も亦法の[七]可受なるもの無し、即ち人法俱に空にして、唯識無境なり、故に外空と名づく。境無きを以ての故に、亦識も有ること無きは、即ち是れ內空なり。六入の識無きは即ち是れ人無きなり、根塵有ること無きは即ち是れ法無きなり。故に內外の二は空にして兩義は相成するなり。

【一】十八、十七、十六、十四と云ふは唯開合廣略の相違に過ぎぬ。

【二】麗本にのみ龍樹菩薩造とあり。今省く。

【三】論文全體は斷片的のもので、今便宜上第一乃至第五の五節に分つ。此第一は中邊分別論相品第一の第十六偈の釋の所に相當するものである。

【四】中邊分別論の十六空にそれぞれ該當す。

【五】色聲香味觸法の六境。六根又は六境を舊譯にて六入と云ひ、六境を外の六入、六根を內の六入となす。

【六】六境を六塵とも云ふ。

【七】可受は所受と同じく受用せらるべきものの意味にて凡て境を指す。

は完結するのである。又最初を考へても、相品第一の最初に當るもの、少くとも第十二偈以下空の義を說く所に當る部からを有して居たのであらう。

十八空論は其の原形を考へて見れば、少くとも中邊分別論相品第一と眞實品第三とに當る完全なものがあつたに相違ないのであるが、然らば何故に此の二品に相當する部のみを有し、それのみにて一論となつて居るかについては明確に其の所以が解せられない。玆に於てか十八空論といはるゝ論の原形は恐らく中邊分別論全體に相當する部から成つて居たのであらうと想像する外はない。若し然らばそれを十八空論と命名する所以はあり得ないから、何か他の名によつて命ぜられて居たのであらう。一歩を讓つて、論は相品第一の第十二偈に當る部からを有したものとなすも、猶且つ十八空論と呼ばるゝ根據はあるを得ない。故に十八空論なる名は決して元來からの名とは考へられないものである。若し中邊分別論全體に相當するものによつて一論となつて居たとすれば、然らば此論は中邊分別論と如何なる關係になるか。之については中邊分別頌に對する獨立の釋論と見るか又は中邊分別論に對する複註と見るか何れかの外はない。眞諦三藏は既に永定二年(五五八年)に中邊分別論三卷を譯し、更に疏三卷を出して居るのであるから、此の疏の外に又疏の如きものを出すこともなからうから、何人かの中邊分別論の釋を譯し、其の一部分が斷片的に傳はり、それが十八空論と命名せらるゝに至つたのであらう。然し現存の十八空論の內容上之を眞諦三藏の著となす議論も相當な根據によつて成立し得るから、若し然りとすれば、初め臨川郡に於て中邊分別論同疏を出し、それが後に身邊になかつた爲に、廣東制旨寺に來てからそこに於て、攝大乘論其の他の說を弟子に授くるに資助となる必要上、再び中邊分別論の全部又は一部を講じ或は書したのであつて、それが現存十八空論となるに至つたのであるとも想像せられ得る。眞諦三藏に關しては其の一代のことがよく判らないから、種々なる點について明確を缺いて居て、推定又は想像によることになるのである。

昭和七年十二月九日

譯者　宇井伯壽　識

て居るのである。第三から第七までは簡單に說いて完結するが、これで十種眞實の第九分破眞實の說明は終るのである。此の簡單な中に方便唯識と正觀唯識との二種のことを說いて居るのは唯識說全體の上で極めて重要なものたるのである。而も正觀唯識は阿摩羅淸淨心のみとなつた場合であるとなすから、これ全く般若空觀の究竟と同じであつて、眞諦三藏の傳へた唯識說は之を最後點となすものであることを表はして居る。成唯識論に於ける護法の唯識說は方便唯識の範圍までのものであつて、決して正觀唯識までは歩を進めて居ないものである點に於て唯識說一般中にありて特別の地位を有するのである。此の分破眞實の七種は所謂七種眞如又は七種如々と同じであるから、次に解節經に說かるゝ其の說を引用して說くが、七種如々は既に三無性論にも說かれて居たものであるから、こゝに三無性論の名を擧げて參照を注意して居るのである。更に以下の別義の詳釋は互に比較對照して熟讀理解すべきものである。

第五部について、右の七種眞如の別釋は十八空論に特有なもので中邊分別論に存するのではないから、第四部初頭の簡單な第三から第七の一應の說明に引續いて、此の第五部に相當するものが中邊分別論に於ては十種眞實中の第十勝智眞實の說明であり、そして第五部はそれに一致して說く點で、前の第四部に直接連絡して居るのである。然るに此の第五部に於ては、十種勝智が十種我見を除くを說く中の第五までのみを存し、而も第三を脫して居る。幸にも三無性論の四種道の第四なる四種境界の第三勝智境界に初五種勝智と初五種我見とが說かれて居るから、之を補遺として參照して解するを得るであらう。其の他は脚註によつて知り得る如くになつて居る。

以上の如く十八空論は第一第二第三第四第五の五部から成つて居るが、第一第二は連續して中邊分別論の相品第一の最後に相當し、第三は此の十八空論に特有なるも、實際上第一第二の結尾をなすから、從つて第一第二第三の三部で不完全ながら一全體をなし、更に第四第五も其のまゝ連絡せる一全體をなし首尾を缺如せるものである。故に五部は結局前後の兩部となる理である。而して此の兩部を對見する時、何人にも考へらるゝ如く、其の中間を缺いて居るのは不自然なるものであつて、元來は中邊分別論の障相第二に當る部が其の中間にあつたのであらうと見る外はないであらう。少くとも後部の最初は中邊分別論眞實品第三の最初に相當する文が存したに相違ない。同樣に最後は十種勝智十種我見の全體だけは說かれて居たに相違ない。そして之を說けば、それによつて眞實品第三に當る部

後點たる阿摩羅識なることを示す點あるは甚だ重要な説である。此の第二部の最初に第四とあるのは中邊分別論と對照して理解せらるゝものである。中邊分別論相品第一は現行本の第三偈から始まるもので、之れまでは歸敬偈ゃ總序偈である。第三偈から第十一偈までは虚妄の義を説き、第十二偈に於て以下相品終までに第一空の體相、第二空の衆名、第三空の衆名の義、第四空の分別、第五空の成立の理を述ぶることを言詮はして居る。此の中の第四空の分別を説く中途に十六空が長行に説かれ、それに相當して十八空論の最初の十八空が説かれて居るのであるから、十八空論は中邊分別論の右の第四の所から始まつて居るのである。然るに十八空論の豫想するものに於ては右の五段の中第二と第三とを合して一段となしたと見えて、五段は四段とせられ、從つて第四空の分別は第三空の分別とせられて居るのである。故に又當然次の第五空の成立の理は第四空の成立の理となつて居る。そこで十八空論には第二部に於て最初に第四に空を分別する道理云々というて居るのである。之によつて此の第二部は直に第一部に連絡して居るものなることが明である。

第三部については、既に第二部の最後に於て中邊分別論相品第一に當る部は終了し文も完結したのであるから、中邊分別論に相當部のないのはむしろ當然で、從つて此の第三部は十八空論にのみ存する特有のものである。これありて初めて十八空は十六空の開合の相違として説かれたものに過ぎないことが示されて居るのである。

第四部の最初には直に第三は云々とあるから、此の前に少くとも第一第二があるべき理であるが、これがないから、明にこゝにはそれが缺けて居ることが知らるゝ。それだけでも此の第四部は第三部と直接に連絡して居るのではないといはねばならぬ。中邊分別論を見るに、相品第一の次には障品第二があり續いて眞實品第三がある。十八空論には障品第二に當る部は全くなく、而も眞實品第三に當る部も完全して居ない。眞實品第三は十種眞實を説き其の中の第十勝智眞實には十種の勝智が含まれて居て其の十種の勝智は十種の我見を對治するものなるを概説し、進むで最初の十種の眞實各々を説明解釋し、第九の分別眞實の説明には分破眞實に七種ありとし第一生起眞實、第二相眞實、第三識眞實以下を順次に説いて居る。今此の十八空論の第四部の第三が唯識眞實を明すといふのはまさしく第三識眞實を説く部に當るものである。故に此の第四部は眞實品第三の十種眞實十種勝智の列名並に十種眞實の説明の初八と第九中の初二とを缺いて、第三から始め

て、何時か便宜的にかく呼做したことに始まるに過ぎないであらうと思はる。

第一部に於ては現行本には殊に十八空の順序の數字其の他に於て文字上の混雜脱漏等が少くないから、麗本を底本となしながらも、それ〴〵他本に典據し又は前後の文に案じて訂正改變して讀み得る如くになした。然し何れも脚註に之を記して決して濫りになしたのでないことを明にするに努めた。十八空の中で最も注意すべきは第十一不捨離空第十二佛性空第十三自相空第十四一切法空の說明の部であつて、此の中には法應化三身の說並に佛性が五種過失を除き五種功德を引くことが述べられて居るのが重要視すべき點である。三身說は所謂合本開迹卽ち合眞開應の三身說であつて、開本合迹卽ち開眞合應の三身說ではない如くである。前者は法身を以て理智を合せたものを其の體と見、後者は法身は理を本質とし智は報身の體と見る見方である。佛の眞身として理を智から開いて理のみを見ればこれ卽ち開本卽ち開眞で、理智を法身と見ればこれは合本卽ち合眞である。合本合眞の考では報身の體は法身の中に入れらるゝから、應身を開いて應身化身の二となす爲にこれ卽ち開迹卽ち開應の見方であり、開本開眞の考では報身を立てるから、今いふ應身化身を合して應身のみに見る爲に、卽ちこれ合迹卽ち合應である。故に合眞開應は法應化の三身、開眞合應は法報應の三身となるのである。然し法應化又は法報應の名稱が必ずかく合眞開應又は開眞合應の學說たることゝ絕對的に結合して居るといふのではない。時には名稱と學說とが交錯して居ることもある。然し此の二種の學說は區別せらるべきもので、其の點から見て此の十八空論の說は其の中の一を取つて居ると考へらるゝのである。歷史的の發達から見れば、開眞合應の三身說の方が發達の最後に現はれたものであつて、彌勒無着は合眞開應の三身說、世親は合眞開應と開眞合應との兩者を有し、前者は師より承けた說とし、後者の方を自說となして居る關係である。眞諦三藏の傳ふる說は大體合眞開應の三身說の方である。更に佛性に關する說は世親の佛性論と其の趣意を同じくするものであつて、優れた說である。佛性は空なりと明言し、佛性は諸法の自性なりとし、三性三無性によつて說く所も佛性論の趣意と全く同じであり、三性三無性が皆空說の上に立てられ、從つて唯識說も亦般若空觀と根本に於ては決して異るものでないことを示すを得る點に於て重大な意義を有する。

第二部は第一部と直接連絡する繼續の說であつて、空を成立する道理を說いて居るものである。般若空觀の究竟する所たる自性淸淨心が卽ちこれ眞實唯識の最

たことがあつたが、其の所論中に兩本文を對照し出すことをしなかつたが爲に、學者はそれを信用しなかつた。從つて當時まで一般には十八空論が中邊分別論の釋の一部分に過ぎぬことは知られて居なかつたのである。解題者は更に數年前兩本文を對照して公表し、其の相當部を一見明瞭になしたから、もはや何人も異論を唱へ又は不信を表することはない。國譯文に於ても脚註にそれ〳〵中邊分別論の相當部を指摘して置いたが、國譯の性質上兩本文を對照し出すことが出來ないし、又中邊分別論は國譯せられずして其の異譯辯中邊論が國譯せらるゝから、對照には不便であるが、然し注意して比較すれば、其の相當部に於て兩本が決して全く異る無關係のものでないことは直に看取せらるゝであらう。國譯中には括弧內に第一第二第三第四第五として十八空論が五部分に分るゝものなることを示して置いたが、第一部は中邊分別論相品第一の第十六偈の下に說かるゝ十六空に對して十八空を說いて解釋し、十八空の十六空と異らざること、また十四空ともなること、並に十八空の分類を示すこと等を明にして居る。此の如き點から十八空論なる論名が起つたのであり、又論題の下の細註に亦十六亦十八亦十四亦十七とあるに至つたのである。一般的にこの四の亦字の示す所は此の論が十八空論といふ外に或は十六空論とも又は十四空論とも若しくは十七空論とも稱せられ得るといふ意味になるのであるが、かゝることは論書の常例に反する。若し亦字よりいふとすれば、然らば此の論は絕對的に十八空論とのみ稱せらるゝ所以はないことになる。故に此の點からも旣に十八空論なる名は頗る怪しむべきものである。唯論の最初に空が十八種なることをいひ十八空を並擧して居る所に基いて直に十八空論となしたに過ぎないと考へらるゝ。而して十八空の說明の最後部を見て細註の亦十六亦十八亦十四亦十七を加ふるに至つたのであらう。然るに論には亦十七となすべき所以の根據は殆ど明にせられて居らぬ。從つてこれ元來は亦十六亦十八亦十四とのみあつたのが、後に十六と十八との數の間を順を追うて整へて亦十七を附加したものなることが判る。宋元二本に亦十七が記されて居らぬのは之を證する。更に十八空論の名にしても十六空論十四空論の名にしても論の內容上からは決して適切なものでないことが知らるゝであらう。論は現存の斷片に於ても十八空等を說くのは、初部分のみであつて、後半は全くそれと異ることを述べて居るから、此の後半が十八空論等の名で呼ばるべき所以は全くないといはねばならぬであらう。然らば十八空論の名は決して此論の最初からあつたものでなくし

十八空論解題

十八空論は隋代の彥琮の仁壽錄以來眞諦三藏の譯書なることは一般に認めらるる所であり、又實際上正しいことであると考へらるゝ。然し單に陳代の譯出といふのみで年代が明確でない。論中に三無性論を指名して闡說して居るから、此の點に於てこれ三無性論以後の譯なることが判る。故に恐らく無相論を譯して後、同じく五六四年に譯出したのであらう。

十八空論は麗本にのみは龍樹菩薩造とせられて居るが、他の宋元明三本にもまた宋本の南藏本北藏本にも著者を記して居らぬ。之によつて麗本の龍樹に歸託して居るのは十八空の如く空を說くのが龍樹に密接なる關係のある點から、空を論ずる書を直に龍樹の著となした程度の假託たるに過ぎないことが明である。以下論ずる內容に關する點から龍樹の著たり得ないことは殆ど絕對に確實である。然るに嘉祥大師の法華玄論には十八空論は婆藪の所造とし、こゝの婆藪は確に婆藪槃豆の略稱で世親を指すこと、此の文の直前に攝大乘論は阿僧伽菩薩の所造といひて引續いて擧げて居る點から見て明である。婆藪は其のまゝの名として百論註釋家などを指すとも解せらるゝかも知れぬが、決してしか見るべきでない。然らば嘉祥大師のいふ所では十八空論は世親菩薩の著となるのである。然しこれも、現存十八空論が中邊分別論の釋の斷片である點から、中邊分別論の釋が世親の作である爲に、相互の比較上、到底世親作の說を信ずることを得ぬ。從つて如何にも眞諦三藏自身の作なる如くにも考へられ、或は印度の何人かの中邊分別論の複註の斷片なる如くにも考へられて、明確でない點が多いが、恐らく何人かの中邊分別論複註を眞諦三藏が譯したのであらう。中邊分別論の世親釋は安慧が複註したし、中邊分別頌は護月も註釋したから、頌も釋も種々註解せられたことがあるのである。然し十八空論は安慧作のものとも同一でなく、又護月の註の內容は全く知られない。而して現存のものは明に斷片に過ぎないが、これも既に眞諦三藏の時に、かく斷片的に出されたものであつて、必ずしも後世一部分が失はれて遂に斷片となつたといふのではないかも知れぬ。

十八空論が中邊分別論に基いて其の中の或部を解釋した斷片に過ぎないことは兩者を比較する勞を惜しみだにしないならば何人にも首肯せらるゝことである。曾て解題者が十數年前此の事を公に論じ

(29)[七五]是を無所得にして心にも非ず境にも非ずと名づく、是の智を出世無分別智と名づく、即ち是れ境智無差別なるものにして、如如智と名づけ亦轉依とも名づくるものなり。生死の依を捨てゝ但如理に依るのみなるが故なり。麁重と及び執との二が倶に盡きたるが故なり。

　麁重は即ち分別性にして、執は即ち依他性なり、二種が倶に盡きたるなり。

(30)[七六]是を無流界と名づく、是を不可思惟と名づく、是を眞實の善と名づく、是を常住の果と名づく、是を出世の樂と名づく、是を解脱身と名づく、三身の中に於ては即ち法身なり。

　釋して曰はく、二執の隨眠の所生の衆惑は滅離することを得ずとは即ち是れ見思の二執の隨眠煩惱が能く種子と作つて無量の上心惑を生ずることにして、皆本識を其の根本と爲すを以て根本が未だ滅せずんば、支も未だ盡きざるなり。[七七]勝鬘經に[七八]無明住地にして斷ぜず究竟せずんば、無邊[七九]四住地は斷ぜず究竟せずと說くが如し。

　若し智者にして更に此の境を緣ぜずんば、二は顯現せざるが故にとは此の境は即ち此の唯識の境なり、唯識の散亂なり、境無きに由るが故に識は無し、此の識が既に無なれば、能く唯識を緣ずるの心も亦無なり、故に二は顯現せずと云ふなり。此の二は但[八〇]二識所現の前境を談ずるのみ、前境は先に已に無なるが故なり。

　[八一]是を識轉品の究竟と名づくるなり。

轉識論終

【七五】修道を示すもの。

【七六】無流は無漏であつて眞諦三藏の常に用ひし譯語。

【七七】勝鬘師子吼一乘大方便方廣經一卷。(大正藏三五三)

【七八】五住地の第五、根本枝末の中にては根本無明、我法二執の中にては法執、是れは一切煩惱の所依であつて、變易生死の因となるが故に住地と云ふ。所知障の種子。

【七九】四住地は煩惱障の種子。こゝまでは第二十六の釋文。以下は第二十八の釋文。

【八〇】見識相識の二識を指すと解するが可ならむ。

【八一】これは第三十頌に附加する釋文で、識轉の究竟なることを意味するは勿論であるが、同時に一論の結尾たることを示す。

無性を説くにも亦三種有り。三性は前説の如し。[六七]前の二は是れ俗諦にして、後の一は是れ眞諦なり。眞俗の二諦が一切法を攝して皆盡く。三無性は即ち前の三性を離れざるものなり。

(24)分別性を無相性と名づく、體相無きが故なり。依他性を無性性と名づく、體と及び因と果とが無所有なればなり。

體が塵相に似れば塵は卽ち分別性なり。分別が既に無なれば、體も亦是れ無なり。因も亦無なるは本分別性を境と爲して能く識の果を發生するに由りてなり。境界が既に無なれば、云何ぞ果を生ぜん、(譬へば)種子は能く芽を生ずるも、種子が既に無ならば、芽は何れよりか出でん。是の故に生無きが如し。

眞實性を無性性と名づく。

有性も無く無性も無ければなり。人法に約するが故に有性無く、二空に約するが故に無性無きなり。卽ち是れ有性に非ず無性に非ず、故に重ねて無性性と稱するなり。

(25)此の三無性は是れ一切法の眞實なり、其の有を離れたるを以ての故に常と名づく、[六八]此の三無性を顯はさんと欲するが故に唯識義を明すなり。

(26)[六九]若し人が道を修するも、智慧にして未だ此の唯識義に住せずんば、[七〇]二執の隨眠の所生の衆惑は滅離することを得ず、根本が滅せざるが故なり。

此の義に由るが故に[七一]一乘を立てゝ皆菩薩道を學せしむるなり。

(27)若し但唯識有るのみと謂ひて現前に此の[七二]執を起さば、若しくは未だ此の執を離れずんば、唯識の中に入ることを得ず。[七三]

(28)[七四]若し智者にして更に此の境を緣ぜずんば、二は顯現せず。是の時に行者は唯識に入ると名づく。何を以ての故に。觀を修せしに由りて散亂の執が盡きたればなり。

【六七】此の二諦説は三無性論に於ても同様である。

【六八】此點から見ると本論に於て唯識義を説く最後の目的は三無性を顯はすにあるとなすのであるが、それは實に一切法の眞實を明すにあるのである。

【六九】修行の位を説くのであるが位の名を記さず。そしてこゝの釋は最後の釋して曰くから勝鬘經の引用までの所にある。

【七〇】見思の二惑なること後の釋にて知られる。

【七一】眞諦三藏は一乘の説を有した人である。

【七二】梵文及び玄奘譯に有所得と云ふに同じ。

【七三】此れは未だ見道を説くとは見られず。

【七四】見道を示すもの。こゝの釋は最後の若し智者にして云々の所にある。

(22) 六三是の故に前性は後性に於て一ならず異ならず。

若し定んで一異ならば、則ち過失有り。何ぞや。分別と依他とが定んで一ならば、分別性は決定して永無にして、六四五法藏の所攝と爲らざれば依他性も亦應に永無なるべし、若し爾らば、便ち生死解脱善惡律戒法も無し、此を不可と爲す。既に此の如くならざるが故に、分別性と依他性とは定んで一なることを得ざるなり。若し定んで異なるときは、則ち分別性は是れ無所有なることを觀ずるに由りて、方に依他性も亦無所有なることを見る、故に定んで異なることを得ざるなり。又、若し分別性が定んで依他性と異ならば、分別性の體は應に定んで是れ有にして永無なりと謂ふには非るべし、有が無と異る可くんば、何すれぞ異を論ぜん。是の故に但一ならず異ならずと說くのみ、定んで一異なりと說く可からざるなり。

無常と有爲法との如きも亦定んで一異なりと說くを得ず。

六五前に無なりしものが後に無となるが是れ無常の義なり。五陰は是れ有爲法なれば、若し無常と有爲法とが定んで一ならば、無常は是れ無にして、一切諸法も並に是れ無ならん。既に並に無ならざるが故に定んで一なるを得ざるなり。若し定んで異ならば、無常を觀ずる時には、應に有爲法に通ずべからず、其の通ずるを以ての故に、定んで異なることを得ざるなり。此も亦是れ一ならず異ならざるなり。是の如く一切の諸法は皆爾り、色等と瓶との如きも亦一ならず異ならず、若し色が瓶と定んで一ならば、色等は瓶を成ぜざらんも、瓶は則ち六六眞實なり。若し色が定んで瓶と異らば、色を見るも應に瓶に通ずべからず。是の故に定んで一異ならざるなり。兩の說も亦爾るなり。

若し分別性を見ざるときは、則ち依他性を見ず、是の故に一ならず異ならざるなり。

(23) 然るに一切の諸法は但三性有るのみにして法を攝すること皆盡くも、如來が衆生の爲に諸法の

【六三】分別性依他性の關係を說いて圓成性を明す、之は安慧譯及玄奘譯の依他性と圓成性との關係を說くのとは異る。
【六四】五法藏とは相名分別正智如如である。
【六五】前無今有今有後無の意味である。
【六六】此の眞實は單に現見上實際に存して居ることを云ふに外ならぬ。

種子に備には兩義有るなり、所分別は即ち是れ宿業熏習にして、能分別は即ち是れ宿業熏習執なり。所が即ち分別性なるは、能く種子法を生起する門と作るが故なり、此の法の門を說いて名づけて宿業熏習と爲すも、名有つて而も體無きものなり。能が即ち依他性なるは正しく是れ業を起す種子にして宿業熏習執と名づくるものなり、體有るも而も眞實ならざるものなり。二種の習氣も亦爾り、一一の煩惱に皆兩義有り、所分別は即ち麁重習氣にして煩惱法を起す門と作るも、名有つて而も體無く、能分別は正しく是れ煩惱の體にして、亦有なるも而も眞實ならず、是れ依他性なり。然るに此の中にて明す所の分別と依他とは[五八]三無性の中の名字とは同じからず、三無性の中にては、分別を說いて相類と名づけ、依他性を麁重と名づけたり。分別性の當體には其の相類有りて能く煩惱法の門と作るを以て、說いて煩惱と名づけたるなり。依他性は正しく是れ煩惱の體にして、能く生死の報を得るが故に麁重と名づけたるなり。今此の中にては分別性は相類麁顯なるを明さんが爲の故に麁重と名づけ、依他性は能く前の相類を執するが故に名づけて相と爲すなり。各々自ら意有るも、若し此の中の目を轉ぜんと欲せば、三無性の中の名も亦好し。[五九]　記に曰はく、

(20) 是の如き是の如き[六〇]分別にて若し是の如き是の如き類を分別すれば此の類を分別性と名づく。

此は但名有るのみにして、名の顯はす所の體は實には無きなり。

(21) 此の所顯の體は實には無なるも、此の分別は他に因るが故に起るなり、立てゝ依他起性と名づく。此の前後の[六一]兩性が未だ曾て相離れざるが即ち是れ[六二]眞實性なり。

若し相離るれば、唯識義は成ぜず、境と識と異ること有るが故なり。相離れざるに由るが故に、唯識にて境界無きなり。境界無きが故に、識も亦無と成る。境も無く、識も無きに由るが故に、唯識義を立つること是れ乃ち成立するなり。

【五八】三無性論を指す。

【五九】此の附加文によりて本論は三無性論よりも後の譯出なること知らる。

【六〇】前に唯識義の成立を說いた所から見て此の分別は能分別と所分別とである。

【六一】分別性依他性の二つ。

【六二】圓成實性を古くは成就性、眞實性とも譯す、圓成性と云ふも可。

なるが故に互に相隨逐すと云ふなり。種種の所作は並に皆是れ識にして別の境界無きなり。種種の分別等を起すとは一一の識の中に皆能と所とを具するなり。能分別は卽ち是れ識にして所分別は卽ち是れ境なり。能は卽ち依他性にして、所は卽ち分別性なり、故に種種の分別と所分別とを起すと云ふなり。此の如き義に由りて識を離れての外には別の境無く、唯識有るのみの義が成ずるなり。旣に未だ識を遣ることを明さざれば惑亂は未だ除かれず、故に不淨品と名づくるなり。問ふ、境を遣りて識を存せば乃ち唯識義と稱す可きに、旣に境も識も倶に遣らば、何れの識か成ずべけんや。答ふ、唯惑を立つるは乃ち一往は境を遣りて心を留むるも、卒終に論を爲せば、境を遣るは心を空ぜんと欲するが爲にして、是れ其の正意なるなり。是の故に境も識も倶に泯ずれば、是れ其の義が成ぜるなり。此の境も識も倶に泯ぜるは卽ち是れ[五二]實性なり、實性は卽ち是れ[五三]阿摩羅識なり、亦卒終に說を爲す可くんば是れ阿摩羅識なり。[五四]記に曰はく、

(19) [五五]二種の宿業熏習と及び二種の習氣とが能く集諦と爲るに由りて生死を成立す。

二種の宿業熏習とは卽ち是れ諸の業種子にして、一には宿業熏習、二には宿業熏習執なり。宿業熏習は卽ち是れ所分別にして、分別性たり、宿業熏習執は卽ち是れ能分別にして、依他性たり。所を卽ち境と爲し、能を卽ち識と爲す。此の二種の業を相似の集諦と名づく、能く五陰の生を得すればなり。二種の習氣とは卽ち諸の煩惱にして、一には相習氣、二には麁重習氣なり。相は卽ち煩惱の體にして、是れ依他性なり、能く前の相貌を攝す、麁重は卽ち煩惱の境にして、是れ分別性なり、境界が麁顯なるが故なり。此の二の煩惱を[五六]眞(集)諦と名づく、能く集して未來の五陰たらしむればなり。此の似と眞との兩種の集諦に由りて、若し宿業が已に盡くるも、更に別報を受けて能く生死を安立するなり。[五七]釋して曰はく、二種の宿業熏習とは一一の

[五二] 子島の眞興の唯識義章の引用には實性は空性となつて居る、空性と爲すも可。
[五三] Amala 菴摩羅識、阿末羅識、淸淨識、無垢識等と譯す、九識中の第九。
[五四] 長い釋曰が續いた後に本文を示す爲に置いた言。
[五五] 有情相續の緣由を明す。
[五六] 集を脫せることと次句より知らる。
[五七] 釋曰と特記せる文は眞諦三藏譯書の常例として三藏自身の附加文である。

[四三]衆浪の同じく一水に集まるが如し。

(16)問ふ、此の意識は何れの處に於て起らざるや。答ふ、無想定と及び[四四]無想天と熟眠して夢みざると醉と悶絶と心の暫く死すると離るるなり。此の[四五]六處を離るれば餘處には恒に有り。

(17)[四六]此の如き識が轉ずるは兩義を離れず、一には[四七]能分別、二には所分別なり。所分別が[四八]既に無なれば、能分別も亦無なり、境の取るべき無くんば、識は生ずることを得ざればなり。是の義を以ての故に[四九]唯識義が成ずることを得るなり。

何をか唯識義を立すとなすや。意（こころ）は本（もと）、境を遣り心を遣らんが爲なり、今境界が既に無なれば、唯識も又泯ず、即ち是を唯識義が成ずと說くなり。此れ即ち[五〇]淨品なり、煩惱と及び境界と竝に皆無なるが故なり。又唯識義が成ずることを得るを說くは、

(18)[五一]謂く是の一切法の種子識は此の如く此の如く造作し廻轉し、或は自に於て他に於て互に相隨逐して、種種の分別と及び所分別とを起す。

此の義に由るが故に識を離れての外にては諸事は成ぜざるなり。此れ即ち不淨品なり、但前境を遣るのみにして未だ識を無とせざるが故なり。釋して曰はく、謂く是の一切の種子識とは是れ阿梨耶識にして、諸法の種子と及び所餘の七識の種子と爲り竝に能く自類の無量の諸法を生ずるが故に、通じて一切法の種子識と名づくるなり。此の如く此の如くとは此等の識が能く廻轉して無量の諸法を造作し、或は轉じて根と作り、或は轉じて塵と作り、或は轉じて我と作り、或は轉じて識と作るに由りて、此の如くに種種不同なるも、唯識のみの所作なれば、此の如く造作し廻轉すと云ふなり。或は自に於て他に於て互に相隨逐すとは自に於ては則ち轉じて五陰となり、或は色陰乃至識陰と爲り、他に於ては則ち轉じて怨親中の人と爲りて、種種不同なるも、自の五陰に望むるが故に稱して他と爲すなり、是の如くに自他互に相轉じて前後不同

【四一】五識の倶起と次第起については梵文と玄奘譯は單に根本識をいふのみであるが茲には三識を並擧して明にして居る。

【四二】次の附加文に釋せられて居る。

【四三】此の例は解節經のものである。

【四四】無想有情の天處、第四禪の所攝。

【四五】本論の此の六處は他と一致せず。

【四六】此の第十七頌が正辨唯識にして最も重要なるものである。

【四七】能分別は識にして依他性、所分別は境にして分別性である。

【四八】何故に無なるか茲には明示して居ないが次の第十八頌の附加文によつて所分別は分別性なる爲に無であるとなす意味なることが知られる。

【四九】唯識性と同意味にして唯識の實性を指す。

【五〇】淨品唯識が唯識の眞意味である。

【五一】此れは心法生起の緣由を示すのであるが其目的とする所は不淨品唯識を明すにある。

り。後の五は一には欲、二には了、三には念、四には定、五には慧なり。此の中にて了と言ふは卽ち[二三]舊に明す所の解脫數なり。

(11)[二四]十の善とは一には信、二には[二五]羞、三には[二六]慚、四には無貪、五には無瞋、六には精進、七には[二七]猗、八には無放逸、九には[二八]無逼惱、十には[二九]捨なり。

此の十は一切の三界の心と及び無流の心數とに遍すれば大地と名づく。此は是れ自性善なるも、此に翻ずる十は自性惡たり。

(12)大惑に[三〇]十種有りとは、一には欲、二には瞋、三には癡、四には慢、五には[三一]五見、十には疑なり。[三二]小惑とは二十四種有り。一には忿恨、二には結怨、三には覆藏、四には不捨惡、五には嫉妬、六には慳惜、七には欺誑、(13)八には諂曲、九には[三三]極醉、十には[三四]逼惱、十一には[三五]無羞、十二には[三六]無慚、十三には[三七]不猗、十四には[三八]掉戲、十五には不信、十六には懈怠、十七には放逸、十八には忘念、(14)十九には散亂、二十には不了、二十一には憂悔、二十二には睡眠、二十三には[三九]覺、二十四には[四〇]觀なり。此の小惑の中に二種有り、一には作意遍行、二には不遍行なり。

(15)[四一]五識は第六意識と、及び本識と執識とに於て、此の三根の中に於て[四二]因緣に隨つて或時には俱に起り或は次第に起る。

作意を以て因と爲し、外塵を緣と爲すが故に、識は起ることを得るなり。若し先に作意が色聲の二塵を取らんと欲せば、後に則ち眼耳の二識が一時に俱に起り、而して二塵を得るも、若し作意が某處に至りて色を看聲を聽き香を取らんと欲せば、後にも亦一時に三識が俱に起りて三塵を得、乃至、一時に五識を具して俱に起ることも亦爾り。或は前後次第して而して起る。唯一識のみを起せば但一塵のみを得。皆因緣に隨ふ、是の故に同じからざるなり。是の如く七識は阿梨耶識の中に於て盡く相應して起ること、衆像の影の俱に鏡中に現はるるが如く、亦

指す。

【二二】梵文並に玄奘譯に五遍行、五別境と分けて居るのを茲には十種として纏めて居る。

【二三】舊とは眞諦三藏以前の古い漢譯を指す。故に茲に一段下げたる文句の如きは原梵文にあるべき理はない、從つてかゝる文句は眞諦の附加なることが知られる。

【二四】善については梵文及び玄奘譯は十一種を數へるが本論は無癡を省いて十種とする。

【二五】羞は慚の譯。

【二六】慚は愧の譯。

【二七】猗は輕安の譯。

【二八】不害。

【二九】行捨。

【三〇】梵文、玄奘譯の六種と爲すのと內容は同じ。

【三一】身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見の五なり。故に此中に六七八九を含めて次を十といふなり。

【三二】玄奘譯は隨煩惱二十種不定四種とし、梵文は隨煩惱二十四種とする。

【三三】惛。

【三四】害。

【三五】無慚。

【三六】無愧。

【三七】惛沈。

【三八】掉擧。

【三九】尋の舊譯。

【四〇】伺の舊譯。

又五種の心法と相應す、一には觸、二には作意、三には受、四には思惟、五には想なり。

根と塵と識との三事が和合するを以て觸を生ず。心が恒に動行するを名づけて作意と爲す。

(4)受は但是れ捨受のみなり。

思惟が行ずべきと、行ずべからざるとを籌量して、心をして邪と成り、正と成らしむるを名づけて思惟と爲す。[一一]作意は馬の行くが如く、思惟は騎者の如し。馬は但直行するのみにして、是非を避就すること能はざるも、騎者に由るが故に、其をして非を離れて是に就かしむ、思惟も亦爾り、能く作意をして漫りに行くことを離れしむ。

此の識と及び心法とは但是れ[一二]自性無記のみなり。[一三]念念に恒に流るること水流と浪との如し。本識は流の如く、五法は浪の如し。

(5)乃し[一四]羅漢果を得るに至るまでは、此の流と浪との法も亦猶未だ滅せず。是を第一識と名づく。

此の識に依緣して第二の執識有り、此の識は執著を以て體と爲す。(6)四の惑と相應す、一には[一五]無明、二には我見、三には我慢、四には我愛なり。(7)此の識を[一六]有覆無記と名づく。

亦五種の心法有りて相應す、名字は前に同じきも、而も前のは細にして此は麁なり。

此の識と相應法とは羅漢位に至りて究竟滅盡し、及び[一七]無心定に入りても亦皆滅盡す。若し[一八]見諦の肉煩惱ならば、識及び心法が出世道[一九]十六行を得れば究竟滅盡すれど、餘殘にして未だ盡きざれば但[二〇]思惟にのみ屬す。

(8)是を第二識と名づく。

第三の塵識は識が轉じて塵に似、更に六種と成るなり。識が轉じて塵に似ることは已に[二一]前に說きしが如し。體は三世に通ず。(9)[二二]十種の心法と相應し、及び十の善惡と、幷に大と小との惑あり、三種の受を具す。(10)十種の心法とは觸等の五種にして、前の如きも、但此は最麁たるのみのものな

の異と稱せられたものであらう、茲に云ふ依止處はその一にして執持たることを指すのであらう。

【一一】此の例解によつて黃檗隱元の弟子道棟が轉識論が唯識三十頌の異譯なることを發見するに至つたのである。

【一二】無覆無記とも云ふ、自性妄惑に非ず而も羸弱で善惡ではない、阿梨耶識はその代表的のもの。

【一三】刹那刹那の意。

【一四】羅漢を何れと見るかは明ならず。

【一五】梵文の我癡が此の無明である。

【一六】妄惑の體性羸劣であるが聖道を隱覆するが故に有覆と云ふ、第七末那識はその代表的のものである。

【一七】滅定も無心定も滅等至も何れも通常云ふ滅盡定であつて六識の心心所を滅して起らしめざる禪定。

【一八】見諦は見道のこと。

【一九】四諦の十六行相の略、見道の聖者の觀法である。

【二〇】思惟は思惑の思、修道所斷である。大乘法苑義林章に無相論には第二執識は皮肉煩惱に通じ見修所斷なりと說くと雖然れども彼文は錯なれば依用すべからずとあり。

【二一】本論最初の一、二行を

轉識論

從無相論出

陳代眞諦譯

[一](1)識が轉ずるに二種有り、一には轉じて衆生となり、二には轉じて法となる。一切の所緣は此の二を出でず。此の二は實には無なり。但是れ識が轉じて二の相貌と作りたるのみなればなり。

次に能緣を明さば、三種有り。

(2)一には[二]果報識にして、是れ[三]阿梨耶識なり、二には執識にして卽ち[四]阿陀那識なり、三には[五]塵識にして是れ六識なり。[六]果報識とは煩惱業の爲に引かるゝが故に果報と名づくるなり。亦本識とも名づく、一切の有爲法の種子の所依止なればなり。亦宅識とも名づく、一切の種子の所栖處なればなり。亦藏識とも名づく、一切の種子の隱伏の處なればなり。

(3)問ふ、此の識は何れの相、何れの[七]境なりや。答ふ、相と及び[七]境とは分別すべからず、一體にして異ること無ければなり。

[八]問ふ、若し爾らば云何にして有ることを知るや。答ふ、事に由るが故に此の識有ることを知るなり。此の識は能く一切の煩惱と業と果報の事とを生ずればなり。譬へば無明の如し。當に此の無明を起すべきの相と境とは分別すべきや不や。若し分別すべくんば無[九](明)と謂ふには非ず、若し分別すべからずんば、則ち應に有に非るべし、而も是れ有にして無なるには非ず、亦欲瞋等の事有るに由りても無明有るを知ればなり。本識も亦然り、相と境とは差別無ければ、但事にのみ由るが故に其の有なることを知るなり。此の識の中に就いて具には八種の異有り、謂はく依止處たる等なり、具には[一〇]九識義の中に說けるが如し。

【一】括弧内の數字番號はそれ〴〵唯識三十頌及び安慧釋を有する唯識三十頌の梵文と對照せらるべし。
【二】果報は異熟の舊譯。
【三】Ālaya。阿賴耶識とも譯さる、八識中の第八。
【四】Adāna。執持と譯さる。阿賴耶識の別名なるも玆には第七末那識を指す。
【五】了別境識に相當す。
【六】第八識には果報識、本識、宅識、藏識等の名がある。今之を玄奘譯に配當すると次の如し。

阿賴耶識――阿梨耶識
異熟識――果報識
一切種子識――本識／宅識（家識）……能藏／藏識……所藏

【七】大乘起信論義記は無相論にいはくとして此文を引用するが、それには單に境とせずに境界となせり。
【八】一段下げたる文は梵文にも玄奘譯にも無い、之は眞諦三藏の附加したものと考へらる。
【九】無明とあるも明は衍字ならん。
【一〇】九識義は現存しないから明確に八種の異を知ることが出來ぬ。現存決定藏論の最初に阿賴耶識存在の八種の因緣を擧げて居るがこれが八種

ても亦成唯識論との立場の相違に留意しつゝ理解せねばならぬ。最後の釋曰文に勝鬘經が引用せられて居るがこれは該經一乘章中の一部分の取意であらう。恐らくこれ漢譯勝鬘經によつて眞諦三藏の附加したものなることを示すものである。又一論又は一品の総として識轉品の究竟というて居るが、如何にも轉識品の究竟とあるべきを豫期せられ得るに實際さうでないのは一見奇である。此論を轉識論と稱しながら、論中には轉識の文字は用ひられて居らずして却つて識轉とのみある。之によつて考へて見るに、轉識論の轉識は決して成唯識論又は攝大乘論などでいふ轉識卽ち阿賴耶識を除いた他識を一括的に呼ぶ轉識とは決して同一の意味でなく、まさしくは識轉の意味であると見ねばならぬ。根本の識が轉識と稱せられたのであると解するのは慈恩大師の唯識樞要に本識の十八異名の第十一に轉があり淄州大師の了義燈に之を解釋して十一轉者無相論云與諸法爲依而起故とある所に見出さるゝ。然るに此引用文は現存の無相論にないから、若し淄州大師がかく解釋して取意引用したのであるとすれば、慈恩大師と共に、一層轉識を本識の名と解したことを示すし、若し取意引用でなくして元來此文があつたに拘らず後世傳寫する間に省かれ失はれたのであるとすれば、轉識の轉は此文によつて明確に起の意味になつて居るのであるから、阿賴耶識以外を七轉識といふ場合の轉識の意味と異る所はなく、本識の名としては不適當であるを慈恩大師淄州大師が顧みる所なくかく解したことになる。故に轉識論は實際としては識轉論の意味であると解し、轉識は必ずしも本識の一異名ではないとなす方が一般的に穩當であらうと考へらるゝ。

昭和七年十二月五日

譯者　宇井伯壽　識

解せらる。かく所緣能緣の起るをいひて、次に能緣の三種を順次に詳解するのである。三種の能緣は 果報識 執識 塵識で、之を阿梨耶識阿陀那識六識となし、果報識は異熟識と同意、阿梨耶識は阿賴耶識で、更に本識とも宅識とも藏識ともいはるとなして居る。本識宅識は成唯識論の說を述ぶる際には比較的に用ふることが少ないが、本識の名は眞諦三藏の譯書には甚だ多く、宅識の譯語は玄奘三藏すら其大乘廣百論釋論の中に之を用ひて居る。以下此第一識に關する說は文のままに熟讀すべきである。第二識について執識の執は恐らく玄奘三藏の思量と譯するのと同一語の異譯であらう。思量は成唯識論に於ても末那識が阿賴耶識の見分を緣じて我となすことを指すのであるから執著たるものである。轉識論は第二識を阿陀那識と稱し成唯識論の此語の用例とは異るが然し眞諦三藏の譯書に於ては決して奇異でもなく又典據がないものでもなく、數々用ひられて居るものである。恐らく眞諦三藏の繼承する系統でかく用ひて居たのであらう。阿陀那識は執持識の意味で一切を執持し維持する中心と見た場合の名であつたのを、それを凡てを個人化する中心原理と見たとき、又此名を以て呼ぶことになつたものである。眞諦三藏譯の攝大乘論でいへば、かの有染汚意を指していうたものであり、本識と別な體を有するものではない。故に又阿陀那識は本識の名ともせられて居る。成唯識論では此識は思量即ち執著を性とも相ともなすとなすが、相となすといふのは轉識論にも梵文にもない。又此識の滅に關しても轉識論は成唯識論よりも梵文に近い趣意であるが、文の意味が明確にせられ得ないのは遺憾である。第三識については前に說きしが如しとして省略して居る點は左程に明確でなく、了別を體となすことを明言しないのは全く不足である。然し了別を性とも相ともなすとなす相の方は成唯識論に特有のものである。進むで心所の分類については轉識論は他とは稍異り又無心の場合についても他と一致しないが、これは甚だしい相異でもない。

第十七頌以下に於ては成唯識論とは、殆ど根本的の相違をすら有すといふべきであるが、これは三無性論顯識論並に十八空論などを參照して了解すべきであり、釋曰文以外にこゝに繰返す要はないであらう。其中に於て三性中の前二を俗諦とし後一を眞諦となす點は注意すべきで、眞諦三藏の譯書では凡て此の如く分類するが、これ成唯識論の初一を俗諦とし後二を眞諦となすとは全く異るものである。此の點は兩者の立場の相違に基く程に重要な點に關係して居るのである。進むで唯識性に悟入する階位を說く部に

發見公刊せられたから、梵文唯識三十頌と轉識論と成唯識論中の唯識三十頌との對照研究、並に轉識論と安慧釋と成唯識論との比較研究は幾分之を根本的になし得るに至つたが爲に、必要なると共に又確實にもなすを得る點が存する。

轉識論は單に唯識論三十頌の翻譯のみでなくして、其の中には諸所に釋曰文を有する。此釋曰文は往々釋曰を附せずにも書かれて居るが、何れも共にこれ眞諦三藏のものなることは各を比較し又其內容を考察することによつて確め得らるる。此釋曰文は何れも凡て重要な說を闡明して居るものであつて、唯識三十頌の理解には大効がある。故に之を基として成唯識論の所傳に參照して研究すると、轉識論の說中には安慧の說もまた難陀の說も含まれて居ると考へらるゝ。眞諦三藏の當時には瑜伽行派の人々は、各系統が異つて居ても、他說を排して止まぬが如き傾向ではなかつたのであるから、同一人の說の中に他の系統の說も含まれて居たのである。意識的に明に他說を批議し排斥したのは恐らく護法が最初であつたのであり、この護法が從來と異る新說を主張した關係上必然的にかゝる傾向態度となつたのである。瑜伽行派としては恐らく陳那無性護法戒賢と德慧安慧と難陀勝軍との三系統があつたと思はるゝが、其中の安慧難陀の說を含むで居る點は轉識論の重要な點であり又興味多きものたる所以である。

轉識論の內容を一々成唯識論の學說並に其中に傳へらるゝ各個人の學說と比較しつゝ詳論することは此解題に於ては到底なされ得ることでなく、又解題の性質上からも要求せらるゝ所ではない。たゞ僅に成唯識論に譯出せらるゝ唯識三十頌と對照して見て二三の重要なものと考へらるゝ點について述ぶるに止めよう。轉識論は凡て散文に譯出されて頌文頌文たることを示して居ないから、以下の國譯文には括弧中に數字を加へ之を以て三十頌の頌數を示し、同時に成唯識論中にある唯識三十頌との對照に便にして置いた。第一頌に於て識が轉じて我と法とになり、これが所緣の全體で、之に對して能緣が三種あるとなすが、この所緣能緣の出づることが卽ち識の轉變することであるに外ならぬのである。能緣を三種となすことは成唯識論が能變を三種となすとは大に異る點があり、梵文とは、轉變を過程の意味に見る方面に於て一致する。能變を三種の識となせば、此三種の識は最初から存するもので、決して轉變によつて顯はれ來つたものとはならぬが、能緣を三種となせば、此三種の能緣は所緣と共に轉變によつて現はれたものであるから、一識の義分の考を表はして居るものである。梵文も此方面の意味に

轉識論解題

轉識論は眞諦三藏の譯出したもので、而も此の中に三無性論のことをいうて居る點で三無性論以後の譯出なることが判る。然し三無性論顯識論と共に無相論の一部をなし此の際は轉識品と稱せられ、同時に別行して轉識論と呼ばるゝのであるし、開元錄には轉識論は顯識論より出づともあるから、之によつて見れば、轉識品としては顯識品の一部とせられ、それが又無相論の一部となつて居つたことになる理である。譯出年代は、たとひ三無性論の後であるとするもそれは順序が後であつたといふ意味であつて必ずしも年を隔てたことを指すのでないから、五六四年となるのであらうと考へらるゝ。

・轉識論は慈恩大師賢首大師淄州大師によつて無相論として其文が引用せられ古くから注意せられた重要なものなるを示すが、當時未だ曾てこれが唯識三十頌の異譯なることが考付かれなかつたと見ゆる。又後世我國に於て德川時代の中葉以後長泉院普寂和上が古對法を尊崇し玄奘三藏譯の護法系統の說に對して眞諦三藏譯の古說を重要視し、唯識三十頌の如きも恐らく眞諦三藏によつて既に譯されたのであらうし、現今傳はらない譯書の中唯識論と稱せられて居るものに古說があつたであらうといふ意味をも述べて居るが、轉識論が唯識三十頌の異譯なることに思ひ到らなかつた。然るに學者のいふ所では黃檗隱元の弟子の道棟が延寶六年(西紀一六七八年)に轉識唯識三十頌二譯合本を造つて二譯の同本異譯なることを明にし、其の後寶永元年(一七〇四年)に之を公表するまで篋底に藏して居たといふ。禪宗の人によつて此重要な發見が初めてなされたことは實に奇緣といふべきである。此前後に於ける我國の唯識學者を見るに、淨土宗の聞證は延寶六年には四十四歲であり、眞言宗の秀翁の示寂する二十二年前であり、又寶永元年には淨土宗の堪慧は三十歲、普寂はこれより四年にして生れ、鳳潭の弟子覺州はこれより五十三年目に寂して居る。故に當時前後に有數の唯識學者が出て居たのであるが、惜しくも道棟の大發見は學界の注意する所とならなかつたのである。明治時代に入つてから中頃以後淨土宗の林彥明師が特に兩論異譯のことを明にし、現今としては何人も之を認むるに至つた程である。從つて廣くいへば唯識發達史上、又狹く見るも唯識三十頌の原意闡明上、轉識論の研究は極めて重要である。殊に又最近安慧釋を伴ふ唯識三十頌の梵文が

識と俱に盡くなり。

[六四]是れ「阿梨耶が能く」の下は可滅除のものなり。[六五]顯識品竟。

顯識論終

【六四】本論の句を指す。
【六五】此ノ句現流本になきも、宮本にあるを取りだり。

能く六趣に生ずとは、

卽ち能く六種の生死の果報を得て阿梨耶識の因を生ずるなり。此の生死の圓滿せる身は熏習の方便に因るが故に生死が成ずるを得るなり。故に此の因の義にて生死が圓滿すと云ふなり。

第二の觀習眞實性は、

三種の無性を觀ずるなり。是を觀習眞實性と名づく。觀に四の用有り、一には除觀、二には滅觀、三には證觀、四には修觀なり。如如は是れ苦諦性の性なりと觀ず、三諦も亦然り。四諦の如如を觀ずれば四の用を具す、如如を觀じて苦を滅し集を滅し、如如を觀じて卽ち滅を證し、如如に會して卽ち道を修するなり。

能く執着分別性を除くとは、

分別は無の中に於て有と作し、眞實觀は有無と自性とが相違することを顯はす、故に分別性を除くと云ふなり。

是の第一の熏習が損壞せらるとは、

現在に損ぜられ、未來に壞せらるゝなり、若し集諦を損すれば苦も亦損ぜらる。

阿梨耶識は損せらるとは、

本に[六二]七重の苦諦有り、三界は卽ち三重爲り、三重が損ぜられ竟れば、阿梨耶識は是れ果報を受くるの本なれば、惑業の所引無くして復三界の生に入らずと雖も、而も[六三]無流界の中の四種の生死の內に在りて生を受く、是の如くして乃至生死位に有ること無きなり。梨耶が損ぜらるが故に、受生も亦損ぜらる、何を以ての故に。顯識は是れ分別識の因なれば、顯識が損ぜらるが故に、分別識も亦損ぜらるを知ればなり。此の人我及び六塵等を分別する識が又已に滅盡すれば、何ぞ損せらるに止まらんや。今損ぜらると言ふは淨品に據りて語を爲すなり、此と本

【六二】前の七種生死をいふか。攝大乘論釋に七種の苦諦あり。
【六三】無流界。新譯の無漏界に同じ。

分別性は是れ無有の空なり、分別するも法の得べきもの無きが故なり。依他性は是れ不如の空なり。是の如くにして所執を破す。眞實性は是れ自性の空なり、人法二我の無き是れ自性の空なるなり。復次に分別性は空華の如く是れ極無なり、依他性は空華と異り、幻化に似て空有無に非ず。依他性の不有不無なるを觀ずるが故に、能く道を得聖を成ずるなり、空無は是れ斷觀にして、空無は道を得聖を成ずる能はざればなり。一切の煩惱は別しては執著分別性にして、一切諸法の欲樂は觀習眞實性なり。執著と觀習との此の二は依他性に屬す。此の二種の法是を熏習と名づく。一は煩惱種子熏習、二は道種子熏習なり。

〔六〇〕第一の熏習は本識を增長すとは、

同類を以ての故に、本識は如如を緣じて〔六一〕四謗を起す、是れ虛妄熏習なり。種子と煩惱とは同じく是れ虛妄なり。是の故に熏習は能く本識を增長するなり。譬へば物を甜めて能く淡を增長するが如し。淡の亦是れ甜性なり、同性なるが故に能く增長するなり。

諸の能を具足すとは、

業を明すに四種有り。一には作られて長ぜられずとは、利智の人が惡知識に遇ひて不善業を起すは是れ作るなるも、復卽ち追悔するが故に長ぜられざるが如し。二には長ぜられて作られずとは、羞慚の人が人に隨つて修行し、此の善が增せられて轉た廣ずるも、自ら善心を起すこと能はざるが故に作られざるが如し。三には亦は作り亦は長ずとは、人の善業を作り、復恆に此の善業を數習し轉た廣大にするが如し。四には作らず長ぜずとは、卽ち無漏の善業にして、若し轉た增長せば、生死の法を名づけて作者と爲すときは、無漏は能く生死の作者を除くが故に長ぜざるなり。前の三は是れ業にして、後の一分は非ず、前の三の中に就いて第三句の亦は作り亦は長ずを取るが故に諸の能を具足すと云ふなり。

〔六〇〕原文に第二とあり、第一の誤なり。

〔六一〕如如に對して單に有なりとし無なりとし亦有亦無なりとし非有非無となすを四謗といふ。

執著分別性とは、

一切の諸法に三種の性有り、一には分別性、二には依他性、三には眞實性なり、分別性とは名言の所顯の諸法なり。依他性とは一切の諸法の因果の道理の所顯なり。眞實性とは一切の諸法の如如の性なり。分別は無相を其の性となし、依他は無性が是れ其の性なり。言ふ所の性とは自ら五義有り。一には自性種類の義なり、一切の瓶衣等は四大種の類の義を離れず、同じく是れ四大の性なり、是れ自性の義なり。二には因性の義なり、一切の四念處は聖法の所縁の道理なり、此の道理を縁じて能く聖法を生ず、亦是れ因の義なり。三には生の義なり、若し物にして性無きときは、則ち性は見るべからず、生の義を見るべきが故に、性を生と訓ず、[五八]五分法身は是れ生性の義なり。如來は正しく衆生の信樂は三種の信を生ずと說く、一には眞實の道理有ることを信ず、二には五分法身の功德を得ることを信ず、三には自利利他の德なり。備に五分身を修して、五分身が生ずれば、則ち[五九]至得性を顯はすが故なり、故に五分法身生ずるは、此を以て性と爲す義なり。四には不壞の義なり、此の性は凡夫に在つても染ならず、聖に在つても淨ならず、故に不壞と名づくるなり。五には祕密藏の義なり、親近するときは則ち行は淨く、乖違するときは則ち遠離す、此の法は得難く幽隱なるが故に祕密と名づく、即ち藏と名づくる義なり。

生に四種有り。一には觸生、男女が交會して子有るが如し。二には嗅生、牛羊等の類の雌にして雄に欲心有り、雄は鼻を以て雌等の根を嗅ぐとき、則便ち子有るが如し。三には沙生、雞雀等の雌雀が欲心を起し、身を以て塵沙の中に坌して而して卵等の子を生ずること有るが如し。四には聲生、鶴孔雀等の類の欲心有らば、雄の鳴聲を聞いても亦卵を生じ子を生ずるが如し。一切の出卵は食すべからず皆子有ればなり。

【五八】五分法身。佛身には五種の功德法あるを以て五分法身といふ、五種の功德とは戒、定、慧、解脫、解脫知見なり。

【五九】至得性。諸佛本有の佛性を云ふ。

初無きことを知るなり。四には生死に二種有り、一には惡報、二には善道なり。是の善惡は善惡の二因に由る、無因なるを得ず。是の生死の初は善道たるか惡道たるか。若し善道ならば未だ善因有らず、若し惡道なるも未だ惡因有らず。善惡の二道を離れて更に第三道無し、故に初無きことを知るなり。難じて曰く、初なるものは自然にして因緣を用ひず、後なるものは因緣を須つに、若し爾らば、是の義は然らず、二過有ればなり。一には即ち理が平等ならざるが故に、二には因果が相似せざればなり。若し汝が生死は因に由らずして、後に因に由ると說かば、則ち平等ならず、初も後も皆是れ生死なるに、何が故ぞ一は因に由り、一は因に由らざるや。二に相似せずとは、果も亦因有り、因も亦因有り、因も果も皆因有るが故に、相似するを得るなり、若し相似ならば、能く同類を生ず、汝のは若し前に因無きが故に、後も亦應に無因なるべし、若し前も因無くして、後に因有らば、則ち生ずる能はず、若し能く生ぜば、豆は應に麥を生ずべし、麥も亦應に豆を生ずべし、而も然らざれば、故に汝が前を後果の爲に因と爲すも、前因は因と成らざることを知る。

〔五七〕佛偈を說く、初句にては顯識は即ち是れ梨耶、梨耶は即ち果報識なり、分別識は即ち是れ煩惱識なり。是れ果報識より煩惱識を起す、煩惱識は即ち陀那等なりとす。次句にては煩惱より識を起し、識は熏習を起し、熏習は即ち是れ業功能にして、能く本識を轉變して種子識を成ずることを明す。次句にては業より果報を起すとす。次句は總じて生死輪轉を結ぶ。輪轉とは不定なるを以ての故に或は因が轉じて果と作る。或は果が轉じて因と作るなり。

言ふ所の熏習に二種有りとは、

下は二義を顯はさんが爲なり、一には生死の方便を名づけて邪と爲し亦違逆とも名づくることを顯はし、二には涅槃の方便を正と名づけ亦隨順とも名づくるを顯はす。

【五七】本文にある解節經の偈を釋す。

[五四]種子と言ふは此が相續して變異し能く未來の果報を感ずれば是を種子と名づくるなり。相續するも變異すること無くんば亦種子には非ず、若し但變異するのみにして相續無くんば、亦種子には非ず、相續し變異して相離れざるが故に種子を成ずるなり。[五五]螺と白色との一にも非ず異にも非るが如し、若し白色が是れ螺ならば、螺は則ち[五六]三塵無し、若し白色が螺に異らば、則ち白色を見るも螺を得ず、故に、定んで異なりとも言ふべからず、不異なるを以ての故に、白螺と名づくればなり。相續して變異するも亦爾り、故に種子を成ずるなり。

此の熏習力に緣りて本識が未來に生ずることを得とは、

釋して曰く、熏習の力に緣りて、種子にして若し成ぜば、本識は生ずることを得るなり。

未來の顯識を緣として未來の分別の六識が生ずることを得。是の故に生死には前後無しとは、

若し煩惱業を離るゝときは、則ち生ずるを得ず、若し生死に前分有らば、則ち別に前分の衆生の處有りて、煩惱業を起し前分の處を感ぜんも、既に前分の衆生の業を起すこと無ければ、則ち前分の生死有ること無し、故に生死は無始にして初無きを知るなり。四義もて初無きことを明す。一には本に非ず。若し衆生が初に無にして後に有ならば、此の無は有の本と作らず、二種の過失有ればなり。一には若し無ならば生ずること能はず。後に若し能く有を生ぜば則ち無なるには非ず。二には平等の過失なり。若し虛空華が生じて事有らば、無より有を生ずるを得べければなり。二には離欲の衆生の生ずるを見ず、故に生死には初無きなり。若し生死には初に貪欲等無くして、後に方に貪欲等有らば、離欲の阿羅漢等の欲無きにも亦應に欲を生ずべし、是の羅漢には更に欲を生ぜざるを以ての故に生死には初無きことを知るなり。三には梵行を修行するも用無きが故なり、故に生死には初無し。一切の聖人は八聖行を修し滅して生ぜざらしめむが爲に、梵行を修すれば、離欲の人には更に生ぜずして滅するが故に、故に生死には

【五四】種子の意義を示す。
【五五】種子と阿梨耶識の非一非異を示す。
【五六】三塵とは香、味、觸を指す。

れ同時なり。所以に是の事有るが故に是の事有りと言ふは外道の生有の義を破せんが爲なり。外の義に云はく、一切衆生は自在天よりす、我が有るが故に生死は是れ有り、內の義に同じと言ふ。今破す、前因に由りて生ずるが故に生ずるを得るなり、汝の自在天は有ること無し、生に非ればなり、生死の有るが是れ生なり、故に是れ有るを得ず、故に是れ有るが故に是れ有るなるを得ざるなり。故に佛は義を立つ、是の事有るは卽ち生有るなりと、汝の自在天は是れ有にして是れ生なるに非ず、生は內の義に同じからざればなり。乃至世性微塵等よりの生も亦爾り。又、外道は因無くして果有り、果は自然にして生ずと立つ、故に外道を破す、此の物の有るは是れ因の有るが故なり、果の事是れなり。二義を明す所以は因緣が具するが故に生ずるを得と明さんが爲なり、若し此の物が有るが故に此の物有るならば、是れ緣なり、若し此の物が生ずるが故に此の物生ずるならば、是れ因の義を明すなり。有分とは生處なり、卽ち是れ生の因と生の緣となり、此の有分識の體は是れ果報の法にして、決(定)して是れ自性無記なり。四有とは識支より六歲に至るまでが是れ生有、七歲より已上、能分別が成熟して貪を起し未だ命を捨せざるに至るまでが是れ業有、死有は唯一念、中有は卽ち中陰なり。業有の中に就いて六識は三種の業を起す、善不善不動等の三業にして有爲なり。有爲は有分識に攝持せらる。六識は自ら謝滅するも、有分識に由りて攝持の力用在るなり。問うて曰く、何が故に有分識を立つるや。一期の生の中にて常に一境を緣ずればなり。若し人天に生ずれば、此の識は樓觀等の事報を見るも、若し六識の用の麁なるを起せば、覆障するとき則ち此の識の用を覺せず、若し惡道に生ぜば、此の識は但火事等を緣ずるのみ、若し報が六識の用の强きを起せば、則ち此の識の緣を覺せず。若し欲界の六識ならば、欲の境を緣じ、凡夫は覺すること能はず、乃至、無色も亦然り。若し無色の諸識が滅すれば、此の有分識の用は則ち顯はる、梨耶及び意識の如し。

聚集に至れる時に　　衆生の與(ため)に報ふ。

[四七]摩訶僧祇柯部は名づけて攝識と爲す。卽ち是れ不相應行なり。譬へば經を誦するに、初の一遍には未だ得ざるも、第二遍には誦すれば前の第一を攝す、是の如く乃至第十遍には誦して通利する時に、卽ち通じて前の九を攝するが如く、是の如く初識は能く變異にして[四八]第二に在り、是の如く乃至第九は變異して第十の中に在り、第十は能く前の九を攝す、卽ち此の第十の變異の用を名づけて攝識と爲す。前の九用有るが故に、前の九を失せざるなり。[四九]薩婆多部は[五〇]同隨得と名づく。同とは數と處と時等と相應して長ずるなり、隨とは三性と相妨げざるなり、而して得とは不失の義なり。同も亦不失にして、隨も亦不失なり。譬へば[五一]摩斗樓の此に楡華と言ふが[五二]洛柯汁の赤色汁と謂ふを取りて摩斗樓華鬚に點ずるが如き、華鬚は赤色と俱にして、後に實を結んで成熟するときは、卽ち赤色有りて出づ、是を同時修得と名づく、赤色は果に至りても失せざるが故に同(どう)と名づく、前に同じて赤色有りて出づ、是を同修得と名づく、赤色は果に至りても失せざるが故に同と名づく、前より來りて後に至りて失せざるを隨と名づく、隨は最後に綴はるゝが故に得と名づくるなり。　若し是れ[五三]他毘梨部ならば有分識と名づく。有とは三有にして、卽ち三界なり。亦七有も有り、一には中有、二には生有、三には業有、四には死有にして前の三有を通じて七有と爲すなり。欲と色との二界は四有を具し、若し無色界ならば中有なし、中有とは、正しく名を辯ずれば、向生處と爲す、處とは因緣有るを處と名づくるなり、十二因緣の有支の如く、是の事有るが故に是の事有り、是の事生ずるが故に是の事生ずるなり。存とは是れ因なり、因に二有り、一には前因、二には同時因なり。橘子の芽を生ずるが如きは是れ前時因なり。芽が生ずれば卽ち橘に並ぶこと有るは同時因なり、行を緣として識有り、識を緣として名色有り、名色を緣として六入有り、六入を緣として觸受有り等は是

【四七】摩訶僧祇柯部（mahā-saṁghika）。大衆部のこと。通常は此部は根本識を認めたりといふ。
【四八】原文は第一とす。第二の誤ならむ。
【四九】薩婆部（Sabbattha-vāda-Sarvāsti-vāda）。說一切有部なり。
【五〇】同隨得。同隨の原語は Samanvāgama で玄奘は之を成就と譯す。
【五一】摩斗樓（mātuluṅga）の音譯にして、楡といふ木の華を云ふ。
【五二】洛柯。（パー）ル（シヤ）カ（Pāruṣaka）の音譯にして赤華樹と譯され其の汁が極めて赤き故に染色に用ひらる。
【五三】他毗梨部（Sthavira-vāda）。上座部のこと。

論に曰く、識に二種有り、一には顯識、二には分別識なり。

釋して曰く、初の一は是れ本識なり、本識は六塵を顯はす。次の一は是れ六識なり、六識は此が彼と異ることを分別するなり。又、前の一は所緣を明し、後の一は能緣を明す。顯識に就いて二種の迴轉有り、一には迴轉して六塵と作り、二には迴轉して五根と作る。次に分別識は迴轉して似我と作る。是の如くにして意は二識を執して我を計するなり、即ち陀那と意識とが共に我見を作すなり。陀那は本識を執して我の體相を起し、意識は分別して我に種種差別の用有りと計す。故に一切法は有ならず無ならず、六塵に由りて六識有れば、定無なるべからず。六識を離れて六塵無ければ、定有なるべからざればなり。又、一切法は定んで有なりとも說くべからず、亦定んで無なりとも說くべからず、人法二我は實ならざるが故に、有と說くべからず、人法二空の眞實有るが故に、無と言ふべからざればなり、又の義は、一切法は決定有にして、決定無なり、人法は決定無なるも、此の人法の二空は是れ決定有なればなり。[四五]此の三は悉く共に俗の是れ有なるを顯し、眞の是れ無なるを顯はす。二には識の用を明す。

論に曰く、此の分別識にして若し起らば、熏習力を阿棃耶識の中に安立す。

釋して曰く、熏習力とは譬へば香を燒いて衣を熏習するに、香の體は滅するも、而も香の氣は猶衣の中に在るを名づけて衣を熏ずと爲すが如し。此の香は有とも言ふべからず、香の體は滅せるが故なり。無とも言ふべからず、香の氣は在るが故なり、故に名づけて熏と爲す。六識の如きは善惡を起し熏力を留め、本識の中に在りて、能く未來の報を得れば、名づけて種子と爲す。若し小乘の義ならば、正量部は名づけて[四六]無失と爲し、譬へば劵約の如しとす、故に佛は偈を說く。

諸業は失せざること　　無數劫の中なり、

【四五】上の一切法の有無に關する三義は俗諦の立場よりは有にして眞諦の立場よりは無なることを示す。

【四六】無失とは不失壞をいふ、種子が失壞せられずして能く未來の報を得ることは恰も約束證劵によりて支拂を受ける如くなれば劵約の如しといふ。

此の兩識を顯はすなり。餘の七種の識と及び分別識との此の八種の識は語言熏習に緣りて起ることを得。又、兩識とは一は[四〇]身識、二は受者識にして、及び自他異識との此の三識は身見熏習に緣りて生ずることを得、又善惡生死識は[四一]有分熏習に緣りて起ることを得。是の如き諸識を是を一切三界は唯識有るのみと名づくるなり。

[第　三]

[四二]義疏九識第三に合簡なり。文義に兩有り、一には識の體を明し、二には識の用を明す。一の識の體とは唯識論に出づ。

論に曰はく、一切三界は唯識有るのみなり。

問うて曰く、一切の法は只是れ三界なるのみなるに何ぞ二言を用うるや。答ふ、兩義あるなり。一には[四三]分段の是れ三界なると、[四四]變易の是れ界外にして四種の生死なるとにて是れ一切なるなり。二には廣く一切と言ふは是れ何なりや、謂く十方なり、十方は三界に非ず、故に一切三界と云ふなり。今、唯識有るのみなりとは、上の七種の(生)死は唯識の顯現する所にして、識を離れては別體無し、故に三界は唯識有るのみなりと言ふ。界とは自性の義なり。自性に兩有り。一には不雜の義なり、欲の性は色に異り、色は無色に非ればなり。二には性は是れ不改不轉を義と爲す、欲は欲爲り、色は色爲り、無色は無色爲り、善惡も亦爾り、三性の不改を義と爲すなり。唯識有るのみなりとは識を離れては別境有ること無きなり、識に由りて似塵有るを見るも、識を離れて塵は體無ければなり。

論に曰く、何れの者をか識と爲すや。謂はゆる三界なり。

釋して曰く、前には識を離れては三界無きことを明し、此には三界を離れては識無きことを明す。又前は二の識の用を明す。

[四〇] 恐らく身者識又は有身者識の誤ならむ。身見熏習卽ち我見熏習を因とするは有身者識の如き我見等に覆はるゝものであるべきで、五根たる身識ではない筈、少くとも有身者識の方が直接なり。

[四一] 有分は有支とも云ふ、有は三有にして三界を云ひ、分とは因の義、故に三界の因の意。

[四二] (現流本にては以下唯識論まで以下は割註なるも延書となすべきなり。)眞諦の著として九識義存したりしも現存せず。

[四三] 分段。六道に輪廻する凡身の生死を云ふ、六道に輪廻する身は各〻其の業因により壽命に分限あり、形體に段別あるが故に分段といふ。

[四四] 變易。其の形體狀況が恰も異物の如く變りたるが如き生死を云ふ。

し、欲界を觀じて苦苦と爲し色界を觀じて壞苦と爲す、生じ住して停まらず樂が壞する時に即ち苦なるが故に壞苦なればなり。無色界を觀じて行苦と爲す、生住壞の三時は皆苦なればなり、但衆生には二道のみあり、惡道を苦と爲し、善道を樂と爲せば、此の二邊を捨つるを謂うて涅槃と爲すも、此の心に行有り動有り、是の故に無常なり、故に苦なるなり。集に三有りとは即ち三毒なり、又、三種あり、身見と戒取と疑となり、身見とは衆生は身見に著して常樂我淨有りと執するが故に生死に住して出世道を修せざるなり、戒取とは正道を修するを肯ぜざるなり、疑とは疑うて決了せざるなり。滅諦が此の三種の煩惱を滅するを、即ち三の滅と爲すなり。道の三とは謂く戒定慧なり。次の略觀にては苦を二と爲す、謂はく身心なり、又、名色も亦是れなり。集の二とは十二因緣の中の謂く無明と貪愛となり。此の二種を滅するを二種の滅と爲す。道諦の二とは即ち定と慧となり。次の略觀にては苦を一と爲す、謂はく無常を苦と爲すなり。集は謂はく不正思惟なり。此の思惟を滅するを滅と爲す。道は謂はく身念處なり。即ち總じて四念處を觀ずるを名づけて身念處と爲すなり。又の義は若し正しく思惟するを道諦と爲し、不正思惟を集諦と爲すなり。實慧をして分明ならしめんと欲するが故に廣略二種の觀を作し、苦を觀じて一切法を九分乃至一分と作す、餘の三諦も亦然り。

語言と及び分別との熏習に四種の方便處有り。語言熏習とは忍と名とより乃至[三九]自性法の處なり、言ふ所の處とは即ち名を所と爲し、及び境界を處と爲す。分別熏習は相より(世)第一に至る一切修得法なり、一切修得法の處とは下品より上品に至る相と(世)第一との一切を處と爲すなり。若し人名(ひとみやう)に依りて思擇を爲さば、是を語言熏習と名づけ、若し人、名句等を離れて直に義を思擇すれば、是を分別熏習と名づくるなり。

是の顯識は後の兩識を顯はす、兩識とは一には四種言說識と、二には自他差別識とにして、

【三九】自性法とは名によりて呼ばるゝ法其のものを指す、次の修得法に對す。

流なり。四取とは取は只是れ貪なるのみ、四種の貪有り、即ち是れ取の有する四種なり、一には欲取、二には見取、三には戒取、四には我語取なり、我語取とは是れ內取なり、內の五陰を緣じ、色無色の八禪定の內法を貪するを我語取と名づく、中に於ての取を我語取と名づくるなり。若し欲界の塵を貪するを外法と名づくれば、名づけて欲取と爲す、欲取は是れ斷見の衆生なり、我語取は是れ常見の衆生なり、此の兩法は事を緣じて起る。見取と戒取とは常見を取り、理を緣じて起る。此の四取は是れ[三七]愛の資糧なり。愛を明かさば愛に三種あり。一には遠離貪愛、即ち一切三塗の衆生なり、二には求得貪愛、即ち人天より[三八]三空に至る、三には安住貪愛、即ち非想非非想を謂うて涅槃と爲すなり。四種の取の如きを集諦と名づく。四取を滅するを四の滅諦と名づく。道諦の四とは謂く四念處なり、即ち是れ四種の般若なり。身を觀じて苦諦に通達し、受を觀じて集諦に通達し、心を觀じて滅諦に通達し、法を觀じて道諦に通達す。身を觀ずるを麁と爲し、三界身の麁なるを觀ずるを苦と爲し、欲界身の寒熱等を觀ずるを苦と爲し、色界身の四威儀を觀ずるを苦と爲し、無色界心の念念住せざるを觀ずるを苦とす。受を觀じて集諦に通達すとは衆生の一切の貪愛は受に緣るが故に起る。若し受無くんば、貪は生ぜず、故に受を觀ずれば集諦に通達するなり。若し心を觀ずれば滅諦に通達すとは一切衆生は我見を心の中に安立す、是の故に衆生は我見を執して、則ち滅有るを信ぜず、只那陀識のみに由りて梨耶は是れ一なり是れ常なりと執す、故に我體は滅に非るも、心は我に非るを觀ずるが故に滅有るを信ずるなり、我見を捨て人法二無我を觀ずるを以ての故に、心を觀じて滅諦に通達するなり。法を觀じて道諦に通達すとは法に二有り、一には淨品、二には不淨品なり。不淨品を觀ずるを苦集と爲し、淨法を滅道と爲す。又不淨品は即一切の諸惑にして、淨品は一切の治道なり、故に應に須く道諦に通達すべし。　次の略觀にては苦は三種なり、即ち三界を觀じて苦と爲

信、精進、念、定、慧の五なり。
【三六】四念處。身は不淨なり、受は苦なり、心は無常なり、法は無我なりと觀ずるを四念處觀といふ。
【三七】原文に受とあるも、愛の誤ならむ。
【三八】三空。無色界の無所有處を指す。

し、次に略觀を作して眞實に入ることを得るなり。言ふ所の廣とは卽ち四諦を觀ずるなり。苦集は卽ち是れ凡夫の俗諦にして、滅道は卽ち聖人の眞諦なり。各九種有り。苦を觀ずるの九分は卽ち三界に各三世有りて九と爲るなり。又、欲界に一の有あり、色界に四の有あり、無色界に四の有あり、故に九種と爲るなり。集諦の九分は卽ち是れ[二七]九結分なれば、此の九結を滅して九の滅諦と爲す。道諦の九分とは九の次第の[二八]三摩提なり、卽ち[二九]九次第定なり。次の略觀にて先に苦諦を觀じて八種と爲すとは四大四名を觀ずるなり。四大は卽ち色陰にして、四名は卽ち四陰なり、以て八種の苦と爲す。集に八有りとは卽ち[三〇]八邪にして八聖道に乖く。滅諦の八種とは八邪を滅するを八種の滅と名づくるなり。道諦の八とは八聖道を修し以て道諦と爲すなり。次に復略觀は苦を七と爲す、六趣と及び中陰となり。集の七とは卽ち是れ七[三一]使なり、七使とは貪と瞋と癡と慢と疑と見と欲界の欲を欲使と名づけ、色無色界のものを名づけて有使と爲すと合して七種の使と爲すたり。七使を滅するを七種の滅と名づく。道諦の七とは卽ち[三二]七覺分なり。次の略觀にては苦を六種と爲す、謂く六種の內入なり。集の六種とは謂く六種の貪愛にして、卽ち六塵が六種の貪を生ずるなり。六貪を滅するを六滅と爲す。道の六とは六種の出離の界にして、一には殺他瞋を出離して慈を修するの界なり、二には逼惱瞋を出離して悲を修するの界なり、三には嫉妬瞋を出離して喜を修するの界なり、四には貪欲を出離して捨を修するの界なり、五には[三三]覺觀熏を出離して出入息を念ずるを修するの界なり。六には無明惑を出離して無我を修するの界なり、此の六種を修するを出離界と名づく。次の略觀にては苦を五と爲す、卽ち五陰なり。集を五と爲すは卽ち[三四]五蓋なり。此の五蓋を滅するを五種の滅と爲す。道の五とは卽ち[三五]五根なり、亦卽ち五力等なり。次の略觀にては苦は四種なり、卽ち[三六]四念處にして、謂く身受心法なり。集の四とは卽ち四取にして、亦卽ち四

げられたる四善根は犢子部の四善根と其名を同じうす。

【二七】九結。愛恚慢癡疑見取慳嫉をいふ。結とは煩惱の意。

【二八】三摩提（samādhi の音譯）。等持と譯す禪定のこと。

【二九】九次第定。四禪、四無色、滅盡定の九種の禪定を他心を雜へず一定より一定へと次第に入る法なり。

【三〇】八邪。八正道の反對を云ふ。

【三一】使は煩惱の意。

【三二】七覺分（Sapta-bodhyaṅgāni）。念、擇法、精進、喜、輕安、定、捨を云ふ、此の七は聖道を生ぜしめんために定慧を均等ならしむる修行法にして從つて、之を七菩提分とも稱す。

【三三】覺觀（Vitarka-vicāra）は新譯の尋伺に同じ、粗なる思考を覺と名け細なるを觀とす、二者共に定心を妨ぐるもの。

【三四】五蓋。蓋（nivaraṇa）は覆ふ意にして、行者の淸淨なる心性を覆ひて善法を生ぜしめざる煩惱を意味す、貪欲、瞋恚、睡眠、掉悔、疑法の五を五蓋となす。

【三五】五根。五力、根（indriya）とは能力の意味。之を他の方面より云へば力（bala）となり五力と稱せらる、卽ち、

離れずして卽ち生じ卽ち滅して停住すること無きが故なり。又[一八]有身者識とは我見に覆はるゝものなり。此の識は我見貪愛の爲に覆はるゝが故に六趣の生を受け、此の識が生死身と爲る。若し此の識有らば、卽ち身識有り、此の識にして若し盡くるときは、則ち生死身も盡く。我見は一切の肉惑を生じ、貪愛は一切の皮惑を生ず。故に生死身有るも、若し(貪)愛と我見とを離るれば、卽ち皮と肉との煩惱無し、若し皮と肉との煩惱無くんば、卽ち三界身無し。故に身識が生死を受くるなり。二に[一九]受者識とは意界を受者と名づく、識は卽ち三品の意識なり。一には謂く阿梨耶識にして、是れ細品の意識なり、恒に果報を受くるも、善惡に通ぜずして、但是れ[二〇]無覆無記なるのみ。二には[二一]陀那識にして、是れ中品の意識なり、但(た)凡夫身の果報を受くるのみ。三には謂く常に明す所の意識にして、是れ麁品の意識なり、通じて善惡無記の三性の果を受く、五識も亦爾り。此の三種の意識は通じて能く果報を受用するも、但今は[二二]興廢に據りてのみ言を爲すが故に、梨耶識を呼んで受者識と爲すなり。又、梨耶識は是れ凡夫の所計の我處にして、陀那に由りて梨耶識を執して我境と作す、能執は正しく是れ陀那なるが故なり、七識は是れ我見の體なるが故に、分別識に二種有り、一には[二三]有身識、二は身者識なり。合して意根と名づくるも一は本の染汚の根にして、卽ち陀那識なり。二は[二四]次第緣の意根の體なり。卽ち本識を緣じて我境と作し自ら彼の緣相を出して彰はす。顯識に九種有るも、上の如き顯識は唯是れ梨耶なるのみ、若し是れ分別識ならば則ち是れ陀那と及び意識とにして、陀那は我を分別し、意識は萬法を分別す。意識には[二五]三種の分別有るも、五識には但自性分別有るのみなり。

熏習に[二六]四種の方便有り、一には忍、二には名、三には相、四には世第一法なり。一の忍に二有り、一には廣、二には略なり。一切衆生は皆眞實性に迷へば、今修習するに先に廣觀を作

天道の二趣が善道なり。

【一八】有身者識。輪廻の主體として考へられたる個人我としての阿梨耶識を意味す。

【一九】受者識。主として阿陀那識を指す。

【二〇】無覆無記(anivṛtāvyākṛta)。自性が善にも惡にも非ず而も直接聖道を障ゆるほど妄惑にあらざる性質をいふ。

【二一】陀那識。通常には阿陀那識(ādānavijñāna)といふ、阿梨耶識を緣じて我なりと執するをそのはたらきとなす。

【二二】興廢は興に重きを置く意味の熟字。

【二三】有身識は恐らく有身者識で、者を脫し、身者識は恐らく受者識の誤であらう。改むべきである。

【二四】次第緣。新譯では等無間緣といふ、意識が過去に落謝せしものを意根といふ、此の意根は次の刹那に直に自ら開導して識を生ぜしむる作用あり、此の作用をなす意根を次第緣と云ふ、從つて又識の作用の起る依止となる。

【二五】三種の分別とは自性分別、憶持分別、顯示分別、卽ち自性分別、隨念分別、計度分別をいふ。

【二六】忍、名、相、世第一法は普通には煖、頂、忍、世第一法の四善根といふ。茲に擧

梨耶識が既に損ぜらるれば受生識も亦損ぜらる。阿梨耶識の能く三界を生ずることが損ぜらるに由るを以ての故に、三界の[一〇]轉依を得。此の轉依の義には五種を具す。[一一]滅差別相の中に解說するが如し。

〔第　二〕

顯識とは九種有り。一には身識、二には塵識、三には用識、四には世識、五には器識、六には數識、七には四種の言說識、八には自他異識、九には善惡生死識なり。其の次の分別識には二種有り、一には有身識、二には受者識なり。前の九識の中にて、第一の身識とは謂はく轉作して身に似る、是の故に識を身識と名づくるなり。言ふ所の似とは所執の身の相貌の如く身に似て而も眞實に非るが故に身に似ると名づくるなり。此の識は能く相と作つて身に似れば名づけて身識と爲す、卽ち是れ五根なり。餘の塵等の八種の識も亦是の如し、卽ち是れ唯識の義なり。言ふ所の身識とは五種有り、卽ち眼根界等なり。是を身識と名づくること是の五根に通ず。第二の塵識とは六種有り、色界等乃至識塵にして通じて[一二]應受識と名づく。第三の用識とは六種なり。眼識界等にして、卽ち是れ六識なり。[一三]大論には名づけて正受識と爲す。第四の[一四]世識とは三種有り、卽ち三世にして、過去未來現在なり、又、生死が相續して不斷なるが故に世と名づくるなり。第五の[一五]器識とは大論には處識と名づくるものなり。略すれば卽ち器世界にして、謂く外の四大五塵、廣すれば卽ち十方三界等なり。第六の[一六]數識とは算計量度(りやうたく)なり。第七の四種の言說識とは謂く見聞覺知の四種なり、一切の言說は此の四を出でず、若し見ることを說かずむば卽ち聞くことを說く、覺知も亦爾ればなり。第八の自他異識とは謂く依處が各異り、六趣が同じからざるなり。依處とは身なり、六趣の身を自他異識と謂ふ。第九の善惡趣生死識とは一切の生死は兩道を離れず、善者は人天にして、惡者は[一七]四趣なり、此の善惡道は生死を

異譯としては玄奘譯、解深密經二卷、菩提流支譯、深密解脫經五卷あり。

【八】執著分別性。阿梨耶識を增長せしむる熏習にして迷界流轉の方面。

【九】觀習眞實性。阿梨耶識を對治する熏習にして悟界還滅の方面。

【一〇】轉依(āśrayaparāvṛtti)。識の性たる依他起が對治道の起りし時其の中の不淨品を改め清淨分涅槃をその本性とするをいふ。卽ち阿梨耶識が全く斷滅され、眞如と一致契證するをいふ。

【一一】滅差別相は明瞭ならず、或はこれ攝大乘論の學果寂滅勝相を指すか。

【一二】應受識。六識に受用せらるべき六塵を示す。

【一三】大論とは此の場合、攝大乘論を指す。

【一四】世識。衆生の果報は三世に生死相續して斷ぜざることを示す。

【一五】器識。衆生の居處は人天惡道の如く無量の差別あることを示して以て一切處を攝す。

【一六】數識。衆生の果報には諸界の不同あることを明して一切の數を攝す。

【一七】地獄餓鬼畜生阿修羅の四趣を惡道とす。從つて人間

顯識論　従無相論出[一]

陳天竺三藏眞諦譯

顯識品【第一】

一切三界は[二]唯識有るのみなり。何れの者をか識と爲すや。謂はゆる三界なり。二種の識有り、一には顯識、二には分別識なり。[三]顯識とは即ち是れ本識なり。此の本識が轉じて五塵四大等と作る。何れの者か[四]分別識なる。即ち是れ意識なり。顯識の中に於て分別して人天長短大小男女樹藤諸物等と作して、一切法を分別す、此の識衆が法塵を分別するを分別識と名づくるなり。譬へば鏡に依りて色と影色とが起ること有るが如く、是の如く顯識を緣として分別識が起ることを得。此の分別識にして若し起らば、[五]熏習力を[六]阿梨耶識の中に安立す、此の熏習力に由りて本識が未來に生ずることを得、此の未來の顯識を緣として未來の分別識が起ることを得。此の因の義を以て、是の故に生死には前後も有ること無きなり。此の義を顯はさんが爲に佛は[七]解節經の中に於て偈を說いて言はく、

顯識は分別を起し、　分別は熏習を起し、
熏習は顯識を起す、　故に生死輪轉す。

言ふ所の熏習とは一には[八]執著分別性、二には[九]觀習眞實性なり。此の二義を以ての故に熏習と名づく。第一の熏習は阿梨耶識を增長し、阿梨耶識は增長せられて諸の能を具足し、能く六道受生の諸識を生ず。是の義を以ての故に生死が圓滿するなり。第二の熏習は觀習眞實性と名づけ、此の熏習は能く執著分別性を除く。是の第一の熏習が損壞せらるゝが故に、阿梨耶識も亦損ぜらる。阿

【一】無相論。此の論は現存せざるも此句によりて、顯識論は無相論の一品なりしことが想像さるる。

【二】現流本には凡て「但唯有識何者是耶」とあれど、後の釋文の部によりて斯く訂正す。

【三】顯識。顯識とは三界一切のものを顯はす識、又は一切のものゝ顯はれて居る識の意味で、本識阿梨耶識の別名である。原語は楞伽經の「現識」と同じく Khyātivijñāna であらう。

【四】分別識。本識が廻轉することによりて顯はれるもので、我法二執の虛妄分別を其のはたらきとする識である。

【五】熏習力。譬喩的の熟語にして、香を燒いて衣を熏ずるに香體は滅するも香氣は衣中に殘存すといふ譬喩の原意を以て、分別識が阿梨耶本識に熏じて殘す印象餘力を示す、かくて熏習せられた餘力氣分を習氣といひ之が未來の顯識を起し相續せしむる點で種子とも稱せらる。

【六】阿梨耶識（ālayavijñāna）。一切の凡夫によりて、我體として認めらるる根本識を云ふ。

【七】解節經（Saṃdhinirmocana-sūtra）。一卷、眞諦譯、

後の趣意は如來藏緣起となるべきものなることが知らるゝ點で重要である。

顯識論一部は極めて小なる論であるが、注意すべき重要な說を含むで居る。然し其用ふる語の中には阿梨耶を棃耶といひ阿陀那を陀那といひ頗る支那化したものがあつて、或は譯者眞諦三藏以後の攝論宗の或人が註釋の部を書いたのではないかとも想像せらるる程である。然し恐らく後の攝論宗の人々によつて、相傳へらるゝ間に、訛略せらるゝに至つたのであらうと見るのが穩當であらう。顯識論の中の或部が缺けて失はれたと考へらるゝことは諸書に顯識論に阿摩羅識の語があるとして引用せられ眞識三藏の九識說を知る典據の一とせられて居るにも拘らず現存の顯識論には全く此語のないことによつても推定せられ得るから、此論は確に傳寫の間に變化を受けたものである。故に其間に棃耶陀那などゝせらるゝに至つたのであらう。

昭和七年十二月五日

譯者　宇井伯壽識

說熏習と語言熏習は同一なること明であるから、有分熏習と分別熏習とも亦同一であること後文に有分熏習ともあるによつて疑ないであらう。然るに此論は顯識が四種言說識と自他差別識卽ち自他異識との兩識を顯はすから之を除いた他の七識と分別識との八種は語言熏習を因とし、又は顯識の顯はす兩識とは有身者識と受者識とであつて之に自他異識を加へた三種は身見熏習を因とし、善惡趣生死識は有分熏習を因となすと述べて居るが、此間には明に混雜が存する。顯識の顯はす兩識を前者の如く解すれば、四種言說識には三種何れの熏習も因とならないことになり善惡趣生死識は語言熏習と有分熏習との二種を因となすに至るであらう。又顯識の顯はす兩識を後者と見るとするも此場合には多少文意を補はねば其まゝでは意味の通じない點が存する。旣に顯識が後の兩識を顯はすといふすら明確でない點が存するに、かくも混雜があるとすれば、之を如何に解決すべきや、これのみでは決定すべくもない。或は攝大乘論を標準として整理的に理解する外はないのであらうか。

第三部に於て、一切三界唯有識は一切三界唯識の意味で、唯有識は眞諦三藏の譯語例である。一切と三界との二言を用ふる點が解釋せられて居るが、これは注意すべきものである。七種生死は三界の分段生死と界外の四種の變易生死とであるが、之については、後世種々にいはれて居る。次に顯識と分別識との解釋に於て、顯識が迴轉して六塵と五根とになり、分別識が迴轉して似我となるといふは轉識論の最初と比較すれば、唯識說の古說の趣意のよく表はれて居るのを見るであらう。意に關して識をいふ場合には阿陀那識と第六意識との二種がいはるゝことになるのであつて、此中に於て前者は我の體相を起し後者は我に種々の用ありとなすと說くのは護法說と比較すれば興味多い說であらう。進むで熏習と種子とを說き正量部が種子に當るものを無失とし劵約の如しとなす說、大衆部の攝識、有部の同隨得、上座部の有分識を擧ぐるのも重要な傳である。正量部は果報識を認めたともいはるゝが恐らく後にしかいふに至つたのであらうから、無失卽ち不失法の劵の如きを說くのが古い說であらう。大衆部については通常は其部で根本識を說いたとなすが、攝識の名は此論に特有である。有部の同隨得といふのも此論に特有の傳であつて他にてはいはれない說である。同隨得は成就得のことである。更に猶注意すべきは三性を說いて直に三無性の義を示し、性の五義を說く點である。性の五義は勝鬘經の有名な如來藏の五義と同一であつて、攝大乘論佛性論に於ける同種の說から判ずれば顯識論の最

妄識たる所は我見等の四煩惱の對象として考へられた所であるから、此論に於ても亦此の如く妄識たる所が考へられたとき阿棃耶識と稱し然らざる場合は顯識叉は本識と呼ぶのである點に基いて、阿陀那識の所執所計の我處我境たる所を阿棃耶識というたのである。故にこれは有身者識に外ならぬというても殆ど差支ない如くである。有身者識の對象たる方面でいうて居るのであらうも、それを今は有身者識の中に入れて見るを得となすのである。又麁品の意識は直接には第六意識で而もまた前五も此中に含まると見らるるから、麁品の意識の體としては用識卽ち正受識と異ることはない。從つて受者識其者の指す所は中品の意識卽ち阿陀那識に外ならぬといへるであらう。然らば有身者識との區別は何處にあるか。恐らく體卽ち物其者としては各異るものでなくして、意界として識の起るものと見たとき受者識、起つた識として見たとき有身者識となす程度の區別であらう。

第二部の中で注意すべき事を述べ添へて置かう。先づ皮肉心の煩惱について、玆には皮肉煩惱のみをいうて居るが、皮煩惱は貪愛欲等であつて禪定の障、肉煩惱は我見我慢等で解脫の障、心煩惱は無明で一切智の障とせられ、眞諦三藏の譯書には數々說かれて居るものである。有染汚意としての有身者識は我見我慢我愛無明の四煩惱と相應するのであるから、我見我慢は肉煩惱、我愛は皮煩惱、無明は心煩惱であるとすれば、有身者識は卽ち皮肉心三煩惱に通ずる理である。然し常に必ずしも三煩惱といはれて居ないのは、或は此三煩惱と見道修道との關係などから見て異つていはるゝのであらうか。次に熏習に四種の方便ありとして忍と名と相と世第一法とを四種となすが、此四種は異部宗輪論によれば犢子部の用ふる四善根の名と同一である。有部等ならば煖頂忍世第一法であるに、玆に犢子部の名稱を用ふるは如何なることを示すものなるか明確でない。忍に廣と略とあるとなし廣觀は唯一つのみで略觀は八種となして居る。凡て四諦によつて說明せられて居るから、文に就いて理解すべきである。然るに之に續いて名相世第一法が說かるべきであるに、文には却つて語言熏習と分別熏習とがいはれ、前者は忍名乃至自性法、後者は相世第一法一切修得法とせらるゝ。これは名相世第一法の說明の代りに熏習の二種に配當したものを擧げたのであらうか。更に熏習としては此外に猶身見熏習が認められて居る。攝大乘論に於ては言說熏習と我見熏習と有分熏習とをいひ、十一識中の初九識は言說熏習の差別を因とし第十識は我見熏習を因とし第十一識は有分熏習を因となすと說くが、我見熏習と身見熏習及び言

此中、攝大乘論の二に當る(一)有身者識と三に當る(二)受者識とは顯識論では分別識の二種とせらるゝものであるが、其說明から見れば、有身者識は我見又は我見貪愛に覆はるとあり、攝大乘論には染汚識とあるから、これ卽ち眞諦三藏譯の攝大乘論のいふ有染汚意であつて、後世第七末那識といはるゝものになるものである。受者識は意界と釋せらるゝからこれ卽ち意根であつて、攝大乘論で阿棃耶識の異名として心意識の三名を擧ぐる中の意を二種となす場合の一種である。意の二種とは第一には、甲、等無間緣卽ち次第緣の依止として、乙、正生識の依止としての兩方面を含ましめるが、これが今いふ意界としての受者識で、第二には有染汚意となし、この方は前の有身者識に當るのである。顯識論には本の染汚の根と次第緣の意根の體との二となし、後者の方に正生識の依止たる點をいうて居らぬが、之れはたゞ省略したのみであらう。今攝大乘論の十一識の中から身者識卽ち有身者識と受者識との二を取つて特に之を分別識となし、其他の九識を顯識となす點を考へて見るに、顯識は卽ち全體として顯現して居る一切のものを指すのであり、一切諸法諸現象は凡て顯識に外ならぬと考へて居るのであるといはねばならぬ。器世間生死相續見聞覺知數量自他善惡趣凡てこれ顯識に外ならぬのであるから、此外に何ものもあるべきことなく一切を包含して居るに外ならぬ。然るにこれ等凡ては各人各有情に共通であつて、必ずしもそこに個人的個物的に屬すとしての特質を擧げて居ないのであるから、これ卽ちこれ等を皆一般的のものとして見て居るのである。此一般的のものが有身者識によつて見らるゝことになると、そこに個人的個別的又は特殊的となつて現はれて來るのであつて、例へば一般的にいふ生死相續不斷や見聞覺知や自他差別や又は善惡兩道が或特殊一定の個人に屬するものとなつて來るのである。故に有身者識は凡てが個人的となる爲の根基的中心原理ともいふべきものであると見ねばならぬ。この有身者識の起り働く基を強く見るとき受者識が認められて來るのであらう。受者識は、詳しくは、受者とは意界を指し識は三品の意識となつて居るといはるゝが、意界を依止として三品の意識の起るをいふのであらう。三品の中の細品の意識は阿棃耶識で、中品の意識は阿陀那識、麁品の意識は第六意識である。一方に於ては顯識を阿棃耶識といひながら、他方に於ては同時に、こゝにある如く、分別識の一部分と考へらるゝ細品意識をも亦同じく阿棃耶識となすのは何故であるかといへば、蓋し一般的にいふも阿棃耶識とは其中に妄識たる要素が含まれて居る場合の名であり其

せらるゝ。從つて偈文第三句の熏習は顯識を起すは種子生種子に當る理である。之によつて顯識は種子識に外ならぬことが知らるゝのであり、此一偈中の三句で阿棃耶識緣起の綱要を示して居るのである。かく種生現、現熏種、種生種で一切が成立して居るのであるから、これ生死の輪轉である。然るに生死輪轉は熏習が執著分別性に關する方面の場合であつて、これ即ち染緣起であるが、之に反して熏習が觀習眞實性に關する方面ならば、これ即ち淨緣起であるから、本識は損ぜらるゝことになり遂に轉依を得るに至るのである。これによつて知らるゝ如く、染汚淸淨分の依他性が染汚分としてのみ顯はれた場合が生死輪轉であり、之に反して淸淨分としてのみ現はれた場合が轉依であり、前者は分別性、後者は眞實性たるのである。從つて此簡潔な本文の中に唯識說の要領が述べられて居るのである。然るに本文最後部に轉依の義には五種を具すとあるが、これ恐らく三無性論の二執及轉依の下に於て轉依は位に約せば一分轉と具分轉と有動轉依と有用轉依と究竟轉依との五種ありといふを指すのであらうと思はるゝも次の滅差別相の中に解說するが如しといふて其說明解釋を讓つて居る滅差別相とは何れを指すか明瞭でない。瑜伽論の一部を指すか攝大乘論の一部を指すか何かであらうと想像せらるゝも目下的確に何れと決定するを得ぬ。

第二部に於て攝大乘論を大論と呼むで其中に說く十一識を此論の顯識と分別識とに配當して居るが、今之を表示すれば次の如くなる。上欄に攝大乘論の十一識の名稱を擧げ下欄に此論のいふ所を擧げて對照しよう。

一、身識、謂眼等五界——一、身識、謂轉作似身……即是五根……眼根界等……。
二、身者識、謂染汚識——(一)有身者識、我見所覆……此識爲生死身。
三、受者識、謂意界——(二)受者識、意界名受者、識即三品意識。
四、應受識、謂色等六外界——二、塵識、或應受識、有六種、色界等乃至識塵。
五、正受識、謂六識界——三、用識、六種、眼識界等即是六識。
六、世識、謂生死相續不斷——四、世識、有三種、即過去現在未來也、生死相續不斷故名世。
七、數識、謂從一乃至阿僧祇數識——六、數識、算計量度。
八、處識、謂器世界識——五、器識、略即器世界、謂外四大五塵、廣即十方三界等。
九、言說識、謂見聞覺知識——七、四種言說識、謂見聞覺知四種。
十、自他差別識、謂自他依止差別識——八、自他異識、謂依處各異、六趣不同、依處者身也、六趣身謂自他異識。
十一、善惡兩道生死識、謂生死道多種差別識——九、善惡趣生死識、一切生死不離生死。

顯識論解題

顯識論も眞諦三藏の譯出に係るが、其年代が明確でない。開元錄は陳代の譯となし、現行本に無相論より出づとあるが僞に、恐らく三無性論と同時に、無相論の一部分として譯したのであらうと推定せらるゝのみである。故に此推定よりいへば、三無性論と同じく、五六四年の譯出となるのである。

更に顯識論は開元錄には內題に顯識品といふと記し現存本にもかくなつて居るし、又宮內省圖書寮の舊宋版には此論の最後に顯識竟るとあるから、これ明に顯識品竟るの品を脫したものなるに外ならぬことが推定せらるゝが僞に、同時に顯識品と稱せられたことも判り、之によつて顯識論は無相論の一部としては顯識品、別行本としては顯識論と呼ばれたものなることが知らるゝのである。かく無相論の一部としてもまた別行本としても扱はれたことは恐らく眞諦三藏の當時からのことで、若し然らずとなすも、相當古い時代からのことである。淄州大師慧沼の唯識了義燈に名顯者無相論云爲顯五根四大等皆於此顯也ともまた名識者無相論云分別事識也ともある無相論が顯識論を指すに外ならぬことゝ六九五年に出來た大周錄以來經錄に顯識論とあることとは其證である。

現存顯識論は一見何人にも知らるゝ如く本文と釋文とから成つて居るもので、本文は初めの部で、國譯文に括孤內に第一として示した範圍であり、釋文は更に總釋と逐字釋とに分れ、總釋は第二として之を示し、逐字釋は第三となして置いたが、逐字釋は卽ち第一部の文を註釋したものである。最後部は廻文やゝ不足の如きも大體は完結して居ると見られ得る。此中第一部の趣意は「顯識は分別を起し、分別は熏習を起し、熏習は顯識を起す、故に生死輪轉す」といふ一偈に存するのであつて、此偈は解節經にあるとせらるゝも、現存の解節經にもまた其異譯解深密經にも深密解脫經にも見出されない。元來解節經の大本にあつたものが中頃其部が散逸したのであらう。此偈中顯識といふは論名にあるもので本識卽ち阿梨耶識を指し、分別は分別識で意識を指し、熏習は此二識の間に行はるゝのであるから、本識が分別識を生ずるのが種子生現行に當り、分別が熏習を起すのが現行熏種子に當ることになる理である。熏習は熏習せられた點でいへば習氣を指し、此習氣は分別識を起すものであるから其起す方面としていへば直に種子と稱

據る、二乘所在の有餘と無餘との涅槃は涅槃の故に不在なるも、更に心を起すこと有るが故に不在に非ず。是の故に應に知るべし佛智は無等なり。何を以ての故に。餘人の智は或は生死に著し、或は涅槃に著するも、佛は則ち爾らざればなり。此の智は能く一切衆生を利益す。何を以ての故に。能く自利々他を成就するが故なり。餘人の智は或は但自利のみ、或は兩利ならず、是義を以ての故に佛智は不可思惟なり、二處に著せざるが故なり、自他を利益する功能の爲に、般涅槃の爲に、般涅槃せざるが故なり。三無性品究竟す。

三無性論 終

に異るが爲なり。若し偏智を修すれば、則ち生死を捨てゝ自利々他すること能はず、故に正勤を起して二乘智を伏するなり。是を正勤差別の功用と名づく。[五]四には衆生の事を觀ずるに由りて生死を滅除すとは、若し菩薩が但自利のみを觀じて生死を滅除せば、則ち二乘に同じ、若し菩薩が但衆生のみを觀じて生死を滅除せずんば世間の凡夫の父母等に同じ、若し此の兩行に翻ぜば、則ち通じて自他の倶利を能くす、是を衆生の事を觀ずと名づく。[六]五には無比無上智を求むることを爲す、無比とは謂はく如來智なり、此の智は有爲にも非ず、眞如を以て體と爲すが故なり、無爲にも非ず、知見を以て體と爲すが故なり。

釋して曰はく、無爲にも非ず、知見を體と爲すが故にとは小乘が佛は涅槃に入りて後には復知見無く所爲作無しと敎ふるに異るなり。

[七]無上智とは[八]信比證至の四智の中に於て最究竟なるが故なり。故に菩薩の方便は二乘に異るなり。此の五の方便には卽ち五意有り、第一の方便は眞諦を體と爲し、第二の方便は俗諦を體と爲す。此の二は並に境の能く智を生ずるに據りて能生の境を取りて方便の體と爲す。第三の方便は正行を體と爲し、第四の方便は共利を體と爲し、第五の方便は依止を體と爲す。五意有りと雖亦四義を出でず、前の兩は是れ方便の緣緣、次の一は是れ正方便、第四は是れ方便の果、此の方便に由りて自他兩利を得るが故なり、第五は是れ方便の依止、亦名づけて因因と爲す、此の智に依りて方便が成ずるを得るが故なり。

[九]無二智に依止すとは因位の中に在つては生死涅槃の二處に於て無礙なり。何を以ての故に。衆生を愛し生死を愛せざるに由るが故なり。果位の中に在つては涅槃に入りて更に心を起す有り、小乘が佛は無心定に入りて還た更に心を起すと說くが如し。此の智は因果兩位に於て著不著無く、在不在無し。著不著無しとは凡夫二乘に異るが故に、生死涅槃に著せざるなり。在不在無しとは果地に

【五】四は衆生と生死とに關する說。
【六】根本智後得智を得ること。
【七】此の上に論曰を脫す。
【八】信比證至の中證は現量、比は比量、至は至敎量又は聖量、信は譬喩量。
【九】生死涅槃無二の智。

亦二相有り、謂はく寂靜と微妙と遠離となり、二に出世道境界にも亦二種有り。一には煩惱障を離れんが爲に四諦觀を修す。二には一切智障を離れんが爲に非安立諦觀を修す。此の二の境界は能く三障を除く、前は世間道境界を觀じて、凡夫障卽ち皮煩惱を除き、次は四諦を觀じて二乘障卽ち肉煩惱を除き、後は非安立諦を觀じて菩薩障卽ち心煩惱を除く、故に淨惑境界と名づくるなり。

此の如く所明は、聖行と四尋思と四如實智と四境界とにして、此の四道に由りて能く轉依を得るなり。

〔第十四、二種の轉依〕

復[一]二種の轉依有りとは三乘の轉依なり。

二乘は且く聲聞に約するに自ら二種有り、一には一向寂靜、二には迴向菩提なり。問うて曰はく、[二]後生を盡すの人にして云何にして無上菩提を受得せんや。答へて曰はく、化身に住して菩薩の道を修す、報身に住するには非るなり。聲聞の轉依は生死に背いて無流道を修す。獨覺も亦爾り、並に修習の所得なり。菩薩の轉依は正方便を修すると及び無二智に依止するとに由る。

正方便とは何ぞや。自ら五種有り。[三]一には無上法界に通達す、卽ち般若は如如を以て境と爲せばなり。二には法界に遍滿す、卽ち大悲は一切衆生を緣じて境と爲せばなり。[四]三には正勤功用、自ら二種有り、一に惑を伏し惑を攝す、二に智を修し智を伏す。惑を伏すは凡夫に異るが爲なり。若し惑にして多ければ、自ら利すること能はず、何に況んや利他をや、故に勤めて惑を伏するなり。惑を攝するは二乘に異るが爲なり。若し無惑の人にして一向に涅槃せば、則ち佛法を成熟し衆生を敎化すること能はず、是の故に菩薩は勤めて惑を攝留するなり。智を修するは凡夫に異るが爲なり。智を伏するは二乘

【一】二乘の轉依と菩薩の轉依とにて二種といふ。三乘の轉依と云ふも三種なるには非ず。

【二】後生を盡くすとは一向寂靜のものが灰身滅智の無餘涅槃に入りて再び生るゝが如きことなきをいふ。一向寂靜は通常一向趣寂又は單に趣寂といふ。寂又は寂靜はこゝにては身心都滅の無餘涅槃なり。

【三】一と二とは方便の體。

【四】三は惑と智に對する詳說。

り、此が生ずるが故に彼が生ず、彼に此は彼に於て別の事を爲さゞるを知る、卽ち別の事有るの執を破す。此を離れては彼は成ぜざるが故に、此は彼に於て無ならず。任運の功能は卽ち功能無きの執を破す。若し人にして此の勝智を得ば、卽ち作者の我執を除く。五には[四九]處非處勝智とは我自在の執を除くが爲なり。言ふ所の處非處とは謂はく他に繫屬して自在ならざるを義と爲す、是の所繫屬を說いて名づけて處と爲し、所繫屬に非るを說いて非處と名づく。處非處に七種有り、一には非愛、二には愛、三には淸淨、四には同生、五には增上、六には至得、七には行なり。衆生は此の七處に繫屬して自在を得ざるなり。一に非愛とは謂はく衆生が惡道に繫屬するなり。二に愛とは謂はく衆生が善業に繫屬して、善道に生ずるに屬せずと雖も而も必ず善道に生ずるなり。三に淸淨とは謂はく衆生が未だ[五〇]七覺を修せず[五一]五蓋を除かずんば、則ち苦邊を盡すことを得ること能はずして煩惱に繫屬し、淸淨法に於て自在を得ざるなり。四に同生とは謂はく二の如來と轉輪王とは決して一時に同一處に生ずるを得ざるなり、同生に於て自在を得ずして無等生に繫屬するが故なり。五に增上とは謂はく女人は轉輪王と作ることを得ざるなり、自在に繫屬するが故なり。六に至得とは謂はく女人は緣覺及び佛と作ることを得ざるなり、是れ所至得が大丈夫に繫屬するが故なり。七に行とは謂はく正見を具する人は殺等の惡行を作さずして、但凡夫のみ能く爲す。何を以ての故に。見諦に繫屬するが故なり。此の七は略說するに[五二]三繫屬有り、謂はく業と惑と生となり。初の兩繫屬は業、次の一繫屬は惑、後の四繫屬は生なり。若し人にして此の七の處非處に了達すれば、卽ち能く我自在執を除く、故に處非處勝智と名づくるなり。此の五を名づけて勝智境界と爲す。勝智とは卽ち是れ人空智なり。此の五法門は五種の人我空の義を顯はすが爲なり。

【丁】　第四に淨惑境界とは二種有り、一には世間道境界、二には出世道境界なり。世間道境界に復二種有り。一には[五三]下地にして三相有り、謂はく麁動と憂逼と厚障となり。二には[五四]上地にして

【四九】處はコトワリの意。是處ともいふ。非處は其反對。他に繫屬して自在ならずとは繫屬と不自在とは元來は同一意味。例へば惡業の因あらば必ず惡果を得べく、かく因に繫屬し、決して自由に善果を得るが如きこと能はざるをいふ。

【五〇】念、擇法、進、喜、輕安、定、捨を七覺支とす。

【五一】貪、瞋、睡眠、掉悔、疑の五。

【五二】十八空論に處非處を三種に分類して居ると同じ。

【五三】下地より上地に對す、卽ち欲界より初禪に對し、乃至、無所有處より非想非非想處に對するが如し。

【五四】上地を下地に望めていふ。

は本來體有り、無明等を緣として生ずと執す、是を[46]增果と名づく。減果とは謂はく行等の無明等より生ずるもの有ること無しと執す、是を減果と名づく。增事とは謂はく無明等は別に功用の無明に異り亦行にも異るも有るに由り、別に此の用有るが故に、無明は方に能く行等を生ずと執す、是を增事と名づく。減事とは謂はく無明等は功能有ること無くして能く行等を生ず、何を以ての故に、但無明在るのみに由るが故に說いて行の因と名づく、功能に由るにあらずと執す、是を減事と名づく。若し此の三處の增減を離るれば、是を無增無減の十二緣生と名づく。問うて曰はく、何が故に但行は因に由りて生じ[47]自に由りて生ぜざることに據るのみにして、無明の因等に由ることを說かざるや。答へて曰はく、行は既に因有るが故に偏に此の行の義が無明に至るを言ふなり。無常と無事と有能とを因緣相と爲すとは、無常とは謂はく法の未有の有と已有の滅となり。若し此を以て因と爲さば、能く不平等因及び無因の執を破す。何を以ての故に。未有の有は無因の執を破し、已有の滅は常因の執を破す、故に此の無常を名づけて有因及び平等因と爲す。無事とは謂はく一切の有法の同類因の聚集なり。此の聚集より先には未だ果有らずして今生ずることを得、此の同類因は唯聚集有るのみにして、能く後果を生じ別の功用無し、是を無事と名づく、此を以て因と爲さば別に事有るの執を破す。言ふ所の同類とは謂はく因果相似なり、因が無常なるが故に果も亦無常なり。有能とは此が有るに由るが故に彼が有り、此れが生ずるに由るが故に彼が生ずるなり、然るに彼の有と彼の生とは彼は此に由りて自にも由らず他にも由らず、決定して此に由るが故に、故に此は彼に於て[48]決して功能有るなり、是を有能と名づく。此の如く無明は彼の行等を生じ、行は自生せずして、無明より生ずるに由るが故に、彼は此に由りて自に由らずと言ふなり。自在等に由りて生ぜざるが故に他に由らずと言ふなり。此が有るに由るが故に彼が有りは無因の執を破し、此が生ずるに由るが故に彼が生ずは常因の執を破す、常法は無生なるが故なり。此が有るに由るが故に彼が有

【四六】以下十八空論參照。

【四七】原文には因とあり。

【四八】決定しての意。

して是の如く界を了別すれば、則ち我を執して諸法の生因と爲さゞるが故なり。界勝智は能く我を執して因と爲すを除く。三には入勝智、受者我の執を除くが爲なり。入に十二種有り、言ふ所の入とは受用の爲の入門の義なり。何を以ての故に。眼等の六根は能く苦樂捨の三受を受用する爲の入門にして、色等の六塵は能く怨親中〔三九〕人の三〔四〇〕想を受用する爲の入門なればなり。言ふ所の受用とは是れ因の義なり、入門は是れ根塵なり、是の故に六根は能く受用の受の門と爲り、六塵は能く受用の〔四〇〕想の門と爲る者なり。此の根塵は更に別法の之を名づけて門と爲すもの無し。若し人にして此の入に了達すれば、卽ち我を執して受者と爲さゞるなり。問うて曰はく、外道が我を執して受者と爲すは何れの相なりや。答へて曰はく、別に一我有りて能く根塵を受用し苦樂等を覺知すと執するなり。故に佛は此の受者を破するに內根外塵を籍りて、能く因緣と作りて受を受用し苦樂を覺知することを明すなり。四には緣生勝智、我を執して作者と爲す見を除くが爲なり。〔四一〕緣生に十二種有り、謂はく無明乃至老死なり。緣生に兩義も有り亦三義も有り。兩とは一には不增、二には不減なり、謂はく因と果と及び事との三種に於て不增不減なるなり。三義とは謂はく無常と無事と有能となり。此の三を因緣の相と爲す。〔四二〕增因とは謂はく常住の法を執して行等の因乃至一切の不平等の因と爲すなり、謂はく〔四三〕微塵自性自在天等が能く行乃至老死を生ずとなり、是を增因と名づく。不平等と言ふは彼が執すらく因は常、果は無常、因は他より生ぜずして但能く果を生ずるのみと、因果が相似せざるが故に不平等なるなり。〔四四〕減因とは謂はく、諸行は自然にして有りて因より生ぜずと執するなり、是を減因と名づく。通じて增減と名づくるは若し因の用を論ぜば〔四五〕決して須らく無常と無事と有能との三種が增減すべからざるべきも、若し外道が別に常等の法乃至微塵が能く行の因と爲る有りと執せば、此の三義を長ずるが故に名づけて增と爲し、又外道が行等は自然にして有り因より生ぜずと執せば、則ち三義が頓に闕く、是を減因と名づくるなり。增果とは謂はく行等

【三九】人は入の寫誤かと思はる。

【四〇】想は相の意味ならん。

【四一】緣起に同じ、十二因緣なり。

【四二】常住のものを因と立つること。

【四三】外道の立つる因、微塵は原子。自性は自然、自性上自然に成つて居ると爲す無因論か或は數論派が自性神我の二元を立て自性より萬物生ずとなす自性か何れかを指す。自在天は大自在天外道の立つる唯一常住の創造神。

【四四】無因論。

【四五】決定しての意。

【乙】第二に治行境界とは自ら[三一]五種有り、一には不淨觀、二には無量心、三には因緣觀、四には分別界、五には出入息念なり。初の不淨觀とは四種の欲を除く、謂はく色と相貌と威儀と觸との欲なり。無量心とは即ち四無量觀にして四種の瞋を除く、謂はく殺害と逼惱と嫉妬と不安となり。因緣觀とは即ち十二因緣觀にして三世の無明を除く。分別界とは即ち界入觀にして我我所を除く。出入息念とは[三二]覺觀を除く。廣く解すること[三三]諸義科の釋の如し。

【丙】第三に勝智境界とは自ら五種有り、一には[三四]陰勝智、聚の中にて一を執する我見を除くが爲なり。陰に[三五]三義有り、一には多、謂はく三世不一なり、二には異、謂はく色等の差別なり、三には和合、謂はく一處に聚集するなり。是の故に若しくは多にても若しくは異にても和合して一世間と爲るを說いて名づけて集と爲す。外道の我を執するに三義有り、一に我は常なりと執するが故に三世の義を以て破す、二に我は一なりと執すれば差別の義を以て破す、三に我は實有なりと執すれば和合の義を以て破す。若し人にして此の三義を見れば、則ち聚の中に於て一我の執を起さず。二には界勝智、我を執して因と爲すを除くが爲なり。界に十八有り、所立の界は種子の義を顯はす、眼等の六界は是れ[三六]能執の種子なり、自類の中に於て[三七]似分因と爲るが故なり。前の眼等の根が後の眼等の根を生ずるが如し。色等の六界は是れ[三七]所執の種子なり、自類の中に於て似分因を生ずるが故なり、前の色等が後の色等を生ずるが如し。眼識等の六界は是れ執種子なり、自類の中に於て似分因を生ずるが故なり、前の眼識等が後の眼識等を生ずるが如し。三種の無明を除くが爲の故に身中に於て三種の種子を顯はすなり。三の無明とは[三八]一には作者を除くが故に能執の種子を說き、二には業無明を除くが故に所執の種子を說く。何を以ての故に。但是の色等のみを所作の業と爲し、色等を離れて別の業無きが故なり。三には事無明を除くが爲の故に執種子を說く。何を以ての故に。但眼等の六識のみを以て作業の事と爲し、此の識等を離れて別事有ること無ければなり。若し人に

【三一】此等の名目は阿含經以來普通に小乘論藏に於て行はれて居るものである。

【三二】覺觀は尋伺の舊譯。

【三三】何を指すか明確ならず。之が明ならば本論と他論との關係を知るに便であらう。

【三四】十八空論參照。

【三五】中邊分別論に於ける多と總と和合とに一致す。十八空論を見よ。

【三六】能執種子所執種子執種子については十八空論參照。

【三七】之に對する他語見當らず。文字通りに解して可ならん。

【三八】作者無明ならん。眼等を作者と爲して其然らざるを知らざる無明、十八空論參照。

なり。[二七]眞諦に由るが故に無色なり、[二七]俗諦に由るが故に非無色なり、中に於て色を假設するが故に、有非有の如く色非色の如し。是の如く可見不可見と有礙無礙との諸餘の差別の道理も應に知るべし。菩薩が若し此の假が離有離無の二性なるを知れば、是を義の差別を尋思して得る如實智と名づく。是を尋思が四種の如實智を得るは聞思慧の中に在りと名づくるなり。

〔四〕 第四に四種の境界とは一には遍滿境界、二には治行境界、三には勝智境界、四には淨惑境界なり。

〔甲〕 遍滿境界とは復四種有り、一には有分別相、二には無分別相、三には種類究竟、四には正事成就なり。有分別相と及び無分別相とは謂はく境界類なり、亦[二八]等分とも名づく、是れ正定位なり。境は卽ち[二九]毘鉢舍那の緣緣なり。境界類とは謂はゆる唯識なり。何を以ての故に。一切の世出世の境は唯識に過ぎず、是れ如量の境界なるが故なり。此の如量に由りて是の故に徧滿なり。亦等分とも名づくとは此の唯識は外境に由りて成ず、外境が既に無なれば、唯識も亦無なり。境は無相にして識は無生なればなり、是れ一切諸法は平等にして通ずるに如理を以てするが故なり、故に等分と名づけ、稱して徧滿と爲す。是れ靜定の境界なりとは凡夫二乘の所得の定を過ぎたるが故に名づけて靜と爲し、散心の所緣の境に非るが故に名づけて定と爲すなり。若し菩薩にして甚深觀に入れば方に此の理を見る、故に靜定位の境と言ふなり。此の中にて若し毘鉢舍那が勝るときは立てゝ分別と名づけ、若し[三〇]奢摩他が勝るときは立てゝ無分別と名づく。此の分別と言ふは分別性なるには非ず、但無分別智のみを說いて分別と名づくるなり。第三に種類究竟とは前の分別無分別の境に於ける如量如理の二種の品類にして一切の眞俗を攝し究竟して皆盡く。故に徧滿と名づくるなり。第四に正事成就とは謂はく菩薩諸佛の轉依と無分別智の所緣とを名づけて正事と爲し、更に治すべからざるが故に成就と名づく、境智を攝して皆盡くが故に徧滿境界と名づくるなり。

〔二七〕 こゝにも眞空俗有の思想があらはれて居る。

〔二八〕 一切諸法が平等に眞如を本位と爲す點を指す。

〔二九〕 vipaśyanā。觀なり。

〔三〇〕 śamatha。止なり。

菩薩は如實に此の名を知る。是を名を尋思して得る如實智と名づく。

釋して曰はく、如實に此の名を知るとは兩種の如實知有り、一には世間の如實知に約して三義の爲の故に名を立て、二には出世の如實觀に約し、此の名は類に約すが故に起るも、類は不可得なるが故に名も亦不可得なるなり。

論に曰はく、二に類を尋思して得る如實智とは菩薩は義類を尋思して、一切の言說を離れ、言說すべからず。色等の類の一切の言說を離るゝを見るとは菩薩は依他の類の但亂識のみなるを觀て分別性を見ざるが故に、一切の言說を離ると云ふなり。言說すべからずとは此の亂識を尋ぬるに分別に由りて起る、分別が既に無なれば、亂識も亦滅す、卽ち是れ眞如にして言語を絕するが故に、言說すべからずと云ふ。是を菩薩の義類を尋思して得る如實智と名づく。

三に自性を尋思して得る如實智とは菩薩は色等の類に於て自性假を尋思するに、此の類は自性有ること無く、自性假に由りて自性有るに似るのみなり、菩薩は如實に此の自性が幻と化と影と響と水月と像と等の如くに體は實には有に非ずして而も有に似て顯現するを見る、此等の如くに自性を尋思して得る如實智は甚深の義を境と爲すを以てなり。何を以ての故に。倶に名と類とを遣つて一時に空なるが故なり。

釋して曰はく、前の一の尋思は但名を遣るのみなれば、此れ則ち淺と爲す。第二の尋思は次に類を遣れば中に居るを得べし。今の第三の尋思は能く名と類とを倶に遣るが故に、甚深の義を境と爲すと言ふなり。

論に曰はく、四に差別を尋思して得る如實智とは菩薩は差別假を尋思し、色等の類の中に於て差別假無二なるを見る。何を以ての故に。此の色等の類は非有非無なるが故なり。言ふ所の如き體は成就せざるが故に非有なり。言ふべからざるを體と爲すこと[二六]決して成就するに由るが故に非無

【二六】決定しての意。

れ能顯にして、類は是れ所顯の義類なり。若し名と類とが互に相是ならずんば、是れを名づけて客と爲す、此を則ち異と爲す。亦不異をも見るとは十無倒の中に解せるが如し。若し名と義と相應せば、次第に依りて數數修習することを說く、此の名は卽ち能顯の類にして、名づけて不異と爲す。又菩薩の尋思は名と類とが若し異ならば、一切世間の法は此の名と類とを出でず、菩薩が已に各尋思するに、名は名を成ぜず、類は類を成ぜず、此の二の根本が既に成就せざれば、合して自性と爲すも亦成就せず、二の自性中に就いて離れて差別を爲すも亦成就せず。

論に曰はく、故に[二一]論に云はく、菩薩は名と[二二]類との異を見、亦不異をも見る、[二三]異を見れば名を離れ類に約して同じからず、[二四]不異を見れば自性及び差別に約して合す、名と類との所成なるが故なり。此の四種は是れ菩薩の所尋思の境界なり。

釋して曰はく、境界は四種を出でず、一には名、二には類、三には自性、四には差別なり。名は但分別性のみなるも、類と及び自性と差別とは寄りて二性に通ずるなり。名の本を類と名づく、類が既に成ぜざれば、名も亦立たず、此の名と類とを合して以て自性と爲すも、自性も亦立たず、此の自性を離れて以て差別と爲すも、差別も亦成ぜず、依他は立たざればなり。

[三]　論に曰はく、第三に[二五]四種の如實智とは、一には名を尋思して得る如實智、二には類を尋思して得る如實智、三には自性を尋思して得る如實智、四には差別を尋思して得る如實智なり。一に名を尋思して得る如實智とは、菩薩は名を尋思して但名のみを得るも名の體を得ずして、菩薩は如實に此の名を知る。世間が類の中に於て此の名を安立するは凡そ三義の爲なり、一には想の爲、二には見の爲、三には說の爲なり。色等の類の中に於て世間が若し色等の名を立てずんば、則ち人の能く此の物の名色を想すること無し。若し想する能はずんば、則ち增益の見と執とを起すこと能はず。若し見無く執無くんば、則ち宣說すること能はず。是の義を以ての故に世間は名を立つるも、

[二一]　何れの論か明確でない。或は三無性論自身を指すか或は瑜伽論を指すかとも解せらる。

[二二]　類は義類の類なる故義に同じ。

[二三]　異を見るは離相觀にして四種の中の初二。

[二四]　不異を見るは、合相觀にして四種の中の後の二。

[二五]　四種尋思の結果たるものなり。

相無名なるが故なり。眞實性に於ても亦安立すべからず、相を離れ生を離れたるが故なり。此の假名は但所作のみを增加する法にして、體には增無く減無きが故なり。菩薩の尋思は但自性假のみを見て、自性を見ざるなり。

釋して曰はく、自性假を尋思すとは五陰を安立するを名づけて自性と爲す、菩薩の尋思は唯自性が家の假を見るのみにして、自性を見ず、故に餘物を見ずと言ふ、餘物とは卽ち是れ自性なり。何を以ての故にの下は此の色陰等の假名は亂識の中に於て安立すべからざることを釋す、卽ち是れ分別を安立すべからざるが故なり。相を離れ生を離ると言ふは、相を離るは分別性を離るゝなり、生を離るは依他性を離るゝなり。此の假名は但所作のみを增加すとは、若し陰の體を究盡すれば、唯一の如如の體にして增減無きなり。若し立てゝ亂識と爲さば、已に是れ一重の增加なり、亂識の中に就いて更に復分別して立てゝ五陰と爲すは、復是れ兩重の增加なり。

菩薩の尋思は唯自性が家の假のみを見て、假が家の自性を見ざるなり。

論に曰はく、四に[一七]差別假を尋思すとは謂はく菩薩は尋思するに但差別假のみを見て、餘物を見ざるなり。何を以ての故に。此の假は無名無相なるが故に、無相無生なるが故なり。菩薩は名と類との相貌の異を觀、亦不異をも見る。異を見るとは謂はく[一八]名義俱客なるなり、不異とは十無倒の中の[一九]名句味有義無義の無倒を解する中に釋せるが如し。

釋して曰はく、差別假とは五陰の中に於て更に復分別して諸法の名を立つるなり、色陰の中に於て開いて根大等と爲すが如し。菩薩の尋思は唯差別が家の假のみを見て、假が家の差別を見ず、故に[二〇](餘)物を見ずと言ふなり。何を以ての故にの下は此の差別は若し亂識を指して差別と爲すも、卽ち無名無相にして、若し眞實性を以て差別と爲すも、則ち體は是れ無相なることを釋するなり。菩薩は名と類との相貌の異を觀亦不異をも見るとは、名と類と言ふは名は是

【一七】此處に云ふ差別假の差別は自性に對する種々の差別である。

【一八】名義互客の意味。

【一九】中邊分別論無上乘品第七の中の無倒十種處の第一名句味無倒の說を指す。

【二〇】餘を補ふべし。

に於て尋思するに、但名言のみを見て、名の體を見ざるなり。何を以ての故に。名は本にして能く色等の諸義を顯はすも、此の色等の義は相に約し生に約するに既に成熟せざれば此の名は則ち顯はす所無ければなり。名が既に義を顯はすこと能はざれば、不名と何ぞ異らん、故に名を成ぜずと名づく。而も此の名は色等の類と同と爲すや異と爲すや。若し同ならば、色等が既に無なれば、名も亦同じく無なり。若し異ならば、世界は則ち無なること兎角等の如し。何を以ての故に。有物は分別依他の二性を出でざるが故なり。是の菩薩の尋思は名言を聞くも名體を見ず。此の體と謂ふは即ち名を指して體と爲すなり。二に義類を尋思すとは謂はく菩薩は義類を尋思するに、但唯類を見るのみにして、餘の義を見ざるなり。何を以ての故に。菩薩は義を尋思すればなり。此の義は所顯の如く是の如く有ならず、但亂識有るのみにして名無く相無し、名づけて類を見ると爲す。此の類の所緣は既に無し、能緣も起らざるが故に、菩薩は義類を尋思して但無相無生の眞實義類を見るのみなり。

釋して曰はく、義類を尋思すとは、言ふ所の[一二]義とは五陰の中に[一三]各別義有るが如し、名の爲に顯はるゝを之を名づけて義と爲す、色が眼に對するを以て義と爲すが如し。言ふ所の類とは、若し色等の[一四]義類を指すも亦[一五]類と名づくるを得んも、今は則ち爾らず。菩薩が此の五陰は是れ分別の所作なりと觀ずるに、但是の亂識のみを卽ち識類と名づく。若し始終に語を作さば、正しく此の亂識が家の無名無相を取りて之を名づけて類と爲すなり。此の類は是れ所緣にして既に無なれば、能緣は起らず、故に菩薩は此の類を尋思して、但無相無生の眞實義類を見るのみと云ふなり。

論に曰はく、三に[一六]自性假を尋思すとは謂はく菩薩は自性を尋思するに、但假のみを見て餘物を見ざるなり。何を以ての故に。此の色等の自性假名も亂識の中に於て安立すべからざればなり、無

【一二】義（artha）には廣くは道理と境界と義利と體性との四種の意味がある。
【一三】色受想行識の一々を云ふ。
【一四】原文は義の代りに氣とす。氣類にては意味通ぜず、又佛教語としてかゝる熟字なし。明に義類の寫誤なり。故に改む。
【一五】こゝの類は相分影像の如く解すべし。
【一六】自性の假なることを指す。

對治品に說くが如し。三には神通行、謂はく[六]六神通なり、總じて說いて一神通行と爲す、能く受化の衆生をして歸向尊重して眞理に入らしむるが故なり。此の六通は卽ち是れ三輪なり。一に身通、卽ち身通輪にして、能く輕擧し遠至し轉變し隱顯して衆生をして歸向心を起さしむ。二に記心輪、謂く天眼天耳他心にして能く彼の思惟覺觀を見、如實に記說して尊重を起さしむ。三に正教輪、卽ち[七]流盡通にして苦を離れ集を斷じ滅を證し道を修せしむ。宿命の一通は通じて後の兩輪に有るなり。四には成熟衆生行、謂はく[八]四攝法なり、總じて說いて一成熟衆生行と爲す。此は已に理に入れる衆生の爲に更に財法兩施の攝を以て成熟せしむることを明す。財攝とは是れ利益の方便にて成熟せしむることを爲し、法攝とは覺悟起行隨順の方便にて成熟せしむることを爲すなり。

釋して曰はく、布施の攝は其をして成熟せしむるなり。成熟とは逐位淺深なり。愛語の攝は其をして覺悟せしむ。利行の攝は其をして起行せしむ。同利の攝は其をして隨順せしむるなり。

論に曰はく、復次に、此の四攝は五種の攝に約して名づけて攝類と爲す。五とは一には攝して自家と成す、謂はく財施を以て怨中の人を攝し、憎恚を捨てゝ己が親屬と成らしむ、故に一家と名づく。二には教を受けしむる攝、謂はく愛語を以て自家の人を攝して正教を受けしむ。三には正勤を起すの攝、謂はく利行を以て受教の人の未だ正行を起さゞるを攝して如理に勤行せしむ。四には善を成熟する攝、謂はく重ねて利行を以て正行者を攝し、[九](令)未捨をして捨てしめ、未得をして得しむ。五には解脫善の攝、謂はく同利を以て第四人を攝して惑障及び一切智障を解脫せしむ。

釋して曰はく、或障を解脫するは卽ち二乘人にして、一切智障を脫するは、卽ち大乘の佛菩薩なり。

〔二〕論に曰はく、第二に[一〇]四種の尋思とは、一には名言を尋思す、二には義類を尋思す、三には自性假を尋思す、四には差別假を尋思するなり。[一一]一には名言を尋思すとは謂はく菩薩は名の中

【六】神境智證通、天眼智證通、天耳智證通、他心智證通、宿命智證通、漏盡智證通。

【七】漏盡通と同じ。

【八】次の釋文にあり。

【九】令の字あれど衍ならん。

【一〇】四種の尋思は次の四如實智と共に唯識說上重要視せられるものである。

【一一】第一と第二とは名義が相互に客たることより理解し易し。

能はずして、一向清淨常住無變なるが故に成就と名づくるなり。二には自性不可思惟、謂はく此の轉依は色に卽して自性と爲し、色に離れて自性と爲すこと皆不可思惟なり、是の如く、乃至、識及び六入四大三界六道十方等、若しくは卽、若しくは離、皆不可思惟なり。[二]佛性の中に廣く解するが如し。三には寂靜不可思惟、謂はく此の轉依は樂住の中に於ても不可思惟、靜住の中に於ても不可思惟なり、是の如く、乃至、有心住と無心住と聖住と天住と梵住と佛住と等にても皆不可思惟なり。四には功德不可思惟、謂はく此の轉依は略して如來の功德を說くに六種有り。一には圓滿、二には無垢、三には無動、四には無等、五には利他を事と爲し、六には勝能なり。

釋して曰はく、八住の中にて、一に樂住とは謂はく三禪[三]以還なり。二に靜住とは四禪以上なり。三に有心住とは謂はく有心定なり。四に無心住とは謂はく無想定及び滅盡定なり。五に聖住とは謂はく一切無流觀なり。六に天住とは謂はく初禪より[四]非想に至るまでなり。七に梵住とは梵は無量を言ふ、謂はく[五]四無量定なり。八に佛住とは謂はく佛の生死に住せず涅槃に住せざる住無住處涅槃なり。

〔第十三、四種の道〕

論に曰はく、四種の道有りて能く轉依を得、何等をか四と爲す。一には四の聖行、二には四種の尋思、三には四種の如實智、四には四種の境界なり。

【一】初の四の聖行とは一には[一]波羅蜜、謂はく[二]十波羅蜜なり、總じて說いて一波羅蜜行と爲す、大乘に趣向するが故なり。此は利他の因を明す、亦緣因緣とも名づく。波羅蜜の義は[三]中邊論の障品に釋するが如し。二には道行、謂はく[四]三十七品なり。總じて說いて助道行と爲す、能く境界の眞實義を覺了するが故なり。此を自利の因と名づく、亦緣廣明道品とも名づく。[五]中邊論の修

【二】佛性論かとも思はるゝが、佛性論の中にはかゝる廣解が無いから、佛性義を指すのであらう。佛性義三卷、眞諦三藏譯、現存せず。

【三】以還は以下の意。故に初禪二禪三禪なり。

【四】非想非非想處をいふ。

【五】慈悲喜捨の四無量心。

【一】pāramitā。到彼岸、又は度と譯さる。

【二】施、戒、忍、精進、靜慮、般若、方便、願、力、智の十波羅蜜。

【三】中邊分別論障品第二。

【四】三十七道品。四念處四正勤四如意足五根五力七覺支八正道。

【五】中邊分別論修對治品第四。

釋して曰はく、身見の人は未だ諸陰を見ること能はず、故に諸陰の上に於て横に人我及我所を計す。若し人我及び所の空を得る時に、始めて我及び所を見ずして方に能く但是れ諸陰法のみなるを覺了すれば、諸法を覺了するに由るが故に法我は卽ち滅す。法を覺了すとは謂はく分別の無相と依他の無生と眞實の無性とを見るなり。法執が滅するを以ての故に隨眠の我見は悉く滅す、故に人我執は法我執より生ずることを知るなり。

論に曰はく、問うて曰はく、云何が未だ人法兩執を滅せざるに不淨品を立て、兩執滅し已るに方に淨品を立つるや。

答へて曰はく、依他性の中に於て我を執するは是れ分別性の熏習する所にして不淨品と名づく。若し依他の中に於て眞實性を修するの所熏習ならば名づけて淨品と爲す。若し不淨品を說かば謂はく有流界なり、若し淨品を說かば無流界なり。此の無流界は轉依を以て體と爲すなり。此の轉依は不可思惟にして、復二種有り。

轉依と言ふは位に約せば五種有り。一には一分轉依なり、謂はく二乘人は我見我愛が滅せるに依るが故に、無流相續して凡夫に異る、轉と名づくる所以は迴轉なり、前の凡夫の所依の有流に異るなり。二には具分轉依なり、謂はく[二]初地の菩薩が具さに人法兩空を得るなり。三には有動轉依なり、謂はく[三]七地已還は出入觀有るが故に之を名づけて動と爲すなり。四には有用轉依なり、謂はく[四]十地已還は事が未だ辨ぜざるが故に、功用を捨てざるが故に、有用と名づくるなり。五には究竟轉依なり、謂はく如來地は至得圓滿なるが故に究竟と名づくるなり。是を轉依と名づくるなり。

〔第十二、不可思惟〕[一]

不可思惟と言ふは自ら四種有り。一には成就不可思惟、謂はく一切惑と一切苦とが違害すること

【二】菩薩十地の第一、歡喜地。
【三】第七、遠行地。
【四】第十、法雲地。
【一】不可思議と同一。瑜伽論第七十四卷に、轉依は是れ常住の相にして不可思議なりとあり。

するを須つて、然して後に眞實性を見るなり。

論に曰はく、前の分別依他に五事有るに約して合して十種と成る。然る所以は能く二性五事の對治の依止緣緣と爲ればなり、三乘の聖道は是れ能對治にして、能く前の二性五事を除くが故なり。能く前の分別性の五事を除くとは一には分別性の無相なるを觀ずるに由るが故に、依他性が生ぜず、二には依他の不生に由るが故に、名言は則ち依無し、三には名[二](言)の不起に由るが故に、人法兩執は則ち生ずることを得ず、四には兩執の不生に由りて、相類及び麁重の二惑が則ち起らず、五には二惑の不起に由るが故に、即ち是れ眞を見、更に方便を修することを勞せずして眞實性に入るなり。聖道を得るに由るが故に、分別性の五事は永に復起らず。依他の五事を除くとは、一には聖道に由るが故に依他煩惱の體が除滅す、二には體が滅するに由るが故に分別及び眞實の兩性の依止と作らず、三には體無に由るが故に能く人法兩執の名言の依止と爲らず、四には體無に由るが故に能く兩執の麁重上心の依止と爲らず、五には已に眞如を見るが故に更に覓むることを勞せずして分別性の依止に入るなり。[三]

釋して曰はく、[四]依止處緣緣とは無分別の境の智の中に於て智を說いて依止と爲し、境を說いて緣緣と爲す、即ち是れ佛菩薩の轉依の義なるが故に依止緣緣と名づくるなり。

[一]〔第十一、二執及び轉依〕

論に曰はく、問うて曰はく、立空品の中にて人我執を破し、此の品の中にて法我を破す、此の兩執は並に何れの因より生ずるや。

答へて曰はく、人我執は法我執より生ず。何を以ての故に。此の人我執は要ず上心に由り、人我執が滅して後に、方に能く諸法を覺了するが故なり。

【二】言を入れて見るべし。

【三】以上二性の無相無性にて眞實性無性の眞如に體達するを明したるなり。

【四】前に依止緣緣とありたると同じ。

【一】此の節は二執と轉依とを釋して我執を空じ法執を遣ることを詳說する。

入る依止の事を作すとなり。

釋して曰はく、初は即ち能く義の體を生じ、次には能く義の上の名言を生じ、第三は即ち能く人法二相を生起し、第四は即ち能く煩惱を生じ、第五は即ち能く解脱す。前三は能く起惑得解の方便を作すことを明し、第四は正しく起惑を明し、第五は得解を明す。前は唯人法兩執を起すのみにして、此は則ち輕微なるも、此に由りて後に無量の惑を起し、此に由りて以後久久輪轉して方に能く依止たるなり。此の分別依他が眞實性に入ることを得るが故に、解脱を得るなり。

論に曰はく、依他性の五事とは、一には生じて煩惱の體と成ると、二には能く分別眞實兩性の依止と爲ると、三には能く人法兩執を起す名言の依止たると、四には能く人法兩執の麁重の依止と爲ると、五には能く眞實性に入る依止と爲るとなり。

釋して曰はく、一に生じて煩惱の體と成るとは、謂はく依他性は體有りて、分別性の體無きに異るが故に、能く煩惱の體と爲るなり。二に能く分別眞實二性の依止と爲るとは謂はく依他性が執して人法我と爲せば即ち分別性の爲に依止と爲る、若し依他性は分別に由りて起ると知れば分別が既に性相無きが故に、依他性も不生なり、不生なるが故に眞實性の依止と爲るなり、三に能く人法兩執を起す名言の依止たりとは、謂はく名言は必ず所依の依他性有りて起るが故に、能く人法兩執を起す名言の依止たりと言ふ。四に能く人法兩執の麁重の依止と爲るとは謂はく能く上心麁重を生ずる人法兩執なり。五に能く眞實性に入る依止と爲るとは謂はく依他性が不生なれば、即ち分別は無相なりと知りて、眞實性に入る方便と爲るなり。亦前に分別性の無相なるを解して即ち依他の無生に達し、眞實性に入る依止と爲るとも言ふを得るなり。夫の眞實性に入るは、初に聞思慧の中に在りて必ず具に分別性は無相にして依他性は無生なりと解

實相の攝と爲るのみなり。

釋して曰はく、初の二相が通じて三相の所攝と爲る所以は、初の名言相は卽ち是れ諸法の名字及び說にして、此の名言は是れ識の所作なればなり。識が名言の相に似て起れば卽ち是れ分別性なり。能分別の識は卽ち依他性なり。所分別の名言が旣に所有なければ、能分別の識も亦所有無し、卽ち是れ眞實性なり。是の故に初相は卽ち三性の攝なり。第二相も亦三性の攝なりとは、所言相は卽ち是れ名言所目の義なり、謂はく一切諸物も亦是れ識の所作なり。但識が物の相に似てのみ起ること有るは卽ち是れ分別性なり、能分別の識は卽ち是れ依他性なり。亦二が倶に所有無き、卽ち是れ眞實性なり。第三相は但分別性の所攝と爲るのみとは此れ名義相應の相なり、謂はく物の爲に名を立てゝ、物と相應せしめ、名に因りて物を顯はすを得るも、此の名義は實に所有なし、相の義無きが故に、但是れ分別性なるのみなり。第四相は但依他性の攝と爲るのみとは、此は名義の相に執著すれば其の能執を辨ずるが故に但是れ依他性なるのみ。所執を明かさゞるが故に分別には非ず、前は但所分別のみを出して能分別を出さゞるが故に依他に非ず。第五相は唯眞實性の所攝と爲るのみとは、此は名義の二相に執著せざれば、卽ち是れ境智無差別の阿摩羅識なるが故なり。第四第三も亦眞實性を離れざるも、但其の所立は正しく偏に一義を顯はすことを爲すなるのみ。

〔第十、三性の事用〕

論に曰はく、分別に各五種の事用有り。復次に、此の三性は應に知るべし一一の性の中に皆五事有り。分別性が五の事用を具すとは一には能く依他性を生ずと、二には依他性の中に於て能く名言を立つと、三には能く人法兩執を起すと、四には能く二執の麁重を成立すと、五には能く眞實性に

即ち是れ分別性依他性なり。復次に、此の性は實有なり、清淨の境界なるに由るが故なり。何を以ての故に。若し心が此の境を緣ぜば、即ち清淨を得るが故なり。復次に、此の性は實有なるが故に常住と名づけ、清淨の境界なるが故に名づけて善と爲し、常住なるが故に名づけて樂と爲す。

眞實無性なるが故に無性と說く。何を以ての故に。此の性は是れ一切の戲論法の眞實の體性なるが故なり。有を離れ無を離れたるが故に[三]無眞性と名づく。此の眞實性は是れ極地の境なるが故に、戲論を離れたるが故に、是の故に應に知るべし眞實性なり。次に依他の中に於て別の道理に約して眞實無性を分別す。若し眞實性の中に於てならば、則ち具さに眞實及び無性の兩義を說くことを得。何を以ての故に。體は是れ眞實にして是れ無性なるが故なり。若し依他分別兩性の中に於てならば、則ち但無性のみを說くことを得るも、眞實を說くことを得ず。何を以ての故に。分別依他は眞實に非るが故に兩體は是れ無性なればなり。若し無性ならずんば、則ち分別依他は眞實有を成ず。若し分別依他は是れ眞實なりと說かば、則ち無性の義無し。是の故に具さに眞實無性の兩義を說くことを得ざるなり。若し無性を說かば眞實性の義は然るべきも、若し依他分別の眞實無性を說かば、此は即ち不可なり。眞實の名が分別依他に濫ずるが故なり。

〔第九、五相と三相との相攝〕

問うて曰はく、[一]經中に五相有りと說く、一に名言相、二に所言相、三に名義相、四に執著相、五に非執著相なり。又三相を說く、謂はく分別相、依他相、眞實相なり。此の二處の相攝は如何。五が三を攝すと爲すや、三が五を攝すと爲すや。

答へて曰はく、今三相に約して五相を分別すれば、應に知るべし五相の中の前二相は通じて三相の所攝と爲る、第三相は偏に分別相の攝と爲る、第四相は但依他相の攝と爲るのみ、第五相は唯眞

【三】無眞性は眞が無いの意にあらずして、無の眞の性の意。故に眞實無性と同じ。

【一】何れの經か明確でない。

卷の下

〔第八、眞實性眞如〕

問ふて曰はく、此の七は云何が眞實性の攝に入るや。答へて曰はく、此の七種の如如は是れ讃す可く、最極にして二智の境界なるが故なり。二智とは卽ち是れ[一]如量如理智なり。此の智は是れ無流にして凡夫を過ぎたるが故に讃す可く、二乘を出でたるが故に最極なり。又是れ菩薩智なるが故に讃すべく、是れ佛智なるが故に最極なり。此れ無倒の義を顯はす、是れ無倒智の境界なるが故なり。復次に無戯論なるが故に名づけて眞實と爲す。無戯論とは相等に於て、一異の虛妄を離れたるが故なり。相等とは謂はく相、名、分別、正智等の四の攝なり、卽ち是れ五法藏の中の四法藏なり。云何が一異と說く可からざるや。皆過失有るが故なり。若し眞如が相等に異らば、三の過失有り、一には此の眞如は則ち相等の實體に非ず、二には修觀行人は則ち相等に依らずして方便を爲して眞如に通達することを得、三には眞如を覺し已つて則ち應に未だ相等の諸法に達せざるべし、相關せざるが故なり。若し眞實が相等と是れ一なるも、亦三過有り、一には眞如は旣に無差別なれば、相等も亦應に差別有ること無かるべし、二には若し相等を見れば卽ち眞如を見る、三には若し眞如を見るも淸淨なる能はず、相等を見るも則ち聖人有ること無く解脫を得ること無きが如く、涅槃世出世の異有ること無し。是の故に一異等の惑戯論を離るゝに由るが故に變異無し、變異無きが故に卽ち是れ眞實性なり。

問うて曰はく、此の性が若し一異を離るれば、有と爲すや無と爲すや。答へて曰はく、此の性は無と說く可からず。若し此の性無くんば、一切種の淸淨は不可得なり。何を以ての故に。[二]相結が眞實を成ずるが故に、是の故に此の性無きを得ざるなり。一切種とは卽ち如理如量智なり、相結は

【一】後得根本の二智。

【二】前にいふ相惑に同じ。

三用有ればなり。一に眞實義を見ると、二に惡法を除くと、三に能く寂靜に至るとなり。此の三が若し具足すれば。則ち道の用は圓滿す、故に正行は第四に在りと説くなり。此の七如如は即ち眞實性なり。

復次に、正行如如とは謂はゆる道諦なり。亦三義有り。一には知道、謂はく分別性に約す、此の性は無體なり、但應に須らく滅すべきこと有ること無きを知るべし、故に知道と名づく。二には除道、依他性に約す、此の性は有體なり、是の故に應に是れ煩惱の類にして所以に須らく滅すべしと知るべし、故に除道と名づく。三には證得道、眞實性に約す、此の性は是れ二空なるが故に、應に除滅するが故に得べきを知るべし。故に正行如如と名づくるなり。

此の七種は眞諦の體にして、即ち三無性なるが故に通じて如如と名づくるなり。

此の七の中に於て、前の三種は是れ非安立諦なり。何を以ての故に。此の三は但別名有るのみにして別體無きが故なり。生如如が先に在る所以は除滅すべしと爲すが故なり。相如如が次に居する所以は同じく是れ生が家の滅なるが故なり。識如如が後に在る所以は、是れ滅が家の方便なるが故なり。後の四如如は是れ[一三]安立諦なり。何を以ての故に。此の四は用に約して名を立て、用に四有るが故なり。體に約せずして名を立つるは、體は唯一味のみなるが故なり。依止が最も先なる所以は[一四]應知見の故なり。二義の應知は一には所知の境の多しと、二には但應に須らく更に餘義無きを知るべきとなり。所知の境の多しとは苦諦の中に於て無常苦空無我の四種の義有るが故なり、所餘の集等の三諦は但四名有るのみにして四義の異無し。何を以ての故に。集諦は但因の義のみを實と爲し、滅諦は但寂靜のみを以て實と爲し、道諦は但出離のみを以て實と爲し、所餘の有緣等の九義は皆是れ假名なればなり。二には但應に須らく更に餘義無きを知るべしとは苦は是れ業の果報にして、煩惱に非るが故に除く可からず、勝德に非るが故に證するを須ひず、正行に非るが故に修するを須ひず、但厭離の爲のみ、所以に須らく知るべし。是の故に更に斷證修等の義無きなり。若し此を知れば、即ち能く滅除す、是の故に邪行は第二に在り。惑が滅するに由るが故に清淨を證得す、故に清淨は第三に在り。清淨を證得するに由りて具足するが故に正行が圓滿す。何を以ての故に、道に

[一三] こゝに云ふ安立諦は三性たる點をいふのでなくして唯用に約する點のみで云ふ。從つて非安立純淨無性の阿摩羅識が體の方面に於て義によつて生相識の三如如で呼ばれ、用の方面で四諦に約して依止、邪行、清淨正行の四如如として名づけられたるに外ならぬ。

[一四] 知見せらるべきものゝ意。所知見又は可知見といふも同じ。

復次に、邪行如如とは謂はゆる集諦なり。集諦とは謂はく眞似の兩集なり。眞の集とは謂はく諸の煩惱にして、能く五陰をして相續して是れ有ならしむ。似の集とは謂はく諸の業にして、能く諸道の差別を得。集に三種有り、一には熏習集、謂はく分別性の類の惑が能く熏じて集を起すなり。何を以ての故に。分別の類の惑が能く集が家の因と作るに由るなり。二には發起集、謂はく煩惱及び業なり。何を以ての故に。此に由りて生起が成ずるが故なり。

釋して曰はく、此の發起集は即ち是れ依他性なり。依他性の體は即ち是れ煩惱及び業なり。此の性に由りて能く未來の五陰の自體を生起す、又分別性の爲に生ぜらるゝは即ち是れ自性なり、他を生ずるが故に發起集と名づくるなり。

論に曰はく、三には不相離集、謂はく集如如なり。此の如如の體は未だ障を離れざれば說いて集と名づく。何を以ての故に。此の如如は是れ集が家の性なるが故に、集の所障なるが故に集如如と說く。此の三は即ち三無性なるが故に如如と名づく。

復次に、清淨如如とは謂はゆる滅諦なり。亦三義有り。一には體相無生の滅、謂はく分別の類の惑は本より體相無きが故に名づけて滅と爲す、二には能執無生の滅、謂はく但亂識の類のみの惑は因に由り緣に由りて本生有ること無きが故に名づけて滅と爲す、三には垢淨二の滅、謂はく本來清淨と無垢清淨となり、分別性に約して本來無垢と說き、依他性に約して無垢清淨と說く、何を以ての故に。此の性は體有らば則ち能く染汚するも、道に由りて垢を除くが故に清淨を得ればなり。本來清淨は即ち是れ道前の道中にして、無垢清淨は即ち是れ道後なり。此の二の清淨を亦二種涅槃とも名づく、前は即ち[三]非擇滅にして自性本有、智慧の所得に非ず、後は即ち[三]擇滅にして、修道の所得なり。前に約するが故に本有と說き、後に約するが故に始有と說く、始めに始有と名づくることを顯はすが故に清淨如如と名づく。

【三】非擇滅擇滅については俱舍論等の說を見るべし。

六塵に依りて起されて、能く生死をして相續せしむるもの、此の類を出でず。二には集諦とは謂はく不顚倒知なり、此の六貪愛は決定して能く諸有をして相續せしむること眞實無倒なれば名づけて集諦となす。三には集聖諦とは謂く集一味にして、前に異らず、四諦は同じく三解脫門を以て一味と爲すが故なり。

六に淸淨如如とは謂はゆる滅諦なり、亦三種あり、一には滅類とは謂はく[九]四沙門果なり、卽ち是れ見思の兩惑が滅盡して生ぜざる、是れ其の類なり、二には滅諦とは謂はく不顚倒なり、此の滅類は決定して寂靜なり、是れ其の諦の義なり、三には滅聖諦とは謂はく滅一味にして、亦前に異らず。

七に正行如如とは謂はゆる道諦なり、亦三種有り、一には道類とは謂はく八聖道分なり、是れ其の類なり、二には道諦とは謂はく不顚倒なり、此の八は決定して能く集を出離す、是れ其の諦の義なり、三には道聖諦とは謂はく道一味にして、亦前に異らざるなり。

復次に、[一〇]依止如如とは謂はゆる苦諦なり。苦諦とは謂はゆる行苦なり、無常なるを以ての故なり。無常に三義有り、一には無有無常なり。謂はく苦の分別性は永に所有無し、此の所有無き是れ無常の義にして眞實有なり、此の所有無きを[一一]眞如如と名づく。若し前無後無を以て無常と爲さば、此れ乃ち俗諦にして、不顚倒を名づけて如如と爲す眞如如に非るなり。二には生滅無常なり。謂はく苦の依他性にして、此の依他性は既に實有にも非ず亦實無にも非ず。實有に非るが故に是れ滅なり、實無に非るが故に是れ生なり。此の如く生滅は是れ無常の義なり。而も生は實の生に非ず、滅は實の滅に非ず、是れ眞如如なり。三には離不離無常なり。謂はく苦の眞實性なり。此の性は道前には未だ垢を離れず、道後には則ち苦を離るゝも、位に約して不定なるが故に無常と說く、體は變異せざれば名づけて如如と爲すなり。

【九】預流果、一來果、不還果、阿羅漢果の四。

【一〇】以下は成唯識論三性四諦相攝の部と比較すべし。

【一一】眞如如は眞如と同じ。單に如如にても同じ、眞を加へたるのみ。

故に攝無倒と稱す、無倒の故に如如なるなり。無倒如如は未だ是れ無相如如ならず。無變異とは此の亂識は卽ち是れ分別依他にして似塵識の所顯なることを明す。分別性が永無なるに由るが故に、依他性も亦有ならず、此の二の無所有なる卽ち是れ阿摩羅識識なり。[六]唯此の識のみ有りて獨無變異なるが故に如如と稱す。前に稱せし如如は但十二入を遣るのみ。小乘の辨ずる所の一切の諸法は唯十二入のみにして是れ顚倒なるに非ず。今大乘の義は諸入を破して並に皆是れ無とす、唯是れ亂識の所作のみなるが故なり。十二入は卽ち顚倒爲り、唯一の亂識のみは則ち顚倒に非るが故に如如と稱するも、此の識體は猶變異なれば、次に分別依他を以て此の亂識を遣るなり。唯阿摩羅識のみは是れ無顚倒にして、是れ無變異なり、是れ眞の如如なり。前の唯識義中にても亦應に此の識の說を作し、先に唯一の亂識を以て外境を遣るべし、次に阿摩羅識が亂識を遣るが故に、究竟して唯一淨識のみなり。四に依止如如とは謂はゆる苦諦なり。苦諦に三有り、一には苦類、二には苦諦、三には苦聖諦なり。苦類とは謂はく五取陰なり。此の五に依止するを說いて衆生と名づく、苦の所依止は此の五を出でざるが故に苦類と稱するなり。苦諦とは謂はく不顚倒なり。此の苦類は決定して聖意に違逆することを明す。此の義は是れ實なるが故に苦諦と名づく。聖人は此を緣じて決定して捨離を生じて染著を起さゞるなり。苦聖諦とは謂はく苦一味なり。此の苦諦は體性無きを以ての故に空なることを明す、空なるが故に無相なり、無相なるが故に無願なり、一法として願求す可き者無し。此れ通相に約して[七]三解脫の體が唯是れ一のみなることを辨ず。一切の諸法は此を離れざるが故に一味と稱す。聖は是れ正の義なり。此の一味は無倒無變なり、故に聖諦と名づく。初の苦類は卽ち是れ俗諦、次の苦諦は卽ち眞諦、無顚倒なるを以て、是れ安立眞諦なり、後の一は卽ち是れ第一義諦、無倒無變異なれば是れ非安立諦なり。[八]後去の三諦にても亦爾り。

五に邪行如如とは謂はゆる集諦なり。苦に例するに亦三あり、一には集類、謂く六種の貪愛なり、

【六】此の點は正觀唯識又は淨品唯識である。正觀唯識たる阿摩羅識を說く所は眞諦三藏說の特色である。

【七】三解脫門とも三三昧とも云ふ、直前にある空無相無願の三。

【八】以下といふと同じ。卽ち集滅道の三諦。

則ち無窮ならん、已生が復生ずれば、轉轉して討ぬるに、豈窮ること有るを得んや。若し爾らば、復兩失有り、一には但生ずるのみにして滅せず、則ち應に是れ常なるべし。二には若し多生有らば是れ多衆生ならん。若し爾らば、則ち因果は相發生するの義有ること無し。又若し恒に生ぜば則ち涅槃無し。若し滅が前に在りて生が後に在らば、既に未だ生有らざるに滅は何の滅する所ぞ。又應に先に涅槃して後に生死を受く、先に滅有るが故に是れ則ち解脫し已つて還た繫縛を受くるなり。是の故に生滅は前後有ること無く、亦分別依他をも離れざるが故に如如と曰ふなり。

二に相如如とは謂はく人法二空なり。此の二空の相を如如と名づくる所以に三義有り。一には戲論を離る。戲論とは謂はく眞と俗とを或は一なり異なり等と執する四謗を通じて戲論と稱す。若し眞と俗とを定んで一なりと執せば、則ち道を修するを勞せずして並に皆解脫し、悉く眞を見るが故に皆是れ聖人ならん。又若し眞と俗とが定んで是れ一ならば、則ち眞は俗を遣る能はず、義として既に俗を遣る能はず、俗の惑が除かずんば解脫の義無し、唯凡夫のみにして聖人有ること無し。若し眞は定んで俗に異ると執せば、則ち俗に依りて眞に通ずること能はず、眞は即ち會すべからず、方便無きが故なり、是の故に二空は此の戲論を離る。故に如如と名づく。二には是れ無分別智の境界なり。此の智は無顚倒なれば、俗諦にして境爲るに堪ふる者有ること無し。是の故に此の智の會する所は即ち是れ如如なり。三には是れ眞實性なり。若し此の性に違せば則ち生死を成じ、若し此の性に順ぜば則ち涅槃を得。此の性は一切法の眞性爲り、故に如如と名づく。是の故に二に相如如と名づくるは相空を言ふには非ず、乃ち相空を以て相と爲すなり。

三に識如如とは謂はく一切諸行は唯是れ識なるのみなり。此の識に二義あるが故に如如と稱す。一には攝無倒、二には無變異なり。攝無倒とは、謂はく[四]十二入等の一切の諸法は唯是れ識たるのみ、亂識を離れて外に別の餘法無きが故なり。[五]一切の諸法は皆識の攝と爲り、此の義が決定するが

【四】六根六境の十二處。
【五】此の點は方便唯識又は不淨品唯識である。

下に此の性の差別を明かす。
七種の如如は甚だ多義なり。生如如の中にて分別依他の用と因果と生滅との無前後の義を明せば
なり、
眞諦とは謂はく、[三]七種の如如なり、一には生、二には相、三には識、四には依止、五には邪行、
六には清淨、七には正行なり。
一に生如如とは謂はく有爲法の無前無後なり。有爲法は但兩性のみの攝なり、謂はく分別と依他
となり。此の法の無前無後なるに凡そ三種有り。一には二性に約して無前後を辨ず。若し依他性が
前に在りて分別性有ること無しと說かば、依他は成ぜず。若し分別が前に在りて依他性有ること無
しと說かば分別性は成ぜず。是の故に二性は遞互に相須ちて前後有ること無し、相成するを以ての
故なり。分別性が既に無なれば依他性は有ならず。二俱に無なるが故に卽ち是れ如如なるなり。二
には因果に約して無前後を辨ず。若し因が定んで前に在りて更に因とする所無くんば、則ち因を成
ぜず。若し因緣無くして、自然に因有らば、因は則ち無量なり。若し果が定んで前に在りて更に因
とする所無くんば、則ち因を成ぜず。若し因緣無くして、自然に因有らば、因は則ち無量なり。若
し果が定んで前に在りて既に因有ること無くんば、則ち果を成ぜず。若し因緣無くして自然に果有
らば、果は卽ち無窮なり。是の故に因果は定まること無く、前後轉轉相望す、前に望むれば則ち果
と爲り、後に望むれば則ち因と爲る、故に生死は無初なり。是の如く因果の體は卽ち分別依他なり。
分別が既に無なれば依他も有ならず。卽ち是れ如如なるなり。三には生滅に約して無前後を辨ず。
若し生が前に在りて滅が後に在らば、二の過失有り、一には則ち未だ老死有らずして已に便ち生を
得ん、二には則ち未だ此の生を捨てずして便ち彼の生を得ん。若し爾らば又兩失有り、一には生は
則ち用無けん、此が既に已生ならば何ぞ彼の生を用ひん、未だ報を捨てざるが故なり。二には生は

【三】十八空論の七種眞如と全く同一なり。

るなり。

問うて曰はく、此の性は云何が、知らず、有と爲すや、無と爲すや。答へて曰はく、此の性は所分別の如く是の如くに有ならざるが故に有とも言ふ可からず、一向是れ無ならざれば、亦無とも說く可からず。是の如く有ならざるが故に有にも非ず、一向無ならざるが故に無にも非ず。若し意を解せば、則ち一切種は並に皆說く可しと名づく、亦有とも說く可く亦無とも說く可く、亦亦有亦無とも說く可く、亦非有非無とも說く可し、皆相違せざるなり。問うて曰はく、此の有と言ふは是れ物有なりと爲すや假名有なりと爲すや。答へて曰く、具さに兩義有るが故に有と說く可きも、是の如く有ならざれば假名有と名づけ、一向無に非るが故に物有と名づく、謂はく物有るなり。問うて曰はく、既に說いて有と爲さば、是れ俗有と爲すや、是れ眞有と爲すや。答へて曰はく、皆是れ俗有なり。何を以ての故に。[三]無分別の境界に非るが故なり。

〔第七、俗諦と眞諦〕

問うて曰はく、俗諦は何の相ぞ。答へて曰く、俗諦に三相有り、謂く我說と法說と事說となり。我說とは謂はく我衆生壽者行者人天男女等なり。法說とは謂はく色受想行識等なり。事說とは謂はく見聞生滅等なり。此等を名づけて俗と爲す。俗が此の依他性の類を成立するなり。前の分別性にも亦四種有り、一には有を成立し、二には體相を成立し、三には事用を成立し、四には差別を成立す。廣く體相を明すこと已に[一]前說せしが如し。具さに事用を明し、後に別に更に說かん。今此の中にて先に在りて依他性有るを明す。此の性有るを顯はさんと欲するが爲の故に、惑品等の事用を擧ぐ、事用が體相に在る所以は[二]前に略して擧げたり。

論に曰はく、此の性の體は如何。下に更に略して體相を說かん。問うて曰はく、俗諦は何の相ぞ。

【三】無分別の境界は眞空妙有である。從つて俗有なりと云ふは俗有眞空の意。

【一】前節に存す。

【二】前節並に前前節に存す。

此の性は但言説を以て體と爲すにはあらず。何を以ての故に。言説は必ず所依有るが故なり。若し亂識の品類に依らずんば名言の立つを得ること是の處(ことわり)有ること無し。若し爾らずんば、所依の品類は旣に有ること無く、所説の名言は則ち立つことを得ず。若し爾らば、則ち[一]二性無し、二性無きが故に則ち惑品無し、惑品無きが故に則ち二過有り、一には功用に由らずして自然に解脱す、二には則ち生死涅槃は顯現すべからず。此の二の過失無きに由るが故に、是の故に應に知るべし、[二]決して依他性有り。

釋して曰はく、此の中にて名言には決して所依止有りと言ふは、依他性を所依と爲すを以てなり。依他性有るに由るが故に名言を立つるを得るなり。若し此の性無くんば則ち能く立つこと無し、是の故に此の中にて所依の品類の前に異るを明すなり。前は卽ち分別性の品類を以て名言の所依と爲す。

〔第六、依他性の體相〕

論に曰はく、此の性の體相は如何。

答へて曰はく、唯是れ相の類と及び麁重惑の類とのみなり。問うて曰はく、此の類を如何が説いて依他と爲すや。答へて曰はく、互に因緣と爲りて共に相成するが故なり、然る所以は相を緣ずるに由るが故に麁重が成ずることを得、麁重を緣ずるに由りて相の類が成ずることを得、故に此の兩類を説いて依他性と名づくるなり。何を以ての故に。異體無きが故に、並に依他性と名づく、義に約して終に同じからざるなり。問うて曰はく、若し爾らば、云何ぞ此の性は無生に由るが故に無生性と名づくるや。答へて曰はく、無生性と名づくることを得る所以は、他の力に由るが故に生ずるも、他が旣に體無ければ、自も能く生ずること無し、自も無く他體も無きを以て、是の故に無生な

【一】分別性依他性の二性。

【二】決定しての意、必ずといふと同じ。次の釋文の決しても同意味。

輕重を説かば、分別性は但是れ惑の緣なるのみ、惑と説くが故に説いて輕と爲す、依他性は正しく是れ惑の體なるが故に麁重と説く。相惑に由るが故に能く無分別智を障す、無分別境に合せずして、相貌を分別するが故なり。麁重惑に由りて正しく後生を感じ諸の苦等を得、兩は必ず相由つて有るが故に、二惑が衆生を繫縛すと言ふなり。

論に曰はく、若し人にして此の二性を得ず見ずんば、此の二惑より卽ち解脫することを得。得ずと言ふは、謂く分別性を得ざるなり、此の性は永く體有ること無きが故に所得無きなり。見ずと言ふは、[一]謂はく依他性を見ざるなり、依他性は體有りと雖心に相を緣ぜざるを以ての故に、此の性も亦有ならざるが故に、見ずと云ふなり。此の性が不得不見なる所以は、二種の道に由る、一には見道、二には除道なり。見道に由るが故に分別は卽ち無し、故に不得と言ふ、除道に由るが故に依他性は卽ち滅す、故に不見と言ふなり。

釋して曰はく、昔未だ理を見ざるに由るが故に邪分別を起して、非有を有と謂ふを、呼んで邪見と曰ふ。此の邪見に由りて能く治道を障ゆ、今既に理を見れば卽ち昔の所見は非有なりと達するが故に分別性は卽ち無しと云ふ、此の正道に由りて能く昔の邪見を除くが故に、依他性は卽ち滅すと云ふなり、昔の分別依他は更に兩體無し、今の見除の二道も亦一にして而も兩無きなり。

論に曰はく、是れを分別性の功用の成立と名づく、分別性に四義有ること畢る。[二]

〔第五、依他性の成立道理〕

此の次に依他性を成立することを明す、此の性の體相は已に前說せしが如し、今此の性を成就せしめんが爲の故に成立の道理を説く。

【一】原文に諸とあり、謂の寫誤ならむ。故に改む。

【二】以上にて分別性の無相なることを明し了る。

るが故に和合し、瞋に由るが故に遠離し、無明に由るが故に通じて此の兩を成ず、別の能を立てず。貪は是れ境を引くが故に和合し、瞋は是れ境を棄つるが故に遠離し、無明有るに由るが故に引棄有り、是の故に通じて二用を成ずるなり。次に名に依りて義を分別する等の五種の分別は分別の依止及び境界と差別の依止及び境界とを顯はすことを爲す。但分別性のみは後の八種の分別を攝し、三種の障事を顯はすことを爲す、謂はく自性と差別と聚の中の一執との此の三分別は能く心煩惱を生じ一切智障と爲る、我及び我所との此の兩分別は能く肉煩惱を生じ、解脱障と爲る、可愛と可憎と及び前の二に翻ずるとの此の三分別は能く皮煩惱を生じ、禪定障と爲る。此の[二〇]三煩惱は即ち三事類なり、心煩惱は即ち戲論事の類、肉煩惱は即ち我慢事の類、皮煩惱は即ち是れ欲等の惑の事の類なり、此の三事類は是れ依他性なり。

若し略說すれば分別は[二一]三種を出でず、一には分別の依止、二には分別の體、三には分別の境界なり。若し分別の體を說かば、謂はく三界の心及び心法なり、依止と及び境界とは更に別體無し、似塵義類を依止と爲すを以て、似塵義類の名を境界と爲すを以てなるのみ。

〔第四、相惑と麁重惑〕

次に相惑麁重惑を辨ぜん。

若し分別性が起らば能く二惑と爲りて衆生を繫縛す、一には相惑、二には麁重惑なり。相惑は即ち分別性、麁重惑は即ち依他性なり。此の二惑の立つことを得る所以は依他性の中に於て執して分別性と爲すが故に立つことを得るなり。

釋して曰はく、分別性を呼んで相惑と爲すとは、相とは謂く相貌なり、相貌を說いて惑と爲す、能く惑の緣と爲るが故に說いて惑と爲すなり。但依他性なるのみ、是れ正惑なり。而して

【二〇】心肉皮の三煩惱は眞諦三藏の譯書に數々いはれて居る。心煩惱又は心惑は所知障、肉煩惱又は肉惑は解脱障、皮煩惱又は皮惑は禪定障。

【二一】以上の分別を總括して三種となす。

名に從ふ。名想言の所熏習の分別を戲論分別と名づくとは此の三名を緣じて境界と爲すに由りて分別を起す、所分別は卽ち熏習能分の義有り、能分別は卽ち是れ戲論分別なるなり。三類の中に於て三名を緣じて數數種種の相貌を起行すとは三類に依止し三名を緣じて法門と爲し數數種種の相貌を生起することを明す。分別の依止と境界と戲論とは體は唯是れ一にして三義の用有るのみなり。

論に曰はく、[一六]次に我と及び我所との此の二の分別は能く身見及び諸見の本と作り、能く我慢及び諸慢の本と作る。

釋して曰はく、此の兩分別は前に例して亦應に明すべし、卽ち依止境界及び分別の體と爲る、前に既に已に例を明したれば、自ら解すべきが故に、辨ずるを須ひず、故に但能く後の我見を生じ及び諸見の本と作ることを明すのみ。我有りと執するに由るが故に諸見を生じ、我所の執は能く我慢の本及び諸慢の本と作る。

論に曰はく、[一七]後の愛と憎と[一八]對(翻)二との此の三分別は能く欲瞋及び無明等を生ず。

釋して曰はく、此の三分別は卽ち是れ三毒なり。是の故に能く一切の三毒を生ずるなり。

論に曰はく、[一九]是の如く八種の分別は能く三種の事用品類を作す。前の三は卽ち戲論の類を作し、次の兩は卽ち我見我慢の類を作し、後の三は卽ち欲等の惑類を作す。

初の六種の分別は法義を攝することを顯はす。一切の分別は此の六を出でずして、凡そ三義を攝す、自性と及び差別との此の二は是れ分別の依止、覺知と隨眠と加行との此の三は是れ分別の體、後の一の名字は是れ分別の境界なり、是の故に六種が法を攝して皆盡くすなり。覺知と隨眠とは三性に通じ、加行は唯不善なるのみ、是の上心の惑は五種有るを離る。隨愛は貪を生じ、隨憎は瞋を生じ、隨捨は無明を生ず。此の三は是れ煩惱の體なり。和合と遠離とは是れ煩惱の用なり。貪に由

【一六】中二はそれ自ら我見我慢であつて、尙他の我見我慢を生ずるのであるといふ。

【一七】後三は自ら三毒であつて又一切の三毒の根本である。

【一八】對は翻ならん。何となれば、三分別は愛と憎と非愛非憎となれば、非愛非憎を翻二といふべく、對二にては不適あればなり。後文にも翻二とあり。

【一九】以下六種分別と八種分別と三事類との相互關係を述べて總括す。

前の二分別に翻ずるを非愛非憎分別と名づく。

若し略說すれば分別には唯兩種有るのみ、一には〔一三〕分別の依止、二には〔一四〕分別の境界なり。〔一五〕八種の分別の中に於て、自性と及び差別と幷に聚の中の一を辨ずる執と、此の三分別は能く戲論分別の依止と作り、及び戲論分別の境界と作る。何を以ての故に。此の類に依止する名想言の所起の分別と名想言の所熏習の分別とを戲論分別と名づくればなり。三類の中に於て三名を緣ずるに由るが故に、數數種種の相貌を起行す、是の如き分別を名づけて戲論と爲す、三類は依止と爲り、三名は境界と爲るを以て、戲論は分別の體と爲り、依止と境界とは即ち是れ分別性にして、戲論分別は即ち依他性なり。

釋して曰はく、八分別の中にて前の三の分別を名づけて戲論分別と爲す、此の三は各各即ち依止と爲り、即ち境界と爲り、即ち戲論の體と爲る。何を以ての故に。三分別の中に於て、各能所有るが故なり。能は即ち是れ戲論の體、所の中に則ち二有り、謂はく類と及び名となり。類は即ち是れ三種の義の類、名は即ち是れ三類の種種の名なり。是の故に義を以て依止と爲し、名を以て境界と爲す、此の名字を緣じて法門と爲して義類を取るが故なり。正しくは所依を以て依止と爲し、所緣を境界と爲すが故なり。此の類に依止すと云ふは名想言の所起の分別を緣ずるなり。想言と云ふは謂はく心に此の名を想ひ、言に此の名を說く、故に想言と云ふ、此れ即ち分別を想言の所依止と爲す。今此の中にて想言を立つるは並に是れ名字にして、名字に麁細有ることを顯はさんと欲するなり、名を則ち細と爲し、想は則ち小麁にして、言を最麁と爲す、此の故に此の三名を用つて三分別に目づく。初の自性分別は直に色等の法體を明す、此の義は細爲るが故に名の名を立つ。次の差別分別は體の差別を明す、則ち小にして麁爲るが故に想の名を立つ。後の聚の中の一の執の分別は謂はく瓶屋等にして、此れ最も麁爲るが故に言の

〔一三〕分別の依止とは分別の自體である。

〔一四〕分別の境界とは分別の所依所緣の事である。所依は有情世間、所緣は器世間。

〔一五〕八種の分別を前三、中二、後三と分つて其功用を說く、之が最初に云へる三事類である。

故に有流と稱す。〔一〇〕數人の說くが如し、生死に流注するが故に、心漏連注するが故に、人の所持に非るが故に、故に有流と說く、取とは卽ち是れ有流が家の果なり、因が過去に謝するが故に有流果と名づけ、來りて現相續の中に在るが故に名づけて取と爲す、卽ち是れ現相續中の隨眠貪欲の種子なり。若し諸の煩惱が並に現相續の中に在るを流と說き取と說かば、流は卽ち四流、取は卽ち四取なり、此の如く別に此の流取等を說くも、皆〔一一〕本識を離れざるが故に、此の類は、是れ有流取にしてと言ふなり。長時に我執が數々串習するに依りとは、通じて無始より來此の流取等の惑有るを說くが故に、長時と說くなり。我執に三種有り、一に隨眠、二に上心、三に習氣なり。數々と言ふは卽ち隨眠を明す、我執は數數本識に依止すればなり。串と言ふは卽ち上心なり、我執は數數串起すればなり。習と言ふは卽ち習氣を明す、我執は數數隨眠を起せばなり。上心は是れ內煩惱にして、見諦道を得れば此の惑は卽ち滅す。習氣は久習所成爲れば正煩惱に非るが故に、羅漢を得る時にも此は猶未だ滅せず、法如如を得て方に能く稍遣る。此の三の我執は皆本識に依る。身見所依止の類を緣じて、虛妄分別を起すとは、本識を明すに二義有り、是れ〔一二〕三種の身見の所依止なり。一には能く種子と作りて身見を生じ、二には身見所緣の境界と爲りて虛妄の我執を起さしむ。正しく談ずれば、此の本識を緣じて境界と作して起るなり。故に我分別と稱す。

論に曰はく、五には我所分別、謂はく此の類が是れ有流取にして、長時に我執の數々串習するに依り、此の僻執の串習に從ひ、我所見の所依止の類を緣じて虛妄分別を起す、是を我所分別と名づくるなり。所執の境界の義は第四に異らず、但能分別に我執及び我所執有るを異と爲すのみ。六には愛分別、謂はく可愛淨の類を緣ずる虛妄分別を愛分別と名づく。七には憎憶分別、謂はく可憎不淨の類を緣ずる虛妄分別を憎憶分別と名づく。八には非愛非憎分別、謂はく非可愛憎の類を緣じて

【一〇】有部の說を數論(シユロン)といひ有部の學徒を數人(シユニン)といふ。

【一一】類を直に本識卽阿梨耶識となし諸惑の本とするのは亂識として見たものである。

【一二】我執の三種のことであらう。

此の分別性が能く前の六と後の五とを分別す。今此の六と五との分別性の功用差別を顯はすことを爲す。八種の分別有りて、能く三種の事類を爲す。三の事類とは一には戲論の類、二には我見我慢の類、三には欲等の惑の類なり。

八種の分別とは一には[二]自性分別、謂く色等の類なり。色とは即色陰、等とは即ち餘の[三]四陰の類なり。即ち是れ前の名に依りて義を分別する等の五種の分別自性と、及び前の六の中の最初の自性となり。是の如き等を皆自性分別と名づく。二には[四]差別分別、謂はく色等の類に於ける可見と不可見と礙と無礙と、是の如き等の無量の差別の分別にして、皆自性分別に依止す。是を差別分別と名づく。三には[五]聚の中にて一を執する分別、謂はく色に於て陰と執する所の我衆生命者受者、是の如き等を[六]共期所立と名づく、此を執して分別を起す、又多法聚の中に於て聚を[七]執するを因と爲す、謂はく屋と軍と車と衣と食と飲と等、是の如き等は名は皆是れ共期所立なるに、此を執して分別を起す、是を聚中一を執する分別と名づくるなり。此の兩は即ち是れ內外の分別にして、前は人有りと執し、後は法有りと執す。

釋して曰はく、共期とは世に流布する所立の名字にして、皆共期して所作に契ひ、同じく一解を作さしめんと欲するなり。

論に曰はく、四には我分別、謂はく此の類が是れ有流有執にして、長時に我執の數々串習するに依り、此の僻執串習に從ひ、身見所依止の類を緣じて、虛妄分別を起す、是を我分別と名づくるなり。

[八]釋して曰はく、此の類が是れ有流有執にしてとは、有流は即ち是れ無明、有取は即ち是れ貪愛なり。過去の煩惱の[九]十使は滅するを以て分別して諸惑の名を爲すべからず。但總じて無明と稱す、能く智明を障ゆるが故なり。此の無明は能く諸惑の因と爲り、能く生死に流轉するが

【二】前の品類差別の中の六種の分別の第一に同じ。
【三】受想行識の四。
【四】前の六種の分別の第二に同じ。
【五】五蘊假和合の中に實我の存在を想定固執する人執。
【六】假想施設と同一。
【七】部分集合を一物と想定固執する法執。
【八】此の釋文は次の第五我所分別にも適用せらる。
【九】貪瞋痴慢疑身見邊見邪見見取見戒禁取見の十。

昔聞く所の如くなるを得、即ち是れ受乃至識なりと知るなり。

論に曰はく、二に義に依りて名の自性を分別すとは謂はく此の類は名づけて色と爲す可きも、彼の類は色と名づく可からず、乃至、此の類は名づけて識と爲す可きも、彼の類は識と名づく可からずと、先に義を得るに由りて、然る後に分別して其の名を立つるなり。三に名に依つて名の自性を分別すとは謂はく此の色の名について、人は其の名を得と雖未だ此の名の品類を識らず、更に復思量して其訓釋を學ぶが如し、是を名に依りて名を分別すと名づく。乃至、識の名について其の所訓の品類を求むるも亦爾り。四に義に依りて義の自性を分別すとは謂はく未だ色の名を得ず不定の名に因りて色類を分別するなり。人の未だ物の名を識らず、但物體を見るのみにして、而も此の體は餘物に異ると分別し、定んで是れ何物なるやを知らず。其の定名を得ざるが故に、但義にのみ依りて義を分別すと名づくるが如し。亦小兒の所見の未だ名字を識らず、及び無分別識位の所得の境界の如し。五識等の如きは並に義を縁じて名を縁ぜざるなり。五に名義に依りて名義を分別すとは謂はく此の類は色を以て體と爲す、此の色は即ち是れ名なりとするなり。人の先に已に名を識り義を識りて後に重ねて前の所識の名義を分別するが如し。謂はく此を色の體と爲す、此れ即ち色の名なり、乃至、此の類は識を以て體と爲す、此の識が即ち是れ名なりと、是の如き等を皆名義に依りて名義を分別すと名づくるなり。此の五の分別は即ち是れ前の[四]六の中の最初の自性分別を廣ぜるなり。前には略して明せしが故に但自性分別を云へるのみなるも、後には廣く明すが故に五種の自性を分別するなり。是の如く前の六と後の五とを皆分別性の品類差別と名づく。

〔[五]第三、分別性の功用差別〕

已に分別性の品類差別を說き竟れり。次に分別性の功用を說かん。

【四】六の中第二差別分別以下第六名字分別までは廣說詳解すべき點無き爲說かれて居ないのである。

【五】茲には八種の分別を明し、この八種の分別が三種の事類を生ずとなす。

三には覺知分別なり。謂はく前法を見て卽ち其の名字を知り能く他の爲に說くなり。旣に自ら名字を識り、復能く他をして識るを得しむるが故に、覺知分別と稱す。四には隨眠分別なり。謂はく前物を見るも名字を識らざれば宣說すること能はざるが故に、隨眠分別と稱す。五には加行分別なり。又五種有り、一に隨愛分別、二に憎憶分別、三に和合分別、四に遠離分別、五に隨捨分別なり。此の五分別に由りて三毒の煩惱を生ずるが故に加行と稱す。此の五を合して前の四に就く、並に是れ義に約する分別なり。六には名字分別なり。又二種有り、一には有名字、二には無名字なり。有名字とは謂はく此の物は實に是の如し、或は色なり、乃至及び識なり、或は有爲なり、無爲なり、有常なり、無常なり、善なり、惡なり、無記なりと、是の如き等の執は皆有名字分別なり。無名字とは謂はく、此は何れの物と爲すや、此は云何、何の所以ぞ、云何が此の如くなるやなり。此の四句分別の初の一は體性を覓め、次の一は因を求めて、何れの因緣の故に此の如きこと有りやと謂ひ、三は體の差別を覓め、四は因の差別を求む、此の四は皆是れ無名字分別なり。此れ名に依りて義の自性を分別する五種なり。又五種の[三]所分別自性有り。一には名に依りて義の自性を分別す。二には義に依りて名の自性を分別す、三には名に依りて名の自性を分別す、四には義に依りて義の自性を分別す、五には名義に依りて名義の自性を分別するなり。一に名に依りて義の自性を分別すとは、謂はく此の類の是れ色なること、色の體性に由りて成就することを得、乃至此の類の是れ受想行識等なること識の體性に由りて成就することを得るなり。

釋して曰はく、謂はく此の人は先に未だ義を得ざる前に色の名を得、色相は此の如く形礙有り、捉持す可く、壞滅有り、此の如き等の相之を名づけて色と爲すと說くを、此の人が後に色體の品類相貌の昔(そのかみ)聞く所の如きを見て其の是れ色なるを知る、卽ち是れ名字に由りて能く色の體性を分別するなり、乃至識陰も亦爾り。先に其の名を得て未だ其の體を見ず、後時に體の

【三】所分別自性と云ふは分別とせられて居るのを殊更に所分別と云ふたに過ぎぬ。

の故に。久時に數習する顚倒に由るが故に此の僻執有り、名義の相應に闘せざればなり。若し人にして已に名が異り義が異ると執するも、名を義に於てするに由り、亦未だ僻執を免れず。何を以ての故に。長時に數習せる名言の熏習に由るが故に、必ず此の法門に由りて分別心を生じて虛妄の僻執を起せばなり。凡夫正見人は亦此の身は唯色等の行の聚のみなるを知るも、其の數習せる我執の堅固なるに由るが故に、自他の[三一]相續の中に於て、人我の僻執を免れざるが如く、此の如く名義の分別は是れ法の僻執にして、即ち是れ顚倒なり。無物を增益するが故に、人我の僻執の如くなるが故に、名義の僻執は是れ法の顚倒なるを知る。既に是れ顚倒ならば、云何にして此の顚倒にして繋縛に非るものを生ずるや。是の故に僻執が本識に熏習して種子と成るに由り、能く依他性を生起して、未來の果と爲るなり。此の僻執は即ち是れ[三二]分別性にして、能く未來の依他性の因と爲る。又此の未來の依他性の果に因りて、更に未來の法執顚倒を生ず、即ち是れ[三三]依他性を因と爲すに由りて、能く未來の分別性の果爲るものを生ずるなり。此の如く更互に相因たるが故に、生死が恒に起り相續して斷ぜざるなり。此れ即ち第四に三性を成立する分なり。

〔第二、分別性の品類差別〕[一]

分別性成立の義を說き已りて、別に六種の差別有り。次に此の性の品類差別を說かん。

然るに此の[二]分別性の差別に六種有り。一には自性分別なり。謂はく色等の諸陰の體相を分別す、但證量のみを以て取るなり。五識は但能く直に五塵のみを取り、乃至意識は直に能く法を取る。一の中に於て種種に分別せざるが故に、自性分別と名づく、直に體性を取るが故なり。二には差別分別なり。謂はく有色の可見不可見等にして、色なるときは見る可く、香味の五塵ならば眼の所見に非ず、是の如く一自性の中に隨つて、更に分別すること不同なるが故に、差別分別と稱するなり。

【三一】相續は身心相續にて、個人を相續といふなり。

【三二】分別性が依他性の因となる關係である。

【三三】依他性が分別性の因となる關係である。

【一】茲には分別性の六種と所分別自性の五種とが說かれて居る。

【二】分別性の六種と云ふも實際は分別として見るべきものでそれを茲では分別性と呼んだのである。

は然らず。何を以ての故に。照と了とは平等ならざるが故なり。若し汝の言ふが如く義が實有ならば、名を用つて燈の色を照すが如しとは、是の義は成ぜず。何を以ての故に。要ず先に義を得て後に名を立つるが故なり。未だ義を得ざる時は名を立つるを得ず、既に先に義を取り後に方に名を立つるに由り、取るすら尚義を了すること能はず、何ぜ況んや其の名を而も能く了せんや。燈を以て物を照らすに、義は卽ち爾らず、要ず燈に因るが故に能く物を了す、先に物を了すること無くして、然る後に燈を須ゆ、是の故に照の義は平等ならざるなり。

釋して曰はく、取るすら尚義を了すること能はずと言ふは、識が先に義を得、次に靑黃或は是非等を取り、取つてより後に方に名を立つるが如し。若し取つて能く義を了せば、則ち應に未だ取らざる時には識は已に義を得べからず、是の故に取るに因りて能く義を了するを得るにはあらざるなり。名は取の後に在れば、豈能く了せんや。又若し名が能く義を了せば、餘人の未だ名を識らざる時には、則ち應に名を聞くべからずんば、其の義を得ず。譬へば燈に由りて色を照すに、此の人は燈に因りて能く色を顯了するも、而も餘人は此に由りて色を見ること能はざるが如き、此の義有ること無し、決定して照に因りて能く色を顯はすが故なり。名に由りて義を顯はすは則ち是の如くならず、是の故に照の義は平等ならざるなり。

論に曰はく、外が曰はく、若し汝が名に由りて義を分別するに、實には所分別の義無し、是の故に名の中に義無く、義の中に名無し、二は倶に客なりと謂はゞ、是の義は然らず。何を以ての故に、若し人にして名は義に異り、義は名に異ると執せば、此の人は既に顚倒無く、則ち義の中に於て應に僻執無かるべく、應に好惡を說くを聞くも憂喜の心を生ずべからず、名と義とは相關せざるが故なり。好惡の名を聞いて、卽ち憂喜の心を生ずるが故に、名と義とは相應して是れ客なることを得ざるを知る、當に知るべし客の義は是れ汝の顚倒なり。答へて曰はく、是の義は然らず。何を以て

して義の性を分別し、名は卽ち義の性なりと謂ふ、此を顚倒と爲す。是の故に但分別のみ有りて實體有ること無きなり。

外が曰はく、云何にして此の分別は是れ虛妄の執なりと知るや。答へて曰はく、此の名と及び義とが皆是れ客なるが故なり。然る所以は、名は義の中に於て是れ客にして義の類に非るが故に、義も名の中に於て亦客にして名の類に非るが故なり。

外が曰はく、云何にして兩が互に客と爲ることを知るを得るや。答へて曰はく、三義に由るが故に此の理知る可し。一には名より先には智は生ぜざればなり。世の所立の名の如き、若し此の名にして卽ち是れ義の體性ならば、未だ名を聞かざる時は則ち應に義を得べからざるも、旣に見れば、未だ名を得ざる時にも、先に已に義を得ん。又若し名が卽ち是れ義なれば、義を得る時には卽ち應に名を得べきも、此の義無きが故に故に、故に是れ客なるを知る。二には一義に多名有るが故なり。若し名が卽ち是れ義の性ならば、或は一物有りて多種の名有るは、多名に隨ふが故に應に多體有るべし。若し多名に隨つて卽ち多體有らば、則ち相違の法も一處に立つことを得ん、此の義は[二九]證量の違する所にして、此の義無きが故に、故に是れ客なるを知る。三には名が不定なるが故なり。若し名が卽ち是れ義の性ならば、名か旣に不定なれば、義の體も亦應に不定なるべし。何を以ての故に。或は此の物の名は彼の物に目づくるが故に名は則ち不定なるを知る、物は此の如くならず、故に但是れ客のみなるを知る。復次に、汝は此の名は義の中に在りと言ふ、義に在るとは云何、有義に在りと爲すや、無義に在りと爲すや。若し有義に在らば、前の三難が還た成ぜん。若し無義に在らば、則ち名義倶に客なること、此れ定んで成立せん。

外が曰はく、義及び[三〇]名は分別の所作に非ず。何を以ての故に。實の名は能く實の義を顯はすが故なり。實有の燈が實の瓶等を照すが如し。是の故に名義倶に分別に非ず。答へて曰はく、是の義

【二九】現量のこと。證量は眞諦獨得の譯語。

【三〇】五藏中の名は名相相稱の名であるに對し、こゝの名は名義互客の名たるに過ぎぬことを重ねて說く。

り。眞實無は此れ分別と依他との二の有なり。眞實有は此れ分別と依他との二の無なり、故に有とも說く可からず、亦無とも說く可からず、有なること五塵の如しと說く可からず、無なること兎角の如しと說く可からず。卽ち是れ非有性にして非無性なり、故に無性性と名づく。亦無性を性と爲すを以てしても[二三]無性性と名づく、卽ち是れ非安立諦なり。若し是の三性にして並に是れ安立ならば、前の兩性は是れ安立世諦なり、體は實に是れ無なるを安立して有と爲すが故なり。眞實性は卽ち是れ[二四]安立眞諦なり、二有を對遣し二無を安立するを名づけて眞諦と爲せばなり。還た此の性を尋ぬるに有を離れ無を離れたるが故に非安立なり。三無性は皆非安立なり。此れ卽ち第三の相分にして三種の體相を明すなり。

[二五]〔四〕論に曰く、此の三種の性は是の如く無性にして、已に其の相を說きたり、今須らく成立の道理を說くべし。

分別性は體相有ること無し。何を以ての故に。此の性は五藏の所攝に非るが故なり。若し法にして是れ有ならば、五藏を出でず。五藏とは一には相、二には名、三には分別、四には如如、五には無分別智なり。一に相とは謂はく諸法の品類の名句[二六]味の所依止と爲るものなり。名とは卽ち是れ諸法の品類の中の名句味なり。分別とは謂はく三界の心及び心法なり。如如とは謂はく法空の所顯の聖智の境界なり。無分別智とは此の智に由るが故に一切の聖人が能く如如に通達するものなり。此の五法の中にて、前の三は是れ世諦にして、後の二は是れ眞如なり。一切の諸法は此の五を出でず。若し分別性の體にして是れ有法ならば、則ち應に此の五の攝と爲るべきも、攝せざるを以ての故に、故に體の無なるを知る。

外が曰はく、此の法にして若し體相無くんば、云何が[二七]分別あらんや。答へて曰はく、但名有るのみにして[二八]義無きなり。何を以ての故に。世間が義の中に於て名を立つるが如く、凡夫は名を執

〔二三〕此の無は通常の有無を超越し而も其有無を含む所を指して云ふ、故に非安立諦である。

〔二四〕此の二諦說は轉識論第二十三頌に當る所にあるものと同樣である。

〔二五〕第四分は三性の成立道理を說く。一般的にいふも本節は唯識說上重要な說をなすものなり。

〔二六〕味は Vyañjana の譯にして文と譯すべきもの。

〔二七〕玆に云ふ分別は心の方に於ける能分別であつて、分別性は境の方の所分別である。

〔二八〕義とは artha で名に對する實體をいふ。但し以下の文には義の意味又は道理の意にも用ひらる。場合によりて判ずべきなり。

立すべし。若し說くこと是の如くならば則ち無相の理は相應する所有りて、[一七]實と[一八]虛との兩境便ち見るべし。答へて曰く、一切の諸法は三性を出でず、一には[一九]分別性、二には依他性、三には眞實性なり、分別性とは謂はく名言の所顯の諸法の自性にして、即ち似塵識分なり。依他性とは謂はく因に依り緣に依りて顯はるゝ法の自性にして、即ち亂識分なり。因たる內根と緣たる外塵とに依りて起るが故なり。眞實性とは謂はく法の如如なり。法とは即ち是れ分別と依他との兩性にして、如如とは即ち是れ兩性の無所有なり。分別性は體相無きを以ての故に無所有なり。依他性は生無きを以ての故に無所有なり。此の二の無所有は皆變異無きが故に如如と言ふ、故に此の如如を呼んで眞實性と爲すなり。此れ即ち第二の[二〇]相應分にして、即ち是れ立名なり。

[二一]次に此の三性に約して三無性を說く。三無性は應に知るべし是れ一の無性の理に由るなり。分別性に約すとは相無性に由りて說いて無性と名づくるなり。何を以ての故に。所顯現の如き是の相は實には無し、是の故に分別性は無相を以て性と爲すなり。依他性に約すとは生無性に由りて說いて無性と名づくるなり。何を以ての故に。此の生は緣の力に由りて成じて自に由りて成ぜず、緣の力は即ち是れ分別性にして、分別性の體は既に無なり、緣の力無きを以ての故に生は立つことを得ず、是の故に依他性は無生を以て性と爲すなり。眞實性に約すとは眞實無性に由るが故に無性と說くなり。何を以ての故に。此の理は是れ眞實なるが故なり、[二二]一切の諸法は此の理に由るが故に同一無性なり、是の故に眞實性は無性を以て性と爲すなり。

釋して曰はく、眞實性に約すとは眞實無性に由るが故に無性と說くとは、此の眞實性は更に別法無く、還た即ち前の兩性の無なる、是れ眞實性なるなり。眞實は是れ無相無生の故なり。一切の有爲法は此の分別と依他との兩性を出でず、此の二性が既に眞實無相無性なれば、此の理に由るが故に一切の諸法は同一無性なり。此の一の無性は眞實是れ無にして、眞實是れ有な

【一二】原文に娑とあるを改む。娑は寫誤。
【一三】正行究竟論にして佛の聖教に當るが、こゝでは小乘教を指す。
【一四】聲聞緣覺の教即小乘教。
【一五】此の十八部は明確でない。眞諦三藏譯書中に十八部論があるが或は之ならむかと思はる。
【一六】第二分は無性を安立する法は三性なるを示す。
【一七】實とは無明の理即ち三無性。
【一八】虛とは三性安立の諸法。
【一九】分別性は新譯の遍計所執性、依他性は依他起性、眞實性は圓成實性に當る。然し內容は必ずしも同一ならず。
【二〇】相應とは即ち三性と三無性とが相互に不離なるを云ふ。
【二一】第三分は三無性を說明する。三無性は相無性生無性眞實無性なり。
【二二】一切諸法は之によつて同一無性である。

三無性論 出無相論

眞諦三藏[一]廣州制旨寺に於て翻譯す

巻の上

[二]〔第一、三性三無性〕

[三][一] 論に曰はく、[四]立空品の中にて人空は已に成じたるも、未だ法空を立せざれば、法空を顯はさんが爲の故に、諸法無自性品を說く。

釋して曰はく、前に空品を說き後に無性品を說くは何れの所爲を欲するや。答へて曰はく、前に空品を說くは人空を顯はさんが爲にして、但煩惱障のみを除く、是れ別道なるが故なり。後に無性品を說くは法空を顯はさんが爲にして、通じて一切智障と及び煩惱障とを除く、是れ通道なるが故なり。後別の用あり、世間の[五]三虛妄論を除くことを爲す。一には[六]鬪諍を勝と爲す論、[七]露伽耶䩭迦及び[八]僧佉等の論の如し。[九]二には多聞を勝と爲す論、[一〇]四韋陀及び[一一]伊䩭訶[一二]婆等の論の如し。[一三]三には正行を勝と爲す論、[一四]二乘教等の如し。今二空を說いて此の三論を除くに、前に人空を說くは前の外道の兩論を除くが爲にして、次に法空を說くは後の一の二乘の偏執乃至外道の邪執の論を除くが爲なり。眞實の正行を顯はし、此の行に依因して究竟無比を得るが故なり。復次に人空を說くは邪法を破するが爲にして、法空を說くは正法を立せんが爲なり。若し廣く論の用を明さば[一五]十八部の如し。此の用を顯はさんが爲の故に斯の論を說く。此れ卽ち第一に用を明す分なり。

[一六][二] 論に曰はく、外が問ふ、何れの法の中に於てか此の無性を立つるや、應に先に是の法を安

【一】廣東。
【二】本論の複雜なる說を解する資助となさむが爲に章節の段を分つ。第一段はすでに論に於て四分せられて居る。
【三】第一分は諸法無自性品を說く所以を示したるもの。
【四】無相論に於て此の三無性品の前に立空品のあつたことが知られる。而して立空品は顯揚聖敎論の成空品第六に相當す。次に諸法無自性品を說くとあるから、諸法無自性品が卽ちこの三無性論なることと明なり。而してこれ顯揚聖敎論成無性品第七に當る。但し偈文を凡て省いて、長行のみを出し、之に眞諦三藏の釋文附加せらる。
【五】瑜伽論第六十四卷十八右に三種の論として聰聞究竟論、淨訟究竟論、正行究竟論を擧げて居るのに同じ。
【六】諍訟究竟論であつて外道の因明論を指す。
【七】Lokāyatikaで Lokāyataともいはれ順世外道である。
【八】Sāṁkhya で數論を指す。
【九】聰聞究竟論にして婆羅門の惡呪術を指すと云ふ。
【10】四の Veda吠陀、Ṛg-veda, Sāma-vada, Yojur-veda, Atharva-veda の四。
【11】Itihāsa 史詩と譯さる。

第十二、不可思惟

不可思惟は成就不可思惟と自性不可思惟と寂靜不可思惟と功德不可思惟との四種をいふ。

第十三、四種道

轉依に至る道に四聖行と四種尋思と四種如實智と四種境界との四種があるが、四の聖行とは十波羅蜜と三十七助道行と六神通行と成熟衆生行とであり、四種の尋思とは尋思名言と尋思義類と尋思自性假と尋思差別假とであり、四種の如實智とは尋思名得如實智と尋思類得如實智と尋思自性得如實智と尋思差別得如實智とであり、四種の境界とは遍滿境界と治行境界と勝智境界と淨惑境界とである。此の中遍滿境界は有分別相と無分別相と種類究竟と正事成就との四種をいひ、治行境界は四不淨觀と四無量心と十二因緣觀と分別界と出入息念との五種をいひ、勝智境界とは陰勝智と界勝智と入勝智と緣生勝智と處非處勝智との五種をいひ、淨惑境界とは世間道境界と出世間道境界との二種をいふのである。

第十四、二種轉依——以下は各論第五究竟

二種の轉依は三乘の轉依をいふのであるが、三乘を聲聞緣覺の二乘と菩薩とに分つから二種となるのであり、前者は回心向大であり、後者は修正方便と依止無二智とにて轉依を得るのである。此中正方便は通達無上法界と遍滿法界と正勤功用と由觀衆生事滅除生死と爲求無比無上智との五種であり、無二智は因位としては生死と涅槃とに對して無礙、果位としては涅槃に入りても衆生濟度の心を起して止めざるをいふのであり、結局無住處涅槃を指すに外ならぬ。無住處涅槃は大乘極致の目的である。

三無性論を通讀するには常に顯揚聖教論成無性品と對照するを要する。然し進むで學問的に研究せむとせば瑜伽論に參照して各說の意味を深く解することにせねばならぬ。顯揚聖教論成無性品は數々其の中の或說の說明を他所の說明に讓つて省略して居るから、對照するにはそれ等を一一尋ぬるを要するであらう。國譯としては對照を主とする趣意でない爲に、それまでは脚註にも記すことをしなかつた。

昭和七年十二月一日

譯者　宇井伯壽　識

依他性となすが、依他性となすのは緣生なるが爲である。

以上の中、三性三無性の下の第二が有の成立、第三が體相の成立、第四と以下の分別性品類差別分別性功用差別相惑麁重惑が差別の成立、合せて四義となつて分別性の説が終る。

第五、依他性成立差別――以下は各論の

　第二依他性

依他性が言説を以て體となすのみのものでなくして、言説の所依としての亂識の品類を依他性となすことを説く。

第六、依他性體相

依他性は相の類と麁重惑の類とを體相となすもので、非有非無であり、俗有であつて眞有でないものなるを明す。依他性を俗諦となすは古説に準じて居る。

第七、俗諦眞諦

俗諦は我説と法説と事説との三相であるが、我説は我を説くの意、法説事説も同樣に解すべきである。之に對して眞諦は生と相と識と依止と邪行と淸淨と正行との七種の如如である。七種の如如は唯識系統に於ては重要なる説であるから、諸書に論ぜられて居る。此の論には第四依止如如以下は他の解釋も附せられ、其の中には重要な説を含むで居る。

卷下

第八、眞實性眞如――以下は各論の第三

　眞實性

七種の如如は眞諦であるから、これ卽ち眞實性であり眞如である。其所以は七種の如如は可讃最極二智境界故と無戲論故との爲であるとし、更に無性とも無眞性とも眞實無性ともいはるゝ所以を明す。

第九、五相三相相攝――以下は各論の第

　四三性の相關悟入

名言相と所言相と名義相と執着相と非執著相との五相と分別相と依他相と眞實相との三相とに關する相攝を説く。

第十、三性之事用

分別性が能生依他性と於依他性中能立名言と能起人法兩執と能成立二執麁重と能作入眞實性依止事との五種の事用を有し、依他性が生成煩惱體と能爲分別眞實兩性依止と能起人法兩執名言依止と能爲人法兩執麁重依止と能爲入眞實性依止との五種の事用を有し、更に此の兩種の五事用を除いて眞實性に入り分別性依止卽ち依他性に悟入するを得るを明す。

第十一、二執及轉依

人執は凡て法執より起るから、人執を滅して進むで法執を除けば卽ち轉依を體となす無流界が得らるゝが、轉依は不可思惟であり又二種類あるものである。

ぞれ其相當の地位又は價値を有すとして見て行くべきで、決して一を取り他を捨つるの態度に出づべきでない。故に此點から、三無論としても又は顯識論轉識論を含む無相論としても護法以前の印度佛教家の學説を示す一資料として虚心坦懐に熟讀翫味すべきものである。

以上によつて三無性論に關して大體のことを述べ終つたのであるが、三無性は三性と表裏する説として唯識系統の最も重要なる點を明にするものであるから、此一論に通達すれば、或點に於ては瑜伽行派の中心點を捕へたことになるといへるものである。護法説に於ては三性三無性の説は簡單に取扱はれて居るに過ぎないが、それは阿賴耶識緣起の方面を主となしたが爲である。然し廣く唯識説一般からいへば、阿賴耶識緣起の方面は三性三無性の説によつて始めて萬法唯識なることを明確になすを得るものであり、而も三性三無性の説によつて唯識説が全く般若皆空の説の根據の上の説なることを現はして居るのであるから、三性三無性の説は決して忽諸に附せらるべきものでない。故に之に通達すれば、單に理論の方面に於て大なる所得あるのみならず、之を實踐の方面に於て吾々の日常生活に現はすとしても適切なる意義あることを發見し得るであらう。內容に關しては以下の國譯に於て讀過の際の助とせむが爲に新に章段を附して括弧內に其の章の趣意を示すことにした。固より簡潔を要する性質のものであるが爲に十分に意を盡くすを得ないから、左に再び摘出して梗概ともなり得る點を述べよう。

卷上

第一、三性三無性――これ即ち總論である。

此の中に、第一に一論の目的を示す明用分と第二に三性の立名を説く相應分と第三に三性三無性の體相を明す相分と第四に三性の成立の道理を述ぶる成立三性分とがある。

第二、分別性品類差別――以下は各論で

第一に分別性

分別性に自性分別と差別分別と覺知分別と隨眠分別と加行分別と名字分別との六種あることゝ所分別自性に依名分別義自性と依義分別名自性と依名分別名自性と依義分別義自性と依名義分別名義自性との五種あることゝを説く。

第三、分別性功用差別

自性分別と差別分別と聚中執一分別と我分別と我所分別と愛分別と憎憶分別と非愛非憎分別との八種の分別が戲論類と我見我慢類と欲等惑類との三種の事類又は事用をなすことを明す。

第四、相惑麁重惑

分別性が相惑と麁重惑との二種となることを説き、相惑は分別性、麁重惑は

して相劣ることなき重要性を持つて居る。識に關する見方は、護法說では八識別體となし第八阿賴耶識を妄識となして居るのであるが、古說では八識は一識の義分となすのであり、第八識と呼ばれ得るものは、眞諦三藏の傳ふる說では、眞妄和合識で、從つて唯眞の識を阿摩羅識卽ち無垢識となし、順序上之を第九識となすことになるのである。然し第八第九の文字があつても決して識體各別の考を有するのではない。又三性三無性についても、護法說でいふ徧依圓三性は各別性とせられ、徧計所執性は心外の實我實法、依他起性は衆緣に生ぜられた心心所の體及び相見分の有漏無漏のもの並に色不相應法、圓成實性は識と不一不異であつて識と離れざる所依たる眞如無爲法であるとなして三性の融通を認めないが、古說では一切の所知相を染汚淸淨分と染汚分と淸淨分との三種となし、染汚淸淨分が依他性、染汚分が分別性、淸淨分が眞實性であるから、依他性が染汚分としてのみ現はれた場合には凡ては分別性のみ、又依他性が淸淨分としてのみ現はれた際は凡ては眞實性のみで、染汚分と淸淨分とが分判し終れば依他性はなく、染汚分淸淨分が和合して非一非異なる分が依他性であるとなすのであるから、三性は決して各別性であるのでなく三性相互に融通すとなすのである。更に三無性についても、護法說では相生勝義の三無性は三性に依りて立つる說であつて決して三無性によつて三性を立てるとなすのではないが、古說ではむしろ三無性によつて三性が立てらるとなすのであり、少くとも三無性は三性に屬し三性は三無性の性を有するもので、三性は其まゝ三無性、三無性は卽ち三性であるとなすのである。此の如く重要な點に於て相異る解釋學說が存するのであるから、護法說を以て唯一の根據として之を奉ずる人々が古說を奉ずるものを排斥するに至ることはまさにこれ理の當然である。故に玄奘三藏門下並に系統が常に古說の流を汲む眞諦三藏の說を誤謬とし眞の說を理解して居ないとなすのも全く此の如き點に由來するのである。玄奘三藏門下並に系統が眞諦三藏の說を排する態度は一方に於て其奉ずる所に厚いといふ眞面目な點は十分に之を認め得るが、同時に他方に於ては偏頗固陋徒に他を排して顧みぬといふ非難を免るゝを得ない。廣く佛敎一般として見るも、また佛敎の史的發達の方面から見るも、護法說のみが他の說に優つて佛敎の眞趣意を把捉して居ると認められ得るものでないことは、若し護法說のみを正しいとすれば、無着世親の學說の如き古說は全く排せらるべき誤謬說とならざるを得ない點で明である。故に何れの方面から見ても、現今としては、各說はそれ

難する者が無理である。而も眞諦三藏は四十八歳で支那に着し七十一歳で寂するまで前後二十三年間支那語に親しみ中頃からは翻譯に際しても度語を要しなかつた程に支那語に熟達して居たのであつた。從つて支那語の造詣に於ても、長安を出でてから長安に還るまで前後十七年の間の或期間に通達した玄奘三藏の梵語に於ける造詣に對して、決して遜色あるものとは考ふることを得ぬ。然るにも拘らず玄奘三藏の門下並に系統が一概に誤謬とし又は不理解なるかの如くに排斥を敢てなすのは、其まゝとしては、甚だ了解し難いことである。然し、かく排斥する所以を考察すれば、そこには重要な問題が含まれて居ることが判るに至るであらう。蓋し玄奘三藏の傳へた說は、瑜伽行派の說としては、全く護法及び其の系統の說であり、三藏の翻譯した論も、多くは、此系統の說と一致する如くになつて居る。之に反して眞諦三藏の傳へた瑜伽行派の說は護法以前の說であつて、それが安慧難陀又は其他何れの系統の說であつたにしても、尙未だ護法の學說の出でざる以前に印度に於て行はれて居たものであつたのである。護法は瑜伽行派に於て新說を主張した人であつて、從來の學說とは異る解釋をなし、たとひ彼以前の或說に系統を引いて居るにしても、ともかく彼の大手腕によつて一大新組織として之を立つるに至つたのであり、從つて必然の趨勢上數々先德同學の說を排斥し又はそれ等に對して折衷包容をなして居るのである。護法以前に於てもかゝることが全く絕無であつたのではないであらうが、然し眞諦三藏の傳へた說を見れば、護法の學說と相異り又態度も全く相反する。大體は、たとひ古說と反する說明解釋があつたにしても、決して其の相反する他の說を捨遣せねば止まぬ如き傾向を示して居ることはない。恐らく以上の如き護法の態度傾向が玄奘三藏の門下並に系統に傳はつたのであると考へらるゝが、然らば、學說上護法が古說と反する要點は何れにあるかといへば、根本的には護法が全く道理世俗諦に立つて瑜伽行派の說を組織し、以て從來勝義諦に立つて居たのと異るに至つた所に存すといへるであらう。道理世俗諦といへば、これ世間世俗諦と區別せられそれよりも高い、いはゞ、一層合理的な立場ではあるが、ともかく世俗諦の範圍を出でないものであるから、護法の說は凡てこれ世俗諦の說である。此の根本的の立場から當然新說が古說から異ることになつて來る說は一方に於ては識に關する見方であり、他方に於ては三性三無性に關する學說であるといへるであらう。勿論其他にも重要な點があることを認めないのではないが、少くとも此の兩方面も亦他の點に對

以下の國譯文には見別け易からしむる爲に釋曰文をば二字下げになして置いた。此の釋曰文は凡て譯者眞諦三藏の附したものであつて、三藏は一本を譯出すると同時に之を講述するのが常例であつたから、此の三無性論についても亦之を譯出すると同時に講授したのであらうし、其要點が釋曰文として附せられたのであらう。他の論の場合には講授は數々義疏として獨立に存したのであるが、此論に於ては既に釋曰文として附せられて居るとすれば、此外に別に義疏としての註釋が獨立に存したのではない。

無相論又は三無性論が幾何か古來重要視せられ又は研究せられたかは現今としては之を明確に知ることを得ぬ。これ一に眞諦三藏以後の攝論宗の狀況が明でないが爲であるが、三藏寂後相當に重むぜられたことは前記靖嵩の研究した書中に其の名の存するので推定せられ得る。又瑜伽論記の傳ふる所では備師又云、昔傳引無相論阿摩羅識證有九識、彼無相論卽是顯揚論無性品、然彼品文無阿摩羅名とある如く弘福寺文備は無相論卽ち現今の三無性論が眞諦三藏の九識說の根據となつて居るとなすのであり、又瑜伽論記に景師卽ち恐らく慧景は眞諦三藏が決定藏論によつて九識義を立てたといひ、圓測も亦其の解深密經疏の中に此のことをいうて居るから、玄奘三藏當時に於ても、無相論卽ち三無性論は決定藏論と同樣に、眞諦三藏の學說の根據をなす重要なるものなることが知られて居たのである。故に此の點から見ても、眞諦三藏以後の攝論宗の人々の間に此の三無性論が重要視せられて居たことが推定せられ得るであらう。

然るに瑜伽論記が然彼品文無阿摩羅名というて居る彼品とは顯揚聖敎論成無性品を指すのであつて、決して三無性論を指すのではない。故に此言によつて知らるゝことは、たとひ三無性論には阿摩羅識の名はあつたにしても、成無性品にはそれが見出されないから、決して典據となすを得るのでなく、翻譯としては顯揚聖敎論が正確であり、三無性論は信を措き難いとなす趣意なることである。かく三無性論を貶することは圓測も慈恩も全く同じであつて、玄奘三藏の門下並に系統の常例である。圓測慈恩共に三無性論又は無相論についてはこれ眞諦三藏の謬であるとなして居る。そして此の謬とせらるゝ點は譯文と內容との兩者に關するのであり、慈恩大師の如きは數々眞諦三藏が梵文を誤解し學說を理解しないといふ意味の非難をなすが、眞諦三藏は印度に生れて梵語は其の母語として四十餘年間常に習熟した人であり、其の間佛敎を敎へられ又研究をなした人であるから、慈恩大師の非難は常識から考へても、非

て既に立空品又は諸法無自性品といふとすれば、此名の示す如く、これ大部の論の中の章をなして居ることを顯はすから、其の大部の論が無相論と稱せられ、其の中に立空品諸法無自性品が存し、諸法無自性品は別行して三無性論と呼ばれて居るのであると考へらるゝ。顯識論轉識論も亦之と同じく無相論の中のものとしては顯識品轉識品と稱せられ、各別行しては顯識論轉識論と呼ばれて居るのである。眞諦三藏の弟子法泰に隨從した靖嵩が學むだ四十餘部の書の中に無相論の名が見えて居るから、恐らく眞諦三藏の時に既に纒めては無相論と稱せられ、同時に別行した單本としては各が三無性論顯識論轉識論と呼ばれて居たのであらう。然し無相論としては或は其の一部分が後世失はれたのではなからうかとも考へらるゝ。慈恩大師の弟子の淄州大師慧沼の唯識了義燈に初、無沒識者無相論云、一切諸種無所隱沒故無沒也とあるが、此文は現今傳はる前記三論の中には見出されないから、淄州大師が實際に其見た無相論の文を其まゝ引用したのであるとすれば、少くとも其の部分は大師以後に失はれたのであるが故である。淨影も賢首大師も慈恩大師も共に眞諦三藏が阿黎耶識を無沒識と譯したといふ意味を明言して居るが、淄州大師の言から見れば、何れもこれ無相論に根據を有すと考へらるゝにも拘らず、此の譯語は現存の無相論といはるゝものゝ中には存しない。其の外の眞諦三藏の現存譯書の中にも見出されないから、恐らく此譯語のあつた無相論の部分が缺けて失はれたことを示すのであらう。

玄奘三藏當時の文備でも圓測でも又は慈恩大師でも共に無相論が顯揚聖教論成無性品の別譯なることを知らしむる言をなして居る。實際としては其無相論は現存の三無性論の部分を指すに外ならないのであるが、或は三無性論の前に立空品に當る部分のあつたのを併せて指して居るのかも知れぬ。ともかく玄奘三藏の顯揚聖教論の翻譯卽ち玄奘三藏の翻譯の初年（貞觀十九年、西紀六四五年）から既にかく知られて居つたのである。恐らく攝論宗に通じて居た人が三無性論を含む無相論の內容を知つて居たから、顯揚聖敎論の成無性品を見て、直に其の異譯なることに氣付いたのであらう。然し猶嚴密にいふと、三無性論は其まゝ顯揚聖敎論成無性品の同文異譯たるものではない。顯揚聖敎論は頌と釋とから成つて居るもので、頌のみを一部として顯揚聖敎論頌一卷があり、又此頌と長行釋とを合せて顯揚聖敎論二十卷となつて居るのであるが、三無性論は其成無性品の中の頌を除いた長行釋の部分のみの異譯であり、而も諸所に釋曰文が附せられて居る。

三無性論解題

三無性論は梁代に支那に來た眞諦三藏が陳代に入つてから譯出したものである。的確に譯出の年代を知ることは出來兼ぬるが、然し三無性論の現流本には廣州制旨寺に於て翻譯すとあるから、之に基いていへば、天嘉三年(西紀五六二年)十二月三藏が現今の廣東の制旨寺に入つてから後に譯したものなることが判る。三藏は天嘉四年から翻譯を續けて光大二年(五六八年)までに攝大乘論倶舍論等の如き重要な論を譯し、大建元年(五六九年)正月十一日七十一歳で示寂したのであるが、三無性論の內容から推定すれば、恐らく攝大乘論を譯出した後、又は攝大乘論を講述した時に譯したのであらうと思はる。攝大乘論は天嘉四年三月譯し始め、譯すると共に講じつゝ進むで、十月に一應譯了し、更に重譯校定して天嘉五年七月頃完成した如くであり、又光大元年(五六七年)四月から十二月までに講述をなしたのであるから、天嘉五年か又は光大元年かに三無性論を譯するに至つたのであらう。然し光大元年には前年以來繼續せる倶舍論の重譯校訂講述も尙なされつゝあつたのみならず、倶舍論の重譯講述は顯明寺に於てなした如くであり、恐らく制旨寺に於てゞはなかつたと思はるゝから、三無性論の譯は天嘉五年であつたであらうかと想像せらるゝ。故に今は五六四年の譯出と見ておかう。

三無性論は其の題下に細字で無相論より出づとあり、開元錄も亦此のことをいうて居るが、此の句を有する論は此の外に猶顯識論と轉識論とがある。故に少くとも三無性論と顯識論と轉識論とが合して無相論と稱せらるゝものになつて居る理である。實際としては、無相論一部は此の三部の論のみを其の內容の全體となして居たものか、或は此の三部の論を其の一部分とし更に他の論をも包含して居たものか、此點については明確な傳へが缺けて居るが、推定し得る所でいへば、無相論としては三部の論以外に猶他の部分も含まるゝ大部のものであつたのであらう。三無性論の最初の部に「立空品の中にて人空は已に成じたるも、未だ法空を立せざれば、法空を顯はさむが爲の故に、諸法無自性品を說く」とあり、又下卷の中「第十一、二執及轉依」の下に「立空品の中にて人我執を破し、此の品の中にて法我を破す」とあるから、少くとも此の三無性論の前に立空品の存したことを示し、而も此の三無性論は諸法無自性品に相當するものなることが判る。そし

目次

瑜伽部 十二

宇井伯壽
山上曹源 譯

國譯一切經

大東出版社藏版